

— 茨城県土浦市 —

龍善寺遺跡

— 宅地造成分譲事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2006

株式会社クラフト
土浦市教育委員会
龍善寺遺跡調査会

— 茨城県土浦市 —

りゅう　ぜん　じ
龍 善 寺 遺 跡

— 宅地造成分譲事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2006

株式会社クラフト
土浦市教育委員会
龍善寺遺跡調査会

序

土浦市は霞ヶ浦や桜川の水に恵まれ、太古から人々が生活するのに適したところであり、貝塚、古墳、集落跡等数多くの遺跡が存在しております。

遺跡は当時の様子を知る手掛かりとなることは勿論、現代の私達が豊かに生活することができる先人の偉業の一つでもあります。

このような貴重な文化遺産を保護し、後世に伝えることは私達の大切な責務であり、郷土土浦発展のためにも重要なこと思います。

この度の龍善寺遺跡の発掘調査は、市内中高津地区での株式会社クラフトによる宅地造成分譲事業に伴い実施されたものです。

この遺跡からは、縄文時代の多数の貯蔵穴を伴う拠点的な集落跡が確認されると同時に、古墳時代の集落跡も確認されました。そして、出土品には多数の縄文土器が見られ、龍善寺遺跡に暮らした人々の繁栄ぶりを示しております。また、特筆すべき出土品として古墳時代の堅穴住居跡から銅製の鏡が出土し注目されます。

本調査によって、市内中高津地区的古代文化の究明にいささかなりとも役立つことがありますならば幸甚であります。

最後になりましたが、調査から報告書の刊行にあたり、関係各位の皆様のご協力とご支援に対し、心から厚く御礼申し上げます。

平成18年7月

土浦市教育委員会
教育長 富永 善文

例　言

- 1、本書は龍善寺遺跡調査会が実施した、上浦市中高津二丁目1122-1番地他に所在する龍善寺遺跡の発掘調査報告書である。
- 2、発掘調査は事業者である株式会社クラフトが計画する、宅地造成分譲事業に伴う事前調査として実施したものである。
- 3、遺跡の試掘確認調査は平成15年6月3日から6月6日、7月23日から7月25日、7月29日から8月1日の3回にわたり実施し、石川 功・関口 満（上高津貝塚ふるさと歴史の広場学芸員）が担当した。
- 4、遺跡の発掘調査は平成15年10月21日から平成16年2月24日まで実施し、大瀬淳志・小川和博（〔有〕日考古研茨城）が担当した。調査区域は外周道路及び内周道路等の工事区域を任意に1から5工区に区切り、工事と併行して調査を実施した。1工区は事業地南端の搬入道路部分、2工区は事業地中央の外周道路部分、3工区は事業地中央の内周道路とフットパス及び防火水槽部分、4工区は事業地東側の外周道路部分、5工区は事業地北側の外周道路部分である。
- 5、出土品の整理及び報告書の作成は小川が担当し、平成16年3月1日より平成16年12月24日まで実施した。
- 6、本書の原稿執筆は小川・大瀬・関口が行い、荒田恵一氏にご協力頂いた。それぞれの担当については、各原稿の末に担当者名を明記した。また本書の編集は小川・関口が行なった。
- 7、龍善寺遺跡調査会組織

会長	須田直之（上浦市文化財保護審議会会長）
副会長	石右一美（上浦市教育委員会教育次長）
理事	大塚 博（上浦市文化財保護審議会委員）
理事	米橋忠雄（上浦市役所建築指揮課長）
理事	広瀬昌則（上浦市教育委員会文化課長）
理事	堀越恵二（上浦市博物館協議会委員）
監事	岩沢 茂（上浦市教育委員会青少年センター所長）
事務局長	宇津野利雄（上高津貝塚ふるさと歴史の広場館長）
事務局次長	三須洋一（上高津貝塚ふるさと歴史の広場館長補佐）
事務局員	加藤寛治（上高津貝塚ふるさと歴史の広場主幹）
	堀部 猛（上浦市教育委員会文化課主幹）
	石川 功（上高津貝塚ふるさと歴史の広場係長）
事務局員兼出納員	関口 満（上高津貝塚ふるさと歴史の広場主幹）

○発掘作業

調査担当	大瀬淳志
調査員	遠藤啓子
現地調査作業員	飯村一美 石黒 勇 泉 章子 海老原龍生 大久保淑治 小野 農 大久保敦子 皆藤久子 金塚 琢 佐賀 刚 佐賀 実 酒井悦子 竹内政江 土田幸子 露久保三郎 寺崎靖子 友部政夫 中島秀雄 中島とみ子 中野富美子 長谷部裕子 舟串敦夫 谷中 昌 吉田みち 渡辺由美子
事務員	菊池幾代

○整理作業

調査主任	小川和博 大瀬淳志
調査員	遠藤啓子
整理調査作業員	大久保敦子 大野美佳 大瀬由紀子 中野富美子

- 8、龍善寺遺跡の発掘調査は大瀬淳志・小川和博（〔有〕日考古研茨城）が担当した。出土遺物の整理及び報告書の作成は小川が中心となり大瀬が補佐した。
- 9、遺構写真は現地調査担当者が撮影し、遺物写真撮影は小川が行った。
- 10、付録「茨城県上浦市龍善寺遺跡における縄文時代黒磚石遺物の产地推定」については、明治大学文化財研究施設中部測地研究所にご協力頂いた。
- 11、本書に関わる出土品及び記録図面・写真などは一括して上高津貝塚ふるさと歴史の広場に保管してある。なお、記録や遺物の整理・保管に際しては、NRの略称を付している。
- 12、銅鏡の保存処理は株式会社京都科学に依頼し行った。
- 13、発掘調査及び出土品の整理に関わり、次の諸氏又は諸機関のご協力・ご教示を賜った。記して謝意を表したい。（五十音順 敬称略）

茨城県教育委員会 茨城県立南教育事務所 株式会社クラフト 武智測量設計株式会社

明治大学文化財研究施設中部測地研究所 杉原重夫 鈴木尚史 藤森靖枝 福田礼子 舟串敦夫

凡 例

- 1、龍善寺遺跡の地区設定は、事業地内の外周道路及び内周道路等の工事区域を任意に1から5工区に区切り調査を実施した。これらの5工区内には、日本平面直角座標第IX系座標を基準とした20m四方の基準杭を設定して測量等を実施したが、これらの方眼に名称は付していない。
- 2、調査で確認された遺構の番号は、各工区通しの番号となっているが、遺構外出土遺物の表記については各工区一括の取り上げとなっている。
- 3、遺構・土層に使用した記号は次のとおりである。
遺構図 堪穴住居跡・・・SI、土坑・・・SK、柱穴・ビット・・・P、溝・・・SD、推定遺構範囲・・・破線、搅乱範囲・・・一点鎖線
土層図 I層・・・表土及び樹木拔根による搅乱土、II層・・・遺物包含層など、K・・・搅乱
- 4、遺構・遺物実測図中の表示は以下のとおりである。

炉跡	[■]	カマド砂質粘土	[■]	焼土	[■]	繊維	[■]	黒色処理	[■]	赤彩	[■]
----	-----	---------	-----	----	-----	----	-----	------	-----	----	-----

この他の実測図中の表示は、その図面中に指示してある。
- 5、土層観察と遺物における色調の同定は、『新版標準土色帖』(小山正忠、竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用した。
- 6、本書中の遺構、遺物の表示は次のとおりである。
 - (1) 水糸レベルは海拔高度を示す。
 - (2) 遺構の縮尺は基本的に $1/60$ で、カマドなどについては $1/30$ である。これ以外の縮尺の図面もあり、それらについてはスケールを変えてある。
 - (3) 遺構の文章中()付の計測値は推定値を示す。
 - (4) 遺物の縮尺は原則として土器が $1/4$ 、土製品は $1/3$ 、石器等は $1/2$ で示した。器種や大きさにより異なる場合もあり、それらについては個々にスケールを変えてある。
 - (5) 古墳時代の堅穴住居跡の「主軸方向」は、炉やカマドなどの位置から主軸を決め、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。例(N-23°-E)。
 - (6) 遺物観察表中の計測値は口径、底径は現存径又は回転復元径を示す。また器高は現存高を表す。また表中の(ー)は計測不可の表現である。土製品の観察における()は復元径を示す。
 - (7) 遺物観察表中の胎土の項目における表記は、観察者の主観的なものであり、明確な基準によるものではない。
 - (8) 遺物観察表中の備考欄には、特記事項を記した。

本文目次

序文

例言・凡例

第Ⅰ章 調査の経緯と環境	1	Fig. 22 住居跡SI38実測図	34
第1節 調査に至る経緯	1	Fig. 23 住居跡SI40実測図	36
第2節 調査区の設定	2	Fig. 24 住居跡SI41・42実測図(1)	37
第3節 調査日誌	5	Fig. 25 住居跡SI41・42実測図(2)	38
第4節 遺跡の位置と環境	6	Fig. 26 住居跡SI43実測図	40
1. 地理的環境	6	Fig. 27 住居跡SI44実測図	41
2. 歴史的環境	6	Fig. 28 住居跡SI46実測図	42
第Ⅱ章 挖出された遺構と遺物	11	Fig. 29 住居跡SI05・07・08・11・13(1)出土遺物	45
第1節 遺跡の概要	11	Fig. 30 住居跡SI13(2)・14・15・18・20出土遺物	47
第2節 古石器時代の状況	12	Fig. 31 住居跡SI22・23(1)出土遺物	48
第3節 縄文時代の堅穴住居跡	13	Fig. 32 住居跡SI23(2)・24・34出土遺物	50
第4節 縄文時代の堅穴住居跡出土遺物	44	Fig. 33 住居跡SI35・36・37出土遺物	51
第5節 古墳時代の堅穴住居跡	57	Fig. 34 住居跡SI38・40出土遺物	52
第6節 古墳時代の堅穴住居跡出土遺物	82	Fig. 35 住居跡SI41出土遺物	54
第7節 縄文時代・古墳時代の土坑	93	Fig. 36 住居跡SI42・43出土遺物	55
第8節 土坑出土遺物	203	Fig. 37 住居跡SI44・46出土遺物	56
第Ⅲ章 まとめ	345	Fig. 38 住居跡SI01実測図	58
第Ⅳ章 付録 桑城市土浦市龍善寺遺跡における 縄文時代黒耀石遺物の産地推定	353	Fig. 39 住居跡SI02実測図	58
写真図版		Fig. 40 住居跡SI03実測図	59
抄録		Fig. 41 住居跡SI04実測図	60
付図		Fig. 42 住居跡SI06実測図	62

挿図目次

Fig. 1 開発エリアと遺跡範囲	1	Fig. 51 住居跡SI26実測図	71
Fig. 2 試掘確認調査状況	3	Fig. 52 住居跡SI26カマド実測図	71
Fig. 3 龍善寺遺跡発掘区	5	Fig. 53 住居跡SI27カマド実測図	72
Fig. 4 周辺遺跡位置図	7	Fig. 54 住居跡SI27実測図	73
Fig. 5 遺構全図	9	Fig. 55 住居跡SI28実測図	74
Fig. 6 基本層序	12	Fig. 56 住居跡SI28カマド実測図	74
Fig. 7 住居跡SI05実測図	14	Fig. 57 住居跡SI29実測図	76
Fig. 8 住居跡SI07実測図	14	Fig. 58 住居跡SI30実測図	76
Fig. 9 住居跡SI08実測図	15	Fig. 59 住居跡SI31実測図	78
Fig. 10 住居跡SI11実測図	17	Fig. 60 住居跡SI32実測図	79
Fig. 11 住居跡SI13実測図	17	Fig. 61 住居跡SI33実測図	80
Fig. 12 住居跡SI14・15実測図(1)	19	Fig. 62 住居跡SI45実測図	80
Fig. 13 住居跡SI14・15実測図(2)	20	Fig. 63 住居跡SI01・02・03・04出土遺物	83
Fig. 14 住居跡SI18・19実測図(1)	22	Fig. 64 住居跡SI06・10・12出土遺物	84
Fig. 15 住居跡SI18・19実測図(2)	23	Fig. 65 住居跡SI16・17・21出土遺物	86
Fig. 16 住居跡SI20実測図	25	Fig. 66 住居跡SI25・26・27出土遺物	88
Fig. 17 住居跡SI22・23・24実測図	26	Fig. 67 住居跡SI28・29・31出土遺物	89
Fig. 18 住居跡SI34実測図	28	Fig. 68 住居跡SI32・33・45出土遺物	91
Fig. 19 住居跡SI35・39実測図	30	Fig. 69 土坑SK01・02・03・04、溝状遺構SD04	
Fig. 20 住居跡SI36実測図	31	実測図	91
Fig. 21 住居跡SI37実測図	32	Fig. 70 土坑SK05・06・07・08・09・10実測図	96

Fig. 71	上坑SK11·12·13·14·15·16、溝状遺構 SD06実測図	98
Fig. 72	土坑SK17·18·19·20·21実測図	99
Fig. 73	土坑SK22·23、SK24·34·37·44·46·48· 126(1)実測図	101
Fig. 74	上坑SK34·37·44·46·48·126実測図(2)	102
Fig. 75	土坑SK25·29·31実測図	104
Fig. 76	土坑SK26·27·28·35·38·49·50·51 実測図(1)	106
Fig. 77	上坑SK35-A·38·49·50·51(2)、SK30·39· 53実測図	107
Fig. 78	土坑SK32·33·36·42実測図	109
Fig. 79	土坑SK40·52·54、SK41実測図	111
Fig. 80	上坑SK43·45·47·55·56·64実測図	112
Fig. 81	土坑SK57·58·59·60·61·73実測図(1)	114
Fig. 82	土坑SK60·61·73(2)、SK62·63·75(1) 実測図	115
Fig. 83	上坑SK63·75(2)、SK65·262実測図	116
Fig. 84	土坑SK66·67·71·78実測図	118
Fig. 85	土坑SK68·69·70実測図	120
Fig. 86	土坑SK72·74·76·77·81·82·85 実測図(1)	124
Fig. 87	土坑SK77·81·82·85(2)、SK79·80·83· 84·86(1)実測図	125
Fig. 88	土坑SK79·80·83·84·86(2)、SK87·88· 89·90·91·93·96(1)実測図	126
Fig. 89	土坑SK87·88·89·91·93·96実測図(2)	127
Fig. 90	土坑SK92·94·95·97·98·99·100·101· 102·104·105·106実測図(1)	129
Fig. 91	土坑SK94·97·98·99·100·101·102· 104·105·106実測図(2)	130
Fig. 92	土坑SK103·107·108·109·110·111· 112·128実測図(1)	135
Fig. 93	土坑SK111·112·128(2)、SK113· 114·115·116·117·124·125(1)実測図	136
Fig. 94	土坑SK114·115·116·117·124·125(2)、 SK118·119·120·121·122·123(1) 実測図	137
Fig. 95	土坑SK118·119·120·121·122·123 実測図(2)	138
Fig. 96	上坑SK122·123(3)·127·129実測図	139
Fig. 97	土坑SK130·161·162·166実測図	142
Fig. 98	土坑SK131·163·164実測図	143
Fig. 99	土坑SK132·133·134·135実測図	144
Fig. 100	土坑SK136·137·138·139·140 実測図(1)	146
Fig. 101	上坑SK137·138·139·140(2)、SK141· 142実測図	147
Fig. 102	土坑SK143·144·145·146·147·148· 149·150·151·157·303実測図(1)	148
Fig. 103	上坑SK146·147·148·149·150·151· 157·303実測図(2)	149
Fig. 104	土坑SK152·153·154·155·158·160 実測図(1)	153
Fig. 105	土坑SK153·154·155·158(2)、SK156· 159·171·172·173·174·175·176·177·178· 180(1)実測図	154
Fig. 106	土坑SK156·159·171·172·173·174· 175·176·177·178·180実測図(2)	155
Fig. 107	土坑SK175·178·180(3)、 SK165·167·168·169·170(1)実測図	156
Fig. 108	土坑SK167·168·169·170実測図(2)	157
Fig. 109	土坑SK179·181·182·183·184·185· 186·187·188·189·190·191·192·193·198· 199·235·236実測図(1)	164
Fig. 110	土坑SK179·181·182·183·185·186· 187·188·189·190·191·192·193·198· 199·235·236実測図(2)	165
Fig. 111	土坑SK182·183·184·185·186·187· 188·190·192·198·199·236(3)、SK191· 195·196·197·200·201·202·203·204· 205·206·207·210·212·213·214·216· 237(1)実測図	166
Fig. 112	土坑SK191·195·196·197·200·201· 202·203·205·206·207·210·216·237 実測図(2)	167
Fig. 113	土坑SK200·201·203·204·205·206· 207·210·212·213·214·216実測図(3)	168
Fig. 114	上坑SK194·246·247·248·249·250· 251·253·254実測図(1)	173
Fig. 115	土坑SK247·248·249·250·251·253· 254実測図(2)	174
Fig. 116	上坑SK208·209·211·215·217·219· 220·225·228実測図(1)	175
Fig. 117	土坑SK219·220·225·228(2)、 SK218·221·222·223·224(1) 実測図	176
Fig. 118	土坑SK221·222·224(2)、SK226· 227·229実測図	177
Fig. 119	上坑SK230·233、SK231·232、 SK234実測図	180
Fig. 120	土坑SK238·239·240·241·242·243· 244実測図(1)	184
Fig. 121	上坑SK243·244(2)、SK245· SK252·255·256·257·258·259·261· 267·302(1)実測図	185
Fig. 122	上坑SK252·256·257·258·259·261· 267·302実測図(2)	186
Fig. 123	土坑SK260·263·264·265·266·271·272 実測図	189

Fig. 124	土坑SK268·269·270·273·274·276· 286実測図	191
Fig. 125	上坑SK275·277·278·279実測図	193
Fig. 126	土坑SK280·281·284·285実測図	195
Fig. 127	土坑SK282·288·290·293 実測図	197
Fig. 128	上坑SK283·294·287·291·292·294 実測図	199
Fig. 129	土坑SK295·296·297·298実測図	200
Fig. 130	土坑SK299·300·301実測図	201
Fig. 131	上坑SK02·04·08 (1) 出土遺物	204
Fig. 132	上坑SK08 (2) ·09·10出土遺物	205
Fig. 133	上坑SK11·12·13·16·18·19·20 出土遺物	207
Fig. 134	土坑SK21·22·23·24·25出土遺物	208
Fig. 135	上坑SK26·27·28·29·30出土遺物	210
Fig. 136	土坑SK31·32出土遺物	211
Fig. 137	土坑SK33·34·35-A (1) 出土遺物	213
Fig. 138	土坑SK35-A出土遺物 (2)	214
Fig. 139	上坑SK36·37·40·42出土遺物	215
Fig. 140	上坑SK41出土遺物 (1)	217
Fig. 141	土坑SK41出土遺物 (2)	218
Fig. 142	土坑SK41 (3) ·43出土遺物	220
Fig. 143	上坑SK44·46·47 (1) 出土遺物	222
Fig. 144	上坑SK47 (2) ·48·49·50出土遺物	223
Fig. 145	土坑SK51·52·54·55·56出土遺物	224
Fig. 146	土坑SK57·58·59出土遺物	226
Fig. 147	上坑SK60·61·62·63·64出土遺物	227
Fig. 148	土坑SK65·66·67·68·69 (1) 出土遺物	229
Fig. 149	土坑SK69 (2) ·70·71 (1) 出土遺物	231
Fig. 150	上坑SK71 (2) ·72·73·74出土遺物	232
Fig. 151	上坑SK75·76·77出土遺物	233
Fig. 152	土坑SK78·79·80·81出土遺物	235
Fig. 153	土坑SK82·83·84·85·86 (1) 出土遺物	237
Fig. 154	上坑SK86 (2) ·87·88·89出土遺物	238
Fig. 155	上坑SK90·91·92·93出土遺物	240
Fig. 156	土坑SK94·95出土遺物	242
Fig. 157	土坑SK96·97·98·99出土遺物	243
Fig. 158	上坑SK100·101·102·103 (1) 出土遺物	245
Fig. 159	土坑SK103 (2) ·104·105·106出土遺物	246
Fig. 160	土坑SK107·108·109·110出土遺物	248
Fig. 161	土坑SK111·112·113·114 (1) 出土遺物	250
Fig. 162	上坑SK114 (2) ·115·116·117出土遺物	251
Fig. 163	土坑SK118·119·120出土遺物	253
Fig. 164	土坑SK121·122·123·124·125 出土遺物	255
Fig. 165	土坑SK126·127·128·129·130· 131·132·133·134出土遺物	256
Fig. 166	土坑SK135·136出土遺物	258
Fig. 167	上坑SK137·138·139·140出土遺物	259
Fig. 168	上坑SK141·142·143·145出土遺物	261
Fig. 169	上坑SK146·147·148·150出土遺物	263
Fig. 170	土坑SK149·151·152·155出土遺物	264
Fig. 171	土坑SK153·154·156出土遺物	266
Fig. 172	上坑SK157·158·159·160·162 出土遺物	267
Fig. 173	土坑SK161·163·164·165·167·168 (1) 出土遺物	270
Fig. 174	上坑SK168 (2) ·169 (1) 出土遺物	271
Fig. 175	上坑SK169 (2) ·170·171出土遺物	272
Fig. 176	上坑SK172·173·174·175 (1) 出土遺物	274
Fig. 177	土坑SK175 (2) ·176·178·179·180·181 出土遺物	276
Fig. 178	上坑SK182·183出土遺物	277
Fig. 179	土坑SK184·185出土遺物	278
Fig. 180	土坑SK186·187·188 (1) 出土遺物	280
Fig. 181	上坑SK188 (2) ·189出土遺物	282
Fig. 182	上坑SK190·191·192·193出土遺物	283
Fig. 183	土坑SK194·195·196出土遺物	284
Fig. 184	土坑SK197·198·199·200出土遺物	286
Fig. 185	上坑SK201·202·203出土遺物	288
Fig. 186	上坑SK204出土遺物 (1)	289
Fig. 187	土坑SK204 (2) ·205出土遺物	291
Fig. 188	土坑SK206·208·209·210出土遺物	292
Fig. 189	上坑SK211·212·213出土遺物	294
Fig. 190	上坑SK215·216·217出土遺物	296
Fig. 191	土坑SK218·219·220出土遺物	297
Fig. 192	土坑SK221·223·226·227出土遺物	298
Fig. 193	土坑SK229·230·231·232·233·235· 238出土遺物	300
Fig. 194	土坑SK234·239·240·241出土遺物	302
Fig. 195	土坑SK242·244出土遺物	304
Fig. 196	上坑SK243·245·246出土遺物	305
Fig. 197	上坑SK247·248·249 (1) 出土遺物	307
Fig. 198	土坑SK249 (2) ·250·251·255 出土遺物	309
Fig. 199	上坑SK256·257·258·259·260 出土遺物	310
Fig. 200	土坑SK261·262·263出土遺物	312
Fig. 201	上坑SK264·265·266 (1) 出土遺物	313
Fig. 202	上坑SK266出土遺物 (2)	315
Fig. 203	土坑SK266 (3) ·267·268出土遺物	316
Fig. 204	土坑SK269·270·271·272·273· 274·275·277·278·280出土遺物	318
Fig. 205	上坑SK281·282·283·284·286 出土遺物	320
Fig. 206	土坑SK285·287·288出土遺物	321
Fig. 207	上坑SK289·290·291·292出土遺物	323
Fig. 208	土坑SK293·294·295·296出土遺物	324

Fig. 209	土坑SK297・298・299・300(1) 出土遺物	326
Fig. 210	土坑SK300(2)・301・302・303 出土遺物	327
Fig. 211	縄文時代遺構外出土土器片鉢・土製円盤 (1)	328
Fig. 212	縄文時代遺構外出土土器片鉢・土製円盤 (2)	329
Fig. 213	土坑SK35-A・41・43・47・71・86・138- 169・195・199・204・266出土遺物 状況図	347
Fig. 214	土坑SK183出土遺物状況図	348
Fig. 215	龍首寺遺跡出土土器の時期区分	349
Fig. 216	土器片鉢重量分布グラフ	351

写真図版目次

PL. 1	遠景、1T区全景、2T区全景	
PL. 2	3T区全景、3T区全景、3T区全景	
PL. 3	3T区全景、3T区全景、4T区全景	
PL. 4	4T区全景、5T区全景、縄文時代 竪穴住居跡SI05	
PL. 5	縄文時代 竪穴住居跡SI13、竪穴住居跡SI18- 19 土坑SK30-34・39-46・53-126、竪穴住居跡 SI36 土坑SK209-211・215-217-219-220	
PL. 6	縄文時代 竪穴住居跡SI42、土坑SK10、土坑 SK31	
PL. 7	縄文時代 土坑SK32-33・36-41・42-44・51-52- 54、土坑SK35、土坑SK40-52	
PL. 8	縄文時代 土坑SK43-45・47-55-56・64、土坑 SK47、土坑SK62-63-75	
PL. 9	縄文時代 土坑SK68-69、土坑SK72-74・76-85、 土坑SK77	
PL. 10	縄文時代 土坑SK80、土坑SK86、土坑SK92- 93-96-97-106	
PL. 11	縄文時代 土坑SK119、土坑SK124、土坑SK129	
PL. 12	縄文時代 土坑SK130、土坑SK131、土坑 SK132-133	
PL. 13	縄文時代 土坑SK136-137-138-139-140-141 柱穴状遺構Pit35、土坑SK136、土坑SK145	
PL. 14	縄文時代 土坑SK149、土坑SK151、土坑 SK153-158	
PL. 15	縄文時代 土坑SK163、土坑SK164、土坑 SK165-167	
PL. 16	縄文時代 土坑SK167、土坑SK168-169、土坑 SK171-174-176-177	
PL. 17	縄文時代 土坑SK175、土坑SK179、土坑SK180	
PL. 18	縄文時代 土坑SK181、土坑SK183、土坑SK183、 土坑SK183、土坑SK183	
PL. 19	縄文時代 土坑SK185、土坑SK186-190-191-	

PL. 20	縄文時代 土坑SK190、土坑SK195-200-201- 203-204-205-207-208-212-213、土坑SK195	
PL. 21	縄文時代 土坑SK204-212-213、土坑SK252- 257、土坑SK255	
PL. 22	縄文時代 土坑SK259、土坑SK269、土坑 SK275-277	
PL. 23	縄文時代 土坑SK276 柱穴状遺構Pit66、土坑 SK280-285、土坑SK281	
PL. 24	縄文時代 土坑SK284、土坑SK288-289、土坑 SK290	
PL. 25	縄文時代 土坑SK299、土坑SK300、土坑SK301	
PL. 26	古墳時代 竪穴住居跡SI01、竪穴住居跡SI04、 竪穴住居跡SI06	
PL. 27	古墳時代 竪穴住居跡SI10、竪穴住居跡SI16カ マド、竪穴住居跡SI25カマド	
PL. 28	古墳時代 竪穴住居跡SI26、竪穴住居跡SI26カ マド、竪穴住居跡SI27	
PL. 29	古墳時代 竪穴住居跡SI27カマド、竪穴住居 跡SI28、竪穴住居跡SI28カマド	
PL. 30	古墳時代 竪穴住居跡SI29、竪穴住居跡SI31、 竪穴住居跡SI33、竪穴住居跡SI33貼床除去後 銅鏡出土状況	
PL. 31	縄文時代 住居跡・土坑出土土器(1)	
PL. 32	縄文時代 土坑出土土器(2)	
PL. 33	縄文時代 土坑出土土器(3)	
PL. 34	縄文時代 住居跡・土坑出土土器片鉢	
PL. 35	縄文時代 住居跡・土坑出土石器(1)	
PL. 36	縄文時代 住居跡・土坑出土土器(2)	
PL. 37	縄文時代 土坑出土石器(3)	
PL. 38	古墳時代 住居跡出土土器(1)	
PL. 39	古墳時代 住居跡出土土器(2)	
PL. 40	古墳時代 住居跡出土土器(3)・銅鏡	
PL. 41	古墳時代 住居跡出土石製模造品・土玉	
PL. 42	縄文時代 土坑出土貝・産地分析黒曜石	

別 表

1.	土器片鉢・土製円盤計測一覧表	330
2.	石器一覧表	338
3.	竪穴住居跡出土遺物観察表	339

第Ⅰ章 調査の経緯と環境

第1節 調査に至る経緯 (Fig. 1-2)

龍善寺遺跡は、株式会社クラフトの行なう宅地造成分譲事業に伴って発掘調査に至ることとなった。以下はその調査に至る経緯について述べる。

そもそも、市内中高津二丁目地内の龍善寺遺跡の所在する土地の現状は、そのほとんどが山林となっており周知の遺跡とはされていなかった。2003（平成15）年5月に株式会社クラフト（以下事業者）による宅地造成分譲計画の事前協議申請書が提出された。市教委では過去の中高津二丁目地内の土地における埋蔵文化財踏査状況を勘査し、事業者に対し埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査への協力依頼を行った。この土地における試掘調査は、市教委立会いのもと重機により6月3日から6日にわたり実施した。この試掘調査は、事業予定地内の山林にトレーナー（Fig. 2 ①～④）を設定して実施した。この試掘調査の結果、各トレーナーから縄文時代から古墳時代にかけての遺構・遺物が確認され、この土地における遺跡の存在が明らかになった。遺跡の名前は小字名から龍善寺遺跡と銘々し、6月20日付け茨城県教育委員会教育長宛に遺跡発見の通知を提出した。



Fig. 1 開発エリアと遺跡範囲

先の試掘調査の後、市教委では事業者に対し発見された埋蔵文化財の状況説明を行い、その取り扱いについて数度の協議が持たれた。この協議の中、市教委では事業地内の道路などの既久建造物以外の部分について計画変更を行い、埋蔵文化財の現状保存を図る方策がとれないか提案し、事業者にご検討頂いた。この結果、遺跡の取り扱いについては、事業地内の道路や防火水槽部分について記録保存を目的とした発掘調査を実施し、宅地部分や公園については計画変更を行って埋蔵文化財の盛土保存（Fig. 1）を行うことで合意した。

のことにより、記録保存エリアの遺跡の内容把握及び、調査に要する期間・費用の積算のための確認調査を実施することになった。確認調査は2回に分けて実施し、1回目は搬入道路部分（Fig. 2⑤）を7月23日から25日にわたり行い、2回目は7月29日から8月1日にわたり宅地予定地内の内周・外周道路部分（Fig. 2⑥～⑧）の調査を行なった。これらの確認調査でも多数の縄文時代から古墳時代の遺構・遺物が確認されたが、事業地内の周縁部では埋蔵文化財が確認されない部分が見られ、この部分は調査対象エリアから除外した。

この結果、開発事業面積約21,500m²のうち、龍善寺遺跡の本調査対象面積は約3,500m²、臺上保存面積は約14,800m²となり、このようなデータをもとに調査費用や調査期間について積算し、その内容について事業者に検討頂き了承を得た。これまでの遺跡の取り扱い協議の中で市教委と事業者との間で合意が講られた事項については、10月3日付け協定書として締結した。

このの中、文化財保護法関連の届出等については、7月8日付けで龍善寺遺跡に關わる埋蔵文化財発掘の届出を、9月19日付けで埋蔵文化財発掘調査の届出を県教育長宛進呈した。

発掘調査の実施に当たっては、龍善寺遺跡調査会を組織し、事業者と同調査会の間で契約書を締結し、2003（平成15）年10月21日から2004（平成16）年2月24日まで現地調査を実施することとなった。

（関口 満）

第2節 調査区の設定（Fig. 3）

発掘調査区域は、開発事業地内の外周道路及び内周道路等の工事区域を任意に1から5T区に区切り調査を実施した。1T区は事業地南端の搬入道路部分に設定し、国道6号バイパス側は試掘確認調査で遺構遺物が確認されなかっため調査対象外とした。2工区は事業地中央の外周道路部分に設定した。1T区と2T区の接続部分は、試掘確認調査で遺構遺物が確認されなかっため調査対象外とした。3T区は事業地中央の内周道路とフットバス及び防火水槽部分とした。4T区は事業地東側の外周道路部分に設定した。5T区は事業地北側の外周道路部分である。

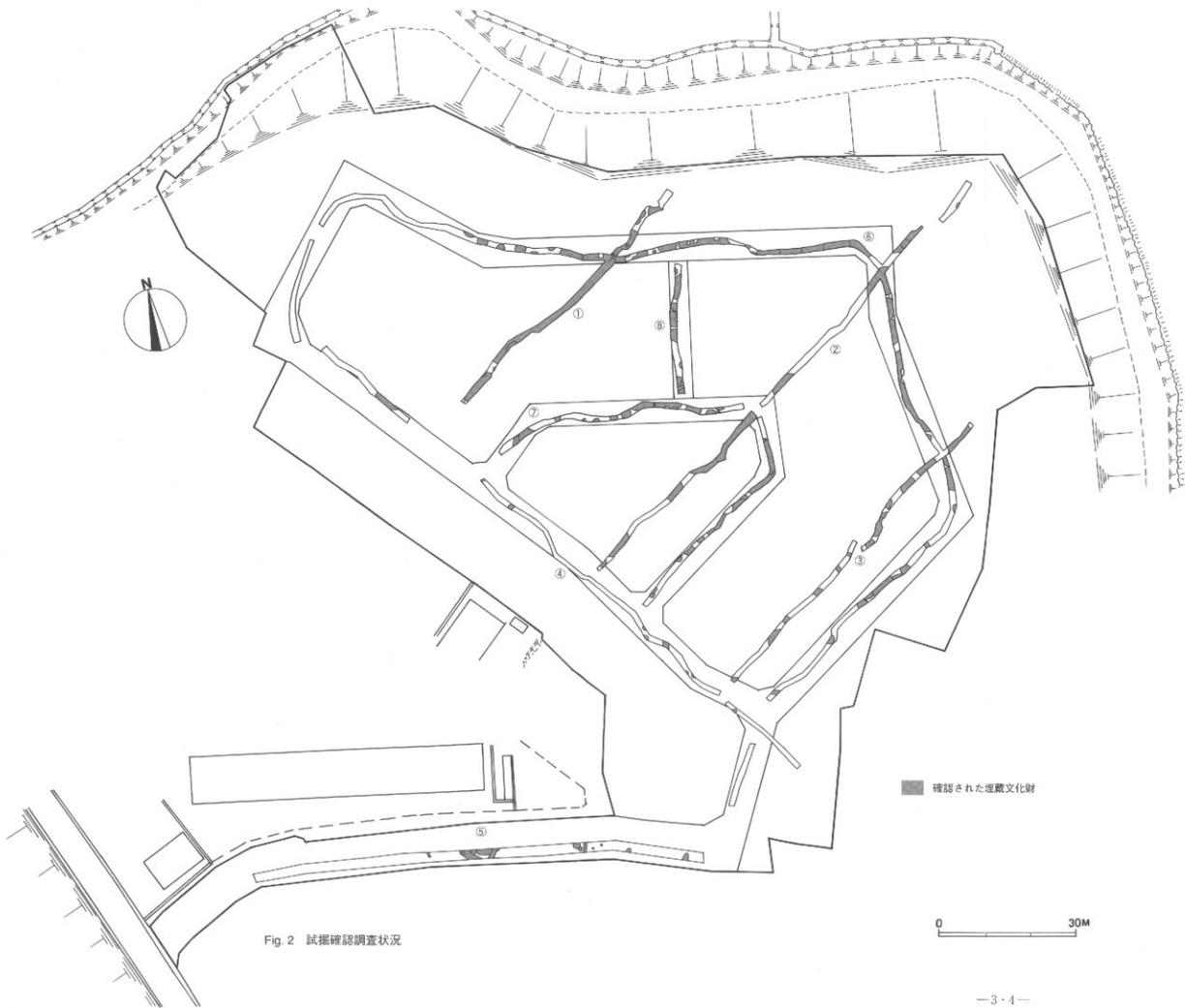
なお、外周道路部分の北西付近については、傾斜地となり試掘確認調査でも遺構遺物が確認されなかっため調査対象外とした。

これらの発掘調査区は1工区から5T区へ調査を進め、調査を終了した工区から工事が実施された。

なお、今回の発掘調査で確認された遺構の番号については、各工区通しの遺構番号となっている。

出土遺物については、遺構ごとに取り上げ、遺構外出遺物については、各工区一括の表記となっている。

（関口 満）



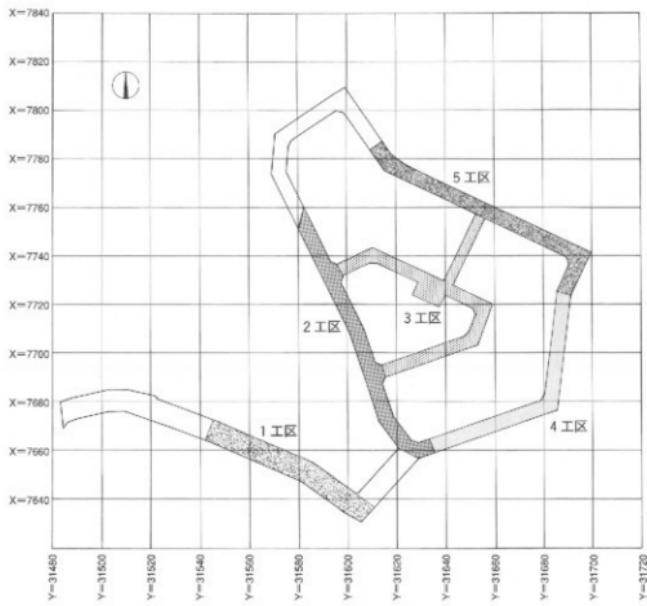


Fig. 3 龍善寺遺跡発掘区

第3節 調査日誌

2003(平成15)年

- 10.17 1工区の重機による表土除去及び抜根作業を行う。
- 10.21 本調査を開始する。1工区の遺構精査、遺構検出作業を行う。
- 10.30 1工区の現地作業を終了する。
- 11.04 2工区の重機による表土除去作業を開始。
- 11.05 2工区の遺構精査作業を行う。
- 11.06 2工区の遺構検出作業開始。
- 11.14 旧石器時代の試掘調査を行う。
- 11.18 3工区の重機による表土除去作業を開始する。3工区の遺構精査、遺構検出作業を始める。
- 12.20 2工区の現地作業を終了する。
- 12.26 3工区の現地作業を終了する。
- 12.27 4工区の重機による表土除去作業を始める。

2004(平成16)年

- 01.06 5工区の重機による表土除去作業を始める。
- 01.07 4工区の遺構精査作業を開始する。
- 01.08 5工区の遺構精査作業を行う。4工区の遺構検出作業を始める。
- 02.01 5工区の遺構検出作業を始める。
- 02.03 4工区の現地作業終了。
- 02.05 5工区北側を重機により拡張し、表土除去作業を行う。
- 02.17 5工区のSI33より銅鏡出土。
- 02.21 4工区・5工区の清掃作業、現地説明会の準備を行う。同区の現地作業を終了する。
- 02.22 現地説明会を午前10時より開き、多数の市民が来られる。
- 02.24 現地の器物を搬出し、龍善寺遺跡の現地作業を終了する。

(大潤淳志)

第4節 遺跡の位置と環境

1. 地理的環境 (Fig. 4)

土浦市は茨城県南地域のはば中央部に位置し、人口約14万3000人を数え、その面積は約113.82km²である。周辺市町村として、市域の北から東方にかすみがうら市、北から西方に石岡市、西方につくば市、南方に牛久市・稲敷郡阿見町と接している。市域の地理的特徴として、北部には筑波山塊から南東に伸びる新治台地、中央部を古鬼怒川によって形成され現在は桜川が流れる桜川低地、東部は霞ヶ浦（土浦入り）、南部には筑波・稲敷台地から成り立つ。

龍善寺遺跡は市内中高津二丁目1122-1他に所在し、桜川南岸の標高25m前後を測る筑波・稲敷台地上に立地する。また遺跡の立地する同台地の特徴は、桜川低地と花室川による低地に挟まれ、半島状を呈して台地が大きな塊で分割されている。この半島状の台地の中央部分は東西方向に分水嶺が形成され、台地縁辺付近は先の二つの低地から入り込む谷により、樹枝状の谷地形を示す。遺跡の現況はそのほとんどが山林となっており、その北側・東側は桜川低地から入り込む谷により開析され、そこでは水田耕作がなされている。

遺跡の西側は国道6号バイパス建設により大きく台地が切り土され、遺跡と国道6号バイパスの間には市営団地などが存在する。

龍善寺遺跡の立地する筑波・新治台地の地質は、手野層を基盤とし、その上層には下層から成田層下部・成田層上部・竜ヶ崎砂礫層・常緑粘土層・関東ローム層と続く。

最後に、遺跡隣接地における大規模な土地の改変行為について述べる。まず、国道6号バイパス自体がそうであるが、同国道が桜川低地へ差し掛かる両側の台地については、本来つながった細長い台地であり現状は大きく切り土がなされている。

(問) 満)

2. 歴史的環境 (Fig. 4)

以下は、龍善寺遺跡(●)の周辺に確認されている遺跡について、発掘調査などが実施されているものを中心取り上げ、周辺地域の歴史的な環境を時代順に概観してみたいと思う。

まず旧石器時代について、同時代の関東ローム層中の石器集中区などが確認された遺跡はないが、寄居遺跡(6)、うぐいす平遺跡(7)、十三塚A遺跡(11)、六十原A遺跡(20)、永国遺跡(22)等でナイフ形石器や石刃などが出土している。

縄文時代については、まず草創期の神子柴型石斧や槍先形尖頭器が念代遺跡(34)で出土しており注目される。そして、早期から前期の遺物が寄居遺跡で確認されているが、あまり目立った存在ではない。市内では中期になると規模の大きな遺跡が見られるようになる。この時期の遺跡として、今回調査を行った龍善寺遺跡をはじめ、その南東約1.5km付近には六十原遺跡(21)や六十原A遺跡(20)が存在し、特に群在する土坑を伴う集落遺跡が日立。また、同様の遺跡内容が考えられるものとして栗原遺跡(3)があり、調査が小規模の割には多くの土器片が出土している。また、この時期の陥穴が列をなして確認された遺跡として、永国遺跡など(22)があり興味深い。この他、市内における同時期の貝塚の形成については低調な感がある。後・晚期の遺跡としては、明治時代から知られる上高津貝塚(2)や小松貝塚(19)が存在する。上高津貝塚は、台地斜面部の貝層の遺存状況が良好で台地上も含め国指定史跡となり、現在は上高津貝塚ふるさと歴史の広場として史跡整備されている。また、小松貝塚は常磐線の敷設で大きく壊されているとされるが、台地上の土坑群内から貝殻が多数確認されている。

弥生時代の遺構・遺物が検出された遺跡として、うぐいす平遺跡(7)があり、弥生時代後期の堅穴住居跡が3軒確認され、この内の1軒から銅鏡が出土している。穴城古墳群(1)では古墳の埴丘下から弥生時代後期の堅穴住居跡が10軒ほど確認されている。この他、永国遺跡(22)や和台遺跡(16)でも堅穴住居跡が確認されている。

古墳時代の遺跡のあり方として、台地縁辺の谷の出口付近を中心に古墳群や古墳が存在する。古墳群として



(国土地理院発行 1/25,000 に加筆)

Fig. 4 周辺遺跡位置図

穴塚古墳群（1）、天王山古墳群（17※現在は湮滅）、高津天神山古墳群（18）などがあり、古墳として幕下女騎古墳（4）、三芳古墳（32）などがある。市内では前期から中期の古墳は少なく後期から終末期の古墳が目立つようである。発掘調査が実施された寺家ノ後B遺跡（14）、十三塚B遺跡（12）では7世紀代の方墳のみが確認されている。古墳時代の集落跡は多く確認されており、寄居遺跡（6）、うぐいす平遺跡（7）、寺家ノ後A遺跡（15）、寺家ノ後B遺跡（14）、十三塚B遺跡（12）、東谷遺跡（33）、永国遺跡（22）、神出遺跡（28）、阿ら地遺跡（24）、いさろ遺跡（25）などがある。寄居遺跡やうぐいす平遺跡では前期の堅穴住居跡がまとまって確認されている。神出遺跡や阿ら地遺跡、そして永国遺跡などでは中期から後期の堅穴住居跡が確認されている。

余良・平安時代については、寄居遺跡（6）、うぐいす平遺跡（7）、谷畑遺跡（26）、永国遺跡（22）などがある。うぐいす平遺跡では、余良時代の堅穴住居跡がまとまって開発された。

中世の遺構・遺物が確認された遺跡については、官臨B遺跡（8）、寄居遺跡（6）、霞ヶ丘遺跡（30）、神山遺跡（28）、中居遺跡（29）などがある。そして、中世城郭と考えられる高井城跡（5）も存在する。また近世の遺跡として、出し山所在塚（9）、官脇庚申塚（10）などがある。

最後に、龍善寺遺跡の名の由来となった小字龍善寺であるが、今回の発掘調査エリア内における寺に関する遺構・遺物は未確認であった。しかしながら、過去の記録では隣接地域の上高津地内に龍善院⁽²³⁾と呼ばれる寺が存在していたらしく興味深い。

《参考文献》

- 1971 国学院大学穴塚調査団「常陸穴塚」
1974 土浦市教育委員会『土浦市史別巻 十浦市歴史地図』
1981 常陸古房『新編常陸國史』再版
1983 日本歴史研究所『茨城県上浦市 永国遺跡』
1990 (財)茨城県教育財団『寺家ノ後A遺跡・寺家ノ後B遺跡・十三塚A遺跡・十三塚B遺跡・永国・十三塚遺跡・田錆倉街遺跡』茨城県教育財團文化財調査報告書第60号
1991 茨城県教育委員会『茨城県 遺跡・古墳発掘調査報告書VI (昭和62~平成元年度)』
1994 (財)茨城県教育財団『寄居遺跡・うぐいす平遺跡』茨城県教育財團文化財調査報告書第81号
1994 七浦市教育委員会『国指定史跡 上高津貝塚A地点』
1995 コロナ社『茨城県 地学のガイド』地学のガイドシリーズ3
1996 (財)茨城県教育財団『右袖只塚東遺跡・内路地台遺跡・念代遺跡・平坪遺跡』茨城県教育財團文化財調査報告書第111号
1996 土浦市教育委員会『六十原A遺跡』
1997 上高津貝塚ふるさと歴史の広場『十浦市 上高津貝塚ふるさと歴史の広場年報 第3号』
1998 土浦市教育委員会『三芳古墳 東谷遺跡(2次)』
1999 土浦市教育委員会『東出・神出・中居遺跡』
2001 茨城県教育委員会『茨城県遺跡図』
2001 土浦市教育委員会『いさろ遺跡』
2002 茨城県教育委員会『茨城県 遺跡発掘調査報告書第11集(平成10~12年度)』
2002 (財)茨城県教育財団『谷畑遺跡』茨城県教育財團文化財調査報告書第194号
2002 土浦市教育委員会『阿ら地遺跡』
2003 土浦市教育委員会『六十原遺跡』

註釈

1)『土浦市史別巻 十浦市歴史地図』P121の上高津村絵図中に龍善院の文字が読み取れる。

(関口一満)



Fig. 5 遺構全体図

第Ⅱ章 検出された遺構と遺物

第1節 遺跡の概要 (Fig.5)

龍谷寺遺跡の調査は、開発予定地内のうち道路施設部分および防火水槽設備部分の3,465m²が調査対象区域となった。したがって本調査は幅広いトレンチ調査で、しかも調査区の台地周縁部と中央部を確認することなり、結果的には全面調査できなかったものの、ほぼ遺跡の全貌を推測することが可能となった。なお、調査区は便宜的に区分けた1から5工区の区割りごとに実施した。

確認された遺跡の構成は、旧石器時代、縄文時代、古墳時代、近世以降の複合遺跡で、堅穴住居跡46軒、上坑303基、柱穴状遺構90基、溝状遺構8条、道路状遺構1条が検出された。なお、旧石器時代としては剥片の出土があるものの石器集中域としての明確な石器ブロックは確認できず、また近世以降は溝を中心に、銭貨ならびに陶磁器の出土を見るだけであった。したがってここでは大きく縄文時代と古墳時代の2期に分けることができる。

まず縄文時代は前期と中期の遺構・遺物が検出されている。前期は前半・黒浜式期の堅穴住居跡(SI05)1軒のみ確認された。中期集落から離れた南西側に位置し、径3.5mの円形住居跡である。また堅穴住居跡25軒と土坑302基は中期で、調査区の中央部から北東側にかけて密集して展開している。時期は中期のうち阿玉台式期から加曾利E2式期であるが、中心は加曾利E1式期であり、遺構の大半は当該期で構成される縄文中期大集落の典型である。なお検出された堅穴住居跡の多くは土坑によって破壊され、辛うじて炉跡や床面の一部および柱穴を確認できるだけで、全貌を把握できるものはほとんどなかった。また炉跡は確認された堅穴住居跡でいずれも地床がが中心となっている。土坑は集中して検出された。形状は円形を呈し、断面形はいわゆる袋状タイプが主体を占める。坑底にはセンターピットをはじめとする、サイドピット、貯藏穴状ピット、底面の浅いポケットピット等の付帯施設を伴う。また遺物の出土量(個体数)に大きな差異が認められ、完形土器を多量に遺棄する土坑も數基確認されているが、大半は破片のみの出土である。遺物は上器以外、上器片錠が多量に出土している。その出土総数は545点である。そのほか石器としては石鏃・打製石斧・磨製石斧・磨石・石皿等があるが、全体として少量である。

古墳時代は4世紀から6世紀の堅穴住居跡21軒が確認され、とくに4世紀代は検出数の半分以上の10軒を占めている。調査区の南西側に集中地点がみられるものの、ほぼ全般的に万遍なく分布している。しかし、堅穴住居跡に伴出する遺物は少ない。その中で調査区北側において検出された住居跡SE33は特筆される。南側約半分が未調査区域に広がっているものの、確認された北壁辺は5.1mを測り方形を呈する住居跡で、壁構造は確認面で全周し、北西側に柱穴1本が検出されている。また出土遺物として、住居北コーナー付近の壁際貼床下面から遺存状況が良好ではあるが、完全に銅鏡1点が出土した。また覆土中には高環と小型発の破片および土玉、土製模造品の共伴があり、4世紀末頃に相当するものと推定される。次の5世紀代は出土遺物から判断すると2軒である。また、カマド施設を有する6世紀代の住居跡が7軒確認された。遺物量が少ない住居跡もカマドの設置有無で判断が容易である。当該期の集落構成は調査区南側に偏っている。その他、出土遺物がなく、時期不明なものが2軒ある。

(小川和博)

第2節 旧石器時代の状況 (Fig. 5-6)

今回の調査では後世の遺構覆土中から旧石器時代の剥片が出土したことから、2工区内に旧石器時代の遺構・遺物検出用の試掘坑を設定して調査を行った。その結果、石器集中域としての明確な石器ブロックなどは確認できなかった。しかしながら、遺跡内からは一括遺物として旧石器時代の剥片4点（黒色安山岩2点、流紋岩1点、珪質頁岩1点）が検出されている。

以下は、遺跡内の基本層序把握のため、旧石器時代試掘坑のローム層壁面の観察結果を示す。

() 内の数値は含有物の最大径を示す。

1. 黄褐色 (10YR5/8) 軟質ローム層 黒色スコリヤ (1mm) を多量に含む。最深部では6層に達する。
2. 黄褐色 (10YR5/8) 硬質ローム層 赤色スコリヤ (0.5mm) と黒色スコリヤ (0.5mm) を共に多く、白色粒子 (1mm) を僅かに含む。立川ローム層第VI層に相当すると考えられる。
3. 褐色 (10YR4/6) 硬質ローム層 青灰色粒子 (0.5mm) を多量に、赤褐色スコリヤ (0.5mm) を僅かに含む。立川ローム層第V層に相当する。
4. 褐色 (10YR4/4) 硬質ローム層 赤色スコリヤ (0.5mm) と黒色スコリヤ (0.5mm) を共に多く含む。立川ローム層第IX層に相当する。
5. 黄褐色 (10YR5/8) 硬質ローム層 青灰色スコリヤ (0.5mm) を多く、黄白色粒子 (5mm) を僅かに含む。黄白色粒子は層位の上部に多く認められ、赤城泥沼鉱石 (Ag-KP) の細粒と考えられる。
6. 黄褐色 (10YR5/8) 硬質ローム層 青灰色スコリヤ (0.5mm) と白色粒子 (0.5mm) をきわめて多く、明褐色粒子 (1mm) を僅かに含む。かなり頗る質で、鍛で削ると抵抗感が非常に強く、写真撮影では白く光沢を放つほどである。青灰色スコリヤは、BCVA相当層と考えられる。
7. 褐色 (10YR4/6) 軟質ローム層 青灰色スコリヤ (0.5mm) を多く含むが、土中に細かい隙間が多く、1層と同等くらいの軟質。
8. 褐色 (10YR4/6) 硬質ローム層 青灰色スコリヤ (1mm) を多量に、赤色スコリヤ (1mm) と灰白色粒子 (0.5mm) を共に僅かに含む。隙間が多いが7層よりは硬質。
9. 明黄色 (10YR6/8) 硬質ローム層 青灰色粒子 (1mm) を多く、赤色スコリヤ (1mm) と白色粒子 (1mm) を僅かに含む。本遺跡で観察したローム層中で最も硬質な地層。分析用サンプルを採取した。
10. 黄褐色 (10YR5/8) 軟質ローム層 黒色粒子 (5mm) を多量に、白色粒子 (1mm) を僅かに含む。かなりの軟質ローム。
11. 黄褐色 (10YR5/6) 硬質還元ローム層 黑色粒子 (0.5mm) を極めて多量に、橙色粒子 (1mm) を僅かに含む。地下水の影響で還元状態となったようだ。7層と同等くらいの硬質である。
12. 黄褐色 (10YR5/6) ローム質粘土層 箱根東京軽石（黄橙色・10YR7/8）ブロック (15mm) を多量に、褐鉄鉱粒子 (10mm) を僅かに含む。比較的硬質である。
13. にぶい黄褐色～にぶい黄橙色 (10YR5/4～6/4) 粘土層 箱根東京軽石粒子 (10mm) を多く含む。以下常総粘土層である。

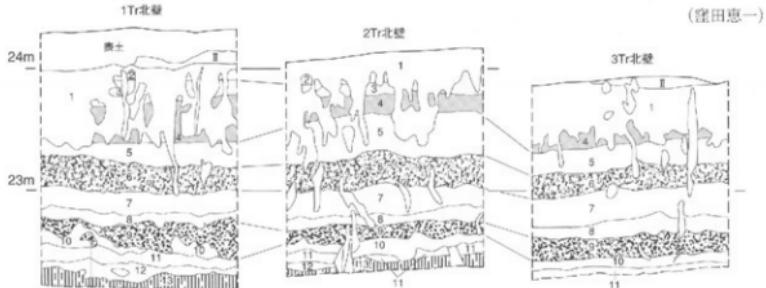


Fig. 6 基本層序

第3節 縄文時代の竪穴住居跡

縄文時代の竪穴住居跡は全部で25軒確認されたが、その多くは土坑との重複が著しく遺存状況は良くない。

住居跡SI05 (Fig. 7)

位置 調査区西側2工区、標高24.29~24.33mに位置する。

規模 検出された規模は東西軸3.40m、南北軸3.42mを測り、円形を呈する。

壁 確認面からの深さは29.5cm。緩傾斜して立ち上がる。

床 ほぼ平坦である。住居中央はよく踏み固められて堅緻で、さらに東側へ硬化面が広がる。

ピット 柱穴は2本検出された。

番号	形状	規模 (長径×短径) cm	深さ	番号	形状	規模 (長径×短径) cm	深さ
P1	円形	23 × 19	22	P2	円形	21 × 19	29

炉 検出できなかった。

覆土 5層からなり、レンズ状を呈する自然堆積層と推定される。

遺物 覆土中から縄文土器（前期・黒浜式）の小片が出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代前期前半（黒浜式期）の所産と考えられる。

住居跡SI07 (Fig. 8)

位置 調査区西側2工区、標高23.98mに位置する。

規模 西側の大半が未調査区域に広がっている。検出された規模は東西軸1.48m、南北軸5.32mを測り、円形（もしくは楕円形）を呈するものと推定される。

主軸方向 北側に炉跡が設置されているものと推定すると、主軸方向はN-32°-Wを示す。

壁 確認面からの深さは7.5cm。緩傾斜して立ち上がる。

床 ほぼ平坦である。住居中央周辺はよく踏み固められて堅緻である。

ピット 柱穴は2本検出された。

番号	形状	規模 (長径×短径) cm	深さ	番号	形状	規模 (長径×短径) cm	深さ
P1	円形	39 × 39	61	P2	楕円形	45 × 38	58

炉 検出できなかった。

覆土 4層からなり、レンズ状を呈する自然堆積層と推定される。

遺物 覆土中から土器片（阿玉台式・加曾利E1式）と土器片錐1点、土製円盤1点が出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代中期後半（加曾利E1式期）の所産と考えられる。

住居跡SI08 (Fig. 9)

位置 調査区西側2工区、標高24.06~24.11mに位置する。

規模 東側の一部が未調査区域に広がっている。沖跡とその周囲で検出された柱穴により住居跡と判断されたもので、明瞭な掘り込みは確認できなかった。柱穴の配列規模から東西軸3.33m、南北軸5.13mを測り、楕円形を呈するものと推定される。

壁 確認できなかった。

床 炉跡周辺以外明瞭な硬化面は確認できなかった。

ピット 柱穴は6本検出された。

番号	形状	規模 (長径×短径) cm	深さ	番号	形状	規模 (長径×短径) cm	深さ
P1	円形	37 × 32	43	P2	円形	29 × 27	40
P3	楕円形	30 × 21	18	P4	楕円形	37 × 32	23
P5	楕円形	41 × 30	46	P6	円形	34 × 31	27

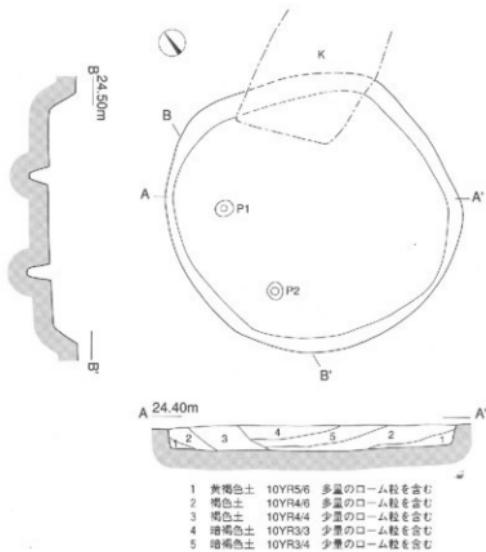


Fig. 7 住居跡SI05実測図

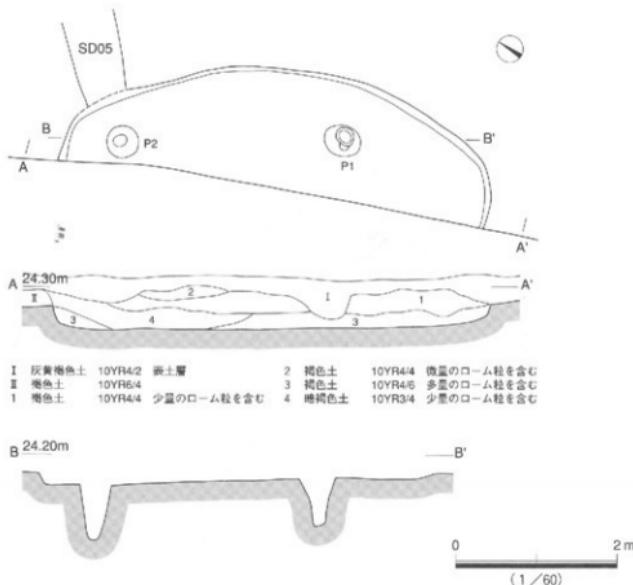


Fig. 8 住居跡SI07実測図

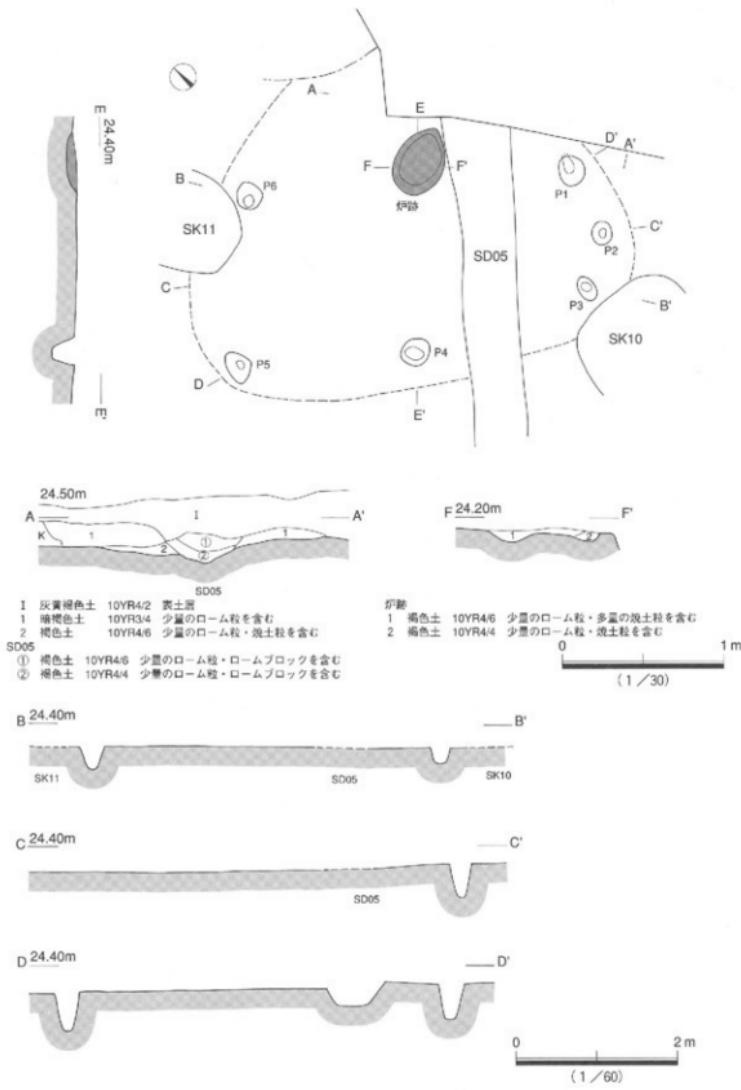


Fig. 9 住居跡SI08実測図

炉 住居中央やや東寄りに設置された地床炉である。梢円形を呈し、規模は長径88cm、短径60cm、深さ3cmを測る。底面は皿状で、覆土は焼土粒、炭化粒を僅かに含む赤褐色土。炉床は火熱を受け赤変硬化している。

覆土 2層からなり、レンズ状を呈する自然堆積層と推定される。

遺物 炉跡および覆土中から土器片（加曾利E1式）が出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代中期後半（加曾利E1式期）の所産と考えられる。

住居跡SI11 (Fig. 10)

位置 調査区西側2工区、標高24.10~24.13mに位置する。

規模 西側の大半が未調査区域に広がっている。炉跡とその周囲で検出された柱穴により住居跡と判断されたもので、明瞭な掘り込みは確認できなかった。柱穴の配列規模から東西軸2.70m、南北軸4.21mを測り、円形もしくは楕円形を呈するものと推定される。

壁 検出できなかった。

床 炉跡周辺以外、硬化面は確認できなかった。

ピット 柱穴は5本検出された。なお北側の円形ピット（P2）は規模が大きく上坑との重複が考えられる。

番号	形状	規模（長径×短径）cm	深さ	番号	形状	規模（長径×短径）cm	深さ
P1	円形	29 × 23	14	P2	円形	84 × 73	49
P3	楕円形	51 × 44	46	P4	円形	28 × 27	21.5
P5	円形	31 × 30	34.5				

炉 住居中央に位置する地床炉であるが、西側が未調査区域に広がっている。検出された形状は楕円形を呈し、規模は長径140cm、短径83cm、深さ7cmを測る。底面は皿状で、覆土は焼土粒、炭化粒を僅かに含む赤褐色土。炉床は火熱を受け赤変硬化している。なお、未調査区域に接して、炉内埋設土器が検出された。口縁部と底部を打ち欠いた最大径17cmの深鉢土器を埋設したものであるが、土器内部にも火を受けた痕跡が明瞭であり、掘り込みの堆積炉と埋設土器の併設炉跡である。

覆土 2層からなるものの、薄層のため明確ではない。

遺物 炉内埋設土器と覆土中から僅かに土器片が出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代中期後半（加曾利E1式期）の所産と考えられる。

住居跡SI13 (Fig. 11)

位置 調査区中央3工区、標高24.10~24.21mに位置する。

規模 南側半分近くが未調査区域に広がっている。検出された住居跡は東西軸5.27m、南北軸3.04mを測り、全体は不明であるが円形を呈するものと推定される。

壁 確認面からの深さは1.8~8.5cm。緩傾斜して立ち上がる。

床 わずかに東側が低く傾斜するものは平坦である。炉跡周辺はよく踏み固められて堅緻で、さらに北側へ硬面化が広がる。

ピット 柱穴は5本検出された。西側の柱穴2本（P1とP2）は重複し、東側（P5）は二段掘りになっており、新旧は明瞭ではないが、建替えもしくは拡張住居跡と考えられる。

番号	形状	規模（長径×短径）cm	深さ	番号	形状	規模（長径×短径）cm	深さ
P1	楕円形	44 × 32	120	P2	楕円形	63 × 62	70
P3	楕円形	40 × 34	57	P4	円形	68 × 62	75
P5	楕円形	53 × 39	62				

炉 住居中央に位置する地床炉である。楕円形を呈し、規模は長径102cm、短径74cm、深さ14cmを測る。底面は皿状で、覆土は焼土粒、炭化粒を僅かに含む赤褐色土。炉床は火熱を受け赤変硬化している。

覆土 2層からなり、レンズ状を呈する自然堆積層と推定される。

遺物 炉跡および覆土中から土器片（加曾利E2式）と土器片錠5点が出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代中期後半（加曾利E2式期）の所産と考えられる。

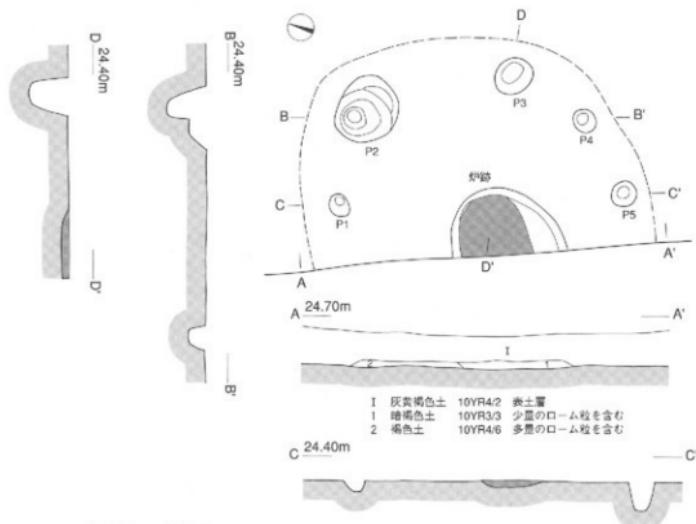


Fig. 10 住居跡SI11実測図

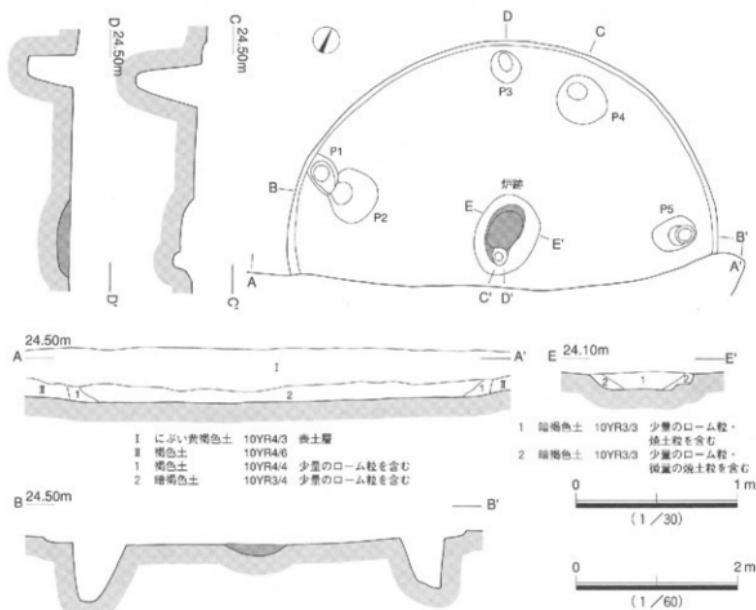


Fig. 11 住居跡SI13実測図

住居跡SI14 (Fig. 12・13)

位置 調査区中央3工区、標高24.01~24.25mに位置する。

規模 北東側と南西側が未調査区域に広がっており、南東側でSI15と重複している。なお、炉跡とその周囲で検出された柱穴により住居跡と判断されたもので、明瞭な掘り込みは確認できなかった。柱穴の配列規模から東西軸8.56m、南北軸4.29mを測り、円形もしくは楕円形を呈するものと推定される。

壁 確認できなかった。

床 炉跡周辺以外硬化面は確認できなかった。

ピット 柱穴は7本検出された。

番号	形状	規模 (長径×短径) cm	深さ	番号	形状	規模 (長径×短径) cm	深さ
P1	円形	40 × 35	71	P2	円形	56 × 53	88
P3	円形	35 × 23	81	P4	楕円形	45 × 38	75
P5	楕円形	63 × 57	109	P6	楕円形	33 × 24	37
P7	楕円形	50 × 39	59				

炉 住居中央やや南寄りに位置する地床炉である。南側の未調査区域に広がり、SK20によって切られているため、形状は明瞭ではないが、楕円形を呈しているものと推定される。検出された規模は長径52cm、短径20cm、深さ5cmを測る。底面は皿状で、覆土は焼土粒、炭化粒を僅かに含む赤褐色土。炉床は火熱を受け赤変硬化している。

覆土 確認できなかった。

遺物 炉跡および柱穴内から土器片（加曾利E2式）が出土している。

所見 本跡はSI15を切って構築されている。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半（加曾利E2式期）の所産と考えられる。

住居跡SI15 (Fig. 12・13)

位置 調査区中央3工区、標高24.06~24.17mに位置する。

規模 北東側と南西側が未調査区域に広がっており、南東側でSI14と重複している。なお、炉跡とその周囲で検出された柱穴により住居跡と判断されたもので、明瞭な掘り込みは確認できなかった。柱穴の配列規模から東西軸9.00m、南北軸5.05mを測り、円形もしくは楕円形を呈するものと推定される。

壁 確認できなかった。

床 ほぼ平坦である。炉跡周辺は硬化面が広がる。

ピット 柱穴は15本検出された。柱穴としては明瞭ではないものも存在する。

番号	形状	規模 (長径×短径) cm	深さ	番号	形状	規模 (長径×短径) cm	深さ
P1	楕円形	51 × 39	52	P2	楕円形	47 × 38	42
P3	楕円形	51 × 47	116	P4	楕円形	50 × 40	74
P5	楕円形	55 × 41	27	P6	楕円形	40 × 26	72
P7	楕円形	54 × 45	66	P8	楕円形	42 × 38	61
P9	楕円形	55 × 40	53	P10	楕円形	48 × 43	44
P11	円形	33 × 32	51	P12	円形	29 × 27	53
P13	楕円形	26 × 15	31.5	P14	楕円形	43 × 23	48
P15	楕円形	39 × 34	39				

炉 住居中央に位置する地床炉である。南側が未調査区域に広がっており、形状は不明であるが、楕円形を呈するものと推定される。検出された規模は長径129cm、短径55cm、深さ11cmを測る。底面は皿状で、覆土は焼土粒、炭化粒を僅かに含む赤褐色土。炉床は火熱を受け赤変硬化している。SI14のP7と重複している。

覆土 明瞭ではない。

遺物 炉跡および柱穴内から繩文土器片（加曾利E1・E2式）と上器片鉢1点が出土している。

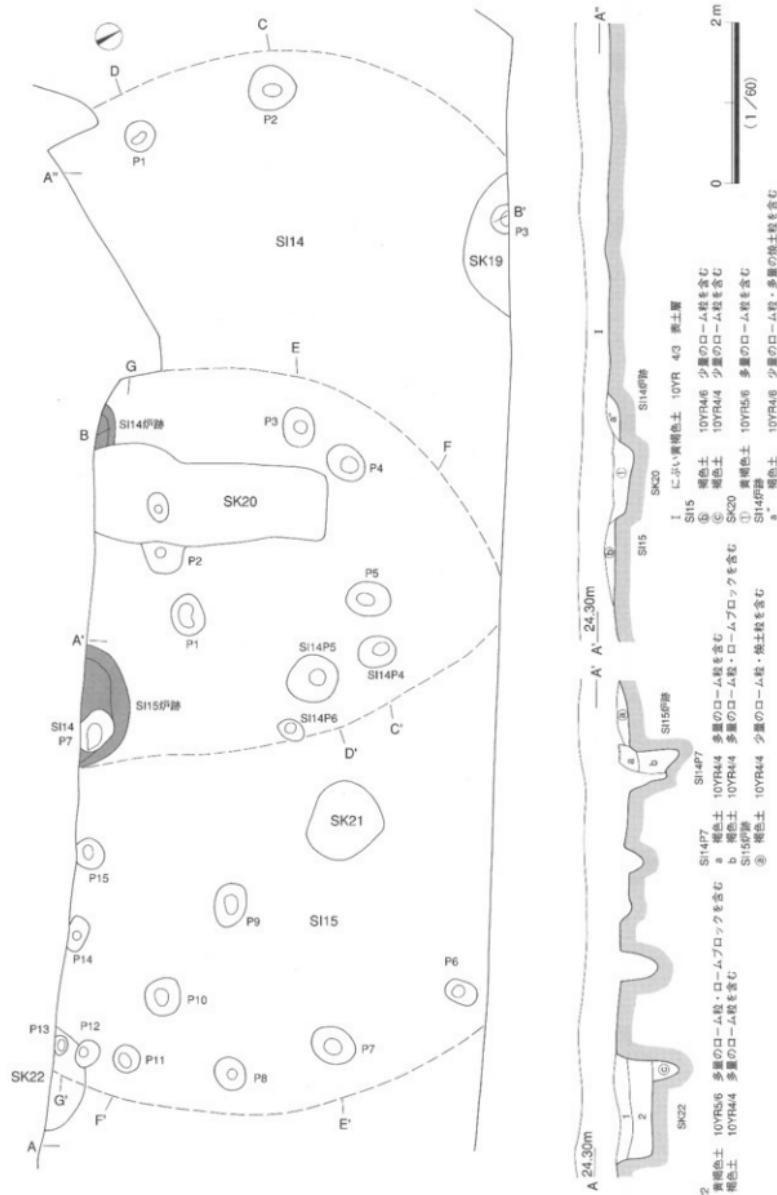


Fig. 12 住居跡SI14・15実測図 (1)

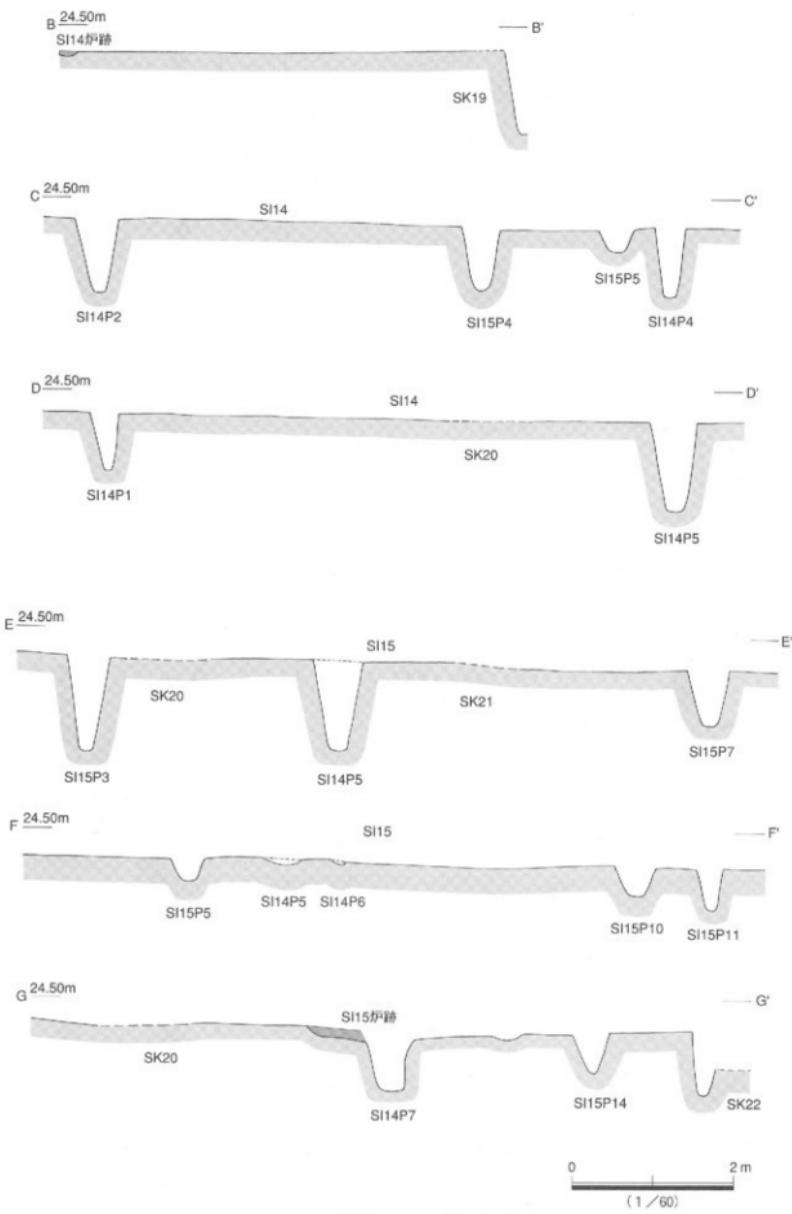


Fig. 13 住居跡SI14・15実測図 (2)

所見 本跡はSI14に切られている。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半（加曾利E2式期）の所産と考えられる。

住居跡SI18 (Fig. 14・15)

位置 調査区中央3工区、標高23.84～23.92mに位置する。

規模 南側の一部が未調査区域に広がっており、また北側でSI19と重複している。なお、炉跡とその周囲で検出された柱穴により住居跡と判断されたもので、明瞭な掘り込みは確認できなかった。柱穴の配列規模から東西軸5.67m、南北軸5.40mを測り、楕円形を呈するものと推定される。また炉跡が2基重複していることから建替えもしくは拡張住居と推定される。

壁 確認できなかった。

床 ほぼ平坦である。炉跡周辺はよく踏み固められて堅硬で、さらに西側へ硬化面が広がるが、東側は明瞭ではない。

ピット 柱穴は11本検出された。柱穴として明瞭ではないものも存在する。

番号	形状	規模 (長径×短径) cm	深さ	番号	形状	規模 (長径×短径) cm	深さ
P1	円形	44×43	66	P2	楕円形	57×45	93
P3	楕円形	65×59	29	P4	楕円形	43×35	51
P5	楕円形	75×65	82	P6	楕円形	36×32	47
P7	円形	38×37	34	P8	円形	38×38	63
P9	円形	28×23	34	P10	楕円形	41×31	35
P11	楕円形	47×41	47				

炉 住居中央寄りに設置された地床炉である。瓢箪形状を呈し、2基の炉跡が重複しているものと推定される。2基ともに楕円形を呈し、規模は長径181cm、短径88cm、深さ15cmを測る。底面は皿状で、覆土は焼土粒、炭化粒を僅かに含む赤褐色土。炉床は火熱を受け赤変硬化している。炉床下にピットが確認された。

覆土 明瞭ではない。

遺物 炉跡および柱穴内から縄文土器片（加曾利EL式）が出土している。

所見 本跡はSI19に切られている。時期は、出土遺物から縄文時代中期後半（加曾利E1式期）の所産と考えられる。なお、炉跡の形状および柱穴の配列から判断して、建替えもしくは拡張住居と推定される。

住居跡SI19 (Fig. 14・15)

位置 調査区中央3工区、標高23.75～23.86mに位置する。

規模 西側が未調査区域に広がっており、さらにSK30・34・37・39・48・53と重複している。また南側でSI18と重複している。なお炉跡とその周囲で検出された柱穴により住居跡と判断されたもので、明瞭な掘り込みは確認できなかった。柱穴の配列規模から東西軸6.92m、南北軸4.33mを測り、楕円形を呈するものと推定される。

壁 確認できなかった。

床 ほぼ平坦である。炉跡周辺はよく踏み固められて堅硬である。

ピット 柱穴は7本検出された。柱穴としては明瞭ではないものも含まれる。

番号	形状	規模 (長径×短径) cm	深さ	番号	形状	規模 (長径×短径) cm	深さ
P1	楕円形	55×46	27	P2	円形	29×28	35
P3	円形	35×23	30	P4	楕円形	21×21	20
P5	楕円形	45×38	98	P6	楕円形	44×40	95
P7	円形	41×40	96				

炉 住居中央に位置する地床炉である。楕円形を呈し、規模は長径110cm、短径80cm、深さ9cmを測る。底面は皿状で、覆土は焼土粒、炭化粒を僅かに含む赤褐色土。炉床は火熱を受け赤変硬化している。

覆土 明瞭ではない。

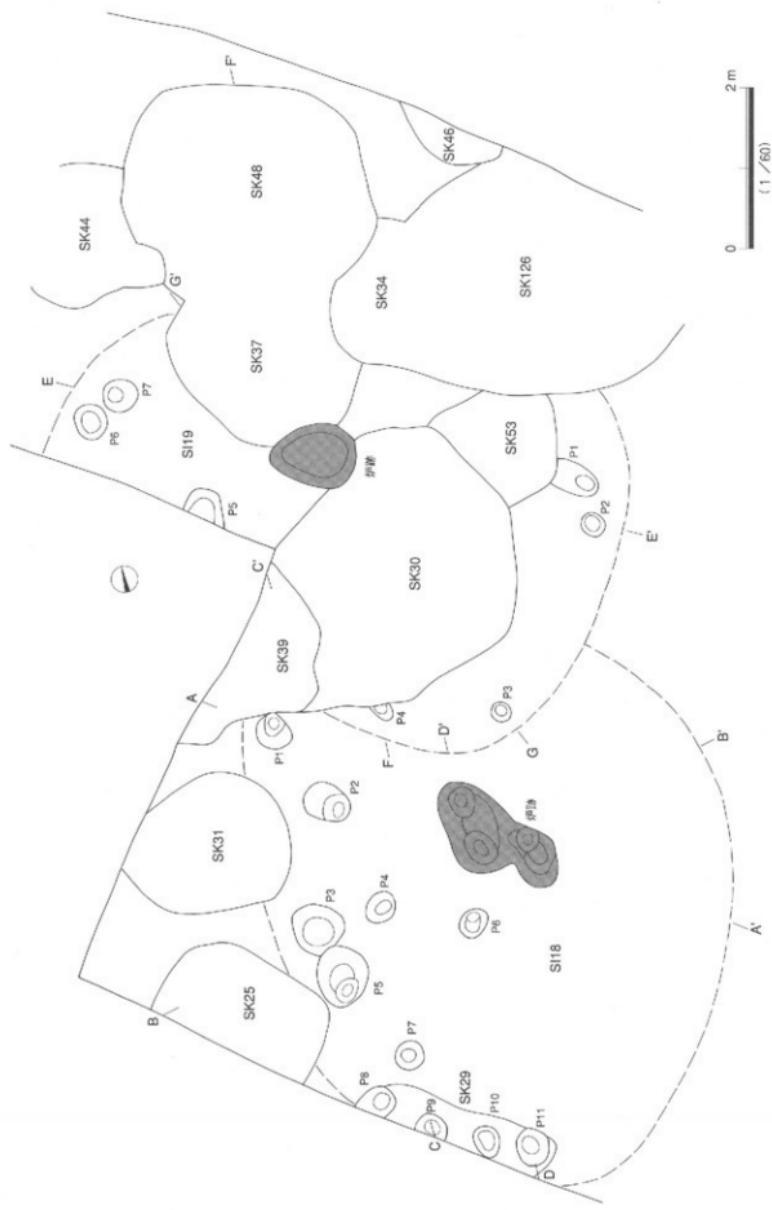


Fig. 14 住居跡SI18・19実測図 (1)

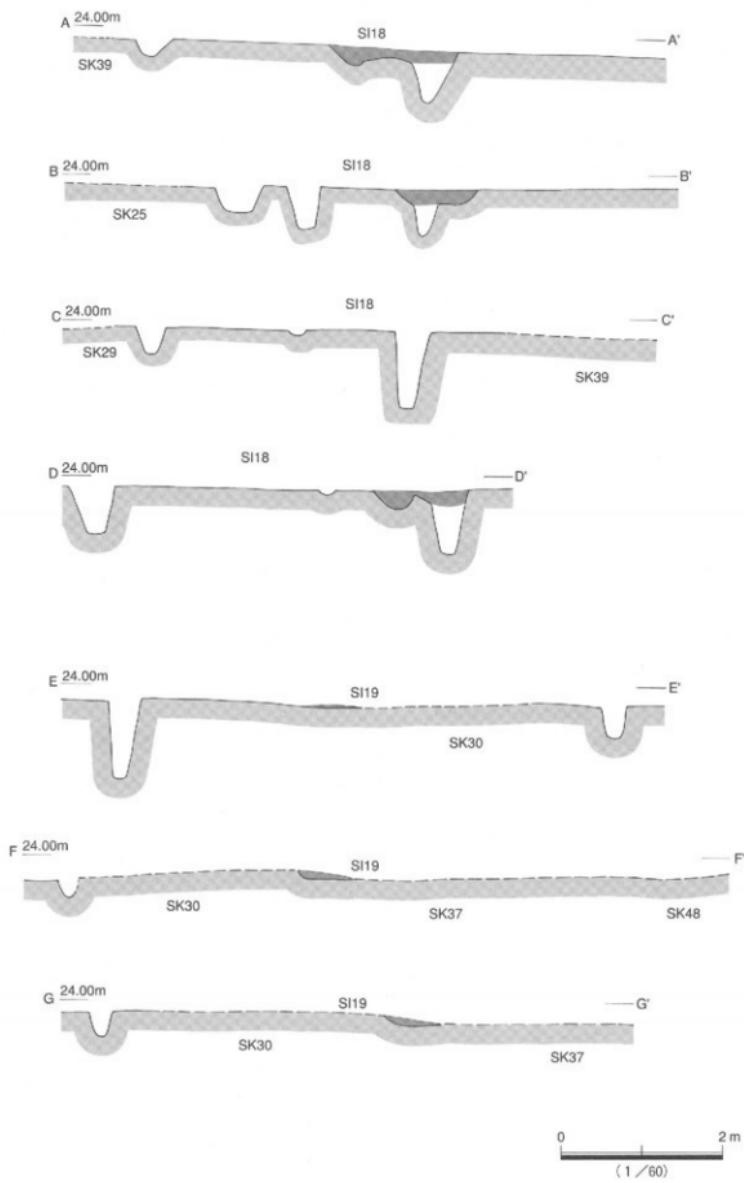


Fig. 15 住居跡SI18・19実測図 (2)

遺物 遺物は出土していない。

所見 本跡はSI18を切っている。時期は、出土遺物が検出できなかったが、炉跡の形状等から判断して縄文時代中期の所産と考えられる。

住居跡SI20 (Fig. 16)

位置 調査区中央3工区、標高23.84~23.87mに位置する。

規模 北東側と南西側が未調査区域に広がっている。炉跡とその周囲で検出された柱穴により住居跡と判断されたもので、明瞭な掘り込みは確認できなかった。柱穴の配列規模から東西軸4.91m、南北軸5.48mを測り、梢円形を呈するものと推定される。

壁 確認できなかった。

床 ほぼ平坦である。炉跡周辺はよく踏み固められて堅緻である。

ピット 柱穴は7本検出された。柱穴として明瞭ではないものも存在する。

番号	形状	規模（長径×短径）cm	深さ	番号	形状	規模（長径×短径）cm	深さ
P1	梢円形	64 × 55	40	P2	円形	43 × 40	57
P3	梢円形	50 × 45	48	P4	梢円形	40 × 35	70
P5	円形	30 × 29	27	P6	梢円形	37 × 32	121
P7	梢円形	73 × 45	103				

炉 住居中央や南東寄りに位置する地床炉である。西側半分以上をSK83によって切られている。現存の形状は梢円形を呈し、規模は長径50cm、短径30cm、深さ20cmを測る。底面は皿状で、覆土は焼土粒、炭化粒を僅かに含む赤褐色土。炉床は火熱を受け赤変硬化している。

覆土 明瞭ではない。

遺物 炉跡および柱穴内から縄文土器片（加曾利E1・E2式）と土器片錐1点が出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代中期後半（加曾利E2式期）の所産と考えられる。

住居跡SI22 (Fig. 17)

位置 調査区中央3工区、標高24.00mに位置する。

規模 北側が未調査区域に広がっており、南側でSI23・24と重複している。なお、炉跡のみの検出で、規模および形状は不明である。

壁 確認できなかった。

床 炉跡周辺のみ検出され、全体的に不明である。炉跡周辺も軟弱である。

炉 地床炉である。北側が未調査区域に広がっているため形状は明瞭ではないが、梢円形を呈するものと推定される。検出された規模は長径83cm、短径33cm、深さ9cmを測る。底面は皿状で、覆土は焼土粒、炭化粒を僅かに含む赤褐色土。炉床は火熱を受け赤変硬化している。

覆土 確認できなかった。

遺物 炉跡内から縄文土器片（加曾利E1・E2式）と土器片錐3点が出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代中期後半（加曾利E2式期）の所産と考えられる。

住居跡SI23 (Fig. 17)

位置 調査区中央3工区、標高24.00mに位置する。

規模 北側と南東側が未調査区域に広がっており、北側でSI22・24と重複している。炉跡とその周囲で検出された柱穴により住居跡と判断されたもので、明瞭な掘り込みは確認できなかった。柱穴の配列規模から東西軸7.85m、南北軸5.52mを測り、梢円形を呈するものと推定される。

壁 確認できなかった。

床 ほぼ平坦である。炉跡周辺はよく踏み固められて堅緻で、さらに西側へ硬化面が広がる。

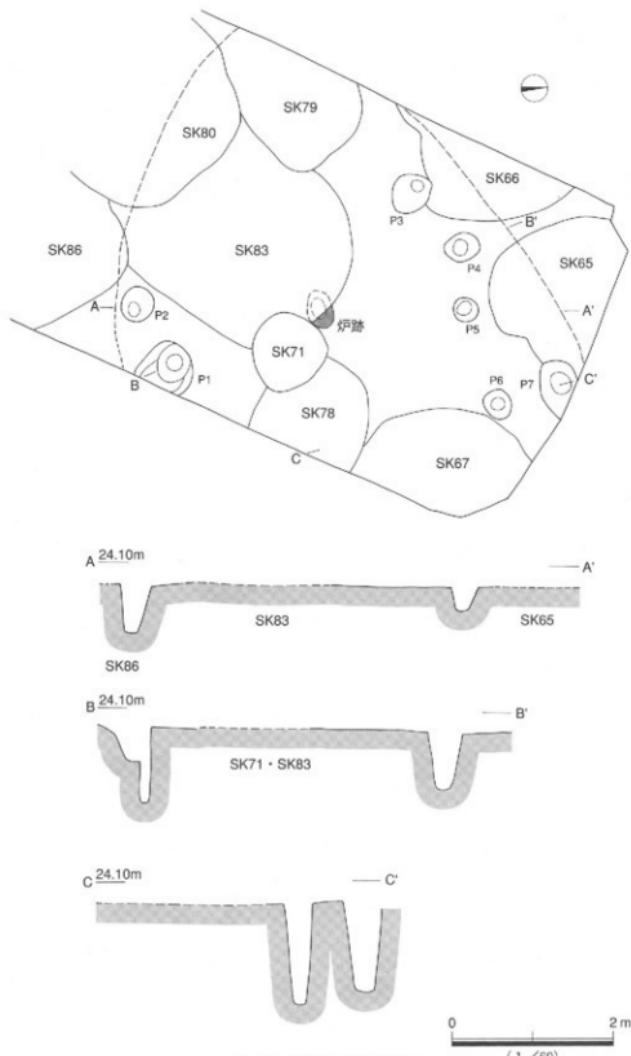


Fig. 16 住居跡SI20実測図

ピット 柱穴は13本検出されたが、柱穴として明瞭ではないものも存在する。

番号	形状	規模 (長径×短径) cm	深さ	番号	形状	規模 (長径×短径) cm	深さ
P1	楕円形	39 × 27	50	P2	楕円形	40 × 35	96
P3	楕円形	64 × 47	105	P4	円形	41 × 41	50
P5	楕円形	45 × 38	36	P6	円形	60 × 58	28

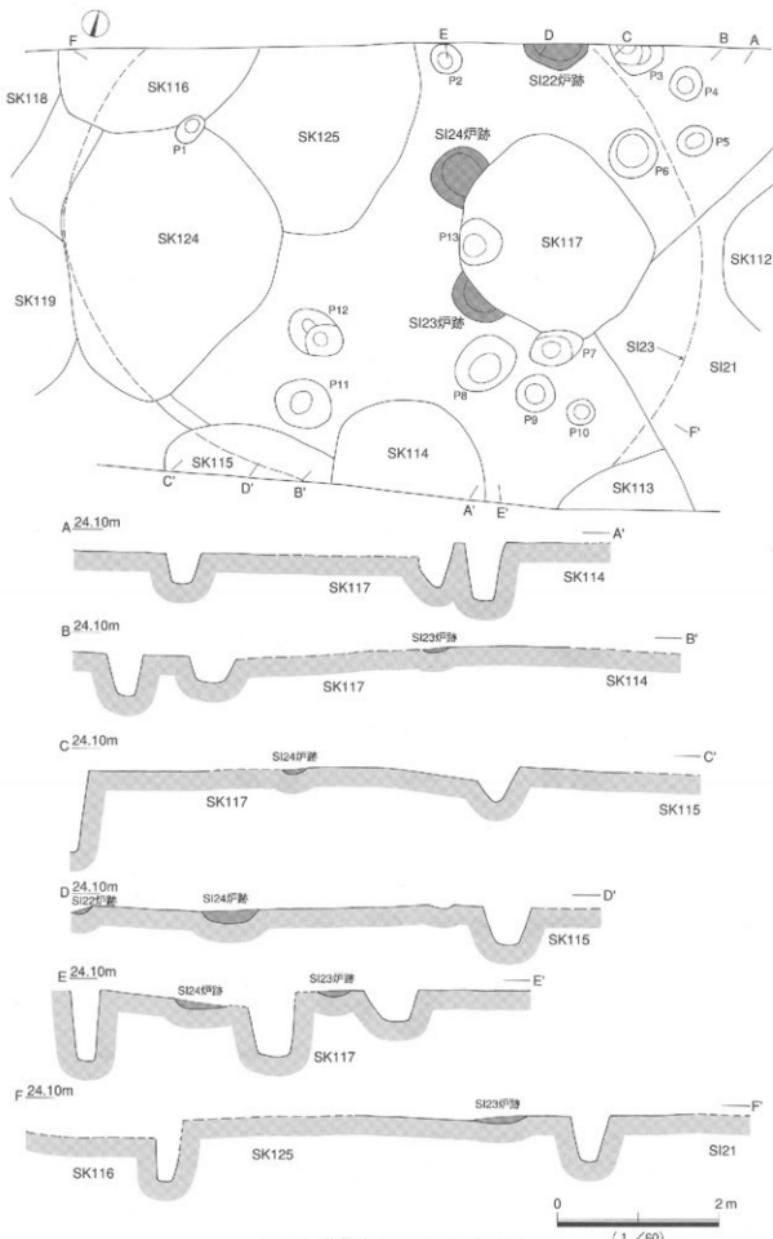


Fig. 17 住居跡SI22・23・24実測図

P7	楕円形	70 × 46	55	P8	楕円形	77 × 62	45
P9	円形	48 × 46	71	P10	円形	34 × 32	50
P11	楕円形	72 × 62	44	P12	楕円形	72 × 53	37
P13	円形	57 × 52	80				

炉 住居中央やや東寄りに位置する爐床炉である。北側がSK117によって切られ、形状は不明であるが、楕円形を呈するものと推定される。検出された規模は長径70cm、短径33cm、深さ15cmを測る。底面は皿状で、覆土は焼土粒、炭化粒を僅かに含む赤褐色土。炉床は火熱を受け赤変硬化している。

覆土 確認できなかった。

遺物 炉跡および柱穴内から縄文土器片（加曾利E1式）および土器片錘7点と石器（打製石斧・磨石・敲石）が出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代中期後半（加曾利E2式期）の所産と考えられる。

住居跡SI24 (Fig. 17)

位置 調査区中央3丁目区、標高24.20～24.25mに位置する。

規模 北側と南東側が未調査区域に広がっており、北側でSI22と南側でSI23と重複しており、炉跡のみ検出されている。したがって、全体の形状および規模は不明である。

壁 確認できなかった。

床 明瞭ではない。

炉 地床炉である。東側でSK117によって切られており、検出された形状は楕円形を呈し、規模は長径70cm、短径52cm、深さ9cmを測る。底面は皿状で、覆土は焼土粒、炭化粒を僅かに含む赤褐色土。炉床は火熱を受け赤変硬化している。

覆土 検出できなかった。

遺物 炉跡内から縄文土器の小片が出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代中期後半（加曾利E式期）の所産と考えられる。

住居跡SI34 (Fig. 18)

位置 調査区南東側4工区、標高23.55～23.91mに位置する。

規模 西側の一部が未調査区域に広がっている。検出された柱穴群の配列により住居跡と判断されたもので、明瞭な掘り込みやか跡は確認できなかった。柱穴の配列規模から東西軸6.11m、南北軸4.69mを測り、楕円形を呈するものと推定される。

壁 確認できなかった。

床 ほぼ平坦である。部分的に踏み固められた硬面が広がるもの、明瞭ではない。

ピット 柱穴は11本検出された。柱穴として明瞭ではないものも含まれている。

番号	形状	規模 (長径×短径) cm	深さ	番号	形状	規模 (長径×短径) cm	深さ
P1	楕円形	64 × 61	70	P2	円形	42 × 39	59
P3	楕円形	35 × 28	84	P4	楕円形	47 × 30	54
P5	楕円形	52 × 43	106	P6	楕円形	42 × 30	127
P7	楕円形	37 × 32	59	P8	円形	39 × 37	89
P9	楕円形	54 × 43	122	P10	楕円形	70 × 51	30
P11	楕円形	43 × 40	12				

炉 検出できなかった。

覆土 確認できなかった。

遺物 柱穴中から僅かな縄文土器片が出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代中期後半（加曾利E式期）の所産と考えられる。

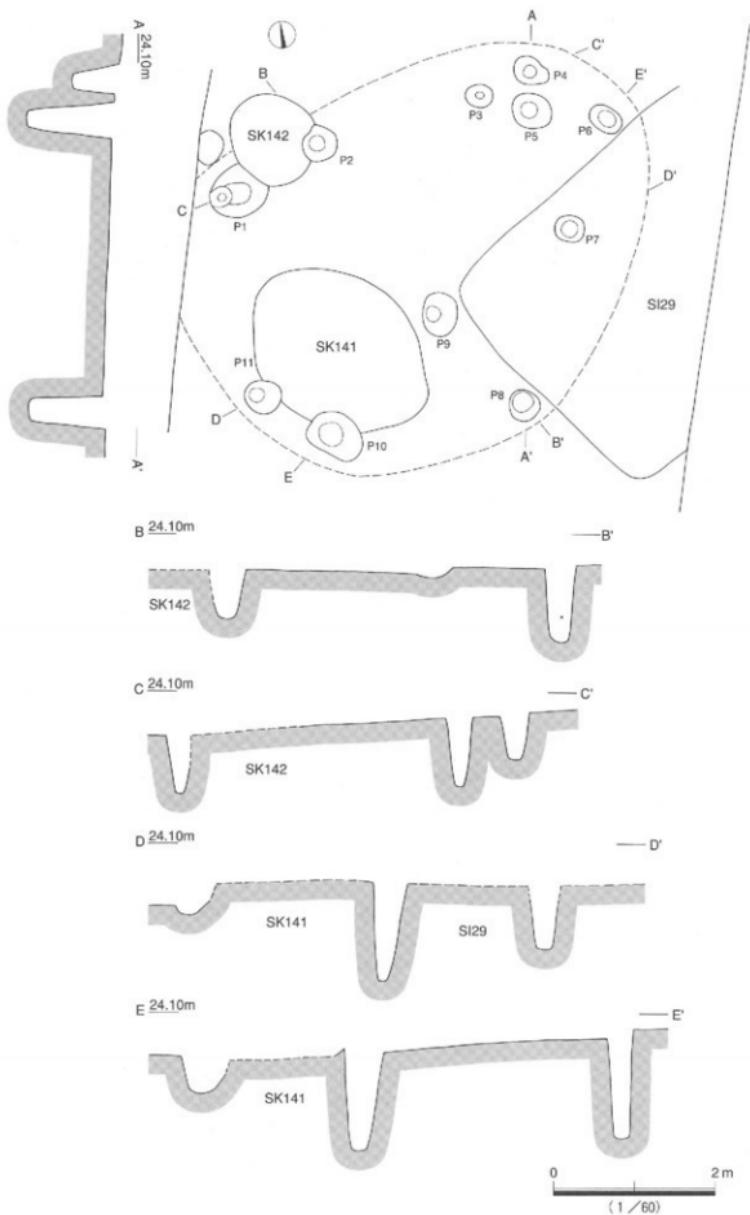


Fig. 18 住居跡SI34実測図

住居跡SI35 (Fig. 19)

位置 調査区南東側4工区、標高23.99~24.16mに位置する。

規模 東側約半分が未調査区域に広がっており、炉跡とその周囲で検出された柱穴により住居跡と判断されたもので、明瞭な掘り込みは確認できなかった。柱穴の配列規模から東西軸1.91m、南北軸4.68mを測り、円形を呈するものと推定される。

壁 確認できなかった。

床 ほぼ平坦である。炉跡周辺はよく踏み固められて堅硬で、さらに住居中央から西側にかけて硬化面が広がる。

ピット 柱穴として3本検出された。

番号	形状	規模 (長径×短径) cm	深さ	番号	形状	規模 (長径×短径) cm	深さ
P1	楕円形	42×29	99	P2	楕円形	45×41	92
P3	楕円形	43×36	66				

炉 住居中央に位置する地床炉である。東側が未調査区域に広がっている。形状は不明であるが、円形を呈するものと推定される。検出された規模は長径92cm、短径37cm、深さ13cmを測る。底面は皿状で、覆土は焼土粒、炭化粒を僅かに含む赤褐色土。炉床は火熱を受け赤変破化している。

覆土 炉跡の覆土以外に2層検出されたが、擾乱が大きく明瞭ではない。

遺物 炉跡および柱穴内から縄文土器片（加曾利E1式）が出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代中期後半（加曾利E1式期）の所産と考えられる。

住居跡SI36 (Fig. 20)

位置 調査区南東側4工区、標高23.30~23.95mに位置する。

規模 周囲が縄文土坑群により切られ、明瞭な掘り込みや炉跡は確認できなかったものの、検出された柱穴群の配列により住居跡と判断した。柱穴の配列規模から東西軸5.20m、南北軸5.61mを測り、円形もしくは楕円形を呈するものと推定される。

壁 確認できなかった。

床 住居中央は部分的によく踏み固められて硬化面が広がるもの、明瞭ではない。

ピット 柱穴は14本検出された。中には柱穴として明瞭ではないものも含まれている。

番号	形状	規模 (長径×短径) cm	深さ	番号	形状	規模 (長径×短径) cm	深さ
P1	楕円形	55×47	61	P2	円形	50×48	50
P3	楕円形	43×38	70	P4	楕円形	66×5	72
P5	楕円形	72×55	108	P6	楕円形	47×34	65
P7	楕円形	75×55	28	P8	楕円形	87×59	40
P9	円形	82×82	65	P10	楕円形	80×67	66
P11	楕円形	57×31	44	P12	楕円形	56×37	87
P13	円形	33×31	54	P14	楕円形	43×21	36

覆土 明瞭ではない。

遺物 遺物は復元可能な深鉢土器（加曾利E1式期）(Fig.33-1)が床面上より出土し、また炉跡内からも縄文土器片および土器片2点が出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代中期後半（加曾利E1式期）の所産と考えられる。

住居跡SI37 (Fig. 21)

位置 調査区北東側5工区、標高23.72~24.12mに位置する。

規模 南側の一部が古墳時代のSI31により切られている。炉跡とその周囲で検出された柱穴により住居跡と判断されたもので、明瞭な掘り込みは確認できなかった。柱穴の配列規模から東西軸5.42m、南北軸4.55mを測り、

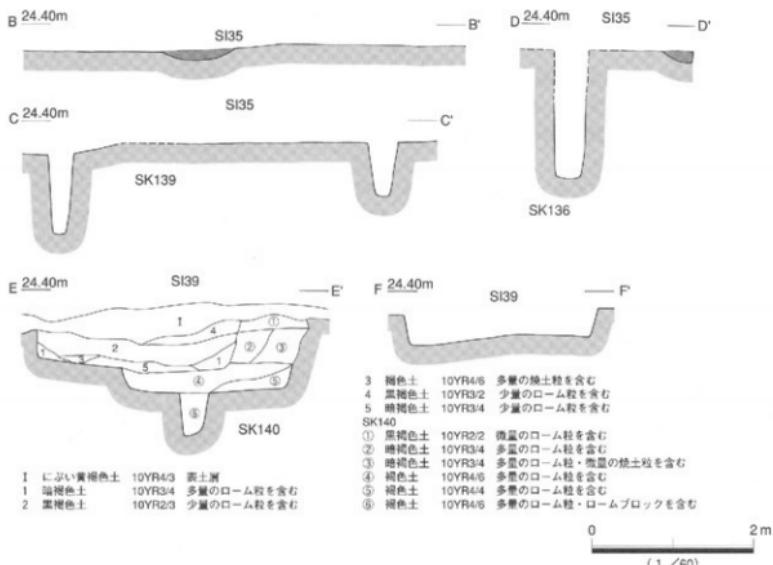
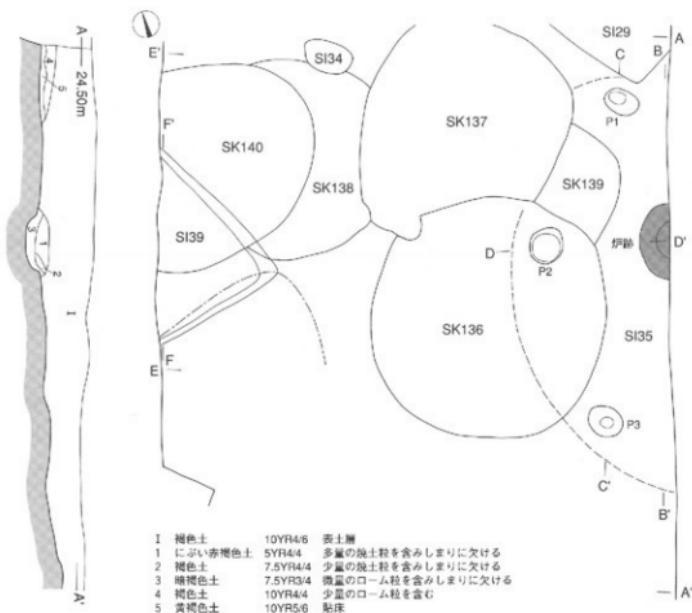


Fig. 19 住居跡SI35・39実測図

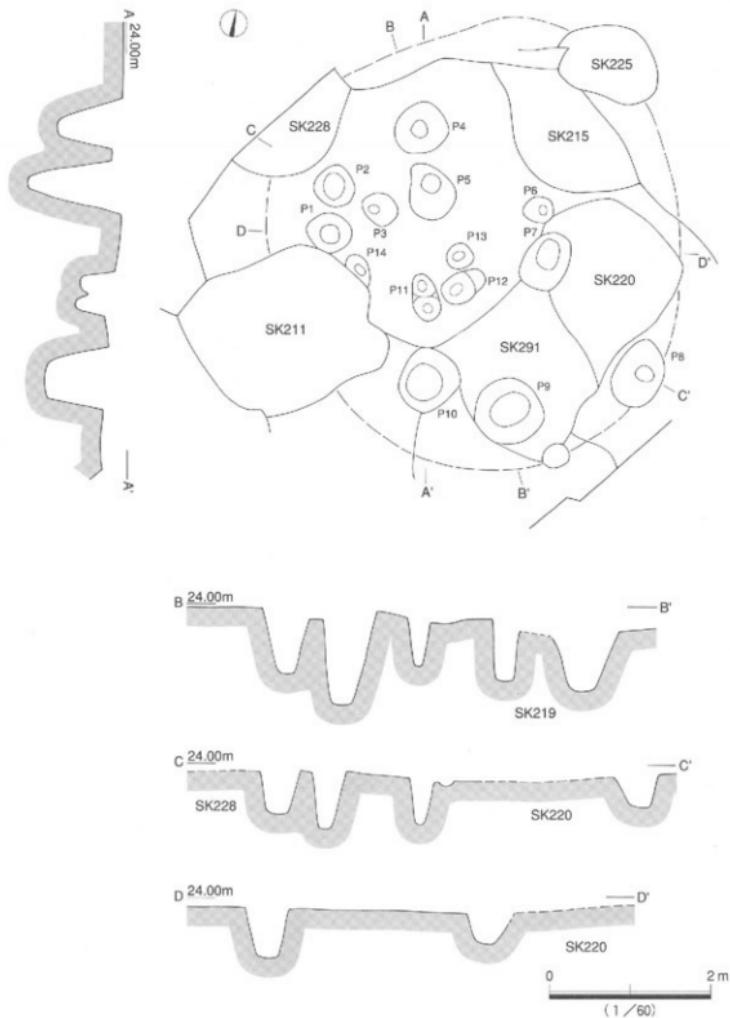


Fig. 20 住居跡SI36実測図

格円形を呈するものと推定される。

壁 確認できなかった。

床 ほぼ平坦である。炉跡周辺はよく踏み固められて堅緻で、さらに南側へ硬化面が広がる。

ピット 柱穴は6本検出された。南側柱穴は古墳時代の住居跡によって切られ不明である。

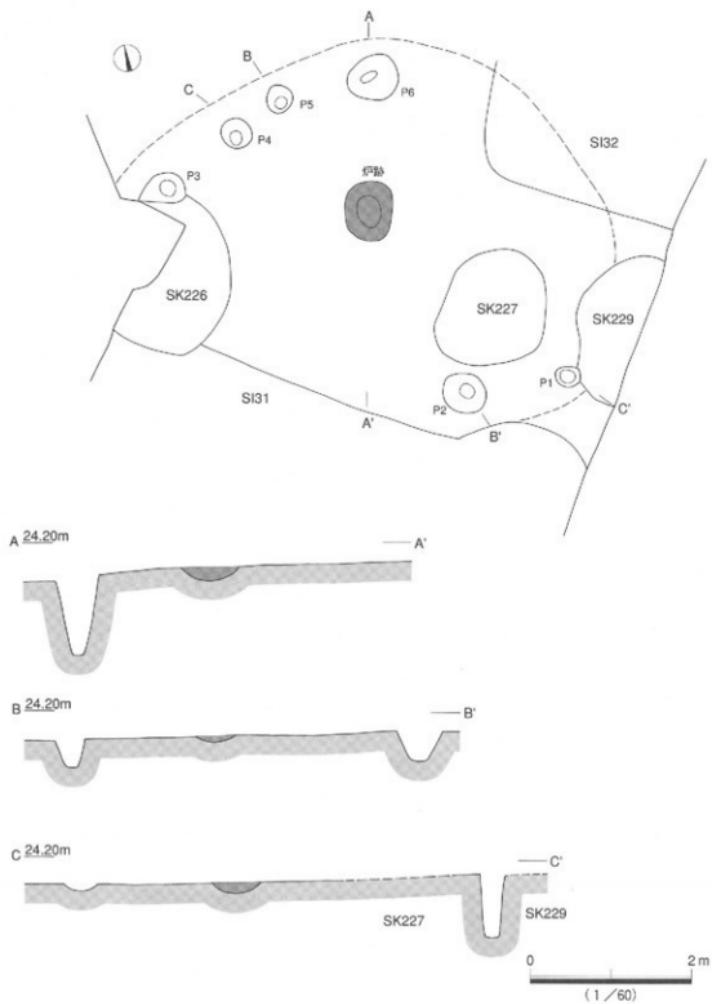


Fig. 21 住居跡SI37実測図

番号	形状	規模 (長径×短径) cm	深さ	番号	形状	規模 (長径×短径) cm	深さ
P1	楕円形	32 × 26	76	P2	楕円形	53 × 48	36
P3	楕円形	47 × 37	45	P4	円形	39 × 36	47
P5	円形	34 × 32	33	P6	楕円形	64 × 55	95

炉 住居中央北寄りに位置する地床炉である。楕円形を呈し、規模は長径74cm、短径58cm、深さ17cmを測る。

底面は畳状で、覆土は焼土粒、炭化粒を僅かに含む赤褐色土。炉床は火熱を受け赤変硬化している。

覆土 明瞭ではない。

遺物 炉跡および柱穴内から縄文土器片（加曾利E2式）と土器片鍤1点が出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代中期後半（加曾利E2式期）の所産と考えられる。

住居跡SI38 (Fig. 22)

位置 調査区北東側5工区、標高23.47~23.76mに位置する。

規模 周囲が縄文土坑群により切られ、明瞭な掘り込みや炉跡は確認できなかったものの、検出された柱穴群の配列により住居跡と判断した。柱穴の配列規模から東西軸5.88m、南北軸4.70mを測り、楕円形を呈するものと推定される。

壁 検出できなかった。

床 ほぼ平坦である。住居中央周辺はよく踏み固められて堅緻で、さらにも南側へ硬化面が広がる。

ピット 柱穴は21本検出された。中には柱穴として明瞭ではないものも含まれる。

番号	形状	規模 (長径×短径) cm	深さ	番号	形状	規模 (長径×短径) cm	深さ
P1	円形	28 × 25	14	P2	楕円形	41 × 37	114
P3	楕円形	52 × 40	19	P4	楕円形	41 × 38	37
P5	円形	52 × 50	40	P6	楕円形	49 × 39	37
P7	楕円形	48 × 34	36	P8	楕円形	45 × 38	100
P9	楕円形	59 × 44	85	P10	円形	45 × 41	88
P11	楕円形	47 × 39	85	P12	円形	32 × 30	54
P13	楕円形	60 × 48	89	P14	円形	38 × 36	102
P15	楕円形	50 × 45	119	P16	楕円形	43 × 34	31
P17	楕円形	33 × 27	22	P18	楕円形	75 × 64	21
P19	楕円形	37 × 30	50	P20	楕円形	37 × 30	46
P21	楕円形	36 × 30	103				

炉 検出できなかった。

覆土 検出できなかった。

遺物 柱穴内から縄文土器片（加曾利E1式）と土器片鍤2点、チャート製石鏃1点が出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代中期後半（加曾利E2式期）の所産と考えられる。

住居跡SI39 (Fig. 19)

位置 調査区南東側4工区、標高24.10mに位置する。

規模 西側が本調査区域に広がり、北側でSK140（加曾利E1式期）と重複し、SK140の上面に構築している。掘り込みのみで、痕跡あるいは柱穴等は確認できなかった。検出された掘り込みは東西軸1.19m、南北軸1.58mを測り、方形を呈するものと推定される。

主軸方向 主軸方向はN-20°・Wを示す。

壁 確認面からの深さは35cm。緩傾斜して立ち上がる。

床 ほぼ平坦である。確認面全体的によく踏み固められて堅緻である。

炉 検出できなかった。

覆土 5層からなるレンズ状の自然堆積層である。

遺物 図示していないが、縄文土器（加曾利E式）の小片が僅かに出土している。

所見 縄文土坑であるSK140の上面に構築されている。竪穴住居跡として調査しているが、土坑の可能性も高い。

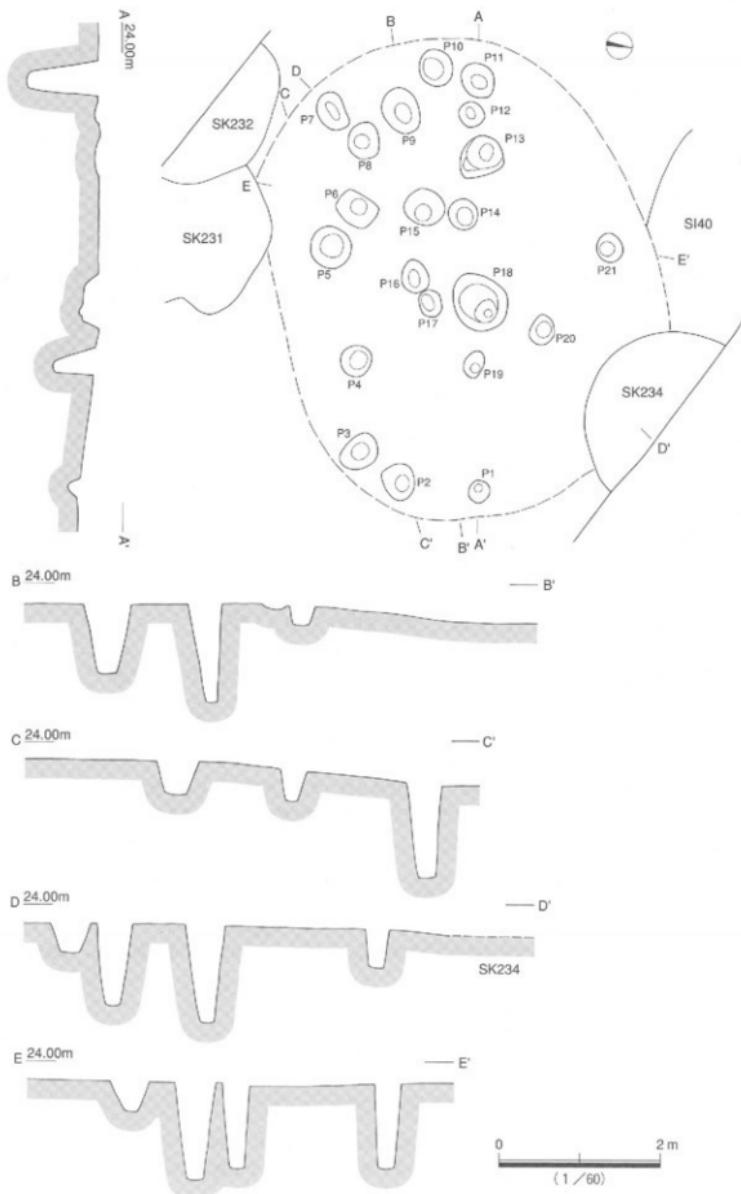


Fig. 22 住居跡SI38実測図

住居跡SI40 (Fig. 23)

位置 調査区北東側5工区、標高23.66~23.92mに位置する。

規模 北側の大半が未調査区域に広がっている。南西側に sond面の立ち上がりが検出され、炉跡は確認できなかったものの、周囲に柱穴が配置し住居跡と判断されたものである。柱穴の配列規模および南西端の検出から東西軸4.93m、南北軸1.83mを測り、楕円形を呈するものと推定される。

壁 確認面からの深さは21cm。緩傾斜して立ち上がる。

床 わずかに南側が低く傾斜するものは平坦である。住居中央周辺はよく踏み固められて堅密で、さらに南側へ硬化面が広がる。

ピット 柱穴は6本検出された。

番号	形状	規模 (長径×短径) cm	深さ	番号	形状	規模 (長径×短径) cm	深さ
P1	円形	21 × 21	33	P2	円形	58 × 52	42
P3	楕円形	62 × 52	57	P4	楕円形	34 × 26	46
P5	楕円形	37 × 32	92	P6	楕円形	37 × 30	45

炉 検出されなかった。

覆土 1層検出された。自然堆積層と推定される。

遺物 覆土中から縄文土器片（加曾利E2式）と土器片錐5点などが出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代中期後半（加曾利E2式期）の所産と考えられる。

住居跡SI41 (Fig. 24・25)

位置 調査区北東側5工区、標高23.72~24.00mに位置する。

規模 北東コーナー付近が未調査区域に延びている。検出された規模は東西軸5.80m、南北軸6.12mを測り、不正円形を呈する。

壁 確認面からの深さは1.5~23.5cm。緩傾斜して立ち上がる。

床 わずかに南側が低く傾斜するものは平坦である。炉跡周辺はよく踏み固められて堅密で、さらに北側へ硬化面が広がる。

ピット 柱穴は22本検出された。

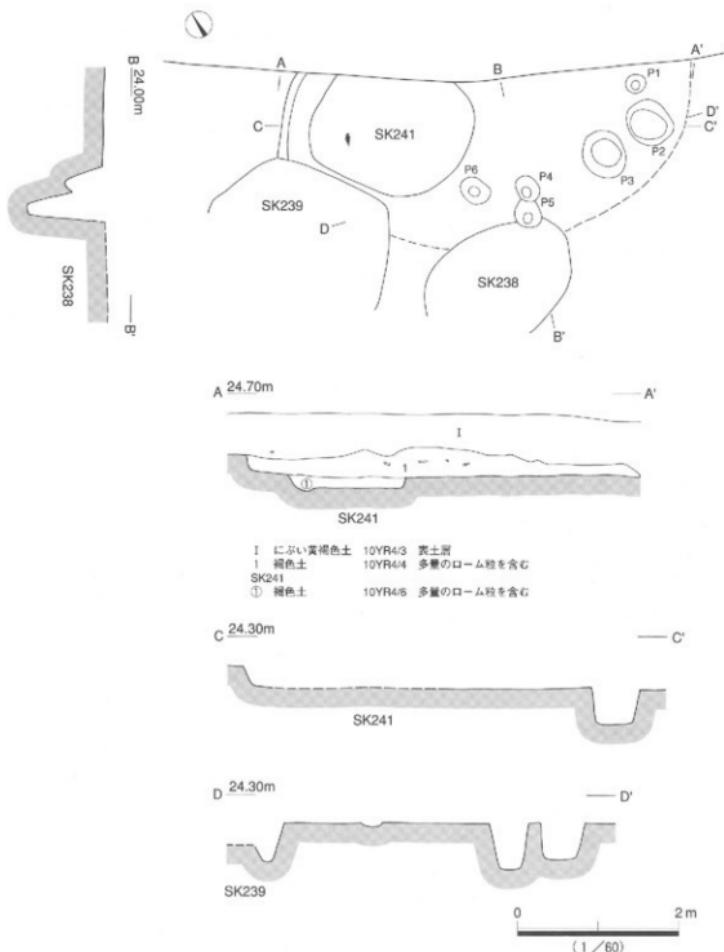
番号	形状	規模 (長径×短径) cm	深さ	番号	形状	規模 (長径×短径) cm	深さ
P1	楕円形	47 × 42	90	P2	円形	41 × 38	96
P3	楕円形	35 × 27	24	P4	楕円形	69 × 54	121
P5	円形	46 × 43	125	P6	円形	36 × 35	73
P7	円形	39 × 36	87	P8	楕円形	44 × 34	91
P9	楕円形	40 × 35	97	P10	円形	23 × 23	67
P11	円形	21 × 17	14	P12	円形	15 × 14	11
P13	楕円形	38 × 33	73	P14	円形	45 × 44	72
P15	円形	15 × 13	32	P16	円形	45 × 45	32
P17	円形	33 × 33	81	P18	円形	27 × 25	38
P19	楕円形	38 × 30	26	P20	楕円形	38 × 30	25
P21	円形	31 × 30	25	P22	円形	31 × 30	48

炉 住居中央やや南寄りに位置する地床炉である。楕円形を呈し、規模は長径83cm、短径43cm、深さ21cmを測る。底面は皿状で、覆土は焼上粒、炭化粒を僅かに含む赤褐色土。炉床は火熱を受け赤変硬化している。

覆土 2層からなり、自然堆積層と推定される。

遺物 覆土中から多量の縄文土器片（加曾利E1式）と土器片錐13点、石器2点（石英製・黒曜石製）が出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代中期後半（加曾利E1式期）の所産と考えられる。



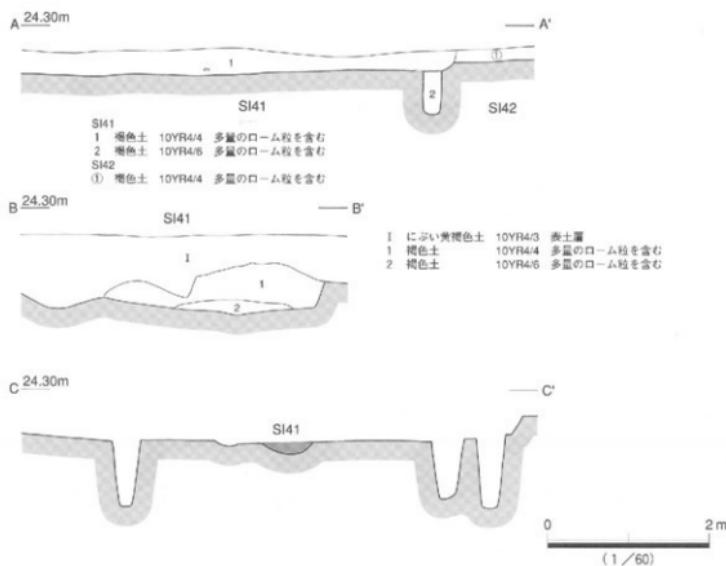
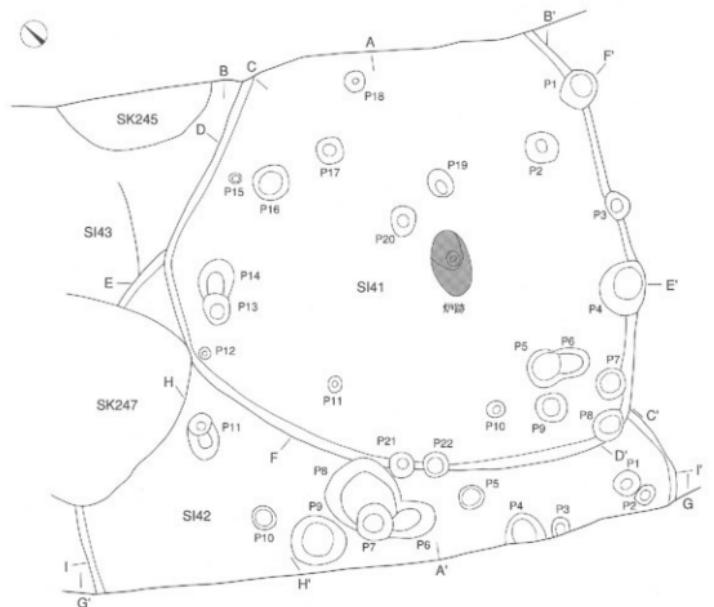


Fig. 24 住居跡SI41・42実測図 (1)

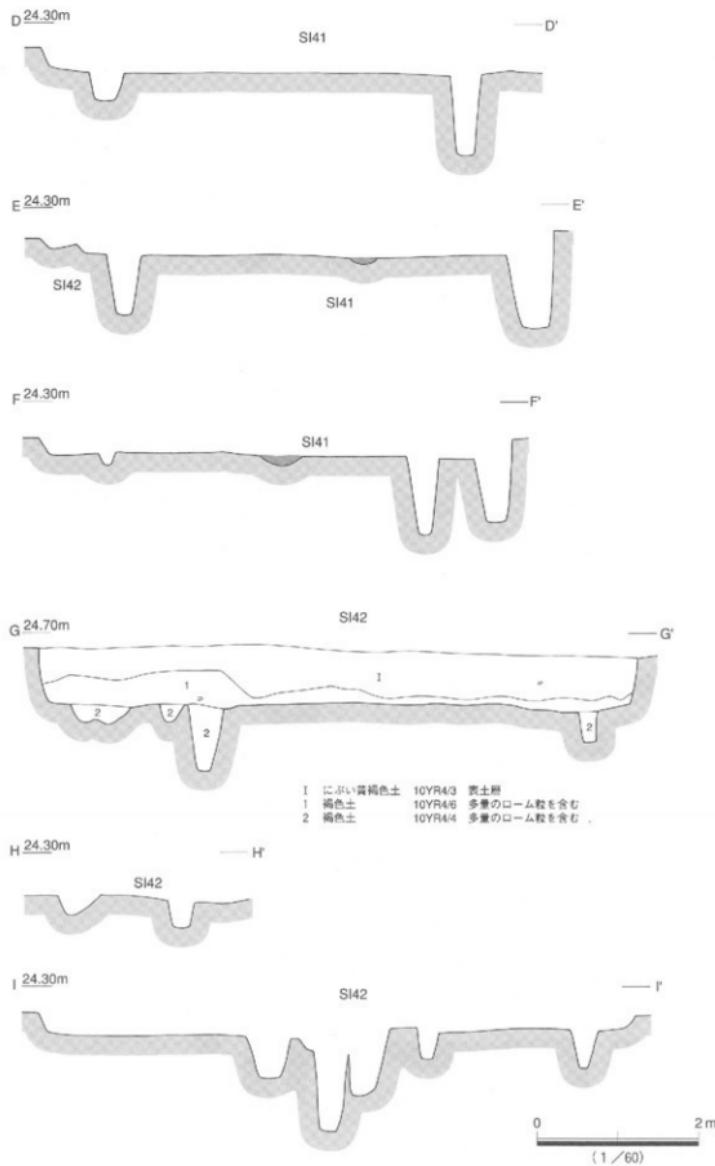


Fig. 25 住居跡SI41・42実測図 (2)

番号	形状	規模(長径×短径) cm	深さ	番号	形状	規模(長径×短径) cm	深さ
P1	円形	34×32	47	P2	楕円形	27×21	21
P3	円形	22×20	19	P4	楕円形	48×37	76
P5	円形	32×30	35	P6	楕円形	52×45	81
P7	円形	45×45	101	P8	円形	87×85	18
P9	楕円形	68×60	49	P10	円形	30×29	31
P11	楕円形	58×37	23				

炉 検出できなかった。

覆土 2層からなる自然堆積層と推定される。

遺物 覆土中から縄文土器片(加曾利E1式)と土器片鍾3点が出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代中期後半(加曾利E1式期)の所産と考えられる。

住居跡SI43 (Fig. 26)

位置 調査区北東側5工区、標高23.49~24.01mに位置する。

規模 北東側と南西側が未調査区域に広がっており、住居中央で10基の縄文土坑が重複している。明瞭な掘り込みは確認できなかったが、周囲で検出された柱穴により住居跡と判断されたもので、柱穴の配列規模から東西軸7.33m、南北軸5.95mを測り、楕円形を呈するものと推定される。

壁 検出できなかった。

床 わずかに北側が低く傾斜するものはほぼ平坦である。北側はよく踏み固められて堅緻である。

ピット 柱穴は22本検出された。柱穴として明瞭ではないものも含まれる。

番号	形状	規模(長径×短径) cm	深さ	番号	形状	規模(長径×短径) cm	深さ
P1	楕円形	36×30	36	P2	円形	40×37	39
P3	円形	35×32	19	P4	楕円形	35×25	20
P5	円形	15×14	38	P6	円形	35×33	49
P7	楕円形	58×51	107	P8	楕円形	42×34	79
P9	円形	30×28	49	P10	円形	32×32	29
P11	楕円形	47×34	70	P12	楕円形	47×37	82
P13	楕円形	46×40	57	P14	楕円形	37×30	80
P15	楕円形	47×36	87	P16	楕円形	67×37	73
P17	円形	45×45	81	P18	円形	36×33	118
P19	円形	28×27	28	P20	楕円形	70×48	72
P21	楕円形	46×33	100	P22	円形	60×60	80

炉 検出できなかった。

覆土 検出できなかった。

遺物 柱穴および床面上より縄文土器片(加曾利E1式)と土器片鍾5点が出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代中期後半(加曾利E1式古期)の所産と考えられる。

住居跡SI44 (Fig. 27)

位置 調査区北東側5工区、標高23.85~23.92mに位置する。

規模 北側と南側が未調査区域に広がっており、住居跡の大半で縄文土坑6基が重複している。なお、僅かな床面と周囲で検出された柱穴により住居跡と判断されたもので、明瞭な掘り込みは確認できなかった。柱穴の配列規模から東西軸5.27m、南北軸5.58mを測り、楕円形を呈するものと推定される。

壁 検出できなかった。

床 わずかに南側が低く傾斜するものはほぼ平坦である。住居中央周辺はよく踏み固められて堅緻である。

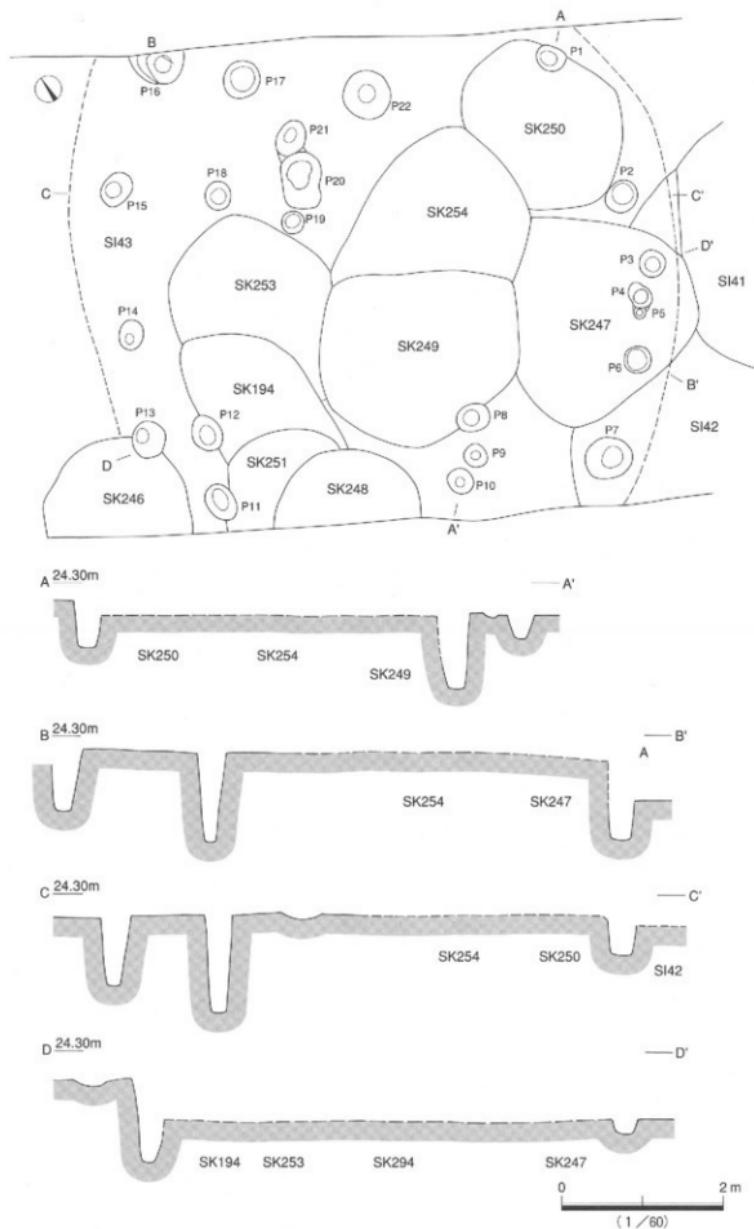


Fig. 26 住居跡SI43実測図

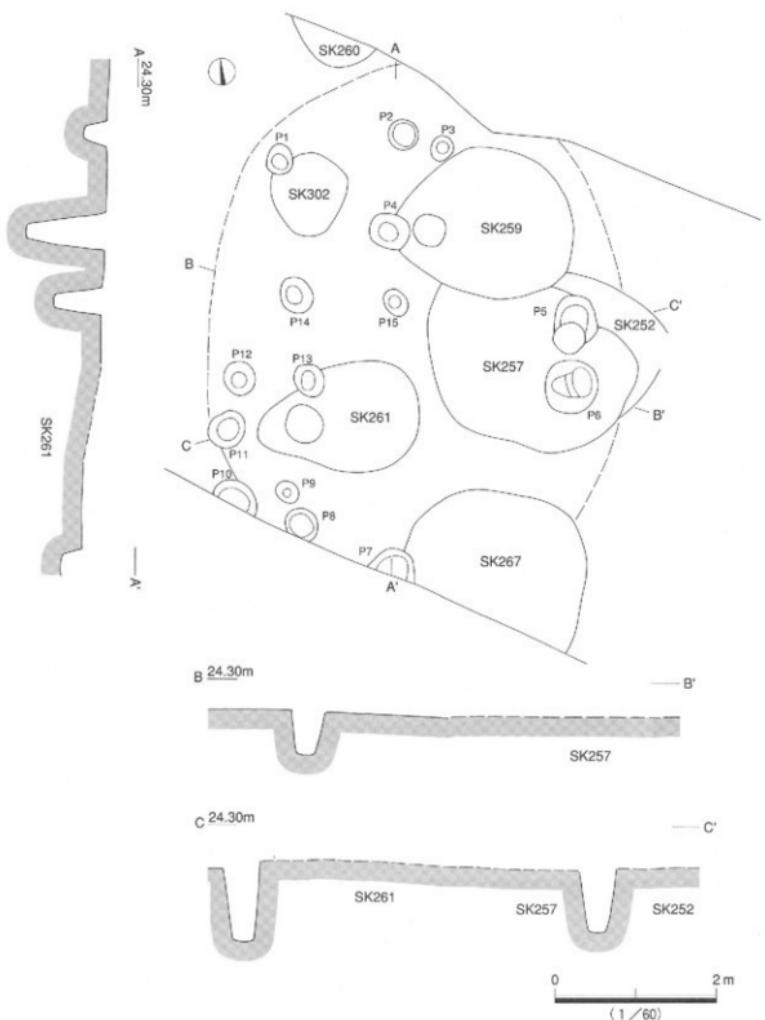


Fig. 27 住居跡SI44実測図

ピット 柱穴は15本検出された。柱穴として明瞭ではないものも含まれる。

番号	形状	規模 (長径×短径) cm	深さ	番号	形状	規模 (長径×短径) cm	深さ
P1	円形	38 × 34	25	P2	円形	38 × 37	28
P3	椭円形	32 × 28	10	P4	椭円形	51 × 43	35
P5	椭円形	72 × 52	58	P6	円形	66 × 64	78
P7	椭円形	50 × 33	25	P8	椭円形	43 × 35	97

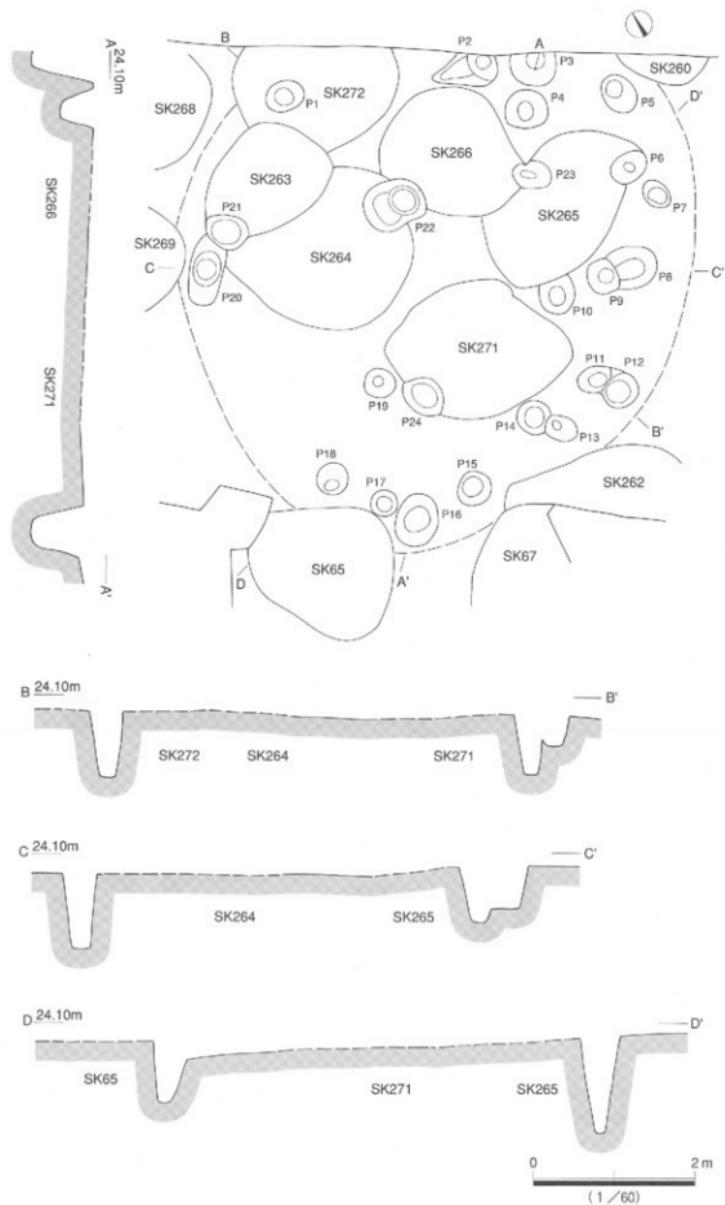


Fig. 28 住居跡SI46実測図

P9	楕円形	32 × 25	23	P10	楕円形	59 × 31	42
P11	楕円形	47 × 41	95	P12	楕円形	42 × 38	74
P13	円形	41 × 37	18	P14	円形	44 × 39	51
P15	楕円形	45 × 29	57				

覆土 検出できなかった。

遺物 柱穴内から縄文土器片（加曾利E1式）と土器片錐1点が出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代中期後半（加曾利E1式期）の所産と考えられる。

住居跡SI46 (Fig. 28)

位置 調査区北東側5工尺、標高23.81～23.99mに位置する。

規模 北西側が未調査区域に広がっており、住居中央を中心にして8基の縄文土坑と重複している。なお、か跡は検出されなかったものの、周間で検出された柱穴により住居跡と判断されたもので、明瞭な掘り込みは確認できなかった。柱穴の配列規模から東西軸6.31m、南北軸6.08mを測り、楕円形もしくは円形を呈するものと推定される。

壁 検出できなかった。

床 ほぼ平坦である。住居中央周辺はよく踏み固められて堅緻である。

ピット 柱穴は24本検出された。柱穴として明瞭ではないものも含まれている。

番号	形状	規模 (長径×短径) cm	深さ	番号	形状	規模 (長径×短径) cm	深さ
P1	円形	41 × 37	61	P2	楕円形	83 × 44	78
P3	楕円形	56 × 39	90	P4	楕円形	55 × 49	47
P5	楕円形	49 × 38	51	P6	楕円形	47 × 35	99
P7	円形	39 × 28	23	P8	円形	53 × 51	52
P9	楕円形	42 × 37	66	P10	楕円形	46 × 41	73
P11	楕円形	44 × 32	65	P12	楕円形	45 × 39	30
P13	楕円形	42 × 32	26	P14	円形	41 × 40	17
P15	円形	41 × 40	15	P16	楕円形	65 × 54	54
P17	円形	33 × 33	27	P18	円形	41 × 40	53
P19	円形	37 × 37	63	P20	楕円形	80 × 42	85
P21	円形	48 × 43	76	P22	楕円形	76 × 55	74
P23	楕円形	48 × 35	57	P24	楕円形	63 × 52	51

覆土 検出できなかった。

遺物 柱穴内から縄文土器片（加曾利E1式）と土器片錐1点が出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代中期後半（加曾利E1式期）の所産と考えられる。

第4節 繩文時代の豎穴住居跡出土遺物

住居跡SI05 (Fig. 29-1~8)

1～8は縄文時代前期前半・黒浜式土器である。いずれも小片で、縄文が施されている。1のみ口縁部破片である。口縁直下から無節R縄文を横位施文している。2～8は胴部破片。2は無節R縄文を横位施文。3は単節LR縄文を横位施文。4は小破片であるが、単軸絡条体の回転施文。5は沈線区画文に刺突文を充填させる。6・7は同一個体と推定される。半截竹管による押し引き有節縄文を横走させる。8は無文地である。いずれも胎土に多量の纖維を含むが、6・7は比較的大粒の石英粒を多く含有している。

住居跡SI07 (Fig. 29-1~9)

1は深鉢のLJ縁部破片。口縁部に沿って1列の角押文が施された阿玉台式。2～6はキャリバー形の深鉢の胴部破片である。2は縄文を地文に貼付隆帯による区画文。4は縄文を地文に沈線による懸垂文を垂下させる。6は単節LR縄文を地文に懸垂文間を磨消す。7は深鉢の底部破片。8は土器片錐で、阿玉台式土器の深鉢の胴部破片を利用している。長輪方向に一对の切れ目を入れている。9は加曾利E式土器の胴部破片を利用した上製円盤である。略円形に成形しているが、打割り成形のみで周縁の研磨は施されていない。

住居跡SI08 (Fig. 29-1~5)

1～4はキャリバー形の深鉢の胴部破片。1・2は同一個体。縄文を地文に2および3本一組の沈線による懸垂文を垂下させる。3も縄文を施した上に沈線による懸垂文を垂下させる。4は単節RL縄文を地文とする。5は深鉢の底部破片。加曾利E1式土器。

住居跡SI11 (Fig. 29-1~3)

1・2は同一個体で炉内埋設土器である。口縁部と底部を打ち欠いた最大径17cmの深鉢土器で、単節LR縄文を施文している。3は縄文を地文に2本一単位の蛇行懸垂文を垂下させる。加曾利E1式土器。

住居跡SI13 (Fig. 29-1~6・Fig. 30-7~19)

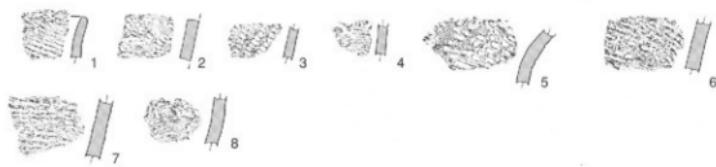
1・2・4・5はキャリバー形の深鉢で、口縁部文様に降帶貼付による渦巻文が施され、3は口縁部に沿って交互刺突文が巡る。6は口縁部が外反し、無文帶となるもので、頸部に交互刺突文による区画文を巡らし、胴部は撫糸Lを地文に2本一単位の沈線による曲線文を施文する。7～10・12は深鉢の胴部破片。縄文を地文に2もしくは3本一組単位の懸垂文を垂下させる。10は沈線間を磨消す。11は連弧文土器で、撫糸Lを地文に磨消消弧文を施す。15～19は土器片錐である。17・19は欠損品であるが、いずれも長方形を呈し、長輪方向に1対の切れ目を入れる。加曾利E2式土器。

住居跡SI14 (Fig. 30-1~6)

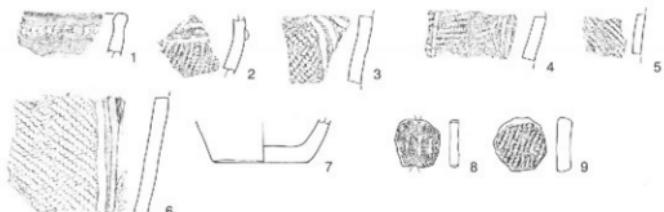
1はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。口縁部に沿って角押文が巡り、角押文による楕円形区画文が施される。阿玉台式。2は連弧文土器で、撫糸Lを地文に3本一組の磨消沈線による連弧文を施文する。3は縄文を地文に2本一組の蛇行懸垂文が垂下する。4～6は深鉢の胴部破片。6の地文は撫糸Lである。2・3は加曾利E2式。

住居跡SI15 (Fig. 30-1~10)

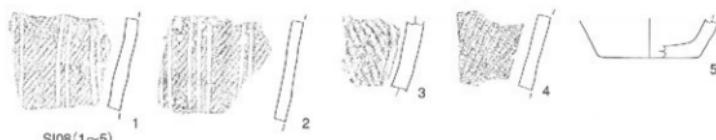
1は口縁部が僅かに外反し、無文帶となる深鉢。2は連弧文土器で、口縁部に沿って交互刺突文が巡り、地文は撫糸Lを施文する。3・4は隆帯区画文を施し、3の区画内は刺突文で充填する。5は隆帯区画文。6は単節RL縄文を地文に磨消懸垂文を垂下させる。7は撫糸Rを地文とする。8は口縁部が肥厚し、短く外反する浅鉢。表裏面とも赤彩の痕跡が認められる。9は深鉢の底部破片。網代痕が残されている。10は土器片錐。深



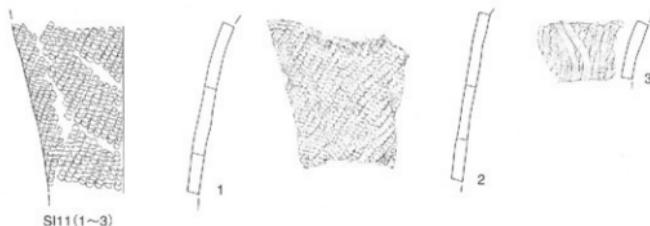
SI05(1~8)



SI07(1~9)



SI08(1~5)



SI11(1~3)

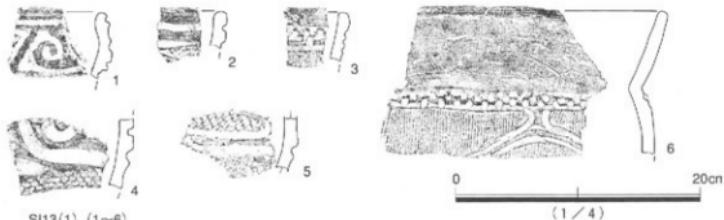


Fig. 29 住居跡SI05・07・08・11・13(1)出土遺物

鉢の頸部破片を利用しており、縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。2～4は加曾利E2式土器と考えられる。

住居跡SI18 (Fig. 30-1～7)

1はキャリバー形深鉢の口縁部破片。縄文を地文に隆帯貼付による渦巻文を施している。2は隆帯区画文内に縦列沈線を充填する。3は縄文を地文に3本一組の磨消済垂文を垂下させる。4～7は深鉢の胴部破片。縄文を地文とする。加曾利E2式土器と考えられる。

住居跡SI20 (Fig. 30-1～7)

1はキャリバー形の深鉢。縄文を地文に沈線が沿う隆帯区画文。2は縄文を地文に沈線による懸垂文を垂下させる。3は条線を地文に刻みが施された隆帯を垂下させる。曾利系土器である。4も条線を地文。5は角押文が施される阿正台式。6は深鉢の底部付近の土器である。7は土器片錠の欠損品である。1～3は加曾利E2式土器と考えられる。

住居跡SI22 (Fig. 31-1～25)

1は深鉢の口縁部破片。山形状の小突起を有し、口縁端が僅かに外反し、無文帯となる。頸部に交互刺突文を区画文に胴部は単節RL縄文を地文とする。2も口縁部破片。沈線による区画文を施す。3・4はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。沈線による楕円形区画文と渦巻文を配する。5は頸部付近の破片で、交互刺突文を区画文に、頸部は撫糸Lを地文に貼付隆帯を垂下させる。6は單口縁の深鉢。口縁部上端には狭小な無文帯を持つ。7も單口縁の深鉢。口唇下部から縱位の条線文を全面に施す。8は深鉢の頸部破片。隆帯区画。9も沈線が沿う隆帯区画。頸部無文帯をなす。10は深鉢の胴部破片。縄文を地文に3本一組の懸垂文を垂下する。11～16も胴部破片。縄文を地文に2もしくは3本一組の沈線間を磨消した磨消済垂文を垂下させる。17・18は縄文を施す。19は撫糸Lを地文とする。20・21は浅鉢で、21の口唇部は肥厚する。23～25は土器片錠。いずれも報長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。1は加曾利E1式。2～5は加曾利E2式土器と考えられる。

住居跡SI23 (Fig. 31-1～19・Fig. 32-20～61)

1～9はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。1は背割り隆帯による楕円形区画文内に撫糸Lを地文とする。3は隆帯貼付による長方形区画文。2・4・5・7・9は沈線が沿う隆帯による区画文と渦巻文を配する。6・8は太沈区画文で、8は口縁部から3本一組の磨消済垂文が垂下する。10は口唇部に沿って交互刺突文を巡らし、単節RL縄文を地文に3本一組の沈線懸垂文が垂下する。11は口縁部上端に刻みを有し、縄文を地文に横位の平行沈線文を施す。12～18は單口縁の深鉢。13・15～18は口唇部下から縄文を施す。12・14は撫糸文で、12は撫糸R、14は撫糸L施文の深鉢。19は胴部破片で、背割り隆帯による渦巻文。地文は複節LRL縄文。20・21は隆帯による区画文。20は磨消済垂文、21は懸垂文を垂下させる。22～24は沈線による区画文。22・24は懸垂文を垂下させる。25は連弧文土器で、2段の円形刺突文を区画文に2本一組の連弧文を施す。地文は単節RL縄文。26は胴部破片。縄文を地文に意匠文の曲線間を磨消す。27～43は懸垂文施文の胴部破片。27は蛇行懸垂文。28・29・33・36～43は縄文を地文に2もしくは3本一組の懸垂文。30～32は磨消済垂文。34・35は撫糸Lを地文に磨消済垂文を垂下させる。50・51は深鉢の底部破片。52～58は土器片錠。今体的に小形である。いずれも縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。59～61は石器である。59は安山岩製の打製石斧で、約半分を欠損している。分頭形で、表裏面とも未加工面を多く残し、刃部のみ副茎剥離を施している。60は砂岩製の磨石の破片。円錐を素材とし、研磨痕のみ観察できる。61は安山岩製の敲石である。両端部に敲打痕が認められる。加曾利E1式土器が主体と考えられる。

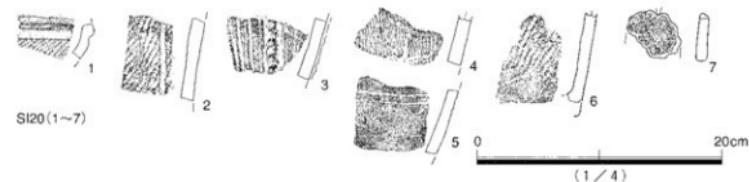
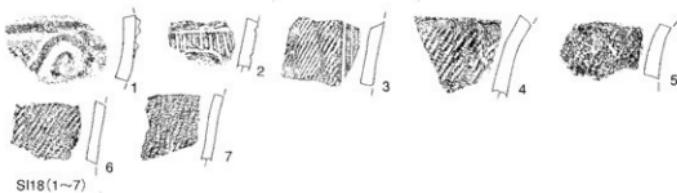
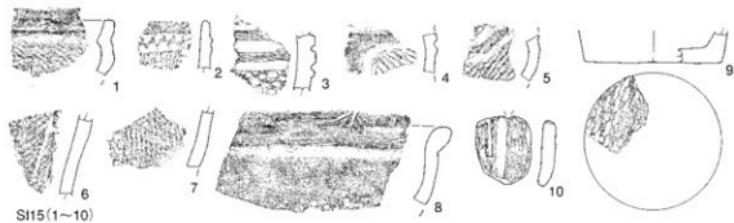
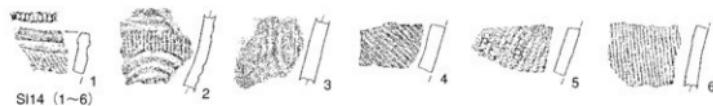
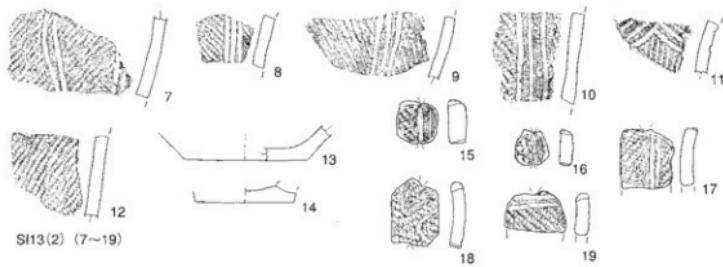


Fig. 30 住居跡SI13(2)・14・15・18・20出土遺物

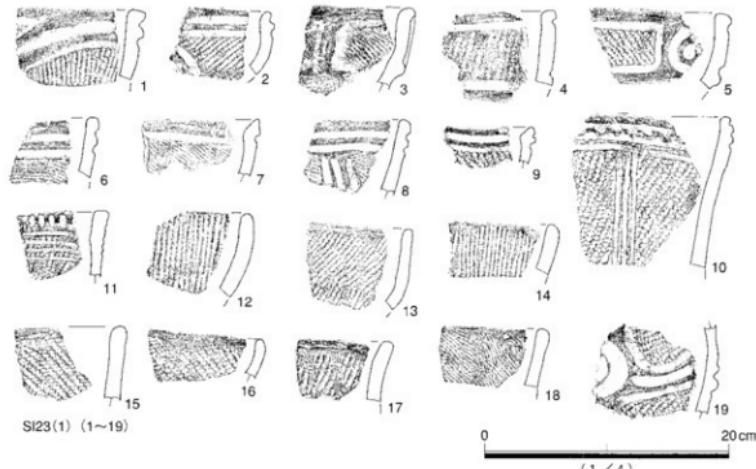
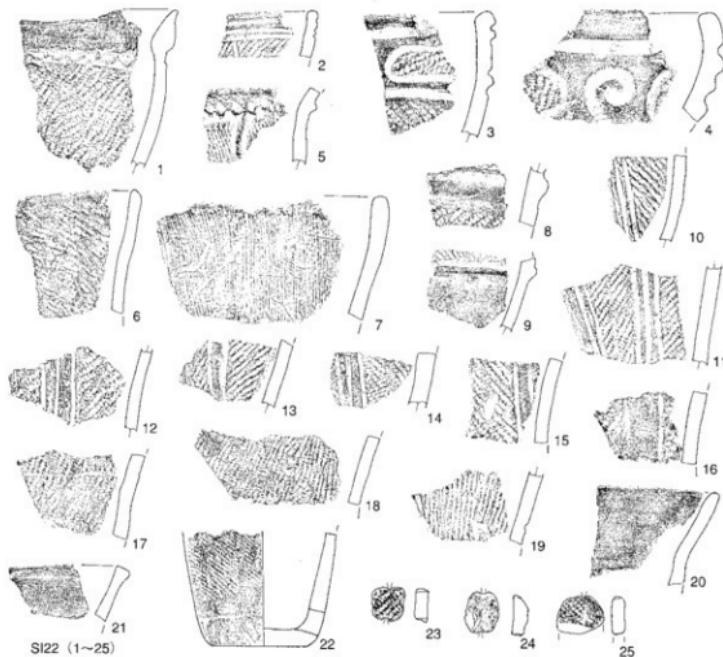


Fig. 31 住居跡SI22・23(1)出土遺物

住居跡SI24 (Fig. 32-1~3)

1は深鉢の胴部破片。無節RL縄文を地文。2は隆帯による蛇行懸垂文が垂下する阿玉台式。3は縄文を施文した深鉢。1・3は加曾利E式土器と考えられる。

住居跡SI34 (Fig. 32-1~2)

1は深鉢の胴部下半の破片。単節RL縄文を地文とする。2は深鉢の底部破片。加曾利E式土器と考えられる。

住居跡SI35 (Fig. 33-1~5)

1はキャリバー形深鉢の口縁部破片。縄文を地文に沈線が沿う隆帯による区画文。2は深鉢の口縁部破片。隆帯区画内に継列沈線を充填する。3~5は深鉢の胴部破片。3は沈線による懸垂文が垂下する。5は貼付隆帯による区画文。加曾利E1式と考えられる。

住居跡SI36 (Fig. 33-1~19)

1は胴下半部を欠損するキャリバー形の深鉢。口唇部は凸帯が巡り、口縁部文様帶は縄文を地文に平行沈線による単位文渦巻文を18個配する。口縁下部の区画文は背割り隆帯によって構成され、この区画文に繋がる4単位の突起上に渦巻文を施文する。地文は口縁胴部とともに単節RL縄文。2は口縁部に平行する交互刺突文に沿って押圧隆帯が区画文として巡る。3は波状口縁の深鉢。縄文を地文に2本一単位の沈線による渦巻文。4は口唇部が肥厚する深鉢。縄文を地文に沈線文が巡る。5は波状口縁の波頭部破片。隆帯による渦巻文。6は縄文を地文に波状となる貼付隆帯。7~11は深鉢の胴部破片。縄文を地文に意匠文が描出される。8~10は弧線文、9は区画文、10は蛇行懸垂文。12は崖錐状隆帯に沿って角押文が施文され、条線を充填する。14は6本一単位の櫛齒状工具による条線文。15・16は浅鉢の口縁部破片。15は口縁部が短く外反し、内面に稜を有する。16は口縁部が肥厚する。17は深鉢の底部破片。18・19は土器片錐である。いずれも縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。出土土器のうち、1~11は加曾利E1式、12は阿玉台式と考えられる。

住居跡SI37 (Fig. 33-1~12)

1・3は縄文が地文の單口縁の深鉢。1は2本一単位の沈線文が剥部に巡る。2は沈線が沿う隆帯が巡る。4は大形深鉢の胴部破片。単節RL縄文を地文に2および3本一組の懸垂文が垂下する。5は縄文を地文に隆帯区画。6・9・10は縄文を地文に沈線による意匠文。7は深鉢の頭部破片。隆帯区画に斜行沈線を充填し、頭部は無文帯となる。8は大形の速弧文土器。縄文を地文に3本一組の速弧文が施文される。11は縦位の条線文。12は土器片錐である。縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。加曾利E2式と考えられる。

住居跡SI38 (Fig. 34-1~10)

1は波状口縁の深鉢。縦位の瘤状突起が付く。2も波状口縁の深鉢。波頂部に沈線による渦巻文が施文される。3~5は磨消懸垂文が垂下する。3は撚糸Rを地文とする。6は撚糸Lを地文とする。8・9は土器片錐である。いずれも縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。10はチャート製の石錐。表裏面とも丁寧な削整剥離が施されている。加曾利E2式と考えられる。

住居跡SI40 (Fig. 34-1~28)

1・2・7・8はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。1の口縁部は背割り隆帯による渦巻文と区画文を施し、胴部は3本一組の懸垂文を垂下させる。地文は無節RL縄文。2は沈線が沿う隆帯による渦巻文と区画文。単節RL縄文地文。7は頭部破片。3本一組の懸垂文が垂下する。8は口縁部上端を欠損する。沈線が沿う隆帯による渦巻文と棒状区画文で、地文は単節RL縄文。3は口唇部が肥厚し、僅かに外反する。沈線による区画文。4は単口縁の深鉢。撚糸Rを地文に、口縁部無文帯は狭小で、沈線による方形区画文を持つ。5は肥厚する口縁

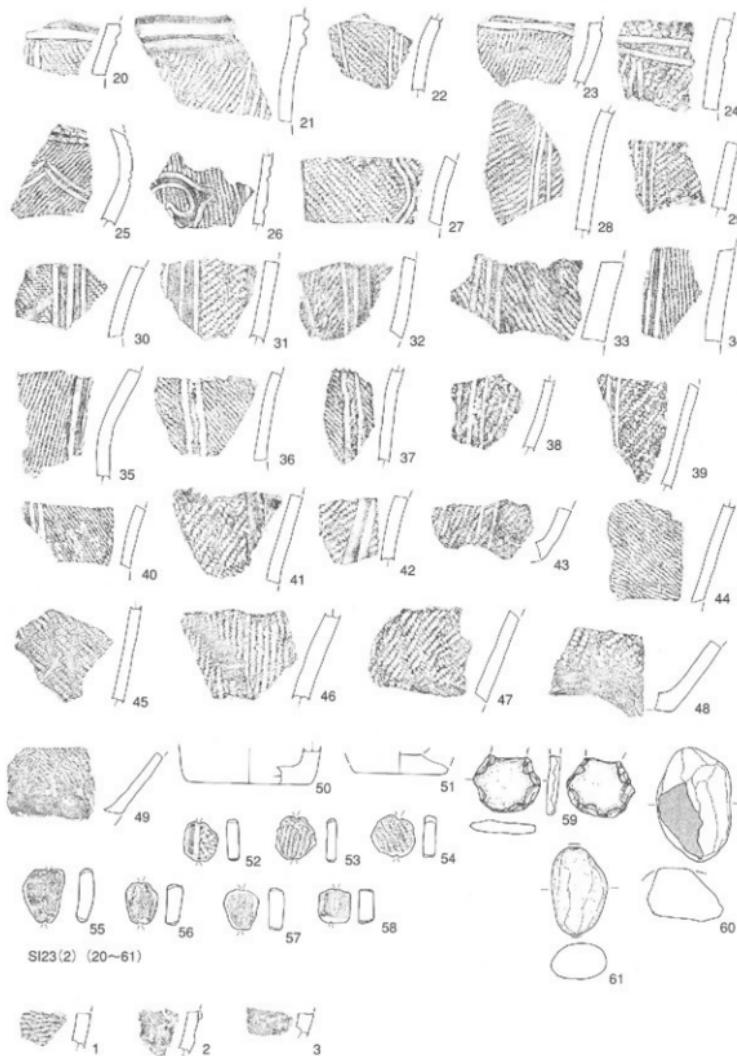
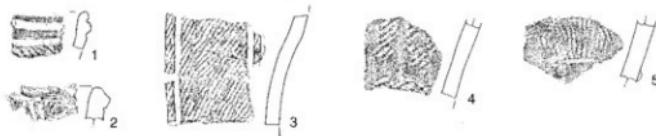
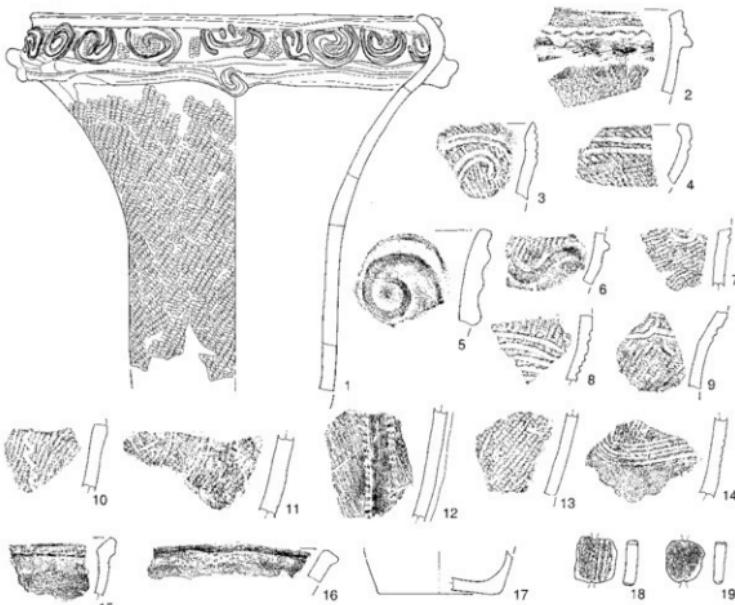


Fig. 32 住居跡SI23(2)・24・34出土遺物



SI35(1~5)



SI36(1~19)

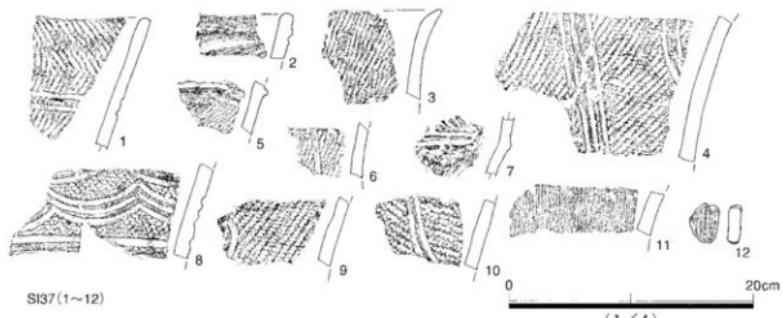


Fig. 33 住居跡SI35・36・37出土遺物

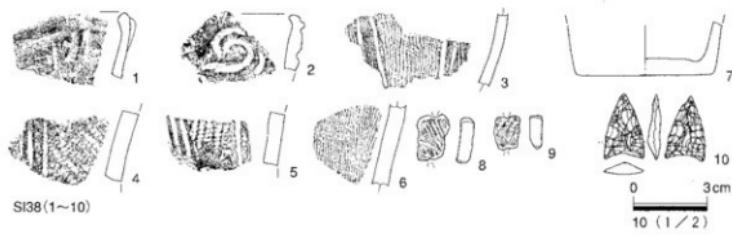


Fig. 34 住居跡SI38・40出土遺物

部無文帯下部は櫛齒状工具による条線を垂下させる。6は単口縁の深鉢。地文に撫糸Rを施文する。9~13・15・16は3本一組の懸垂文を垂下させる。いずれも縄文が地文で、9~12は唇消懸垂文である。14は縄文を地文に押圧隆帯を垂下させる。18は背割り隆帯を垂下させる。17は連弧文土器である。撫糸Rを地文とする。19は沈線区画文に撫糸Rを地文とする。21・22は底部破片。23~27は土器片鍾である。23・25・26・27は縦長破片の長軸方向に、24は短軸方向に1対の切れ目を有する。28は土製円盤である。加曾利E2式と考えられる。

住居跡SI41 (Fig. 35-1~45)

1・3~10・15はキャリバー形の深鉢。1の口縁部文様帶は沈線が沿う隆帯による渦巻文と棹状区画文が配され、頭部は無文帯となり、胴部は単節RL縄文を地文に2本一組の直行懸垂文と蛇行懸垂文を垂下させる。2は連弧文土器で、単節RL縄文を地文に平行沈線による連弧文と懸垂文を垂下させる。3・4・6は背割り隆帯、7は貼付隆帯による区画文。5は隆帯区画内に斜行沈線を充填する。10は波状口縁で、波頂部に渦巻文を施文する。11は口縁部無文帯をもち、胴部は縦位の条線を施文する。12・13は単口縁の深鉢。12は口縁部を無文帯とし、13は羽状縄文を施す。14は口唇部が肥厚する単口縁の深鉢。縄文を地文に沈線による蛇行懸垂を垂下させる。16~21は深鉢の頸部破片。隆帯による区画文に、17は蛇行懸垂文が重下する。22は縄文を地文に沈線による意匠文を施す。23~28は沈線による懸垂文を垂下させる。いずれも縄文が地文で、24・26~28は唇消懸垂文を垂下させる。30は口縁部が内傾する浅鉢。表裏面とも赤彩が施されている。31~43は土器片鍾である。いずれも縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。44・45は石礫である。44は石英製で、完存品。側縁部は丁寧な調整刻離。45は黒曜石製で、表裏面とも丁寧な調整が施されている。加曾利E1式と考えられる。

住居跡SI42 (Fig. 36-1~26)

1~6・8はキャリバー形深鉢。1は沈線が沿う隆帯による渦巻文と棹状区画文。2も貼付隆帯による区画文。3~5は背割り隆帯による棹状区画文。6は隆帯に沿って刺突文が施文され、縦列沈線を充填する。7・10は同一個体。口唇部が内削状を呈し、内湾気味に立ち上がる。口縁部は無文帯となり、頭部は隆帯により区画される。9も口縁部は無文帯となる。11~15は沈線による懸垂文が垂下する。11は蛇行懸垂文。12~15は2もしくは3本一組の懸垂文が垂下する。21は縄文を地文を縦位状に磨消している。23は口唇部が肥厚する浅鉢の口縁部破片。24~26は土器片鍾である。いずれも縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。加曾利E1式と考えられる。

住居跡SI43 (Fig. 36-1~15)

1は波状口縁の深鉢で、刻日のある隆帯が1本に繋がりながら蛇行垂下し、隆帯に囲まれた波頂部には円孔が空たれている。隆帯内側には角押文が施され、口縁部は沈線による重複する区画文内に爪形文と縦位条線を充填する。2は単口縁の深鉢。口縁部上部に沈線による区画文が施される。3は口唇部が尖頭状となり、2列の爪形文が巡る。4は深鉢の頸部破片。波状沈線が横走し、隆帯区画文に沿って2列の角押文が施文される。5は胴部破片。懸垂隆帯に沿って2列の角押文と蛇行懸垂文が垂下する。6は櫛齒状T工具による蛇行条線が垂下する。9は口唇部に凹部がみられる浅鉢。表裏面とも赤彩が認められる。10は口縁部が小さく外反する無文土器。11~15は土器片鍾である。いずれも縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。阿玉台式と考えられる。

住居跡SI44 (Fig. 37-1~10)

1はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。背割り隆帯による区画文で、地文は無節L縄文を施文する。2はキャリバー形の深鉢の胴部破片。背割り隆帯による渦巻文を施す。3は頸部破片。沈線が沿う隆帯による区画文に、頭部は無文帯とする。6も頸部無文帯を有し、3条の沈線による区画文に、2本一組の沈線懸垂文が垂下する。4・5・7・8も胴部破片で、縄文を地文に沈線による懸垂文が垂下する。10は土器片鍾である。縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。加曾利E1式と考えられる。

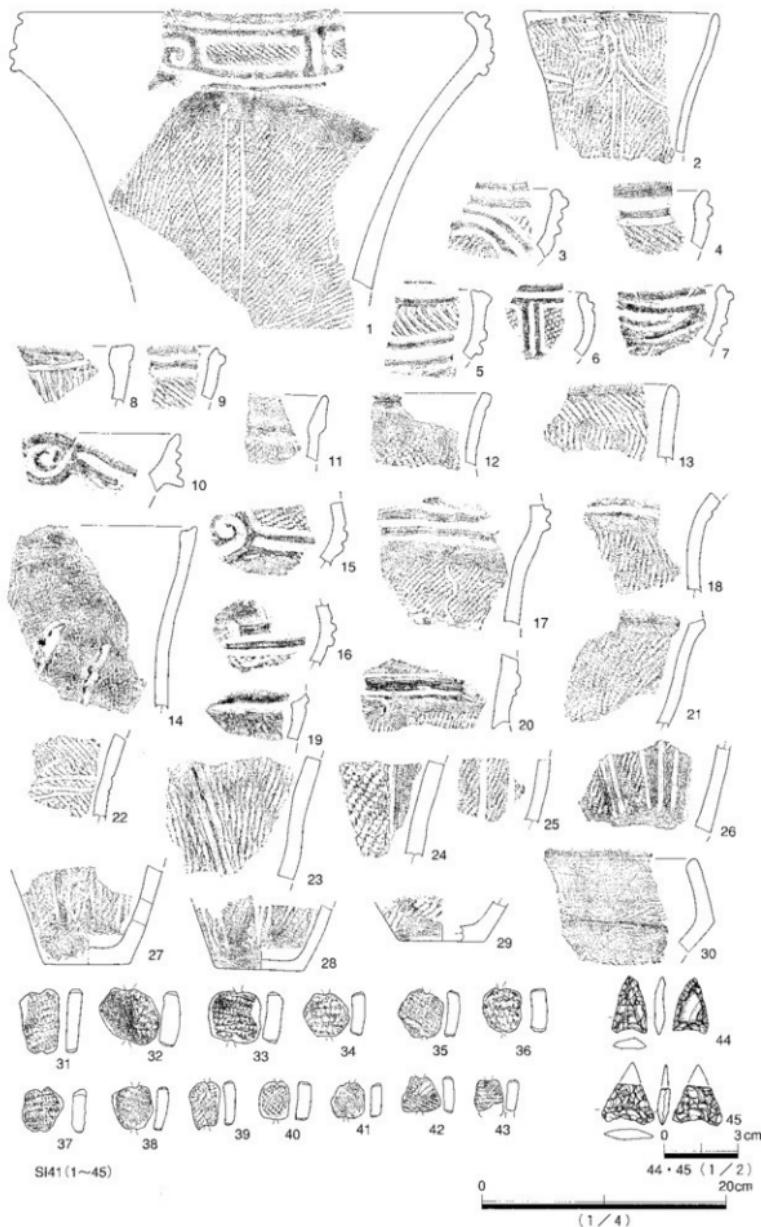
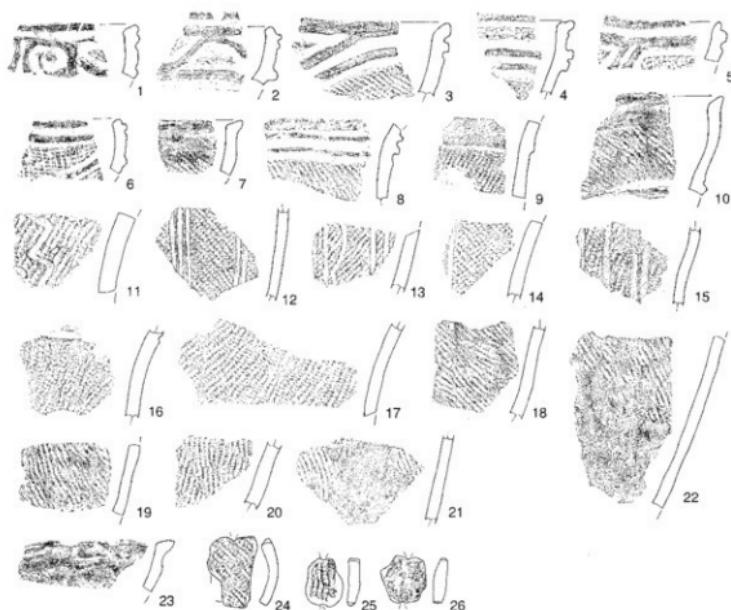


Fig. 35 住居跡SI41出土遺物



SI42(1~26)

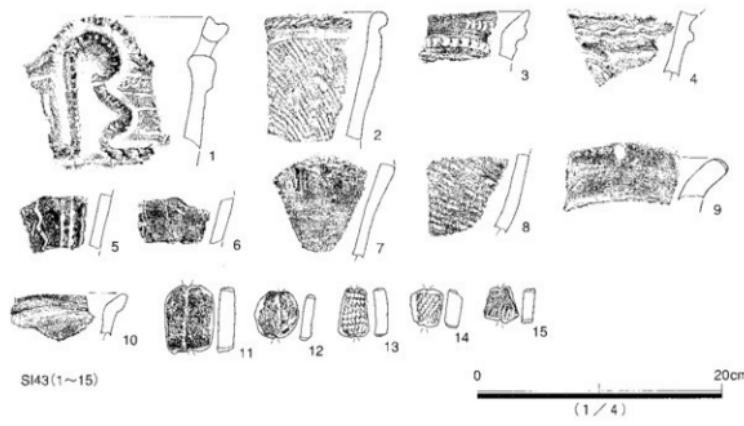
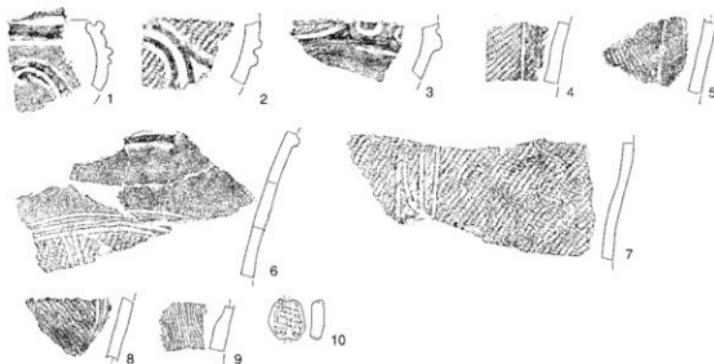


Fig. 36 住居跡SI42・43出土遺物



SI44(1~10)



SI46(1~5)

0 20cm
(1/4)

Fig. 37 住居跡SI44・46出土遺物

住居跡SI46 (Fig. 37-1~5)

1・2は深鉢の脇部破片。単節RL縄文を地文に沈線による懸垂文を垂下させる。2はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。縦位の沈線文。3・4は縄文を施した深鉢。5は土器片錐。縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。加曾利E1式と考えられる。

第5節 古墳時代の竪穴住居跡

古墳時代の竪穴住居跡は全部で21軒確認され、古墳時代前期から後期に及ぶものが検出された。

住居跡SI01 (Fig. 38)

位置 調査区南西側1工区、標高24.37~24.39mに位置する。

規模 北東側の大半が未調査区域に広がっている。検出された規模は東西軸2.57m、南北軸1.09mを測り、方形を呈するものと推定される。

主軸方向 炉跡の位置は確認できないが、炉が北側にあるものと推定すると主軸方向はN-44°-Eを示す。

壁 確認面からの深さは17~21cm。緩傾斜して立ち上がる。

壁溝 確認面の南側コーナーを除き全周している。幅17~21cm、深さ2~2.5cmの断面U字形を呈する。

床 ほぼ平坦である。検出面では顕著な硬化面は確認できなかった。

ピット 南コーナー付近で2本柱穴が検出された。

番号	形状	規模 (長径×短径) cm	深さ	番号	形状	規模 (長径×短径) cm	深さ
P1	円形	25×24	52	P2	円形	27×27	26

貯蔵穴 南コーナーに1ヶ所設置されている(P3)。平面形は隅丸長方形を呈し、長径80cm、短径59cm、深さ23cmを測り、底面は平坦で、壁は緩やかに傾斜して立ち上がる。

炉 検出できなかった。

覆土 5層からなるレンズ状堆積を呈し、自然堆積と推定される。

遺物 覆土中から土師器と土製品である土瓦1点が出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代前期に比定される。

住居跡SI02 (Fig. 39)

位置 調査区南西側1工区、標高24.50~24.59mに位置する。

規模 北東壁側が未調査区域に広がっている。検出された規模は東西軸5.13m、南北軸4.33mを測り、方形を呈するものと推定される。

主軸方向 主軸方向はN-133°-Eを示す。

壁 確認面からの深さは9~16.5cm。緩傾斜して立ち上がる。

壁溝 確認面の南側コーナーを除き全周している。幅11~25cm、深さ4.5~8cmの断面U字形を呈する。

床 わずかに南側が低く傾斜するもののほぼ平坦である。か跡周辺はよく踏み固められて堅緻である。炉跡の北側および西側に焼土の広がりがみられる。北側の床下には土坑らしきものが断面で確認されている。

ピット 南側に柱穴が1本検出されている。

番号	形状	規模 (長径×短径) cm	深さ
P1	円形	24×24	18.5

炉 住居中央や東寄りに地床炉が検出された。楕円形を呈し、規模は長径58cm、短径32cm、深さ2.5cmを測る。

底面は皿状で、覆土は焼土粒、炭化粒を僅かに含む赤褐色土。炉床は火熱を受け赤変硬化している。

覆土 2層からなるレンズ状堆積で、自然堆積と推定される。

遺物 覆土中から土師器が出土している。塊・壺・甕の3点を図示した。

所見 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代前期に比定される。

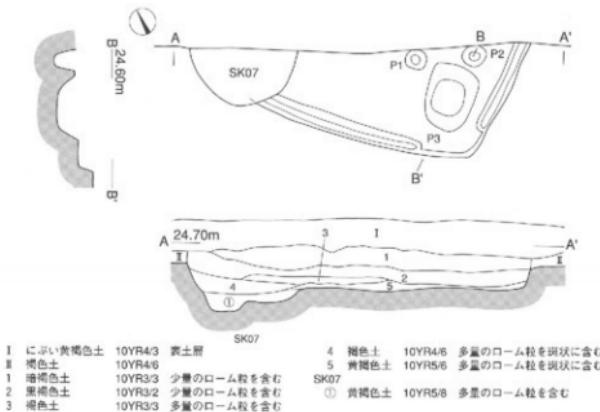


Fig. 38 住居跡SI01実測図

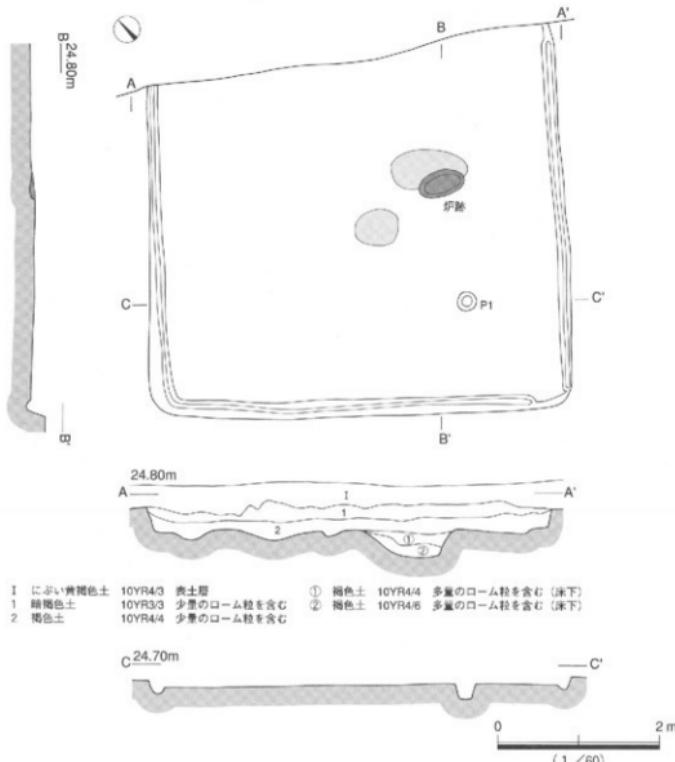


Fig. 39 住居跡SI02実測図

住居跡SI03 (Fig. 40)

位置 調査区南西側1工区、標高24.31mに位置する。

規模 北側が大きく擾乱を受けているが、検出された規模は東西軸4.82m、南北軸4.87mを測り、西壁辺がやや長い台形に近い方形を呈する。

主軸方向 主軸方向はN-47°-Wを示す。

壁 確認面からの深さは10cm。緩傾斜して立ち上がる。

壁溝 南壁および西壁辺では確認できなかったが、北壁・東壁辺に掘り窪められている。幅13~22cm、深さ3.5cmの断面U字形を呈する。

床 わずかに南側が低く傾斜するものは平坦である。炉跡周辺はよく踏み固められて堅緻で、さらに南側へ硬化面が広がる。

ピット 柱穴は検出できなかった。

貯蔵穴 命藏穴 (P1) 1ヶ所のみである。隅丸方形を呈し、長径47cm、短径45cm、深さ20cmを測る。底面は平坦で、壁面は垂直気味に立ち上がる。

炉 住居中央から北西側にかけて瓢箪形で検出された。北側の炉跡を炉跡1とし、長径57cm・短径34cm・深さ8cm、南側を炉跡2とし、長径41cm・短径27cm・深さ4cmを測る。いずれも底面は皿状を呈し、覆土は焼土・炭化粒を含む黒褐色土である。

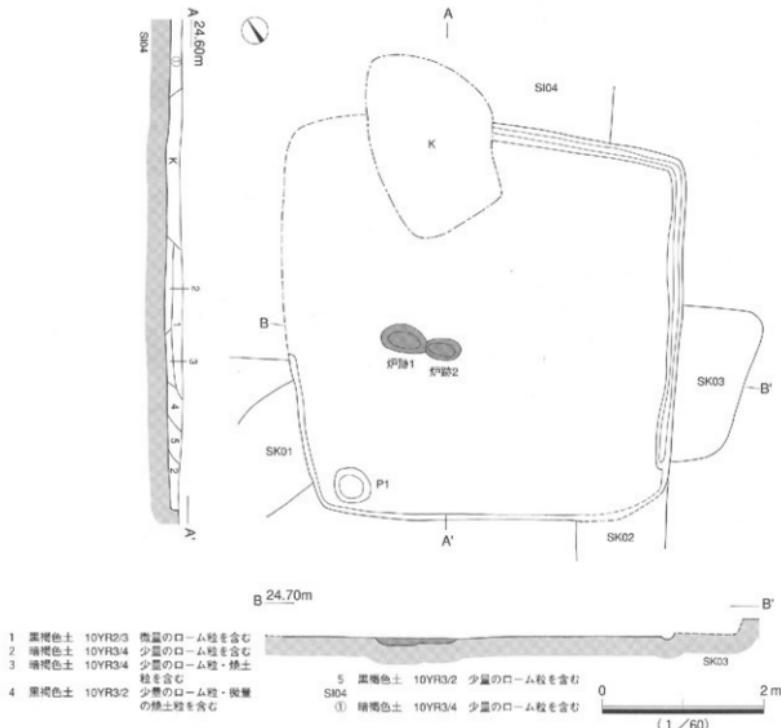
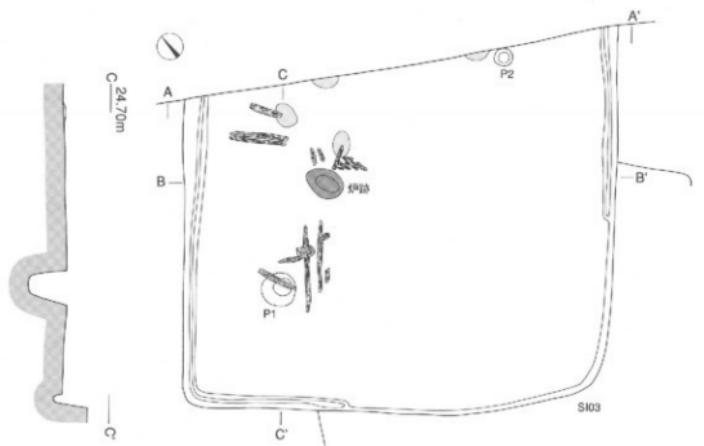


Fig. 40 住居跡SI03実測図



I	にごい赤褐色土	10YR4/3	表土層	5	褐色土	10YR4/6	少量のローム粒・多量の洗土粒・炭化粒を含む
1	黄褐色土	10YR5/6	多量のローム粒を含む	6	暗褐色土	10YR3/4	少量のローム粒を斑状に含む
2	褐色土	10YR4/4	少量のローム粒・洗土粒・微量の炭化粒を含む	7	黒褐色土	10YR2/2	少量のローム粒・多量の炭化粒・少量の粘土粒を含む
3	暗褐色土	10YR3/3	少量のローム粒・微量の洗土粒・炭化粒を含む	8	黄褐色土	10YR5/6	多量のローム粒を含む
4	褐色土	10YR4/4	多量のローム粒・微量の洗土粒・炭化粒を含む	9	褐色土	10YR4/4	少量のローム粒・ロームブロックを含む



Fig. 41 住居跡SI04実測図

覆土 大きく擾乱をうけているものの、5層からなる自然堆積と推定される。

遺物 覆土中から土師器、石製品、土製品が出土している。土師器は高環・壺・壺類。石製品は砾石である。土製品は欠損した土玉1点。

所見 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代前期に比定される。

住居跡SI04 (Fig. 41)

位置 調査区南西側1工区、標高24.32~24.46mに位置する。

規模 北東壁が未調査区域に広がっている。検出された規模は東西軸4.23m、南北軸5.20mを測り、方形を呈するものと推定される。

主軸方向 主軸方向はN-53°-Wを示す。

壁 確認面からの深さは27.5~43cm。緩傾斜して立ち上がる。

壁溝 東壁南側、南壁東側では掘削されていないが、検出された大半の壁際に構築されている。幅13~28cm、深さ5.5~10cmの断面U字形を呈する。

床 東側が低く傾斜するもののはば平坦である。炉跡周辺から南側にかけてはよく踏み固められて堅硬で、硬化面が広がっている。また北側には屋根材と思われる炭化材が集中し、さらに焼土の広がりがみられることから焼失家屋と推定される。

ピット 2本柱穴が検出された。

番号	形状	規模 (長径×短径) cm	深さ	番号	形状	規模 (長径×短径) cm	深さ
P1	円形	42×42	63	P2	円形	22×22	37.5

炉 住居中央東側に設置されている。楕円形を呈し、規模は長径48cm、短径35cm、深さ3cmを測り、壁面は緩く外傾して立ち上がる。底面は皿状で、火熱による赤変硬化している。

覆土 9層からなり、レンズ状を呈する自然堆積層と推定される。

遺物 覆土中から土師器の壇・甕の破片が出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から占墳時代前期に比定される。

住居跡SI06 (Fig.42)

位置 調査区西側2工区、標高23.82~24.10mに位置する。

規模 西側の約半分と東側コーナーが未調査区域に広がっている。検出された規模は東西軸5.72m、南北軸5.77mを測り、方形を呈するものと推定される。

主軸方向 主軸方向はN-55°-Wを示す。

壁 確認面からの深さは8~16.7cm。緩傾斜して立ち上がる。

壁溝 北側壁際に掘削されている。幅12~13cm、深さ6.9~15.7cmの断面U字形を呈する。

床 ほぼ平坦で、軟弱なロームで、炉跡周辺のみ硬化面が広がる。

ピット 柱穴は2本検出された。柱穴は北側の円形ピット(P1)と対峙する南コーナー(P2)に1本あるが、柱穴としては明瞭ではない。

番号	形状	規模 (長径×短径) cm	深さ	番号	形状	規模 (長径×短径) cm	深さ
P1	円形	43×37	78	P2	楕円形	65×50	65

貯蔵穴 東コーナーに長軸115cm、短軸83cm、深さ26cmの長方形を呈する(P3)。底面は平坦で、壁面は外傾して立ち上がる。

炉 半分以上は未調査区域に広がっているが、検出された規模は長径59cm、短径17cm、深さ3cmの楕円形を呈する。焼土粒・炭化粒を含む赤褐色土が堆積している。底面は皿状で、火熱による赤変硬化が顕著である。

覆土 3層確認でき、自然堆積層である。

遺物 覆土中から土師器、石製品が出土している。土師器は高杯・壇・甕・鉢・壺・甕であり、石製品は石製模造品である双孔円板である。

所見 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代中期に比定される。

住居跡SI09 (Fig.43)

位置 調査区西側2工区、標高24.10mに位置する。

規模 床面の一部と柱穴のみ検出され、規模および形狀は不明であるが、床面の広がりから推定すると東西軸0.95m、南北軸2.72mを満る。

主軸方向 炉跡が北側に位置するものと推定すると主軸方向はN-13°-Wを示す。

壁 確認できない。

床 ほぼ平坦で、硬化面は部分的である。

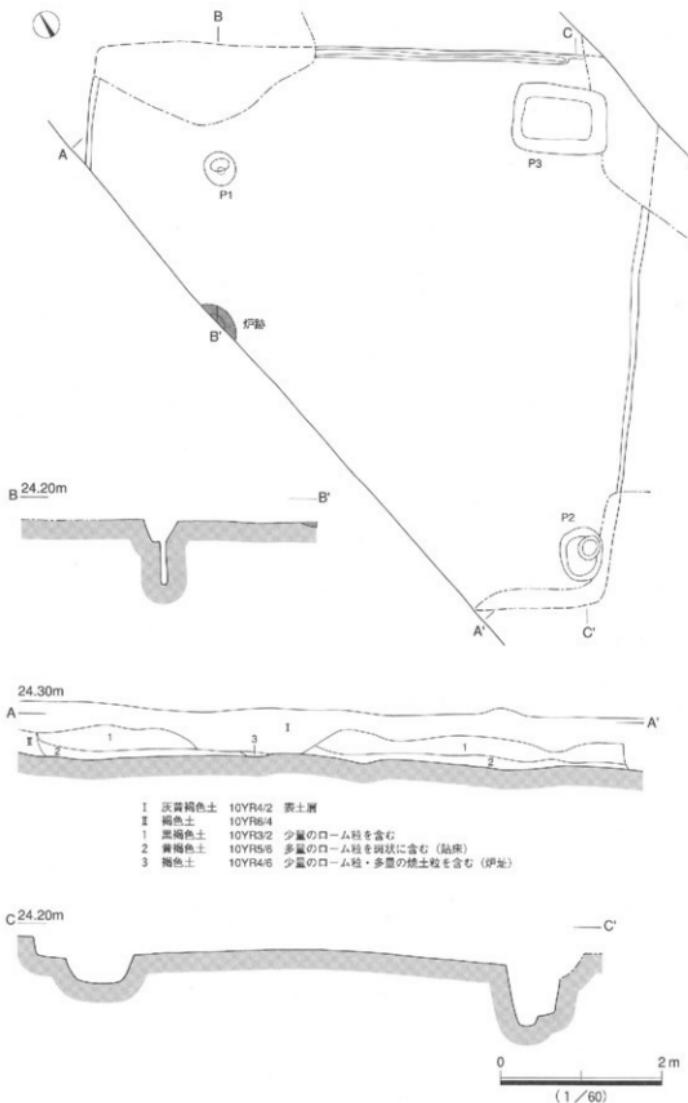


Fig. 42 住居跡SI06実測図

ピット 柱穴として2本検出されたものの、住居内における柱位置は不明である。

番号	形状	規模（長径×短径）cm	深さ	番号	形状	規模（長径×短径）cm	深さ
P1	円形	39×37	8	P2	円形	35×31	29

炉 確認できなかった。

覆土 4層確認できた。

遺物 図示できないが、覆土中から土師器の小破片が出土している。

所見 時期の判断できる遺物の出土ではなく時期は不明であるが、小破片から古墳時代に所属するものと推定できる。

住居跡SI10 (Fig.44)

位置 調査区西側2工区、標高24.15mに位置する。

規模 北東コーナーの約1/4が木調査区域に広がっている。検出された規模は東西軸5.46m、南北軸5.18mを測り、やや南北軸が長い長方形を呈する。

主軸方向 主軸方向はN-56°-Wを示す。

壁 確認面からの深さは48.5~58.7cm。緩傾斜して立ち上がる。

壁溝 確認面では全周している。幅25~44cm、深さ8~15.6cmの断面U字形を呈する。

床 わずかに南側が低く傾斜するものは平坦である。炉跡周辺はよく踏み固められて堅緻で、さらに東側へ硬化面が広がる。また南東側の柱穴に接続して間仕切溝が掘削されている。この間仕切溝の長さは150cm、幅15cm、深さ7cmを測る。

ピット 柱穴として3本が検出されている。

番号	形状	規模（長径×短径）cm	深さ	番号	形状	規模（長径×短径）cm	深さ
P1	円形	44×41	27	P2	楕円形	40×25	30
P3	楕円形	46×30	36				

貯蔵穴 南東コーナー付近に設置されている。P1としたもので、規模は長径87cm、短径66cm、深さ42cmの不正方形を呈する。底面は方形で平坦である。壁面は大きく外傾して立ち上がる。

炉 住居中央北側に位置し、長径103cm、短径64cm、深さ2cmの楕円形。壁面は緩やかに外傾して立ち上がり、底面は火熱による赤変硬化が顕著で、焼土粒・炭化粒を多量に含む赤褐色土が堆積していた。

覆土 8層に分層可能である。レンズ状堆積の自然堆積層と推定される。

遺物 覆土中から土師器の器台・壺・甕が出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代前期に比定される。

住居跡SI12 (Fig.45)

位置 調査区西側2工区、標高24.15~24.20mに位置する。

規模 住居の大半が後世の擾乱を受け、さらに西側が未調査区域に広がっているため確認部分はわずかであったが、検出された規模は東西軸3.45m、南北軸4mを測り、方形を呈するものと推定される。

主軸方向 長軸が東西方向のため、主軸方向はN-25°-Wを示す。

壁 確認面からの深さは36.5~44.3cm。緩傾斜して立ち上がる。

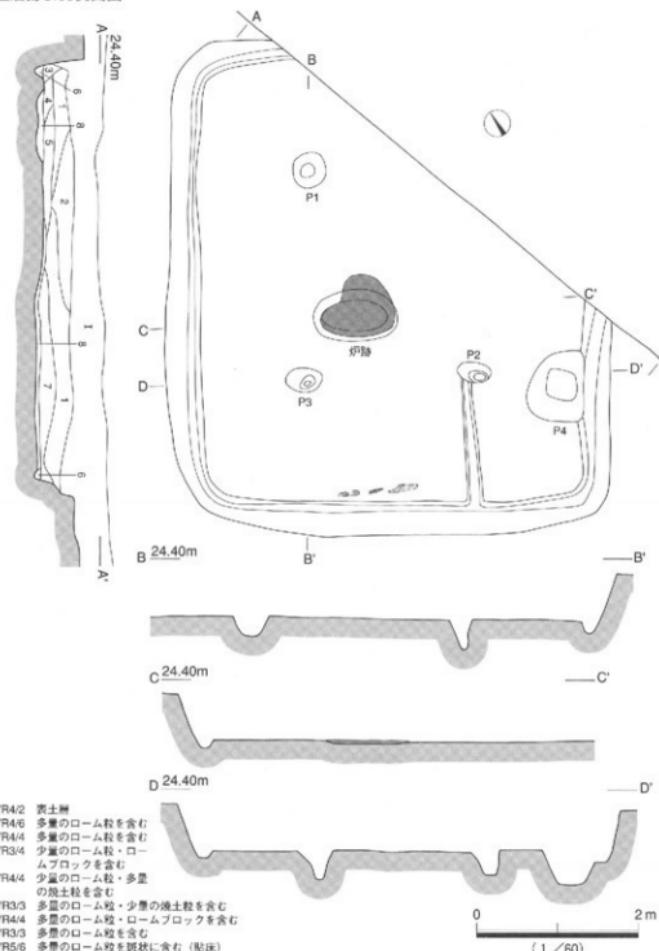
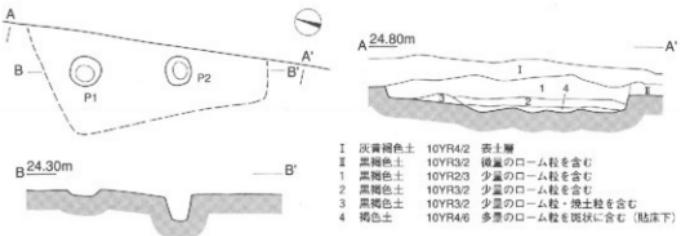
床 東壁付近のみで、ローム面は軟弱である。

炉 確認できなかった。

覆土 3層検出されたが、部分的であり自然堆積かどうか不明である。

遺物 覆土中から上師器の壺と土製品である上玉2点、石製模造品の双孔円板6点とその未製品4点が出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代後期に比定される。なお、滑石製の石製模造品である双孔円板とその未製品が出土していることから工房跡と推定される。



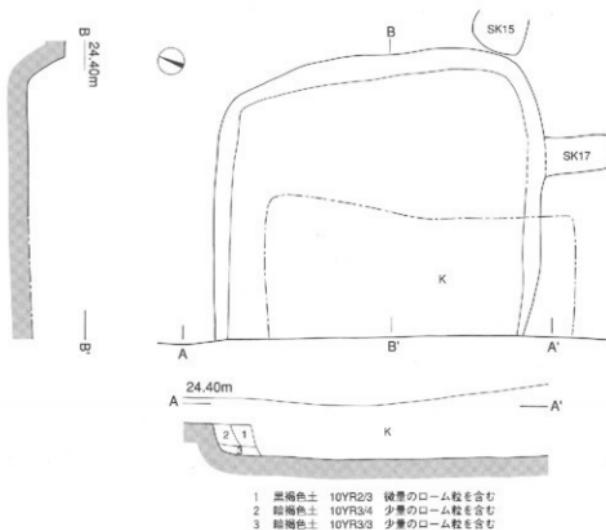


Fig. 45 住居跡SI12実測図

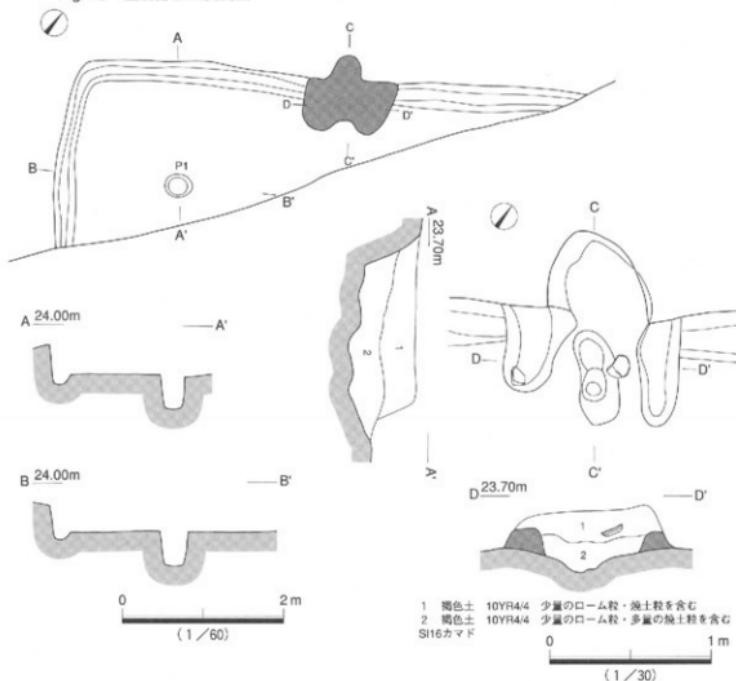


Fig. 46 住居跡SI16・カマド実測図

住居跡SI16 (Fig. 46)

位置 調査区中央3工区、標高23.66~23.74mに位置する。

規模 住居跡北側のカマド付近を除き大半が未調査区域に広がっている。規模や形状は不明であるが、検出された規模は東西軸3.40m、南北軸1.60mを測り、方形を呈するものと推定される。

主軸方向 主軸方向はN-31°-Wを示す。

壁 確認面からの深さは27.1~34.6cm。緩傾斜して立ち上がる。

壁溝 検出された部分は、カマド部分を除き全周している。幅21~32cm、深さ6.5~12.7cmの断面U字形を呈する。

床 ほぼ平坦で、カマド周辺は踏み固められ堅緻である。

ピット 北西側に柱穴1本が検出された。

番号 形状 規模 (長径×短径) cm 深さ

P1 楕円形 34 × 29 39

カマド 北壁中央に設置されている。灰白色粘土を構成材としているものの、粘土のみで構成されるのは袖部下底の基礎部分だけで、黒色土、ロームを混入した粘土を袖部本体としている。残存する袖部幅108cm、長さ65cmを測り、焚口部幅59cmで、ここから燃焼部が掘り込まれ、幅25cm、奥行60cm、深さ6cmの楕円形を呈する。煙道部は壁面を間口60cm、奥行45cmに掘り込み、緩傾斜せながら燃焼部の窪みに続く。

遺物 覆土中から土師器の环・壺・甌のほか、土製品である土玉、土製支脚が出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代後期に比定される。

住居跡SI17 (Fig. 47)

位置 調査区中央3工区、標高23.67~23.79mに位置する。

規模 西側コーナー付近の壁以外検出されず、規模や形状は不明である。しかし、現存するコーナー付近の形状から判断して方形を呈するものと推定され、検出された規模は東西軸5.30m、南北軸2.41mを測る。

主軸方向 北側に炉が設置されているものと推定すると主軸方向はN-41°-Eを示す。

壁 確認面からの深さは7.5cm。緩傾斜して立ち上がる。

床 わざかに検出された床面はほぼ平坦である。確認部分で硬化面が検出された。

ピット 柱穴は楕円土坑内で検出されたP1の1本のみである。

番号 形状 規模 (長径×短径) cm 深さ

P1 楕円形 48 × 38 60

貯蔵穴 西側コーナーに設置されている(P2)。規模は長径72cm、短径71cm、深さ48cmの円形を呈する。底面は平坦で、壁面は外傾して立ち上がる。

炉 確認できなかった。

覆土 5層からなるレンズ状堆積を呈する自然堆積層と推定される。

遺物 覆土中から土師器の高环・壺・甌が出上している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代前期に比定される。

住居跡SI21 (Fig. 48)

位置 調査区中央3工区、標高23.85~24.00mに位置する。

規模 南コーナーが未調査区域に広がっている。検出された規模は東西軸5.40m、南北軸5.29mを測り、方形を呈する。

主軸方向 主軸方向はN-129°-Wを示す。

壁 確認面からの深さは5~26.5cm。緩傾斜して立ち上がる。

壁溝 北西壁邊および南東壁邊は掘削されておらず、北東壁邊や南西壁邊の一部にも壁溝の未掘削部がみられる。検出された壁溝は幅16~25cm、深さ4.5~12.5cmの断面U字形を呈する。

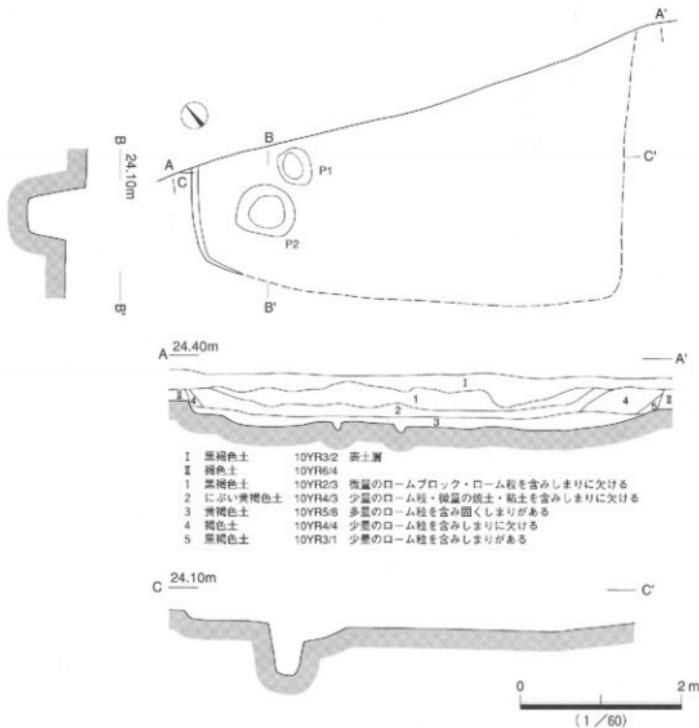


Fig. 47 住居跡SI17実測図

床 わずかに北側が低く傾斜するもののほぼ平坦である。炉跡周辺はよく踏み固められて堅緻で、さらに西側から住居中央にかけて硬化面が広がる。

ピット 住居対角線上に4本の柱穴が検出された。

番号	形状	規模 (長径×短径) cm	深さ	番号	形状	規模 (長径×短径) cm	深さ
P1	楕円形	28 × 19	43	P2	円形	26 × 22	50
P3	楕円形	41 × 28	61	P4	楕円形	35 × 26	41

貯蔵穴 東コーナーに接して設置されている (P5)。長軸89cm、短軸77cm、深さ65cmの不正方形を呈し、底面は平坦で、壁面は外傾して立ち上がる。

炉 南東壁に接して設置されている。規模は長径133cm、短径75cm、深さ19cmを測り、楕円形を呈し、壁面は緩やかに外傾して立ち上がり、底面は火熱による赤変現象が顕著で、焼土粒・炭化粒を多量に含む赤褐色土が堆積していた。

覆土 6層に分層可能であるが、全体的に後世の擾乱が著しく明瞭ではない。自然堆積であろう。

遺物 覆土中から土師器の高杯・壇・甌・土玉、石製模造品が出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代中期に比定される。

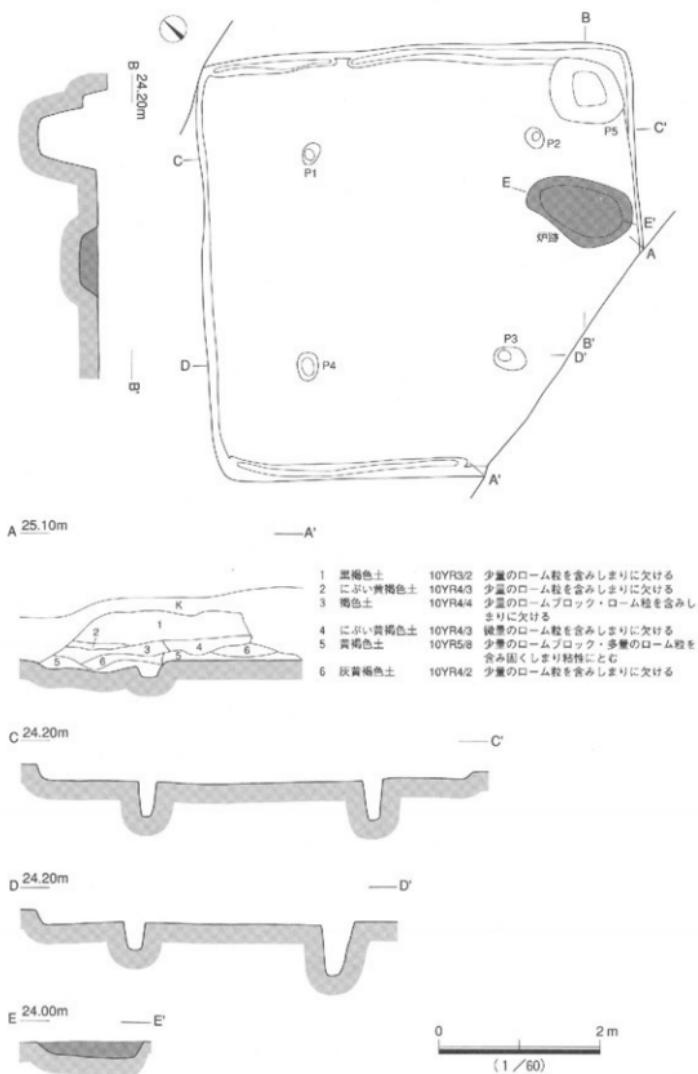


Fig. 48 住居跡SI21実測図

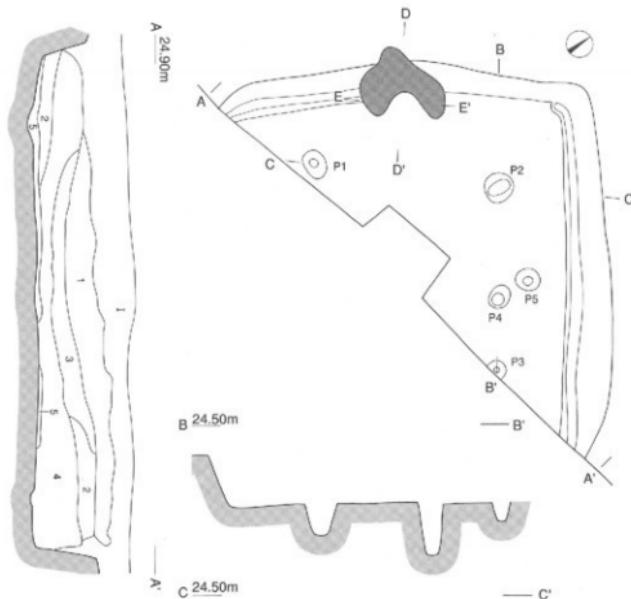
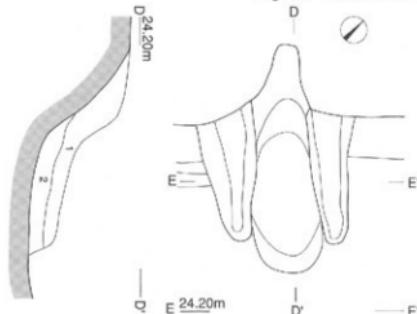


Fig. 49 住居跡SI25実測図

0 2m
(1/60)



1. 黄褐色土 7.5YR3/4 少量のローム粒・砂土粒を含む
2. 黄褐色土 7.5YR3/3 少量のローム粒・砂土粒を含む



Fig. 50 住居跡SI25カマド実測図

住居跡SI25 (Fig. 49・50)

位置 調査区南東側4丁目、標高24.12~24.24mに位置する。

規模 北側半分が未調査区域に広がっている。検出された規模は東西軸3.20m、南北軸3mを測り、方形を呈するものと推定される。

主軸方向 主軸方向はN-61°-Wを示す。

壁 確認面からの深さは42.7~64.3cm。緩傾斜して立ち上がる。

壁溝 検出部のカマド東部分を除き掘削されている。幅30~59cm、深さ2~35cmの断面U字形を呈する。

床 ほぼ平坦である。カマド周辺はよく踏み固められて堅緻で、さらに東側から住居中央にかけて硬化面が広がる。

ピット 住居対角線上の柱穴3本 (P1~P3) に加え、P2とP3間に2本 (P4・P5) が穿たれている。

番号	形状	規模 (長径×短径) cm	深さ	番号	形状	規模 (長径×短径) cm	深さ
----	----	---------------	----	----	----	---------------	----

P1	楕円形	35 × 27	40	P2	楕円形	36 × 36	36
----	-----	---------	----	----	-----	---------	----

P3	円形	24 × 16	23	P4	円形	30 × 24	57
----	----	---------	----	----	----	---------	----

P5	円形	31 × 28	29
----	----	---------	----

カマド 北壁中央に設置されている。灰白色粘土を構築材とし、粘土のみで構成されるのは袖部下底の基礎部分だけで、黒色土、ロームを混入した粘土を袖部本体としている。残存する袖部幅96cm、長さ80cmを測り、焚口部幅46cmで、ここから燃焼部が掘り込まれ、幅38cm、奥行87cm、深さ4cmの楕円形を呈する。煙道部は壁面を開口44cm、奥行47cmに掘り込み、緩傾斜させながら燃焼部の窪みに続く。

覆土 5層からなる自然堆積層である。

遺物 覆土中から土師器の壺・甕や、土製品である土玉が出上している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代後期に比定される。

住居跡SI26 (Fig. 51・52)

位置 調査区南東側4丁目、標高24.13~24.23mに位置する。

規模 南側約1/3が未調査区域に広がっている。検出された規模は東西軸5.23m、南北軸4.57mを測り、方形を呈するものと推定される。

主軸方向 主軸方向はN-33°-Wを示す。

壁 確認面からの深さは40~50cm。緩傾斜して立ち上がる。

床 わざかに北側が低く傾斜するもののほぼ平坦である。カマド周辺はよく踏み固められて堅緻で、さらに南側から住居中央にかけて硬化面が広がる。

ピット 住居対角線上の柱穴4本 (P1~P4) に加え、住居中央間にP5とP6の2本 (P4・P5) が穿たれている。

番号	形状	規模 (長径×短径) cm	深さ	番号	形状	規模 (長径×短径) cm	深さ
----	----	---------------	----	----	----	---------------	----

P1	円形	71 × 57	57	P2	楕円形	85 × 64	51
----	----	---------	----	----	-----	---------	----

P3	楕円形	92 × 81	54	P4	円形	66 × 60	44
----	-----	---------	----	----	----	---------	----

P5	楕円形	67 × 59	48	P6	円形	25 × 24	34
----	-----	---------	----	----	----	---------	----

カマド 北壁中央に設置されている。灰白色粘土を構築材とし、粘土のみで構成されるのは袖部下底の基礎部分だけで、黒色土、ロームを混入した粘土を袖部本体としている。残存する袖部幅108cm、長さ65cmを測り、焚口部幅59cmで、ここから燃焼部が掘り込まれ、幅25cm、奥行60cm、深さ6cmの楕円形を呈する。煙道部は壁面を開口60cm、奥行45cmに掘り込み、緩傾斜させながら燃焼部の窪みに続く。

覆土 4層からなる自然堆積層である。

遺物 覆土中から土師器の壺・甕や、土製品である土玉などが出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代後期に比定される。

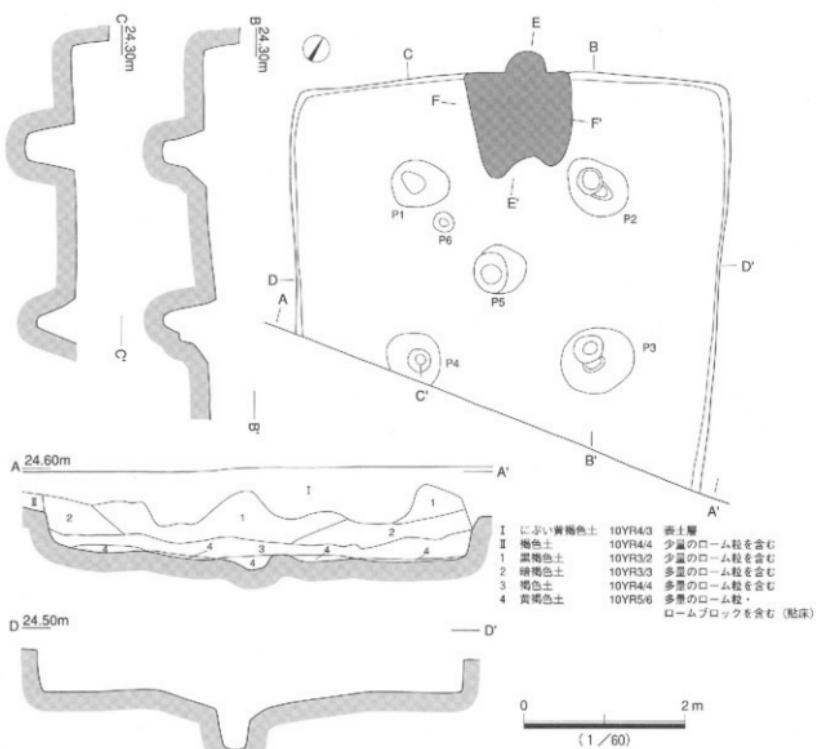


Fig. 51 住居跡SI26実測図

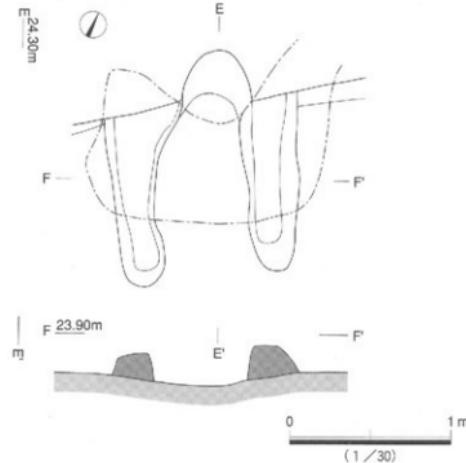


Fig. 52 住居跡SI26カマド実測図

住居跡SI27 (Fig. 53・54)

位置 調査区南東側4丁目、標高23.9~24.12mに位置する。

規模 南壁辺が未調査区域に広がっている。検出された規模は東西軸5.72m、南北軸4.97mを測り、方形を呈するものと推定される。

主軸方向 主軸方向はN-14°-Wを示す。

壁 確認面からの深さは16~39cm。緩傾斜して立ち上がる。

壁溝 検出された三壁際ではカマド部分を除き全周している。幅18~27cm、深さ8~20cmの断面U字形を呈する。

床 ほぼ平坦である。カマド周辺はよく踏み固められて堅緻で、さらに南側から住居中央にかけて硬化面が広がる。

ピット 住居対角線上の柱穴4本 (P1~P4) に加え、P1とP2の間で、カマド前のP5とP4の北側に接してP6が穿たれている。

番号	形状	規模 (長径×短径) cm	深さ	番号	形状	規模 (長径×短径) cm	深さ
P1	楕円形	88 × 78	64	P2	楕円形	43 × 35	74
P3	楕円形	81 × 70	54	P4	楕円形	82 × 72	64
P5	楕円形	78 × 55	9	P6	円形	55 × 53	70

カマド 北壁中央に設置されている。灰白色粘土を構築材とし、粘土のみで構成されるのは袖部下底の基礎部分だけで、黒色土、ロームを混入した粘土を袖部本体としている。残存する袖部幅115cm、長さ70cmを測り、焚口部幅60cmで、ここから燃焼部が掘り込まれ、幅50cm、奥行77cm、深さ4cmの楕円形を呈する。煙道部は壁面を間口40cm、奥行31cmに掘り込み、緩傾斜させながら燃焼部の窪みに続く。

覆土 3層からなる自然堆積層である。

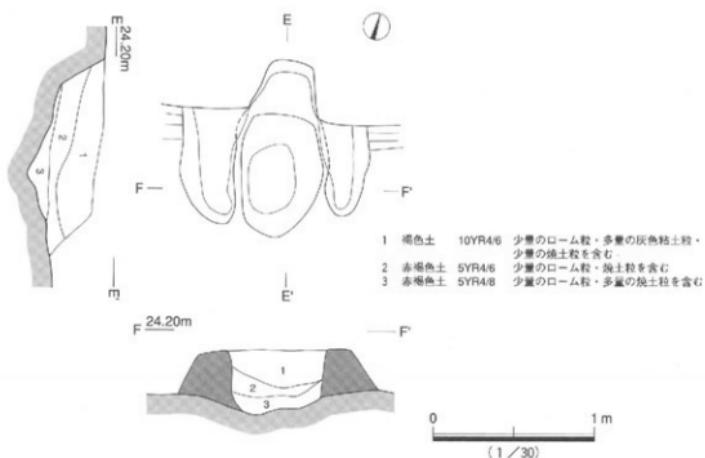


Fig. 53 住居跡SI27カマド実測図

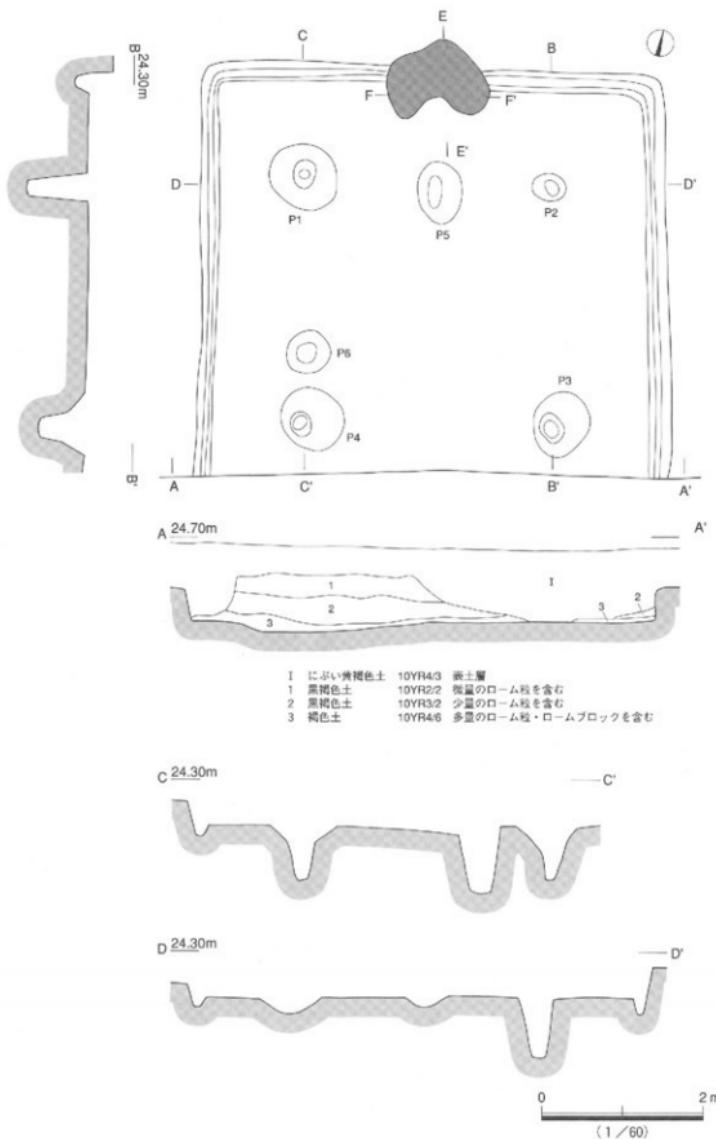


Fig. 54 住居跡SI27実測図

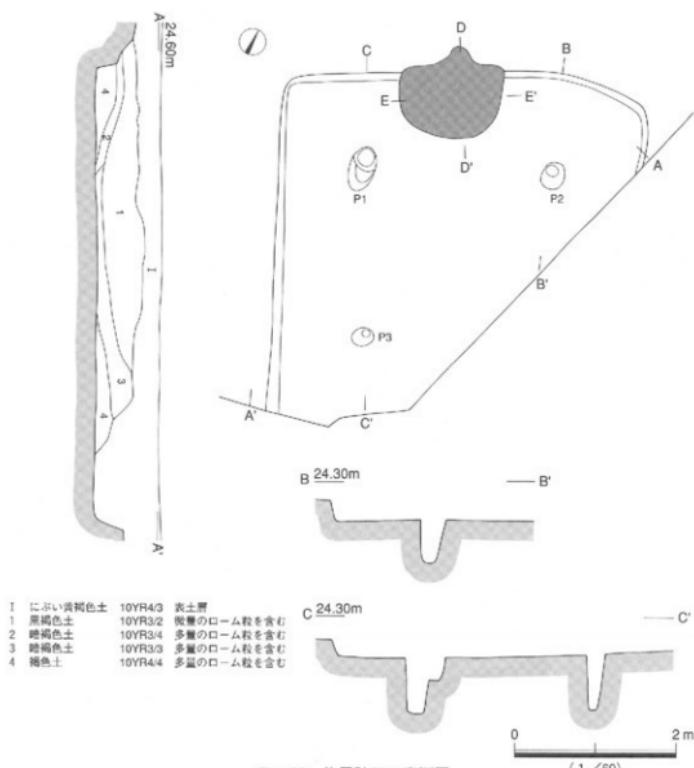


Fig. 55 住居跡SI28実測図

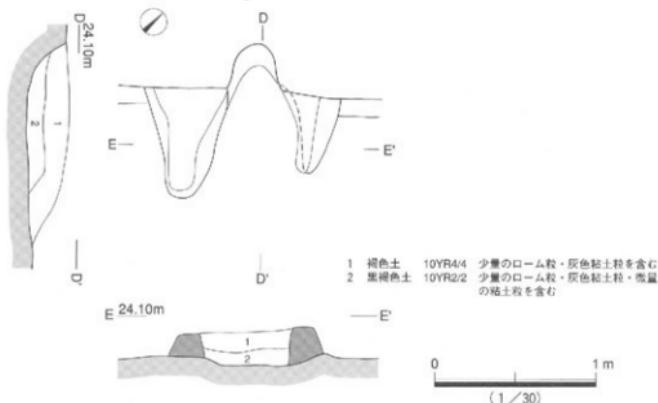


Fig. 56 住居跡SI28カマド実測図

遺物 覆土中から土師器の壺・甕が出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代後期に比定される。

住居跡SI28 (Fig. 55・56)

位置 調査区南東側4工区、標高24.01~24.14mに位置する。

規模 東壁面と南壁面が未調査区域に広がっている。検出された規模は東西軸4.46m、南北軸4.17mを測り、方形を呈するものと推定される。

主軸方向 主軸方向はN-30°-Wを示す。

壁 確認面からの深さは20.3~28.8cm。緩傾斜して立ち上がる。

床 ほぼ平坦である。カマド周辺はよく踏み固められて堅緻で、さらに南側から住居中央にかけて硬化面が広がる。

ピット 住居対角線上の柱穴3本 (P1~P3) が検出されている。

番号	形状	規模 (長径×短径) cm	深さ	番号	形状	規模 (長径×短径) cm	深さ
P1	楕円形	55 × 32	67	P2	楕円形	34 × 27	51
P3	楕円形	27 × 23	67				

カマド 北西壁中央に設置されている。灰白色粘土を構築材とし、粘土のみで構成されるのは袖部下底の基礎部分だけで、黒色土、ロームを混入した粘土を袖部本体としている。残存する袖部幅105cm、長さ66cmを測り、焚口部幅60cm。燃焼部の掘り込みはなく、煙道部は壁面を間口38cm、奥行29cmに掘り込み、緩傾斜させている。

覆土 4層からなる自然堆積層である。

遺物 覆土中から土師器の壺・甕や、土製品である土玉が出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代後期に比定される。

住居跡SI29 (Fig. 57)

位置 調査区南東側4工区、標高24.00~24.06mに位置する。

規模 東壁および南壁面は未調査区域に広がっている。検出された規模は東西軸3.90m、南北軸2.27mを測り、東西に長い長方形を呈するものと推定される。

主軸方向 主軸方向はN-37°-Wを示す。

壁 確認面からの深さは22.7~36.2cm。緩傾斜して立ち上がる。

床 ほぼ平坦である。カマド跡周辺はよく踏み固められて堅緻で、さらに南側から住居中央にかけて硬化面が広がる。

カマド 煙道部の掘り込みのみ検出され、カマド本体はすでに除去され、形状は不明である。因みに煙道部は幅70cm、壁面掘り込み120cm、深さ29.8cmの楕円形状を呈する。

覆土 挿乱が大きく明瞭ではないが、5層からなる自然堆積層である。

遺物 覆土中から土師器の壺・甕・瓶が出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代後期に比定される。

住居跡SI30 (Fig. 58)

位置 調査区南東側4工区、標高23.92~24.00mに位置する。

規模 西壁が未調査区域に広がっている。検出された規模は東西軸3.45m、南北軸4.90mを測り、方形を呈するものと推定される。

主軸方向 炉跡の設置位置から主軸方向はN-148°-Wを示す。

壁 確認面からの深さは3.2~8.8cm。緩傾斜して立ち上がる。

床 ほぼ平坦である。炉跡周辺はよく踏み固められて堅緻で、さらに北側から住居中央にかけて硬化面が広が

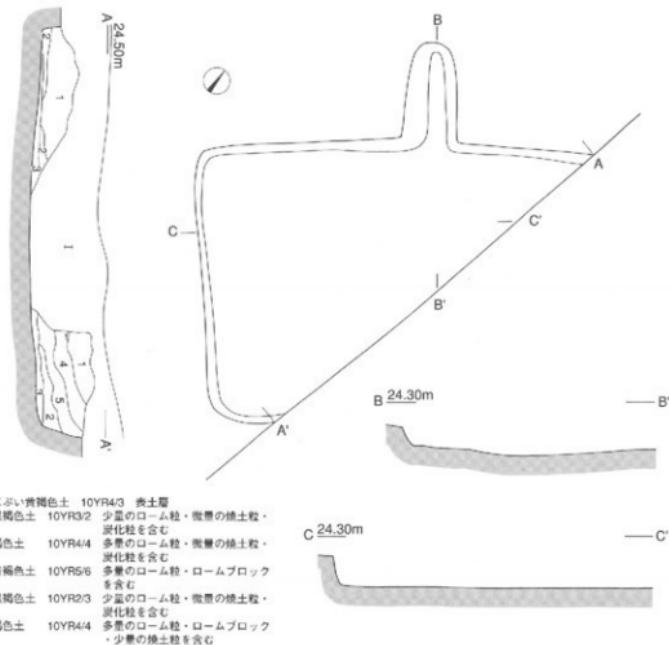


Fig. 57 住居跡SI29実測図

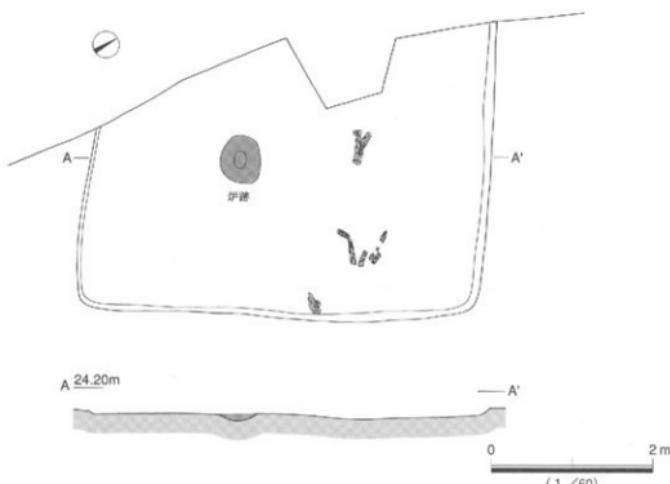


Fig. 58 住居跡SI30実測図

る。また中央から北側にかけて屋根材と思われる炭化材が集中しており、焼失家燃と推定される。

炉 住居中央南寄りに設置されている。東西方向に長い楕円形を呈し、規模は長径58cm、短径50cm、深さ6cmを測る。壁面は緩やかに外傾して立ち上がり、底面は火熱による赤変硬化が顕著で、焼土粒・炭化粒を多量に含む赤褐色土が堆積している。

遺物 覆土中から遺物は出土していない。

所見 本跡の時期は、住居跡の特徴から古墳時代前期～中期に比定される。

住居跡SI31 (Fig. 59)

位置 調査区北東側5工区、標高24.00～24.10mに位置する。

規模 南東壁面が未調査区域に広がっている。検出された規模は東西軸5.94m、南北軸6.27mを測り、南北に長い長方形を呈するものと推定される。

主軸方向 主軸方向はN-35°-Eを示す。

壁 確認面からの深さは16.9～30.1cm。緩傾斜して立ち上がる。

床 わずかに西側が低く傾斜するものはほぼ平坦である。炉跡周辺はよく踏み固められて堅緻で、さらに住居中央から南側にかけて硬化面が広がる。

ピット 住居対角線上の柱穴4本(P1～P4)に加え、住居中央炉跡に接してP5とP6の2本が穿たれている。

番号	形状	規模 (長径×短径) cm	深さ	番号	形状	規模 (長径×短径) cm	深さ
P1	楕円形	74 × 69	79	P2	楕円形	111 × 72	88
P3	楕円形	98 × 64	85	P4	楕円形	78 × 69	90
P5	円形	43 × 42	75	P6	円形	43 × 40	74

炉 住居中央北側寄りに設置されている。規模は長径88cm、短径72cm、深さ15cmを測り、楕円形を呈し、壁面は緩やかに外傾して立ち上がり、底面は火熱による赤変硬化が顕著で、焼土粒・炭化粒を多量に含む赤褐色土が堆積していた。

覆土 5層からなる自然堆積層である。

遺物 覆土中から上部器の高杯・甌や、土製品である土玉が出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代前期に比定される。

住居跡SI32 (Fig. 60)

位置 調査区北東側5工区、標高23.78～23.97mに位置する。

規模 南西コーナー付近のみ検出され、現存規模は東西軸2.82m、南北軸6.07mを測り、方形を呈するものと推定される。

主軸方向 炉跡が北側に設置しているものと推定して主軸方向はN-32°-Eを示す。

壁 確認面からの深さは8.8～27.2cm。緩傾斜して立ち上がる。

壁溝 検出された南西コーナー付近のみ掘削されている。幅21～35cm、深さ12.9～13.8cmの断面U字形を呈する。

床 ほぼ平坦である。検出された南西部分はロームが軟弱であるが、柱穴付近はよく踏み固められて堅緻である。

ピット 検出された柱穴は住居対角線上の柱穴2本(P1・P2)と推定される。

番号	形状	規模 (長径×短径) cm	深さ	番号	形状	規模 (長径×短径) cm	深さ
P1	楕円形	57 × 50	69	P2	円形	25 × 2	60

炉 確認できなかった。

覆土 6層からなる自然堆積層である。

遺物 覆土中から上部器の壺と器台、土製品である土玉が出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代前期に比定される。

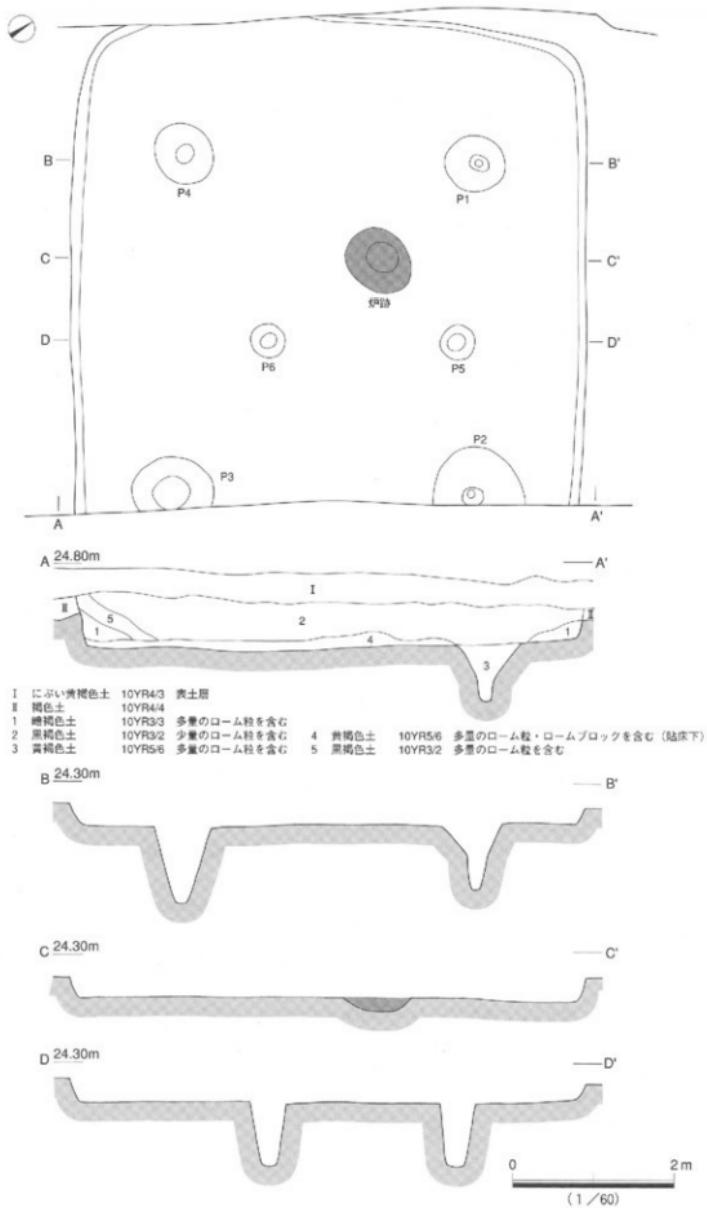


Fig. 59 住居跡SI31実測図

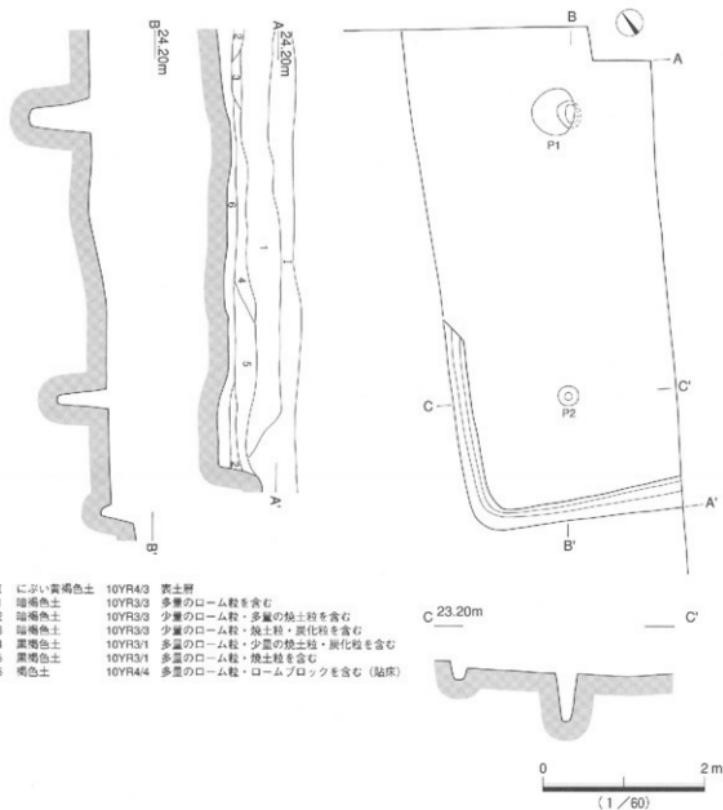


Fig. 60 住居跡SI32実測図

住居跡SI33 (Fig. 61)

位置 調査区北東側5工区、標高23.90~23.94mに位置する。

規模 西側半分以上は未調査区域に広がっている。検出された規模は東西軸5.75m、南北軸2.93mを測り、不正方形を呈する。

主軸方向 主軸方向はN-49°-Eを示す。

壁 確認面からの深さは21.3~23.5cm。緩傾斜して立ち上がる。

壁溝 検出面では北コーナー部分を除き全周している。幅24~30cm、深さ0.5~2.9cmの断面U字形を呈する。

床 南側が僅かに低くなり傾斜しているが、ほぼ平坦である。住居中央付近はよく踏み固められて堅緻である。

ピット 北側に柱穴P1が空たれている。

番号 形状 規模 (長径×短径) cm 深さ

P1 円形 78 × 73 88

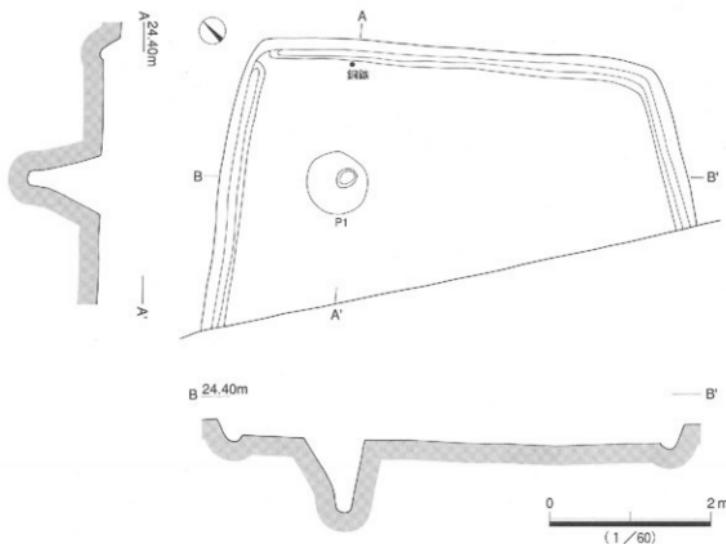


Fig. 61 住居跡SI33実測図

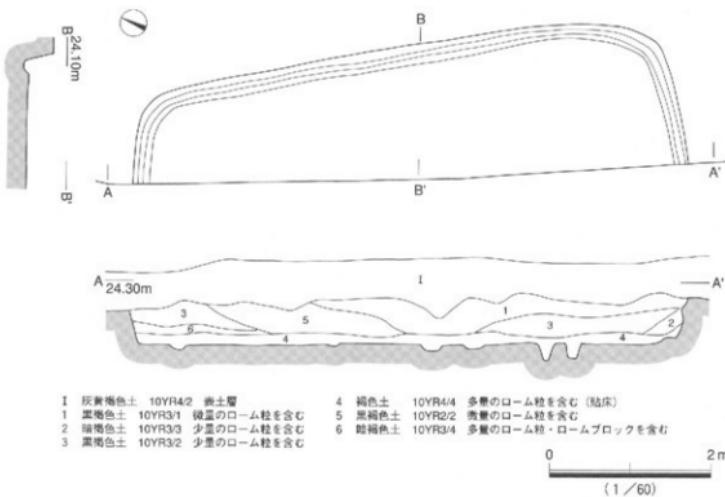


Fig. 62 住居跡SI45実測図

炉 確認できなかった。

遺物 覆土中から土師器の高杯・壺や、土製品として土玉・棒状土製品が出土している。また、金属製品として銅鏡が住居北隅の床面下より出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代前期末葉に比定される。

住居跡SI45 (Fig. 62)

位置 調査区北東側5工区、標高23.87~23.98mに位置する。

規模 西側の大半が未調査区域に広がっている。検出された東西軸1.65m、南北軸6.73mを測り、方形もしくは隅丸方形を呈するものと推定される。

主軸方向 炉跡が北側に設置されたと推定すると主軸方向はN-28°-Wを示す。

壁 確認面からの深さは21.4~27.6cm。緩傾斜して立ち上がる。

壁溝 検出部では全周している。幅16~27cm、深さ6.7~8.2cmの断面U字形を呈する。

床 北側が僅かに低く傾斜するものの、ほぼ平坦である。住居中央はよく踏み固められて堅緻である。

ピット 確認できなかった。

炉 確認できなかった。

覆土 6層からなる自然堆積層である。

遺物 覆土中から土師器の壺が出上し、2点図示できた。

所見 本跡の時期は、出土遺物から古墳時代前期に比定される。

第6節 古墳時代の竪穴住居跡出土遺物

住居跡SI01 (Fig.63-1~5)

覆土中から土師器の器台、壺・甕と土製品である土玉1点が出土している。1の器台は脚部を3/4程欠損している。受け部は壺状を呈し、脚部は中空で、中段に4個の透孔がある。赤彩が施されている。2は小形甕である。胴部は内湾気味に立ち上がり、口縁部はくの字状に外反する。3は口縁部を欠損する甕である。胴部中位で強く張り出し、上下におしつぶしたような球形を呈する。外面はハケ目調整後、ヘラミガキ。中位下部まで赤彩が施されている。4は甕である。最大径が胴部中位よりやや高い位置にあり、以下徐々につぼまつていく。口縁部はくの字状に外反する。口縁下部から胴部はハケ目調整が施されている。5は完存する土玉である。上下に長い断面格円形を呈する。古墳時代前期に比定される。

住居跡SI02 (Fig.63-1~3)

覆土中から土師器の壺、甕が出土している。1は小形の甕である。平底の底部から体部は内湾気味に立ち上がる。2は壺口縁部破片。口縁部は直線的に外傾して開く。内面はハケ目調整。3は甕で胴部が球形を呈し、口縁部は短くくの字状に外反する。内外面ともハケ目調整。古墳時代前期に比定される。

住居跡SI03 (Fig.63-1~12)

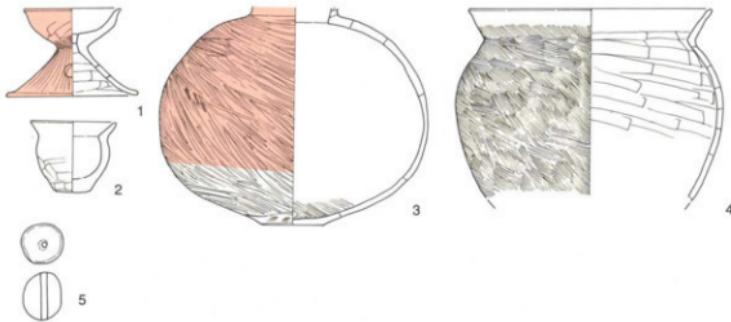
覆土中から土師器の高壺・壺・堆・甕と石製品、土製品が出土している。1は高壺の脚柱状部破片。中ぶくらみの筒状を呈する。上端近くまで中空である。外面は赤彩が施されている。2・3は壺である。2は平底の底部から体部は内湾気味に開く。3は丸みをもって立ち上がる。4~6・9・10は甕である。4の最大径が口縁部と胴部肩部近くにあり、口縁部は緩いくの字状に外反する。5は球形の胴部とくの字状に外反する口縁部からなる。7・8は堆の底部破片。11は凝灰岩製の砥石である。表裏面および側面に使用痕がみられる。12は欠損した土玉。古墳時代前期に比定される。

住居跡SI04 (Fig.63-1・2)

覆土中から土師器の堆、甕の破片が出土している。1は堆で球形の体部から口縁部は内湾気味に外傾して立ち上がる。外面と内面口縁部に赤彩が施されている。2は甕の胴部小破片。ハケ目調整が残されている。古墳時代前期に比定される。

住居跡SI06 (Fig.64-1~16)

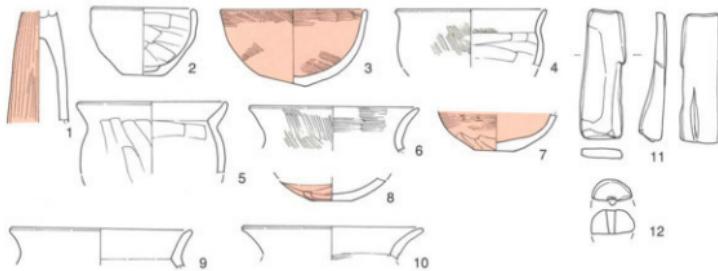
覆土中から土師器の高壺・堆・壺・甕と石製品が出土している。1~8は高壺である。1は脚柱部から壺部にかけての破片。脚部はハの字状に開き、内面に粘土帯の積上げ痕が残されている。2は壺部の破片。壺部は内湾気味に開き、壺部外下面下位に棱をもつ。3~5も壺部外下面下位に棱を有する。6~8は脚柱部の破片。6・7の脚柱部はエンタシス状を呈する。8はラッパ状に開く。いずれも外面および壺部内面に赤彩が施されている。9・10は堆である。9は小さな平底で体部は扁平な球形を呈し、口縁部は外傾して立ち上がる。10は口縁部破片。内湾気味に外傾して立ち上がる。11は壺である。底部は小さな平底で、体部は内湾して立ち上がり、口縁部は外反する。口縁部外面に弱い稜をもつ。12・13は甕である。12は平底の底部から体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は短く外反する。13も体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は短く外反し、内面の体部と口縁部の境に棱をもつ。14・15は甕である。14は口縁部破片。口縁部はくの字状に外反する。15は底部破片。やや上げ底気味を呈する。16は滑石製の石製模造品である双孔円板で、約半分を欠損している。古墳時代中期に比定される。



SI01(1~5) (1~4 : 1/4, 5 : 1/3)



SI02(1~3) (1~3 : 1/4)



SI03(1~12) (1~10 : 1/4, 11・12 : 1/3)



Fig. 63 住居跡SI01・02・03・04出土遺物

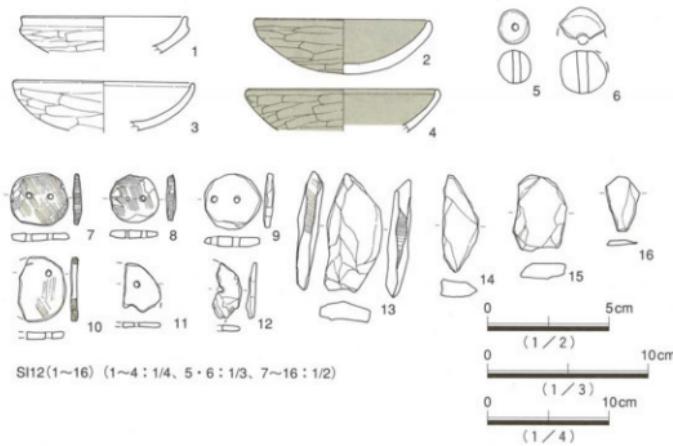
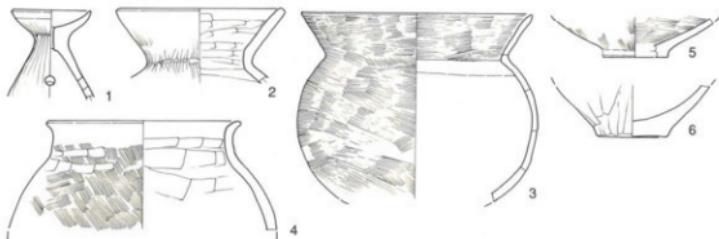
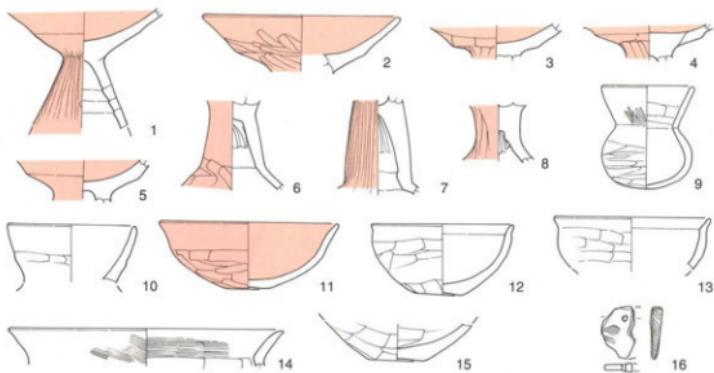


Fig. 64 住居跡SI06・10・12出土遺物

住居跡SI10 (Fig.64-1~6)

覆土中から土師器の器台・壺・甕が出土している。1は器台で、受部が接合部から内湾して開き、端部はヨコナデによって生じた稜をもち、短く垂直に立ち上がる。脚部は中空で中段に4個の透孔がある。2は壺の口縁部破片。球形の体部から口縁部は直線的にくの字状に外反する。3・4・6は甕である。3は球形の体部から口縁部は直線的にくの字状に外反する。外面および口縁部内面はハケ目調整がそのまま残る。4は体部が球形を呈し、頭部で屈曲してわずかに内傾して立ち上がり、口縁端部で短く外反する。外面頭部から体部にかけてハケ目調整が残る。6は底部破片。底部の器厚が厚い。5は甕の底部破片と思われる。下方へ突出して肥厚する平底である。古墳時代前期に比定される。

住居跡SI12 (Fig.64-1~16)

覆土中から土師器の壺と土製品である土玉2点、石製模造品の双孔円板6点とその未製品4点が出土している。1~4は壺である。1は体部が内湾して立ち上がり、口縁部との境に突出した稜をもつ。口縁部は短く直立する。2~4は丸底で、体部は内湾して立ち上がり、端部はヨコナデによって生じた稜をもち、短く垂直に立ち上がる。2・4は内外面とも黒色処理を施している。5・6は土玉である。5はほぼ球形を呈し、6は欠損品である。7~12は滑石製の双孔円板である。7~9は完存品。径が2cm前後を測る。10~12は欠損品。13から16は滑石の剥片であるが、13は側面に研磨痕があり、14も成形痕があることから円板の未製品と思われる。古墳時代後期に比定される。

住居跡SI16 (Fig.65-1~13)

覆土中から土師器の壺・甕・瓶や、土製品である土玉・土製支脚が出土している。1~7は壺である。1は丸底で、体部は内湾して立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。2~4も丸底で、体部は内湾して立ち上がり、口縁部は短く直立する。5は内湾して立ち上るが体部、口縁部はわずかに外反する。6は内湾する体部、口縁部は短く内傾する。1~6は口縁部と体部の境に稜をもつ。7は丸底で、体部は内湾して立ち上がり、端部はヨコナデによって生じた稜をもち、短く垂直に立ち上がる。8・10・11は甕である。8は口縁部から肩部にかけての破片。肩部の張らない長胴の体部から口縁部は外反する。端部はヨコナデによって生じた稜をもち、短く垂直に立ち上がる。10・11は平底の底部破片。9は単孔式の瓶である。体部は直線的に外傾して立ち上がり、口縁部で大きく外反する。12は下部を欠損する土製支脚である。手捏ね菱形され、截頭円錐形を呈し、頂部はほぼ平坦で、下方へ向かって徐々に太くなっている。13はほぼ球形を呈する土玉である。古墳時代後期に比定される。

住居跡SI17 (Fig.65-1~5)

覆土中から土師器の高壺・壺・甕が出土している。1・2は高壺である。1は壺部の破片。壺部は内湾気味に開き、壺部外面下位に稜をもつ。2は脚柱部の破片。脚柱部はラッパ状に開く。いずれも外面および壺部外面に赤彩が施されている。3・4は壺である。3はほぼ球形の体部から口縁部は直線的に外傾して立ち上がる。4は平底の底部から球形の体部へ移行する。5は甕の口縁部破片である。口縁部はくの字状に外反し、外面頭部と内面口縁部にハケ目調整を残す。古墳時代中期に比定される。

住居跡SI21 (Fig.65-1~6)

覆土中から土師器の高壺・壺・甕や、土製品である土玉・石製品である剣形模造品が出土している。1は高壺である。脚部はハの字状に開き、端部で僅かに反る。壺部は内湾気味に開き、壺部外面下位に稜をもつ。外面および壺部外面に赤彩が施されている。2は壺の胴部破片。胴部は下に押し潰されたような球形を呈する。外面に赤彩が施されている。3は副部が内湾して立ち上がり、口縁部は短くくの字状に外反する甕である。外面頭部と胴上部、内面口縁部にハケ目調整痕が残る。4・5は土玉である。4はほぼ球形で、5は径の割に長さのある紡錘形を呈する。6は滑石製の剣形模造品である。長さ4.35cmを測る優品である。古墳時代中期に比

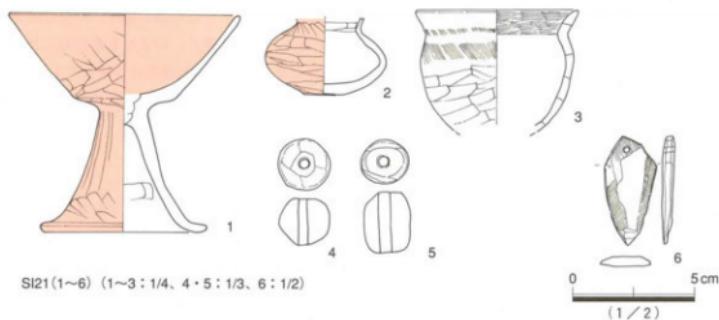
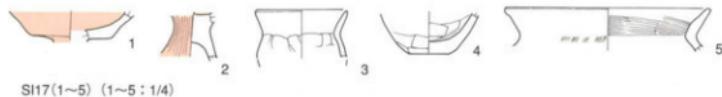
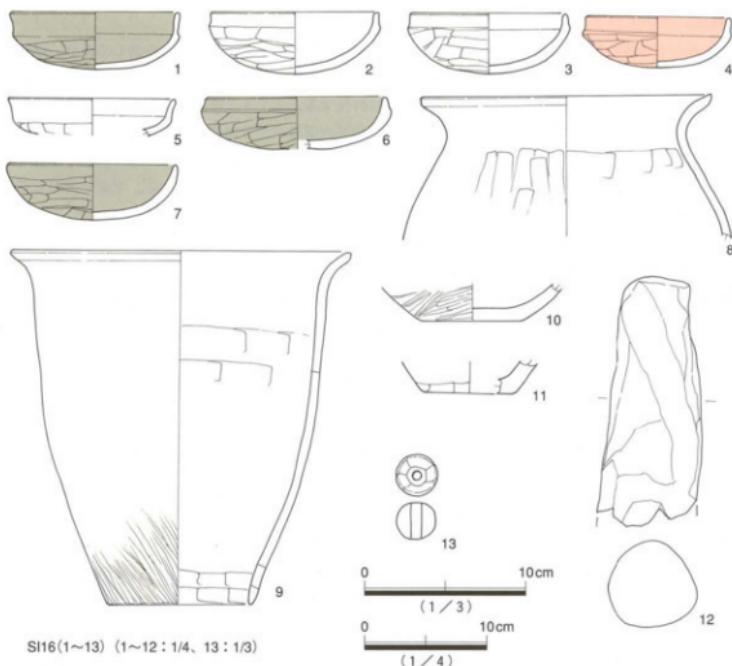


Fig. 65 住居跡SI16・17・21出土遺物

定される。

住居跡SI25 (Fig.66-1~6)

覆土中から土師器の壺・甕や、土製品である土玉が出土している。1は壺で、体部は内湾して立ち上がり、端部はヨコナデによって生じた棱をもち、短く垂直に立ち上がる。内外面とも赤彩が施されている。2は甕の底部破片。平底で体部は外傾して開く。3~6は土玉である。3はほぼ球形で、4~6は上口を押し潰したような断面格円形を呈する。古墳時代後期に比定される。

住居跡SI26 (Fig.66-1~18)

覆土中から土師器の壺・甕・瓶や、土製品である土玉・土製支脚が出土している。1・2は丸底で、体部は内湾して立ち上がり、口縁部は短く外傾する。3・4は丸底で、体部は内湾して立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。いずれも口縁部との境に突出した棱をもつ。5~9は丸底で、体部は内湾して立ち上がり、端部はヨコナデによって生じた棱をもち、短く垂直に立ち上がる。1~8は外面面とも黒色処理を施している。10~12は甕である。10は胴部が内湾して立ち上がり、口縁部は緩く外反し、端部はわずかに摘み上げられる。11は胴部が内湾して立ち上がり、口縁部は緩く外反する。12は平底の底部から内湾して立ち上がる。胴部は胴長で、最大径は胴中位よりやや上位にある。口縁部は外反し、端部で摘み上げられて短く外傾する。13~18は土玉である。13~15はほぼ球形であるが、両面に平坦面をもつ。16~18は上下から押し潰したような扁平を呈している。古墳時代後期に比定される。

住居跡SI27 (Fig.66-1~10)

覆土中から土師器の壺・甕が出土している。1~5は壺である。1は丸底で、体部は内湾して立ち上がり、口縁部は外反する。2は体部が内湾して立ち上がり、口縁部は僅かに外傾する。3も体部が内湾して立ち上がり、口縁部は僅かに外傾する。4は体部が内湾して立ち上がり、口縁部は短くほぼ直立する。1~4は口縁部との境に突出した棱をもつ。5は体部が内湾して立ち上がり、端部はヨコナデによって生じた棱をもち、短く垂直に立ち上がる。1~3は外面面とも黒色処理を施している。6は鉢で最大径が口縁部にある。直線的に外傾する胴部に口縁部は外傾して開く。口縁部と胴部の境に明瞭な棱をもつ。外面面に黒色処理を施している。7~10は甕である。7は平底の底部から胴部はやや胴長で内湾気味に立ち上がり、口縁部は緩く外反する。8は平底の底部で、胴部は内湾気味に立ち上がる。9・10は底部破片。古墳時代後期に比定される。

住居跡SI28 (Fig.67-1~5)

覆土中から土師器の壺・甕・瓶や、土製品である土玉が出土している。1・2は壺である。1は体部が内湾して立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。外面面に黒色処理を施している。2も体部は内湾して立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。3・4は甕である。4は胴部が球形を呈し、口縁部は緩く外傾して立ち上がる。4は底部破片でやや上げ底気味を呈する。5は土玉である。上面は平坦となる。古墳時代後期に比定される。

住居跡SI29 (Fig.67-1~5)

覆土中から土師器の塊・甕・瓶が出土している。1は甕である。体部が内湾して立ち上がり、端部はヨコナデによって生じた棱をもち、短く垂直に立ち上がる。外面および内面下部に黒色処理が施されている。2~4は甕である。2・3は口縁部から肩部にかけての破片である。口縁部は緩いカーブを描くように外反し、3の肩部はあまり目立たない。4は底部破片で、平底の底部から胴部は内湾気味に立ち上がる。5は単孔式の瓶である。胴部下半部のみであるが、底部で内湾気味に窄まり、胴部はほぼ直線的に外傾して立ち上がる。古墳時代後期に比定される。

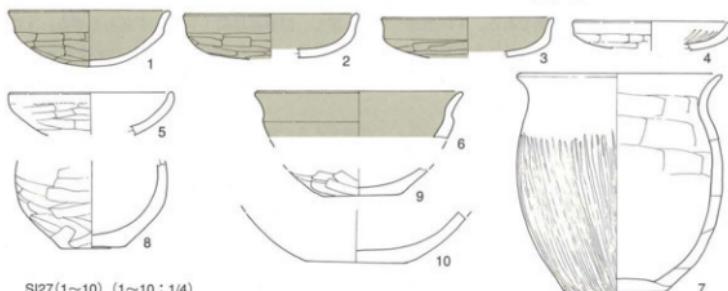
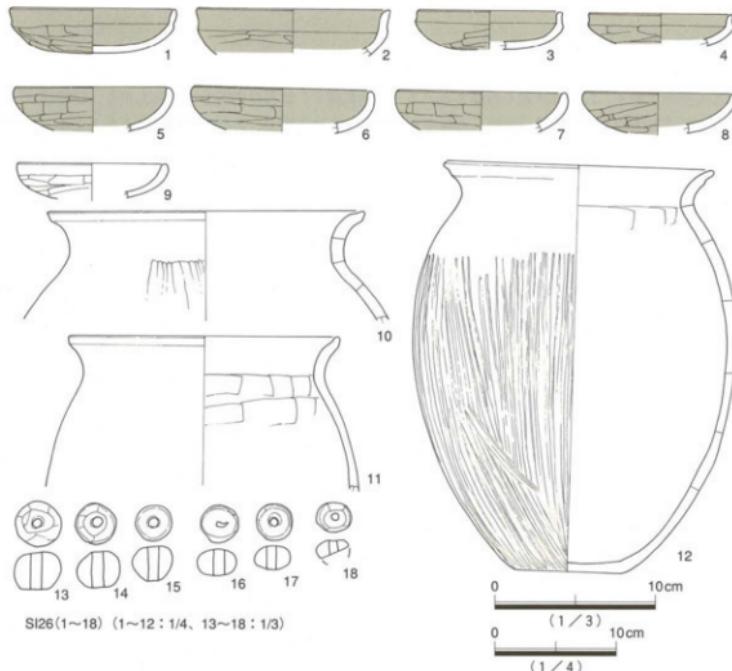


Fig. 66 住居跡SI25・26・27出土遺物

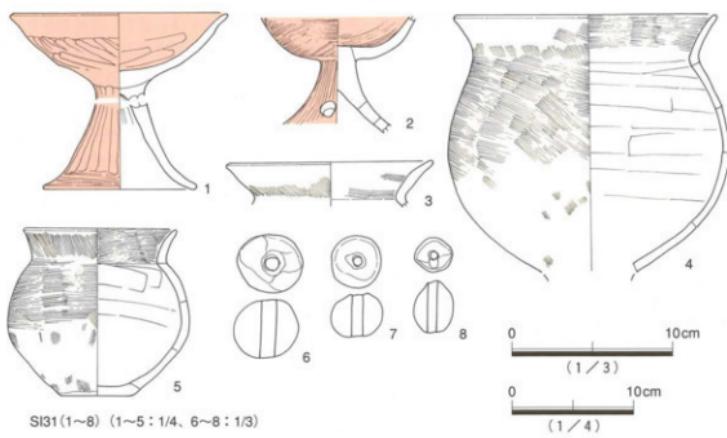
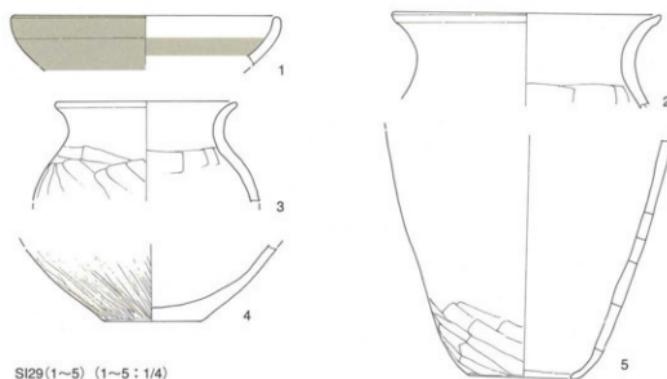
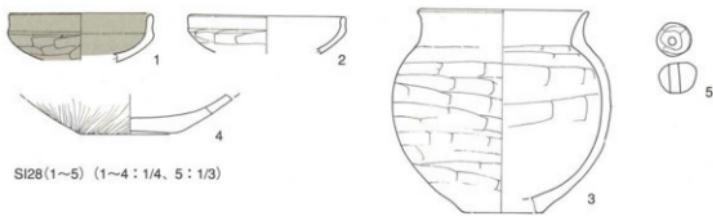


Fig. 67 住居跡SI28・29・31出土遺物

住居跡SI31 (Fig.67-1~8)

覆土中から土師器の高坏・壺や、土製品である土玉が出土している。1・2は高坏である。1は脚部がハの字状に開き、端部で僅かに反る。坏部は内湾気味に開き、口縁端部で短く外反する。坏部外面下位に棱をもつ。外面および坏部内面に赤彩が施されている。2は脚柱状部と坏部底部の破片。脚柱部はハの字状に開き、中段付近で3個の透孔が施されている。坏部は内湾気味に開き、坏部外面下位にわずかな棱を有する。外面および坏部内面は赤彩が施されている。3~5は壺である。3は口縁部破片。くの字状に外反する。内外面にハケ目調整が残る。4は球形の胴部に口縁部はくの字状に外反する。外面と内面口縁部にハケ目調整が残る。5はやや小形の壺で、平底の底部からほぼ球形の胴部へ移行し、口縁部はくの字状に外反する。やはり外面と内面口縁部にハケ目調整が残されている。6~8は土玉である。6は大きくほぼ球形を呈する。7は上下から押し潰したような扁平で、両面に平坦面をもつ。8は上下に長く、断面楕円形を呈する。古墳時代前期に比定される。

住居跡SI32 (Fig.68-1~6)

覆土中から土師器の壺・器台や、土製品である土玉が出土している。1・2・4は壺である。1は口縁部破片。球形を呈する体部から頸部はくの字状に屈曲し、口縁部は内湾気味に強く外反する。口縁は幅広い薄い粘土帯を貼り合わせた複合口縁で、6本单位と思われる棒状浮文がある。頸部に円形浮文を隙間を空けて貼付、肩部は網目状撫赤文を施す。内外面ともヘルミガキの後赤彩を施す。2も口縁部破片で、頸部はくの字状に屈曲し、口縁部は強く外反する。口縁は粘土帯を貼付け複合口縁として、口縁内面にも明瞭な稜を有する。口縁部外面にはナデ整形。頸部は瓶底のハケ目調整。内面口縁部はベン先状工具による3列の刺突穴に棱部下部に斜行する刻目を巡らす。内外面とも赤彩が施されている。4は口縁部破片で内湾気味に開く。口縁部に幅広い薄い粘土帯を貼り合わせた複合口縁で、口縁下端に押圧を加えた刻目が巡り、押圧のある棒状浮文が3本貼付けてある。頸部は瓶底のハケ目調整。3は器台である。口縁部はかなり強く外反し、坏部下位が鶴状に張り出す。坏部と脚部の接合部は肥厚し、脚部はラッパ状に開く。脚部中段に2列の透孔が4個ずつ計8個（現存は7個）穿ってあるものと思われる。坏部内外面と脚部内外面にハケ目調整が残る。5・6は土玉である。6は大きくほぼ球形を呈する。6は上下に長く、断面楕円形を呈する。古墳時代前期に比定される。

住居跡SI33 (Fig.68-1~7)

覆土中から土師器の高坏・壺や、土製品として土玉・棒状土製品が出土している。また、金属製品として銅鏡が出土している。1・2は高坏の脚柱部破片である。1は脚柱部がエンタシス状を呈し、裾部はなだらかに開く。外面に赤彩が施されている。2は脚柱部が円筒状を呈し、裾部はなだらかに開く。外面に赤彩が施されている。3は壺である。ほぼ球形の胴部から口縁部はくの字状に立ち上がる。外面口縁部下部にハケ目調整痕を残している。4・5は比較的大きな土玉である。4はほぼ球形を呈し、径4cm、重さ56.86gの大形土玉である。5は上下にやや長く、断面楕円形を呈する。6は棒状土製品である。上部は欠損し、全体的な大きさや形態は不明であるが、断面円形を呈し、径1.10cm前後を測る。7は銅鏡である。身縁辺の一部を欠損するものはほぼ完成品で、長さ4.22cm、鏡身部幅1.45cm、鏡身部厚0.46cm、茎部長さ1.63cm、葉部厚さ0.38~0.43cm、重さ5.05gを測る。形態は長三角形を呈し、両面の身の中軸に鏡がある。鏡部は片面にのみ脇状の抉りがみられ、角闘である。茎部断面は楕円形を呈する。古墳時代前期末期に比定される。

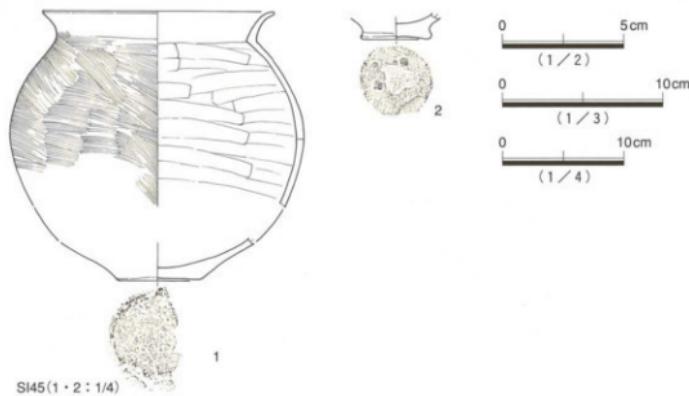
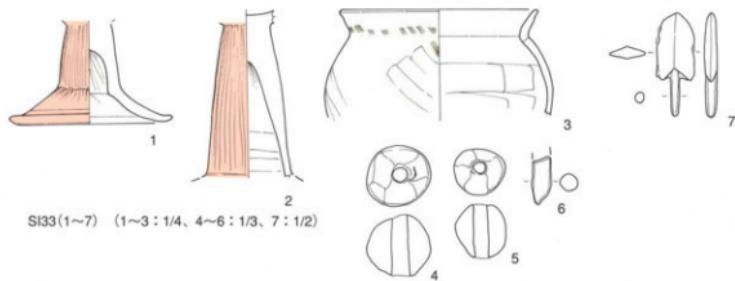
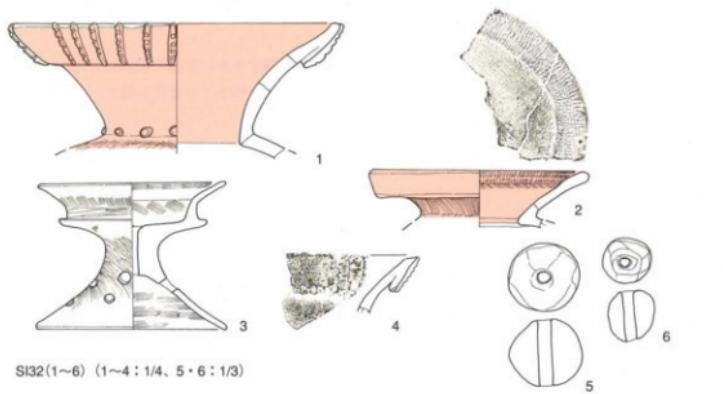


Fig. 68 住居跡SI32・33・45出土遺物

住居跡SI45 (Fig.68-1・2)

覆土中から土師器の焼が出土している。1は胴部下部で一部を欠損するが、球形の胴部をもち、口縁部はくの字状に外反し、端部でさらに外傾する。外面胴部上位はハケ目調整が残る。2は底部破片。底面は下方へ突出し肥厚し、周縁が輪状に高まっている。古墳時代前期に比定される。

第7節 繩文時代・古墳時代の土坑

土坑SK01 (Fig.69)

調査区南西側1工区に位置する。本跡は東側でSI03に切られている。確認面上面径(128)×119cm、底面径(120)×105cmの楕円形を呈する。深さ最大3cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦である。覆土は単一層からなる自然堆積である。図示できる遺物の出土はなかった。古墳時代以降のものであろう。

土坑SK02 (Fig.69)

調査区南西側1工区に位置する。本跡は北西側が未調査区域に延び、北東側でSI03に切られている。確認面上面軸108×(69)cm、底面径93×(69)cmの長方形を呈するものと推定する。深さ最大21cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦である。覆土は2層からなる自然堆積である。遺物は古墳時代の上部器の壺・甌が覆土から出土した。

土坑SK03 (Fig.69)

調査区南西側1工区に位置する。本跡は北西側でSI03に切られている。確認面上面径187×(82)cm、底面径169×(78)cmの長方形を呈するものと推定する。底面はほぼ平坦で、深さ最大17cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦である。図示できる遺物の出土はなかった。古墳時代以降のものであろう。

土坑SK04 (Fig.69)

調査区南西側1工区に位置する。確認面上面径296×130cm、底面径82×52cmの不正楕円形を呈する。深さ最大79cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は鍋底状を呈する。遺物は繩文前期・黒浜式の土器片が覆土から出土した。

土坑SK05 (Fig.70)

調査区南西側1工区に位置する。確認面上面径71×69cm、底面径47×41cmの円形を呈する。深さ最大31cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦である。図示できる遺物の出土はなかった。古墳時代以降であろう。

土坑SK06 (Fig.70)

調査区南西側1工区に位置する。本跡は北側および東側が未調査区域に広がっている。確認面上面径(127)×(107)cm、底面径(113)×(88)cmの隅丸方形を呈する。深さ最大15cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦である。覆土は単一層の自然堆積である。図示できる遺物の出土はなかった。古墳時代以降であろう。

土坑SK07 (Fig.70)

調査区南西側1工区に位置する。本跡は北東側が未調査区域に広がり、南東側でSI01によって切られている。確認面上面径131×(68)cm、底面径112×(38)cmの円形を呈する。深さ最大44cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる円筒形。底面は平坦で内部施設として子ビット状の掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径53×(33)cmの円形で、深さ11cmである。覆土は単一層の自然堆積である。図示できる遺物の出土はなかった。繩文時代中期と推定される。

土坑SK08 (Fig.70)

調査区西側2工区に位置する。本跡は約半分が東側の未調査区域に広がっている。確認面上面径226×(148)

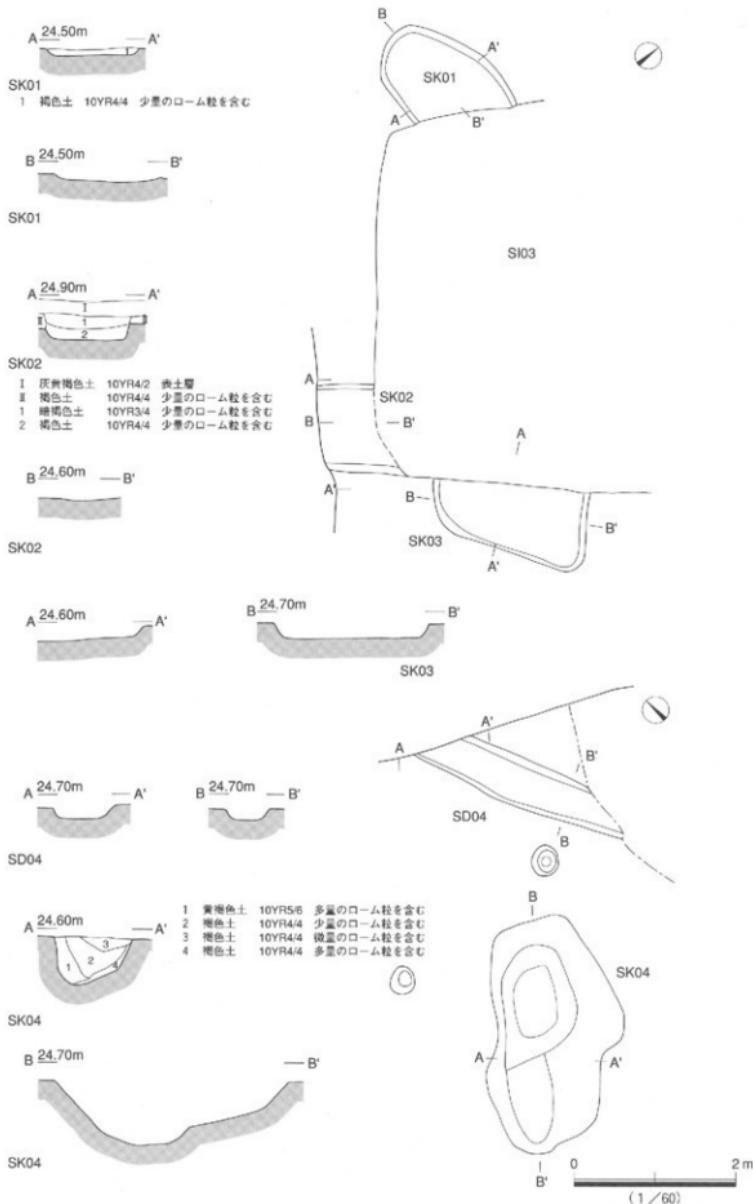


Fig. 69 土坑SK01・02・03・04、溝状造構SD04実測図

cm、底面径（133）×（130）cmの円形を呈する。底面が北側に張り出した袋状で、深さ最大83cmを測り、壁面は内傾して立ち上がる。底面は緩傾斜し、内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。センターピットP1は径22×17cmの円形で、深さ56cm。サイドピットP2は径50×38cmの円形で、深さ57cmである。覆土は5層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と土器片鉢7点等が覆土から出土した。加曾利E2式期と推定される。

土坑SK09 (Fig.70)

調査区西側2工区に位置する。本跡は約半分が東側の未調査区域に広がっている。確認面上面径445×（280）cm、底面径390×（237）cmの円形を呈する。確認面からの深さ最大68cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが4ヶ所検出された。センターピットのP1は径40×（24）cmの円形で、深さ37cm。サイドピットのP2は径134×91cmの円形で、深さ51cm。同じくP3は径60×（24）cmの円形で、深さ36cm。同じくP4は径74×56cmの円形で、深さ39cmである。覆土は7層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と上器片鉢1点、磨石1点が覆土から出土した。加曾利E2式期と推定される。

土坑SK10 (Fig.70)

調査区西側2工区に位置する。確認面上面径167×155cm、底面径136×132cmの円形を呈する。底面が僅かに外側へ張り出した袋状で、確認面からの深さ最大33cmで、壁面は内傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設としてサイドボケットが1ヶ所検出された。P1は径44×29cmの円形で、深さ14cmである。覆土は3層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。阿玉台式期と推定される。

土坑SK11 (Fig.71)

調査区西側2工区に位置する。本跡は南側でSI08を切って構築している。確認面上面径147×121cm、底面径104×102cmの楕円形を呈する。底面が外側に張り出した袋状で、深さ最大58cmで、壁面は内傾して立ち上がる。底面は起伏を有し内部施設はない。覆土は3層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。

土坑SK12 (Fig.71)

調査区西側2工区に位置する。確認面上面径133×87cm、底面径102×62cmの楕円形を呈する。深さ最大44cmで、壁面は外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。覆土は2層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。

土坑SK13 (Fig.71)

調査区西側2工区に位置する。本跡は北側約半分が未調査区域に広がっている。確認面上面径203×（90）cm、底面径152×（72）cmを測り、円形を呈する。深さ最大31cmで、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として南東側にサイドピットが1ヶ所検出された。P1は径90×55cmの円形で、深さ60cmである。覆土は5層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。

土坑SK14 (Fig.71)

調査区西側2工区に位置する。確認面上面径76×68cm、底面径35×30cmを測る円形を呈する。深さ最大41cmで、壁面は外傾して立ち上がる円筒形。底面は平坦で、覆土は3層からなる自然堆積である。図示できる遺物の出土はなかった。古墳時代以降であろう。

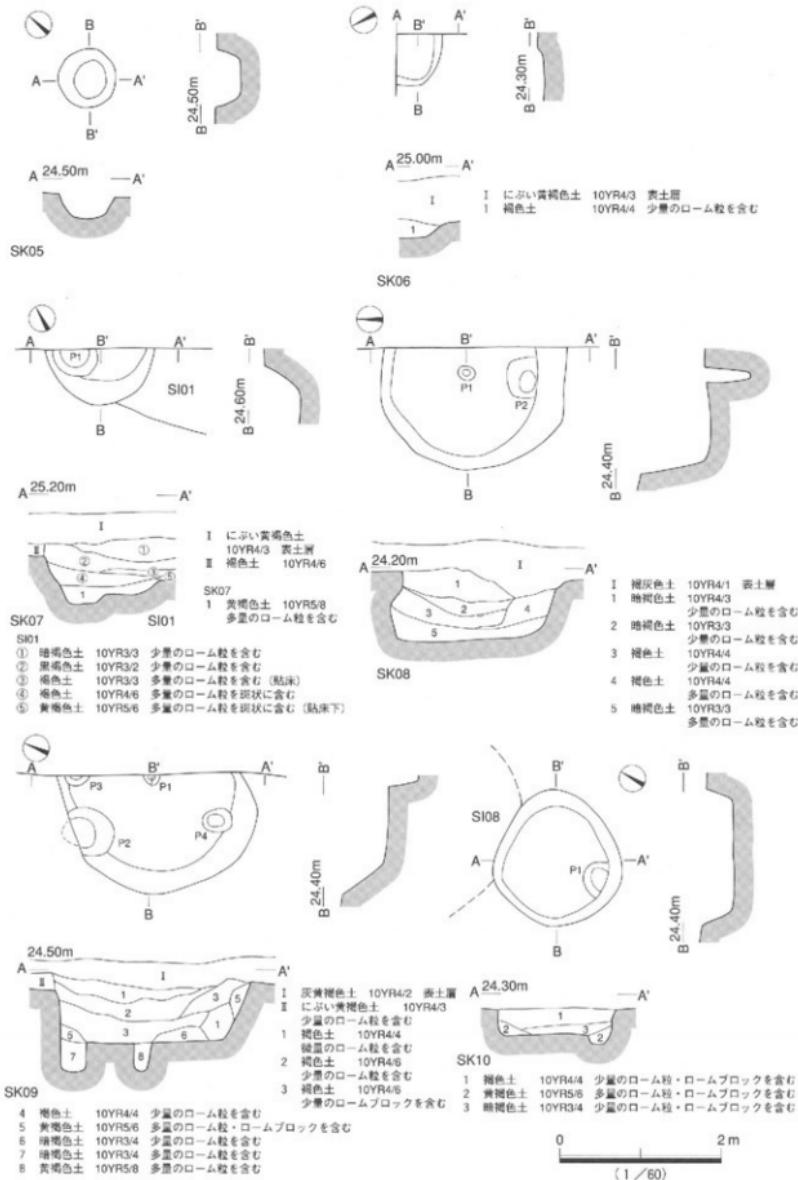


Fig. 70 土坑SK05・06・07・08・09・10実測図

土坑SK15 (Fig.71)

調査区西側2工区に位置する。確認面上面径86×62cm、底面径33×32cmを測り、楕円形を呈する。深さ最大28cmで、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、図示できる遺物の出土はなかった。古墳時代以降であろう。

土坑SK16 (Fig.71)

調査区西側2工区に位置する。確認面上面径291×210cm、底面径234×160cmを測り、楕円形を呈する。深さ最大24cmで、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は4層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が復土から出土した。加曾利E2式期と推定される。

土坑SK17 (Fig.72)

調査区西側2工区に位置する。本跡は北側でSI12に切られている。確認面上面径82×43cm、底面径70×28cmの長方形を呈する。深さ最大64cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。図示できる遺物の出土はなかった。古墳時代以降であろう。

土坑SK18 (Fig.72)

調査区西側2工区に位置する。本跡は南側で僅かに未調査区域に掛かっている。確認面上面径162×131cm、底面径89×87cmの楕円形を呈する。深さ最大67cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は5層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK19 (Fig.72)

調査区中央3工区に位置する。本跡は北東側約半分が未調査区域に広がり、南側でSI14に切られている。確認面上面径171×57cm、底面径152×49cmの円形を呈するものと推定される。深さ最大28cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。覆土は3層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。

土坑SK20 (Fig.72)

調査区中央3工区に位置する。本跡は南西側の一部が未調査区域に延びている。確認面上面径(285)×100cm、底面径(276)×81cmの長方形を呈する。深さ最大47cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土したが、古墳時代以降と推定される。

土坑SK21 (Fig.72)

調査区中央3工区に位置する。確認面上面径96×71cm、底面径63×54cmの円形を呈する。深さ最大21cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設としてセンターピット1ヶ所が検出された。P1は径28×20cmの円形で、深さ51cmである。覆土は単一層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。

土坑SK22 (Fig.73)

調査区中央3工区に位置する。本跡は南西側約半分が未調査区域に広がっている。確認面上面径127×(43)cm、底面径113×(32)cmの円形を呈する。深さ最大39cmを測り、壁面は内傾して立ち上がる袋状を呈する。底面は平坦で、覆土は2層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E2式期と推定される。

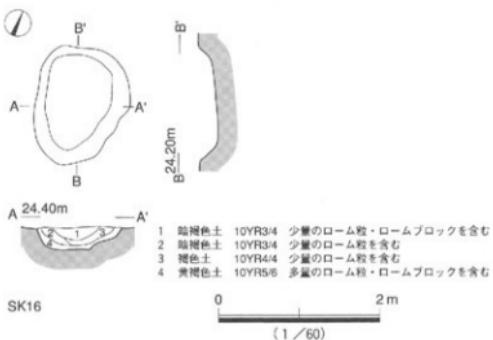
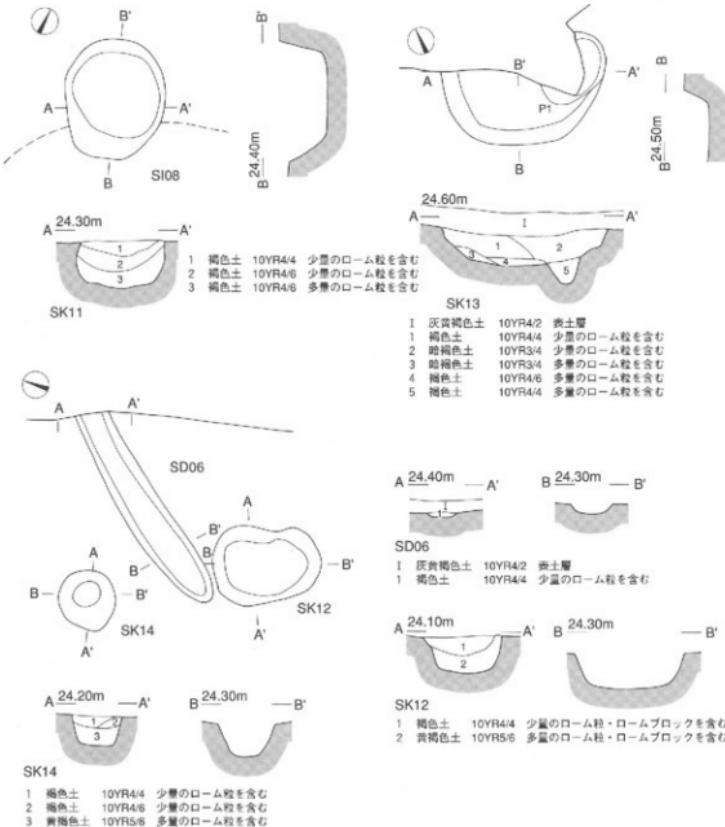


Fig. 71 土坑SK11・12・13・14・15・16、溝状造構SD06実測図

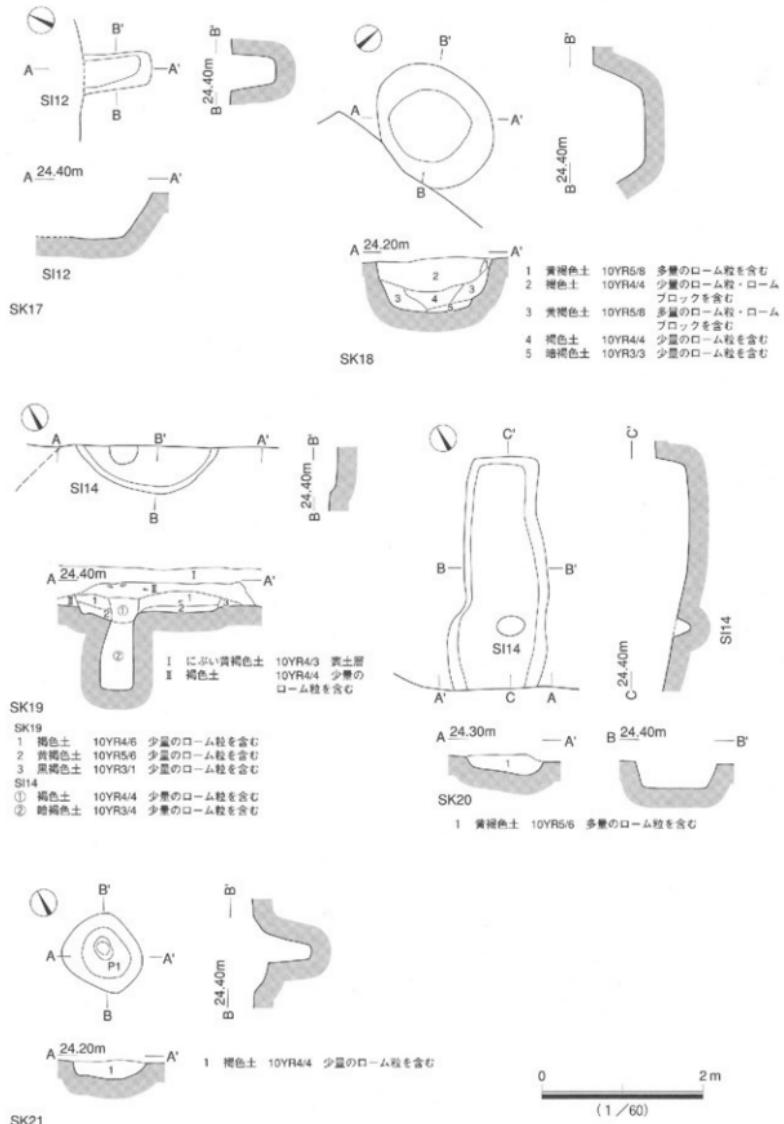


Fig. 72 土坑SK17・18・19・20・21実測図

土坑SK23 (Fig.73)

調査区中央3工区に位置する。本跡は南西側が未調査区域に広がっている。確認面上面径180×176cm、底面径147×135cmの楕円形を呈する。深さ最大32cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径39×29cmの円形で、深さ35cm。P2は径39×32cmの円形で、深さ28cmである。覆土は4層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と土器片錐が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK24 (Fig.73)

調査区中央3工区に位置する。本跡は北西側の大半が未調査区域に広がっている。確認面上面径131×(34)cm、底面径90×(10)cmの円形を呈するものと推定する。深さ最大36cmを測り、壁面は一部内傾して立ち上がる袋状を呈する。底面は平坦で、覆土は2層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK25 (Fig.75)

調査区中央3工区に位置する。本跡は南西側の大半が未調査区域に広がっている。確認面上面径209×(117)cm、底面径187×(97)cmの長方形を呈するものと推定する。深さ最大31cmを測り、壁面は一部内傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径44×43cmの円形で、深さ79cmである。覆土は3層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と土器片錐8点が覆土から出土した。加曾利E2式期と推定される。

土坑SK26 (Fig.76)

調査区中央3工区に位置する。本跡は南東側が未調査区域に広がり、南西側でSK38を切って構築している。確認面上面径182×(104)cm、底面径150×(90)cmの円形を呈する。深さ最大45cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は4層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。

土坑SK27 (Fig.76)

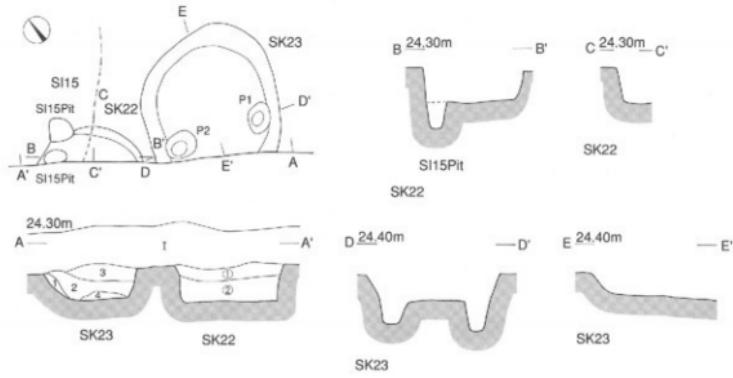
調査区中央3工区に位置する。本跡は南西側の大半が未調査区域に広がっている。確認上面面径(252)×(89)cm、底面径(237)×(81)cmの楕円形を呈するものと推定する。深さ最大29cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径66×54cmの円形で、深さ66cmである。覆土は3層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。

土坑SK28 (Fig.76)

調査区中央3工区に位置する。本跡は南東側の大半が未調査区域に広がっている。南西側でSK38を切って構築している。確認面上面径160×(67)cm、底面径130×(43)cmの円形を呈するものと推定する。深さ最大54cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は5層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と土器片錐1点が覆土から出土した。

土坑SK29 (Fig.75)

調査区中央3工区に位置する。本跡は南西側の大半が未調査区域に広がっている。確認面上面径250×(46)cm、底面径193×(33)cmの長方形を呈するものと推定する。深さ最大41cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は2層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と土器片錐3点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。



I に示す黄褐色土 10YR4/3 表土層

SK22

(1) 黄褐色土 10YR5/6 多量のローム粒・ロームブロックを含む

(2) 棕褐色土 10YR4/4 多量のローム粒を含む

SK23

1 黄褐色土 10YR5/6 多量のローム粒を含む

2 棕褐色土 10YR4/4 多量のローム粒を含む

3 暗褐色土 10YR3/4 多量のローム粒を含む

4 棕色土 10YR4/6 多量のローム粒を含む

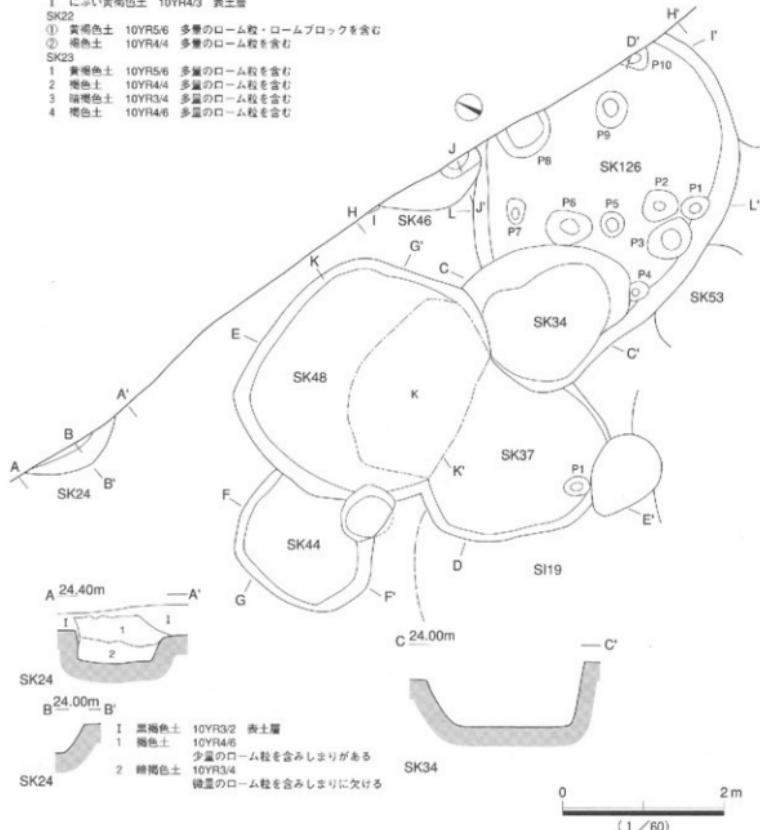


Fig. 73 土坑SK22・23、SK24・34・37・44・46・48・126(1)実測図

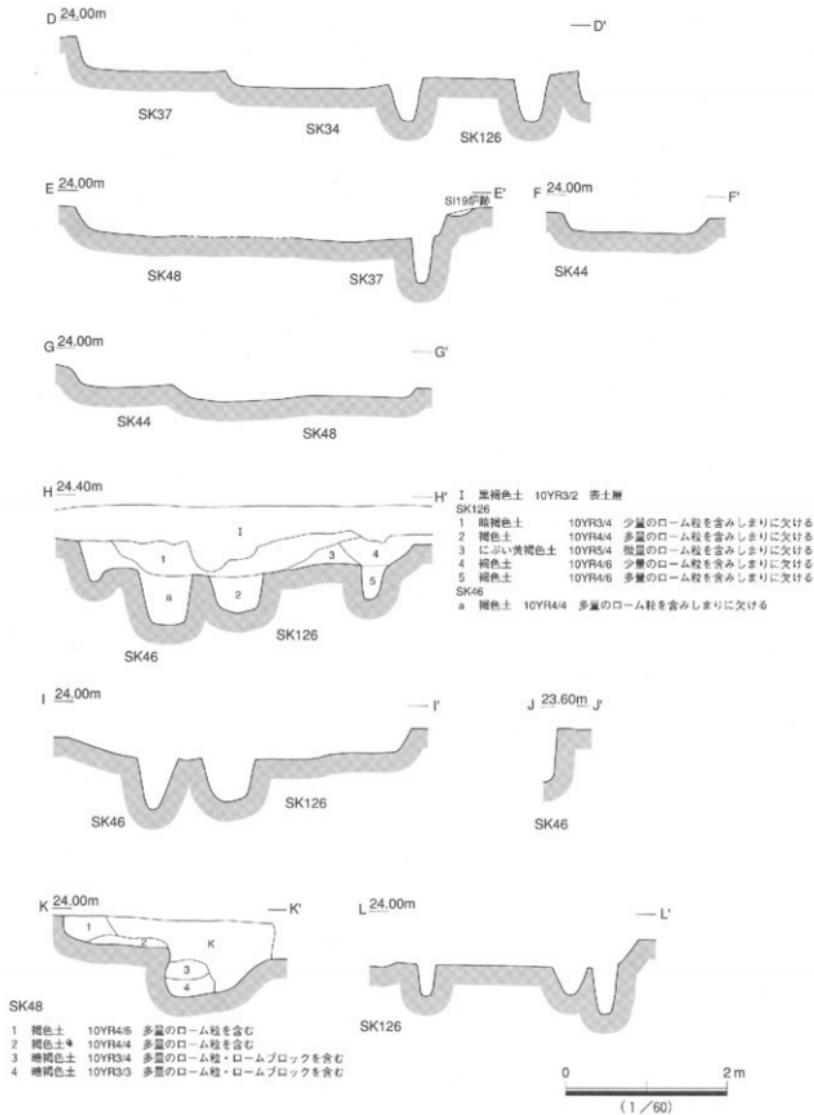


Fig. 74 土坑SK34・37・44・46・48・126実測図(2)

土坑SK30 (Fig.77)

調査区中央3工区に位置する。本跡は南西側でSK39に切られ、北東側でSK53を切って構築している。確認面上面径370×285cm、底面径308×243cmの楕円形を呈する。深さ最大39cmを測り、底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが6ヶ所検出された。P1は径33×30cmの円形で、深さ51cm。P2は径101×83cmの円形で、深さ79cm。P3は径83×72cmの円形で、深さ74cm。P4は径73×60cmの円形で、深さ72cm。P5は径26×22cmの円形で、深さ45cm。P6は径48×37cmの円形で、深さ42cmである。覆土は4層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と土器片鍤4点が覆土から出土した。加曾利E2式期と推定される。

土坑SK31 (Fig.75)

調査区中央3工区に位置する。本跡は北西側の一部が未調査区域に広がっている。確認面上面径207×167cm、底面径174×139cmの楕円形を呈する。深さ最大69cmを測り、底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが4ヶ所検出された。P1は径43×39cmの円形で、深さ12cm。P2は径35×34cmの円形で、深さ38cm。P3は径45×35cmの円形で、深さ93cm。P4は径48×47cmの円形で、深さ43cmである。覆土は3層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と土器片鍤6点、土製円盤1点、チャート製石鏃1点が覆土から出土した。加曾利E2式期と推定される。

土坑SK32 (Fig.78)

調査区中央3工区に位置する。本跡は北東側の一部が未調査区域に広がり、SK36・42に切られている。確認面上面径376×239cm、底面径377×204cmの楕円形を呈する。底面が北側に張り出したフラスコ状で、確認面からの深さ最大53cmを測り、壁面は一部内傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが3ヶ所検出された。P1は径22×22cmの円形で、深さ55cm。P2は径99×82cmの円形で、深さ34cm。P3は径57×52cmの円形で、深さ55cmである。覆土は3層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と土器片鍤4点が覆土から出土した。加曾利E2式期と推定される。

土坑SK33 (Fig.78)

調査区中央3工区に位置する。本跡は北東側の一部が未調査区域に広がり、SK42に切られている。確認面上面径185×142cm、底面径190×188cmの円形を呈する。底面は外側に張り出した袋状で、確認面からの深さ最大91cmを測り、壁面は内傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は4層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と土器片鍤4点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK34 (Fig.73・74)

調査区中央3工区に位置する。本跡はSK37・126を切り、SK48に切られている。確認面上面径204×181cm、底面径155×125cmの楕円形を呈する。深さ最大12cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、遺物は縄文中期の土器片と土器片鍤8点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK35-A (Fig.76・77・213)

調査区中央3工区に位置する。本跡は南側でSK35-Bを切って構築している。確認面上面径282×228cm、底面径229×213cmの円形を呈する。底面が西側に張り出したフラスコ状で、確認面からの深さ最大88cmを測り、壁面は一部内傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径37×29cmの円形で、深さ55cmである。覆土は7層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と土器片鍤11点、磨石1点、蔽石1点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

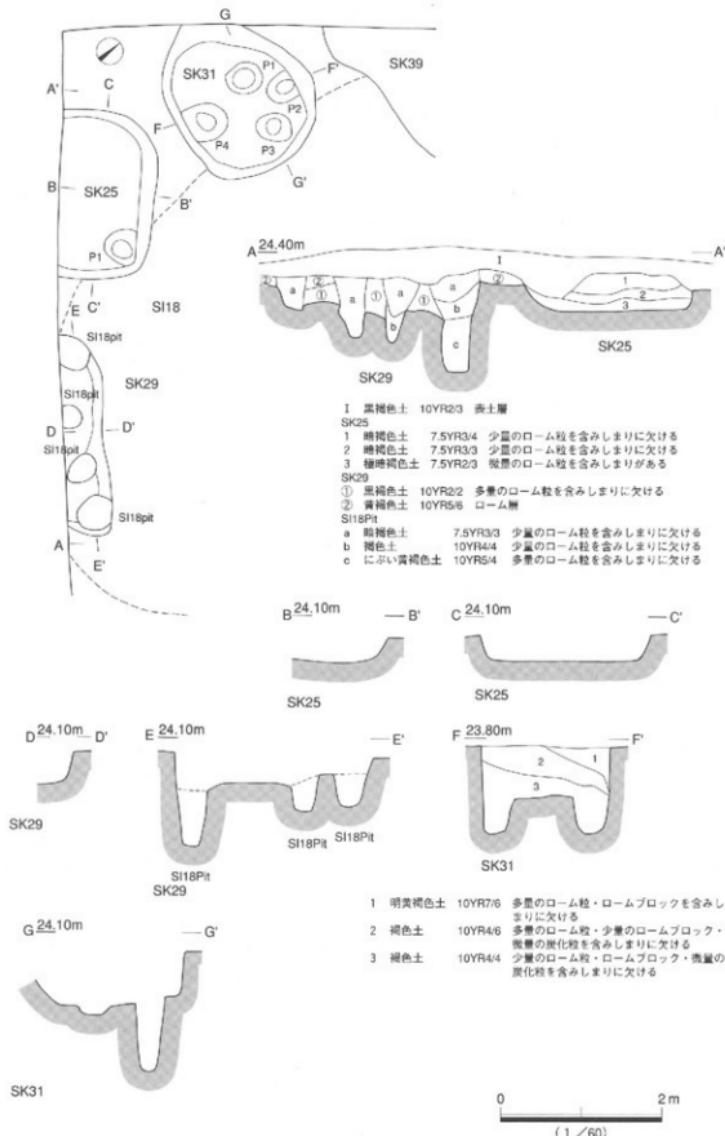


Fig. 75 土坑SK25・29・31実測図

土坑SK35-B (Fig.76・77)

調査区中央3工区に位置する。本跡は北側でSK35-Aに、西側でSK51に切られている。確認面上面径180×76cm、底面径(151)×54cmの楕円形を呈する。深さ最大33cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦である。図示できる遺物の出土はなかった。

土坑SK36 (Fig.78)

調査区中央3工区に位置する。本跡は北東側の一部が未調査区域に広がり、北西側でSK32を切って構築している。確認面上面径247×244cm、底面径213×195cmの円形を呈する。底面が北側に張り出した袋状で、確認面からの深さ最大77cmを測り、壁面は一部内傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが3ヶ所検出された。P1は径98×88cmの円形で、深さ58cm。P2は径62×45cmの円形で、深さ32cm。P3は径64×51cmの円形で、深さ26cmである。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK37 (Fig.73・74)

調査区中央3工区に位置する。本跡は東側でSK34に切られている。確認面上面径241×(180)cm、底面径220×(116)cmの円形を呈する。深さ最大41cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。サイドピットのP1は径31×26cmの円形で、深さ57cmである。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK38 (Fig.76・77)

調査区中央3工区に位置する。本跡は南東側の大半が未調査区域に広がり、SK28に切られている。確認面上面径(146)×44cm、底面径(128)×(28)cmの楕円形を呈するものと推定する。深さ最大20cmを測り、壁面は内傾して立ち上がる袋状を呈する。底面は平坦で覆土は3層からなる自然堆積である。図示できる遺物の出土はなかった。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK39 (Fig.77)

調査区中央3工区に位置する。本跡は北西側の大半が未調査区域に広がり、北東側でSK30を切って構築している。確認面上面径185×(113)cm、底面径132×(95)cmの楕円形を呈するものと推定する。深さ最大47cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径29×29cmの円形で、深さ47cm。P2は径(45)×31cmの円形で、深さ33cmである。図示できる遺物の出土はなかった。

土坑SK40 (Fig.79)

調査区中央3工区に位置する。本跡は北西側でSK52に切られている。確認面上面径356×308cm、底面径317×279cmの楕円形を呈する。深さ最大44cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが4ヶ所検出された。P1は径25×24cmの円形で、深さ37cm。P2は径52×42cmの円形で、深さ53cm。P3は径33×28cmの円形で、深さ25cmである。P4は径25×25cmの円形である。覆土は單一層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と土器片錐1点、小形磨製石斧1点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

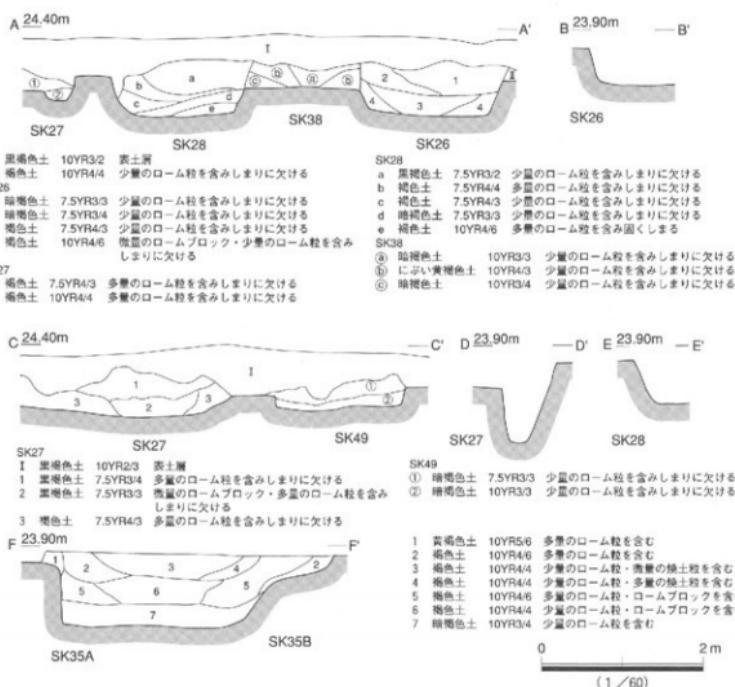
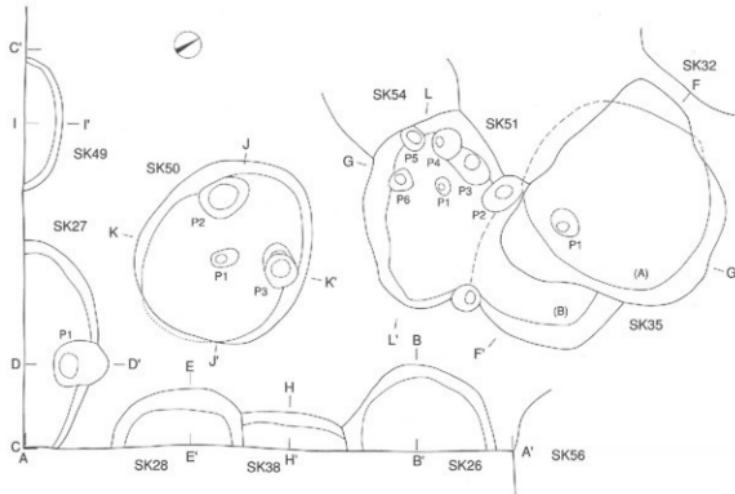


Fig. 76 土坑SK26・27・28・35・38・49・50・51実測図(1)

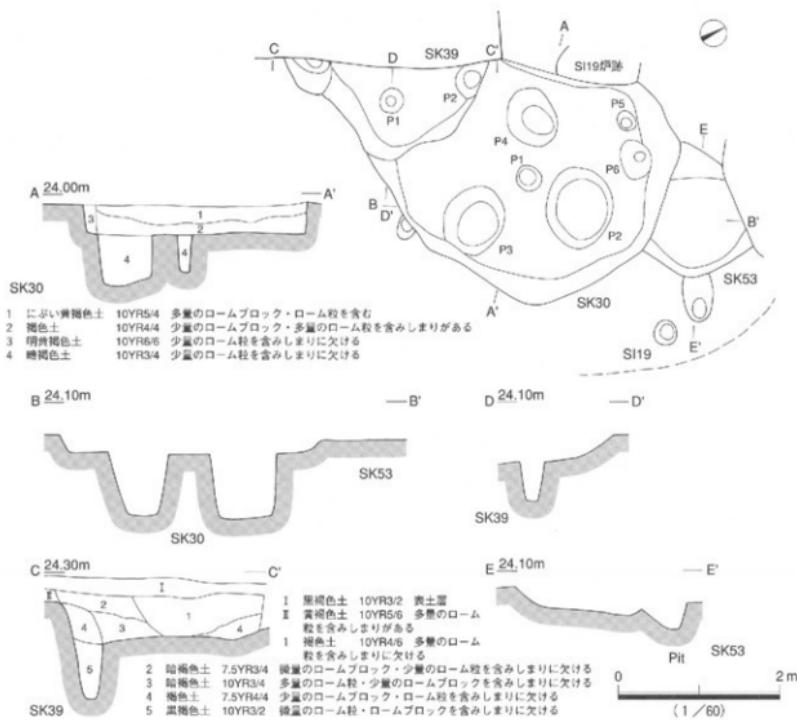
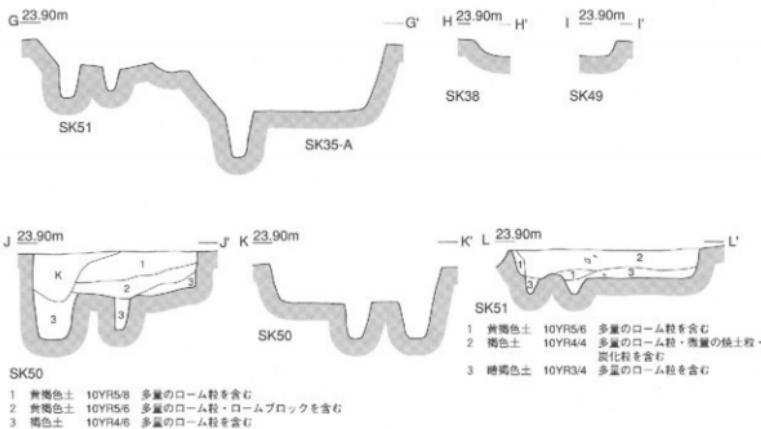


Fig. 77 土坑SK35-A・38・49・50・51(2)・SK30・39・53実測図

土坑SK41 (Fig.79・213)

調査区中央3工区に位置する。確認面上面径108×81cm、底面径257×210cmの円形を呈する。底面が外側に張り出したフ拉斯コ状で、確認面からの深さ最大146cmを測り、壁面は内傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。また、開口部付近には掘り込みが3ヶ所検出された。サイドピットP1は径38×25cmの円形で、深さ49cmである。P2は径97×86cmの円形で、深さ15cmである。P3は径29×20cmの円形で、深さ37cmである。P4は径(30)×(25)cmの円形で、深さ30cmである。P1からP3は本跡に伴うものか不明である。遺物は縄文中期の土器片と土器片鍤23点、疊石斧1点、鍬器1点、磨石1点が覆土から出土した。阿立台II式期と推定される。

土坑SK42 (Fig.78)

調査区中央3工区に位置する。本跡はSK32・33を切って構築している。確認面上面径226×198cm、底面径186×171cmの円形を呈する。深さ最大103cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが4ヶ所検出された。P1は径27×24cmの円形で、深さ33cm。P2は径58×52cmの円形で、深さ19cm。P3は径43×29cmの円形で、深さ15cm。P4は径47×35cmの円形で、深さ44cmである。遺物は縄文中期の土器片と土器片鍤1点、チャート製石簾1点が覆土から出土した。

土坑SK43 (Fig.80・213)

調査区中央3工区に位置する。本跡はSK47・56を切って構築している。確認面上面径174×148cm、底面径172×164cmの円形を呈する。底面が北側に張り出したフ拉斯コ状で、確認面からの深さ最大54cmを測り、壁面は内傾して立ち上がる。底面は平坦で、遺物は縄文中期の土器片と土器片鍤2点、磨石1点が覆土から出土した。阿立台IV式期と推定される。

土坑SK44 (Fig.73・74)

調査区中央3工区に位置する。本跡は東側でSK48に切られている。確認面上面径179×(124)cm、底面径148×(114)cmの円形を呈する。深さ最大23cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、遺物は縄文中期の土器片と土器片鍤2点が覆土から出土した。加曾利E2式期と推定される。

土坑SK45 (Fig.80)

調査区中央3工区に位置する。本跡は西側でSK55に切られている。確認面上面径188×(94)cm、底面径158×(65)cmの楕円形を呈するものと推定する。深さ最大30cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦である。図示できる遺物の出土はなかった。

土坑SK46 (Fig.73・74)

調査区中央3工区に位置する。本跡は北東側の大半が未調査区域に広がっている。東側でSK126に切られている。確認面上面径(138)×(43)cmの円形を呈するものと推定する。深さ最大62cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK47 (Fig.80・213)

調査区中央3工区に位置する。本跡は南側でSK64を切って構築している。確認面上面径285×230cm、底面径250×204cmの楕円形を呈する。底面が北側に張り出したフ拉斯コ状で、確認面からの深さ最大79cmを測り、壁面は内傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが3ヶ所検出された。P1は径51×44cmの円形で、深さ24cm。P2は径26×23cmの円形で、深さ28cm。P3は径60×56cmの円形で、深さ39cmである。遺物は縄文中期の土器と土器片鍤7点、磨石1点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

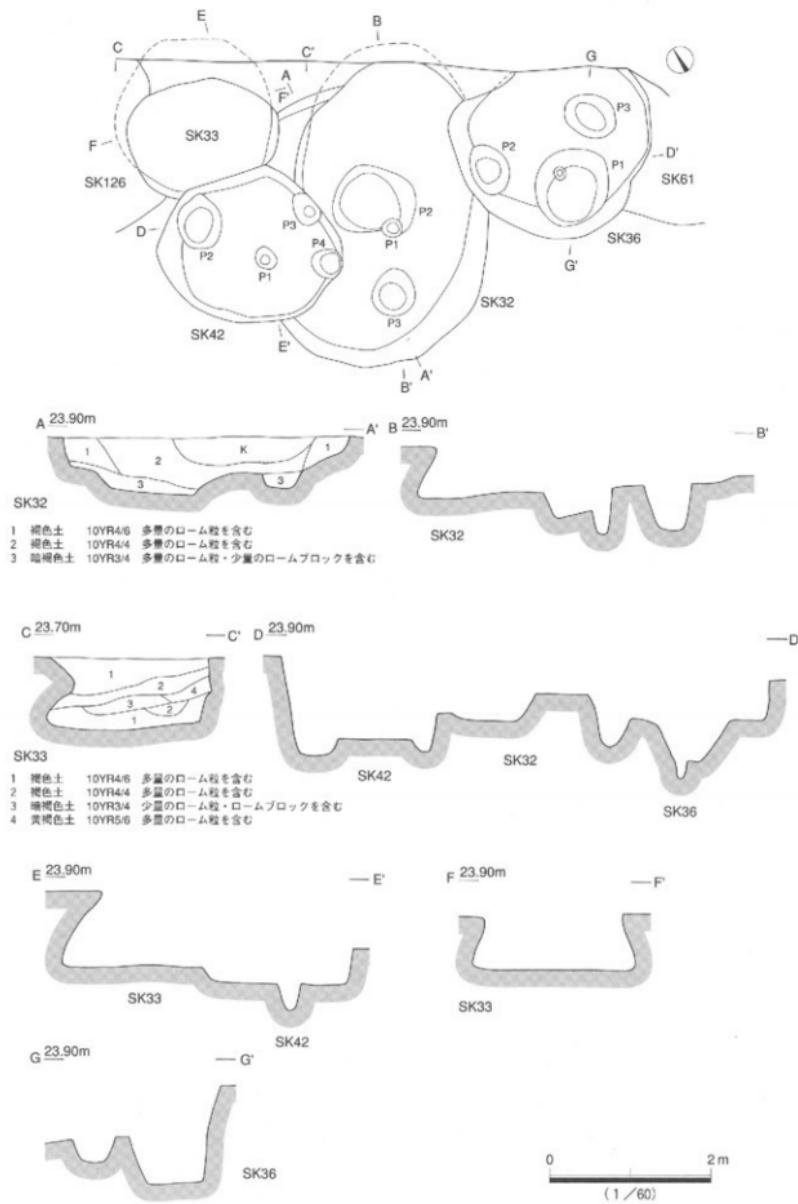


Fig. 78 土坑SK32・33・36・42実測図

土坑SK48 (Fig.73・74)

調査区中央3工区に位置する。本跡はSK34・37・44を切って構築している。なお、半分以上は搅乱を受けている。確認面上面径301×260cm、底面径265×245cmの楕円形を呈する。深さ最大35cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は4層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と土器片鍾4点が覆土から出土した。加曾利E2式期と推定される。

土坑SK49 (Fig.76・77)

調査区中央3工区に位置する。本跡は南西側の大半が未調査区域に広がっている。確認面上面径159×(46)cm、底面径143×(37)cmの円形を呈するものと推定する。深さ最大19cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK50 (Fig.76・77)

調査区中央3工区に位置する。確認面上面径239×200cm、底面径231×171cmの楕円形を呈する。底面が南側に張り出した袋状で、確認面からの深さ最大55cmを測り、壁面は一部内傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが3ヶ所検出された。P1は径34×20cmの円形で、深さ42cm。P2は径61×47cmの円形で、深さ59cm。P3は径53×38cmの円形で、深さ42cmである。覆土は3層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と土器片鍾1点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK51 (Fig.76・77)

調査区中央3工区に位置する。本跡は東側でSK35-Bに切られている。確認面上面径249×163cm、底面径206×124cmの楕円形を呈する。深さ最大39cmを測り、壁面は内傾して立ち上がる袋状を呈する。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが6ヶ所検出された。P1は径23×18cmの円形で、深さ28cm。P2は径54×35cmの円形で、深さ38cm。P3は径55×33cmの円形で、深さ49cm。P4は径37×37cmの円形で、深さ42cm。P5は径32×24cmの円形で、深さ45cm。P6は径30×27cmの円形で、深さ38cmである。覆土は3層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の上器片と上器片鍾5点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK52 (Fig.79)

調査区中央3工区に位置する。本跡は南東側でSK40を切っている。確認面上面径196×135cm、底面径176×(121)cmの楕円形を呈する。深さ最大43cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが3ヶ所検出された。P1は径24×20cmの円形で、深さ40cmである。P2は径60×45cmの楕円形で、深さ45cmである。P3は径30×25cmの楕円形である。覆土は3層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK53 (Fig.77)

調査区中央3工区に位置する。本跡は南西側でSK30に切られている。確認面上面径162×(100)cm、底面径110×(100)cmの円形を呈する。深さ最大22cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦である。図示できる遺物の出土はなかった。

土坑SK54 (Fig.79)

調査区中央3工区に位置する。本跡は北東側でSK51に切られている。確認面上面径129×128cm、底面径111×89cmの円形を呈する。深さ最大44cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径72×54cmの円形で、深さ50cmである。遺物は縄文中期の上器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

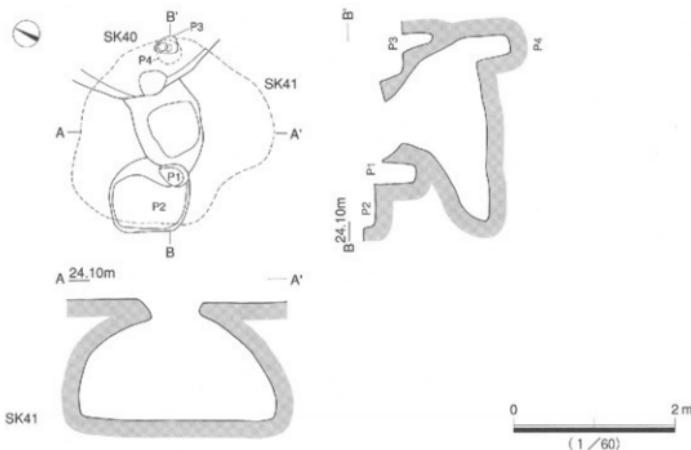
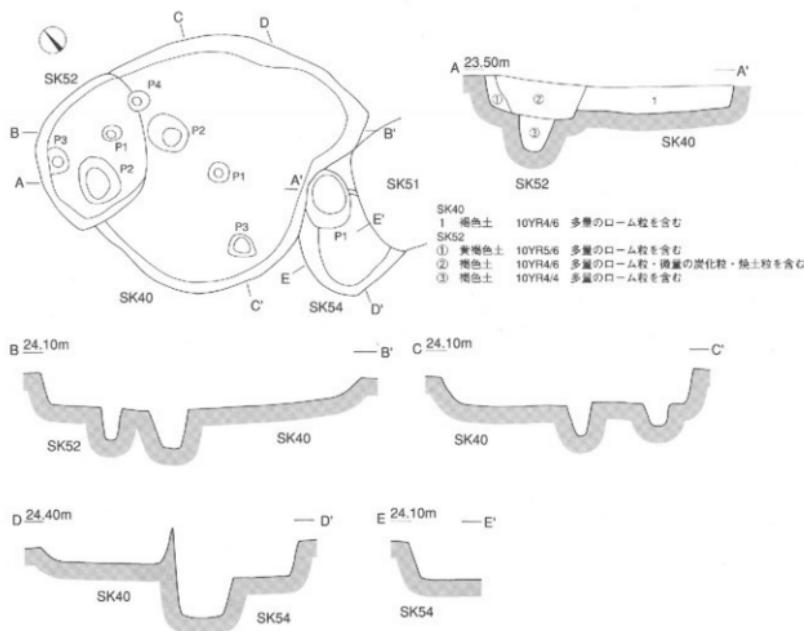


Fig. 79 土坑SK40・52・54、SK41実測図

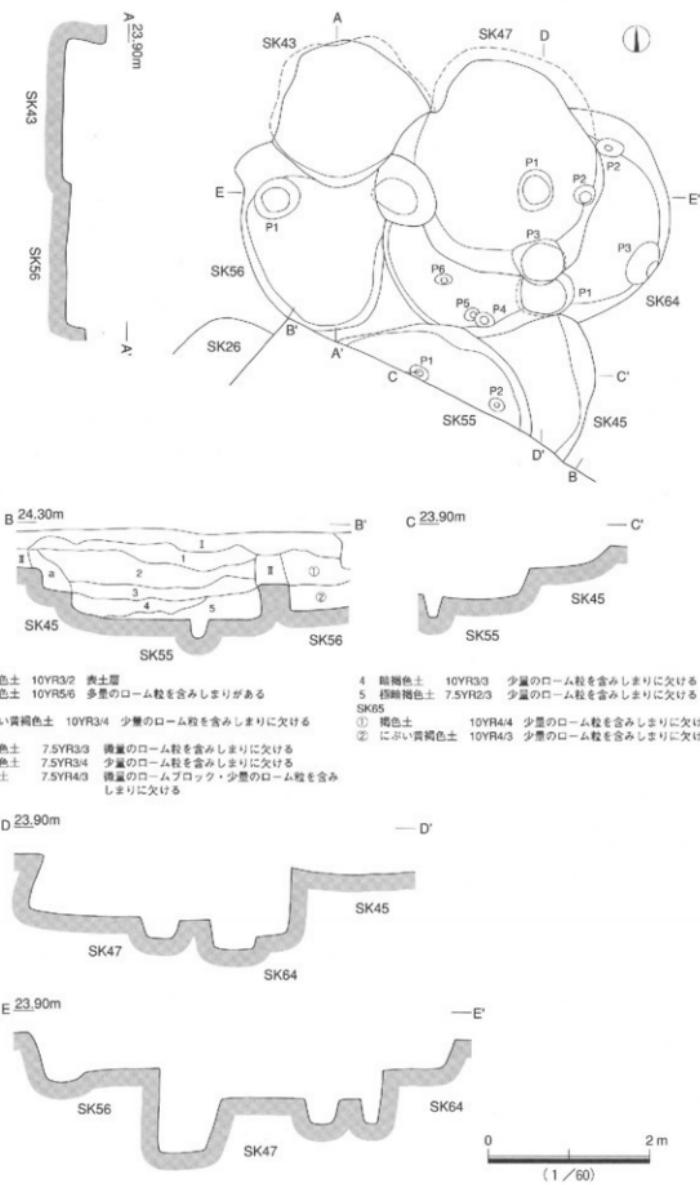


Fig. 80 土坑SK43・45・47・55・56・64実測図

土坑SK55 (Fig.80)

調査区中央3工区に位置する。本跡は南側の大半が未調査区域に広がり、東側でSK45を切って構築している。確認面上面径250×(78)cm、底面径231×(54)cmの円形を呈するものと推定する。深さ最大42cmを測り、壁面は一部内傾して立ち上がる袋状を呈する。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径25×14cmの円形で、深さ25cm。P2は径17×16cmの円形で、深さ22cmである。遺物は縄文中期の土器片と土器片鍤1点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK56 (Fig.80)

調査区中央3工区に位置する。本跡は北側でSK43に切られている。確認面上面径251×155cm、底面径196×137cmの楕円形を呈する。深さ最大48cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径58×48cmの円形で、深さ9cmである。遺物は縄文中期の土器片と土器片鍤3点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK57 (Fig.81)

調査区中央3工区に位置する。本跡は西側でSK61と重複している。確認面上面径143×136cm、底面径121×114cmの楕円形を呈する。深さ最大22cmを測り、壁面は一部内傾して立ち上がる袋状を呈する。底面は平坦で、遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK58 (Fig.81)

調査区中央3工区に位置する。本跡は北西側の一部が未調査区域に広がっている。確認面上面径216×(182)cm、底面径194×(172)cmの円形を呈する。深さ最大59cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径52×41cmの円形で、深さ42cmである。覆土は2層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と磨製石斧1点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK59 (Fig.81)

調査区中央3工区に位置する。本跡は北側でSK73を切って構築している。確認面上面径250×220cm、底面径184×164cmの円形を呈する。深さ最大116cmを測り、壁面は一部内傾して立ち上がる袋状を呈する。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径30×23cmの円形で、深さ56cm。P2は径53×37cmの円形で、深さ52cmである。覆土は4層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK60 (Fig.81・82)

調査区中央3工区に位置する。本跡は南東側の約半分が未調査区域に広がっている。確認面上面径200×(136)cm、底面径162×(118)cmの円形を呈するものと推定する。深さ最大41cmを測り、壁面は一部内傾して立ち上がる袋状を呈する。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径53×50cmの円形で、深さ62cmである。覆土は3層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

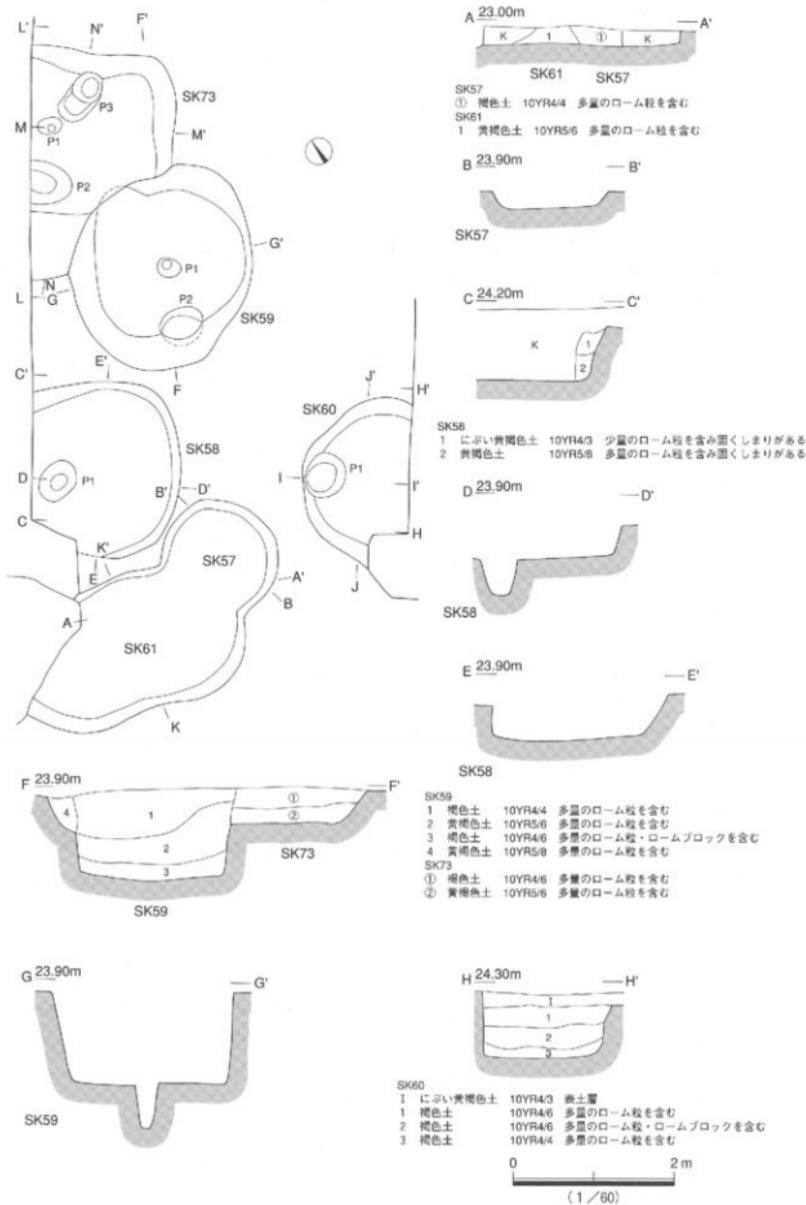


Fig. 81 土坑SK57・58・59・60・61・73実測図(1)

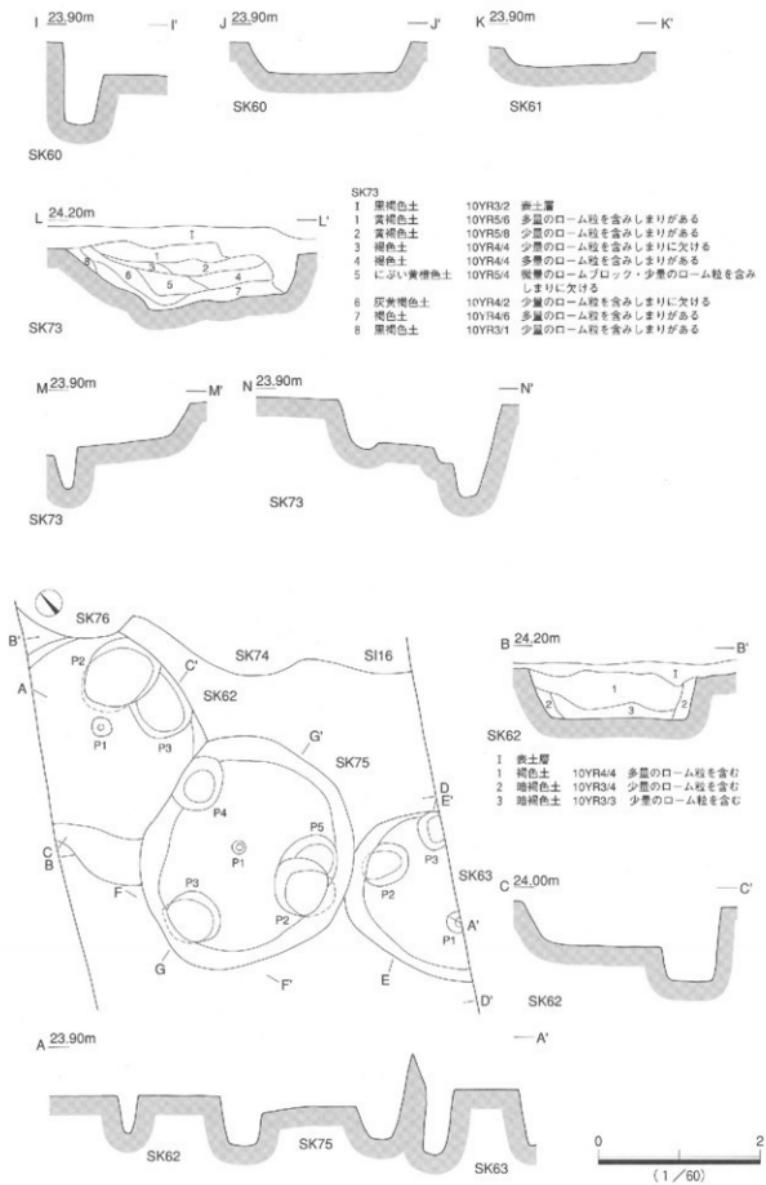


Fig. 82 土坑SK60・61・73(2)、SK62・63・75(1)実測図

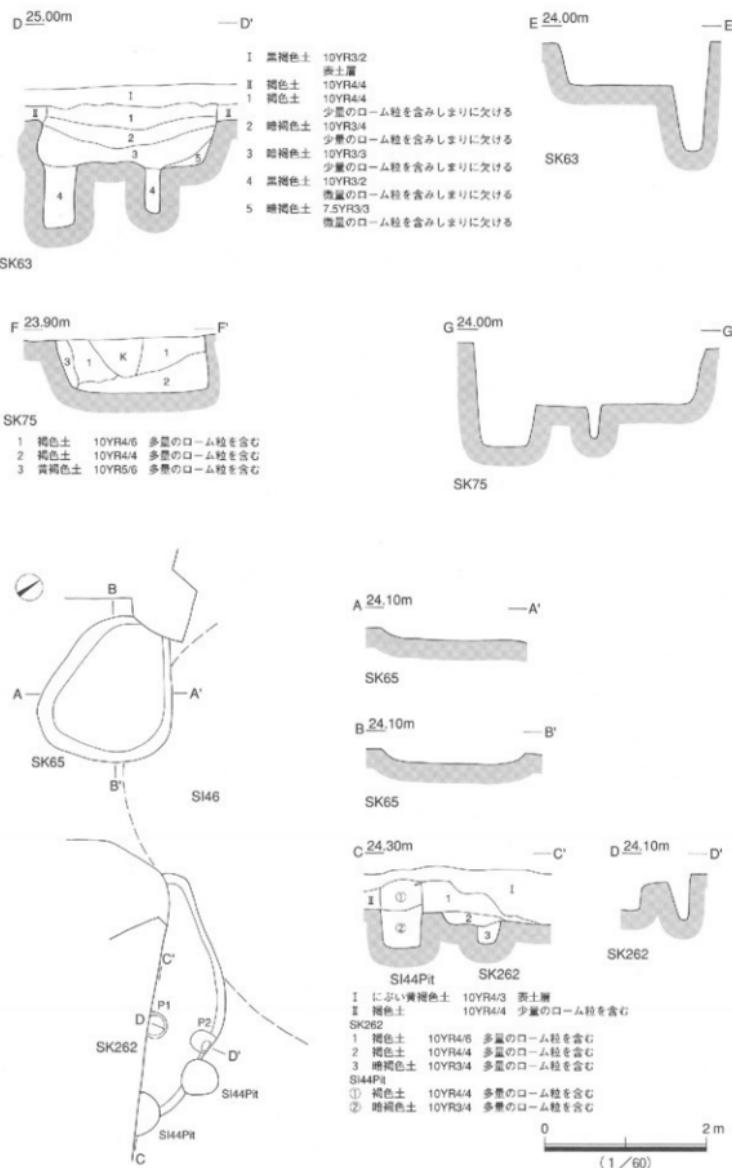


Fig. 83 土坑SK63・75(2)、SK65・262実測図

土坑SK61 (Fig.81・82)

調査区中央3工区に位置する。本跡は北西側の一部が未調査区域に広がり、東側でSK57と重複している。確認面上面径287×166cm、底面径267×152cmの楕円形を呈する。確認面からの深さ最大21cmを測り、壁面は内傾して立ち上がる。底面は平坦で、遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。

土坑SK62 (Fig.82)

調査区中央3工区に位置する。本跡は北西側の一部が未調査区域に広がり、南側でSK75に切られている。確認面上面径315×(197)cm、底面径255×(186)cmの楕円形を呈する。深さ最大55cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが3ヶ所検出された。P1は径24×24cmの円形で、深さ46cm。P2は径91×78cmの円形で、深さ69cm。P3は径90×67cmの円形で、深さ45cmである。覆土は3層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と土器片錐1点が覆土から出土した。

土坑SK63 (Fig.82・83)

調査区中央3工区に位置する。本跡は南東側の大半が未調査区域に広がっている。確認面上面径207×(125)cm、底面径185×(110)cmの楕円形を呈するものと推定する。底面が外側に張り出した袋状で、確認面からの深さ最大59cmを測り、壁面は一部内傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが3ヶ所検出された。P1は径21×(16)cmの円形で、深さ66cm。P2は径59×50cmの円形で、深さ76cm。P3は径45×(29)cmの円形で、深さ77cmである。覆土は5層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と土器片錐1点が覆土から出土した。

土坑SK64 (Fig.80)

調査区中央3工区に位置する。本跡は北西側でSK47に切られている。確認面上面径350×250cm、底面径330×200cmの楕円形を呈する。深さ最大50cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが6ヶ所検出された。P1は径61×(39)cmの円形で、深さ51cm。P2は径35×20cmの円形で、深さ12cm。P3は径58×31cmの円形で、深さ17cm。P4は径24×19cmの円形で、深さ37cm。P5は径19×13cmの円形で、深さ11cm。P6は径22×14cmの円形で、深さ12cmである。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E2式期と推定される。

土坑SK65 (Fig.83)

調査区中央3工区に位置する。本跡は北側の一部が未調査区域に広がり、東側でSI46に大きく切られている。確認面上面径182×142cm、底面径160×114cmの楕円形を呈する。深さ最大16cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設は検出されていない。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK66 (Fig.84)

調査区中央3工区に位置する。本跡は北西側の大半が未調査区域に広がっている。確認面上面径231×(93)cm、底面径162×(49)cmの楕円形を呈するものと推定する。深さ最大52cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径30×27cmの円形で、深さ15cm。P2は径27×29cmの円形で、深さ27cmである。覆土は3層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E2式期と推定される。

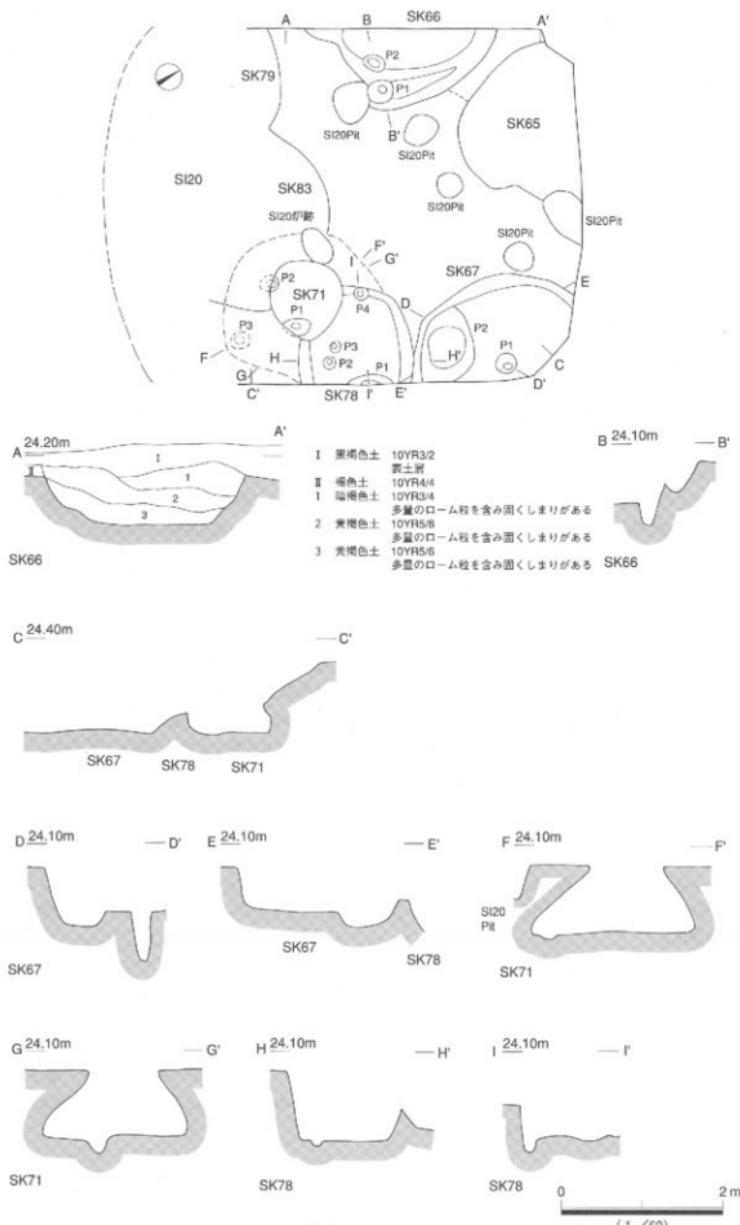


Fig. 84 土坑SK66・67・71・78実測図

土坑SK67 (Fig.84)

調査区中央3工区に位置する。本跡は東側の大半が未調査区域に広がっている。確認面上面径220×(130)cm、底面径204×(112)cmの円形を呈する。深さ最大58cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径26×25cmの円形で、深さ60cm。P2は径90×64cmの円形で、深さ18cmである。覆土は3層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と土器片錐3点が覆土から出土した。

土坑SK68 (Fig.85)

調査区中央3工区に位置する。本跡は南側でSK69に切られている。確認面上面径220×171cm、底面径206×160cmの楕円形を呈する。深さ最大14cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが3ヶ所検出された。P1は径70×73cmの円形で、深さ54cm。P2は径57×56cmの円形で、深さ66cm。P3は径68×48cmの円形で、深さ63cmである。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。

土坑SK69 (Fig.85)

調査区中央3工区に位置する。本跡は北西側の大半が未調査区域に広がっている。北側でSK68を切って構築している。確認面上面径360×250cm、底面径(340)×222cmの楕円形を呈する。深さ最大53cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが7ヶ所検出された。P1は径31×25cmの円形で、深さ61cm。P2は径100×84cmの円形で、深さ56cm。P3は径33×(22)cmの円形で、深さ50cm。P4は径39×34cmの円形で、深さ67cm。P5は径24×22cmの円形で、深さ54cm。P6は径59×(46)cmの円形で、深さ119cm。P7は径55×(41)cmの円形で、深さ53cmである。覆土は5層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と土器片錐2点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK70 (Fig.85)

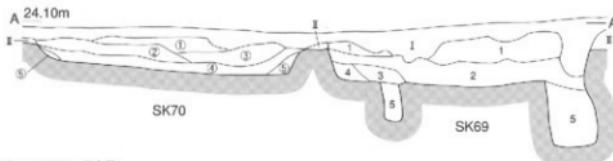
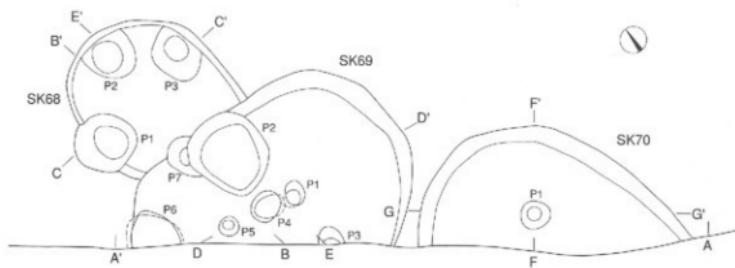
調査区中央3工区に位置する。本跡は南西側の大半が未調査区域に広がっている。確認面上面径323×(146)cm、底面径288×(124)cmの円形を呈するものと推定する。深さ最大44cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径38×36cmの円形で、深さ70cmである。覆土は5層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK71 (Fig.84・213)

調査区中央3工区に位置する。本跡は東側でSK78に切られている。確認面上面径96×90cm、底面径186×182cmの円形を呈する。底面が外側に張り出した稜状で、確認面からの深さ最大82cmを測り、壁面は内傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが3ヶ所検出された。P1は径30×20cmの円形で、深さ21cm。P2は径22×20cmの円形で、深さ11cmである。P3は径25×20cmの円形で、深さ5cmである。覆土は4層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と土器片錐2点、磨石1点が覆土から出土した。阿玉台II式期と推定される。

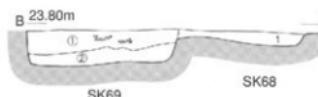
土坑SK72 (Fig.86)

調査区中央3工区に位置する。本跡は北西側が未調査区域に広がっている。SK76・77を切って構築している。確認面上面径242×(154)cm、底面径200×(109)cmの楕円形を呈する。深さ最大98cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。センター・ピットのP1は径52×(34)cmの円形で、深さ23cmである。覆土は5層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と土器片錐3点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

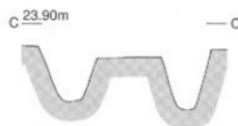


- I 黒褐色土 10YR3/2 表土層
 II 黄褐色土 10YR5/6 多量のローム粒を含みしまりがある
 SK68
 1 棕褐色土 7.5YR3/4 微量のローム・ローム・クルト・少量のローム柱を含みしまりに欠ける
 2 棕褐色土 10YR3/3 微量のローム柱を含みしまりに欠ける
 3 棕褐色土 7.5YR3/3 微量のローム柱を含みしまりに欠ける
 4 棕色土 7.5YR3/4 少量のローム柱を含みしまりに欠ける
 5 棕褐色土 7.5YR2/3 微量のローム柱を含みしまりに欠ける

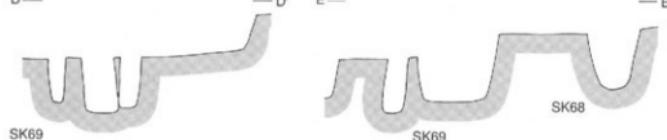
- SK70
 ① 棕色土 7.5YR4/3 少量のローム柱を含みしまりに欠ける
 ② 棕褐色土 7.5YR3/3 少量のローム・ローム・クルト・少量のローム柱を含みしまりに欠ける
 ③ 棕褐色土 7.5YR3/4 少量のローム柱を含みしまりに欠ける
 ④ 棕色土 7.5YR4/3 少量のローム柱を含みしまりに欠ける
 ⑤ 棕褐色土 7.5YR4/4 少量のローム柱を含みしまりに欠ける



- SK68
 1 黄褐色土 10YR5/6 多量のローム粒を含む
 SK69
 ① 棕色土 10YR4/4 多量のローム柱を含む
 ② 棕色土 10YR4/6 多量のローム柱を含む



D 23.90m — D'



F 24.00m — F'



Fig. 85 土坑SK68・69・70実測図

土坑SK73 (Fig.81・82)

調査区中央3工区に位置する。本跡は北西側が未調査区域に広がり、南側でSK59に切られている。確認面上面径281×(174)cm、底面径176×(148)cmの方形を呈するものと推定する。深さ最大66cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが3ヶ所検出された。P1は径30×22cmの円形で、深さ51cm。P2は径(52)×50cmの円形で、深さ22cm。P3は径67×38cmの円形で、深さ68cmである。覆土は8層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。

土坑SK74 (Fig.86)

調査区中央3工区に位置する。本跡は北側でSK76に切られて構築される。確認上面径256×183cm、底面径204×160cmの楕円形を呈する。深さ最大63cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが4ヶ所検出された。P1は径23×21cmの円形で、深さ58cm。P2は径96×63cmの円形で、深さ68cm。P3は径90×62cmの円形で、深さ85cm。P4は径56×50cmの円形で、深さ40cmである。遺物は縄文中期の土器片と土器片鍤3点が覆土から出土した。加曾利E2式期と推定される。

土坑SK75 (Fig.82・83)

調査区中央3工区に位置する。本跡は北側でSK62を切って構築している。確認上面径292×245cm、底面径244×202cmの楕円形を呈する。深さ最大78cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが5ヶ所検出された。P1は径16×16cmの円形で、深さ41cm。P2は径74×66cmの円形で、深さ68cm。P3は径66×57cmの円形で、深さ52cm。P4は径70×50cmの円形で、深さ36cm。P5は径58×(31)cmの円形で、深さ39cmである。覆土は3層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と土器片鍤2点、土製円盤1点、磨石1点が覆土から出土した。加曾利E2式期と推定される。

土坑SK76 (Fig.86)

調査区中央3工区に位置する。本跡は北西側の一部が未調査区域に広がっている。SK72に切られ、SK62・74を切って構築している。確認上面径191×156cm、底面径170×140cmの円形を呈する。深さ最大21cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。サイドピットのP1は径44×39cmの円形で、深さ36cmである。覆土は3層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と土器片鍤4点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK77 (Fig.86・87)

調査区中央3工区に位置する。本跡は西側でSK72に切られ、東側でSK81を切って構築している。確認上面径310×241cm、底面径263×218cmの円形を呈する。深さ最大71cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが5ヶ所検出された。P1は径60×57cmの円形で、深さ15m。P2は径62×52cmの円形で、深さ38cm。P3は径54×50cmの円形で、深さ26cm。P4は径25×18cmの円形で、深さ34cm。P5は径64×53cmの円形で、深さ52cmである。遺物は縄文中期の土器片と土器片鍤3点、磨石2点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK78 (Fig.84)

調査区中央3工区に位置する。本跡は南西側が未調査区域に広がり、東側でSK71を切って構築している。確認面上面径141×(119)cm、底面径110×(110)cmの楕円形を呈する。深さ最大45cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが4ヶ所検出された。P1は径54×(11)cmの円形で、深さ2cm。P2は径16×15cmの円形で、深さ8cm。P3は径13×13cmの円形で、深さ13cm。P4は径18×15cmの円形で、深さ17cmである。覆土は單一層からなる自然堆積である。遺物は縄文前期と中期の土器片が覆土から出土した。

土坑SK79 (Fig.87・88)

調査区中央3工区に位置する。本跡は北西側の大半が未調査区域に広がっている。確認面上面径191×112cm、底面径168×90cmの楕円形を呈する。深さ最大48cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが3ヶ所検出された。P1は径85×(36)cmの円形で、深さ28cm。P2は径70×48cmの円形で、深さ23cm。P3は径53×42cmの円形で、深さ48cmである。覆土は4層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と土器片錐2点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK80 (Fig.87・88)

調査区中央3工区に位置する。本跡は東側でSK83を切っている。確認面上面径265×237cm、底面径248×227cmの楕円形を呈する。深さ最大59cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが3ヶ所検出された。P1は径62×49cmの楕円形で、深さ23cm。P2は径55×52cmの円形で、深さ15cm。P3は径42×38cmの円形で、深さ19cmである。遺物は縄文中期の土器片と土器片錐1点が覆土から出土した。加曾利E2式期と推定される。

土坑SK81 (Fig.86・87)

調査区中央3工区に位置する。本跡は西側でSK77に切られている。確認面上面径395×250cm、底面径372×193cmの楕円形を呈する。深さ最大37cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径(32)×(17)cmの円形で、深さ20cm。P2は径76×50cmの円形で深さ59cmである。遺物は縄文中期の土器片と土器片錐1点、石皿1点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK82 (Fig.86・87)

調査区中央3工区に位置する。本跡は南西側の大半が未調査区域に広がっている。確認面上面径(202)×(86)cm、底面径(199)×(52)cmの楕円形を呈するものと推定する。深さ最大44cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが3ヶ所検出された。P1は径54×(31)cmの円形で、深さ52cm。P2は径54×38cmの円形で、深さ79cm。P3は径70×(35)cmの円形で、深さ45cmである。遺物は縄文中期の土器片と土器片錐1点が覆土から出土した。加曾利E2式期と推定される。

土坑SK83 (Fig.87・88)

調査区中央3工区に位置する。本跡は西側でSK80に切られている。確認面上面径232×(230)cm、底面径208×(201)cmの楕円形を呈する。深さ最大32cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径15×13cmの円形で、深さ34cm。P2は径72×58cmの円形で、深さ42cm。遺物は縄文中期の土器片と土器片錐2点が覆土から出土した。

土坑SK84 (Fig.87・88)

調査区中央3工区に位置する。本跡は北西側の大半が未調査区域に広がっている。確認面上面径173×(63)cm、底面径180×(60)cmの円形を呈するものと推定する。底面が東側に張り出した袋状で、確認面からの深さ最大25cmを測り、壁面は内傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は5層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と磨石1点が覆土から出土した。阿玉台IV式期と推定される。

土坑SK85 (Fig.86・87)

調査区中央3工区に位置する。本跡は南側でSI16に大半が切られている。確認面上面径(234)×(78)cm、底面径(205)×(64)cmの楕円形を呈するものと推定する。深さ最大28cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径68×55cmの円形で、深さ37cmである。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。

土坑SK86 (Fig.87・88・213)

調査区中央3工区に位置する。本跡南側の一部が未調査区域に広がり、北側でSK80に切られている。確認面上面径228×(250)cm、底面径230×(195)cmの円形を呈する。底面が東側に張り出した袋状で、確認面からの深さ最大70cmを測り、壁面は内傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが4ヶ所検出された。P1は径68×50cmの円形で、深さ24cm。P2は径48×38cmの円形で、深さ23cm。P3は径74×40cmの円形で、深さ11cm。P4は径15×13cmの円形で、深さ9cmである。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK87 (Fig.88・89)

調査区中央3工区に位置する。本跡は西側でSK90に切られている。確認面上面径246×(88)cm、底面径(246)×(72)cmの楕円形を呈する。深さ最大54cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、遺物は縄文中期の土器片と打製石斧1点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK88 (Fig.88・89)

調査区中央3工区に位置する。本跡は南東側の約半分が未調査区域に広がっている。確認面上面径300×(198)cm、底面径260×(189)cmの楕円形を呈する。深さ最大65cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径54×50cmの円形で、深さ23cm。P2は径66×(42)cmの円形で、深さ34cmである。遺物は縄文中期の土器片と土器片鍾1点が覆土から出土した。

土坑SK89 (Fig.88・89)

調査区中央3工区に位置する。本跡は北西側の大半が未調査区域に広がっている。確認面上面径(211)×(130)cm、底面径(211)×(107)cmの楕円形を呈する。深さ最大54cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径60×50cmの円形で、深さ50cmである。覆土は2層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。

土坑SK90 (Fig.88)

調査区中央3工区に位置する。本跡は北西側の一部が未調査区域に広がり、東側でSK87を切って構築している。確認面上面径291×255cm、底面径258×215cmの楕円形を呈する。深さ最大53cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径24×24cmの円形で、深さ45cm。P2は径32×22cmの円形で、深さ38cmである。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

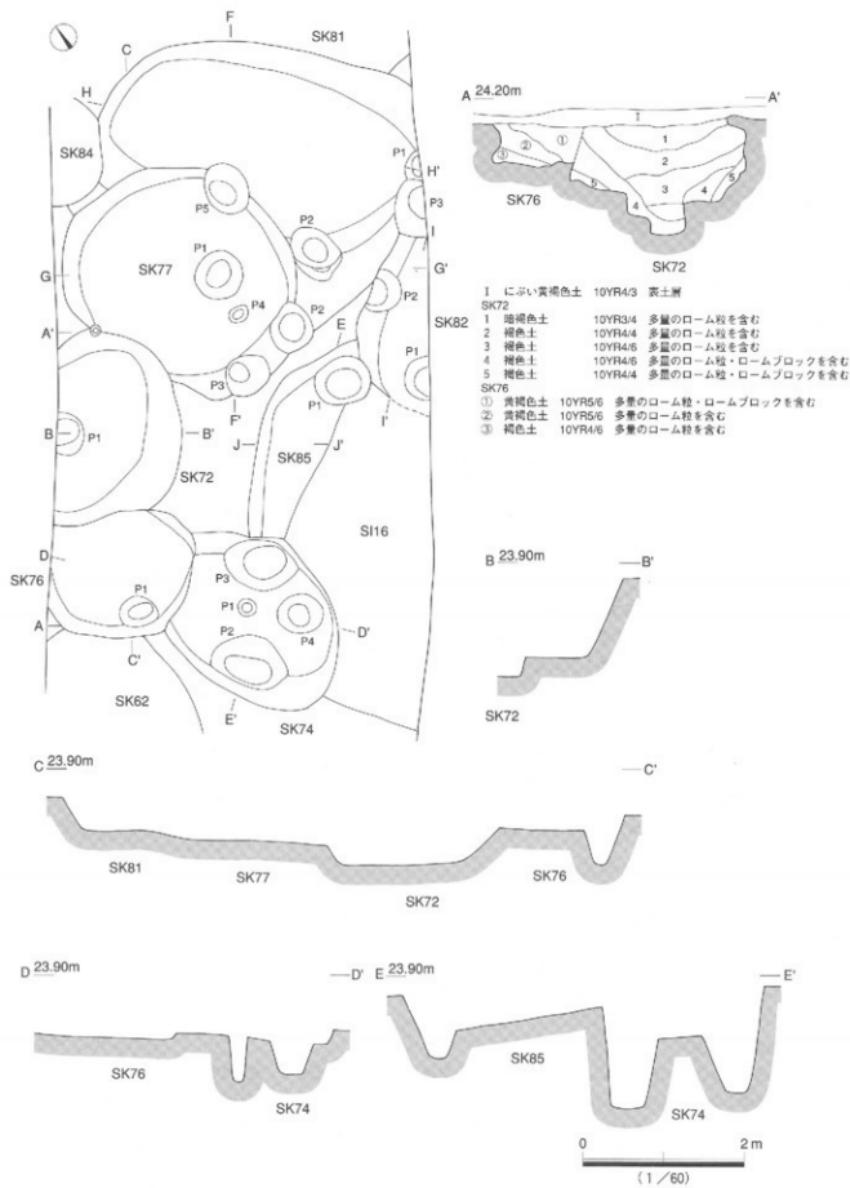


Fig. 86 土坑SK72・74・76・77・81・82・85実測図(1)

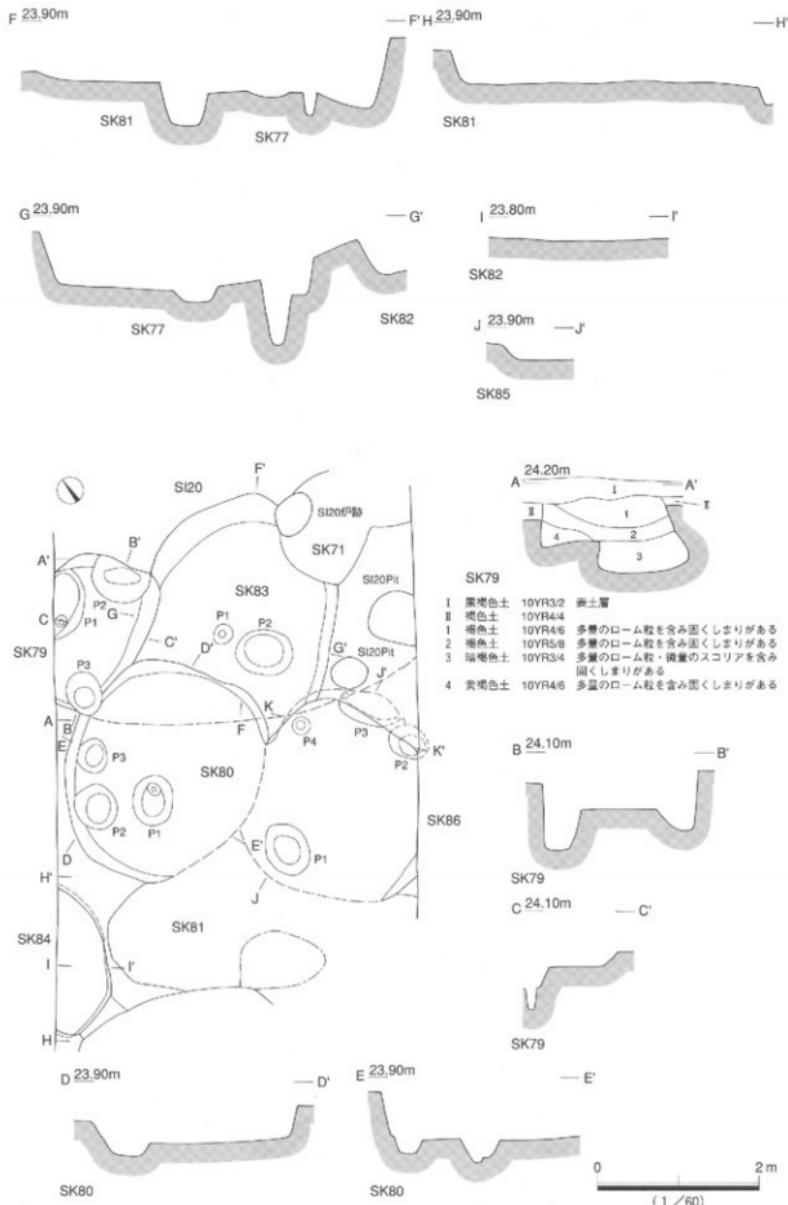


Fig. 87 土坑SK77・81・82・85(2)、SK79・80・83・84・86(1)実測図

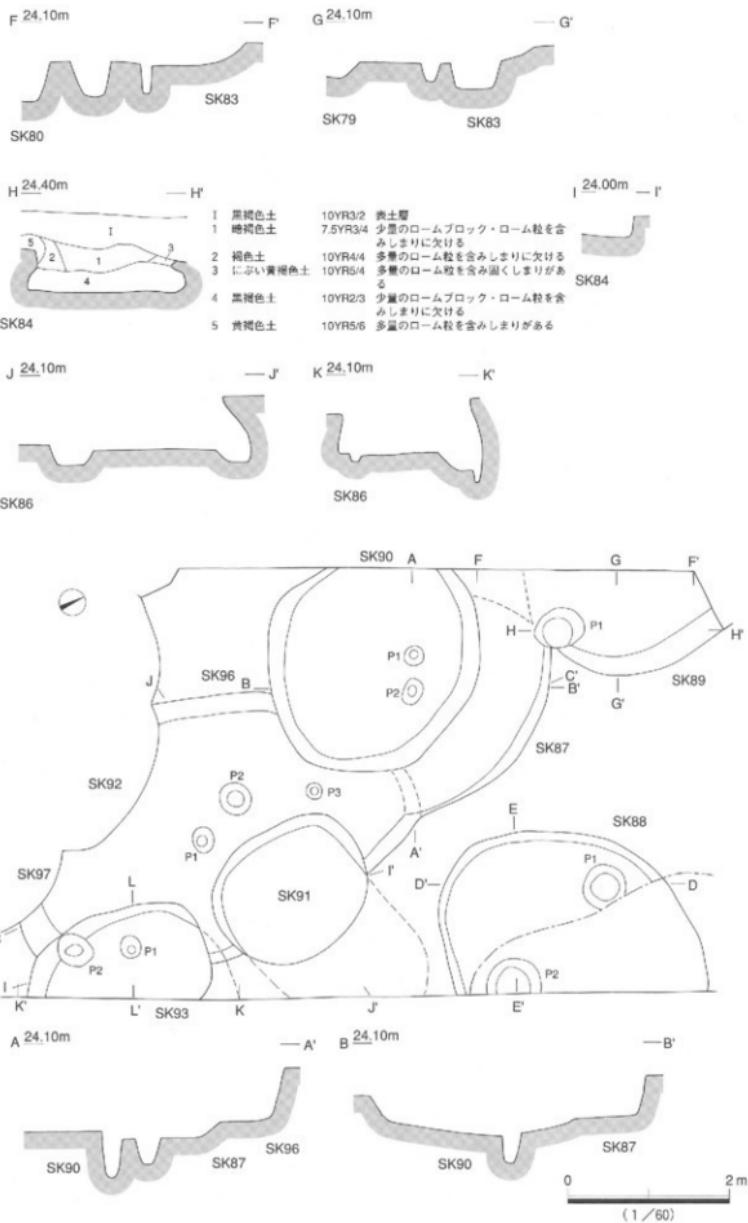


Fig. 88 土坑SK79・80・83・84・86(2)、SK87・88・89・90・91・93・96(1)実測図

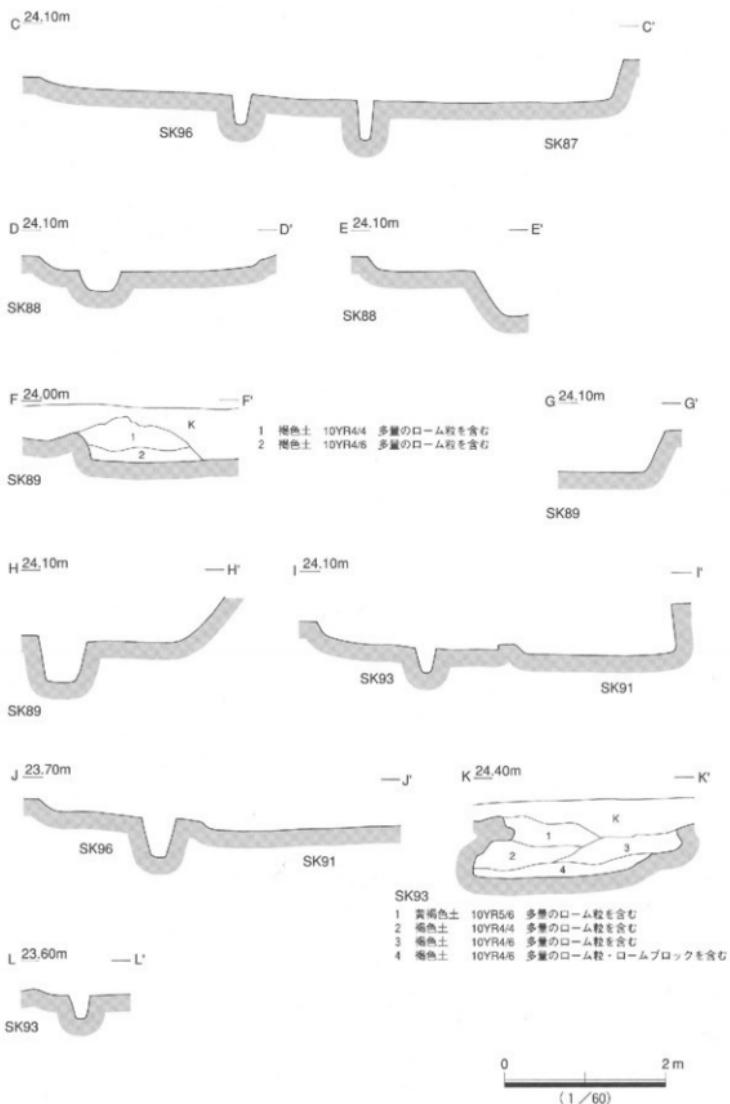


Fig. 89 土坑SK87・88・89・91・93・96実測図(2)

土坑SK91 (Fig.88・89)

調査区中央3工区に位置する。本跡は西側でSK96を切って構築している。確認面上面径197×152cm、底面径(290)×176cmの円形を呈する。深さ最大13cmを測り、壁面は一部内傾して立ち上がる。底面は平坦で、遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。

土坑SK92 (Fig.90)

調査区中央3工区に位置する。本跡はSK94・97に切られている。確認面上面径341×283cm、底面径261×(283)cmの梢円形を呈する。深さ最大64cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが3ヶ所検出された。P1は径32×26cmの円形で、深さ40cm。P2は径50×42cmの円形で、深さ55cm。P3は径53×41cmの円形で、深さ45cmである。覆土は4層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の上器片と下器片錐4点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK93 (Fig.88・89)

調査区中央3工区に位置する。本跡は南東側の大半が未調査区域に広がり、北側でSK96を切って構築している。確認面上面径226×133cm、底面径218×(110)cmの円形を呈する。深さ最大62cmを測り、壁面は北側で内傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径26×26cmの円形で、深さ32cm。P2は径44×38cmの円形で、深さ18cmである。覆土は4層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。

土坑SK94 (Fig.90・91)

調査区中央3工区に位置する。本跡は北西側の一部が未調査区域に広がり、東側でSK92を切って構築している。確認面上面径270×250cm、底面径248×242cmの梢円形を呈する。深さ最大42cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが6ヶ所検出された。P1は径14×14cmの円形で、深さ30cm。P2は径52×49cmの円形で、深さ8cm。P3は径30×27cmの円形で、深さ44cm。P4は径21×(13)cmの円形で、深さ25cm。P5は径11×10cmの円形で、深さ23cm。P6は径35×29cmの円形で、深さ40cmである。覆土は4層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の上器片と下器片錐2点、石皿1点、凹石1点が覆土から出土した。

土坑SK95 (Fig.90)

調査区中央3工区に位置する。本跡は西側でSK101に大半が切られている。確認面上面径213×(54)cm、底面径196×(50)cmの円形を呈する。深さ最大14cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが6ヶ所検出された。P1は径50×46cmの円形で、深さ27cm。P2は径41×33cmの円形で、深さ44cm。P3は径39×25cmの円形で、深さ46cm。P4は径53×49cmの円形で、深さ61cm。P5は径64×50cmの円形で、深さ53cm。P6は径31×28cmの円形で、深さ40cmである。遺物は縄文中期の土器片と土器片錐4点、打製石斧1点が覆土から出土した。加曾利E2式期と推定される。

土坑SK96 (Fig.88・89)

調査区中央3工区に位置する。本跡はSK90・91・93に切られている。確認面上面径510×325cm、底面径458×286cmの梢円形を呈する。深さ最大22cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが3ヶ所検出された。P1は径31×26cmの円形で、深さ36cm。P2は径41×38cmの円形で、深さ48cm。P3は径20×20cmの円形で、深さ48cmである。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。

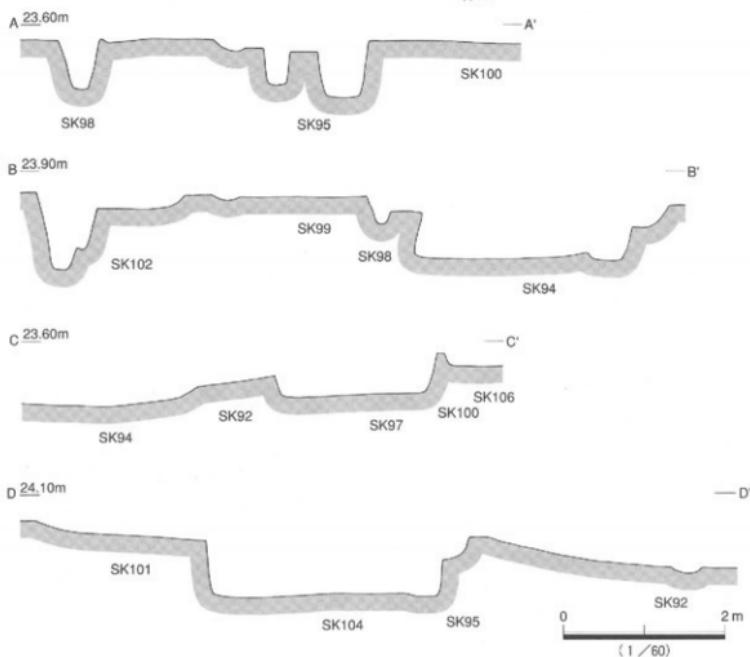
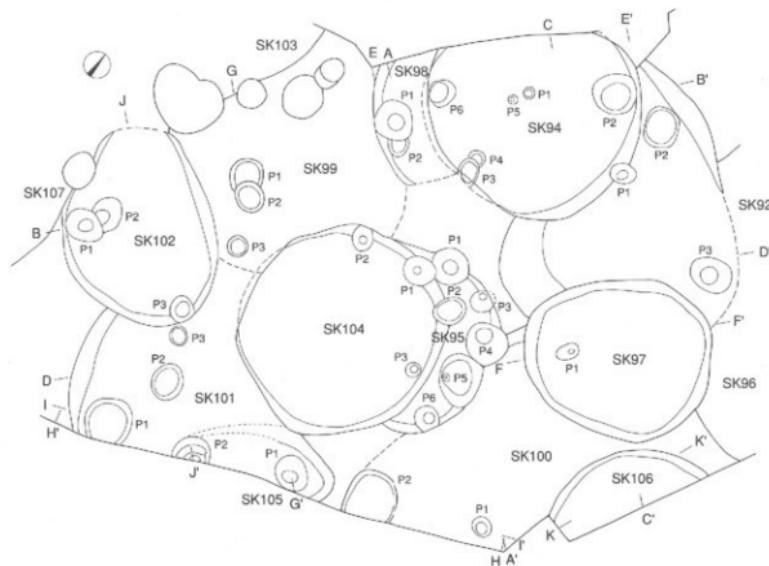


Fig. 90 土坑SK92・94・95・97・98・99・100・101・102・104・105・106実測図(1)

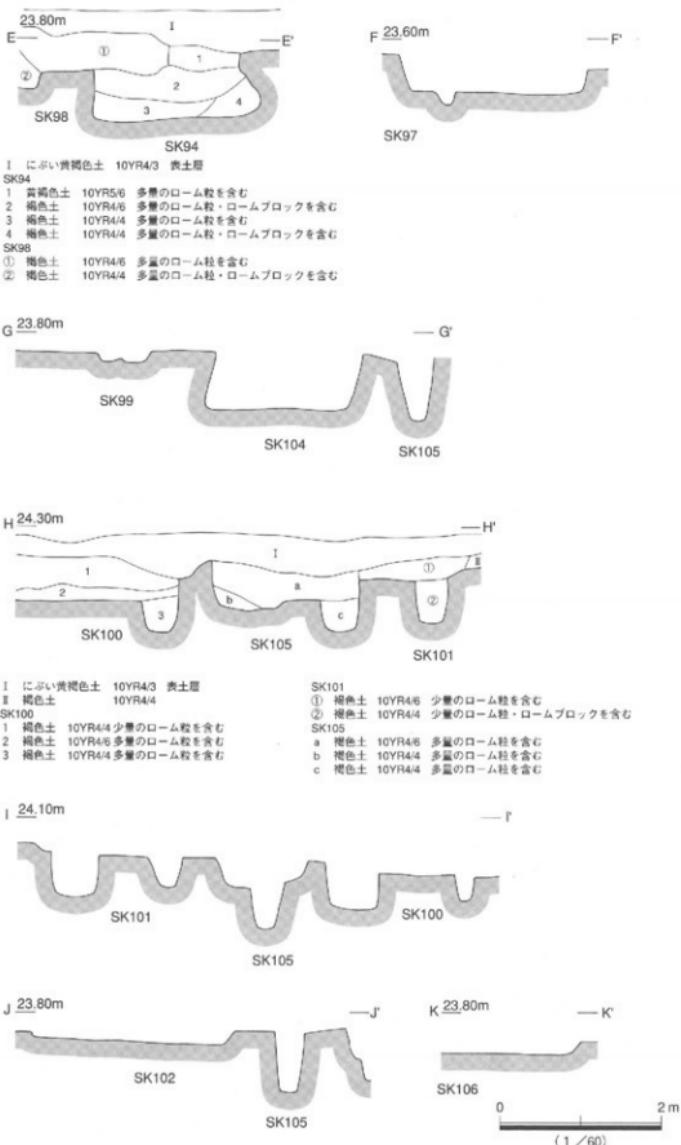


Fig. 91 土坑SK94・97・98・99・100・101・102・104・105・106実測図(2)

土坑SK97 (Fig.90・91)

調査区中央3工区に位置する。本跡はSK92・100を切って構築している。確認面上面径229×189cm、底面径200×154cmの楕円形を呈する。深さ最大52cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径27×20cmの円形で、深さ16cmである。遺物は縄文中期の土器片と土器片錐2点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK98 (Fig.90・91)

調査区中央3工区に位置する。本跡は東側でSK94を切っている。確認面上面径(154)×(68)cm、底面径(154)×(56)cmの円形を呈するするものと推定する。深さ最大21cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径50×47cmの円形で、深さ55cm。P2は径23×(19)cmの円形で、深さ16cmである。覆土は2層確認された。遺物は縄文中期の土器片と磨製石斧1点が覆土から出土した。

土坑SK99 (Fig.90・91)

調査区中央3工区に位置する。本跡は周縁を土坑によって切られている。確認面上面径(308)×(300)cmの楕円形を呈する。深さ最大5cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、内部施設として柱穴状掘り込みが3ヶ所検出された。P1は径48×40cmの円形で、深さ9cm。P2は径38×36cmの円形で、深さ13cm。P3は径26×22cmの円形で、深さ28cmである。遺物は縄文中期の土器片と土器片錐3点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK100 (Fig.90・91)

調査区中央3工区に位置する。本跡は南東側の約半分が未調査区域に広がり、北側でSK97・106に切られている。確認面上面径(404)×(230)cm、底面径(404)×(216)cmの楕円形を呈する。深さ最大21cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径26×24cmの円形で、深さ30cm。P2は径44×(61)cmの円形で、深さ44cmである。覆土は3層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK101 (Fig.90・91)

調査区中央3工区に位置する。本跡は南東側の約半分が未調査区域に広がり、北側でSK102・104に切られている。確認面上面径(380)×(245)cmの円形を呈するものと推定する。深さ最大24cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが4ヶ所検出された。P1は径62×60cmの円形で、深さ10cm。P2は径45×38cmの円形で、深さ20cm。P3は径24×22cmの円形で、深さ15cmである。覆土は2層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と土器片錐2点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK102 (Fig.90・91)

調査区中央3工区に位置する。本跡はSK99・101を切って構築している。確認面上面径218×186cm、底面径(230)×163cmの楕円形を呈する。深さ最大21cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが3ヶ所検出された。P1は径48×40cmの円形で、深さ88cm。P2は径44×36cmの円形で、深さ101cmである。P3は径30×30cmの円形。遺物は縄文中期の土器片と土器片錐2点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK103 (Fig.92)

調査区中央3工区に位置する。本跡は北側の約半分が未調査区域に広がっている。確認面上面径(176)×(110)cm、底面径(166)×(100)cmの楕円形を呈する。確認面からの深さ最大22cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、遺物は縄文中期の土器片と土器片錐8点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK104 (Fig.90・91)

調査区中央3工区に位置する。本跡はSK95・99・101を切って構築している。確認面上面径260×240cm、底面径237×236cmの円形を呈する。深さ最大71cmを測り、壁面は一部内傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが3ヶ所検出された。P1は径37×38cmの円形で、深さ10cm。P2は径23×32cmの円形で、深さ18cm。P3は径17×18cmの円形で、深さ13cmである。遺物は縄文中期の土器片と磨製石斧1点が覆土から出土した。阿玉台Ⅲ式期と推定される。

土坑SK105 (Fig.90・91)

調査区中央3工区に位置する。本跡は南東側の大半が未調査区域に広がっている。確認面上面径112×84cm、底面径91×60cmの楕円形を呈する。深さ最大38cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径42×39cmの円形で、深さ57cmである。P2は径45×(30)cmの円形。覆土は3層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と上器片錐1点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK106 (Fig.90・91)

調査区中央3工区に位置する。本跡は南東側の大半が未調査区域に広がっている。確認面上面径200×(74)cm、底面径180×(70)cmの円形を呈する。深さ最大15cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、遺物は縄文中期の上器片が覆土から出土した。

土坑SK107 (Fig.92)

調査区中央3工区に位置する。確認面上面径251×198cm、底面径206×157cmの楕円形を呈する。深さ最大31cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径27×23cmの円形で、深さ35cm。P2は径41×36cmの円形で、深さ15cmである。遺物は縄文中期の上器片と土器片錐2点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK108 (Fig.92)

調査区中央3工区に位置する。本跡は南側の約半分が未調査区域に広がっている。確認面上面径166×(73)cm、底面径120×(59)cmの円形を呈する。深さ最大73cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径51×40cmの円形で、深さ42cmである。覆土は3層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と土器片錐1点が覆土から出土した。加曾利E2式期と推定される。

土坑SK109 (Fig.92)

調査区中央3工区に位置する。本跡は南西側でSK110に切られている。確認面上面径192×191cm、底面径167×164cmの円形を呈する。深さ最大16cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが3ヶ所検出された。P1は径38×35cmの円形で、深さ28cm。P2は径37×29cmの円形で、深さ26cm。P3は径22×20cmの円形で、深さ14cmである。遺物は縄文中期の上器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK110 (Fig.92)

調査区中央3工区に位置する。本跡は北西側でSK112に切られ、北東側でSK109を切って構築している。確認面上面径253×223cm、底面径223×192cmの円形を呈する。深さ最大32cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径44×40cmの円形で、深さ54cmである。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK111 (Fig.92・93)

調査区中央3工区に位置する。本跡は北側の約半分が未調査区域に広がっている。確認面上面径161×(54)cm、底面径131×(50)cmの円形を呈する。深さ最大23cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径83×(34)cmの円形で、深さ9cmである。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。

土坑SK112 (Fig.92・93)

調査区中央3工区に位置する。本跡は南東側でSK110を切って構築している。確認面上面径220×187cm、底面径174×169cmの円形を呈する。深さ最大63cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径40×33cmの円形で、深さ53cmである。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。

土坑SK113 (Fig.93)

調査区中央3工区に位置する。本跡は南側の大部分が未調査区域に広がり、北東側でSI21に切られている。確認面上面径(156)×(65)cm、底面径(149)×(57)cmの楕円形を呈するものと推定する。深さ最大34cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦である。覆土は4層からなる。遺物は縄文中期の土器片と土器片錐1点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK114 (Fig.93・94)

調査区中央3工区に位置する。本跡は南東側の約半分が未調査区域に広がり、西側でSK115に切られている。確認面上面径187×(111)cm、底面径136×(93)cmの楕円形を呈する。深さ最大41cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦である。覆土は3層からなる。遺物は縄文中期の土器片と土器片錐4点、磨石2点、凹石1点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK115 (Fig.93・94)

調査区中央3工区に位置する。本跡は南側の約半分以上が未調査区域に広がり、東側でSK114を切っている。確認面上面径(207)×(65)cm、底面径(188)×(50)cmの楕円形を呈する。深さ最大33cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦である。覆土は3層からなる。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E2式期と推定される。

土坑SK116 (Fig.93・94)

調査区中央3工区に位置する。本跡は北側の約半分が未調査区域に広がり、東側でSK125を切って構築している。確認面上面径241×(100)cm、底面径231×(100)cmの円形を呈する。深さ最大32cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径42×(23)cmの円形で、深さ53cmである。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK117 (Fig.93・94)

調査区中央3工区に位置する。確認面上面径241×216cm、底面径223×191cmの楕円形を呈する。深さ最大49cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径59×53cmの円形で、深さ27cmである。遺物は縄文中期の土器片と土器片錐1点が覆土から出土した。加曾利E2式期と推定される。

土坑SK118 (Fig.94・95)

調査区中央3工区に位置する。本跡は北側の約半分が未調査区域に広がり、南側でSK121を切って構築している。確認面上面径253×(158)cm、底面径206×(112)cmの円形を呈する。深さ最大51cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径(38)×32cmの円形で、深さ38cm。P2は径32×(19)cmの円形で、深さ43cmである。覆土は4層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と土器片錐3点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK119 (Fig.94・95)

調査区中央3工区に位置する。本跡は東側でSK124に切られ、北側でSK121を切って構築している。確認上面面径259×225cm、底面径235×200cmの楕円形を呈する。深さ最大63cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが4ヶ所検出された。P1は径22×20cmの円形で、深さ63cm。P2は径82×71cmの円形で、深さ72cm。P3は径89×60cmの円形で、深さ84cm。P4は径62×35cmの円形で、深さ47cmである。覆土は4層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK120 (Fig.94・95)

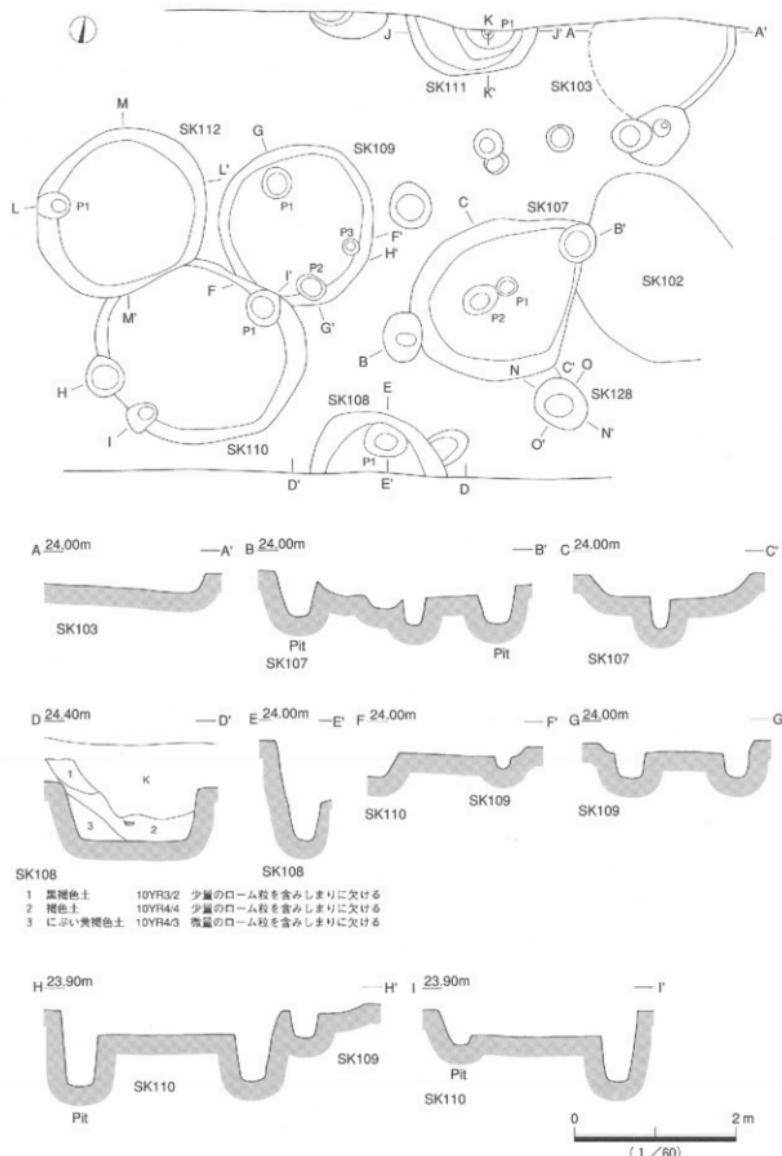
調査区中央3工区に位置する。本跡は南側の一部が未調査区域に広がっている。確認面上面径274×240cm、底面径216×210cmの隅丸方形を呈する。深さ最大60cmを測り、壁面は一部内傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径35×28cmの円形で、深さ23cm。P2は径(54)×54cmの円形で、深さ56cmである。覆土は5層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と礫器1点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK121 (Fig.94・95)

調査区中央3工区に位置する。本跡は北側でSK118に、南側でSK119によって切られている。確認面上面径150×124cm、底面径(145)×(58)cmの楕円形を呈するものと推定する。深さ最大18cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E式期と推定される。

土坑SK122 (Fig.94・95・96)

調査区中央3工区に位置する。本跡は北側の一部が未調査区域に広がっている。確認面上面径225×218cm、底面径197×196cmの円形を呈する。深さ最大27cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で柱穴状掘り込みが3ヶ所検出された。P1は径35×32cmの円形で、深さ46cm。P2は径78×69cmの円形で、深さ68cm。P3は径83×54cmの円形で、深さ27cmである。P3は後世のものか。覆土は2層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と土器片錐3点、磨製石斧1点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。



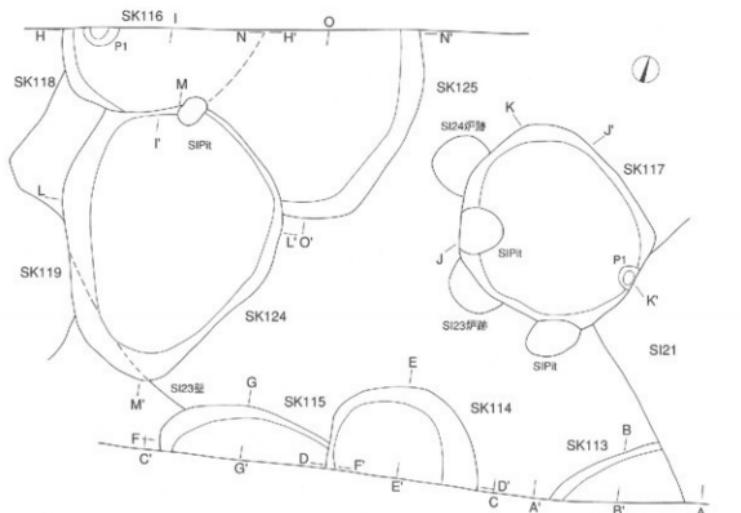
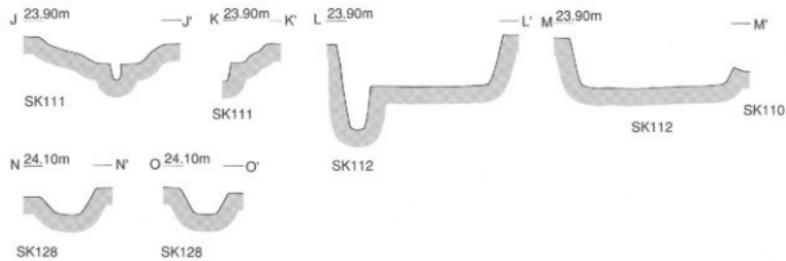


Fig. 93 土坑SK111・112・128(2)、SK113・114・115・116・117・124・125(1)実測図

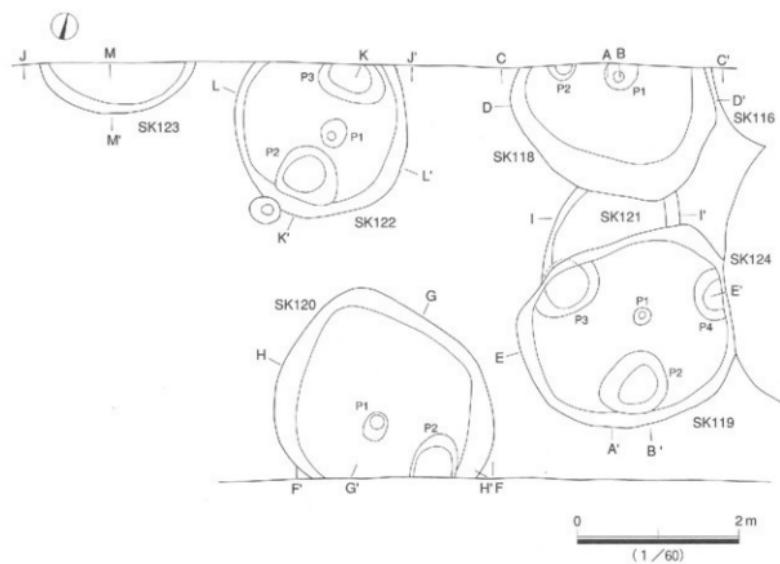
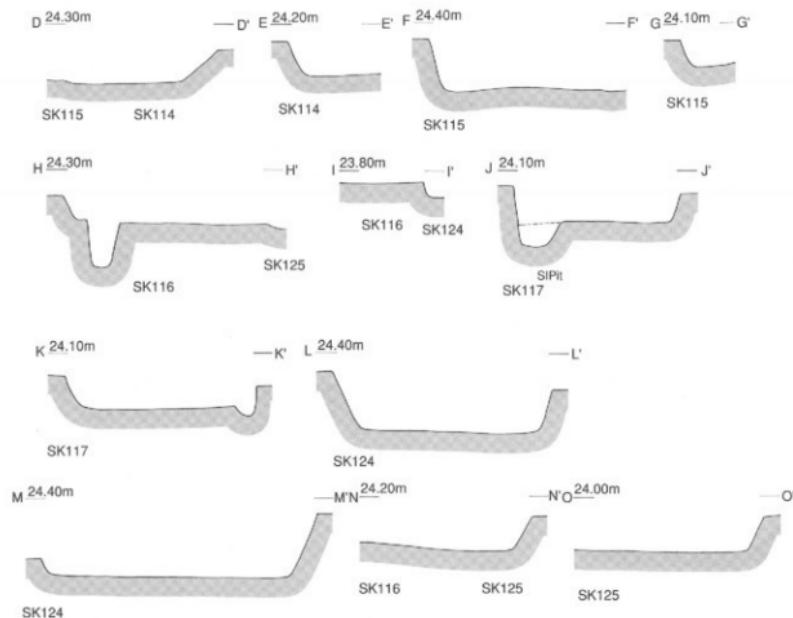


Fig. 94 土坑SK114・115・116・117・124・125(2)、SK118・119・120・121・122・123(1)実測図

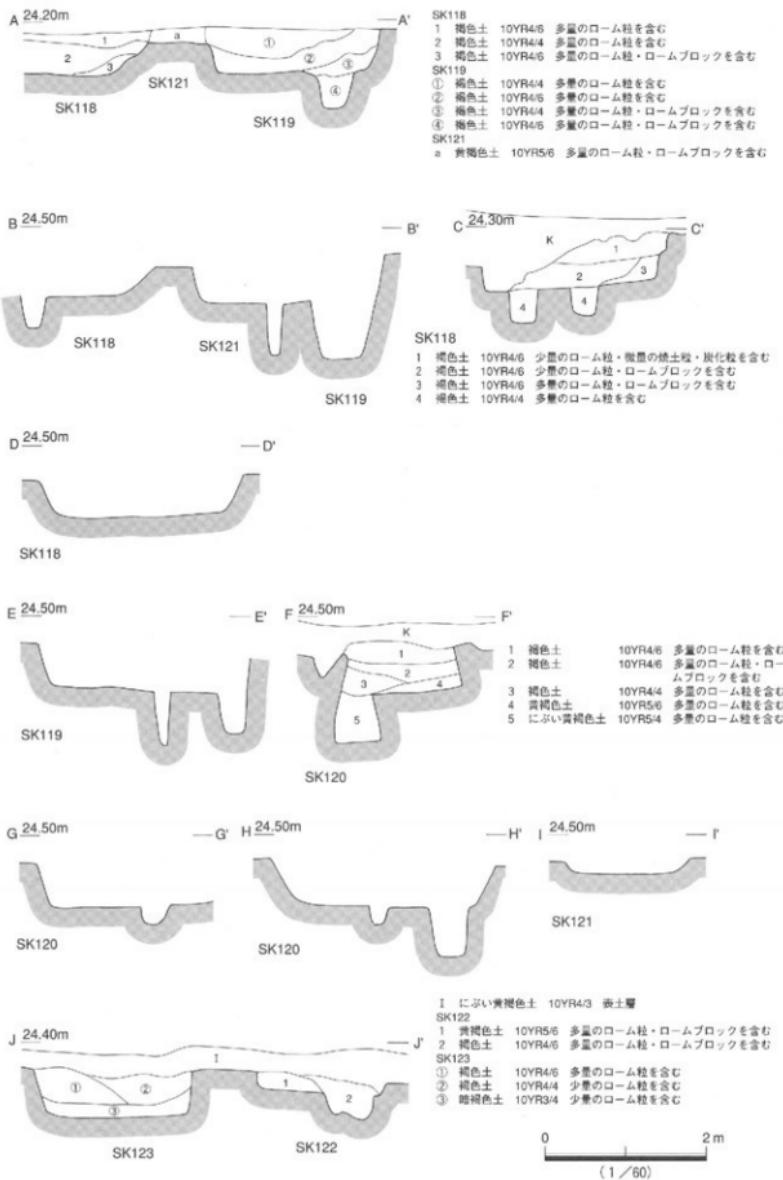


Fig. 95 土坑SK118・119・120・121・122・123実測図(2)

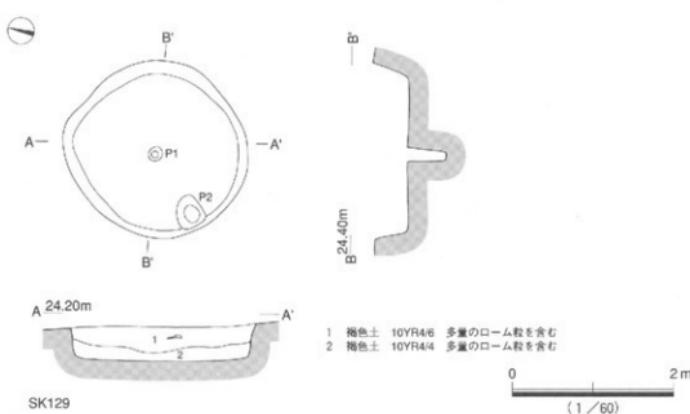
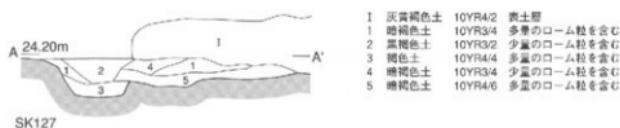
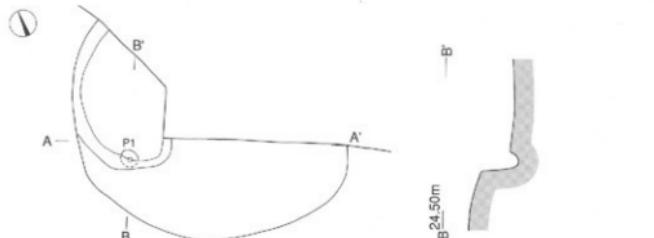
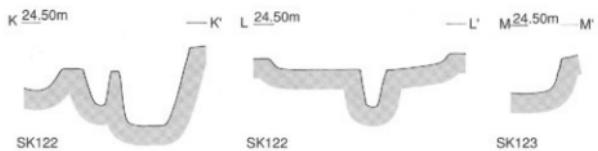


Fig. 96 土坑SK122・123(3)、SK127・129実測図

土坑SK123 (Fig.94・95・96)

調査区中央3工区に位置する。本跡は北側の半分以上が未調査区域に広がっている。確認面上面径188×(64)cm、底面径162×(50)cmの楕円形を呈するものと推定する。深さ最大43cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は3層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の上器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK124 (Fig.93・94)

調査区中央3工区に位置する。本跡は北東側でSK125を切って構築している。確認面上面径332×264cm、底面径293×217cmの楕円形を呈する。深さ最大74cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、遺物は縄文中期の土器片と土器片錐1点が覆土から出土した。加曾利E2式期と推定される。

土坑SK125 (Fig.93・94)

調査区中央3工区に位置する。本跡は北側の約半分が未調査区域に広がり、西側でSK116・124に切られている。確認面上面径(231)×(227)cm、底面径(210)×(198)cmの楕円形を呈するものと推定する。深さ最大49cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK126 (Fig.73・74)

調査区中央3工区に位置する。本跡は北東側の一部が未調査区域に広がり、西側でSK34に切られている。確認面上面径(380)×318cm、底面径(335)×280cmの楕円形を呈する。確認面からの深さ最大40cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが10ヶ所検出された。P1は径36×28cmの円形で、深さ64cm。P2は径43×38cmの円形で、深さ32cm。P3は径57×45cmの円形で、深さ10cm。P4は径28×21cmの円形で、深さ50cm。P5は径31×28cmの円形で、深さ19cm。P6は径55×40cmの円形で、深さ55cm。P7は径31×22cmの円形で、深さ39cm。P8は径66×(44)cmの円形で、深さ49cm。P9は径43×38cmの円形で、深さ57cm。P10は径33×(21)cmの円形で、深さ39cmである。覆土は5層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と土器片錐1点が覆土から出土した。

土坑SK127 (Fig.96)

調査区西側2工区に位置する。本跡は東側の約半分が未調査区域に広がっている。確認面上面径(300)×330cm、底面径162×76cmの楕円形を呈するものと推定する。深さ最大50cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径23×18cmの円形で、深さ12cmである。覆土は5層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と土器片錐2点が覆土から出土した。

土坑SK128 (Fig.92・93)

調査区中央3工区に位置する。確認面上面径69×58cm、底面径35×27cmの楕円形を呈する。深さ最大63cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、遺物は縄文中期の上器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK129 (Fig.96)

調査区南東側4工区に位置する。確認面上面径229×217cm、底面径204×191cmの円形を呈する。深さ最大43cmを測り、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径17×16cmの円形で、深さ48cm。P2は径10×31cmの円形で、深さ49cmである。覆土は2層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK130 (Fig.97)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は北側の約半分が未調査区域に広がっている。確認面上面径216×(128)cm、底面径189×(135)cmの楕円形を呈するものと推定する。深さ最大49cmを測り、底面が一部外側に張り出した袋状で、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径25×20cmの円形で、深さ35cm。P2は径54×50cmの円形で、深さ44cmである。覆土は2層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK131 (Fig.98)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は南側の約半分が未調査区域に広がっている。確認面上面径229×(170)cm、底面径187×(154)cmの楕円形を呈するものと推定される。底面が外側に張り出した袋状で、確認面からの深さ最大43cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径28×26cmの円形で、深さ28cm。P2は径88×70cmの円形で、深さ56cmである。覆土は3層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK132 (Fig.99)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は東側でSK133を切って構築している。確認面上面径223×211cm、底面径198×(195)cmの円形を呈する。深さ最大73cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが4ヶ所検出された。P1は径25×23cmの円形で、深さ20cm。P2は径40×37cmの円形で、深さ10cm。P3は径31×30cmの円形で、深さ33cm。P4は径30×30cmの円形で、深さ28cmである。覆土は単一層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK133 (Fig.99)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は西側でSK132に切られている。確認面上面径220×(126)cm、底面径200×(110)cmの円形を呈する。深さ最大36cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は2層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。阿玉台II式期と推定される。

土坑SK134 (Fig.99)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は北側の約半分が未調査区域に広がっている。確認面上面径154×(66)cm、底面径129×(55)cmの円形を呈する。深さ最大17cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E式期と推定される。

土坑SK135 (Fig.99)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は北側の約半分が未調査区域に広がっている。確認面上面径200×(64)cm、底面径166×(53)cmの円形を呈するものと推定する。深さ最大18cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

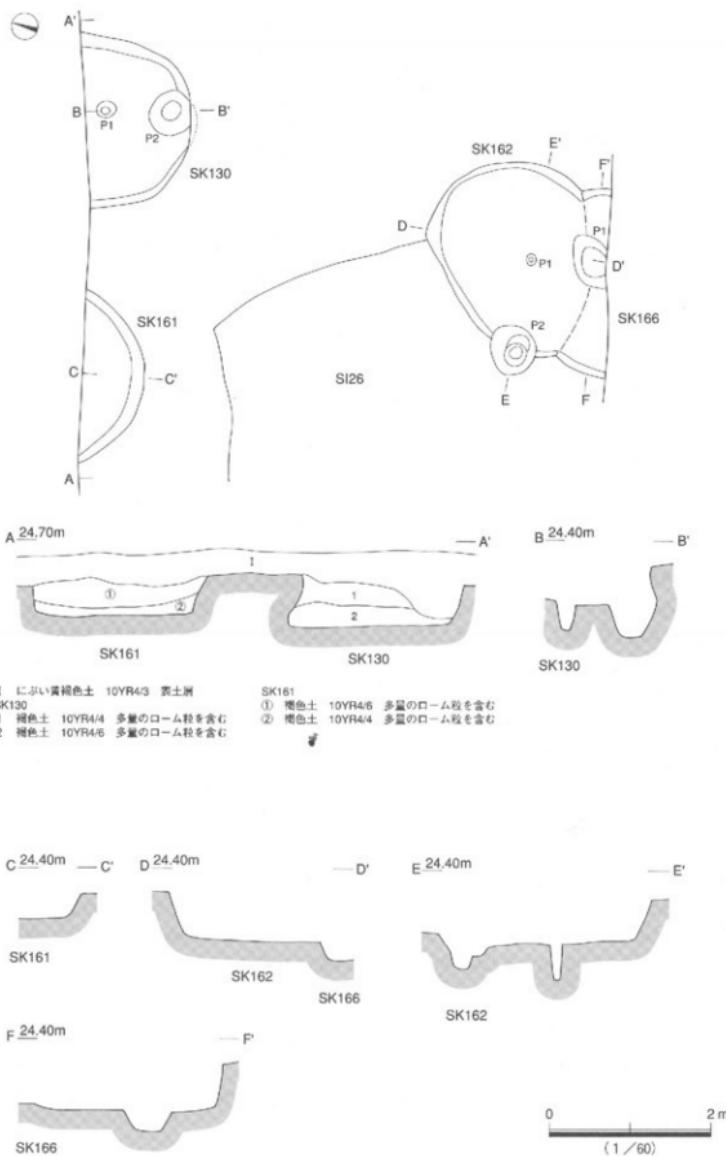


Fig. 97 土坑SK130・161・162・166実測図

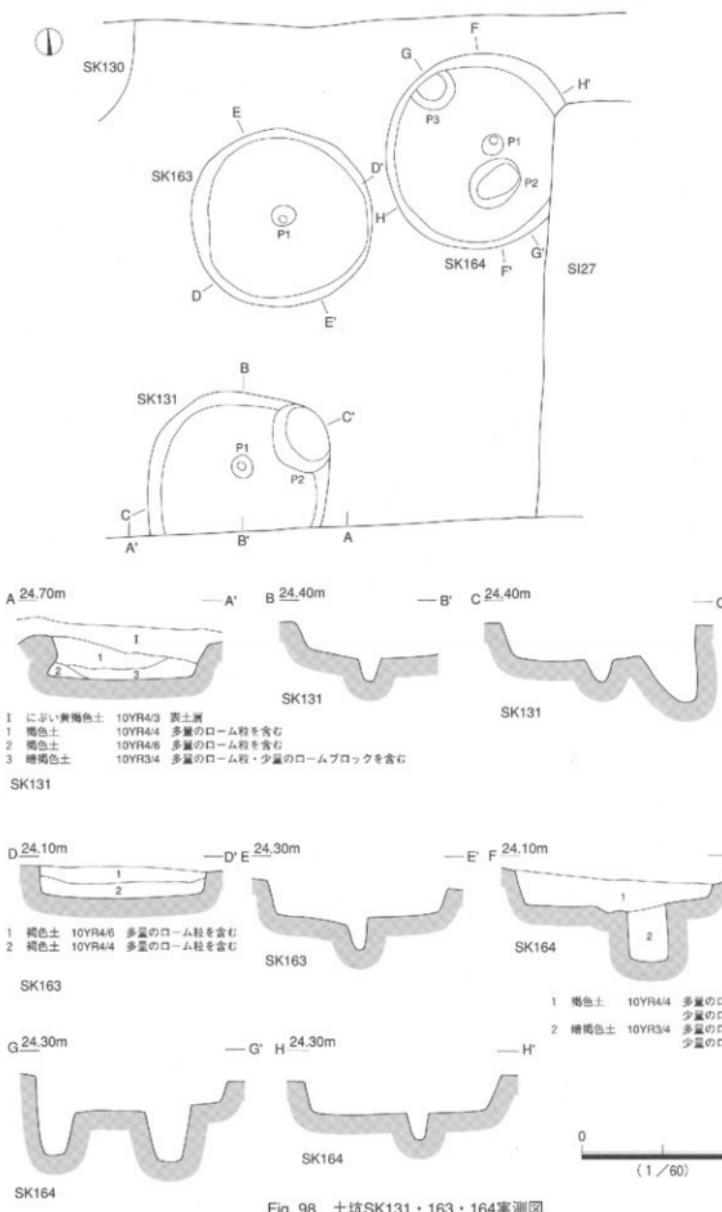


Fig. 98 土坑SK131・163・164実測図

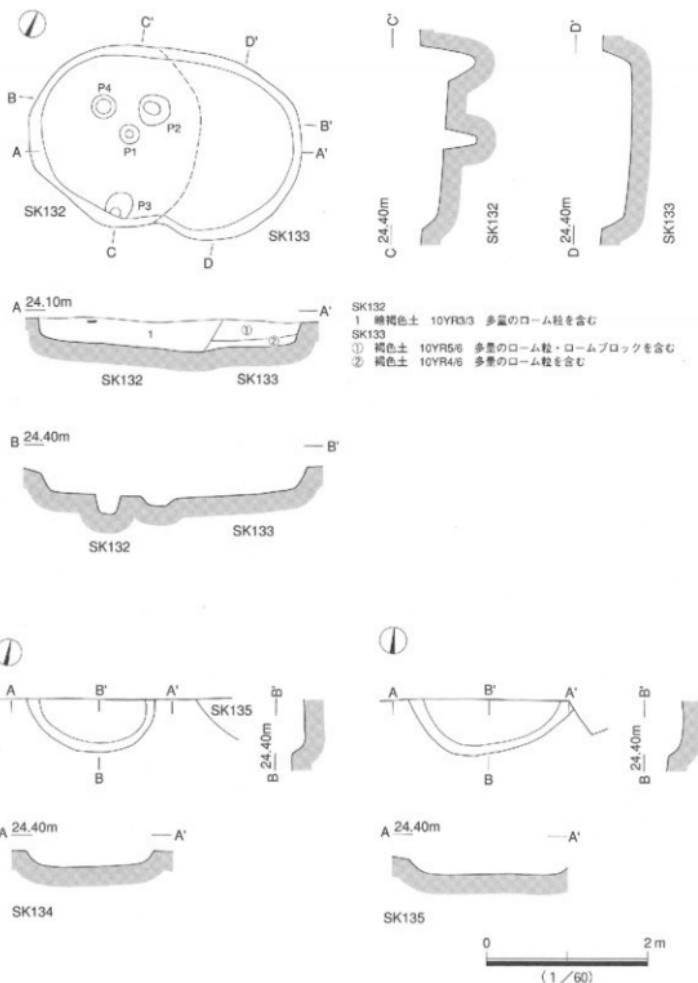


Fig. 99 土坑SK132・133・134・135実測図

土坑SK136 (Fig.100)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は北側でSK137に切られている。確認面上面径298×237cm、底面径276×260cmの円形を呈する。深さ最大59cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径29×28cmの円形で、深さ33cm。P2は径39×28cmの円形で、深さ22cmである。覆土は3層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と土器片鍵1点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK137 (Fig.100・101)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は南側でSK136を切っている。確認面上面径284×244cm、底面径263×221cmの楕円形を呈する。深さ最大24cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが5ヶ所検出された。P1は径25×21cmの円形で、深さ55cm。P2は径55×41cmの円形で、深さ26cm。P3は径50×37cmの円形で、深さ65cm。P4は径38×24cmの円形で、深さ41cm。P5は径24×21cmの円形で、深さ22cmである。覆土は3層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK138 (Fig.100・101・213)

調査区南東側4工区に位置する。本跡はSK137・140に切られている。確認面上面径244×(57)cm、底面径230×(57)cmの円形を呈するものと推定する。深さ最大31cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径51×39cmの円形で、深さ27cmである。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK139 (Fig.100・101)

調査区南東側4工区に位置する。本跡はSK136・137に切られている。確認面上面径105×(89)cm、底面径99×(73)cmの円形を呈するものと推定する。深さ最大38cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK140 (Fig.100・101)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は西側の約半分が未調査区域に広がっている。東側でSK138を切って構築している。確認面上面径243×(194)cm、底面径220×(189)cmの楕円形を呈するものと推定する。深さ最大33cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが4ヶ所検出された。P1は径34×(12)cmの円形で、深さ53cm。P2は径39×32cmの円形で、深さ45cm。P3は径42×35cmの円形で、深さ68cm。P4は径50×46cmの円形で、深さ57cmである。覆土は6層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の上器片が覆土から出土した。加曾利E式期と推定される。

土坑SK141 (Fig.101)

調査区南東側4工区に位置する。確認面上面径245×185cm、底面径223×156cm、円形を呈する。確認面からの深さ最大26cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。遺物は縄文中期の上器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK142 (Fig.101)

調査区南東側4工区に位置する。確認面上面径115×91cm、底面径102×81cm、楕円形を呈する。確認面からの深さ最大29cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。遺物は縄文中期の上器片が覆土から出土した。加曾利E2式期と推定される。

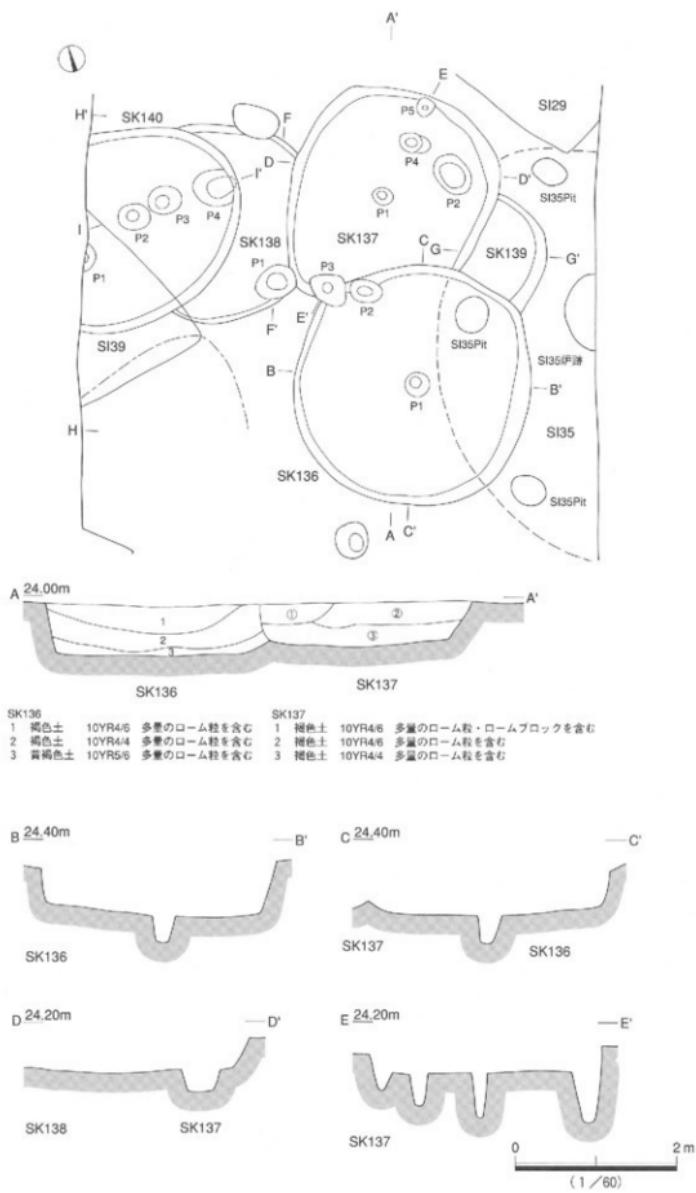


Fig. 100 土坑SK136・137・138・139・140実測図(1)

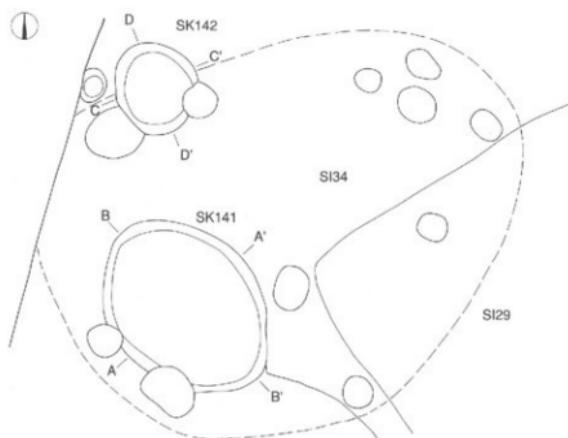
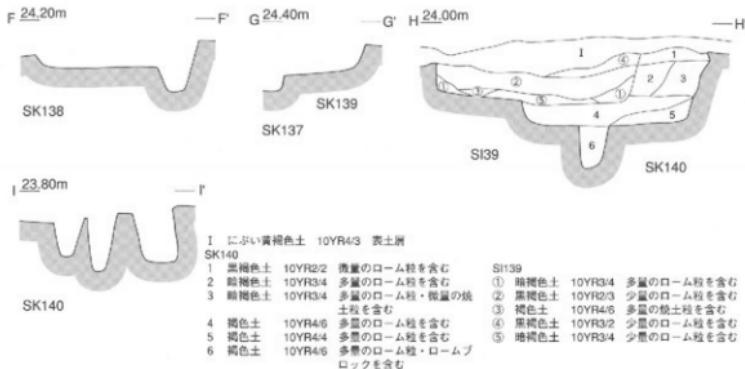


Fig. 101 土坑SK137・138・139・140(2)、SK141・142実測図

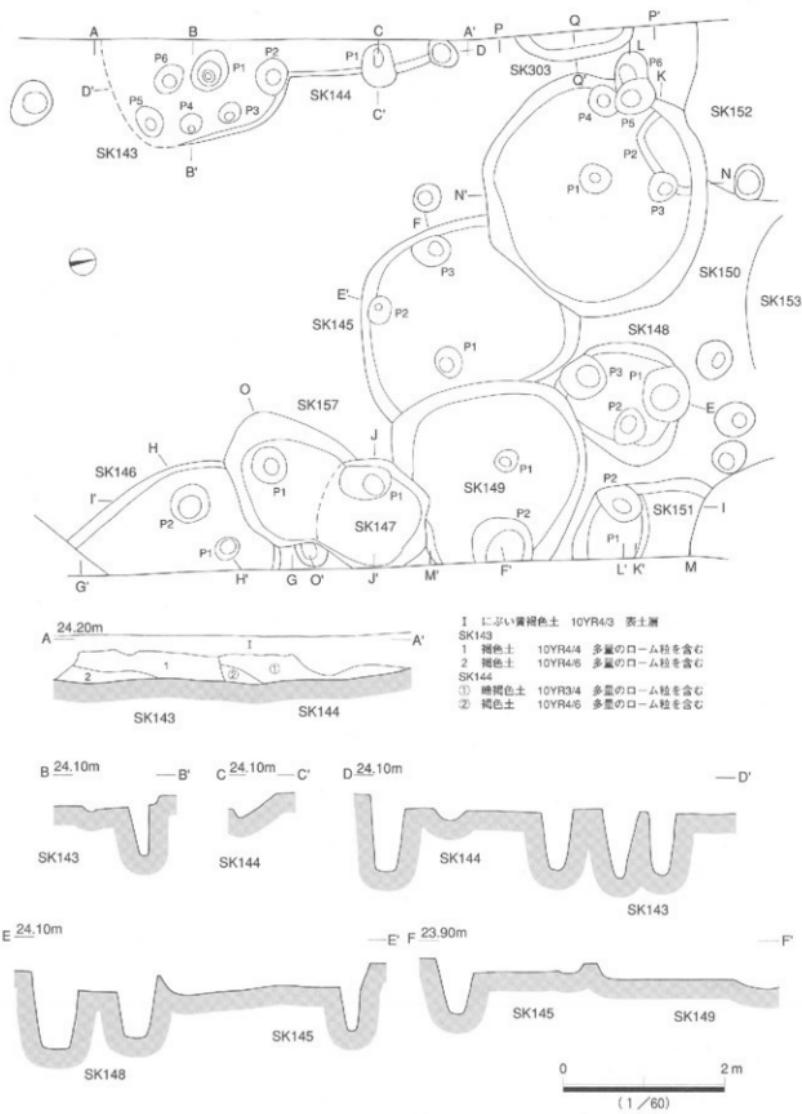


Fig. 102 土坑SK143・144・145・146・147・148・149・150・151・157・303実測図(1)

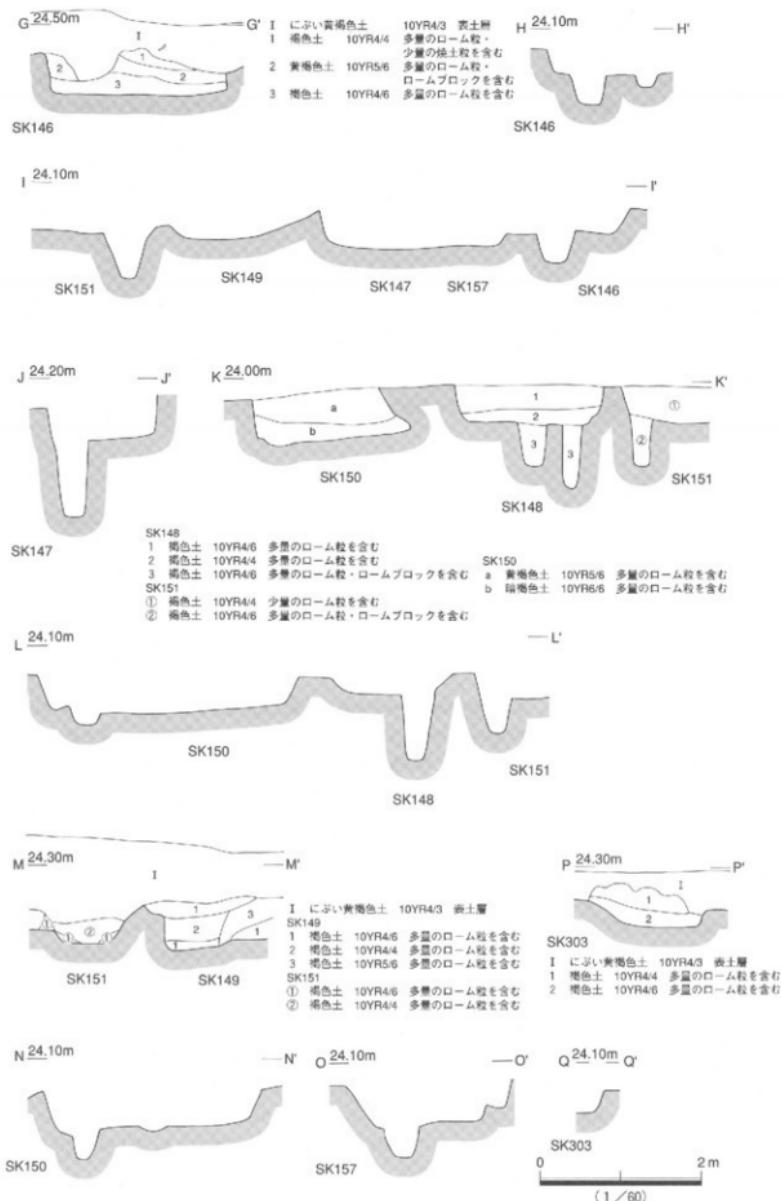


Fig. 103 土坑SK146・147・148・149・150・151・157・303実測図(2)

土坑SK143 (Fig.102)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は西側の約半分が未調査区域に広がっている。北側でSK144に切られている。確認面上面径232×(128)cm、底面径(223)×(120)cmの楕円形を呈する。底面が北側に張り出した袋状で、確認面からの深さ最大16cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが6ヶ所検出された。P1は径51×44cmの円形で、深さ54cm。P2は径44×40cmの円形で、深さ74cm。P3は径29×23cmの円形で、深さ38cm。P4は径28×23cmの円形で、深さ62cm。P5は径41×31cmの円形で、深さ90cm。P6は径40×31cmの円形で、深さ73cmである。覆土は2層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と土器片鉢4点、石皿1点が覆土から出土した。

土坑SK144 (Fig.102)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は西側大半が未調査区域に広がっている。南側でSK143を切っている。確認面上面径(166)×(42)cm、底面径(166)×(34)cmの楕円形を呈するものと推定する。深さ最大18cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径54×40cmの円形で、深さ12cmである。覆土は2層からなる自然堆積である。図示できる遺物の出土はなかつた。

土坑SK145 (Fig.102)

調査区南東側4工区に位置する。本跡はSK149・150に切られている。確認面上面径266×220cm、底面径238×198cmの円形を呈する。深さ最大30cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが3ヶ所検出された。P1は径38×32cmの円形で、深さ96cm。P2は径34×26cmの円形で、深さ54cm。P3は径46×36cmの円形で、深さ50cmである。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E2式期と推定される。

土坑SK146 (Fig.102・103)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は東側の約半分が未調査区域に広がり、北側でSK157に切られている。確認面上面径260×173cm、底面径237×159cmの楕円形を呈するものと推定する。確認面からの深さ最大33cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径30×28cmの円形で、深さ15cm。P2は径48×47cmの円形で、深さ36cmである。覆土は3層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と土器片鉢3点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK147 (Fig.102・103)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は東側の一部が未調査区域に広がり、南側でSK157を切って構築している。確認面上面径146×145cm、底面径131×127cmの円形を呈する。深さ最大49cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径64×42cmの円形で、深さ91cmである。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK148 (Fig.102・103)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は南側でSK149に切られている。確認面上面径157×141cm、底面径125×106cmの楕円形を呈する。深さ最大25cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが3ヶ所検出された。P1は径70×56cmの円形で、深さ70cm。P2は径44×36cmの円形で、深さ80cm。P3は径52×50cmの円形で、深さ54cmである。覆土は3層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK149 (Fig.102・103)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は東側の一部が未調査区域に広がっている。南側でSK147に切られ、西側でSK145を切って構築している。確認面上面径257×232cm、底面径237×202cmの楕円形を呈する。確認面からの深さ最大39cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径31×25cmの円形で、深さ61cm。P2は径80×76cmの円形で、深さ11cmである。覆土は3層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と土器片鍤2点が覆土から出土した。加曾利E2式期と推定される。

土坑SK150 (Fig.102・103)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は南東側でSK145を切って構築している。確認面上面径299×271cm、底面径260×234cmの円形を呈する。確認面からの深さ最大47cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが6ヶ所検出された。P1は径40×35cmの円形で、深さ55cm。P2は径106×48cmの円形で、深さ9cm。P3は径40×33cmの円形で、深さ35cm。P4は径40×35cmの円形で、深さ51cm。P5は径52×41cmの円形で、深さ13cm。P6は径54×39cmの円形で、深さ43cmである。覆土は2層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E2式期と推定される。

土坑SK151 (Fig.102・103)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は東側の約半分が未調査区域に広がっている。確認面上面径(137)×(92)cm、底面径(124)×(79)cmの楕円形を呈するものと推定する。深さ最大18cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径86×(82)cmの円形で、深さ16cm。P2は径60×42cmの円形で、深さ40cmである。覆土は2層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と土器片鍤2点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK152 (Fig.104)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は北西側の一部が未調査区域に広がっている。南側でSK150に切られている。確認面上面径291×213cm、底面径270×190cmの楕円形を呈する。深さ最大30cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが3ヶ所検出された。P1は径24×24cmの円形で、深さ82cm。P2は径44×42cmの円形で、深さ34cm。P3は径22×18cmの円形で、深さ47cmである。遺物は縄文中期の土器片と土器片鍤1点が覆土から出土した。加曾利E式期と推定される。

土坑SK153 (Fig.104・105)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は北側でSK158に切られている。確認面上面径288×181cm、底面径240×163cmの円形を呈する。深さ最大52cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが4ヶ所検出された。P1は径25×23cmの円形で、深さ37cm。P2は径56×56cmの円形で、深さ31cm。P3は径84×68cmの円形で、深さ41cm。P4は径30×25cmの円形で、深さ79cmである。覆土は2層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と磨石1点が覆土から出土した。加曾利E2式期と推定される。

土坑SK154 (Fig.104・105)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は南東側の約半分が未調査区域に広がっている。北東側でSK160に切られている。確認面上面径180×(132)cm、底面径162×(113)cmの円形を呈するものと推定する。深さ最大15cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが3ヶ所検出された。P1は径36×31cmの円形で、深さ30cm。P2は径70×50cmの円形で、深さ76cm。P3は径29×28cmの円形で、深さ43cmである。遺物は縄文中期の土器片と上器片鉢2点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK155 (Fig.104・105)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は周辺をSK153・154・158・160・175・177に切られている。底面径(264)×(192)cmの円形を呈するものと推定する。深さ最大50cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが6ヶ所検出された。P1は径55×43cmの円形で、深さ19cm。P2は径46×46cmの円形で、深さ11cm。P3は径50×47cmの円形で、深さ144cm。P4は径39×36cmの円形で、深さ62cm。P5は径48×39cmの円形で、深さ51cm。P6は径62×(30)cmの円形で、深さ63cmである。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK156 (Fig.105・106)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は西側の約半分が未調査区域に広がり、東側でSK158・159・171に切れられ、南側でSK152を切って構築している。確認面上面径223×(181)cm、底面径(220)×(154)cmの円形を呈するものと推定する。底面が南側に張り出した袋状で、確認面からの深さ最大6cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径56×38cmの円形で、深さ47cm。P2は径44×31cmの円形で、深さ99cmである。覆土は2層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E式期と推定される。

土坑SK157 (Fig.102・103)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は北東側でSK147に切られ、南東側でSK146を切って構築している。確認面上面径172×138cm、底面径130×110cmの楕円形を呈する。深さ最大51cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径45×42cmの円形で、深さ36cmである。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK158 (Fig.104・105)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は南側でSK153を切って構築している。確認面上面径254×210cm、底面径230×180cmの楕円形を呈する。底面が西側に張り出した袋状で、確認面からの深さ最大77cmを測り、壁面は一部内傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径83×71cmの円形で、深さ37cm。P2は径39×31cmの円形で、深さ32cmである。覆土は4層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK159 (Fig.105・106)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は西側の一部が未調査区域に広がり、東側でSK171に切れられ、南側でSK156を切って構築している。確認面上面径(182)×(136)cm、底面径(173)×(136)cmの楕円形を呈する。深さ最大21cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが4ヶ所検出された。P1は径46×42cmの円形で、深さ15cm。P2は径21×18cmの円形で、深さ36cm。P3は径28×20cmの円形で、深さ53cm。P4は径25×22cmの円形で、深さ25cmである。覆土は3層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と土器片鉢1点が覆土から出土した。阿玉台式期と推定される。

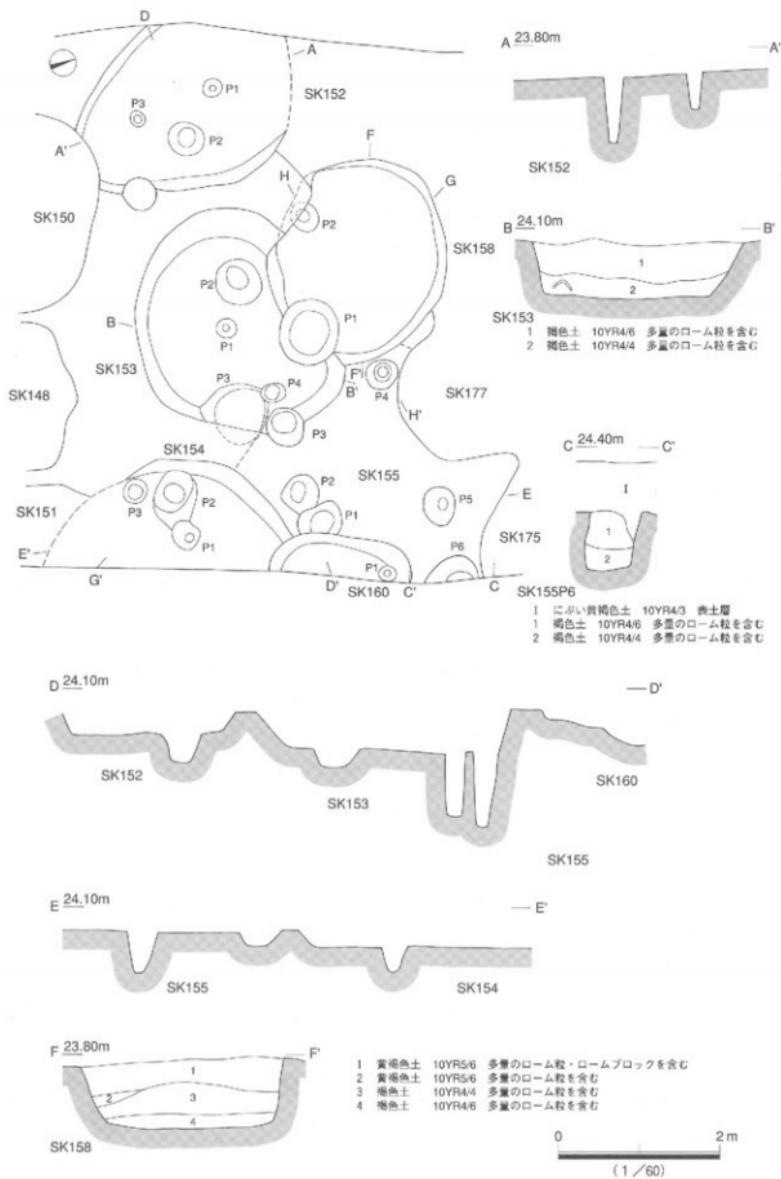


Fig. 104 土坑SK152・153・154・155・158・160実測図(1)

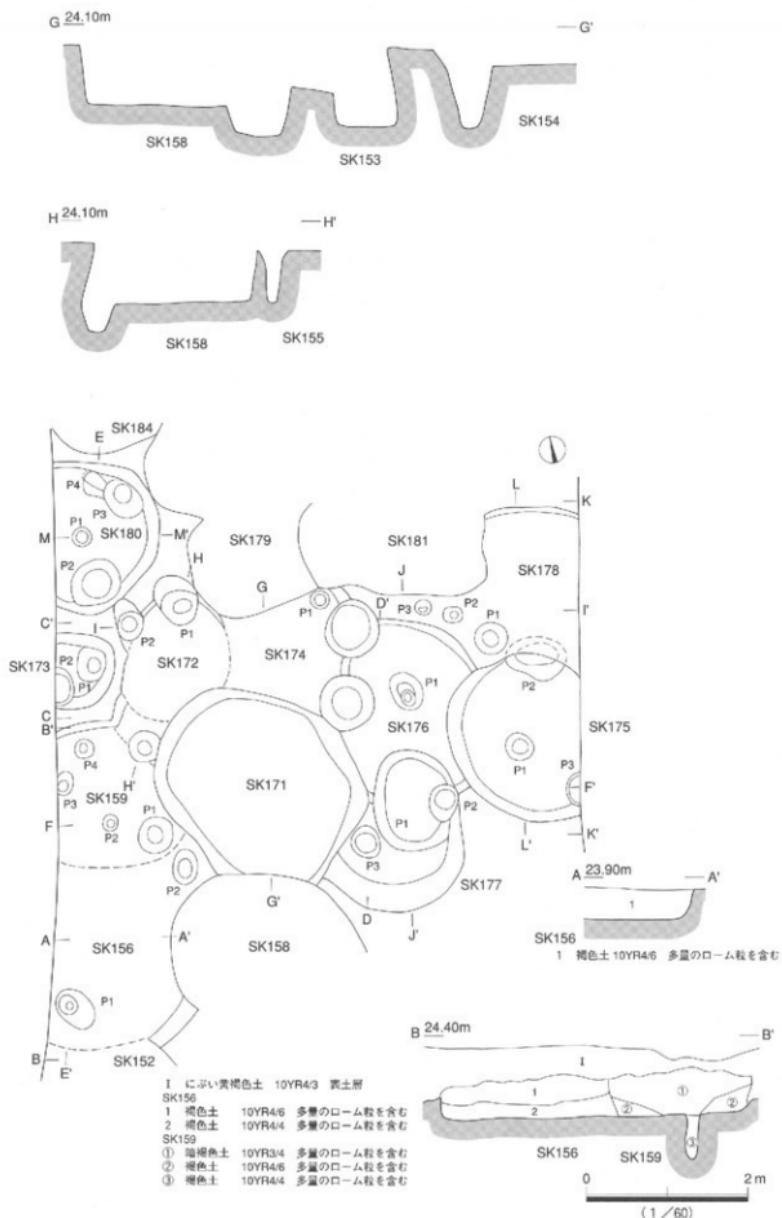


Fig. 105 土坑SK153・154・155・158(2)、SK156・159・171・172・173・174・175・176・177・178・180(1)実測図

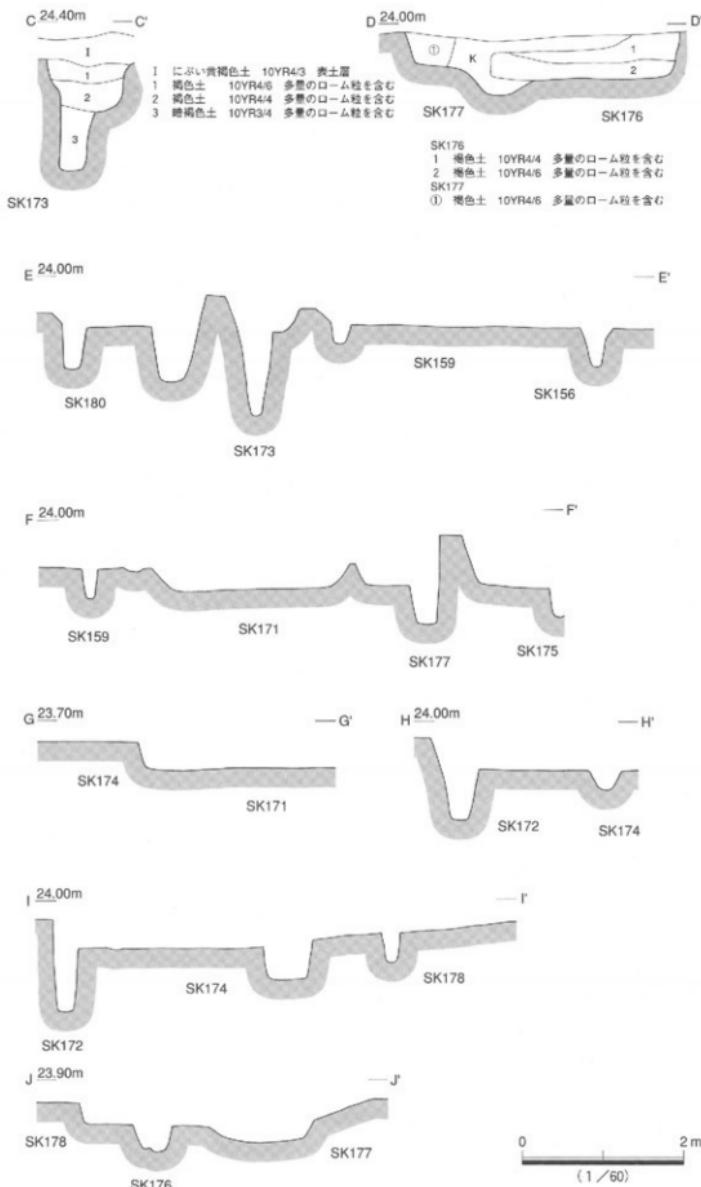


Fig. 106 土坑SK156・159・171・172・173・174・175・176・177・178・180実測図(2)

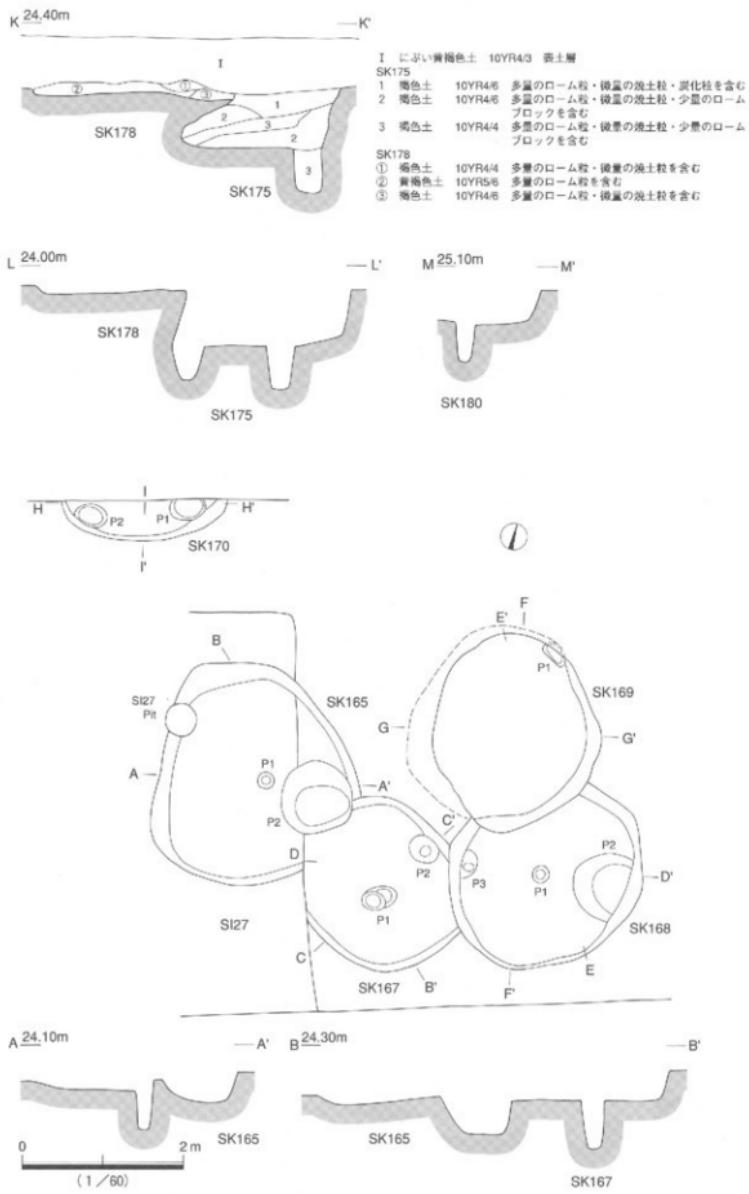


Fig. 107 土坑SK175・178・180(3)、SK165・167・168・169・170(1)実測図

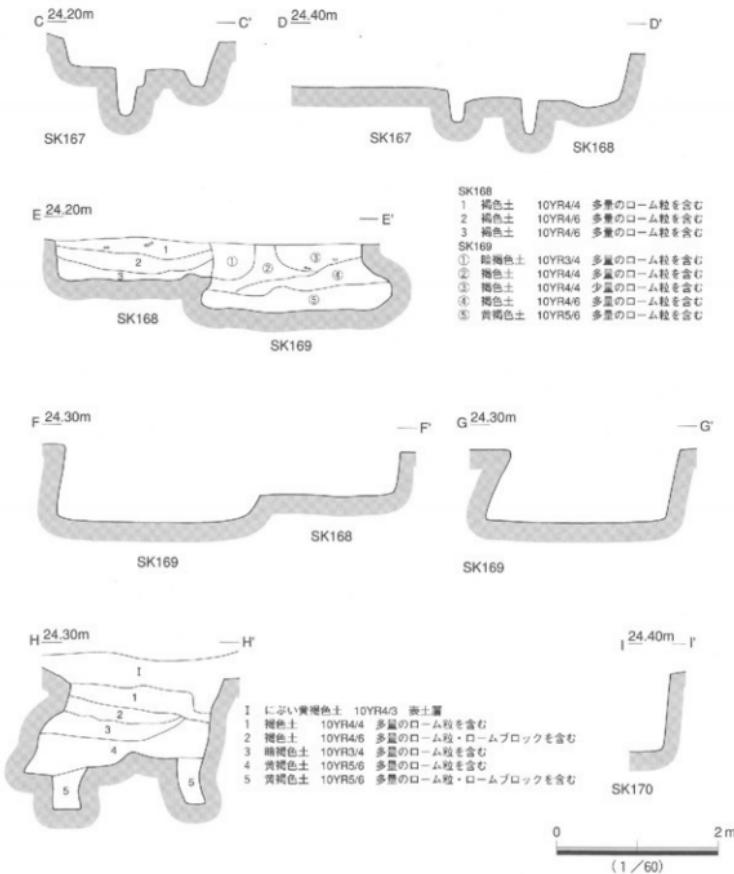


Fig. 108 土坑SK167・168・169・170実測図(2)

土坑SK160 (Fig.104)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は南東側の大半が未調査区域に広がっている。南西側でSK154を切って構築している。確認面上面径172×(49)cm、底面径130×(38)cmの楕円形を呈するものと推定する。深さ最大32cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径21×19cmの円形で、深さ25cmである。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK161 (Fig.97)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は北側の半分以上が未調査区域に広がっている。確認面上面径214×(76)cm、底面径194×(60)cmの円形を呈するものと推定する。深さ最大31cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。覆土は2層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と土器片錐1点が覆土から出土した。加曾利E2式期と推定される。

土坑SK162 (Fig.97)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は南側でSK166を切って構築している。確認面上面径250×180cm、底面径245×(180)cmの楕円形を呈する。深さ最大62cmを測り、整面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径13×11cmの円形で、深さ44cm。P2は径62×55cmの円形で、深さ24cmである。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E式期と推定される。

土坑SK163 (Fig.98)

調査区南東側4工区に位置する。確認面上面径220×220cm、底面径200×191cmの円形を呈する。深さ最大44cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径28×26cmの円形で、深さ39cmである。覆土は2層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と黒曜石製剥片石器1点が覆土から出土した。阿玉台Ⅲ式期と推定される。

土坑SK164 (Fig.98)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は南東側の一部が未調査区域に広がっている。確認面上面径242×234cm、底面径215×210cmの円形を呈する。深さ最大47cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが3ヶ所検出された。P1は径26×25cmの円形で、深さ33cm。P2は径67×54cmの円形で、深さ70cm。P3は径52×40cmの円形で、深さ50cmである。覆土は2層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と土器片錐1点が覆土から出土した。

土坑SK165 (Fig.107)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は南東側でSK167に切られている。確認面上面径274×234cm、底面径242×204cmの楕円形を呈する。深さ最大24cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径20×20cmの円形で、深さ50cm。P2は径90×87cmの円形で、深さ41cmである。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E2式期と推定される。

土坑SK166 (Fig.97)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は南側の約半分が未調査区域に広がり、北側でSK162に切られている。確認面上面径224×(23)cm、底面径208×(23)cmの円形を呈するものと推定する。深さ最大57cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径72×45cmの円形で、深さ23cmである。図示できる遺物の出土はなかった。

土坑SK167 (Fig.107・108)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は北西側でSK165を切って構築している。確認面上面径215×191cm、底面径194×170cmの隅丸方形を呈する。深さ最大39cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径42×29cmの円形で、深さ56cm。P2は径38×32cmの円形で、深さ28cmである。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK168 (Fig.107・108)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は北側でSK169に切られ、西側でSK167を切って構築している。確認面上面径248×230cm、底面径228×200cmの円形を呈する。確認面からの深さ最大62cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが3ヶ所検出された。P1は径21×21cmの円形で、深さ42cm。P2は径22×65cmの円形で、深さ2cm。P3は径35×21cmの円形で、深さ33cmである。覆土は3層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と土器片鍾1点が覆土から出土した。加曾利E2式期と推定される。

土坑SK169 (Fig.107・108・213)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は南側でSK168を切って構築している。確認面上面径244×208cm、底面径224×220cmの楕円形を呈する。底面が南西側に張り出した袋状で、確認面からの深さ最大94cmを測り、壁面は内傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径34×18cmの円形で、深さ8cmである。覆土は5層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と土器片鍾5点、黒曜石製石鍬1点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK170 (Fig.107・108)

調査区南東側4工区に位置する。本跡北側の大半が未調査区域に広がっている。確認面上面径203×(49)cm、底面径180×(42)cmの楕円形を呈するものと推定する。底面が西側に張り出した袋状で、確認面からの深さ最大97cmを測り、壁面は内傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径42×38cmの円形で、深さ51cm。P2は径40×26cmの円形で、深さ54cmである。覆土は5層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の上器片と上器片鍾1点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK171 (Fig.105・106)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は南側でSK158に切られ、北東側でSK172・174・176・177を切って構築している。確認面上面径261×210cm、底面径232×189cmの楕円形を呈する。深さ最大31cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、遺物は縄文中期の土器片と土器片鍾2点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK172 (Fig.105・106)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は南東側でSK171に切られている。確認面上面径160×134cm、底面径156×122cmの楕円形を呈する。深さ最大39cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径65×49cmの円形で、深さ61cm。P2は径50×34cmの円形で、深さ77cmである。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E2式期と推定される。

土坑SK173 (Fig.105・106)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は西側の約半分が未調査区域に広がっている。確認面上面径94×(72)cm、底面径65×(57)cmの楕円形を呈するものと推定する。深さ最大53cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径42×38cmの円形で、深さ91cm。P2は径46×(19)cmの円形で、深さ67cmである。覆土は3層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E2式期と推定される。

土坑SK174 (Fig.105・106)

調査区南東側4工区に位置する。本跡はSK171・172・176・179に切られている。確認面上面径(188)×(112)cm、底面径(176)×(112)cmの円形を呈するものと推定する。深さ最大9cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径23×23cmの円形で、深さ30cmである。遺物は縄文中期の土器片と上器片錐4点が覆土から出土した。加曾利E2式期と推定される。

土坑SK175 (Fig.105・106・107)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は東側の約1/3が未調査区域に広がっている。西側でSK176を切って構築している。確認面上面径221×187cm、底面径193×175cmの円形を呈する。底面が北側に張り出した袋状で、確認面からの深さ最大69cmを測り、壁面は一部内傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが3ヶ所検出された。P1は径35×34cmの円形で、深さ50cm。P2は径73×50cmの円形で、深さ39cm。P3は径39×(17)cmの円形で、深さ35cmである。覆土は3層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK176 (Fig.105・106)

調査区南東側4工区に位置する。本跡はSK171・175に切られ、SK174・178を切って構築している。確認上面面径247×163cm、底面径220×146cmの楕円形を呈する。深さ最大40cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径51×40cmの円形で、深さ31cmである。遺物は縄文中期の上器片が覆土から出土した。加曾利E2式期と推定される。

土坑SK177 (Fig.105・106)

調査区南東側4工区に位置する。本跡はSK171に切られている。確認上面面径185×(140)cm、底面径137×(104)cmの円形を呈するものと推定する。深さ最大29cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが3ヶ所検出された。P1は径128×104cmの円形で、深さ26cm。P2は径45×36cmの円形で、深さ47cm。P3は径40×34cmの円形で、深さ62cmである。覆土は1層からなる自然堆積である。図示できる遺物の出土はなかった。

土坑SK178 (Fig.105・106・107)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は西側の約半分が未調査区域に広がり、南側でSK175・176・181に切られている。確認面上面径(280)×(182)cm、底面径(280)×(176)cmの円形を呈するものと推定する。確認面からの深さ最大16cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが3ヶ所検出された。P1は径40×38cmの円形で、深さ65cm。P2は径23×20cmの円形で、深さ35cm。P3は径20×18cmの円形で、深さ30cmである。覆土は3層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK179 (Fig.109・110)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は西側でSK181に切られている。確認面上面径180×152cm、底面径142×118cmの楕円形を呈する。深さ最大47cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径66×60cmの円形で、深さ47cmである。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK180 (Fig.105・106・107)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は西側の約1/3が未調査区域に広がっている。確認面上面径187×(127)cm、底面径164×(113)cmの円形を呈する。深さ最大42cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが4ヶ所検出された。P1は径23×23cmの円形で、深さ48cm。P2は径66×55cmの円形で、深さ67cm。P3は径51×38cmの円形で、深さ67cm。P4は径44×29cmの円形で、深さ53cmである。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK181 (Fig.109・110)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は南西側でSK183に切られ、東側でSK179を切って構築している。確認面上面径248×197cm、底面径217×180cmの円形を呈する。底面が外側に張り出した袋状で、確認面からの深さ最大65cmを測り、壁面は内傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径47×37cmの円形で、深さ41cm。P2は径22×21cmの円形で、深さ37cmである。覆土は5層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E2式期と推定される。

土坑SK182 (Fig.109・110・111)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は西側の半分以上が未調査区域に広がっている。東側でSK183に切られている。確認面上面径(218)×(72)cm、底面径(200)×(57)cmの楕円形を呈するものと推定する。底面が外側に張り出した袋状で、確認面からの深さ最大25cmを測り、壁面は内傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径42×37cmの円形で、深さ84cm。P2は径49×46cmの円形で、深さ72cmである。覆土は3層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と土器片鍾2点が覆土から出土した。加曾利E式期と推定される。

土坑SK183 (Fig.109・110・111)

調査区南東側4工区に位置する。本跡はSK181・182を切って構築している。確認面上面径240×209cm、底面径200×197cmの円形を呈する。底面が南側に張り出した袋状で、確認面からの深さ最大85cmを測り、壁面は内傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径51×36cmの円形で、深さ61cmである。覆土は6層からなる自然堆積であるが、東壁際の覆土上層から貝ブロックが検出された。東側の第1ブロックは径30×60cm、層厚12cm、南東側の第2ブロックは径20×45cm、層厚10cmを測り、両貝ブロックとも99%ウミニナによって占められている。遺物は縄文中期の土器片と土器片鍾1点、小形磨製石斧1点、黒曜石製石鏃1点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK184 (Fig.109・111)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は西側の一部が未調査区域に広がっている。確認面上面径190×153cm、底面径158×146cmの円形を呈する。底面が東側に張り出した袋状で、確認面からの深さ最大34cmを測り、壁面は内傾して立ち上がる。底面は平坦で、遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK185 (Fig.109・110・111)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は西側の約半分が未調査区域に広がっている。確認面上面径229×(127)cm、底面径120×(120)cmの円形を呈する。深さ最大61cmを測り、壁面は一部内傾して立ち上がる袋状である。底面は平坦で、覆土は2層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK186 (Fig.109・110・111)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は西側の一部が未調査区域に広がり、SK184・190に切られ、SK192を切って構築している。確認面上面径(242)×(194)cm、底面径(235)×(194)cmの円形を呈するものと推定する。底面が西側に張り出した袋状で、確認面からの深さ最大11cmを測り、壁面は内傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが3ヶ所検出された。P1は径76×68cmの円形で、深さ75cm。P2は径32×29cmの円形で、深さ31cm。P3は径23×21cmの円形で、深さ74cmである。覆土は3層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と土器片鍾1点、磨石1点が覆土から出土した。加曾利E2式期と推定される。

土坑SK187 (Fig.109・110・111)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は南側でSK183を切り、北側でSK188を切って構築している。確認面上面径249×194cm、底面径219×160cmの楕円形を呈する。底面が外側に張り出した袋状で、確認面からの深さ最大30cmを測り、壁面は内傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は2層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E2式期と推定される。

土坑SK188 (Fig.109・110・111)

調査区南東側4工区に位置する。本跡はSK187に切られ、SK189・192・235を切って構築している。確認上面径270×(150)cm、底面径236×(150)cmの楕円形を呈する。底面が北側に張り出した袋状で、確認面からの深さ最大47cmを測り、壁面は内傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径26×24cmの円形で、深さ49cm。P2は径58×47cmの円形で、深さ38cmである。覆土は2層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と土器片鍾6点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK189 (Fig.109・110)

調査区南東側4工区に位置する。本跡はSK188に切られ、SK198・236を切って構築している。確認面上面径180×170cm、底面径221×192cmの円形を呈する。底面が外側に張り出した袋状で、確認面からの深さ最大89cmを測り、壁面は内傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は3層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK190 (Fig.109・110・111)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は西側の約半分が未調査区域に広がっている。SK186・191・193を切って構築している。確認面上面径233×(144)cm、底面径267×(138)cmの円形を呈する。底面が外側に張り出した袋状で、確認面からの深さ最大71cmを測り、壁面は内傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径12×37cmの円形で、深さ35cmである。覆土は6層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の上器片と土器片鉢3点、磨石1点、凹石1点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK191 (Fig.109・110・111・112)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は西側の約半分が未調査区域に広がり、SK190・237に切られている。確認面上面径(86)×(81)cm、底面径(71)×(62)cmの円形を呈するものと推定する。深さ最大29cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は2層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E式期と推定される。

土坑SK192 (Fig.109・110・111)

調査区南東側4工区に位置する。本跡はSK186・193・235に切られている。確認面上面径244×(100)cm、底面径182×(98)cmの楕円形を呈するものと推定する。深さ最大28cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径25×20cmの円形で、深さ91cmである。遺物は縄文中期の上器片が覆土から出土した。加曾利E式期と推定される。

土坑SK193 (Fig.109・110)

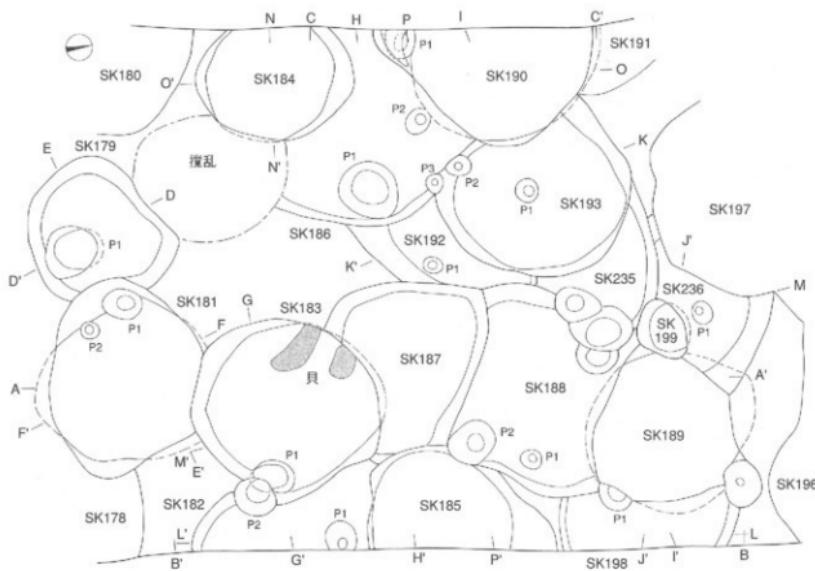
調査区南東側4工区に位置する。本跡はSK190に切られ、SK192・235を切って構築している。確認面上面径240×177cm、底面径212×165cmの円形を呈する。深さ最大65cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径30×29cmの円形で、深さ30cm。P2は径30×24cmの円形で、深さ27cmである。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK194 (Fig.114)

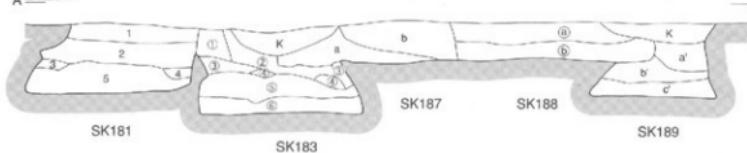
調査区南東側4工区に位置する。本跡は南側でSK251に切られ、北側でSK253を切って構築している。確認面上面径(94)×(80)cm、底面径(77)×(43)cmの円形を呈するものと推定する。深さ最大38cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径44×35cmの円形で、深さ63cmである。遺物は縄文中期の上器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK195 (Fig.111・112・213)

調査区南東側4工区に位置する。本跡はSK197・200・205を切って構築している。確認面上面径198×196cm、底面径176×178cmの円形を呈する。深さ最大82cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径32×20cmの円形で、深さ10cm。P2は径74×52cmの円形で、深さ39cmである。遺物は縄文中期の上器片と土器片鉢2点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。



A 24.20m



—A'

SK181

- 1 深色土 10YR4/6 多量のローム粒を含む
- 2 深色土 10YR4/4 多量のローム粒・微量の粘土粒を含む
- 3 深色土 10YR4/4 多量のローム粒・ロームブロックを含む
- 4 深色土 10YR4/4 多量のローム粒・ロームブロック・焼土粒を含む
- 5 深色土 10YR4/6 多量のローム粒・ロームブロック・微量の粘土粒を含む

SK183

- ① 深色土 10YR4/6 多量のローム粒を含む
- ② 暗褐色土 10YR3/4 多量のローム粒を含む
- ③ 暗褐色土 10YR3/3 少量のローム粒を含む
- ④ 暗褐色土 10YR3/3 多量のローム粒・貝を含む
- ⑤ 深色土 10YR4/6 多量のローム粒・ロームブロックを含む
- ⑥ 黄褐色土 10YR5/6 多量のローム粒・ロームブロックを含む

SK187

- a 深色土 10YR4/6 多量のローム粒を含む
- b 深色土 10YR4/4 多量のローム粒を含む

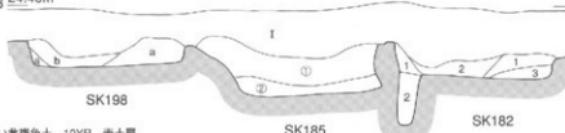
SK188

- ① 深色土 10YR4/6 多量のローム粒・ロームブロックを含む
- ② 暗褐色土 10YR4/4 多量のローム粒・ロームブロックを含む

SK189

- a' 深色土 10YR4/6 多量のローム粒を含む
- b' 暗褐色土 10YR3/4 多量のローム粒・微量の焼土粒・炭化物を含む
- c' 深色土 10YR4/4 多量のローム粒を含む

B 24.40m



B'

I にぶい黄褐色土 10YR 表土層

SK182

- 1 深色土 10YR4/6 多量のローム粒を含む
- 2 深色土 10YR3/4 多量のローム粒を含む
- 3 深色土 10YR4/4 多量のローム粒を含む

SK198

- a 深色土 10YR4/6 多量のローム粒を含む
- b 深色土 10YR4/4 多量のローム粒を含む

SK185

- ① 深色土 10YR4/6 多量のローム粒を含む
- ② 深色土 10YR4/4 多量のローム粒を含む

0

2m

(1/60)

Fig. 109 土坑SK179・181・182・183・184・185・186・187・188・189・190・191・192・193・198・199・235・236実測図(1)

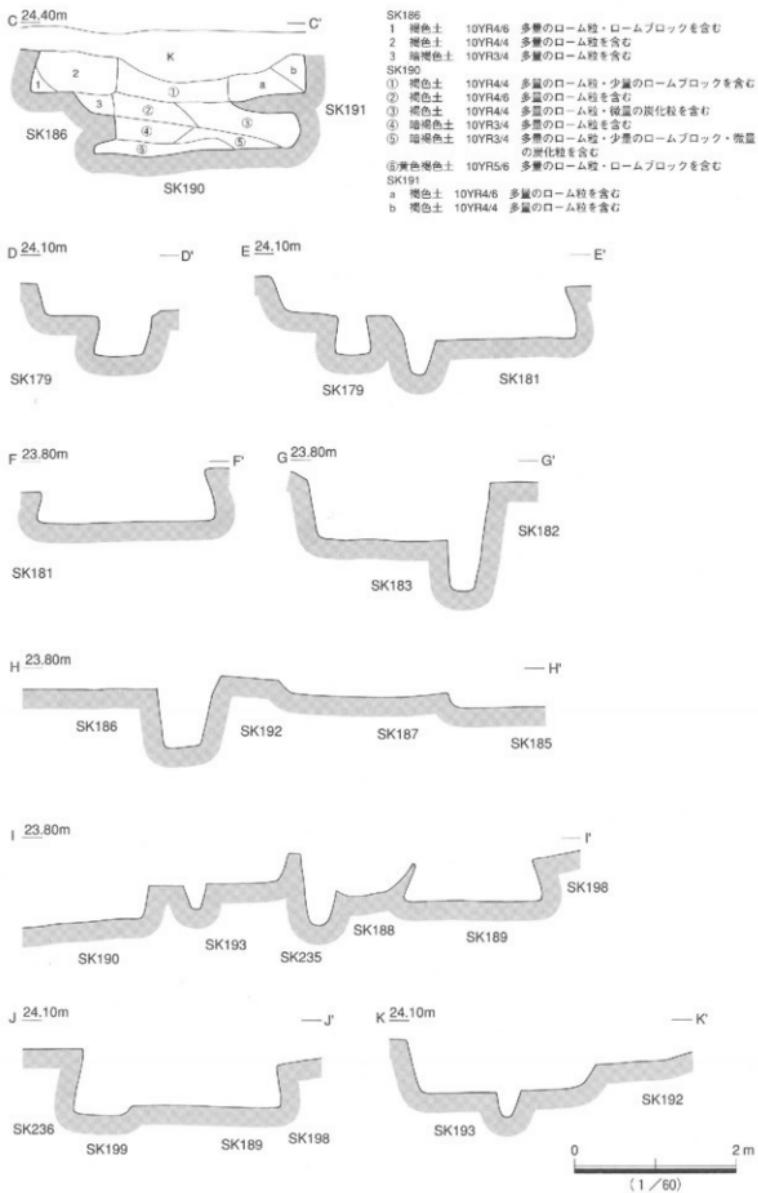


Fig. 110 土坑SK179・181・182・183・185・186・187・188・189・190・191・192・193・198・199・235・236実測図(2)

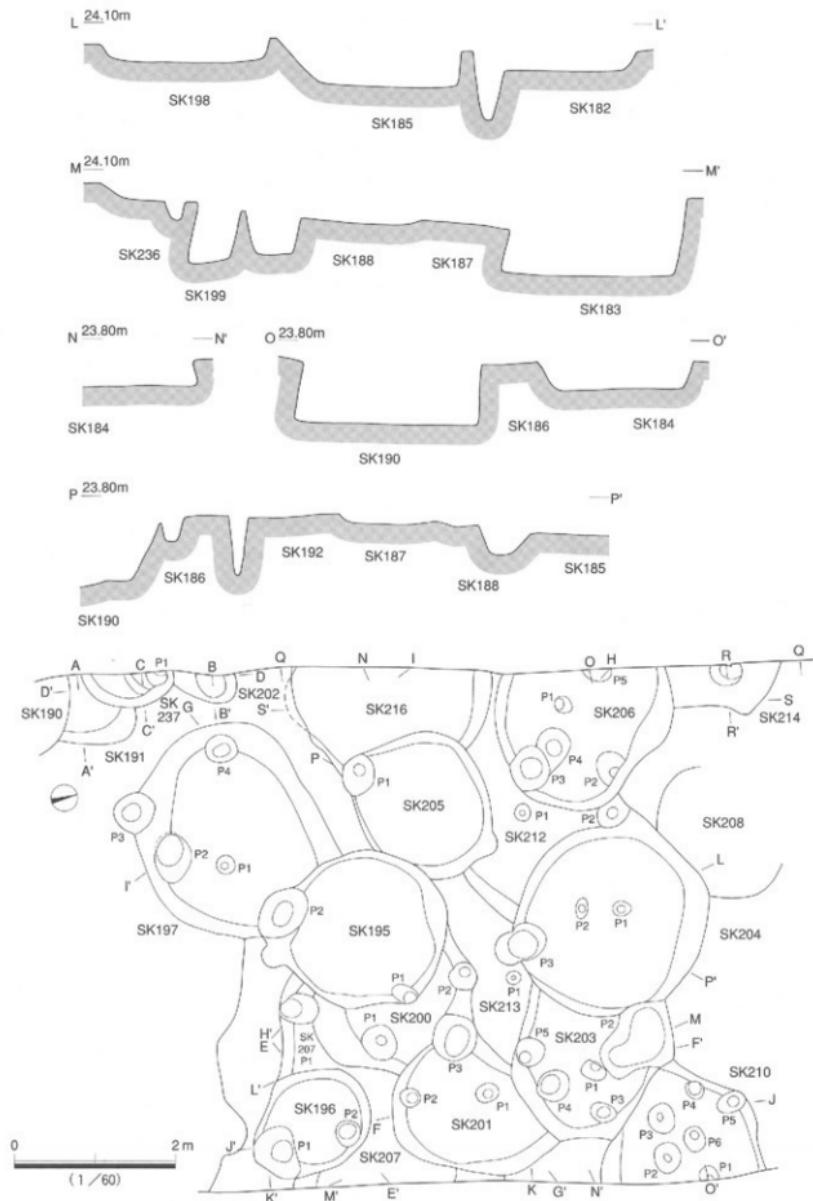


Fig. 111 土坑SK182・183・184・185・186・187・188・190・192・198・199・236(3)、
SK191・195・196・197・200・201・202・203・204・205・206・207・210・212・213・214・
216・237(1)実測図

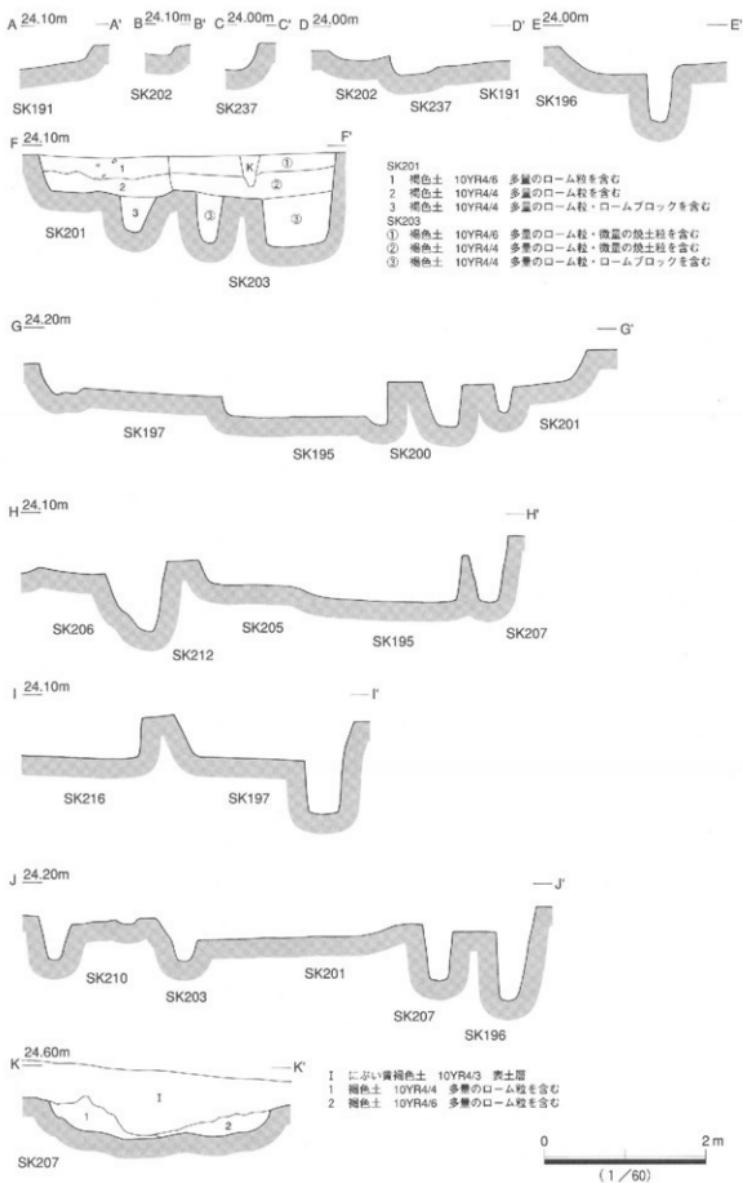


Fig. 112 土坑SK191・195・196・197・200・201・202・203・205・206・207・210・216・237実測図(2)

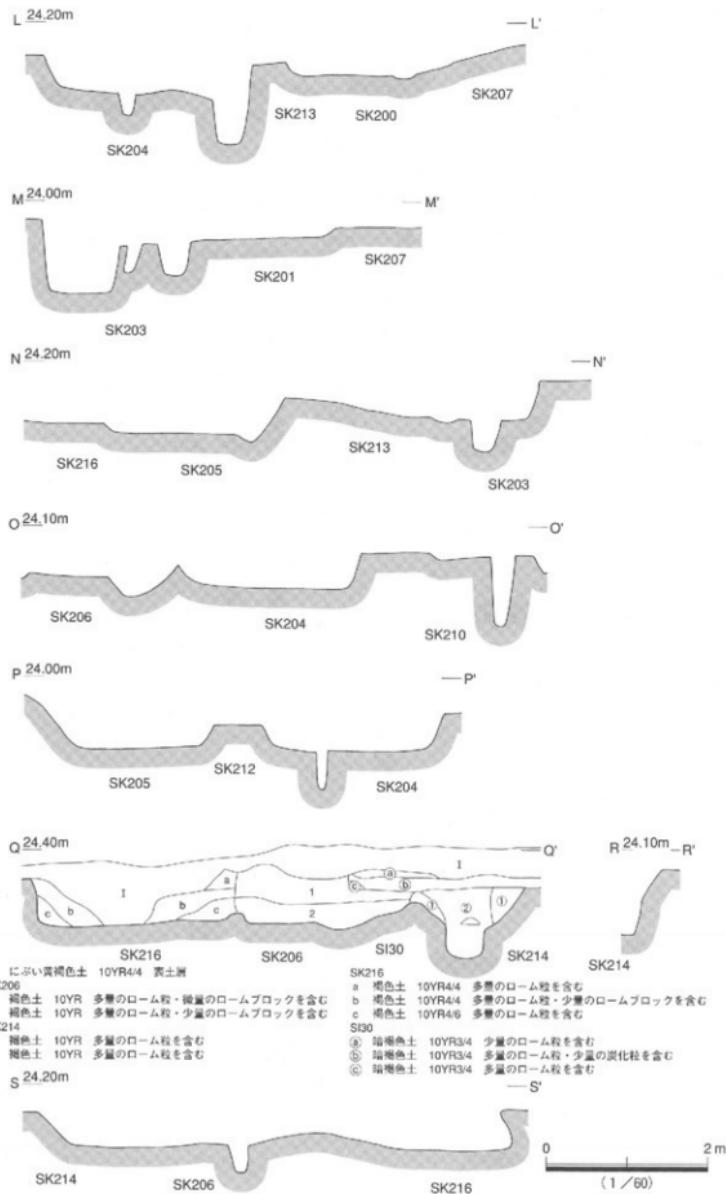


Fig. 113 土坑SK200・201・203・204・205・206・207・210・212・213・214・216実測図(3)

土坑SK196 (Fig.111・112)

調査区南東側4工区に位置する。本跡はSK207を切って構築している。確認面上面径160×125cm、底面径121×102cmの楕円形を呈する。深さ最大32cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径66×51cmの円形で、深さ83cm。P2は径32×31cmの円形で、深さ57cmである。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK197 (Fig.111・112)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は北東側でSK195に切られている。確認面上面径261×220cm、底面径226×150cmの楕円形を呈する。深さ最大56cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが4ヶ所検出された。P1は径23×22cmの円形で、深さ58cm。P2は径60×45cmの円形で、深さ68cm。P3は径51×49cmの円形で、深さ17cm。P4は径37×33cmの円形で、深さ7cmである。遺物は縄文中期の土器片と土器片錐2点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK198 (Fig.109・110・111)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は東側の約半分が未調査区域に広がり、西側でSK188・189に切られている。確認面上面径212×(58)cm、底面径192×(58)cmの円形を呈するものと推定する。深さ最大32cmを測り、壁面は内傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径43×(25)cmの円形で、深さ49cmである。覆土は2層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK199 (Fig.109・110・111・213)

調査区南東側4工区に位置する。本跡はSK189・236を切って構築している。確認面上面径76×60cm、底面径59×51cm、底面が北側に張り出した袋状で、確認面からの深さ最大64cmを測り、壁面は内傾して立ち上がる。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E2式期と推定される。

土坑SK200 (Fig.111・112・113)

調査区南東側4工区に位置する。本跡はSK195・201・213に切られている。確認面上面径211×(60)cm、底面径147×(60)cmの円形を呈するものと推定する。深さ最大17cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径43×40cmの円形で、深さ79cm。P2は径34×31cmの円形で、深さ34cmである。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK201 (Fig.111・112・113)

調査区南東側4工区に位置する。本跡はSK203・213に切られ、SK200を切って構築している。確認面上面径210×148cm、底面径176×136cmの精円形を呈する。深さ最大44cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが3ヶ所検出された。P1は径27×23cmの円形で、深さ35cm。P2は径25×23cmの円形で、深さ21cm。P3は径56×54cmの円形で、深さ49cmである。覆土は3層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と土器片錐2点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK202 (Fig.111・112)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は西側の大半が未調査区域に広がり、南側でSK237に切られている。確認面上面径(76)×(63)cm、底面径(47)×(39)cmの楕円形を呈する。深さ最大10cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK203 (Fig.111・112・113)

調査区南東側4工区に位置する。本跡はSK204に切られ、SK201・213を切って構築している。確認面上面径215×167cm、底面径174×150cmの楕円形を呈するものと推定する。深さ最大48cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが5ヶ所検出された。P1は径31×19cmの円形で、深さ36cm。P2は径113×77cmの円形で、深さ60cm。P3は径30×22cmの円形で、深さ24cm。P4は径42×36cmの円形で、深さ36cm。P5は径33×36cmの円形で、深さ55cmである。覆土は3層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK204 (Fig.111・113・213)

調査区南東側4工区に位置する。本跡はSK203・208・212・213を切って構築している。確認面上面径246×225cm、底面径213×183cmの円形を呈する。深さ最大49cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが3ヶ所検出された。P1は径22×18cmの円形で、深さ26cm。P2は径26×13cmの円形で、深さ48cm。P3は径66×44cmの円形で、深さ53cmである。遺物は縄文中期の土器片と土器片鍾7点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK205 (Fig.111・112・113)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は南東側でSK195に切られ、西側でSK216を切って構築している。確認面上面径211×166cm、底面径171×149cmの円形を呈する。深さ最大63cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径50×39cmの円形で、深さ21cmである。遺物は縄文中期の土器片と土器片鍾5点が覆土から出土した。阿玉台II式期と推定される。

土坑SK206 (Fig.111・112・113)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は北側の約半分が未調査区域に広がり、SK212・214を切って構築している。確認面上面径230×180cm、底面径210×151cmの楕円形を呈する。深さ最大17cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが5ヶ所検出された。P1は径23×19cmの円形で、深さ32cm。P2は径36×28cmの円形で、深さ23cm。P3は径56×48cmの円形で、深さ71cm。P4は径50×42cmの円形で、深さ69cm。P5は径36×(16)cmの円形で、深さ10cmである。覆土は2層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK207 (Fig.111・112・113)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は東側の約半分が未調査区域に広がり、SK196・201に切られている。確認面上面径(280)×(140)cm、底面径(257)×(110)cmの円形を呈するものと推定する。深さ最大24cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径50×36cmの円形で、深さ55cmである。覆土は2層からなる自然堆積である。図示できる遺物の出土はなかつた。

土坑SK208 (Fig.116)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は北側でSK211に切られている。確認面上面径156×140cm、底面径147×107cmの円形を呈する。深さ最大36cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、遺物は縄文中期の土器片と土器片鍤2点が覆土から出土した。加曾利E2式期と推定される。

土坑SK209 (Fig.116)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は北西側でSK208・211に切られている。確認面上面径(330)×(189)cm、底面径(306)×(189)cmの楕円形を呈するものと推定する。深さ最大46cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径30×25cmの円形で、深さ48cmである。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E2式期と推定される。

土坑SK210 (Fig.111・112・113)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は東側の約半分が未調査区域に広がっている。確認面上面径205×(140)cm、底面径169×(140)cmの楕円形を呈する。深さ最大22cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが6ヶ所検出された。P1は径21×(18)cmの円形で、深さ22cm。P2は径38×33cmの円形で、深さ43cm。P3は径36×32cmの円形で、深さ84cm。P4は径22×20cmの円形で、深さ41cm。P5は径35×33cmの円形で、深さ42cm。P6は径39×25cmの円形で、深さ87cmである。遺物は縄文中期の土器片と土器片鍤1点が覆土から出土した。

土坑SK211 (Fig.116)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は南側でSK208を切って構築している。確認面上面径220×181cm、底面径226×186cmの楕円形を呈する。底面が外側に張り出した袋状で、確認面からの深さ最大80cmを測り、壁面は内傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが3ヶ所検出された。P1は径29×27cmの円形で、深さ15cm。P2は径48×41cmの円形で、深さ16cm。P3は径31×19cmの円形で、深さ40cmである。遺物は縄文中期の土器片と石皿1点が覆土から出土した。阿玉台II式期と推定される。

土坑SK212 (Fig.111・113)

調査区南東側4工区に位置する。本跡はSK204・205・206・216に切られている。確認面上面径(161)×(120)cm、底面径(138)×(120)cmの楕円形を呈する。深さ最大29cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径19×19cmの円形で、深さ52cm。P2は径41×30cmの円形で、深さ39cmである。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。

土坑SK213 (Fig.111・113)

調査区南東側4工区に位置する。本跡はSK203・204・205・212に切られている。底面径(235)×(58)cmの楕円形を呈するものと推定する。深さ最大20cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径17×15cmの円形で、深さ24cmである。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E式期と推定される。

土坑SK214 (Fig.111・113)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は西側の大半が未調査区域に広がり、南側でSK206に切られている。確認面上面径(130)×(48)cm、底面径27×(15)cmの楕円形を呈するものと推定する。深さ最大79cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。覆土は2層からなる自然堆積である。図示できる遺物の出土はなかった。

土坑SK215 (Fig.116)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は北東側でSK225に切られている。確認面上面径(162)×(109)cm、底面径(148)×(85)cmの楕円形を呈するものと推定する。深さ最大20cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、遺物は縄文中期の上器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK216 (Fig.111・112・113)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は西側の約半分が未調査区域に広がり、東側でSK205に切られている。確認面上面径240×(130)cm、底面径230×(120)cmの円形を呈する。底面が南側に張り出した袋状で、検出面からの深さ最大48cmを測り、壁面は一部内傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は3層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の上器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK217 (Fig.116)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は南側の約半分が未調査区域に広がり、北側でSK209・219に切られている。確認面上面径(201)×(192)cm、底面径(183)×(157)cmの楕円形を呈するものと推定する。深さ最大26cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径25×22cmの円形で、深さ35cm。P2は径34×28cmの円形で、深さ36cmである。遺物は縄文中期の土器片と上器片跡3点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK218 (Fig.117)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は北西側の半分以上が未調査区域に広がっている。確認面上面径270×(87)cm、底面径237×(76)cmの楕円形を呈するものと推定する。底面が西側に張り出した袋状で、確認面からの深さ最大40cmを測り、壁面は一部内傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は2層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の上器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK219 (Fig.116・117)

調査区北東側5工区に位置する。本跡はSK217・220を切って構築している。確認面上面径195×153cm、底面径122×100cmの楕円形を呈する。深さ最大35cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径44×33cmの円形で、深さ52cmである。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK220 (Fig.116・117)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は南西側でSK219に切られている。確認面上面径233×180cm、底面径183×127cmの楕円形を呈する。深さ最大19cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径34×25cmの円形で、深さ28cm。P2は径29×27cmの円形で、深さ31cmである。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E2式期と推定される。

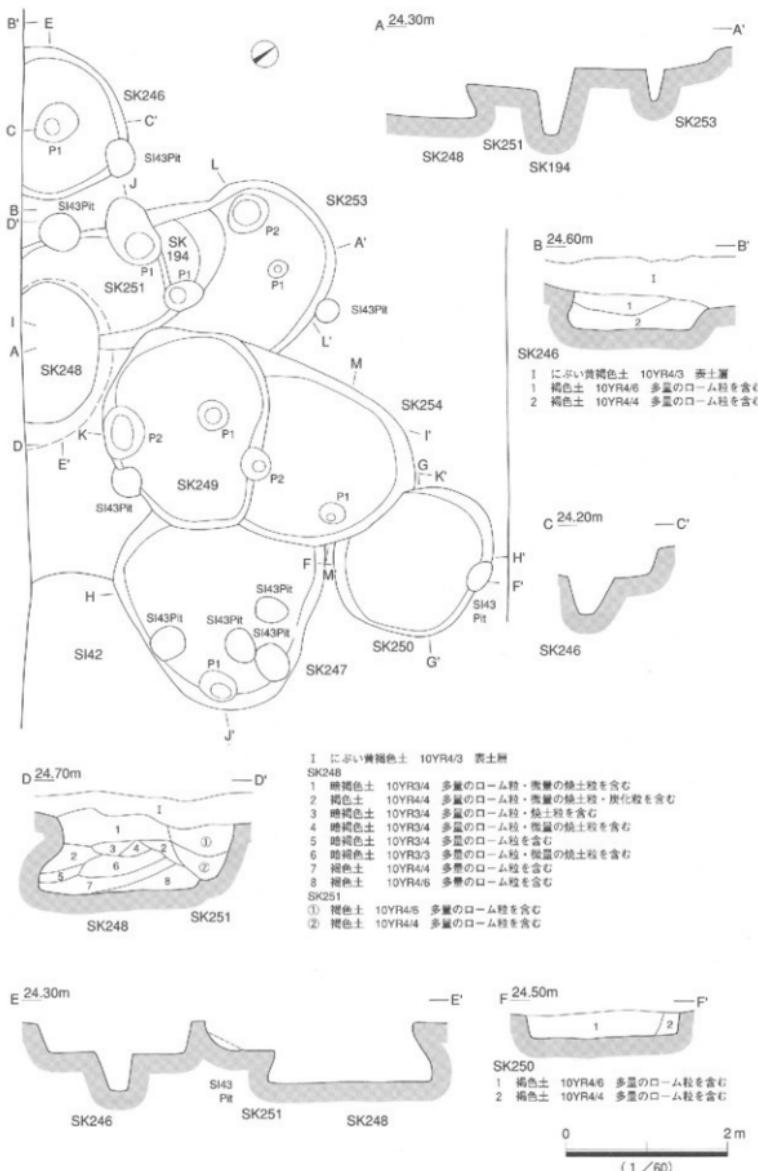
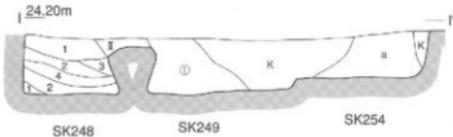
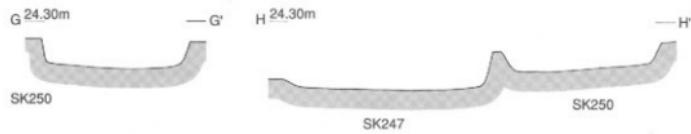


Fig. 114 土坑SK194・246・247・248・249・250・251・253・254実測図(1)



- II 黄色土 10YR4/6 少量のローム粒を含む
SK248
- 1 黄色土 10YR4/4 多量のローム粒を含む
2 暗褐色土 10YR3/4 多量のローム粒・微量の絶土粒を含む
3 黄色土 10YR4/4 多量のローム粒・ロームブロックを含む
4 暗褐色土 10YR3/3 多量のローム粒を含む

- SK249
① 淡色土 10YR4/6 多量のローム粒・ロームブロックを含む
SK254
a 淡色土 10YR4/6 多量のローム粒を含む

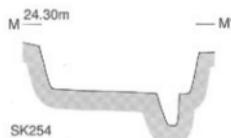
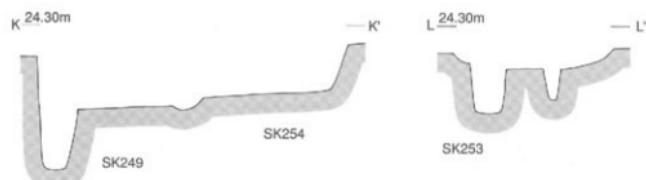


Fig. 115 土坑SK247・248・249・250・251・253・254実測図(2)

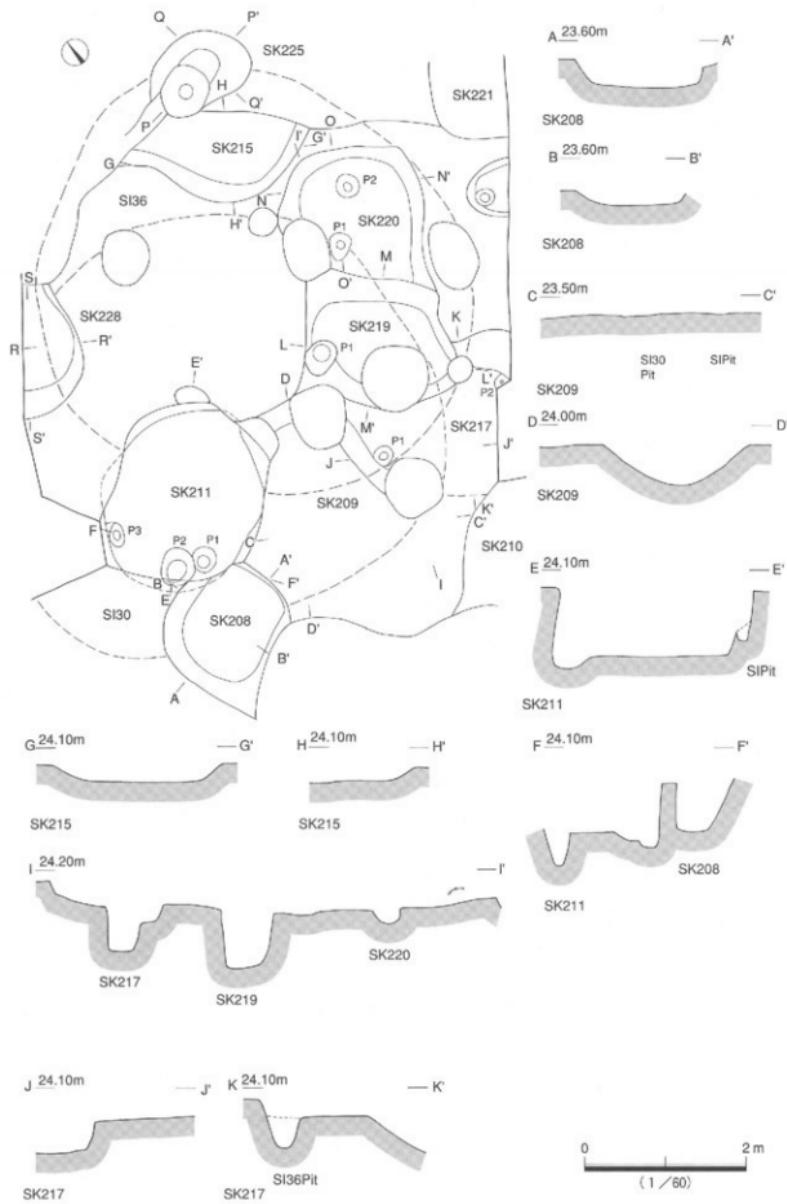


Fig. 116 土坑SK208・209・211・215・217・219・220・225・228実測図(1)

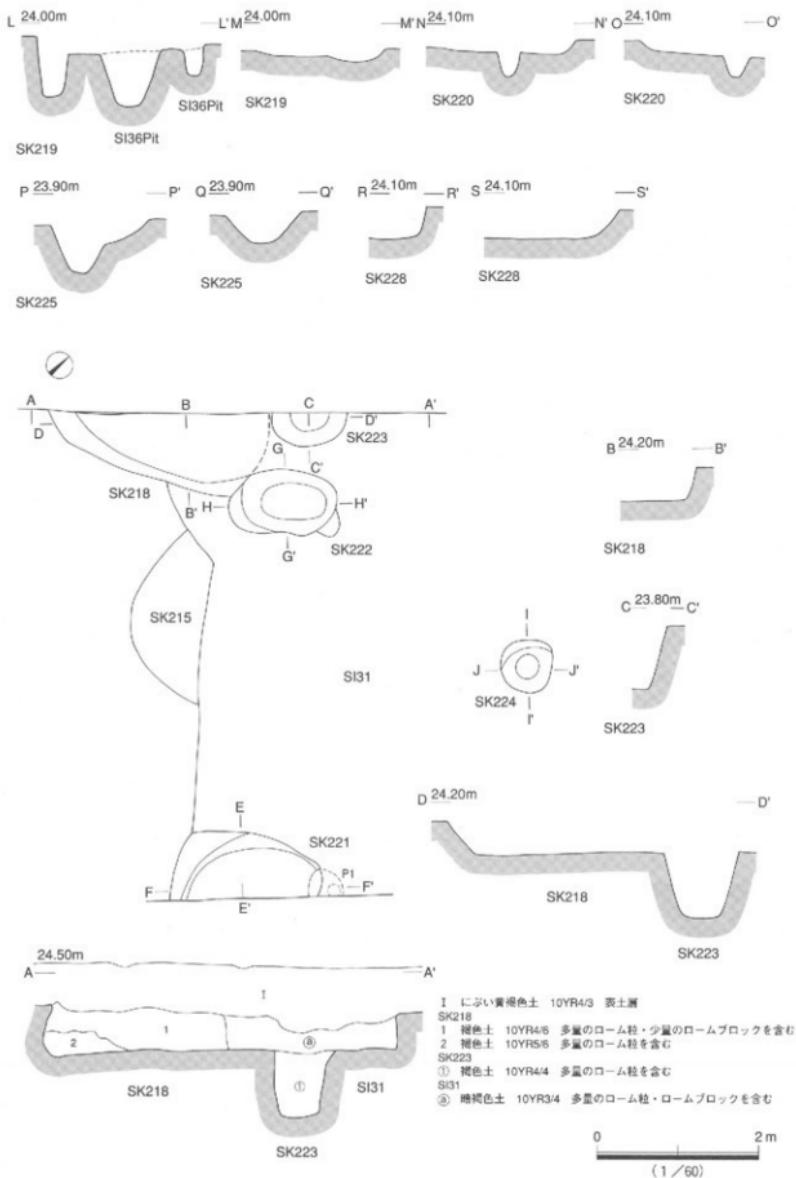


Fig. 117 土坑SK219・220・225・228(2)、SK218・221・222・223・224(1)実測図

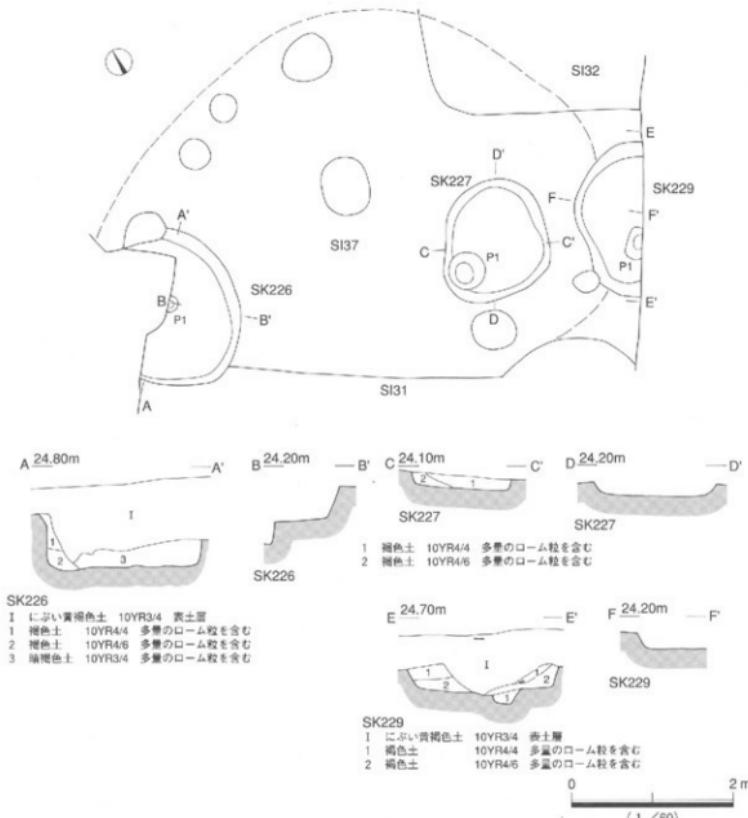
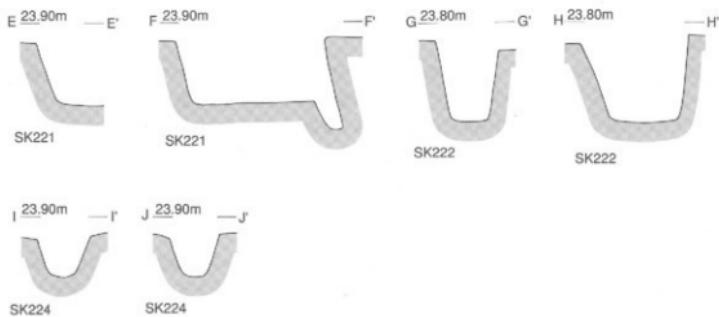


Fig. 118 土坑SK221・222・224(2)、SK226・227・229実測図

土坑SK221 (Fig.117・118)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は南東側の約半分が本調査区域に広がっている。確認面上面径185×(82)cm、底面径167×(58)cmの円形を呈するものと推定する。底面が北側に張り出した袋状で、検出面から深さ最大76cmを測り、壁面は一部内傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径40×(32)cmの円形で、深さ34cmである。遺物は縄文中期の土器片と土器片錐1点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK222 (Fig.117・118)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は西側でSK218を切って構築している。確認面上面径133×76cm、底面径80×45cmの楕円形を呈する。深さ最大106cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦である。図示できる遺物の出土はなかった。

土坑SK223 (Fig.117)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は北西側の約半分が本調査区域に広がっている。確認面上面径92×(42)cm、底面径47×(20)cmの円形を呈する。深さ最大78cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK224 (Fig.117・118)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は確認面上面径65×61cm、底面径30×29cmの円形を呈する。深さ最大53cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦である。図示できる遺物の出土はなかった。

土坑SK225 (Fig.116・117)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は南側でSK215を切って構築している。確認面上面径132×87cm、底面径43×(29)cmの楕円形を呈する。深さ最大36cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦である。図示できる遺物の出土はなかった。

土坑SK226 (Fig.118)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は北西側の約半分が本調査区域に広がっている。確認面上面径193×(91)cm、底面径171×(78)cmの円形を呈する。底面が外側に張り出した袋状で、確認面からの深さ最大44cmを測り、壁面は内傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径20×(11)cmの円形で、深さ27cmである。覆土は3層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と土器片錐1点が覆土から出土した。加曾利E2式期と推定される。

土坑SK227 (Fig.118)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は確認面上面径158×125cm、底面径131×107cmの楕円形を呈する。深さ最大21cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径46×45cmの円形で、深さ81cmである。覆土は2層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK228 (Fig.116・117)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は北西側の半分以上が未調査区域に広がっている。確認面上面径(164)×(71)cm、底面径(128)×(61)cmの楕円形を呈するものと推定する。深さ最大40cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦である。図示できる遺物の出土はなかった。

土坑SK229 (Fig.118)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は南東側の約半分が未調査区域に広がっている。確認面上面径188×(80)cm、底面径154×(71)cmの楕円形を呈する。深さ最大20cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径38×17cmの円形で、深さ20cmである。覆土は2層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK230 (Fig.119)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は確認面上面径234×204cm、底面径214×188cmの円形を呈する。深さ最大16cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。センタービットのP1は径33×27cmの円形で、深さ45cmである。サイドボケットのP2は径98×63cmの円形で、深さ18cmである。遺物は縄文早・前期の土器片と縄文中期の土器片鉢1点が覆土から出土した。加曾利E式期と推定される。

土坑SK231 (Fig.119)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は南西側の約半分が未調査区域に広がり、北西側でSK232に切られて構築している。確認面上面径(177)×(149)cm、底面径(158)×(144)cmの楕円形を呈するものと推定する。確認面からの深さ最大18cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが3ヶ所検出された。P1は径20×20cmの円形で、深さ31cm。P2は径94×87cmの円形で、深さ92cm。P3は径23×23cmの円形で、深さ23cmである。覆土は2層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E2式期と推定される。

土坑SK232 (Fig.119)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は南西側の約半分が未調査区域に広がり、南東側でSK231を切っている。確認面上面径205×(80)cm、底面径186×(59)cmの円形を呈するものと推定する。確認面からの深さ最大52cmを測り、壁面は一部内傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は5層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK233 (Fig.119)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は確認面上面径97×88cm、底面径70×63cmの円形を呈する。深さ最大58cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、遺物は縄文中期の土器片と土器片鉢1点が覆土から出土した。加曾利E2式期と推定される。

土坑SK234 (Fig.119)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は北東側の約半分が未調査区域に広がっている。確認面上面径223×(105)cm、底面径150×(87)cmの円形を呈する。底面が外側に張り出した袋状で、確認面からの深さ最大47cmを測り、壁面は内傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。サイドビットのP1は径84×65cmの円形で、深さ44cmである。覆土は3層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

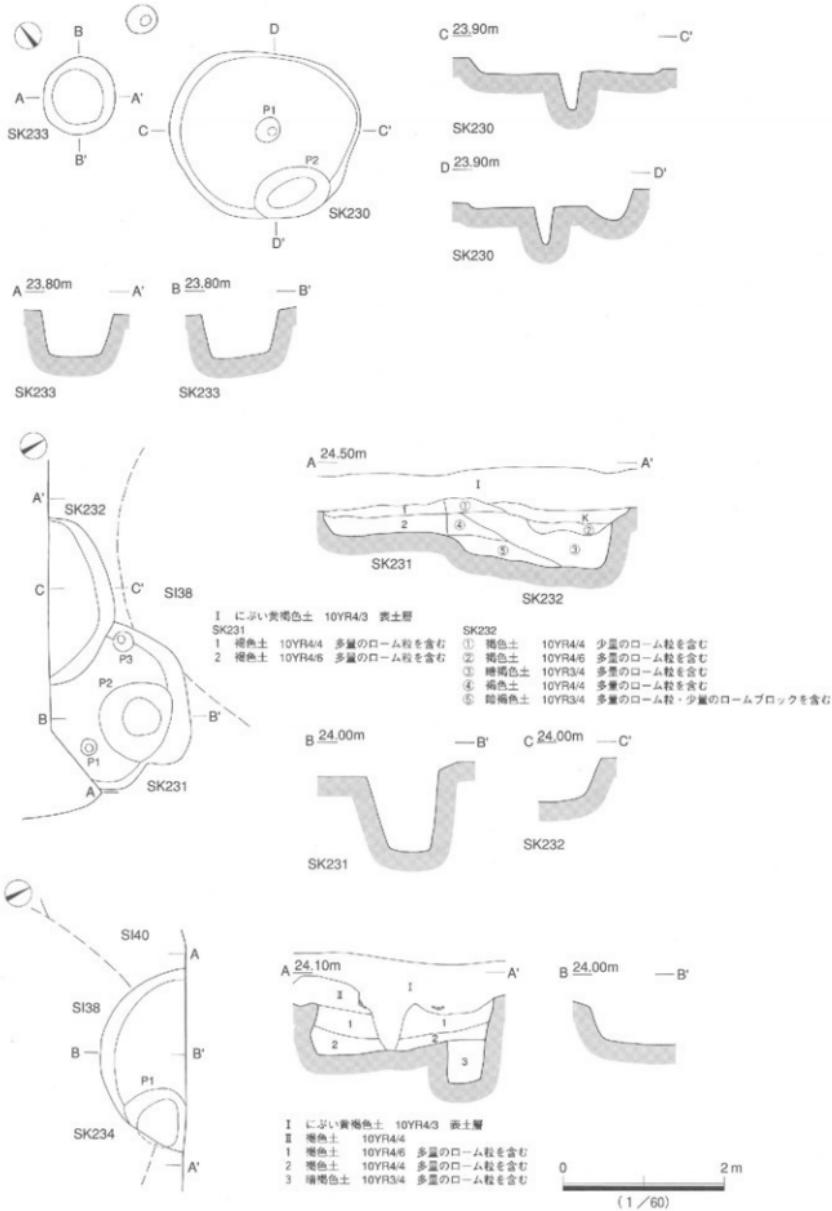


Fig. 119 土坑SK230・233、SK231・232、SK234実測図

土坑SK235 (Fig.109・110)

調査区南東側4工区に位置する。本跡はSK188・193に切られている。確認面上面径(150)×(80)cm、底面径138×(54)cmの楕円形を呈する。深さ最大28cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E式期と推定される。

土坑SK236 (Fig.109・110・111)

調査区南東側4工区に位置する。本跡はSK197・199・235に切られている。確認面上面径234×(141)cm、底面径170×(112)cmの楕円形を呈するものと推定する。深さ最大22cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径28×25cmの円形で、深さ24cmである。図示できる遺物の出土はなかった。

土坑SK237 (Fig.111・112)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は西側の半分以上が未調査区域に広がり、SK191・202を切って構築している。確認面上面径112×(40)cm、底面径91×(28)cmの楕円形を呈するものと推定する。深さ最大35cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径25×(16)cmの円形で、深さ58cmである。図示できる遺物の出土はなかった。

土坑SK238 (Fig.120)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は北側でSI40を切って構築している。確認面上面径194×189cm、底面径173×112cmの楕円形を呈する。深さ最大24cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが3ヶ所検出された。P1は径24×22cmの円形で、深さ25cm。P2は径38×30cmの円形で、深さ28cm。P3は径36×31cmの円形で、深さ22cmである。覆土は2層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK239 (Fig.120)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は東側でSI40を切って構築している。確認面上面径238×199cm、底面径223×183cmの円形を呈する。深さ最大55cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが7ヶ所検出された。P1は径59×57cmの円形で、深さ47cm。P2は径48×38cmの円形で、深さ54cm。P3は径75×45cmの円形で、深さ17cm。P4は径36×34cmの円形で、深さ65cm。P5は径36×31cmの円形で、深さ89cm。P6は径37×31cmの円形で、深さ20cm。P7は径60×46cmの円形で、深さ56cmである。覆土は2層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK240 (Fig.120)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は南西側の約半分が未調査区域に広がっている。確認面上面径217×(168)cm、底面径207×(160)cmの楕円形を呈する。深さ最大9cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが3ヶ所検出された。P1は径62×54cmの円形で、深さ118cm。P2は径60×47cmの円形で、深さ107cm。P3は径53×41cmの円形で、深さ106cmである。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。阿玉台式期と推定される。

土坑SK241 (Fig.120)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は北東側の一部が未調査区域に広がっている。確認面上面径191×154cm、底面径171×140cmの楕円形を呈する。深さ最大17cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径41×32cmの円形で、深さ5cm。P2は径40×39cmの円形で、深さ16cmである。覆土は2層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と土器片錐1点が覆土から出土した。加曾利E2式期と推定される。

土坑SK242 (Fig.120)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は南西側の約半分が未調査区域に広がり、南東側でSK244に切られ、東側でSK243を切って構築している。確認面上面径283×(199)cm、底面径271×(189)cmの円形を呈する。深さ最大37cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが3ヶ所検出された。P1は径56×44cmの円形で、深さ96cm。P2は径76×61cmの円形で、深さ56cm。P3は径40×35cmの円形で、深さ62cmである。遺物は縄文中期の土器片と土器片錐4点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK243 (Fig.120・121)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は西側でSK242・244に切られている。確認面上面径308×(113)cm、底面径291×(106)cmの楕円形を呈する。深さ最大33cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが3ヶ所検出された。P1は径120×96cmの円形で、深さ60cm。P2は径47×29cmの円形で、深さ36cm。P3は径42×41cmの円形で、深さ85cmである。P1の覆土は2層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と土器片錐2点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK244 (Fig.120・121)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は南西側の一部が未調査区域に広がり、SK242・243を切って構築している。確認面上面径240×200cm、底面径223×175cmの楕円形を呈する。底面が外側に張り出した袋状で、確認面からの深さ最大27cmを測り、壁面は内傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径29×26cmの円形で、深さ23cmである。覆土は3層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と土器片錐1点、局部磨製石斧1点、黒曜石製石鎧1点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK245 (Fig.121)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は北東側の一部が未調査区域に広がり、確認面上面径191×(66)cm、底面径169×(59)cmの円形を呈する。底面が外側に張り出した袋状で、確認面からの深さ最大49cmを測り、壁面は内傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は2層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と土器片錐1点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK246 (Fig.114)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は南西側の約1/3が未調査区域に広がっている。確認面上面径187×(124)cm、底面径166×(112)cmの円形を呈する。底面が外側に張り出した袋状で、確認面からの深さ最大37cmを測り、壁面は一部内傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径54×45cmの円形で、深さ47cmである。覆土は2層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と土器片錐1点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK247 (Fig.114・115)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は北側でSK249・254に切られている。確認面上面径271×250cm、底面径229×229cmの楕円形を呈する。深さ最大47cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径48×35cmの円形で、深さ60cmである。遺物は縄文中期の土器片と土器片錐3点、磨石1点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK248 (Fig.114・115)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は南西側の約半分が未調査区域に広がり、北側でSK251を切って構築している。確認面上面径173×(97)cm、底面径205×(110)cmの楕円形を呈する。底面が外側に張り出した袋状で、確認面からの深さ最大58cmを測り、壁面は内傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は8層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と土器片錐5点、砾石斧1点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK249 (Fig.114・115)

調査区北東側5工区に位置する。本跡はSK247・254を切って構築している。確認面上面径243×196cm、底面径226×162cmの楕円形を呈する。底面が外側に張り出した袋状で、確認面からの深さ最大66cmを測り、壁面は一部内傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径37×37cmの円形で、深さ22cm。P2は径64×50cmの円形で、深さ75cmである。覆土は1層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と土器片錐6点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK250 (Fig.114・115)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は西側でSK254に切られている。確認面上面径204×140cm、底面径176×124cmの円形を呈する。確認面からの深さ最大35cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は2層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と土器片錐1点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK251 (Fig.114・115)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は南西側の一部が未調査区域に広がり、南側でSK248に切られ、北側でSK194を切って構築している。確認面上面径(180)×152cm、底面径(174)×121cmの楕円形を呈する。深さ最大40cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径86×52cmの円形で、深さ41cmである。覆土は2層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK252 (Fig.121・122)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は西側でSK257に切られ、東側でSK256を切って構築している。確認面上面径187×(56)cm、底面径173×(45)cmの楕円形を呈するものと推定する。深さ最大43cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦である。図示できる遺物の出土はなかった。

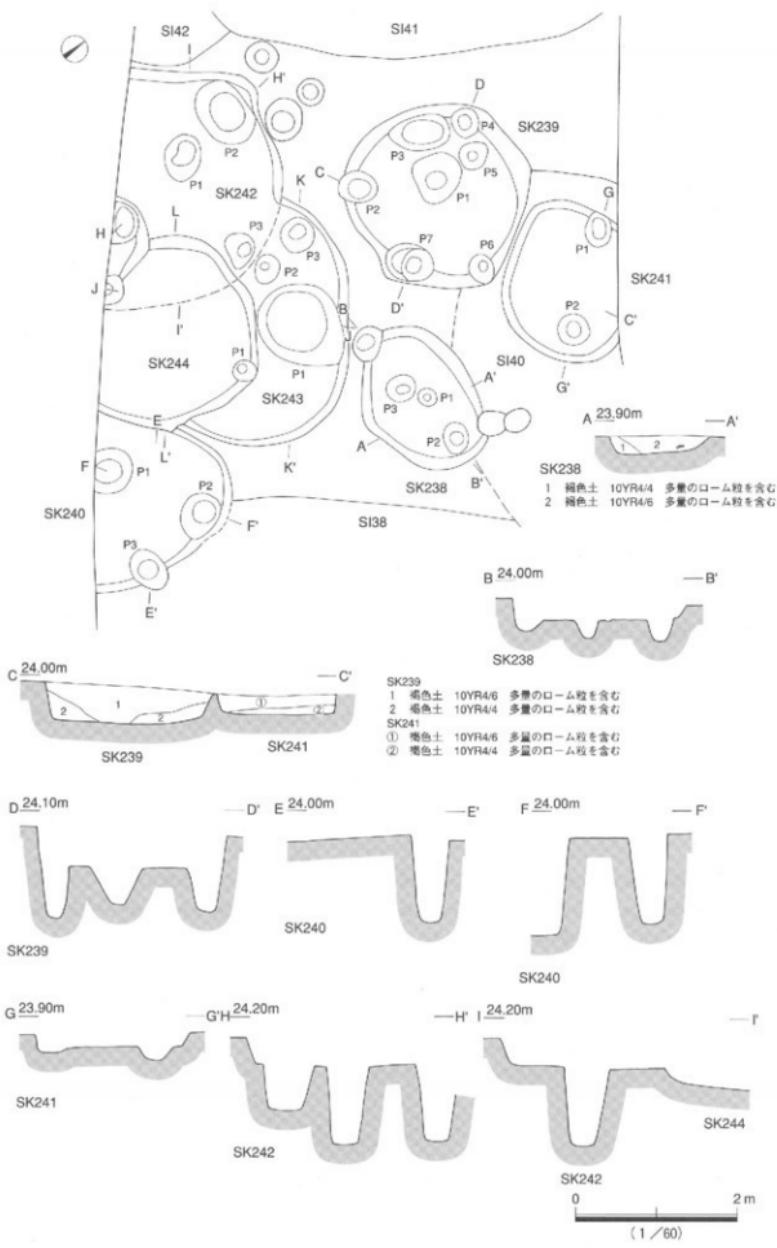


Fig. 120 土坑SK238・239・240・241・242・243・244実測図(1)

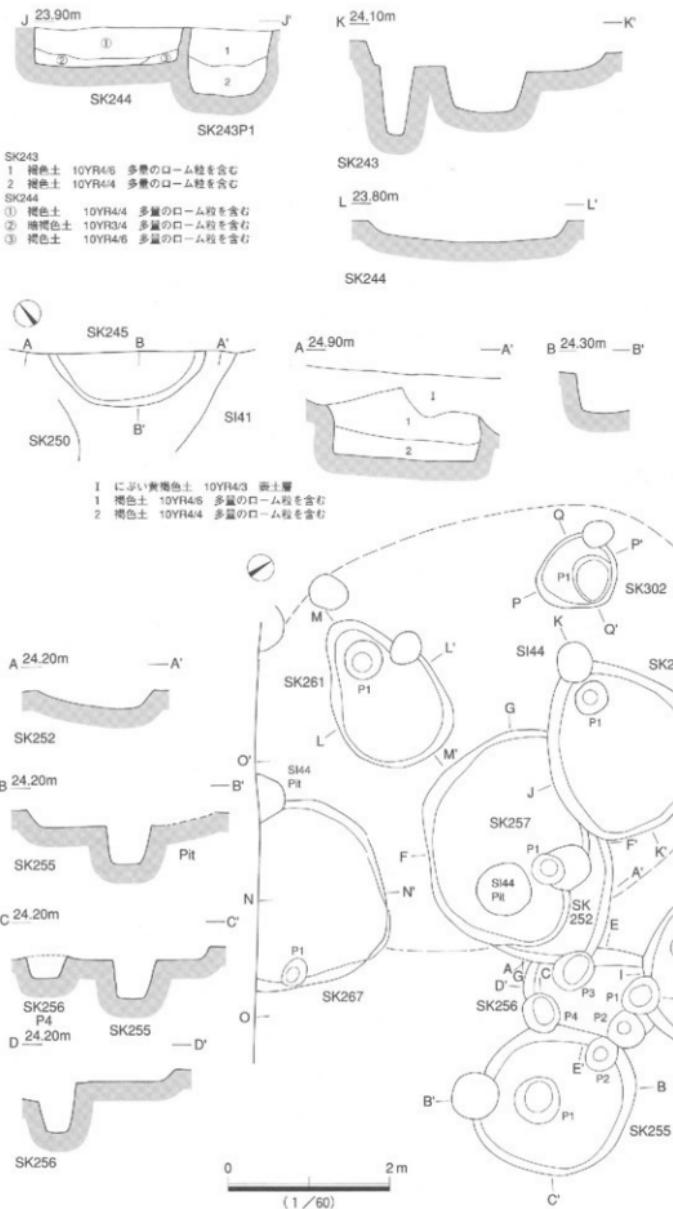


Fig. 121 土坑SK243・244(2)、SK245、SK252・255・256・257・258・259・261・267・302(1)実測図

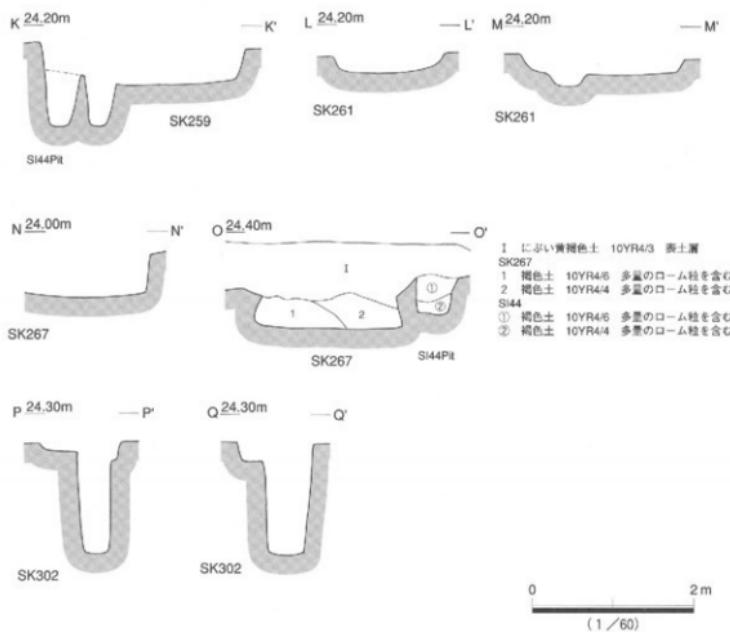
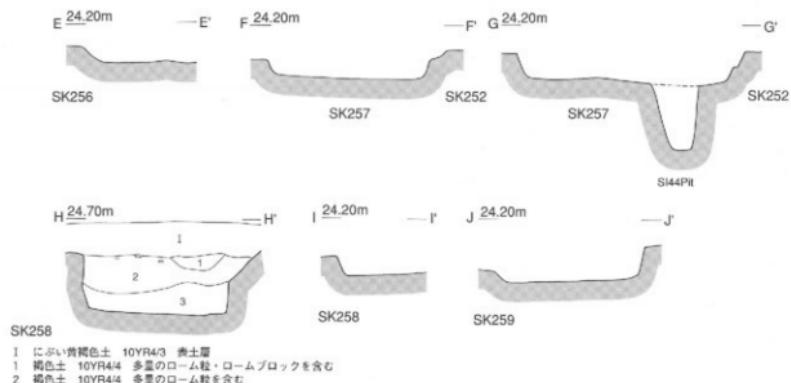


Fig. 122 土坑SK252・256・257・258・259・261・267・302実測図(2)

土坑SK253 (Fig.114・115)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は南側でSK194・249に切られている。確認面上面径243×202cm、底面径199×182cmの楕円形を呈する。深さ最大28cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径23×21cmの円形で、深さ39cm。P2は径52×46cmの円形で、深さ56cmである。図示できる遺物の出土はなかった。

土坑SK254 (Fig.114・115)

調査区北東側5工区に位置する。本跡はSK249に切られ、SK247・250を切って構築している。確認面上面径271×197cm、底面径209×173cmの楕円形を呈する。確認面からの深さ最大62cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径33×26cmの円形で、深さ39cm。P2は径40×36cmの円形で、深さ30cmである。図示できる遺物の出土はなかった。

土坑SK255 (Fig.121)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は北側でSK256を切って構築している。確認面上面径206×184cm、底面径178×160cmの円形を呈する。深さ最大22cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径57×56cmの円形で、深さ47cm。P2は径41×38cmの円形で、深さ75cmである。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E2式期と推定される。

土坑SK256 (Fig.121・122)

調査区北東側5工区に位置する。本跡はSK252・255・258に切られている。確認面上面径170×100cm、底面径141×61cmの楕円形を呈する。深さ最大23cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが4ヶ所検出された。P1は径50×43cmの円形で、深さ56cm。P2は径44×43cmの円形で、深さ57cm。P3は径53×42cmの円形で、深さ80cm。P4は径48×42mの円形で、深さ22cmである。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E2式期と推定される。

土坑SK257 (Fig.121・122)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は北側でSK259に切られ、東側でSK252を切って構築している。確認上面径257×197cm、底面径243×185cmの楕円形を呈する。深さ最大37cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E2式期と推定される。

土坑SK258 (Fig.121・122)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は北東側の約半分が未調査区域に広がり、南西側でSK256を切って構築している。確認面上面径195×(108)cm、底面径177×(99)cmの円形を呈する。底面が外側に張り出した袋状で、確認面からの深さ最大45cmを測り、壁面は内傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径36×30cmの円形で、深さ19cm。P2は径41×34cmの円形で、深さ38cmである。覆土は3層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と磨石1点が覆土から出土した。加曾利E2式期と推定される。

土坑SK259 (Fig.121・122)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は南側でSK257を切って構築している。確認面上面径219×184cm、底面径196×156cmの楕円形を呈する。深さ最大47cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径40×40cmの円形で、深さ55cmである。遺物は縄文中期の土器片と土器片錐2点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK260 (Fig.123)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は南東側の半分以上が未調査区域に広がっている。確認面上面径112×(37)cm、底面径85×(20)cmの円形を呈するものと推定する。深さ最大8cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径37×34cmの円形で、深さ75cmである。覆土は單一層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。阿玉台式期と推定される。

土坑SK261 (Fig.121・122)

調査区北東側5工区に位置する。確認面上面径201×134cm、底面径179×120cmの楕円形を呈する。深さ最大25cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径48×47cmの円形で、深さ14cmである。遺物は縄文中期の上器片と土器片錐2点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK262 (Fig.83)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は南西側の大半が未調査区域に広がっている。確認面上面径295×(91)cm、底面径274×(82)cmの楕円形を呈する。深さ最大8cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径32×(23)cmの円形で、深さ28cm。P2は径28×25cmの円形で、深さ45cmである。覆土は3層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の上器片が覆土から出土した。阿玉台式期と推定される。

土坑SK263 (Fig.123)

調査区北東側5工区に位置する。本跡はSK264・272を切って構築している。確認面上面径171×116cm、底面径129×97cmの楕円形を呈する。深さ最大43cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、遺物は縄文中期の土器片と土器片錐3点が覆土から出土した。加曾利E2式期と推定される。

土坑SK264 (Fig.123)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は北側でSK263に切られている。確認面上面径230×203cm、底面径193×160cmの楕円形を呈する。深さ最大45cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径20×19cmの円形で、深さ35cmである。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK265 (Fig.123)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は北側でSK266に切られている。確認面上面径229×131cm、底面径195×106cmの楕円形を呈する。深さ最大31cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが3ヶ所検出された。P1は径39×36cmの円形で、深さ78cm。P2は径43×40cmの円形で、深さ56cmである。P3は径50×35cmの楕円形で、深さ75cm。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

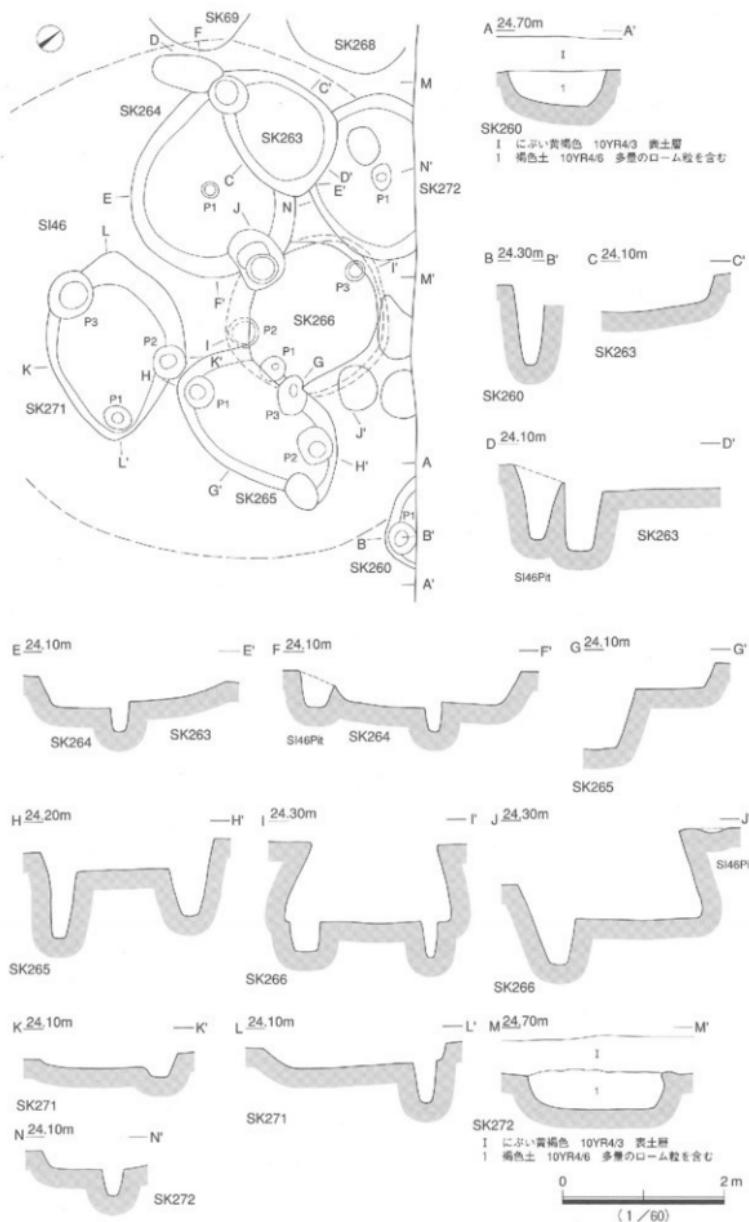


Fig. 123 土坑SK260・263・264・265・266・271・272実測図

土坑SK266 (Fig.123・213)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は南側でSK265を切って構築している。確認面上面径182×155cm、底面径204×195cmの円形を呈する。底面が外側に張り出した袋状で、確認面からの深さ最大96cmを測り、壁面は内傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが3ヶ所検出された。P1は径33×29cmの円形で、深さ18cm。P2は径38×37cmの円形で、深さ36cm。P3は径25×23cmの円形で、深さ45cmである。遺物は縄文中期の土器片と土器片鍤2点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK267 (Fig.121・122)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は南西側の約半分が未調査区域に広がっている。確認面上面径255×(155)cm、底面径208×(150)cmの円形を呈する。底面が外側に張り出した袋状で、確認面からの深さ最大54cmを測り、壁面は内傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径37×29cmの円形で、深さ20cmである。覆土は2層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK268 (Fig.124)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は確認面上面径204×168cm、底面径173×143cmの楕円形を呈する。深さ最大33cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径43×42cmの円形で、深さ65cm。P2は径48×46cmの円形で、深さ36cmである。覆土は3層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と土器片鍤1点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK269 (Fig.124)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は確認面上面径154×120cm、底面径138×112cmの円形を呈する。深さ最大25cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径86×69cmの円形で、深さ31cmである。覆土は2層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK270 (Fig.124)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は確認面上面径108×85cm、底面径61×48cmの楕円形を呈する。深さ最大55cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK271 (Fig.123)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は確認面上面径232×171cm、底面径185×134cmの楕円形を呈する。深さ最大22cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが3ヶ所検出された。P1は径35×29cmの円形で、深さ53cm。P2は径43×39cmの円形で、深さ12cmである。P3は径60×55cmの円形である。遺物は縄文中期の土器片と土器片鍤2点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK272 (Fig.123)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は北東側の約1/3が未調査区域に広がり、西側でSK263に切られている。確認面上面径205×(129)cm、底面径171×(117)cmの円形を呈する。底面が外側に張り出した袋状で、確認面からの深さ最大30cmを測り、壁面は内傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径34×25cmの円形で、深さ32cmである。覆土は單一層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

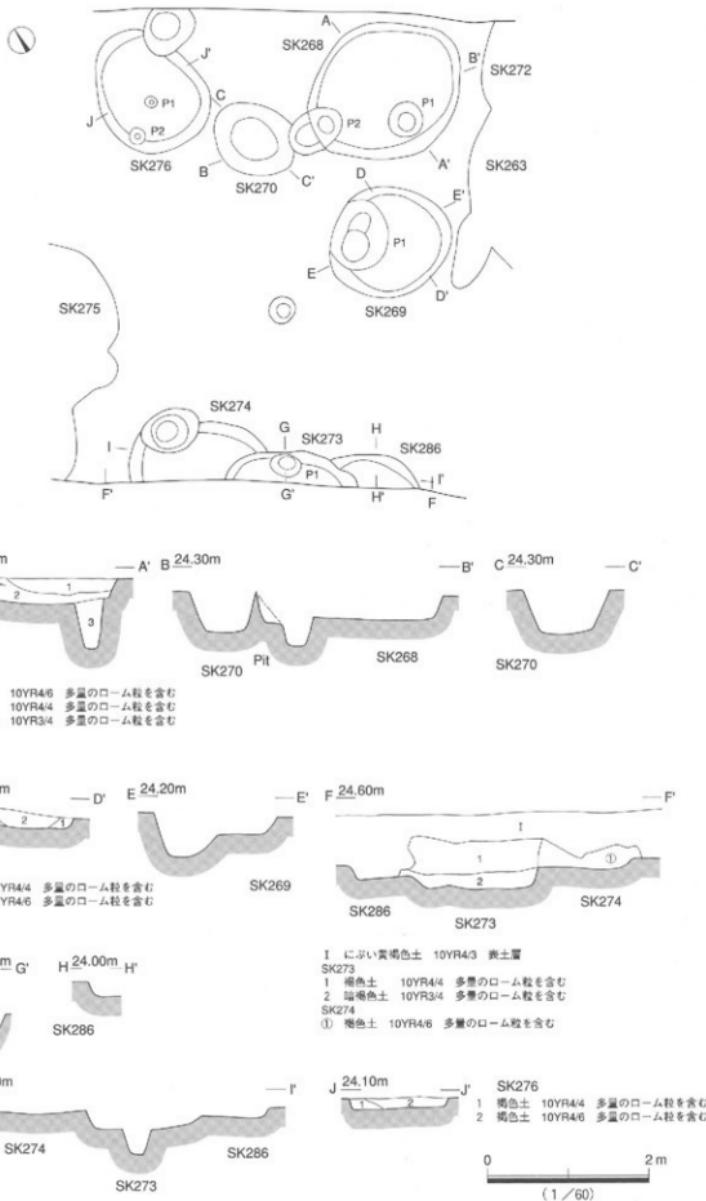


Fig. 124 土坑SK268・269・270・273・274・276・286実測図

土坑SK273 (Fig.124)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は南西側の大半が未調査区域に広がり、SK274・286を切って構築している。確認面上面径160×(36)cm、底面径130×(29)cmの円形を呈するものと推定する。深さ最大42cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径36×30cmの円形で、深さ31cmである。覆土は2層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E式期と推定される。

土坑SK274 (Fig.124)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は南西側の約半分が未調査区域に広がり、SK273に切られている。確認面上面径171×70cm、底面径143×59cmの円形を呈するものと推定する。深さ最大20cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は單一層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E式期と推定される。

土坑SK275 (Fig.125)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は西側でSK277に切られている。確認面上面径227×178cm、底面径193×137cmの楕円形を呈する。深さ最大26cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は2層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E式期と推定される。

土坑SK276 (Fig.124)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は確認上面面径156×127cm、底面径129×100cmの楕円形を呈する。深さ最大17cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径14×14cmの円形で、深さ34cm。P2は径20×19cmの円形で、深さ18cmである。覆土は2層からなる自然堆積である。図示できる遺物の出土はなかった。

土坑SK277 (Fig.125)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は南西側の約半分が未調査区域に広がり、東側でSK275を切って構築している。確認面上面径258×(148)cm、底面径235×(156)cmの円形を呈する。底面が外側に張り出した袋状で、確認面からの深さ最大61cmを測り、壁面は内傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径40×39cmの円形で、深さ29cmである。覆土は2層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と土器片錐1点が覆土から出土した。加曾利E式期と推定される。

土坑SK278 (Fig.125)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は確認面上面径112×102cm、底面径72×59cmの円形を呈する。深さ最大27cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E式期と推定される。

土坑SK279 (Fig.125)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は北東側の約半分が未調査区域に広がっている。確認面上面径210×(139)cm、底面径184×(126)cmの楕円形を呈するものと推定する。深さ最大28cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが3ヶ所検出された。P1は径64×63cmの円形で、深さ86cm。P2は径28×27cmの円形で、深さ25cm。P3は径25×25cmの円形で、深さ37cmである。覆土は1層からなる自然堆積である。図示できる遺物の出土はなかった。

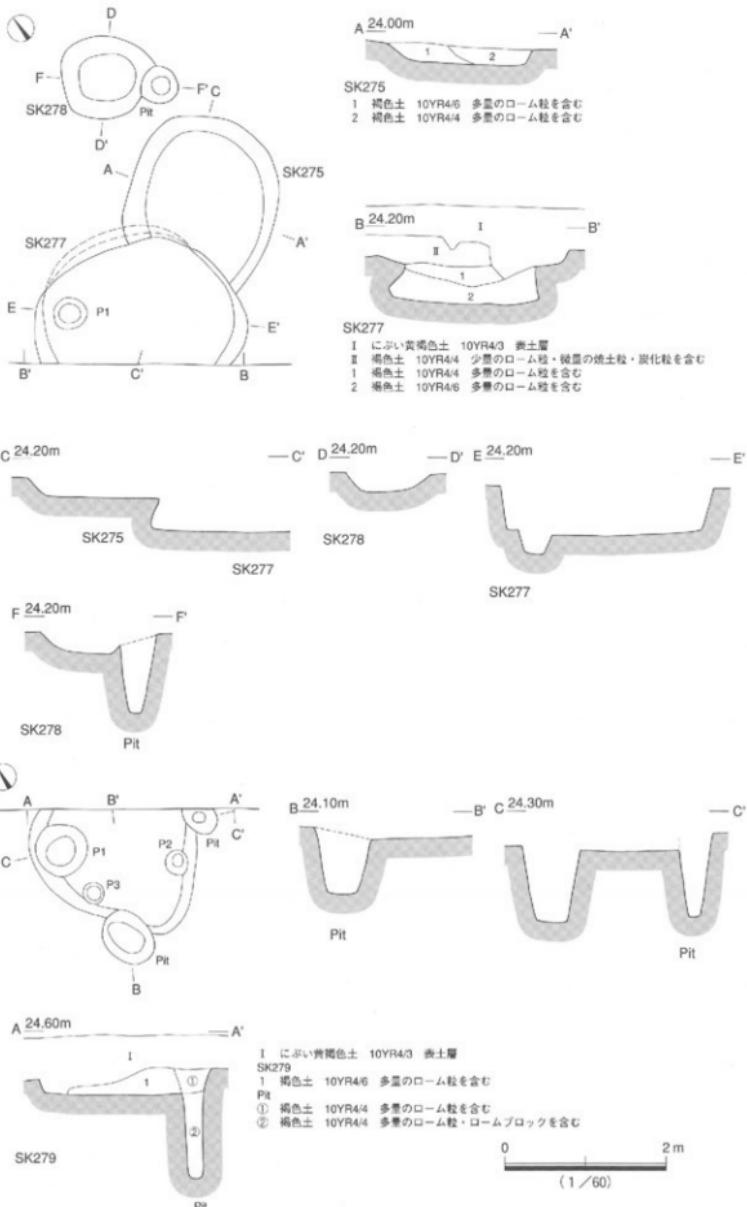


Fig. 125 土坑SK275・277・278・279実測図

土坑SK280 (Fig.126)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は東側でSK285に切られている。確認面上面径210×170cm、底面径187×165cmの円形を呈する。深さ最大26cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径30×28cmの円形で、深さ60cm。P2は径43×32cmの円形で、深さ30cmである。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E式期と推定される。

土坑SK281 (Fig.126)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は確認面上面径159×143cm、底面径139×119cmの楕円形を呈する。深さ最大33cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが3ヶ所検出された。P1は径48×27cmの円形で、深さ70cm。P2は径76×65cmの円形で、深さ50cm。P3は径42×42cmの円形で、深さ36cmである。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E式期と推定される。

土坑SK282 (Fig.127)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は南西側の一部が未調査区域に広がっている。南側でSK288に切られている。確認面上面径256×229cm、底面径213×208cmの楕円形を呈する。深さ最大59cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径92×(62)cmの円形で、深さ78cmである。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E式期と推定される。

土坑SK283 (Fig.128)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は南西側の約半分が未調査区域に広がっている。確認面上面径204×(98)cm、底面径200×(82)cmの円形を呈するものと推定する。底面が外側に張り出した袋状で、確認面からの深さ最大42cmを測り、壁面は内傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径(80)×70cmの円形で、深さ78cm。P2は径(66)×54cmの円形で、深さ21cmである。遺物は縄文中期の土器片と土器片錐2点が覆土から出土した。加曾利E式期と推定される。

土坑SK284 (Fig.126)

調査区北東側5工区に位置する。本跡はSK285に切られている。確認上面面径350×240cm、底面径334×210cmの楕円形を呈する。深さ最大25cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが3ヶ所検出された。P1は径50×40cmの円形で、深さ63cm。P2は径57×44cmの円形で、深さ60cm。P3は径26×25cmの円形で、深さ46cmである。遺物は縄文中期の土器片と土器片錐1点、磨製石斧1点が覆土から出土した。加曾利E式期と推定される。

土坑SK285 (Fig.126)

調査区北東側5工区に位置する。本跡はSK280・284を切って構築している。確認面上面径180×172cm、底面径154×149cmの円形を呈する。深さ最大34cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが4ヶ所検出された。P1は径24×24cmの円形で、深さ51cm。P2は径53×48cmの円形で、深さ28cm。P3は径68×43cmの円形で、深さ53cm。P4は径44×43cmの円形で、深さ107cmである。遺物は縄文中期の土器片と土器片錐1点、磨製石斧1点、メノウ製石錐1点が覆土から出土した。加曾利E式期と推定される。

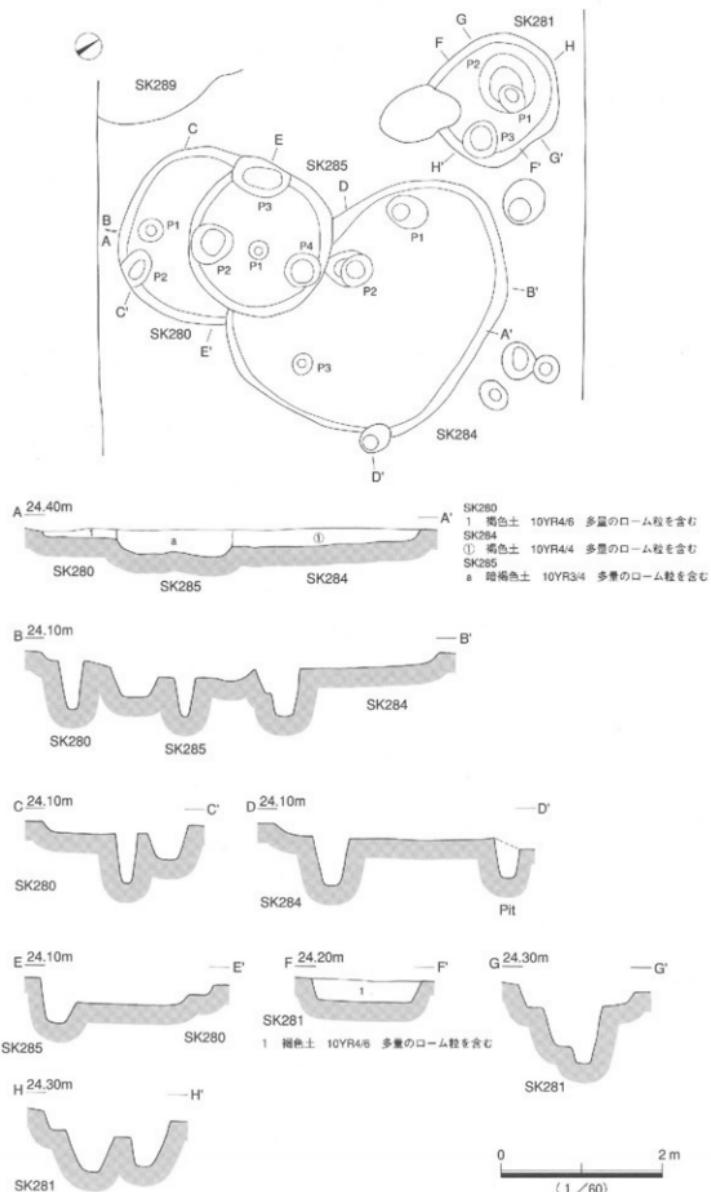


Fig. 126 土坑SK280・281・284・285実測図

土坑SK286 (Fig.124)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は南東側の大半が未調査区域に広がっている。SK273に切られている。確認面上面径113×(39)cm、底面径93×(32)cmの円形を呈する。深さ最大18cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E2式期と推定される。

土坑SK287 (Fig.128)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は北側の約半分が未調査区域に広がっている。確認面上面径137×(71)cm、底面径270×(144)cmの円形を呈する。底面が外側に張り出した袋状で、確認面からの深さ最大109cmを測り、壁面は内傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は9層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と石器片2点、磨石1点が覆土から出土した。阿玉台IV式期と推定される。

土坑SK288 (Fig.127)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は南西側の約半分が未調査区域に広がり、SK282・289を切って構築している。確認面上面径329×(139)cm、底面径310×(134)cmの円形を呈するものと推定する。深さ最大71cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径41×32cmの円形で、深さ46cm。P2は径45×36cmの円形で、深さ37cmである。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E2式期と推定される。

土坑SK289 (Fig.127)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は南側でSK289を切って構築している。確認面上面径240×(156)cm、底面径220×(150)cmの楕円形を呈するものと推定する。確認面からの深さ最大43cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径61×(43)cmの円形で、深さ26cmである。覆土は單一層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK290 (Fig.127)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は南側でSK289を切って構築している。確認面上面径195×155cm、底面径305×247cmの楕円形を呈する。底面が外側に張り出した袋状で、確認面からの深さ最大134cmを測り、壁面は内傾して立ち上がる。底面は平坦で、覆土は10層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と土器片2点、磨製石斧1点が覆土から出土した。阿玉台II式期と推定される。

土坑SK291 (Fig.128)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は北側でSK292を切って構築している。確認面上面径90×81cm、底面径70×53cmの円形を呈する。深さ最大23cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、遺物は縄文中期の土器片と土器片2点、磨製石斧1点が覆土から出土した。加曾利E式期と推定される。

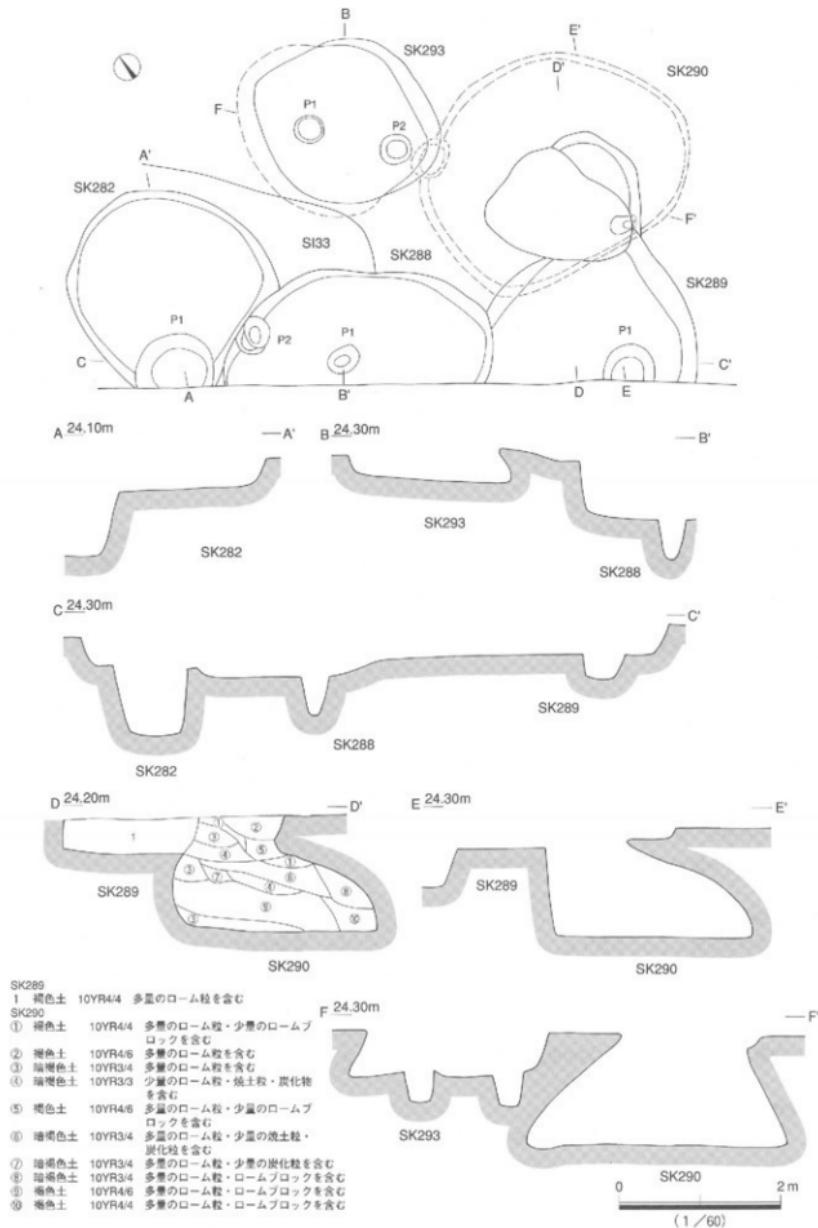


Fig. 127 土坑SK282・288・289・290・293実測図

土坑SK292 (Fig.128)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は南東側でSK291に切られている。確認面上面径88×78cm、底面径70×54cmの円形を呈する。深さ最大16cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E2式期と推定される。

土坑SK293 (Fig.127)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は確認面上面径199×199cm、底面径205×196cmの円形を呈する。確認面からの深さ最大53cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径36×35cmの円形で、深さ27cm。P2は径38×36cmの円形で、深さ40cmである。遺物は縄文中期の上器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK294 (Fig.128)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は南西側の約半分が未調査区域に広がっている。確認面上面径(134)×103cm、底面径(108)×68cmの楕円形を呈する。深さ最大47cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で、遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK295 (Fig.129)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は確認面上面径250×238cm、底面径228×216cmの円形を呈する。確認面からの深さ最大45cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが3ヶ所検出された。P1は径18×18cmの円形で、深さ61cm。P2は径67×50cmの円形で、深さ38cm。P3は径47×47cmの円形で、深さ50cmである。覆土は3層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E2式期と推定される。

土坑SK296 (Fig.129)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は確認面上面径233×216cm、底面径214×210cmの円形を呈する。確認面からの深さ最大31cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが6ヶ所検出された。P1は径20×19cmの円形で、深さ35cm。P2は径85×46cmの円形で、深さ71cm。P3は径45×44cmの円形で、深さ81cm。P4は径48×43cmの円形で、深さ62cm。P5は径27×25cmの円形で、深さ20cm。P6は径35×29cmの円形で、深さ62cmである。覆土は3層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と土器片錐1点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK297 (Fig.129)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は確認面上面径323×298cm、底面径281×260cmの円形を呈する。底面が外側に張り出した袋状で、確認面からの深さ最大68cmを測り、壁面は内傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが3ヶ所検出された。P1は径91×76cmの円形で、深さ81cm。P2は径37×28cmの円形で、深さ19cm。P3は径30×24cmの円形で、深さ19cmである。覆土は2層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と土器片錐2点が覆土から出土した。加曾利E2式期と推定される。

土坑SK298 (Fig.129)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は南西側の約半分が未調査区域に広がっている。確認面上面径252×(104)cm、底面径229×(97)cmの円形を呈するものと推定する。底面が外側に張り出した袋状で、確認面からの深さ最大52cmを測り、壁面は内傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径56×52cmの円形で、深さ83cmである。覆土は單一層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と土器片錐1点、磨製石斧1点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

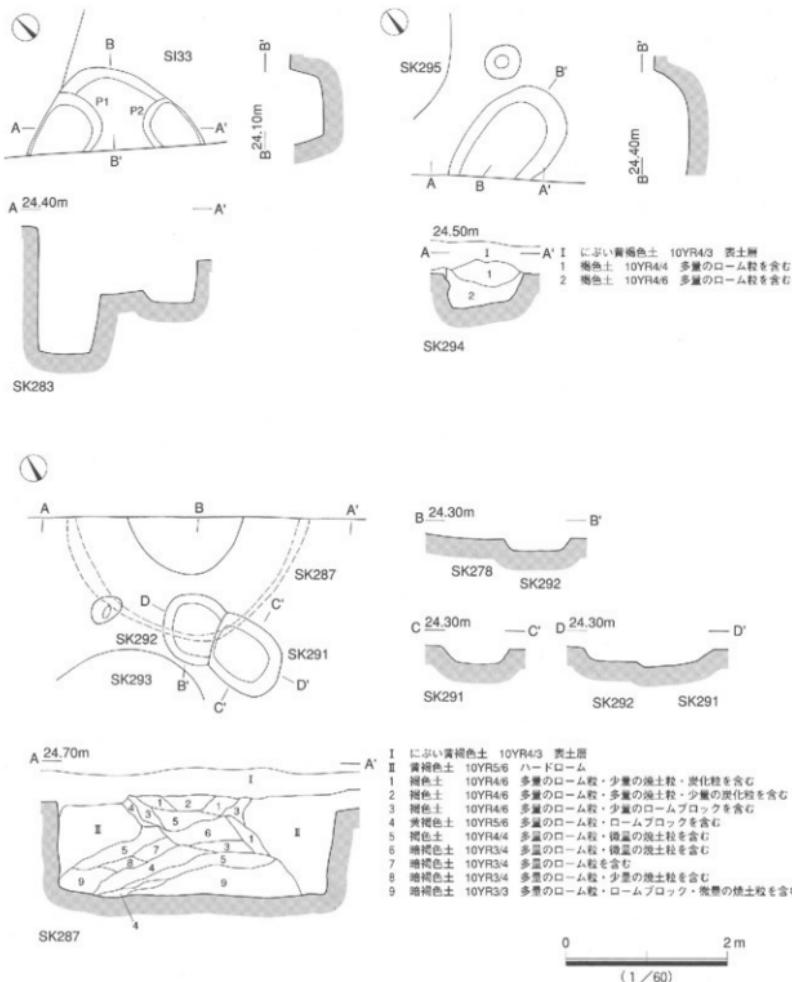


Fig. 128 土坑SK283・287・291・292・294実測図

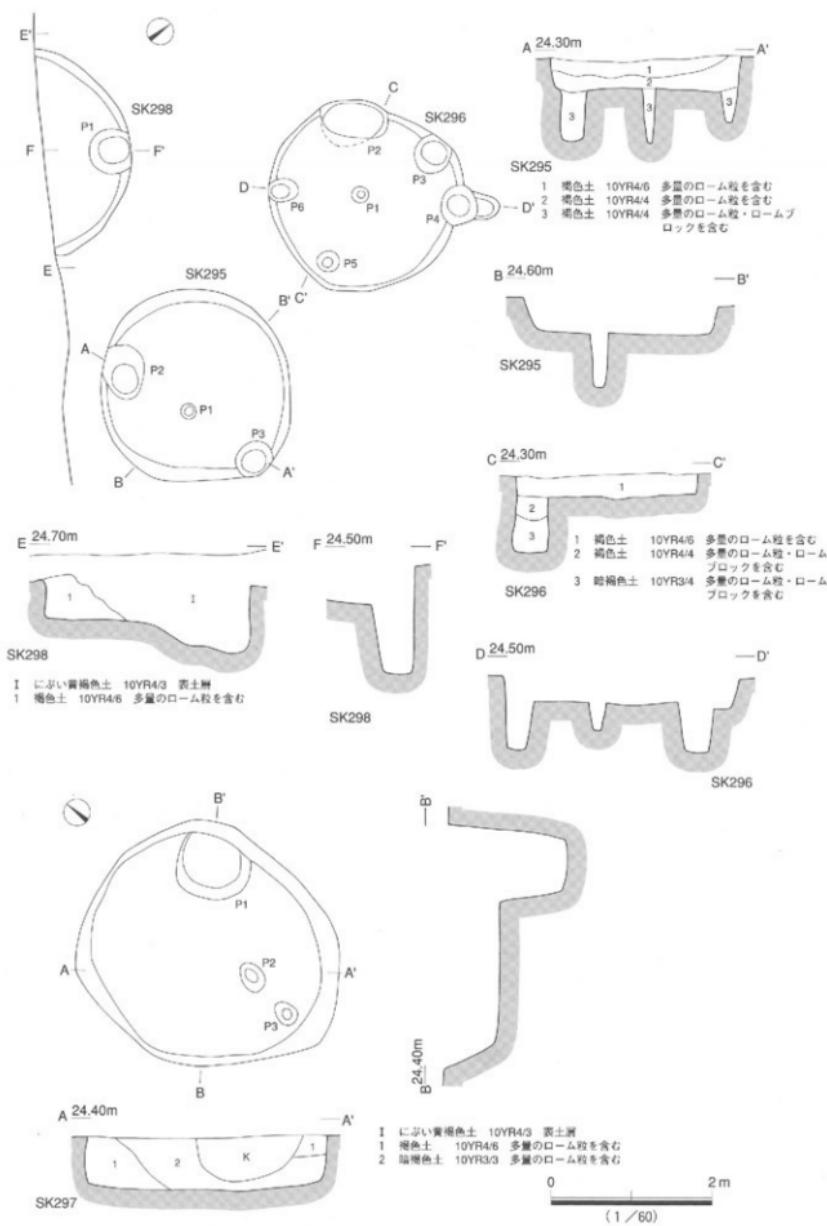
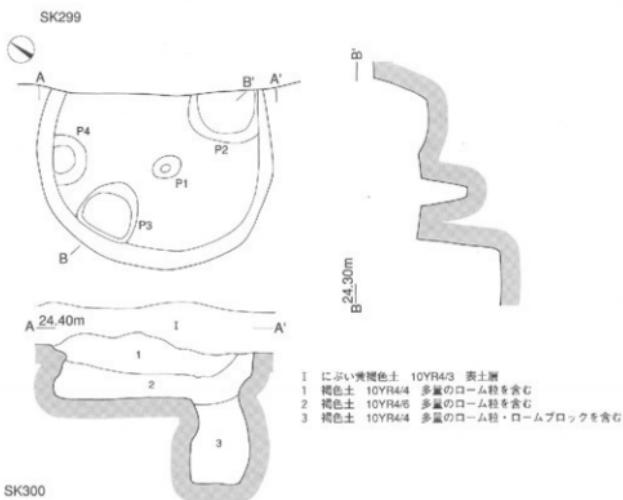
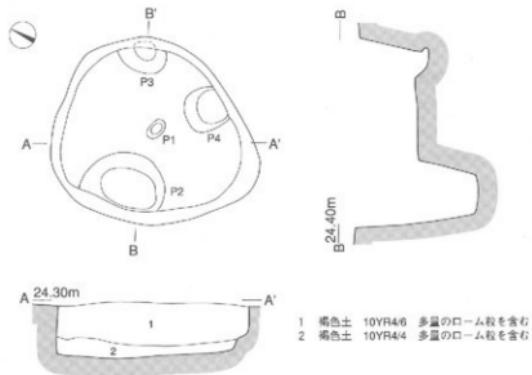


Fig. 129 土坑SK295・296・297・298実測図



SK300

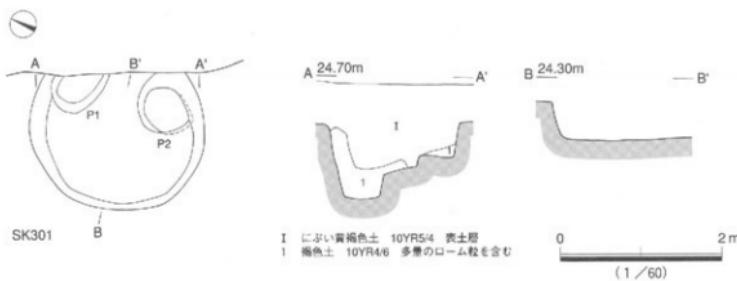


Fig. 130 土坑SK299・300・301実測図

土坑SK299 (Fig.130)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は確認面上面径256×229cm、底面径220×201cmの略円形を呈する。底面が外側に張り出した袋状で、確認面からの深さ最大75cmを測り、壁面は内傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが4ヶ所検出された。P1は径27×18cmの円形で、深さ31cm。P2は径98×70cmの円形で、深さ82cm。P3は径57×32cmの円形で、深さ14cm。P4は径53×50cmの円形で、深さ51cmである。覆土は2層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片と石皿1点が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

土坑SK300 (Fig.130)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は北東側の約1/3が未調査区域に広がっている。確認面上面径287×(215)cm、底面径253×(190)cmの円形を呈する。底面が外側に張り出した袋状で、確認面からの深さ最大63cmを測り、壁面は内傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが4ヶ所検出された。P1は径38×27cmの円形で、深さ59cm。P2は径86×(61)cmの円形で、深さ103cm。P3は径70×69cmの円形で、深さ11cm。P4は径60×42cmの円形で、深さ70cmである。覆土は3層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E2式期と推定される。

土坑SK301 (Fig.130)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は北東側の約半分が未調査区域に広がっている。確認面上面径216×210cm、底面径181×176cmの円形を呈する。確認面からの深さ最大55cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが2ヶ所検出された。P1は径(62)×58cmの円形で、深さ34cm。P2は径75×68cmの円形で、深さ54cmである。覆土は単一層からなる自然堆積である。遺物は縄文中期の土器片でわずかに1点のみ図示した。加曾利E1式と推定される。

土坑SK302 (Fig.121・122)

調査区北東側5工区に位置する。本跡は確認面上面径103×94cm、底面径88×82cmの楕円形を呈する。深さ最大19cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は平坦で内部施設として柱穴状掘り込みが1ヶ所検出された。P1は径58×47cmの円形で、深さ122cmである。遺物は縄文中期の土器片でわずかに1点のみ図示した。加曾利E式と推定される。

土坑SK303 (Fig.102・103)

調査区南東側4工区に位置する。本跡は西側の大半が未調査区域に広がっている。確認面上面径145×(34)cm、底面径112×(19)cmの楕円形を呈するものと推定する。確認面からの深さ最大28cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。遺物は縄文中期の土器片が覆土から出土した。加曾利E1式期と推定される。

第8節 土坑出土遺物

土坑SK02出土遺物 (Fig.131-1・2)

1・2は古墳時代の土師器。1は壺で、体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部はいったん内傾したのち、垂直方向にのび、端部はわずかに外反する。口縁部はヨコナデ、外面体部ヘラケズリ。内面体部ヘラナデ。2は甕口縁部破片。外傾して立ち上がる。外面縦位のヘラケズリ、内面横位のヘラナデ。

土坑SK04出土遺物 (Fig.131-1～3)

1～3は前期前半、黒浜式である。1は口縁部破片で、ナデによる無文。2・3は付加条縄文。胎土に多量の繊維を含む。

土坑SK08出土遺物 (Fig.131-1～32・Fig.132-33～63)

土器片と土器片錐7点、土製円盤3点が出土している。1～8・10～24・27・41はキャリバー形の深鉢で、1～10・14は口縁部破片。4を除き、3線の沿う隆帯による楕円形区画文に満巻文が配される。4は背割り隆帯による楕円形区画文。5は口縁上端が狭小な無文帯となり、隆帯区画内は円形刺突文を充填させる。6は沈線による円形、楕円形区画文内に条縄文を充填させ、胴部も縦位の条縄文を地文。7は沈線による楕円形区画文内に縦列の沈線を施し、胴部は縄文を地文に3本・縦の磨消懸垂文を垂下させる。8の口縁区画下は幅のある背割り隆帯となる。10は背割り隆帯に地文として撫糸Lを施文する。11～13・15～24は頭部破片。11～13・24は撫糸Lを地文とし、22・23は3本一組の磨消懸垂文で、24は5本一組の磨消懸垂文。14～23は縄文を地文とする。9・25・26は連弧文土器である。9・25は口縁部破片で、口縁直下に父互刺突文を施文し、9は単節RL縄文、25・26は撫糸Lを地文とする。また25・26は3本一組の沈線による連弧文を施文する。27～41は胴部破片。27～39は縄文を地文に3本一組の磨消沈線文を垂下させる。なお、46・47は浅鉢の口縁部破片。46は口縁部が外傾して開き、赤彩が施されている。48は無文地に貼付隆帯による波状文を巡らす。49～53は底部破片。加曾利E2式。

54～60は土器片錐。縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。61～63は土製円盤。周縁を打ち欠くのみで研磨は施されていない。

土坑SK09出土遺物 (Fig.132-1～9)

土器片と土器片錐1点、磨石1点が出土している。1～3・5は2本一組の沈線による懸垂文を垂下させる。3は撫糸Lを地文とする。6・7は浅鉢。6の口縁部は肥厚する。加曾利E2式。

8は土器片錐。縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。9は砂岩製の磨石欠損品。表面に磨痕が見られ、ほぼ中央に凹み痕がわずかに観察される。

土坑SK10出土遺物 (Fig.132-1～5)

土器片が出土している。1は無文。口縁部が肥厚する。胎土に金糸母を多量に含有する。2・3は深鉢の胴部破片。爪形文を施文する。阿玉台式。4は縄文を地文。5は底部破片で網代痕を有する。

土坑SK11出土遺物 (Fig.133-1～3)

土器片が出土している。1は口唇部に刻目が巡り、爪形文による区画文。阿玉台式。2は単節RL縄文に沈線懸垂文が垂下する。加曾利E2式。3は底部破片で網代痕を有する。

土坑SK12出土遺物 (Fig.133-1)

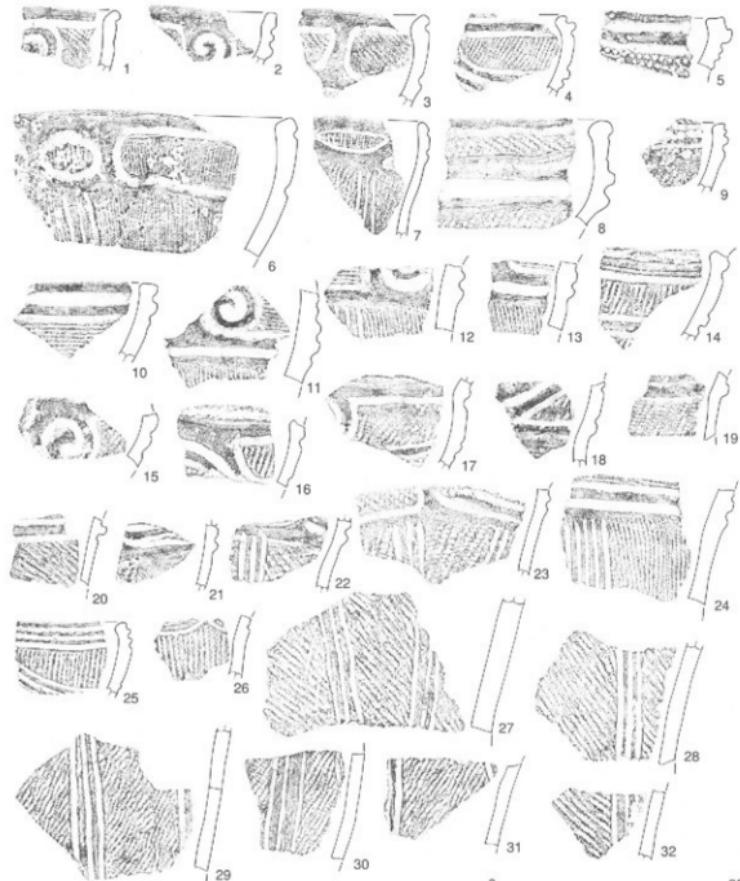
土器片が出土している。1は浅鉢の胴部破片。無文。縄文中期。



SK02(1・2)



SK04(1~3)



SK08(1) (1~32)

0
20 cm
(1/4)

Fig. 131 土坑SK02・04・08 (1) 出土遺物

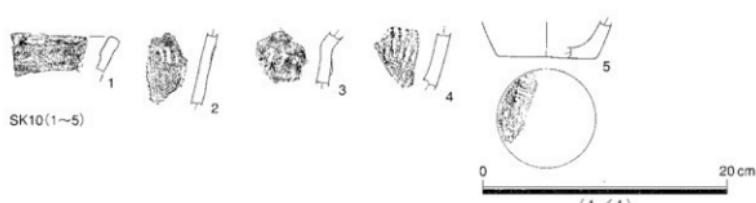
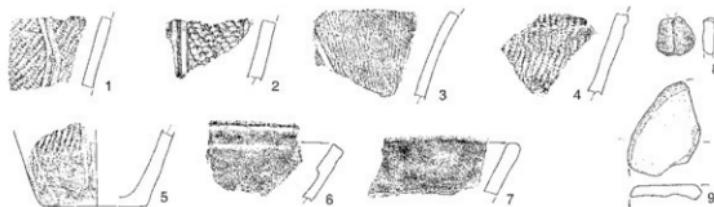
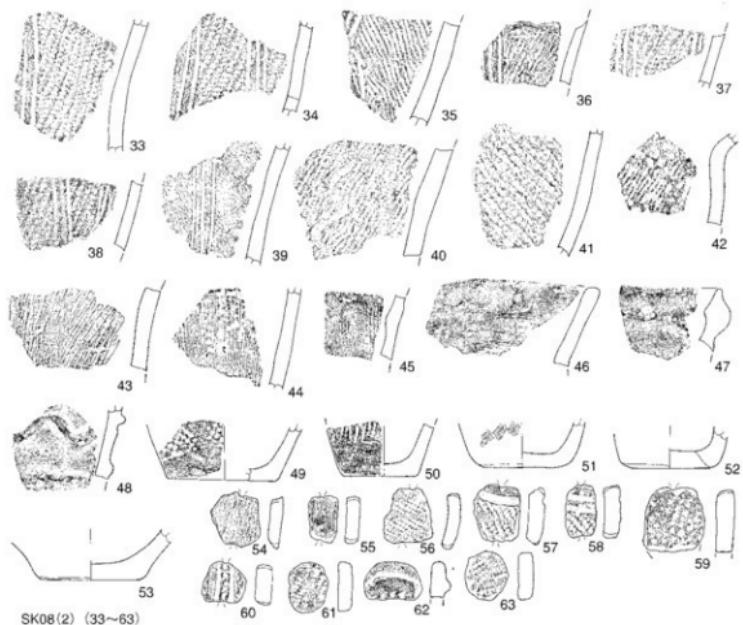


Fig. 132 土坑SK08(2)・09・10出土遺物

土坑SK13出土遺物 (Fig.133-1~5)

上器片が出土している。1・3は縄文を施文する。加曾利E1式。3は懸垂文が垂下する。2は懸垂隆帯に沿って押圧文が施文される。阿玉台式。4・5は浅鉢。5は口縁部が内湾気味に外傾する。内外面に赤彩が施されている。

土坑SK16出土遺物 (Fig.133-1・2)

土器片が出土している。1・2ともキャリバー形の深鉢の口縁部破片。沈線が沿う隆帯による楕円形区画文。加曾利E2式。

土坑SK18出土遺物 (Fig.133-1~3)

土器片が出土している。1・2はキャリバー形の深鉢。縄文を地文に背割り状隆帯による区画文と渦巻文を施す。3は浅鉢の口縁部破片。口縁部がわずかに外反する。加曾利E1式。

土坑SK19出土遺物 (Fig.133-1~4)

上器片が出土している。1はキャリバー形の深鉢の頭部破片。隆帯区画文。2は爪形文に隆帯による蛇行懸垂文。3は口唇部が肥厚する無文土器。4は浅鉢の内湾する口縁部破片。

土坑SK20出土遺物 (Fig.133-1~7)

土器片が出土している。1はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。縄文を地文に楕円形隆帯区画文。2は交差刺突文が巡る深鉢。3~5は縄文を地文に沈線による懸垂文が垂下する。3は蛇行沈線文。4・5は磨消懸垂文。7は口縁部が無文帯となる。加曾利E2式。

土坑SK21出土遺物 (Fig.134-1~5)

土器片が出土している。1はキャリバー形の深鉢。隆帯による区画文。加曾利E2式。2は刻目のある橋状把手をもち、押圧文による区画文の阿玉台式。3は隆帯区画文。4は縄文を地文に沈線による懸垂文。

土坑SK22出土遺物 (Fig.134-1~3)

土器片が出土している。1・2は縄文を地文に3本一組の沈線懸垂文が垂下する。沈線間を磨消す。3は底部破片。加曾利E2式。

土坑SK23出土遺物 (Fig.134-1~9)

土器片と土器片錐1点が出土している。1はキャリバー形の深鉢。隆帯区画文内は縦位の沈線を充填する。2は頭部破片。縄文を施した隆帯区画文に沈線による波状文を巡らす。3~5は縄文を地文に沈線による懸垂文を垂下させる。7は撫糸R施文。8は条線文。加曾利E1式。

9は土器片錐。縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK24出土遺物 (Fig.134-1・2)

上器片が出土している。1・2は胸部破片。1は縄文を地文に貼付隆帯による蛇行懸垂文。2は直行懸垂文。加曾利E1式。

土坑SK25出土遺物 (Fig.134-1~18)

土器片と土器片錐8点が出土した。1はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。沈線が沿う隆帯による渦巻文。2は口縁部に縄文帯や沈線区画文を施す。3はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。沈線が沿う隆帯区画文。4は磨消懸垂文が垂下する。5・6は縄文を地文に2もしくは3本一組の懸垂文が垂下する。7は撫糸L。8・

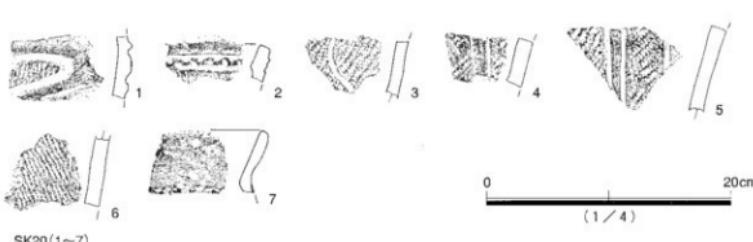
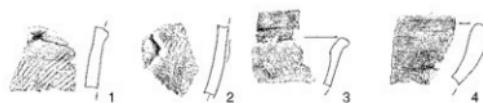
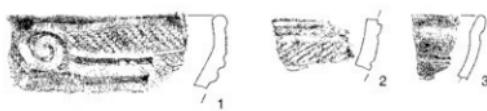
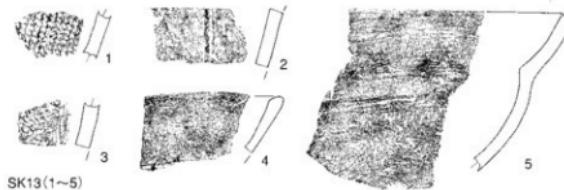
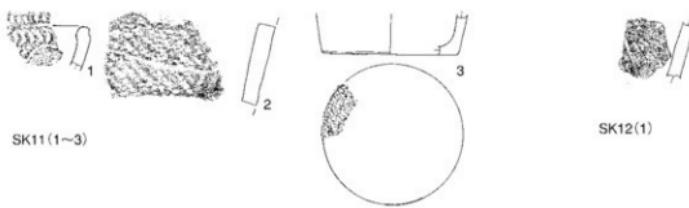
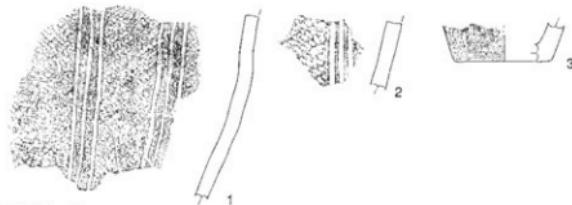


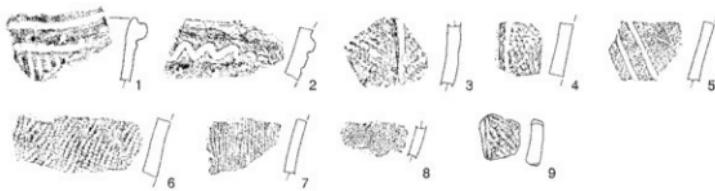
Fig. 133 土坑SK11・12・13・16・18・19・20出土遺物



SK21(1~5)



SK22(1~3)



SK23(1~9)



SK24(1+2)

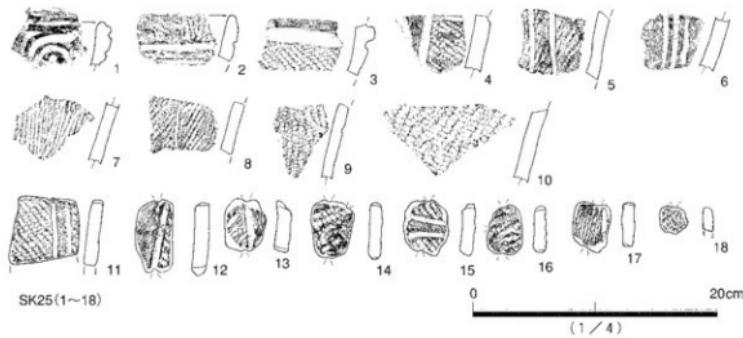


Fig. 134 土坑SK21・22・23・24・25出土遺物

9は縄文を地文に沈線による懸垂文。加曾利E2式。

11~18は土器片錐。18を除き縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK26出土遺物 (Fig.135-1~2)

土器片が出土している。1はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。隆帯による区画文。2は口唇部が肥厚する浅鉢で波状口縁を呈する。

土坑SK27出土遺物 (Fig.135-1~3)

土器片が出土している。1~3は深鉢の胴部破片。縄文を施文。

土坑SK28出土遺物 (Fig.135-1~5)

土器片と土器片錐1点が出土している。1は口唇部が僅かに外反する深鉢。交互刺突文を巡らす。2・4は無文の深鉢。3は縄文を地文に沈線による懸垂文。

5は土器片錐で、縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK29出土遺物 (Fig.135-1~9)

土器片と土器片錐3点が出土している。1・2はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。1は沈線が沿う隆帯による区画文と渦巻文を施文。3は縄文を地文に貼付隆帯を施す。5は蛇行沈線文を垂下させる。加曾利E1式。7~9は土器片錐。縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK30出土遺物 (Fig.135-1~26)

土器片と土器片錐4点が出土している。1~4はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。隆帯による渦巻文と区画文を持つ。5はキャリバー形の深鉢の頭部破片。燃糸Rを地文に背割り隆帯による区画文と5本一組の懸垂文を垂下させる。6は縄文帶に交互刺突文を巡らす。8はキャリバー形の深鉢の口縁部破片で、縦位の沈線文を地文に貼付隆帯による区画文を施す。9・10は頭部破片。隆帯による区画文。11~14は縄文を地文に沈線による懸垂文。12は複節RLRを地文とする。15・16は逆弧文土器の胴部破片。燃糸文を地文とする。17は縄文を地文に蛇行沈線文を垂下させる。20は細い燃糸Lを地文とする。21・22は深鉢の底部破片。加曾利E2式。

23~26は土器片錐。23~25は縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。26は短軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK31出土遺物 (Fig.136-1~22)

土器片と土器片錐6点、土製円盤1点、石錐1点が出土している。1・2は無文帶の口縁部がくの字状に外反し、1は平行沈線がV区画文となる。4は背割り隆帯による意匠文。5・6・10・11は縄文を地文に3本一組の沈線による懸垂文を垂下させる。加曾利E2式。

15~20は土器片錐。17を除き、縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有し、17は短軸方向に1対の切れ目を有する。21は土製円盤。22はチャート製の石錐。基部の抉りの浅い凹基無茎錐である。表裏面とも丁寧な削整剥離が施されている。

土坑SK32出土遺物 (Fig.136-1~27)

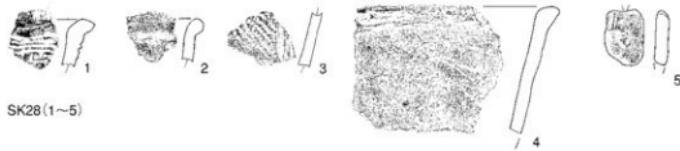
土器片と土器片錐4点が出土している。1は波状口縁の深鉢。口唇部が鈍状に肥厚し、爪形文が沿い、沈線意匠文が施文される。2は口縁部が内湾気味に立ち上がる深鉢。縄文を地文に沈線による曲線文を施す。3は口縁部がくの字状に外反し、無文帶。胴部は沈線の沿う隆帯による区画文。4~9は深鉢の口縁部から頭部破片。4は磨消沈線を垂下させる。5は背割り隆帯によるクランク文。10は条線を地文に背割り隆帯による蛇行懸垂文。11も沈線が沿う隆帯による懸垂文。12は磨消沈線文に、蛇行沈線を垂下させる。14~16は縄文を地文



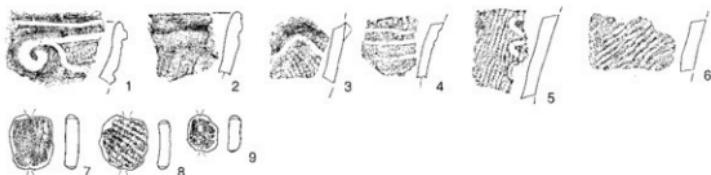
SK26(1~2)

SK27(1~3)

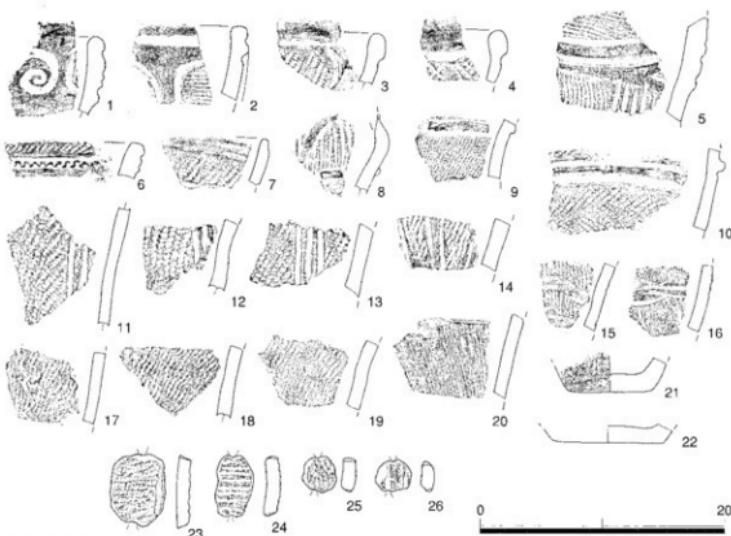
SK27(1~3)



SK28(1~5)



SK29(1~9)



SK30(1~26)

0 20 cm
(1 / 4)

Fig. 135 土坑SK26・27・28・29・30出土遺物

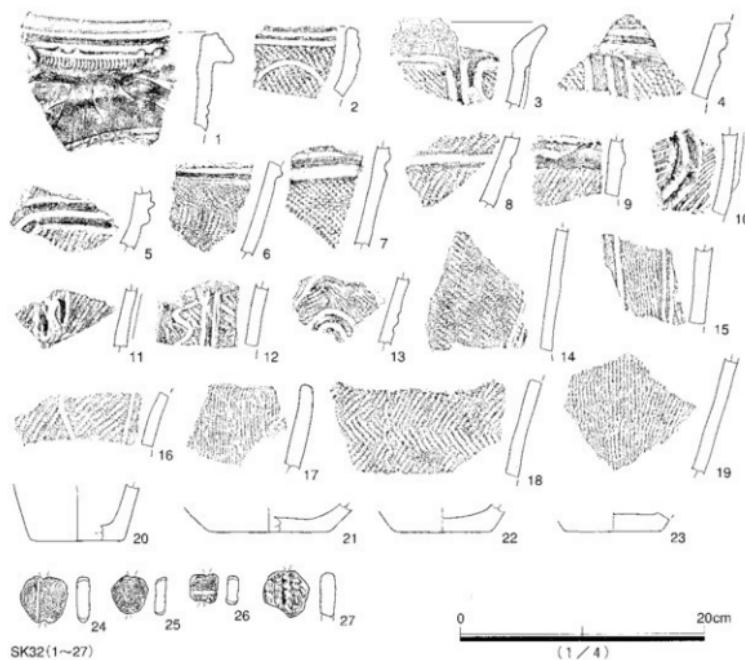
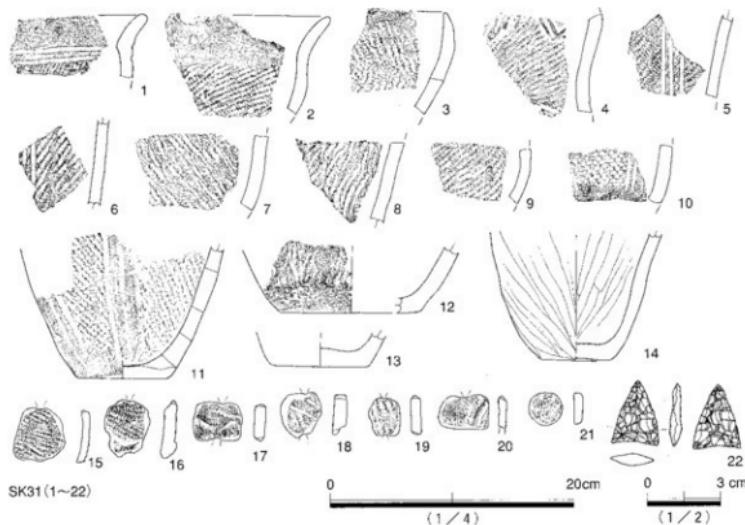


Fig. 136 土坑SK31・32出土遺物

に磨消懸垂文が垂下する。13は付加条縄文。15は撚糸Rを地文とする。17は口縁部から撚糸Rを施文する。18は羽状縄文に結節縄文が垂下する。19は撚糸Rを地文とする。20~23は底部破片。

24~27は土器片錘。24・25・27は縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。26は方形を呈し、短軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK33出土遺物 (Fig.137-1~20)

土器片と土器片錘4点が出土している。1は深鉢の口縁部に隆帯による楕円形区画文を配し、隆帯に沿って爪形文を施文する。区画内には縄文を地文に波状沈線で区画する。阿玉台皿式。2は円孔を伴う円形把手をもつ深鉢。把手部に縄文を施文する。3は波状山紋の深鉢。口縁部は肥厚する。4~8は口唇部が肥厚する深鉢で、4・5は上端部に縄文を施文。6は降帯区画に沿って角押文が巡り、区画内に角押文が垂下する。7は口縁部に沿って沈線による波状文が巡る。8は降帯区画に沿って沈線が施される。9は隆帯に沿って角押文が施文される。10は縦位の条縄文が垂下する。11はキャリバー形の深鉢の口縁部破片で、隆帯区画文。12の口唇部は圓帯となり、口縁部は縄文帶が巡る。14・15は沈線懸垂文が垂下する。15は撚糸Rを地文とする。加曾利E1式。

17~20は土器片錘。17~19は縦長破片の長軸方向に、20は短軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK34出土遺物 (Fig.137-1~24)

土器片と土器片錘8点が出土している。1は口縁部が短く外反し、縄文帯を有し、背割り隆帯による区画文とも縄文が施文される。2は波状口縁の深鉢。背割り隆帯による区画文。3は口唇部が肥厚し、隆帯による楕円形区画文内に縦位の沈線文を充填する。4は波状口縁の深鉢で、隆帯による渦巻文を施文する。單節RLの大目縄文を施す。5はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。沈線が沿う隆帯区画と渦巻文を施文する。区画内は無節Rを施文する。6は交互刺突文を巡らす区画文で、区画内は沈線文を充填する。7は口縁部が短く外反し、降帯区画文を施文する。8~10はキャリバー形の深鉢の口縁部破片で、隆帯による渦巻文と区画文を施す。11は深鉢胸部破片。背割り隆帯による区画文に沈線による懸垂文が垂下する。12・13は縄文を地文に沈線による意匠文。

17~24は土器片錘。いずれも縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。

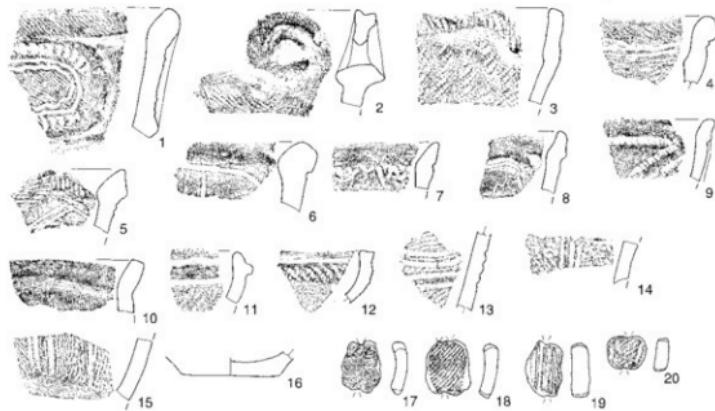
土坑SK35-A出土遺物 (Fig.137-1~7・Fig.138-8~44)

土器片と土器片錘11点、磨石1点、敲石1点が出土している。1~3は何一個体。山形把手を有する深鉢で、口縁部に沿って刻目を持つ隆帯が区画文として巡り、沈線による意匠文を施す。4も円孔の伴う山形把手。隆帯に沿って沈線が巡る。5は口縁部が肥厚する深鉢。隆帯区画文に沿って結節縄文が巡る。6は口縁部上端に無文帯が巡り、交互刺突文が区画文となる。7は口唇部が肥厚し、刻目を有する隆帯が巡り、区画内に波状隆帯が施文される。8~10はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。貼付隆帯による渦巻文と区画文を施文する。10は背割り隆帯による渦巻文と区画文。11は口縁部下部が錐状を呈し、波状となる。12は口唇部が肥厚し、沈線が沿う隆帯による区画文。13~15・19は貼付隆帯による区画文と意匠文。16~18・20~23・25は縄文を地文に沈線による区画文、懸垂文を施文する。30・31は深鉢底部破片。加曾利E1式。

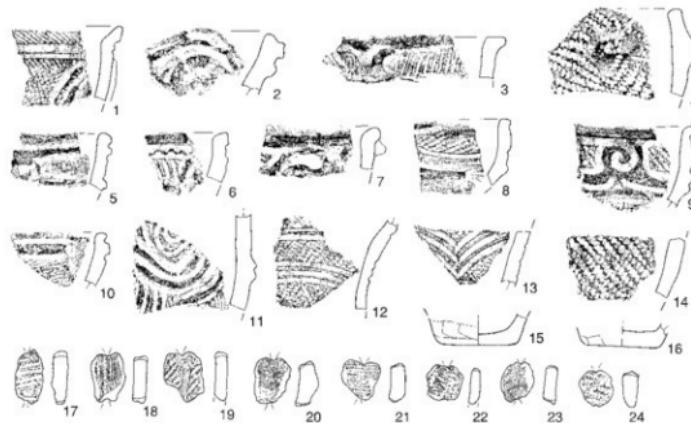
32~42は土器片錘。縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。43は安山岩製の磨石。表面中央に1ヶ所円孔を伴う。44は砂岩製の敲石。棒状の礫素材の上下端部に敲打痕を有する。

土坑SK36出土遺物 (Fig.139-1~13)

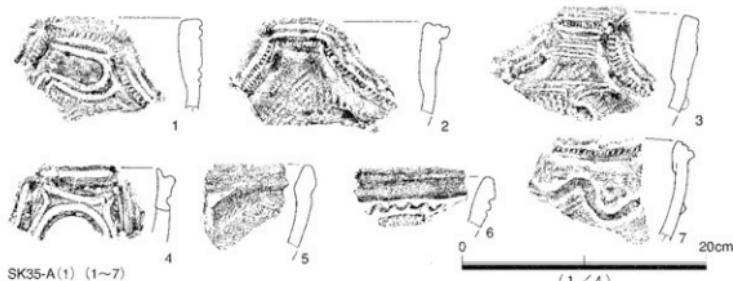
土器片が出土している。1・2はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。3は波状口縁の波頂部に円孔が貫通している。4は口唇部が肥厚し、押印が加えられている。5は折り返し口縁を呈する深鉢。6は縄文が施文された隆帯区画文を持つ。7・8は縄文を地文に沈線文を施文する。11~13は深鉢底部破片。12・13は木葉痕を残す。加曾利E1式。



SK33(1~20)

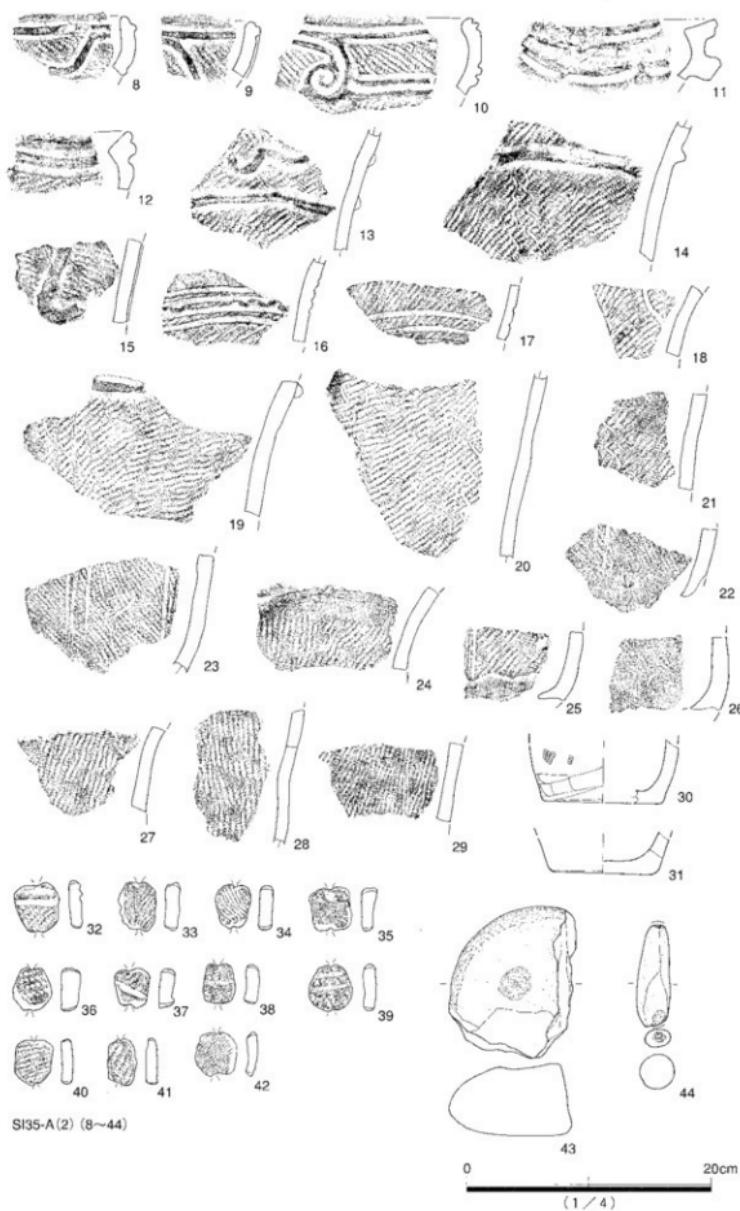


SK34(1~24)



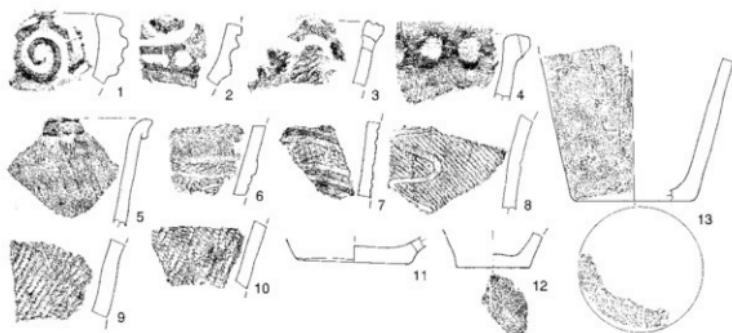
SK35-A(1) (1~7)

Fig. 137 土坑SK33・34・35-A(1)出土遺物

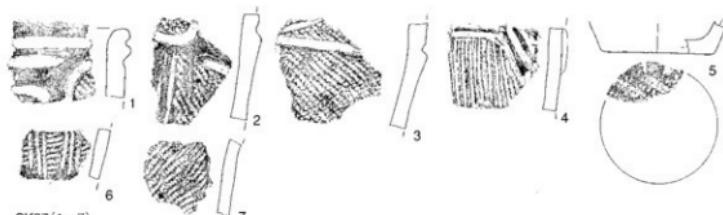


SI35-A(2) (8~44)

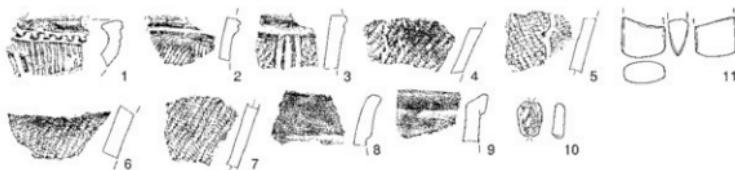
Fig. 138 土坑SK35-A出土遺物(2)



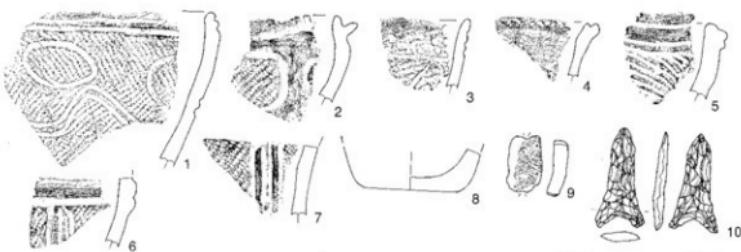
SK36(1~13)



SK37(1~7)



SK40(1~11)



SK42(1~10)

0 20 cm 0 3 cm
(1 / 4) (1 / 2)

Fig. 139 土坑SK36・37・40・42出土遺物

土坑SK37出土遺物 (Fig.139-1~7)

土器片が出土している。1~3はキャリバー形の深鉢。隆帯による区画文と渦巻文が施文される。4は背割り隆帯による区画内に縦列沈線を充填する。5は深鉢底部破片。網代痕を残す。6は繩文を地文に沈線による3本一組の懸垂文を垂下する。加曾利E1式。

土坑SK40出土遺物 (Fig.139-1~11)

土器片と土器片錐1点、小形磨製石斧1点が出土している。1の口唇部は肥厚し、内側へ鶴状に突出する。口縁部は交瓦刺突文が区画文となり、背割り隆帯と縦列沈線を充填する。2~5はキャリバー形の深鉢の胴部破片。沈線による懸垂文が垂下する。8~9は浅鉢の口縁部破片。9は複合口縁が内削状を呈する。

10は土器片錐。縦長破片の長軸方向に1対の切れ日を有する。11は砂岩製の小形磨製石斧で刃部のみが残存する。定角式石斧である。

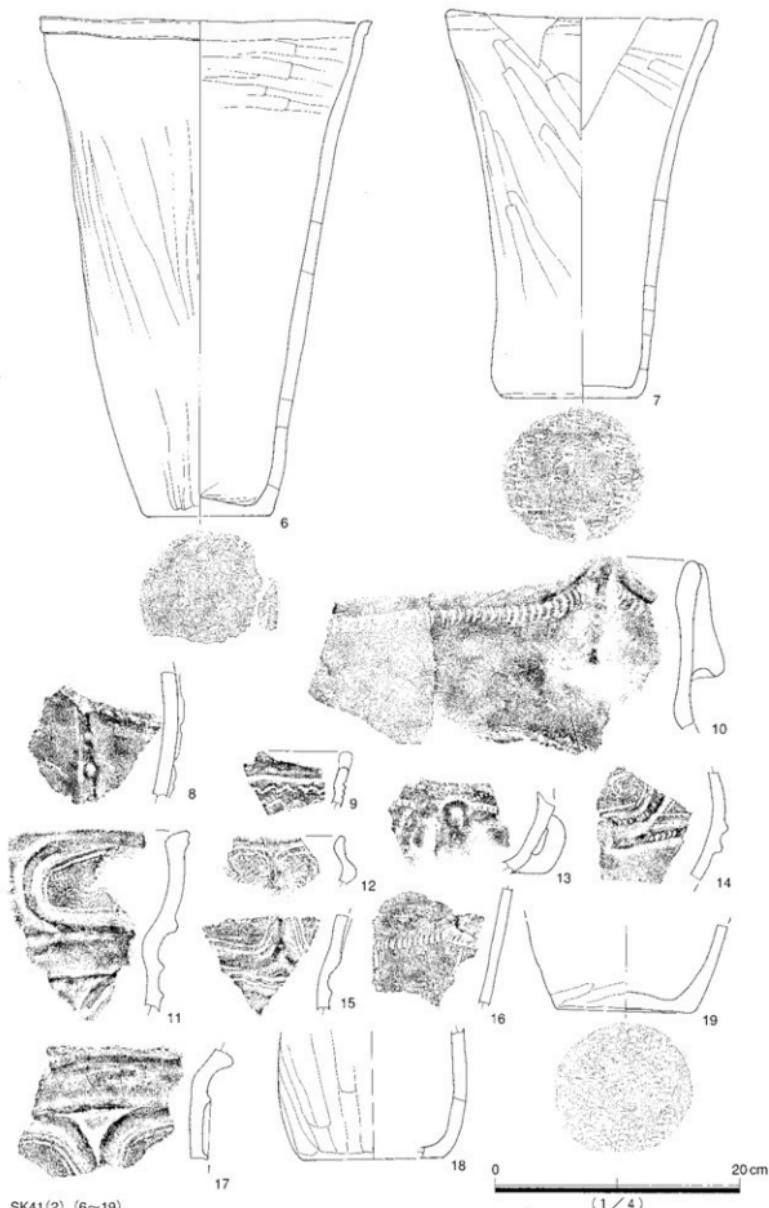
土坑SK41出土遺物 (Fig.140-1~5・Fig.141-6~19・Fig.142-20~46)

土器片と土器片錐23点、種石斧1点、礫器1点、磨石1点、石皿1点が出土している。1は胴部が直線的に立ち上がり、頭部は屈曲して外傾し、口縁部は僅かに内湾する。口唇部に刻目を巡らし、口縁直下に隆帯による区画文から繋がるY字状懸垂文が垂下する。口縁区画文に沿って爪形文が施文され、さらに頭部と胴部中央に爪形文を巡らす。阿玉台Ⅱ式。2は胴下半部を欠損する。胴部は直線的に立ち上がり、頭部で屈曲し、口縁部は内湾する。口縁上端の狭小部に角押文を充填した楕円形区画文を配し、さらに重ねるように楕円形区画文を重複させ、区画内に沿って角押文を巡らす。頭部は無文帶となり、隆帯による胴部区画がなされ、区画下に沿って爪形文が施文され、隆帯区画の3ヶ所に小突起を有し、ここを起点として三角形区画文を垂下させる。阿玉台Ⅱ式。3は口縁部を欠損している。口縁下部は刻日の施された隆帯によって区画され、隆帯に沿って2列の角押文が施文され、区画内に波状沈線や幾何学文が配される。胴部は無文地に指頭圧痕の加わるY字状隆帯が垂下し、隆帯上部には2列の角押文が施文される。阿玉台Ⅱ式。4は胴部が開きながら内湾して立ち上がり、頭部で屈曲して、口縁部は短く直立する。口縁部は無文帶で、頭部からY字状隆帯を垂下させるが、垂下部のみ押圧を加え波状を呈する。5は無文地の深鉢。胴部は直線的に外傾し、口縁部は内湾気味に開く。6は胴部の一部を欠損するものはほぼ完形品である。胴部から口縁部はほぼ直線的に外傾して開く深鉢。無文地で縦位のヘラナデで整形されている。口縁部は狭小な複合口縁を呈する。底部は網代痕。7も胴部の一部が欠損するものはほぼ完形に近い。無文地の深鉢。胴部は直線的に立ち上がり、口縁部で外反気味に開く。底部は網代痕。口縁直下は横位、以下縱位のヘラナデ整形。8は深鉢の胴部破片。指頭圧痕が施された隆帯が垂下する。9は小突起を有する深鉢。口縁上端は小さな無文帯を持ち、角押文区画内に波状角押文を横走させる。10は波状口縁の深鉢。波頂部から大きく述べ出した貼付隆帯は人鼻状を呈し、口唇部は肥厚し、爪形文が沿う。11~15・17は胴部が直線的に立ち上がり、口縁部はわずかに内湾する深鉢。11・17は同一個体。口縁部には楕円形区画文を配し、区画に沿って2列の角押文が巡る。15も同じく楕円形区画文に沿って2列の角押文が施文され、隆帯間に2条の波状沈線が施される。12は口縁が内湾して端部で外反する。瘤状突起を中心にして2列の角押文による意匠文。13は橋状把手を有する深鉢。隆帯区画に沿って角押文が施文される。14は刻日の施された隆帯区画文に沿って2列の角押文と渦巻文が施文される。16は深鉢の胴部破片。爪形文を施文する。18・19は深鉢の底部破片。19は網代痕。

20~42は土器片錐。37のみ短軸方向に、他は縦長破片の長軸方向に1対の切れ日を有する。43は緑色凝灰岩製の種石斧である。鉈状縦の両面から刃部を作出している。44は安山岩製の礫器である。下端の縫辺に調整剥離を施し刃部としている。45は安山岩製の刃石の欠損品である。表面中央に凹孔部を有する。46は閃綠岩製の石皿の破片。凹孔部は表面の1ヶ所のみ施されている。



Fig. 140 土坑SK41出土遺物 (1)



SK41(2) (6~19)

Fig. 141 土坑SK41出土遺物(2)

土坑SK42出土遺物 (Fig.139-1~10)

土器片と土器片鍤 1 点、石錐 1 点が出土している。1は口縁部が内湾する深鉢。繩文を地文に横円形文を配し、平行沈線による波状文を横走させる。2はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。口縁上端は狹小な無文帯となり、沈線の沿う隆帯区画文。3は口縁部上端に円形刺突文を充填させ、胴部は繩文を地文に沈線による区画文。4は口唇部に円帯が巡り、内面に稜を有する。口縁部上端は狹小な繩文帯が巡る。5は背割り隆帯による区画内に斜列沈線が充填する。口唇部も円帯が巡る。6・7はキャリバー形の深鉢の胴部破片。6は3本一组の磨消沈線が垂下する。7は平行する2本の貼付隆帯が垂下する。8は底部破片。

9は土器片鍤。縱長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。10はチャート製の石錐。円基無茎錐であるが、錐身が長い長身錐である。表裏面とも丁寧な調整剥離が施されている。

土坑SK43出土遺物 (Fig.142-1~19)

土器片と土器片鍤 2 点、磨石 1 点が出土している。1は深鉢の大形把手。波頂部に刻目が施文され、周縁部は繩文が施文された隆帯が巡り、波頂部からY字状隆帯が垂下する。隆帯に沿って沈線が施文される。2は口縁部が短く外反する深鉢。口縁上端は狹小な無文帯となる。3の口唇部は押圧を加え波状を呈し、体部は縱位の条線文。4は口縁上端が狹小な繩文帯が巡り、直下は無文帯となる。5は口縁部がわずかに外反し、口縁下端に爪形文が横走する。6の口縁上端も狹小な無文帯となり、波状の平行沈線文が施文される。7は口唇部が肥厚し、口縁上端は沈線区画に狹小な繩文帯が巡る。9は繩文を地文に沈線による区画文と意匠文を施文する。10は口縁上端の隆帯からY字状貼付隆帯が垂下する。13・15は内面に稜を有する浅鉢。13は外面に赤彩がわずかに認められる。15は大形の浅鉢で、山形把手を持つ波状口縁。内面に稜を有する。赤彩が施されている。14は口縁部が僅かに外反し、体部が直線的に外傾する無文の深鉢。口縁上端は横位に、胴部は縱位のヘラケズリで整形されている。16は深鉢の底部破片。網代痕を残す。阿玉台IV式。

17・18は土器片鍤。縱長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。19は安山岩製の磨石の破片。表裏両面と側縁面に磨面を有する。

土坑SK44出土遺物 (Fig.143-1~9)

土器片と土器片鍤 2 点が出土している。1・2はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。隆帯による区画文。3は口縁部が外反し、無文帯を有する。区画文に交互刺突文を施す。4~6は繩文を地文に3本一组の磨消沈線文を垂下する。7は撲糸L地文とする。加曾利E2式。

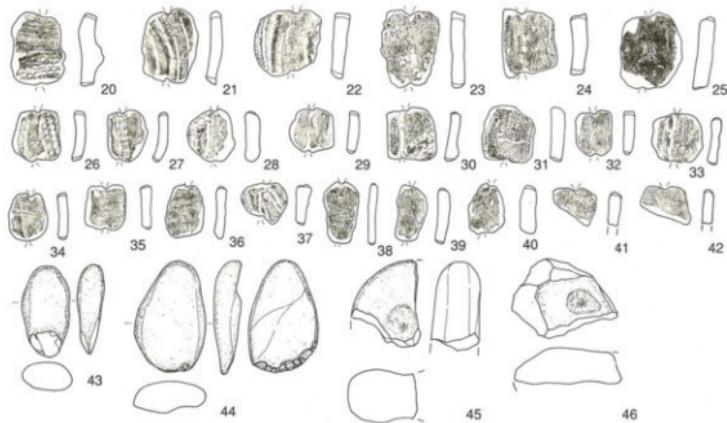
8・9は土器片鍤。縱長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK46出土遺物 (Fig.143-1~3)

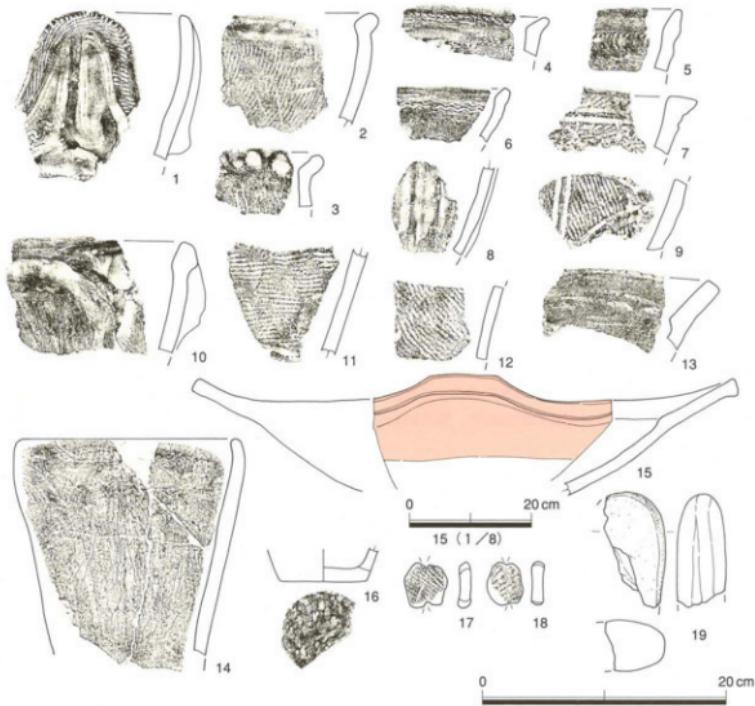
土器片が出土している。1は口縁部が内湾する深鉢。繩文を地文に沈線による弧状文を施文する。2は背割り隆帯による区画文。3は深鉢の胴部破片。撲糸R地文。加曾利E1式。

土坑SK47出土遺物 (Fig.143-1~12・Fig.144-13~29)

土器片と土器片鍤 7 点、磨石 1 点が出土している。1は波状口縁を呈する深鉢。胴部中位から大きく外傾し、口縁部は内湾する。口縁部の大きな把手は橋状で、端部は頭状に突出する。また口唇部には小山形突起が付く。口縁部文様帶は2段の交互刺突文が巡る。胴部は全面RL繩文が施文されている。2は大形の深鉢で、口縁上端を欠損する。口縁部は刻目を有する隆帯が区画文となり、区画内に隆帯と交互刺突文が施文される。頭部は無文帯となる。3は深鉢の胴部破片。波状口縁を呈し、波頂部に円形凹孔を有し、孔周縁に沈線が巡る。4はキャリバー形の深鉢の口縁部破片で沈線区画文。5は大形の深鉢。口縁上端を欠損する。円孔の伴う円形突起は沈線と条線の施された隆帯が巡り、ここから連携する隆帯と交互刺突文が区画文となり、区画内に縱位の条線が充填する。6は口唇部が肥厚する。7は繩文が施文された山形把手。8は大木系の深鉢。深影の渦巻文。9は連弧文土器。地文は撲糸L。12は有段の口縁部内側に稜をもつ。13・14は繩文を地文に懸垂文が垂下する。



SK41(3) (20~46)



SK43(1~19)

Fig. 142 土坑SK41(3)・43出土遺物

13は磨消懸垂文。17・18は浅鉢。17の内面に沈線による意匠文がみられる。内外面に赤彩が施されている。18は口唇部が肥厚し、体部が外傾して開く。外面に赤彩がわずかに認められる。加曾利E1式。

22～28は土器片錠。いずれも縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。29は安山岩製の磨石。側縁部に作業痕がみられる。

土坑SK48出土遺物 (Fig.144-1~13)

上器片と土器片錠4点が出土している。1～7はキャリバー形の深鉢の崩部破片。1は繩文を地文に沈線が沿う隆帯による区画文。2～5・7は繩文を地文に沈線による懸垂文を垂下させる。8は口縁部を無文とする。9は浅鉢の口縁部破片。口唇部は肥厚し、内面に沈線文が施文される。加曾利E2式。

10～13は土器片錠。いずれも縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK49出土遺物 (Fig.144-1~3)

土器片が出土している。1は波状口縁の破片。周縁部は沈線が沿う。2は繩文を地文に貼付隆帯を施文する。加曾利E1式。

土坑SK50出土遺物 (Fig.144-1~10)

上器片と土器片錠1点が出土している。1は口縁部が外反する深鉢。内面に棱を有する。2は波状口縁を呈する深鉢。波頂部に縦長の瘤状突起をもつ。3・4は同一個体。繩文を地文に沈線が沿う隆帯と沈線による曲線文を施文する。5は繩文を地文に磨消懸垂文を垂下させる。6は断面三角形の隆帯による区画文。加曾利E1式。

10は土器片錠。縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK51出土遺物 (Fig.145-1~17)

土器片と土器片錠5点が出土している。1～4・6はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。沈線や隆帯による渦巻文と区画文を施文する。3は区画内に縦列沈線を充填する。5は交叉刺突文を区画文として縦列沈線を充填する。7は繩文を地文に蛇行沈線を垂下させる。加曾利E1式。

13～17は土器片錠。いずれも縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK52出土遺物 (Fig.145-1~5)

土器片が出土している。1は交叉刺突文を区画文とする。2・3は繩文を地文に磨消懸垂文を垂下させる。4は条線文を地文とする。5は浅鉢の口縁部破片。

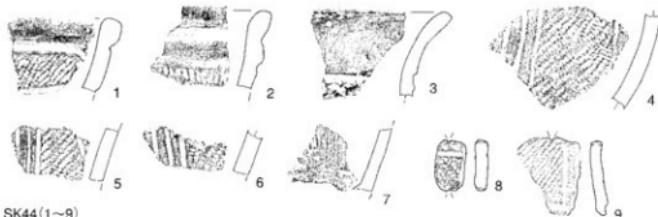
土坑SK54出土遺物 (Fig.145-1~5)

上器片が出土している。1は口唇部下部を無文帶とする。2・3は繩文を地文に沈線による懸垂文を垂下させる。加曾利E1式。

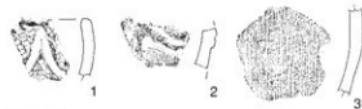
土坑SK55出土遺物 (Fig.145-1~10)

土器片と土器片錠1点が出土している。1・5はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。1は背割り隆帯による区画文で、口縁部は無文帯。2は齒鉗状降帯による区画文。3は繩文を地文に隆帯に平行沈線が沿う。4・5は繩文を地文に貼付隆帯。6・7は繩文を地文に沈線による懸垂文が垂下する。8は櫛齒状条線。加曾利E1式。

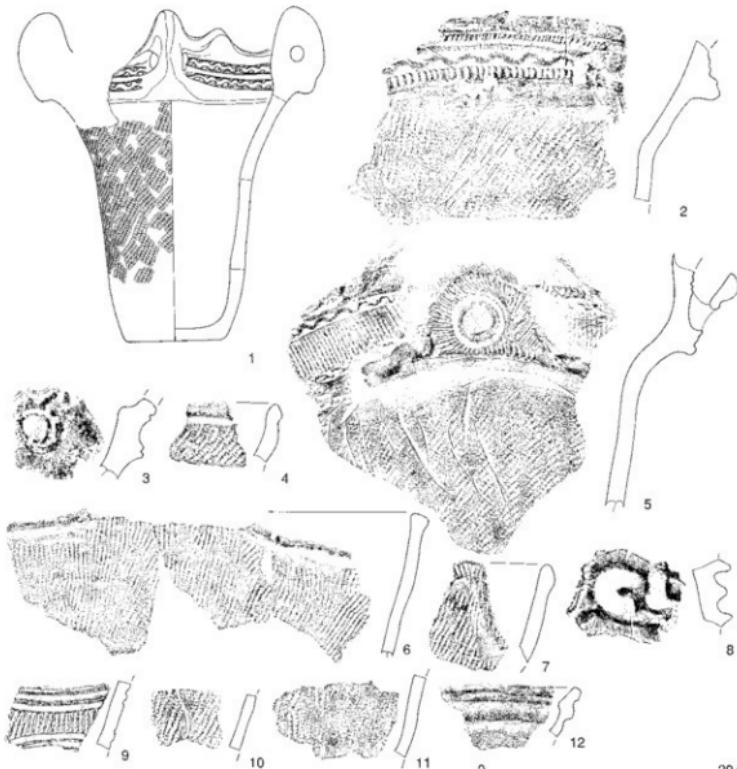
10は土器片錠。縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。



SK44(1~9)



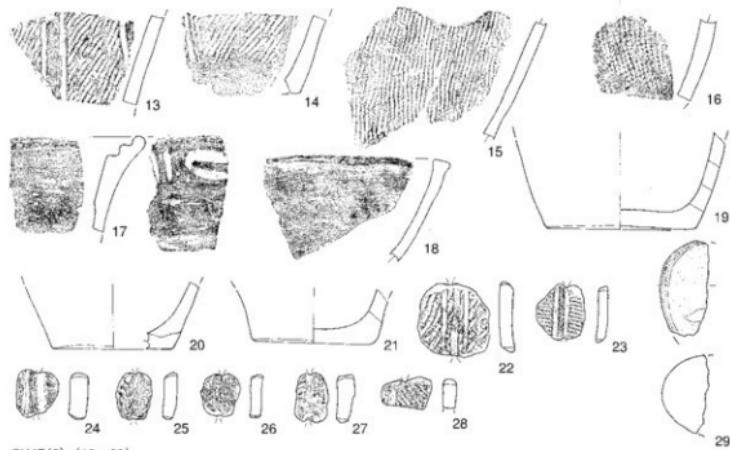
SK46(1~3)



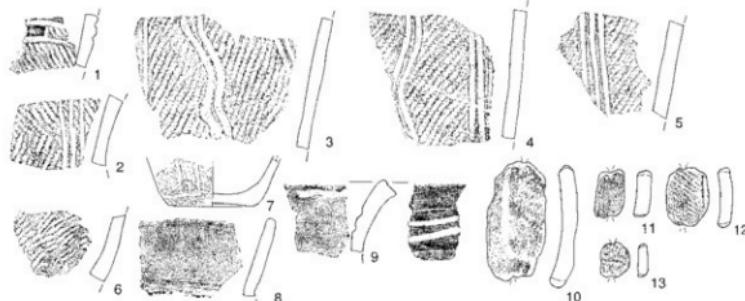
SK47(1) (1~12)

(1 / 4)

Fig. 143 土坑SK44・46・47(1)出土遺物



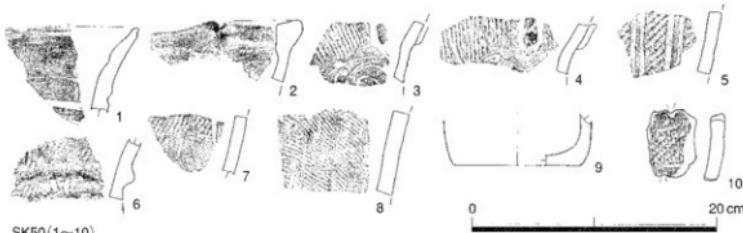
SK47(2) (13~29)



SK48(1~13)

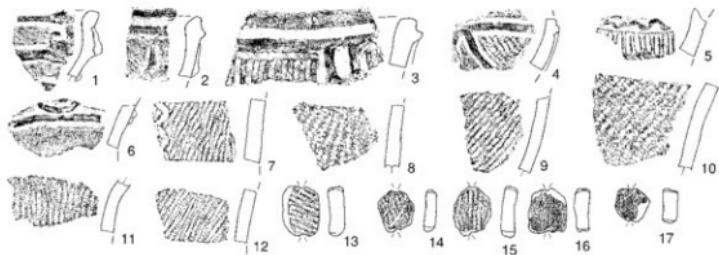


SK49(1~3)



SK50(1~10)

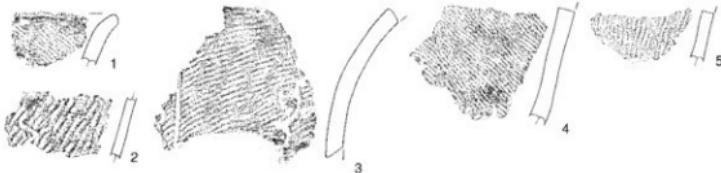
Fig. 144 土坑SK47(2)・48・49・50出土遺物



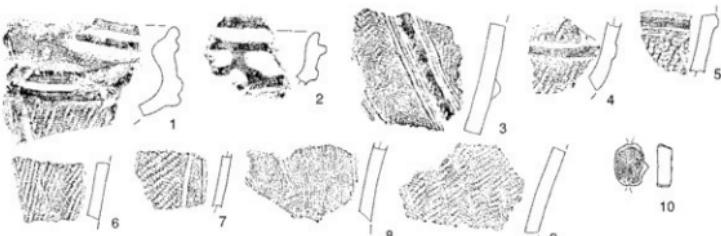
SK51(1~17)



SK52(1~5)



SK54(1~5)



SK55(1~10)

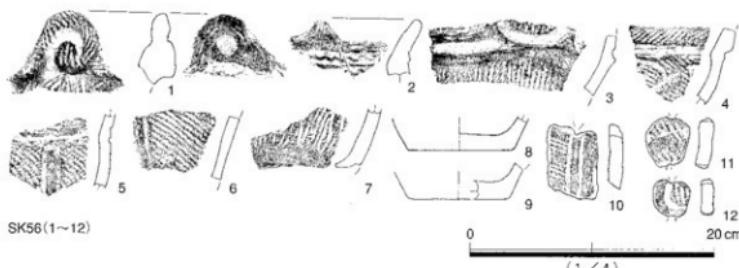


Fig. 145 土坑SK51・52・54・55・56出土遺物

土坑SK56出土遺物 (Fig.145-1~12)

土器片と土器片錐3点が出土している。1は波状口縁を有する深鉢。波頂部は縄文の施文された隆帯が口縁部から渦巻文となる。内面に円形の凹孔を施す。2は山形の小突起を有する深鉢。交互刺突文を区画文とする。3はキャリバー形の深鉢の頸部破片。沈線の沿う降帯による区画文。4は口縁部が僅かに外反し肥厚する。口縁部上端は縄文帯。口縁部は縄文を地文に沈線区画文が見られる。5~7は縄文を地文に沈線による磨消懸垂文が垂下するが、5のみ円形刺突文にU字状磨消懸垂文が垂下する。8~9は深鉢底部破片。

10~12は土器片錐。いずれも縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK57出土遺物 (Fig.146-1~4)

土器片が出土している。1・2はキャリバー形の深鉢の頸部破片。隆帯による区画文。3は撫糸Lを地文に磨消懸垂文を垂下させる。

土坑SK58出土遺物 (Fig.146-1~15)

土器片と磨製石斧1点が出土している。1は波状口縁の深鉢。波頂部破片で背割り隆帯による渦巻文を施文する。2は山形突起を有する深鉢。縄文を地文に円形刺突文を区画文とし、沈線による格円形意匠文を配する。3は山形状把手を有する深鉢。降帯による渦巻文、波状文を施文する。4は体部が外傾し、口縁部は一日内清して短く外反する。口縁部は無文帯。5~8はキャリバー形の深鉢の口縁部の破片。貼付隆帯による渦巻文に区画文。9は体部が直線的に外傾する深鉢。10・11は同一個体。撫糸Lを地文に磨消縄文による懸垂文を垂下させる。12・13は縄文を地文に平行懸垂文を垂下させる。加曾利B1式。

15は砂岩製の磨製石斧の破片。刃部と基部が欠損している。研磨痕が比較的明瞭に残っている。

土坑SK59出土遺物 (Fig.146-1~16)

土器片が出土している。1は大形の深鉢。口縁部上端が無文帯となり、交互刺突文による区画文に背割り隆帯の渦巻文と縦列の沈線が充填する。2も口縁部が無文帯。交互刺突文が区画文となる。3は波状口縁を呈する深鉢。太隆帯による渦巻文を施文する。4・5は口縁部上端が肥厚し無文帯となる。6は小形の粗製土器。7は鶴状突起部に刻印を入れる。8は隆帯に押し引き文が沿う。9は連弧文土器。縄文を地文に波状磨消縄文が横走する。10~13は縄文を地文に沈線による懸垂文が垂下する。15は口縁部下部に幅広い凹帯が巡る。16は深鉢の底部破片。

土坑SK60出土遺物 (Fig.147-1~6)

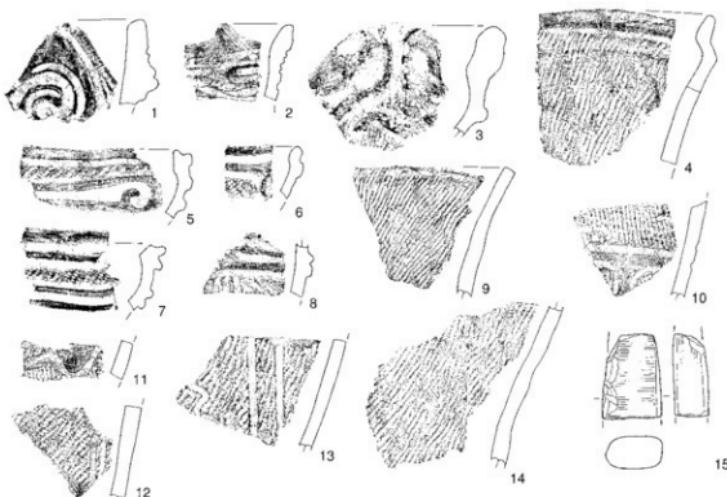
土器片が出土している。1はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。隆帯区画内に縦列沈線が充填する。2~4は縄文を地文に沈線による懸垂文が垂下する。5は連弧文土器。撫糸Lを地文とする。

土坑SK61出土遺物 (Fig.147-1~4)

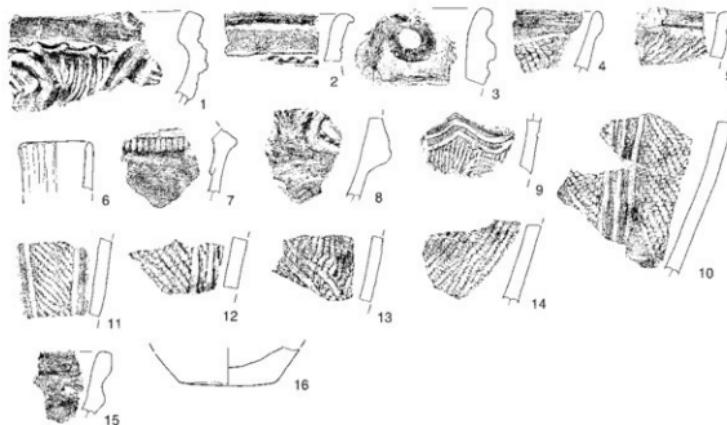
土器片が出土している。1・2はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。1は沈線が沿う降帯による区画文。2は隆帯区画内に縦列沈線を充填する。4は浅鉢の口縁部破片。口縁部が大きく張り出す。口縁部上に沈線文が施文される。



SK57(1~4)



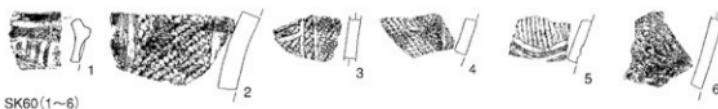
SK58(1~15)



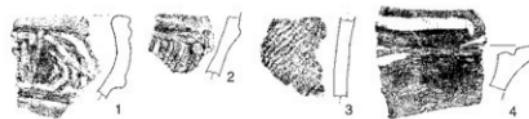
SK59(1~16)

0 20 cm
(1 / 4)

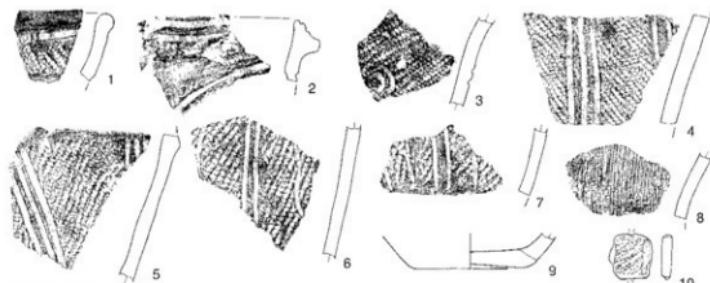
Fig. 146 土坑SK57·58·59出土遺物



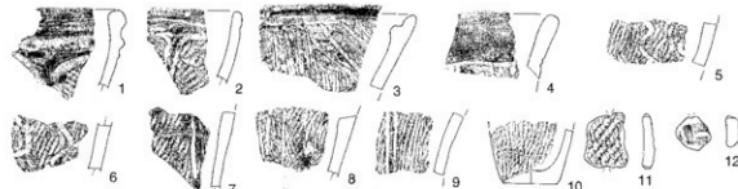
SK60(1~6)



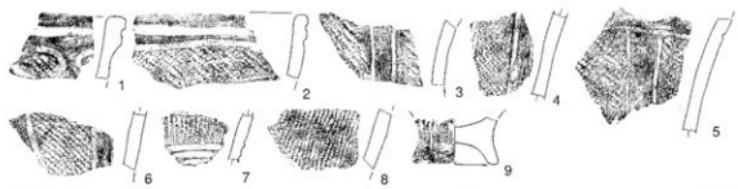
SK61(1~4)



SK62(1~10)



SK63(1~12)



SK64(1~9)

0
20 cm
(1 / 4)

Fig. 147 土坑SK60・61・62・63・64出土遺物

土坑SK62出土遺物 (Fig.147-1~10)

土器片と上器片錐 1点が出土している。1はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。隆帯に沿って沈線が施される。2は口縁部の区画が顎状に造り出し、隆帯および沈線による区画文。3は縄文を地文に沈線による渦巻文。4~7は縄文を地文に2もしくは3本一組の沈線による懸垂文を垂下させる。8は縦位の条線を地文とする。9は浅鉢の底部破片。

10は土器片錐。縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK63出土遺物 (Fig.147-1~12)

土器片と上器片錐 2点が出土している。1・2はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。1は隆帯、2は沈線区画文。3は曾利系上器。口縁内面に突帶を貼付け、幅のある縦位の条線を施文した後、斜行条線を施す。4は口縁部が外傾する深鉢。口縁部は無文とし、沈線間に縦列の短沈線による区画文。5~8は縄文を地文、9は撫糸Rを地文に沈線による懸垂文を垂下させる。

11・12は土器片錐。11は縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有し、12は円形成形の土器片錐である。

土坑SK64出土遺物 (Fig.147-1~9)

土器片が出土している。1・2はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。沈線の沿う隆帯による区画文。3~6は縄文を地文に磨消懸垂文が垂下する。7は逆弧文土器の頸部破片。撫糸Rを地文とする。9は脚付深鉢土器の脚部。加曾利E2式。

土坑SK65出土遺物 (Fig.148-1・2)

土器片が出土している。1は平縁の深鉢で、口縁部に大振りの箱状把手が付き、渦巻状の隆帯上に刻目を有し、隆帯には沈線が沿う。頭部は無文帶。2は口唇部が肥厚する深鉢。口縁部は無文帶で、交互斜突文が区画文となる。加曾利E1式。

土坑SK66出土遺物 (Fig.148-1~3)

土器片が出土している。1はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。沈線が沿う隆帯による渦巻文。2は口唇部が内削状を呈し、口縁部は無文帶となる。加曾利E2式。

土坑SK67出土遺物 (Fig.148-1~15)

土器片と上器片錐 3点が出土している。1はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。貼付隆帯が一部剥離している。2は口縁部が短く外反し、無文帶を形成している。隆帯による渦巻文。3・4は同一個体。押庄隆帯が垂下し、2列の角抑文が区画文となる。阿玉台II式。5はキャリバー形の深鉢の頸部破片。隆帯区画文に磨消懸垂文が垂下する。7~9は縄文を地文に2もしくは3本一組の沈線による懸垂文が垂下する。6は磨消懸垂文が垂下する。

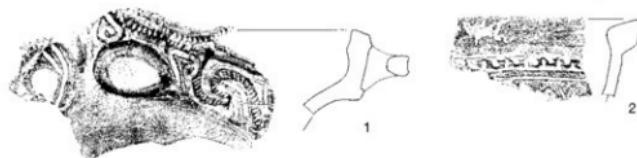
13~15は上器片錐。13・14は縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有し、15は円形を呈する。

土坑SK68出土遺物 (Fig.148-1・2)

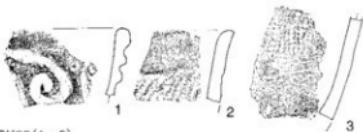
土器片が出土している。1・2は深鉢の頸部破片。縄文を地文に沈線による懸垂文が垂下する。

土坑SK69出土遺物 (Fig.148-1~7・Fig.149-8~26)

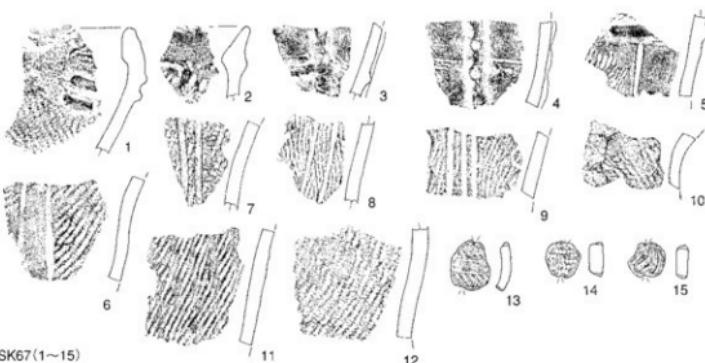
土器片と土器片錐 2点が出土している。1~4・6・7・9・10はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。縄文を地文に沈線が沿う隆帯による区画文。3・7・9には渦巻文が施文される。5は口縁部上端が無文帶となる。8は縄文を地文に沈線による区画文と蛇行懸垂文が垂下する。11・13・14は沈線による意匠文。12は縄文を地文に沈線が沿う隆帯区画文。15~18・22は縄文を地文に沈線による懸垂文が垂下する。20は頸部破片。斜行条



SK65(1+2)



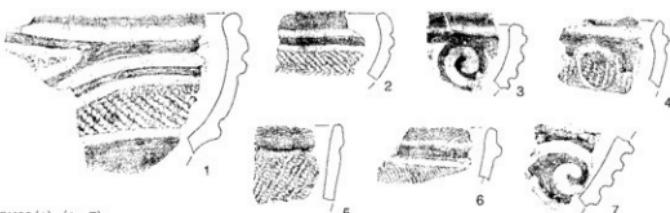
SK66(1~3)



SK67(1~15)



SK68(1+2)



SK69(1) (1~7)

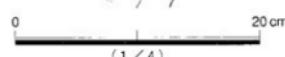


Fig. 148 土坑SK65・66・67・68・69(1)出土遺物

縫を施文する。21は深鉢の底部破片。木堀痕を残す。24は浅鉢の口縁部破片。口縁部は外反する。加曾利E1式。

25・26は土器片錠。いずれも縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK70出土遺物 (Fig.149-1~3)

土器片が出土している。1はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。縄文を地文に背割り隆帯による渦巻文。3は底部付近の破片。単節RL縄文を地文とする。加曾利E1式。

土坑SK71出土遺物 (Fig.149-1~12・Fig.150-13~25)

土器片と土器片錠2点、磨石1点が出土している。1は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部は外傾する大形の深鉢。口縁部はY字状隆帯から繋がる楕円形区画文内に2列の角押文が巡る。阿玉台II式。2は波状口縁となろう。頸部付近の破片で、断面鍍鉢状の隆帯は大きく迫り出す。隆帯に沿って幅広の角押文を施文する。阿玉台II式。3は大形深鉢の胴部破片。押圧隆帯が垂下し、沈線の沿う降帯によって方形区画文とし、区画内中央は横走する平行沈線によりさらに区画される。4は口唇部が肥厚し、1列の角押文間に結節縄文が横走する。5は口縁部に平行して角押文が施文される。6は集合沈線文。7は肥厚する口縁下に平行沈線が巡る。8は降帯に沿って2列の角押文が施文される。9は降帯区画文に沿って沈線が施される。10~13・16・17は降帯に沿って爪形文が施文される。14・15は胴部破片で有筋線文による装飾。18~20は浅鉢。18の口縁部は外反し、口縁部上部に沈線が巡る。赤彩が施されている。19は口唇部が肥厚する。20は底部破片。網代痕を残す。阿玉台式。

22~24は土器片錠。いずれも縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。25は安山岩製の磨石の破片。表面に作業面が認められる。

土坑SK72出土遺物 (Fig.150-1~22)

土器片と土器片錠3点が出土している。1は口縁部が短く外反し、狭小な無文帶を持つ。頸部は交互刺突文が巡る。3は撫糸Lが地文の單口縁深鉢。2・4~11はキャリバー形の深鉢の頸部破片。8・11は撫糸Lを地文とする。12~17は縄文を地文に磨消懸垂文を垂下する。19は撫糸が地文となる。加曾利E1式。

20~22は土器片錠。いずれも縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK73出土遺物 (Fig.150-1~2)

土器片が出土している。1は深鉢の胴部破片。単節RL縄文を施文する。2は曾利系土器。条線文を地文とする。

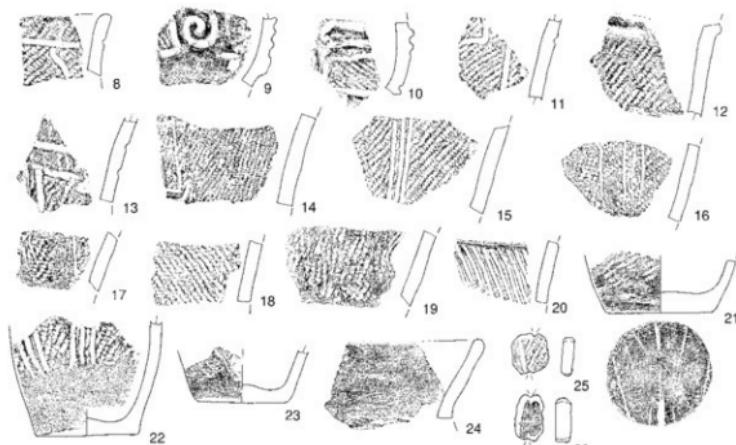
土坑SK74出土遺物 (Fig.150-1~12)

土器片と土器片錠3点が出土している。1は内済する口縁部をもつ深鉢。口縁に沿って2条の沈線文が巡る。2は2列の円形刺突文に、撫糸Rを地文に2本一組の懸垂文が垂下する。3・4・6は縄文を地文に懸垂文を垂下する。9は突帯状の鶴をもつ。加曾利E2式。

10~12は土器片錠。10・12は縦長破片の長軸方向に、11は短軸方向に1対の切れ目を有する。11は円形成形。

土坑SK75出土遺物 (Fig.151-1~25)

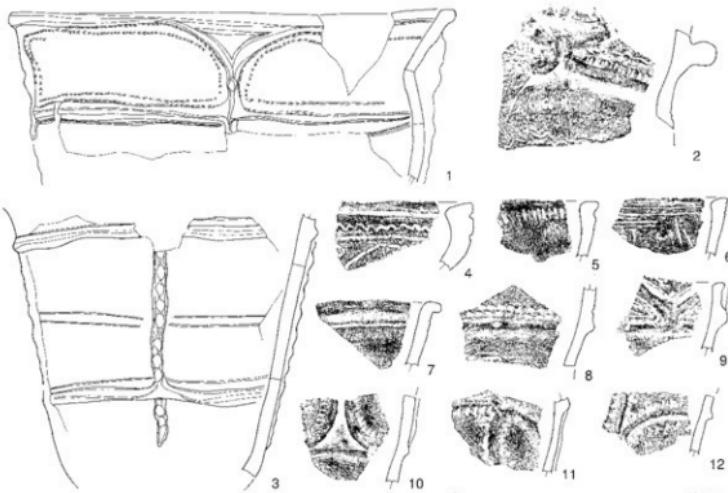
土器片と土器片錠2点、土製円盤1点、磨石1点が出土している。1~3はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。1は背割り隆帯による区画文。4は大木系深鉢の胴部破片。撫糸Lを地文に降帯による渦巻文を施文する。5は深鉢の頸部付近の破片。口縁部は縦列沈線を充填し、稜により区画され、磨消懸垂文を垂下する。6は無文地に太沈線による円形文を施文する。7~15・17~19は縄文を地文に磨消懸垂文を垂下させる。16は連弧文



SK69(2) (8~26)



SK70(1~3)



SK71(1) (1~12)

(1/4)

Fig. 149 土坑SK69(2)・70・71(1)出土遺物

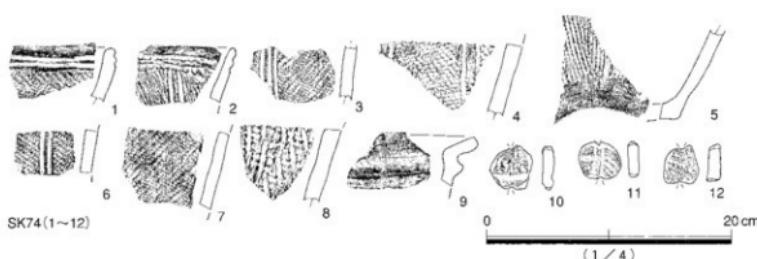
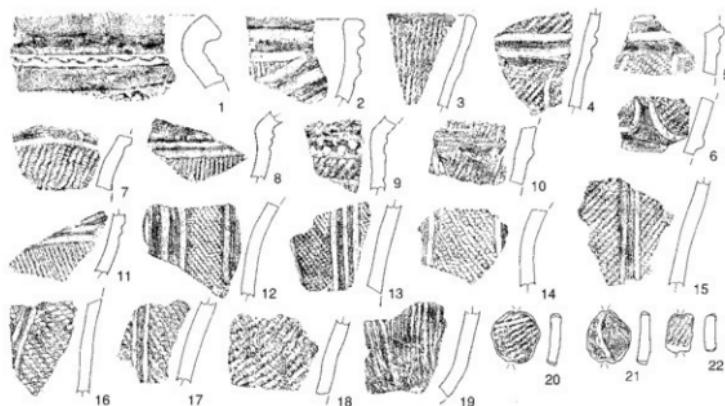
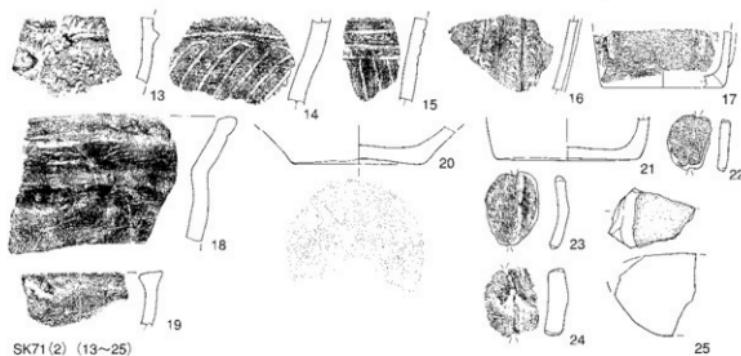


Fig. 150 土坑SK71(2)・72・73・74出土遺物

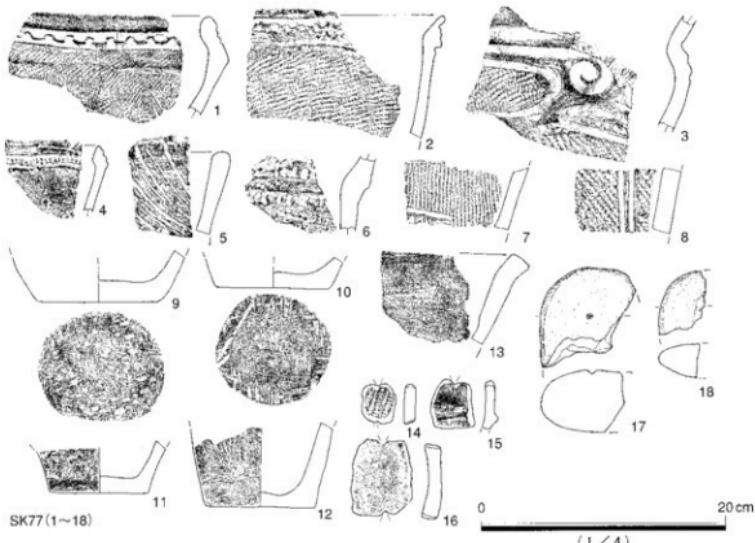
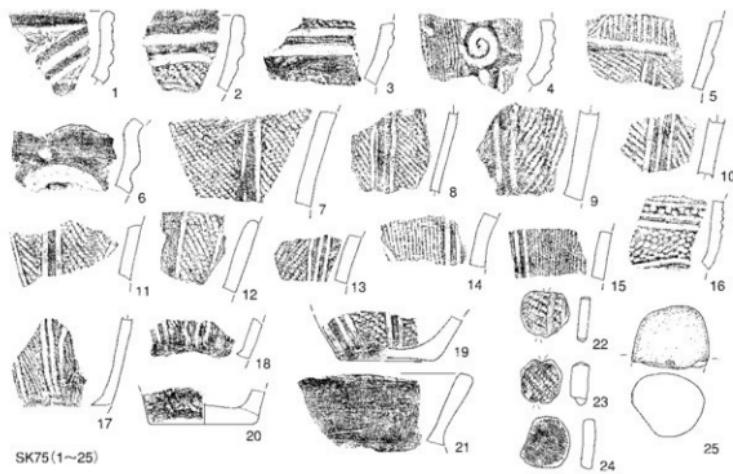


Fig. 151 土坑SK75・76・77出土遺物

上器の胴部破片。縄文を地文に交互刺突文を区画文とする。21は浅鉢の口縁部破片。無文地に縦位の櫛齒状条線が施文される。加曾利E2式。

22・23は上器片錘。縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。24は土製円錐。25は安山岩製の磨石。表面中央に凹孔が見られる。

土坑SK76出土遺物 (Fig.151-1~8)

土器片と土器片錘4点が出土している。1は縦位の単沈線に交互刺突文を巡らす。2・3は縄文を地文に磨消懸垂文を垂下させる。

5~8は土器片錘。縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK77出土遺物 (Fig.151-1~18)

土器片と土器片錘3点、磨石2点が出土している。1は内済する狭小な口縁部が無文帯となる。交互刺突文を区画文とする。2の口縁部は近くの字状に外反し、肥厚する。交互刺突文が区画文。3は口縁が外反し無文帯となり、頸部は沈線が沿う降帯による渦巻文と格円形区画文を施文し、狭い区画内には円形刺突文を充填する。4は狹小な口縁部が無文で、沈線区画内は縦位の単沈線を充填する。5は曾利系土器。斜行する条線を施文する。6は縄文が施文される隆帯に沿って幅広い爪形文が施される。7は撚糸Lを地文とする。8は縄文を地文に2本一組の懸垂文が垂下する。9・10は深鉢の底部破片。網代痕を残す。13は浅鉢の口縁部破片。口縁部は肥厚し、内面に稜を有する。加曾利E1式。

14~16は土器片錘。いずれも縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。17・18は磨石の破片。

土坑SK78出土遺物 (Fig.152-1・2)

土器片が出土している。1は縄文前期後半・浮島式。口縁部上端に縦列の短沈線が刻まれ、櫛齒状工具による条線が縦位に施文される。2は縄文中期・加曾利E式。深鉢の崩部破片。單節RL縄文を施す。

土坑SK79出土遺物 (Fig.152-1~8)

土器片と土器片錘2点が出土している。1は櫛状把手を有する深鉢。把手縁辺は刻目を有する。2~4は同一個体。キャリバー形の深鉢の口縁部破片。縄文を地文に貼付陸帯によるクランク文。5は口縁部が短く外反する無文深鉢。加曾利E1式。

7・8は土器片錘。縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。

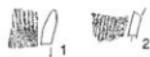
土坑SK80出土遺物 (Fig.152-1~10)

土器片と土器片錘1点が出土している。1~3はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。1は人形深鉢で、沈線が沿う降帯による渦巻文と棹状区画文が施され、頸部は3本一組の懸垂文が垂下する。2も縄文を地文に陸帶棹状区画文。3は陸帶区画内が縦列沈線によって充填する。4は口唇部に凹帯が巡る単口縁の深鉢。口唇部に縄文が施されている。5は太陸帯による区画文。6は縄文を地文に沈線意匠文。7は縦位の条線文。8は口縁部が外反し、肥厚する浅鉢の口縁部破片。口縁部内面に沈線による渦巻文が施文されている。加曾利E2式。

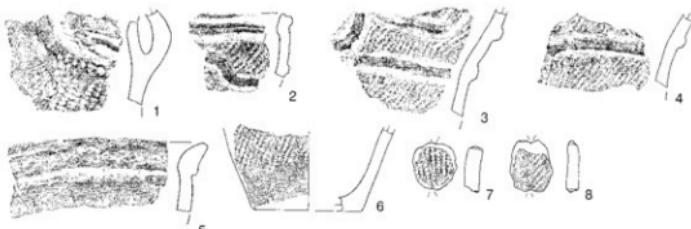
10は土器片錘。縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK81出土遺物 (Fig.152-1~11)

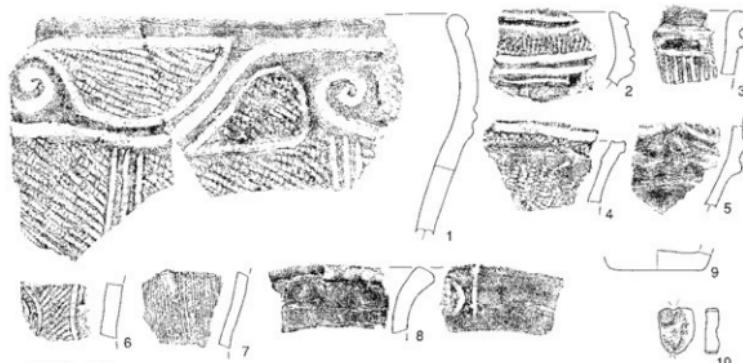
土器片と土器片錘1点、石皿1点が出土している。1は口縁部が肥厚する深鉢。狹小な口縁部に交互刺突文と縦列の単沈線が巡る。2は山形突起をもつ深鉢。刻目を有する降帯が区画文となる。3も山形状の突起を有する波状口縁の深鉢。波頂部から指頭により押圧を加えた降帯が重下する。4は口縁部が外反し、無文帯となり、交互刺突文により区画される。5は狹小な口縁部が無文帯となる。6は背割り陸帯上に刻目が施されている。7は陸帯に沿って角押文が施文されている。9の地文は撚糸L。加曾利E1式。



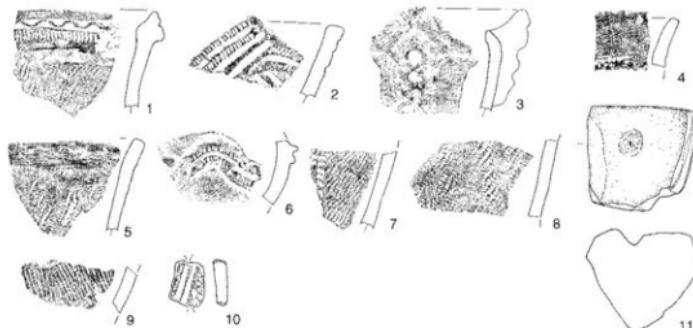
SK78(1・2)



SK79(1~8)



SK80(1~10)



SK81(1~11)

0
20 cm
(1 / 4)

Fig. 152 土坑SK78・79・80・81出土遺物

10は土器片錐。縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。11は網養母片岩製の石皿片。四孔部が1ヶ所のみ認められる。

土坑SK82出土遺物 (Fig.153-1~4)

土器片と土器片錐1点が出土している。1は逆弧文土器の口縁部破片。口縁部に沿って沈線区画された交互刺突文が巡り、地文に捺糸Rを施文する。2・3は深鉢の胴部破片。加曾利E2式。

4は土器片錐。縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK83出土遺物 (Fig.153-1~5)

土器片と土器片錐2点が出土している。1は深鉢胴部破片。背割り隆帯による区画文。綱文を地文。2・3は純文を施文した深鉢胴部破片。

4・5は土器片錐。いずれも縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK84出土遺物 (Fig.153-1~9)

土器片と磨石1点が出土している。1は口縁部が内湾気味に外傾する深鉢。狭小な口縁部に角押文が巡り、胴部には綱文を施文。2は沈線区画に、平行沈線による幾何学文。3は口唇部に指痕による押圧を加え波状としている。4は口唇部が肥厚する無文の深鉢。5は深鉢の胴部破片。隆帯区画に沿って2条の沈線が沿う。6~8は深鉢の底部破片。7・8は網代痕が残されている。阿玉台IV式。

9は安山岩製の岩石。表裏両面のほぼ中央に四孔部がある。

土坑SK85出土遺物 (Fig.153-1)

土器片が出土している。1は単節RL綱文を地文とした深鉢胴部破片。

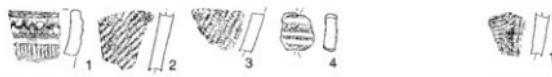
土坑SK86出土遺物 (Fig.153-1~3・Fig.154-4~12)

土器片が出土している。1は円孔を伴う橋状把手を有する筒状深鉢。胴部はほぼ直線的に外傾して立ち上がり、口唇部が肥厚する。口縁部は狭小な無文帶で、胴部は単節RL綱文を縱位施文。2は胴部が直線的に外傾して開く。口縁部は外方へ迫り出し無文帶となり、胴部は単節RL綱文を縱位施文し、綱文を施文後間隔を開けて斜行するヘラナデを施し、綱文の地文を消磨している。3は無文地の深鉢。胴部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は外傾して開く。4は口縁部と底部の一部を欠損しているものの、ほぼ完形品の単口縁深鉢である。口縁部は帶状に迫り出し、区画として円帯が巡る無文土器である。5は方形把手の破片。波頭部に刻目が施され、綱文を地文に隆帯に沿って沈線を施文。6は波状口縁の深鉢。口縁部は肥厚し、波頭部は双頭状に突出する。7は單口縁の深鉢。口縁部は無文帶となる。8・9は綱文を地文に4本一組の懸垂文が垂下する。10は筒形の深鉢の胴部破片。撫糸を地文に沈線による渦巻文と懸垂文が垂下する。11は口唇部が肥厚する浅鉢。12は深鉢の底部破片。網代痕を残している。加曾利E1式。

土坑SK87出土遺物 (Fig.154-1~11)

土器片と打製石斧1点が出土している。1は平縁の深鉢。口縁部は外傾し報列の沈線が施され、頸部にかけて橋状把手が付く。2は口縁部が短く外反する深鉢。隆帯と交互刺突文の区画に、背割り隆帯による渦巻文が付される。3は刻日のある隆帯区画と渦巻文に沿って沈線が施文される。4は波状で外側へ突出する隆帯が巡り、交互刺突文により区画される。5は隆帯区画内が縱列沈線によって充填される。8は交互刺突文によって区画され、綱文を地文に沈線文が垂下する。10は口縁部が内湾する波状口縁の浅鉢。加曾利E1式。

11は粗面安山岩製の打製石斧。半分を欠損する。側縁部に調整刺離を施し刃部としている。

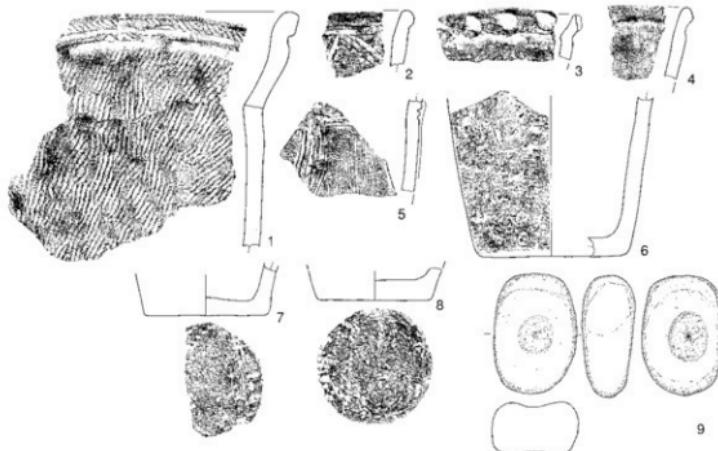


SK82(1~4)

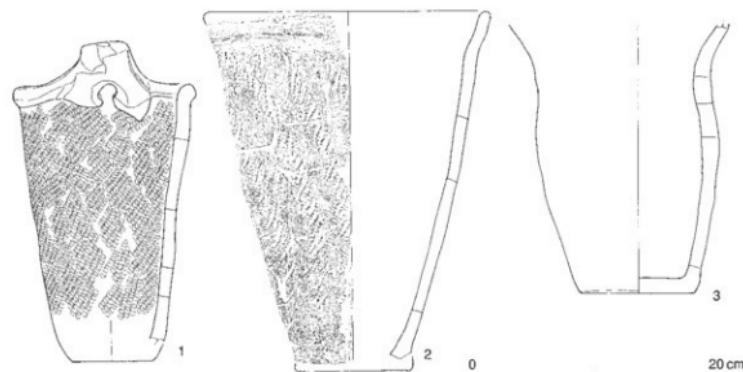
SK85(1)



SK83(1~5)



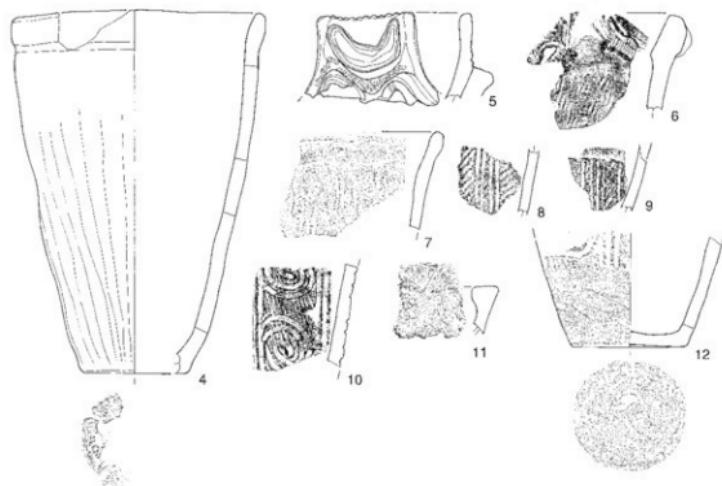
SK84(1~9)



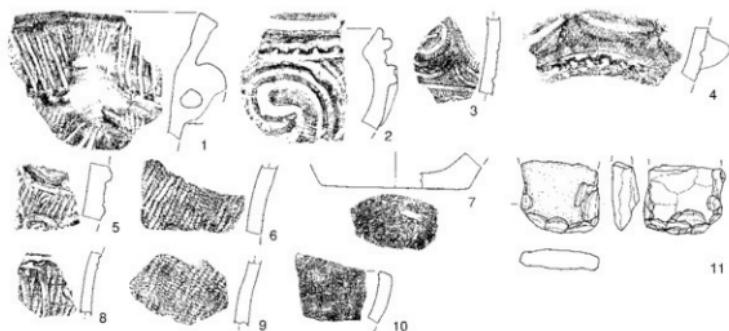
SK86(1) (1~3)

0 1 20 cm
(1 / 4)

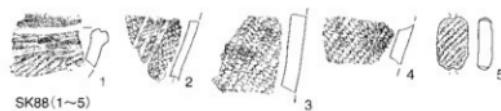
Fig. 153 土坑SK82·83·84·85·86(1)出土遺物



SK86(2) (4~12)



SK87(1~11)



SK88(1~5)

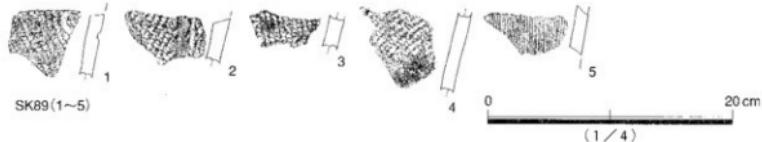


Fig. 154 土坑SK86(2)・87・88・89出土遺物

土坑SK88出土遺物 (Fig.154-1~5)

土器片と土器片錐1点が出土している。1は口唇部に凹帯が巡り、隆帯による区画文。2は縄文を地文に沈線による懸垂文が垂下する。

5は土器片錐。縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK89出土遺物 (Fig.154-1~5)

土器片が出土している。1は縄文を地文に沈線による意匠文が施文される。2は縄文を地文に磨消懸垂文が垂下する。5は深鉢の胴部破片。縦位の条線が施文される。

土坑SK90出土遺物 (Fig.155-1~5)

土器片が出土している。1はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。背割り隆帯の渦巻文と区画内に継列の沈線が充填される。2は深鉢の胴部破片。縄文を地文に3本一組の沈線による懸垂文と蛇行懸垂文が垂下する。4・5も沈線による懸垂文が垂下する。加曾利E1式。

土坑SK91出土遺物 (Fig.155-1~9)

土器片が出土している。1は口縁部が内湾気味に立ち上がる深鉢。波状口縁で、口縁下部は外側に突出した鶴が巡り、隆帯に沿って幅広の角押文が施文される。頭部は縄文を地文。2は筒状深鉢の胴部破片。隆帯による渦巻文と意匠文が施され、隆帯に沿って角押文を施文する。阿玉台Ⅲ式。3~5はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。沈線の沿う隆帯区画文と渦巻文が配される。加曾利E1式。7は縄文を地文に懸垂文の間を磨消した磨消懸垂文を垂下させる。8は折返し口縁の浅鉢。口縁部は肥厚し、内面に棱を有する。9は深鉢の底部破片。

土坑SK92出土遺物 (Fig.155-1~11)

土器片と土器片錐4点が出土している。1は狹小な口縁部が無文帯をなし、沈線によって区画される。2・3はキャリバー形の深鉢、口縁部破片。沈線の沿う隆帯による区画文。4は浅鉢の口縁部破片。口縁部がくの字状に外反する。5は隆帯に沿って2列の角押文が施文されている。6は縄文を地文に平行沈線が垂下する。7は小形深鉢の底部破片。縦位の条線文。加曾利E1式。

8~11は土器片錐。いずれも縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK93出土遺物 (Fig.155-1~4)

土器片が出土している。1は口縁部がわずかに外反する。頭部から縦位の条線を垂下させる。2は縄文を地文に指頭による押圧を加えた隆帯が垂下する。3・4は縄文を地文に磨消懸垂文が垂下する。

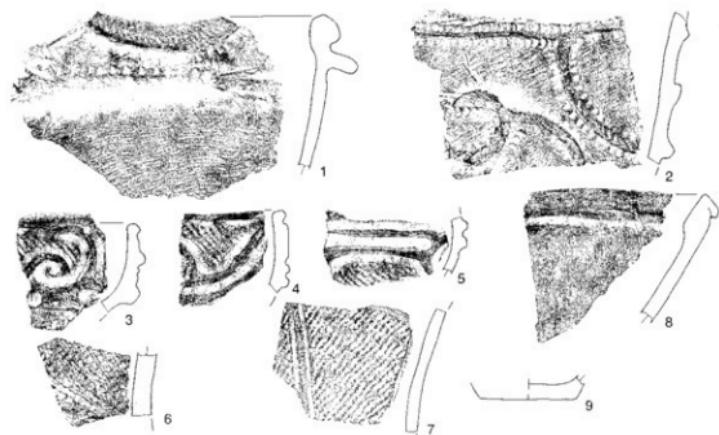
土坑SK94出土遺物 (Fig.156-1~21)

土器片と土器片錐2点、石皿1点、四石1点が出土している。1~5・7・9はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。1・2は同一個体。波状口縁を呈し、波頂部に渦巻文を持ち、口縁部は隆帯による小さな粒状区画文を配し、2は波頂部下部から隆帯を垂下させる。3~5は背割り隆帯による棒状区画文。6・8は交互刺突文を区画文とする。6は懸垂文が垂下し、8は口縁部が狹小な無文帯を持つ。10は背割り隆帯による頭部区画文。11・13・15は縄文を地文に沈線による懸垂文を垂下させる。14は内面に棱を有する浅鉢の口縁部破片。口唇部が小さく外反する。内外面に赤彩が認められる。17は口縁部が僅かに外反する小形の深鉢。無文である。

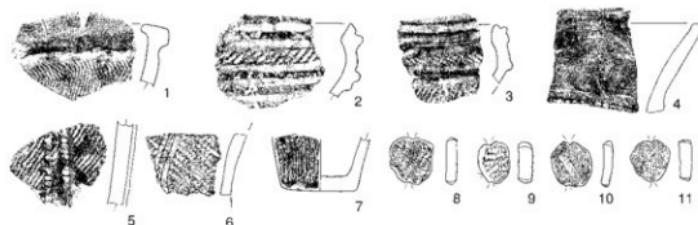
18・19は土器片錐。いずれも縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。20は花崗岩製の石皿。作業面である凹み部は梢円形を呈し、縁部を残し円状に凹む。裏面に凹孔部が集中している。21は絹雲母片岩製の四石。小凹孔部を2ヶ所穿っている。



SK90(1~5)



SK91(1~9)



SK92(1~11)

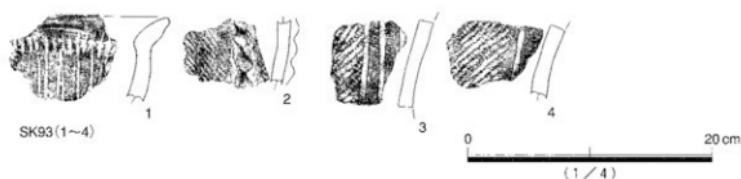


Fig. 155 土坑SK90·91·92·93出土遺物

土坑SK95出土遺物 (Fig.156-1~9)

土器片と上器片錐4点、打製石斧1点が出土している。1は連弧文土器の口縁部破片。口縁部上端に交互刺突文を巡らし、撫糸Lを地文とする。2は浅鉢の口縁部から頸部付近の破片。口縁部は沈線による杵状区画文。頸部に単沈線による刻目を施す。3は低隆帯による杵状区画文。4は曾利系深鉢の胴部破片。縦位の条線を地文に押圧隆帯が垂下する。加曾利E2式。

5~8は同一個体の土器片錐。当遺跡出土例では比較的大形の土器片錐である。いずれも縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。9は緑色凝灰岩製の打製石斧の欠損品。裏面の縁辺部に調整剥離が施されている。

土坑SK96出土遺物 (Fig.157-1・2)

土器片が出土している。1は櫛齒状工具による縦位の条線を地文に、波状沈線を巡らす。2は深鉢の胴部破片。単節RL縞文を施す。

土坑SK97出土遺物 (Fig.157-1~6)

土器片と上器片錐2点が出土している。1は口縁部が狭小な無文帶で、肥厚し僅かに内傾する單口縁の深鉢。2は山形状突起を有する浅鉢の口縁部破片。内面に稜をもつ。外外面とも赤彩が施されている。3は1の底部破片と推定される。底部は上げ底気味でヘラによる擦痕が顕著である。4は背割り隆帯による渦巻文を描出する。加曾利E1式。

5・6は土器片錐。いずれも縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK98出土遺物 (Fig.157-1~8)

土器片と磨製石斧1点が出土している。1・2・4・6はキャリバー形の深鉢。1・4は縦文を地文に背割り隆帯による区画文と渦巻文。2は沈線による意匠文。6は縦列沈線を地文に背割り隆帯による区画文。3・7は縦文を地文に懸垂文を垂下させるもので、3は3本一組の懸垂文の間を磨消した磨消懸垂文を垂下させる。5は縦列隆帯を口縁部に施す。

8は砂岩製の磨製石斧である。基部を欠損している。丁寧な作りの定角式石斧である。

土坑SK99出土遺物 (Fig.157-1~13)

土器片と土器片錐3点が出土している。1~5・8は同一個体と推定される。キャリバー形の深鉢で、山形状の小突起を有する波状口縁である。口縁部文様帯は、口縁部上端が狭小な無文帶で、交互刺突文による区画文。背割り隆帯によるクランク文を配し、地文は縦列の沈線文。頸部はクランク文から繋がる背割り隆帯によって区画され、胴部は縦文を地文に沈線による2本一組の直行懸垂文と1本の蛇行懸垂文が垂下する。6は無節Rを地文に2本一組の懸垂文が逆U字状に垂下する。7・8は縦文を地文に直行懸垂文と蛇行懸垂文が垂下する。10は浅鉢の口縁部付近の破片。内面に稜を有し、補修孔をもつ。加曾利E1式。

11~13は上器片錐。いずれも縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK100出土遺物 (Fig.158-1~8)

土器片が出土している。1はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。縦文を地文に背割り隆帯による渦巻文が施されている。2は沈線が沿う隆帯区画文。3は縦文を地文に背割り隆帯が垂下する。4は縦文を地文に2本一組の蛇行沈線が垂下する。6は深鉢の底部付近の破片。7・8は浅鉢の口縁部破片。7は口縁部下で鈎状に大きく突出している。8は口縁部が外反する。外外面に赤彩が残存している。加曾利E1式。

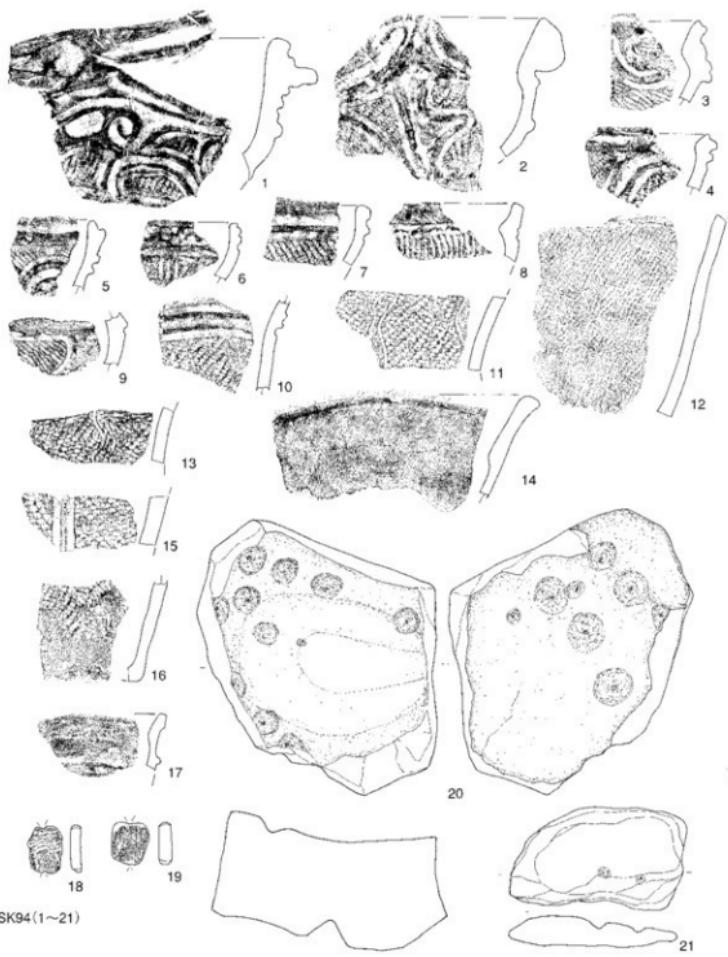
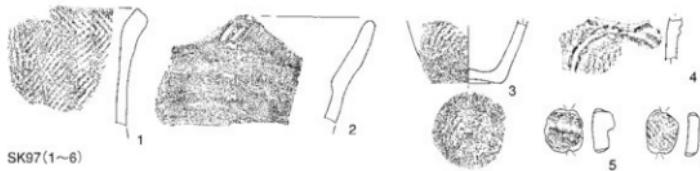


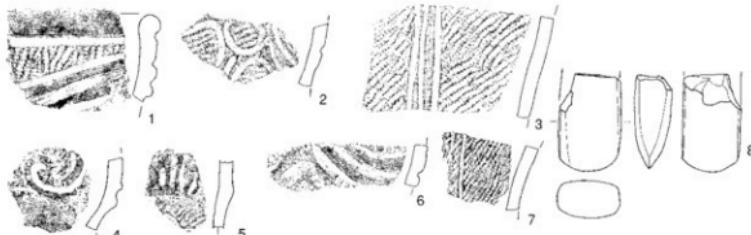
Fig. 156 土坑SK94·95出土遺物



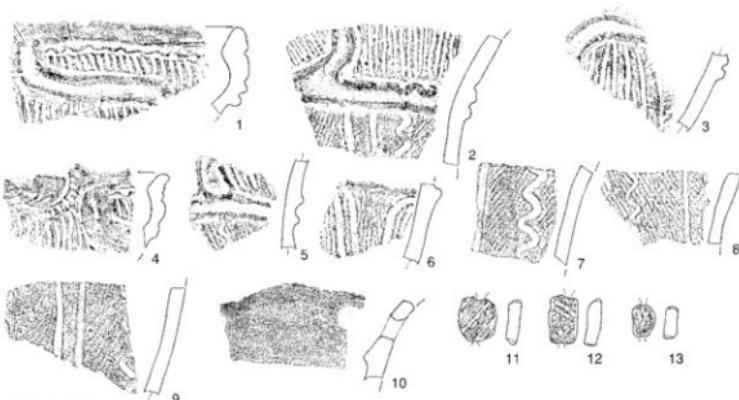
SK96(1~2)



SK97(1~6)



SK98(1~8)



SK99(1~13)

0 20 cm
(1/4)

Fig. 157 土坑SK96·97·98·99出土遺物

土坑SK101出土遺物 (Fig.158-1~6)

土器片と土器片錐 2 点が出土している。1 は口縁部が無文帯となり、交瓦刺突文による区画文。2 ~ 4 は縄文を地文に沈線文が施されている。3 は磨消懸垂文が垂下され、縫位に平行して押圧縄文と思われる縄文原体が施文されている。加曾利E1式。

5 ~ 6 は土器片錐。いずれも縦長破片の長軸方向に 1 対の切れ目を有する。

土坑SK102出土遺物 (Fig.158-1~14)

土器片と土器片錐 2 点が出土している。1 は口縁部に隆帯による貼付文が施され、口縁部上端に交瓦刺突文が巡り、無文帯となる。2 ~ 5 はキャリバー形の深鉢破片。縄文を地文として、隆帯による枠状区画文を施す。4 ~ 5 の胴部文様は縄文を地文に直行懸垂文と蛇行懸垂文が垂下されるが、4 の懸垂文間が狭小である。8 ~ 9 ~ 11 も縄文を地文に沈線による懸垂文が垂下する。6 ~ 7 は縄文を地文に沈線による意匠文が施される。7 は満文文が描出される。12 は浅鉢の口縁部破片。口縁部が肥厚する。加曾利E1式。

13 ~ 14 は土器片錐である。13 は短軸方向に 1 対の切れ目を入れ、さらに斜めに 1 ヶ所入れられている。おそらく斜め部が最初に刻まれ、本体が破損したため、もう一度 1 対に入れ直したものであろう。14 は縦長破片の長軸方向に 1 対の切れ目を有する。

土坑SK103出土遺物 (Fig.158-1~10・Fig.159-11~27)

土器片と土器片錐 8 点が出土している。1 ~ 6 はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。縄文を地文として、1 は背割り降帶による枠状文に頭部を無文帯とする。2 ~ 3 は背割り降帶による枠状文。5 は刺突文を地文に隆帯による満巻文と衿状文を施文する。7 ~ 9 は單口縁の深鉢。8 は内面に稜を有する。10 は円孔を伴う山形把手を持つ深鉢。波頂部の円孔に沿って平行沈線を巡らし、胴部は柳葉状工具による蛇行条線を垂下させる。11 は深鉢の口縁部破片。平行沈線による区画文内に綴行沈線文が充填される。12 はキャリバー形の深鉢の頭部破片。撫糸Lを地文に 2 本一組の懸垂文が垂下する。13 は幅広の隆帯による区画文。14 ~ 18 は縄文を地文に 3 本一組の懸垂文が垂下する。加曾利E1式。

20 ~ 27 は土器片錐。20 ~ 24, 26, 27 は縦長破片の長軸方向に、25 は短軸方向に 1 対の切れ目を有する。

土坑SK104出土遺物 (Fig.159-1~9)

土器片と磨製石斧 1 点が出土している。1 は波状口縁の深鉢。口唇部は刻目が施され、口縁上端は狹小な無文帯を持つ。隆帯による区画文と満巻文が施文され、区画内は沈線が充填される。2 は波状口縁の深鉢。口縁部に縄文が施文され、口縁上端は無文帯で、隆帯区画される。3 は狹小な縄文帯が肥厚し、4 は胴部が内湾して立ち上がり、口縁部は短く外反する。口縁上端は狹小な無文帯で、角押文で区画され、胴部は蛇行する条線が施文されている。5 は波状口縁の深鉢。口唇部は肥厚し、隆帯によって区画され、隆帯に沿って角押文が施文される。区画内は波状沈線が充填される。6 は無文地の深鉢。口縁上端を空けて隆帯区画文が施される。7 は簡状の深鉢。口唇部に 2 条単位の刻目があり、工具で意匠文が施文される。8 は深鉢の頭部付近の破片。縫位の平行沈線が垂下する。阿正台III式。

9 は砂岩製の磨製石斧の破片である。刃部は著しく磨耗し再生石器として再利用されている。

土坑SK105出土遺物 (Fig.159-1~9)

土器片と土器片錐 1 点が出土している。1 はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。背割り降帶による満巻文から区画文に連携する。2 は單口縁の深鉢。口縁上端は狹小な無文帯となり、撫糸Rを施文する。3 は深鉢の頭部破片。口縁部は無文帯となり、3 本一組の沈線区画文を持つ。4 は深鉢の胴部破片。縄文を地文に磨消懸垂文が垂下する。7 は深鉢の底部破片。網代痕。加曾利E1式。

8 ~ 9 は土器片錐。いずれも縦長破片の長軸方向に 1 対の切れ目を有する。

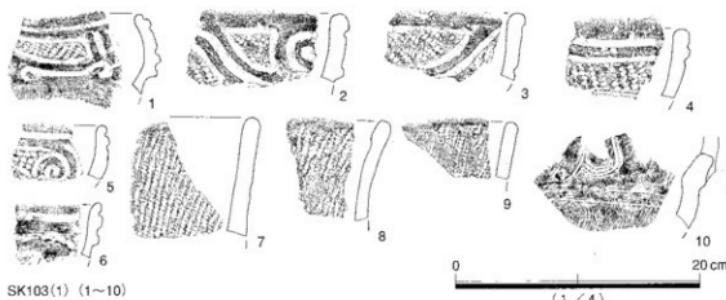
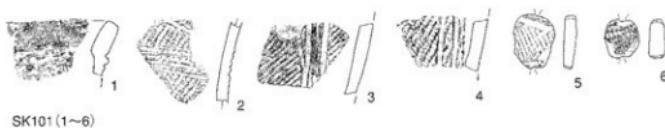
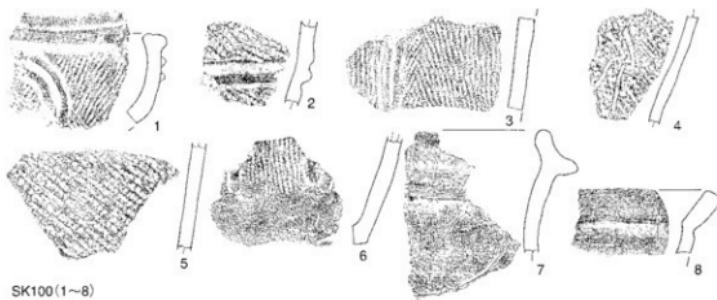
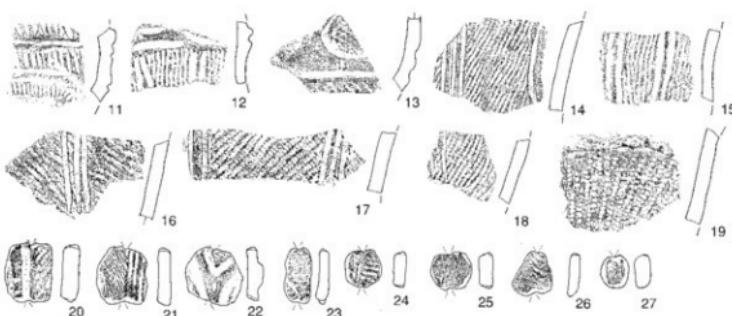
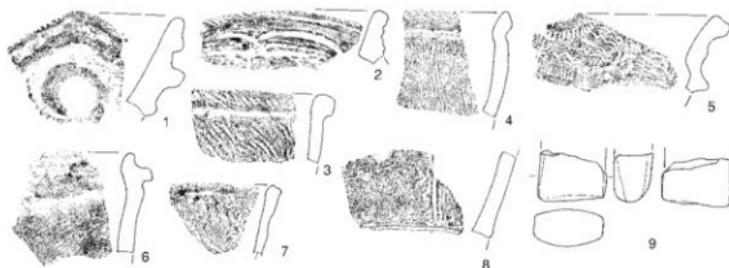


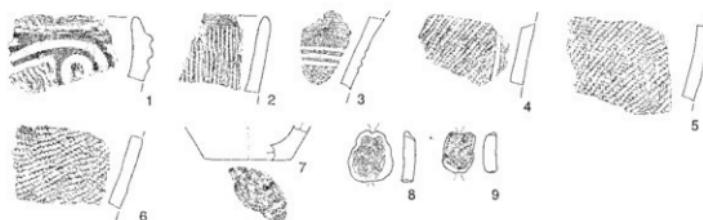
Fig. 158 土坑SK100・101・102・103(1)出土遺物



SK103(2) (11~27)



SK104(1~9)



SK105(1~9)



Fig. 159 土坑SK103(2)・104・105・106出土遺物

土坑SK106出土遺物 (Fig.159-1・2)

土器片が出土している。1は口縁部が内湾する深鉢。口縁上端は無文帯となる。2は深鉢の胴部破片。単節LR縄文を施す。

土坑SK107出土遺物 (Fig.160-1~15)

土器片と土器片鉢2点が出土している。1・2はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。背割り隆帯による区画文と連携する渦巻文が施文される。3は口縁部が内湾気味に外傾する深鉢。口縁部は幅広い無文帯をなし、区画なしで縄文が施文される。4は口縁部が内湾する深鉢。口縁上端は狭小な無文帯をなす。5・6は縄文を地文に3本一組の磨消懸垂文が垂下する。6は深鉢の頸部付近の破片。頸部は無文帯で、胴部は撚糸Rを地文とする。9は曾利系土器の深鉢胴部破片。条線を地文に指頭押圧を加えた隆帯が垂下する。13は深鉢の底部破片。網代痕。加曾利E1式。

14・15は土器片鉢。いずれも縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK108出土遺物 (Fig.160-1~7)

土器片と土器片鉢1点が出土している。1・2はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。1の口縁部文様帯は沈線の沿う隆帯により渦巻文と棹状区画文が施文され、胴部文様帯は2もしくは3本一組の懸垂文の間を磨消した磨消懸垂文を垂下させる。加曾利E2式。2は波状口縁の深鉢。沈線が沿う隆帯による渦巻文。3・4は縄文を地文に沈線による意匠文と懸垂文を垂下させる。5は深鉢の胴部破片。撚糸文を地文に沈線が沿う隆帯が区画文となる。6は深鉢の底部破片。加曾利E2式。

7は土器片鉢。隅丸方形を呈し、長軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK109出土遺物 (Fig.160-1~6)

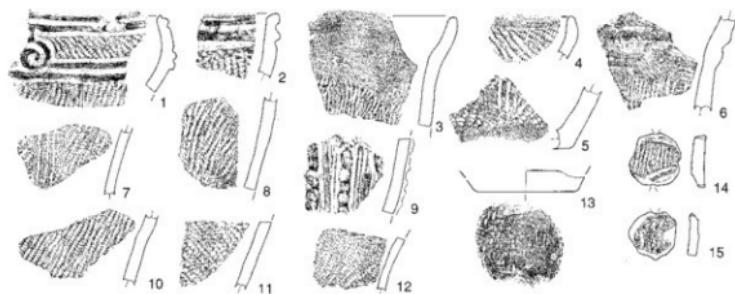
土器片が出土している。1・4はキャリバー形の深鉢。1は口唇部が肥厚し、沈線の沿う隆帯による棹状区画文。区画文は背割り隆帯。2は波状口縁の深鉢。口縁上端は狭小な無文帯となり肥厚し、さらに沈線により区画される。5・6は縄文を地文に蛇行懸垂文と意匠文。6は縄文を地文に沈線による直行懸垂文が垂下する。加曾利E1式。

土坑SK110出土遺物 (Fig.160-1~11)

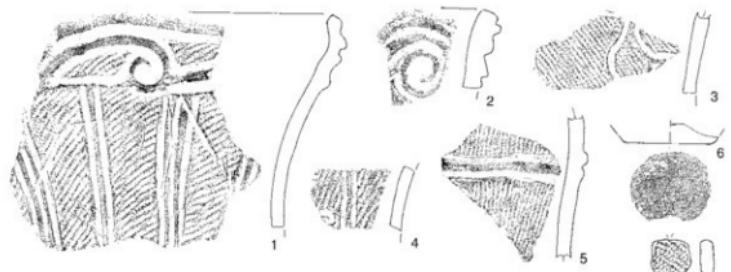
土器片が出土している。1は口縁部が内湾する深鉢。口縁部上端は狭小な無文帯となり、隆帯区画文内に交差互刺文と刻印隆帯が施されている。2はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。口縁上端は無文帯となり、鈍状に迫り出した隆帯が背割り状を呈する。3は背割り隆帯による区画文。胴部は縄文を地文に平行沈線による意匠文が施文される。4は口縁部が肥厚し無文帯となる。5は背割り隆帯による区画文で、口縁部は無文帯となる。6・7・10は縄文を地文に沈線による直行懸垂文、蛇行懸垂文と意匠文が施文される。8は筒状深鉢の口縁部破片。口縁無文帯に半内彌り状の凹部が垂下する。9は浅鉢の口縁部破片。口縁が肥厚し、内面に棱を有する。加曾利E1式。

土坑SK111出土遺物 (Fig.161-1~4)

土器片が出土している。1は曾利系土器の深鉢。口縁部は内湾し、斜行する条線が施文される。2は縄文を地文に意匠文が施文される。3は縄文を地文に沈線による直行懸垂文が垂下する。4は撚糸Rを地文とする。



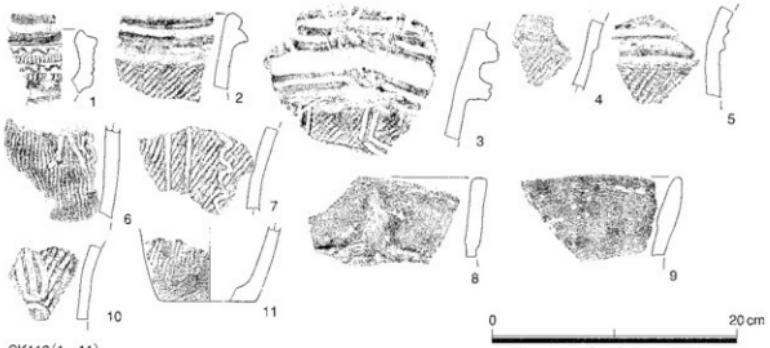
SK107(1~15)



SK108(1~7)



SK109(1~6)



SK110(1~11)

Fig. 160 土坑SK107・108・109・110出土遺物

土坑SK112出土遺物 (Fig.161-1~6)

土器片が出土している。1は波状口縁のキャリバー形の深鉢の口縁部破片。内面に突帯が巡り、口唇部は沈線による渦巻文。口縁部は角押文の沿う隆帯による区画文が施文され、区画内は縦位の条線が充填する。2は口縁部が内湾し、わずかに外反する深鉢。口縁上端は狭小な無文帯。沈線による楕円形区画文内は縦位の条線を充填する。3は縄文を地文に沈線区画文。4は縄文を地文に、断面三角形の隆帯が垂下し、隆帯に沿って沈線が施文される。5は深鉢全体下端破片。6は口縁部がわずかに外反する浅鉢。内面に稜を有する。赤彩がわずかに残存している。

土坑SK113出土遺物 (Fig.161-1~7)

土器片と土器片鍤1点が出土している。1は口縁部がわずかに外反する深鉢。口縁上端は狭小な無文帯で、連続コの字文から連携する意匠文が施文される。2・4はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。2は背割り隆帯による区画文。4は背割り隆帯による区画文と有刺渦巻文(劍先文)が施文される。3は口縁部に突出する突起部に沈線による渦巻文を配し、沈線による棒状区画文を施し、頭部は無文帯となる。5は大形深鉢の頭部破片。頭部は無文帯で、4条の沈線区画に2条の波状沈線が横走する。6は縄文を地文に沈線による蛇行懸垂文が垂下する。加曾利E1式。

7は土器片鍤。継長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK114出土遺物 (Fig.161-1~13・Fig.162-14~31)

土器片と土器片鍤4点、磨石2点、門石1点が出土している。1~8・12はキャリバー形の深鉢破片。1は背割り隆帯による渦巻文、区画文が施文され、頭部は無文帯となる。2・3・7は沈線が沿う隆帯による棒状区画文。7は口縁上端が無文帯となる。4は波状口縁で、口縁上端が鈎状に迫り出し、沈線による渦巻文。口縁部は沈線の沿う隆帯による棒状区画文が施文される。5・8・12は沈線の沿う隆帯による区画文が施文される。6は沈線の沿う隆帯区画文内に円形刺突文が充填される。9は口縁部が内湾する單口縁の深鉢。口縁直下から縄文が施される。10は深鉢の頭部破片。沈線の沿う隆帯区画文内に縦列の沈線を充填する。頭部は無文帯となる。11は口縁部が外反する單口縁の深鉢。口縁部は沈線の沿う隆帯区画文で、口縁部は無文帯となる。12は深鉢の頭部破片。頭部は沈線区画文。13は沈線の沿う隆帯区画文。14・15は懸垂文の間を磨消した磨消懸垂文を垂下させる。16~19は縄文を施文した頭部破片。20は口縁部が外反する浅鉢。口唇部に沈線による棒状文と縄文が施文され、内面に稜を有する。21~24は深鉢の底部破片。加曾利E1式。

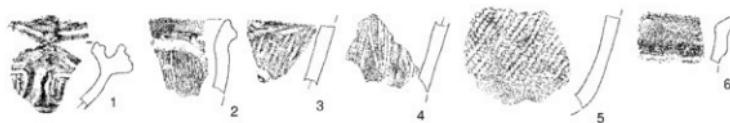
25~28は土器片鍤。いずれも継長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。29は安山岩製の磨石。完品で、表裏両面と側面の全面に使用痕である磨面が認められ、表面中央のみ凹孔部を有する。30は紺雲母片岩製の門石。凹孔部は1ヶ所のみ。31は安山岩製の磨石。表面中央に凹孔部のみで、器面の磨き部はみられない。

土坑SK115出土遺物 (Fig.162-1~15)

土器片が出土している。1~3・7はキャリバー形の深鉢破片。沈線の沿う隆帯による区画文が施文される。4は口縁部が内湾して立ち上がる。口縁直下に沈線に挟まれた円形刺突文が区画文となり、縄文を地文に沈線による棒状区画文が施文される。5は山形把手を有する波状口縁の深鉢。口縁直下から撚糸Lを施す。6は口唇部が内削状となり、口縁上端は狭小な無文帯となり、縄文を地文に沈線による方形区画文。8~13は縄文を地文に沈線による2もしくは3本一組の直行懸垂文が垂下する。14は脚付深鉢の頭部破片。縄文を地文とする。15は口唇部が肥厚する浅鉢。内外面に赤彩が認められる。加曾利E2式。



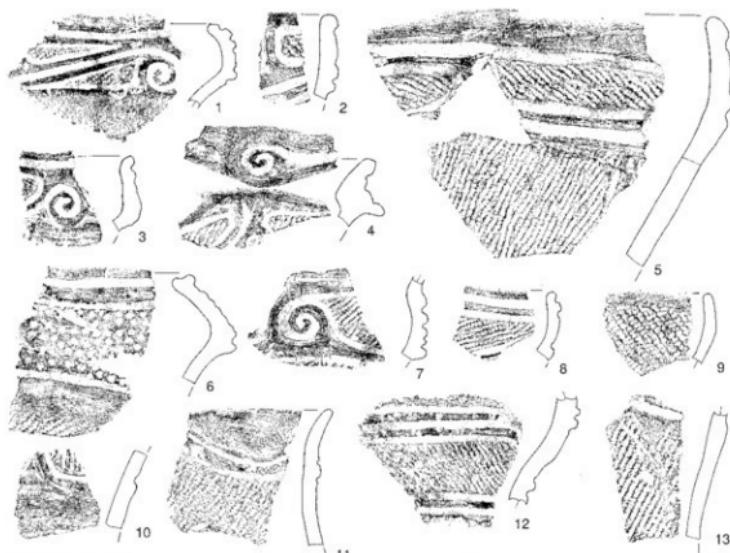
SK111(1~4)



SK112(1~6)



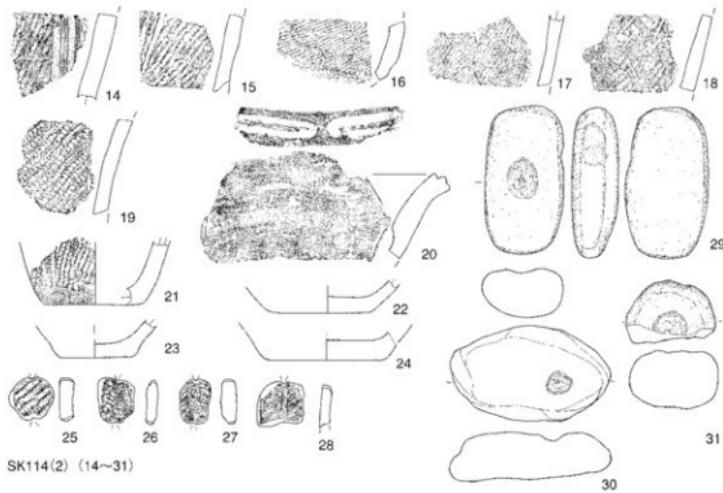
SK113(1~7)



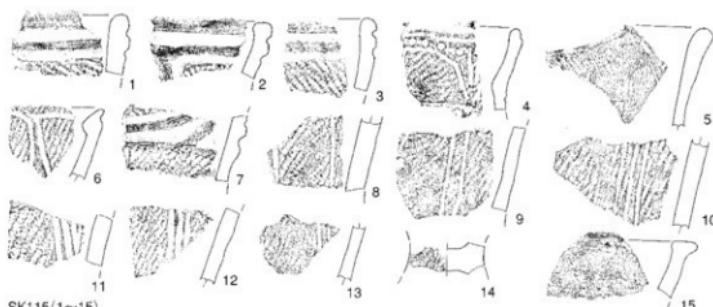
SK114(1) (1~13)

0 1 20 cm
(1/4)

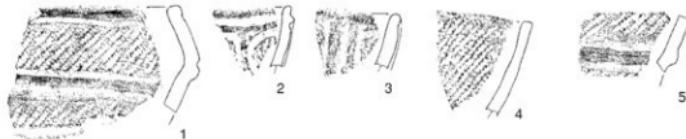
Fig. 161 土坑SK111・112・113・114(1)出土遺物



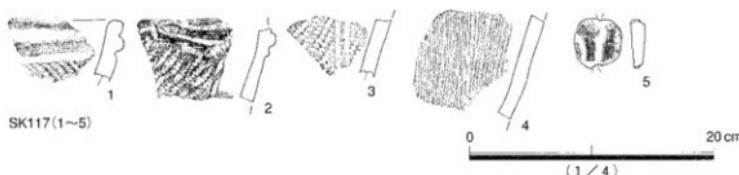
SK114(2) (14~31)



SK115(1~15)



SK116(1~5)



0 1 20 cm
(1 / 4)

Fig. 162 土坑SK114 (2)・115・116・117出土遺物

土坑SK116出土遺物 (Fig.162-1~5)

土器片が出土している。1・2はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。沈線の沿う隆帯による渦巻文、区画文が施文される。3は深鉢口縁部破片。口縁直下から2本単位の隆帯区画文が垂下する。4は単口縁の深鉢。口縁直下から単節RL繩文を施文。5は深鉢の胴部破片。繩文を地文に隆帯区画文。加曾利E1式。

土坑SK117出土遺物 (Fig.162-1~5)

土器片と土器片錐1点が出土している。1はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。沈線の沿う隆帯による区画文が施文される。2は深鉢の頭部破片。隆帯による区画文に繩文を地文とする。3は繩文を地文に沈線による直行懸垂文が垂下する。4は縦縫の条線を地文とする。加曾利E2式。

5は土器片錐。縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK118出土遺物 (Fig.163-1~8)

土器片と土器片錐3点が出土している。1・2はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。口縁上端は狭小な無文帯となり、口縁は繩文を地文に沈線の沿う隆帯による渦巻文と区画文が施文される。3は口縁部が内湾し、無縫Lを地文に隆帯による棒状区画文。4は低隆帯による区画文に、3本一組の磨消懸垂文が垂下する。5は深鉢の底部破片。2もしくは3本一組の懸垂文が垂下する。加曾利E1式。

6~8は土器片錐。縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK119出土遺物 (Fig.163-1~10)

土器片が出土している。1は深鉢の口縁部破片。口縁上端は狭小な無文帯をなし、隆帯による楕円形区画文内は沈線による渦巻文を充填する。区画下は刻目が施されている。2はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。沈線の沿う隆帯による渦巻文、区画文が施文される。3は口縁部直下に鈎状の突起が貼り付けられ、上面に繩文が施文される。4は口縁部が内湾する深鉢。口縁直下から繩文が施文される。6は繩文を地文に沈線による直行懸垂文が垂下する。5・7・8は繩文が施文された深鉢。9は口縁部が外傾して開く浅鉢の口縁部破片。10は深鉢の底部破片。加曾利E1式。

土坑SK120出土遺物 (Fig.163-1~15)

土器片と蝶器1点が出土している。1~3はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。1は背割り隆帯による渦巻文から繋がる区画文を施す。2は口縁部文様帶の突起部に渦巻文を施文する。4は口縁部が外反し、無文帯となり、隆帯区画文が巡る。5は深鉢の頭部は無文帯となり、沈線が沿う隆帯により区画される。6は隆帯による区画に、懸垂文が垂下する。7・8は同一個体で深鉢の胴部破片。繩文を地文に3本一組の懸垂文に横位突出状文が繋がる。9~13は懸垂文の間を磨消した磨消懸垂文を垂下させる。14は外削状の口唇部を呈した浅鉢。加曾利E1式。

15は安山岩製の蝶器。円錐の端部に一向方向からの剥離を加え刃部としている。

土坑SK121出土遺物 (Fig.164-1)

土器片が出土している。深鉢の胴部破片。単節LR繩文を地文とする。加曾利E式。

土坑SK122出土遺物 (Fig.164-1~14)

土器片と土器片錐3点、磨製石斧1点が出土している。1は口縁部が短く外傾する深鉢。口縁部上端は狭小な繩文帯が巡り、沈線により区画される。2・3はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。沈線が沿う隆帯による区画文。3は波状口縁を呈するものと推定される。4は隆帯区画文。隆帯は鈎状に突出する。5~9は繩文を地文に沈線による懸垂文が垂下する。9は蛇行懸垂文。10は浅鉢の口縁部破片で内面に縫を有する。内外面に赤彩が残存している。加曾利E1式。

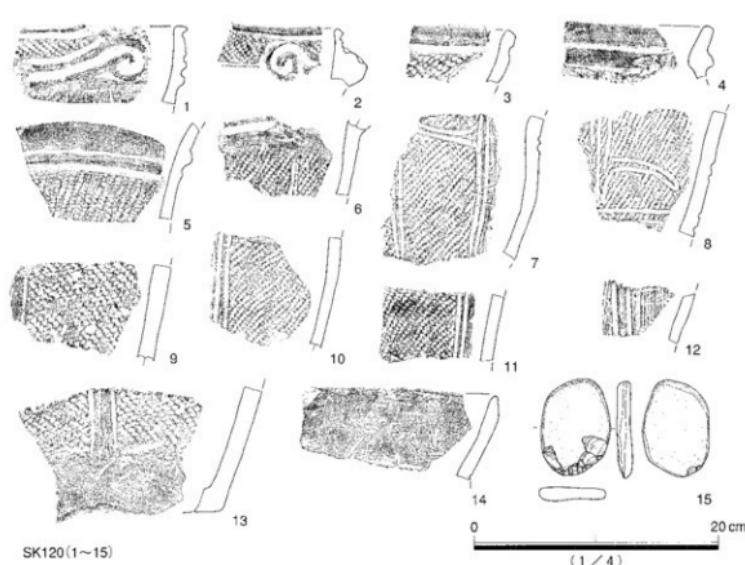
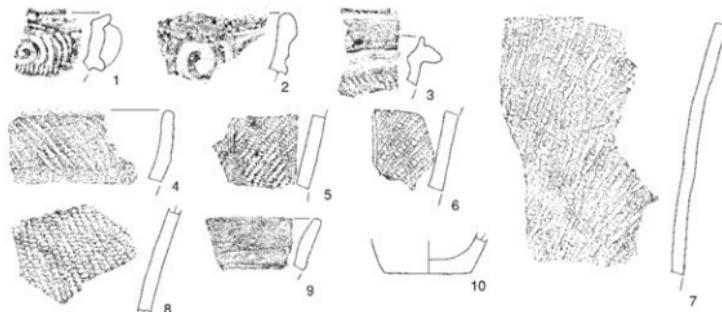
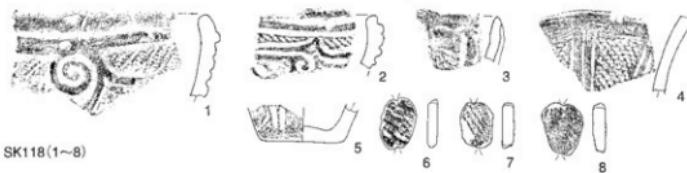


Fig. 163 土坑SK118・119・120出土遺物

11～13は土器片錐。いずれも縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。14は安山岩製の磨製石斧。刃部と基部を欠損している。

土坑SK123出土遺物 (Fig.164-1～5)

土器片が出土している。1・2はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。縄文を地文に沈線が沿う隆帯による区画文が施文される。3は頸部破片。隆帯区画文。4は口縁部が外傾する深鉢。口縁部が無文帯となり、頸部には交瓦刺突文が区画文となる。5は深鉢の底部破片。加曾利E1式。

土坑SK124出土遺物 (Fig.164-1～6)

土器片と土器片錐1点が出土している。1・2はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。沈線が沿う隆帯による渦巻文が施文される。1の地文は縦列の条線を充填する。脇部は磨消懸垂文が垂下する。3・4は縄文を地文に磨消懸垂文が垂下する。5は深鉢の底部破片。加曾利E2式。

6は土器片錐。縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK125出土遺物 (Fig.164-1～8)

土器片が出土している。1はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。沈線が沿う隆帯による渦巻文、区画文が施文される。2は單口縁の深鉢。単節LR縄文を地文とする。3は縄文を地文に磨消平行沈線による波状文。5は撫糸Rを地文とする。8は深鉢の底部破片。網代痕を残す。加曾利E1式。

土坑SK126出土遺物 (Fig.165-1～3)

土器片と土器片錐1点が出土している。1は深鉢の口縁部破片。横位のヘラナデ。2は縄文を地文に沈線による意匠文が施文されている。

3は土器片錐。縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK127出土遺物 (Fig.165-1～6)

土器片と土器片錐2点が出土している。1は深鉢の頭部付近の小破片。骨割り隆帯による区画文で縦列の沈線を充填する。2は降帯区画文に、ヒダ状の調整痕がみられる。3は平行沈線による波状文。

5・6は土器片錐。いずれも縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK128出土遺物 (Fig.165-1)

土器片が出土している。深鉢の口縁部破片。隆帯による区画文。加曾利E1式。

土坑SK129出土遺物 (Fig.165-1・2)

土器片が出土している。1は口縁部が外反し、無文帯となる深鉢。頭部は沈線が沿う隆帯による棒状区画文。2は単節RL縄文を地文とする。加曾利E1式。

土坑SK130出土遺物 (Fig.165-1～7)

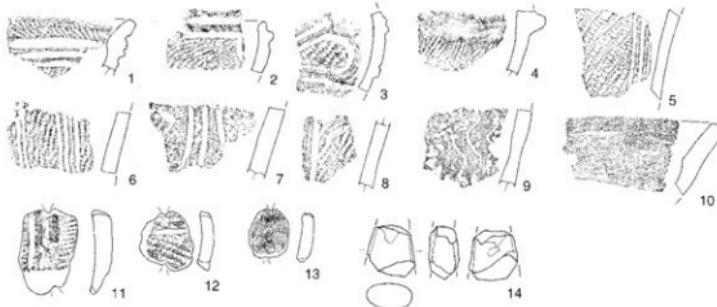
土器片が出土している。1・2はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。縄文を地文に背割り隆帯による棒状区画文を施文する。3は口縁部が外反し、無文帯となる。頸部は縄文を地文に沈線が沿う降帯による区画文。4は山形の小突起を有する波状口縁の小形深鉢。縄文を地文とする。5・6は縄文を地文に2本一組の沈線による懸垂文が垂下する。加曾利E1式。

土坑SK131出土遺物 (Fig.165-1)

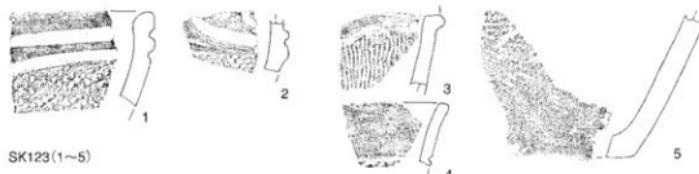
土器片が出土している。1はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。縄文を地文に背割り隆帯による棒状区画文。



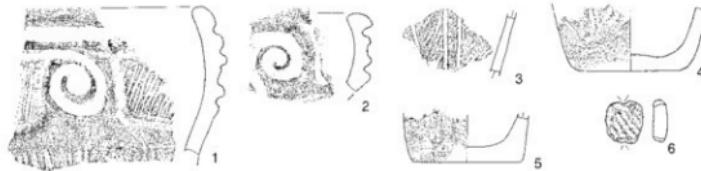
SK121(1)



SK122(1~14)



SK123(1~5)



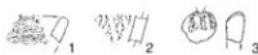
SK124(1~6)



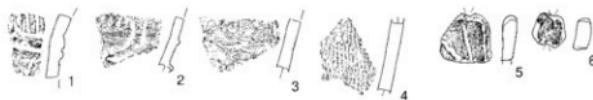
SK125(1~8)

0 20 cm
(1 / 4)

Fig. 164 土坑SK121・122・123・124・125出土遺物



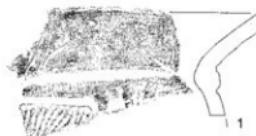
SK126(1~3)



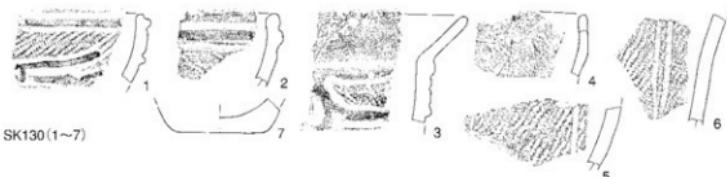
SK127(1~6)



SK128(1)



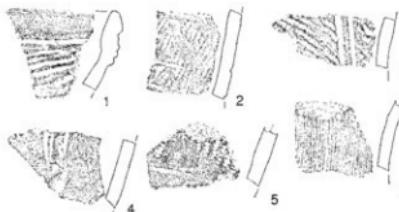
SK129(1・2)



SK130(1~7)



SK131(1)



SK132(1~6)



SK133(1・2)



SK134(1)



Fig. 165 土坑SK126・127・128・129・130・131・132・133・134出土遺物

頭部は無文帯となる。加曾利E1式。

土坑SK132出土遺物 (Fig.165-1~6)

土器片が出土している。1は口唇部が外削状となり、口縁部上端は狹小な無文帯となり、沈線による意匠文。2は繩文を地文に沈線文様。3・4は繩文を施文後に磨消懸垂文を垂下させる。6は縦位の条線を地文とする。加曾利E1式。

土坑SK133出土遺物 (Fig.165-1・2)

土器片が出土している。1・2は深鉢の同一個体。2列の角押文で区画され、ヒダ状の調整痕がみられる。阿玉台II式。

土坑SK134出土遺物 (Fig.165-1)

土器片が出土している。1は深鉢の側部破片。単節RL繩文を地文とする。加曾利E式。

土坑SK135出土遺物 (Fig.166-1・2)

土器片が出土している。1はキャリバー形の深鉢の口縁部の破片。繩文を地文に背割り降帯による区画文。2は繩文を地文とした深鉢の側部破片。加曾利E1式。

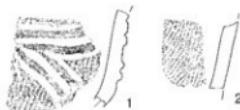
土坑SK136出土遺物 (Fig.166-1~22)

土器片と土器片錐1点が出土している。1は波状口縁の深鉢。眼鏡状把手を有し、口縁部は把手部から連携する背割り隆帯が区画文となり、区画内は幾何学隆帯と縦列沈線を充填する。2は眼鏡状把手を有する深鉢。背割り降帯区画に縦列沈線を充填する。3は口縁部が内湾し、内面に稜を有する深鉢。口縁部上端は狹小な無文帯を持ち、交互刺突文で区画され、繩文を地文に平行沈線による連携する渦巻文を配し、下端は背割り降帯で区画され、連携して突出する渦巻文が施される。4は波状口縁の深鉢。口縁部が緩やかに外反して開く。口唇部は沈線により双方がU字状に曲がる鍵状文。口唇端部は縦位の單沈線が巡り、胴部は繩文を地文に平行沈線による意匠文。5・6はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。5は背割り状降帯による棒状区画文を施し、縦列の沈線を充填する。6は口縁部上端に狹小な無文帯を持つ。7は口縁部が内湾する深鉢。口縁部文様帯は縦列の隆帯により充填されるが、双頭渦巻文を垂下する。8は無文帯の口縁部が外反し、背割り降帯による渦巻文から繋がる区画は変形S字状区画文。9は筒状の深鉢。口唇部は内削状で、繩文を地文に平行沈線による区画文と意匠文を施す。10は單口縁の深鉢。口縁部上端に浅い凹帯が巡る。11は筒状深鉢の胴部破片。隆帯区画内に沈線による双頭渦巻文が描出される。12は筒状深鉢の胴部破片。区画文の背割り状隆帯が突出し突起状となる。13は深鉢の頭部付近の破片。背割り降帯が乗下して棒状区画文を施す。14は幅広の沈線が無文帯を区画する。15・17・18は繩文を地文に沈線による直行懸垂文と蛇行懸垂文が垂下する。16は繩文を地文に蛇行懸垂文と意匠文が施される。19・20は小形深鉢の底部破片。21は口縁部が外反する浅鉢の口縁部破片。内外面に赤彩が認められる。加曾利E1式。

22は土器片錐。縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK137出土遺物 (Fig.167-1~5)

土器片が出土している。1・2は深鉢の胴部破片。繩文を地文に背割り隆帯による区画文。3は深鉢の頭部破片。頭部無文帯に平行沈線が区画文となる。4は繩文を地文に蛇行懸垂文が垂下する。5は繩文を地文とした深鉢の胴部破片。加曾利E1式。



SK135(1・2)



SK136(1~22)

Fig. 166 土坑SK135・136出土遺物

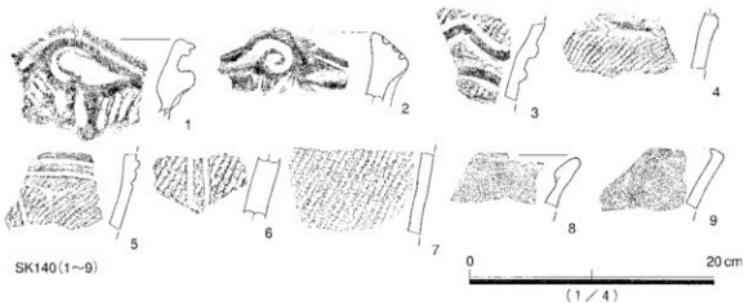
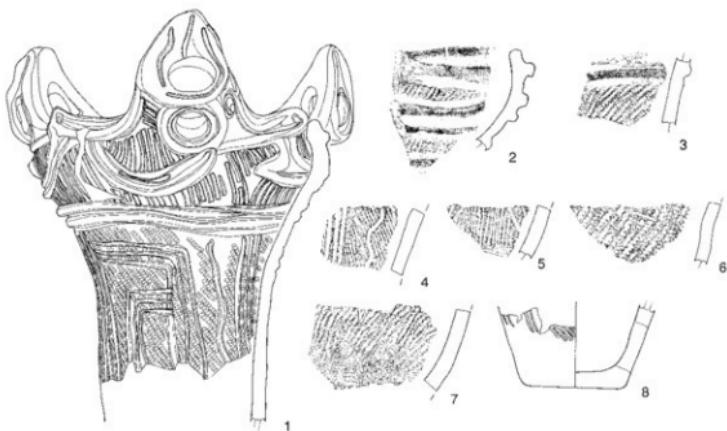
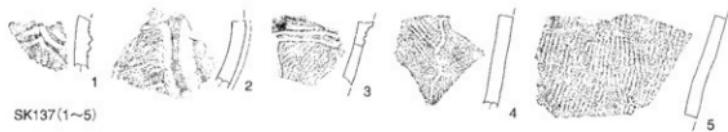


Fig. 167 土坑SK137・138・139・140出土遺物

土坑SK138出土遺物 (Fig.167-1~8)

上器片が出土している。1は底部を欠損する深鉢。胴部は直線的に立ち上がり、頸部で屈曲して、口縁部は開きながら内湾する。口縁部に3単位の縦鏡状把手を有し、凹孔の縁辺は沈線により囲まれ、把手部より鱗がる口唇部は背割り隆帯として区画上部を構成する。口縁部は背割り隆帯による渦巻文を3単位と隆帯刻先文を配し、地文は綱列沈線を充填させる。頸部は背割り隆帯により区画され、胴部は単節LRを地文とし、3本・組の沈線による懸垂文とそれに連携する方形区画文が配される。2はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。背割り隆帯と沈線の沿う隆帯による区画文を施す。3も隆帯区画文。4は繩文を地文に3本・組の直行懸垂文と蛇行懸垂文を垂下させる。5は撫糸Rを地文に磨消平行沈線文による意匠文を描出する。8は平行沈線による懸垂文が垂下する深鉢の底部。加曾利E1式。

土坑SK139出土遺物 (Fig.167-1・2)

上器片が出土している。1は大形の深鉢。口縁部は無文帯となり、交互刺突文により区画され、背割り隆帯によるクランク文。区画内は綱列の沈線が充填される。2は繩文を地文とした深鉢の胴部破片。加曾利E1式。

土坑SK140出土遺物 (Fig.167-1~9)

土器片が出土している。1・2は波状口縁を呈する深鉢。波頂部は背割り状隆帯の渦巻文を配し、胴部は綱位の隆帯懸垂文に綱列沈線文が施されている。3は繩文を地文に沈線の沿う隆帯区画文と波状隆帯。4も隆帯による区画文。5は深鉢の頭部付近の破片で、隆帯と沈線区画文に、懸垂文が垂下する。6も繩文を地文に懸垂文が垂下する。8・9は浅鉢の口縁部破片。8は内面に稜を持つ。9は口唇部が内側に突き出し肥厚する。加曾利E式。

土坑SK141出土遺物 (Fig.168-1~10)

土器片が出土している。1は肩状把手の破片。口唇部に刻目を巡らし、二列の角押文を施し、さらに有筋線文による弧線文を配する。2は波状口縁の深鉢。口唇部に凹帯を巡らし、隆帯区画文内は綱列の太沈線を充填する。3は深鉢の口縁部破片で、隆帯区画内に三列の有筋線文による幾何学文を施す。4は深鉢の口縁部破片。狭小な口縁部を無文帯とし、交互刺突文で区画され、綱列の沈線が充填される。5は深鉢の口縁部破片。繩文を地文に背割り隆帯による区画文。6はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。沈線の沿う隆帯による渦巻文を施す。7もキャリバー形の深鉢の頭部破片。沈線の沿う隆帯による区画文を施す。8・9は3本・組の懸垂文間を磨消した磨消懸垂文を垂下させる。10は口縁部が外反する浅鉢の口縁部。内面に沈線文が描出される。加曾利E1式。

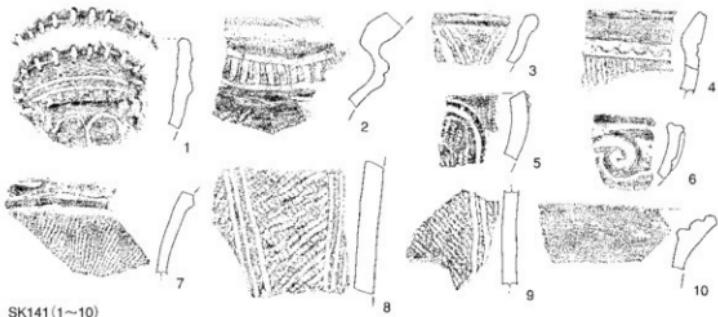
土坑SK142出土遺物 (Fig.168-1~6)

上器片が出土している。1～4は同一個体。キャリバー形の深鉢で、沈線の沿う隆帯による渦巻文・梢円形文・区画文を施す。口縁部下部区画は沈線によって段差を設ける。胴部は磨消懸垂文を垂下させる。5・6は深鉢の底部破片。加曾利E2式。

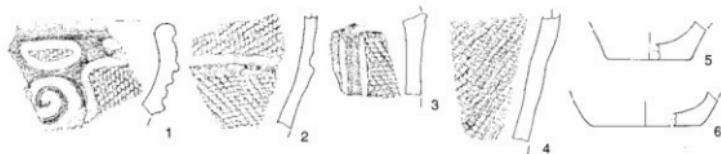
土坑SK143出土遺物 (Fig.168-1~11)

土器片と土器片錐4点、石皿1点が出土している。1は波状口縁を呈する深鉢。狭小な口縁部を無文帯とし、交互刺突文で区画される。2も波状口縁の深鉢。口唇部は肥厚し、狭小な無文帯を持つ。3・6は背割り隆帯による区画文で、頸部が無文帯となる。4・5は浅鉢の口縁部破片。4は口唇部が肥厚する。内外面に赤彩が残存する。

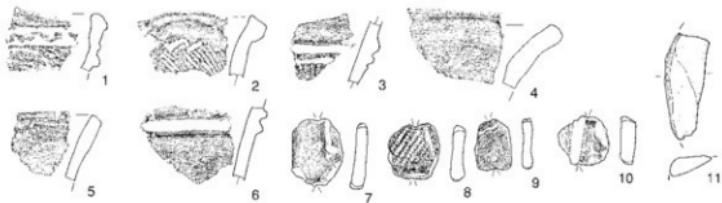
7～10は上器片錐。綫長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。11は安山岩製の石皿の小破片である。



SK141(1~10)



SK142(1~6)



SK143(1~11)

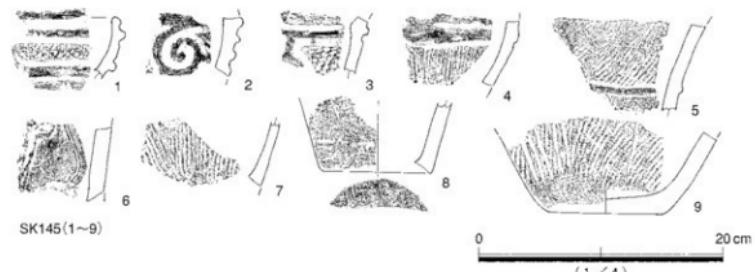


Fig. 168 土坑SK141・142・143・145出土遺物

土坑SK145出土遺物 (Fig.168-1~9)

土器片が出土している。1～3はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。沈線の沿う隆帯による渦巻文、区画文を施文する。4は深鉢の胴部破片。撚糸Rを地文とする。5は縄文を地文に貼付隆帯による区画文。6は無文地に蛇行沈線が垂下する。7は撚糸Rを地文とする。8・9は深鉢の底部破片。8は網代痕を有する。9は縄文を地文に沈線による懸垂文が垂下する。加曾利E2式。

土坑SK146出土遺物 (Fig.169-1~15)

土器片と土器片鍤3点が出土している。1～3はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。1は口唇部に凹帯が巡り、口縁部は縄文を地文に背割り隆帯によるクランク文。2は縄文を地文に貼付隆帯による区画文を施文する。隆帯間に突兀文と縦列沈線を充填させる。4は波状口縁を呈する深鉢。角押文により区画された口縁部は無文帯となる。5は隆帯による円形区画内に縦列沈線を充填する。6は首利系上器で、縦位の条線を地文とする。9は單口縁の無文の深鉢。10・11は浅鉢の口縁部破片。10は口縁部が外反する。11は口唇部が肥厚し、口縁部は内湾する。いずれも内外面に赤彩が残存する。加曾利E1式。

13～15は土器片鍤。いずれも縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK147出土遺物 (Fig.169-1~8)

土器片が出土している。1・5は体部が内湾し口縁部が外反する浅鉢。体部に背割り隆帯による横S字状文を配する。2は平縁の深鉢。口縁部は内傾し、縦位の太沈線を施文する。胴部は縄文を地文。3は筒状の深鉢。断面カマボコ状の隆帯区画文を持つ。4は障壁区画内に縦列の沈線を充填する。6は縄文を地文に蛇行沈線が垂下する。8は口縁部が外反する浅鉢。口唇部に凹帯が巡る。加曾利E1式。

土坑SK148出土遺物 (Fig.169-1・2)

土器片が出土している。1はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。沈線の沿う隆帯による渦巻文と棒状区画文を施文し、頸部は無文帯となる。2は縄文を地文に、2もしくは3本一組の懸垂文が垂下する。加曾利E1式。

土坑SK149出土遺物 (Fig.170-1~13)

土器片と土器片鍤2点が出土している。1は口縁部が外反し、体部は内湾して立ち上がる深鉢。口縁は無文帯となり、体部は沈線の沿う隆帯による棒状区画文と渦巻文を施文する。2は山形状の小突起をもつ深鉢。口唇部から縄文が施文される。3～8は縄文を地文に沈線による懸垂文が垂下する。4と8は3本一組の懸垂文間を磨消した磨消懸垂文を垂下させる。10は縦位の条線を施文。11は浅鉢の口縁部破片と思われる。口縁に沿って一条の沈線が巡る。加曾利E2式。

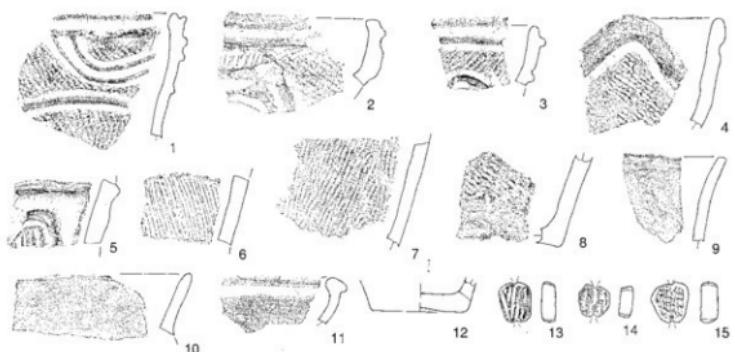
12・13は土器片鍤。いずれも縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK150出土遺物 (Fig.169-1~3)

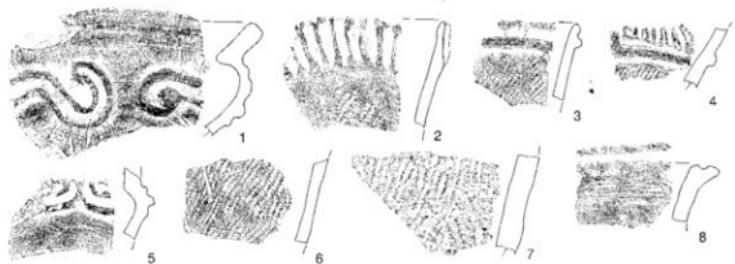
土器片が出土している。1はキャリバー形の深鉢で波状口縁を呈する。沈線が沿う隆帯による渦巻文を施文する。2は首利系土器の口縁部破片。斜行する条線を地文に、内面は突帯を有する。3は撚糸Lを地文に3本一組の懸垂文が垂下する。加曾利E2式。

土坑SK151出土遺物 (Fig.170-1~16)

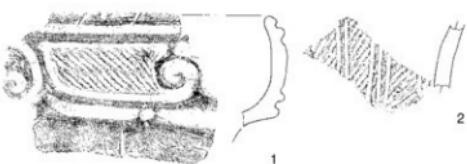
土器片と土器片鍤2点が出土している。1・6はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。背割り隆帯によるクランク文を施文する。2は沈線が沿う隆帯による区画文が施文され、口縁部には狭小な無文帯を有する。3はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。刺突文が施文された隆帯による区画文内に渦巻状沈線を充填する。頸部は無文帯となる。4・5はキャリバー形の深鉢の頭部破片。沈線の沿う隆帯による区画文と蛇行文を施文する。7は口縁部が外傾して立ち上がる深鉢。口縁部は無文帯となり、2本一組の区画に繋がり懸垂文が垂下する方形



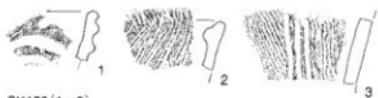
SK146(1~15)



SK147(1~8)



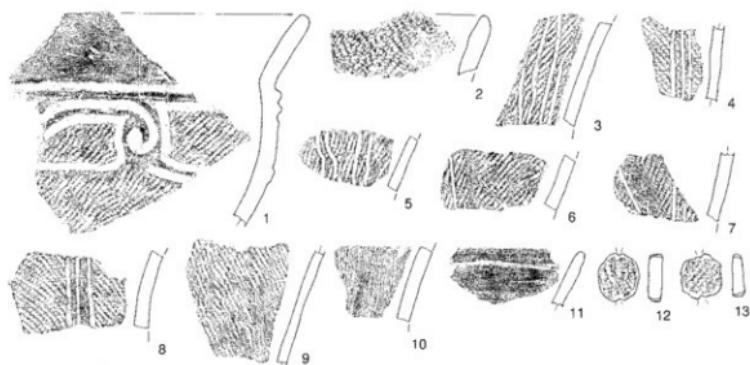
SK148(1·2)



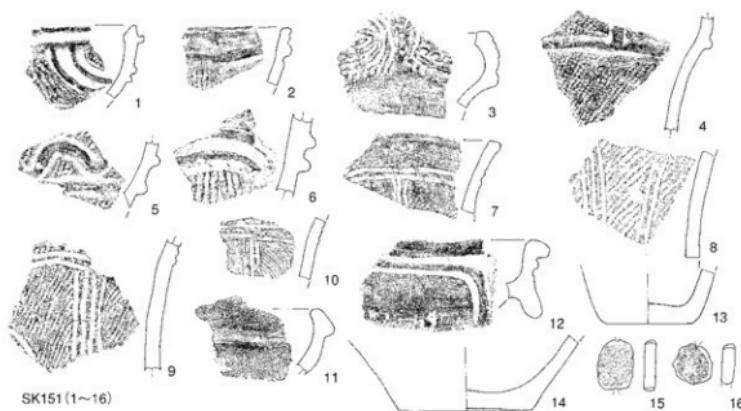
SK150(1~3)

0 20 cm
(1/4)

Fig. 169 土坑SK146·147·148·150出土遺物



SK149(1~13)



SK151(1~16)



SK152(1~5)



Fig. 170 土坑SK149・151・152・155出土遺物

区画文。10も同様に3本一組の懸垂文が垂下する方形区画文。地文は斜行条線を充填する。8・9は縄文を地文に沈線による懸垂文が垂下する。11・12は浅鉢の口縁部破片。11は口縁部が内湾し、鉗状に迫り出す。12も頸状に大きく迫り出し、沈線による区画文が施文される。14は浅鉢の底部である。加曾利E1式。

15・16は土器片錐。いずれも縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK152出土遺物 (Fig.170-1~5)

土器片と土器片錐1点が出土している。1・2は深鉢の崩部破片。縄文が施文されている。3は外面に段を有する深鉢。口縁部は無文帯となり、腹部は縦位の条線文。4は深鉢の底部破片。

5は土器片錐。縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。加曾利E式。

土坑SK153出土遺物 (Fig.171-1~15)

土器片と磨石1点が出土している。1はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。沈線が沿う隆帯による渦巻文と杵状区画文を施文する。2は口唇部に粘土粒を貼付け、口縁部上半を無文帯とし、縦列の沈線文を施文する。3は口縁部に縄文帯を巡らす。4は沈線が沿う隆帯を区画文とする。5・6は縄文を地文に沈線による意匠文。7は縄文を地文に単沈線による懸垂文を垂下させる。9は3本一組の懸垂文間を磨消した磨消懸垂を垂下させる。10は縦位の条線を施文。11・12は浅鉢。12は体部が外傾して立ち上がり、頸部で括れ、口縁部は外反する。内面に継ぎ接を有する。外面に僅かな赤彩が認められる。13・14は深鉢の底部破片。加曾利E2式。

15は安山岩製の磨石欠損品。表面に凹孔部を有する。

土坑SK154出土遺物 (Fig.171-1~9)

土器片と土器片錐2点が出土している。1は口縁部が短く外反し、隆帯区画内に縦位の単沈線を充填する。2は単口縁の深鉢で、縄文を地文に沈線による杵状区画文が施される。3は僅かに内湾する口縁部が狹小な無文帯をなし、口縁部下は羽状縄文となる。5は縄文が施文された隆帯が横走する。7は有段の口縁部をもつ浅鉢。赤彩が認められる。加曾利E1式。

8・9は土器片錐。8は短軸方向、9は長軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK155出土遺物 (Fig.170-1~4)

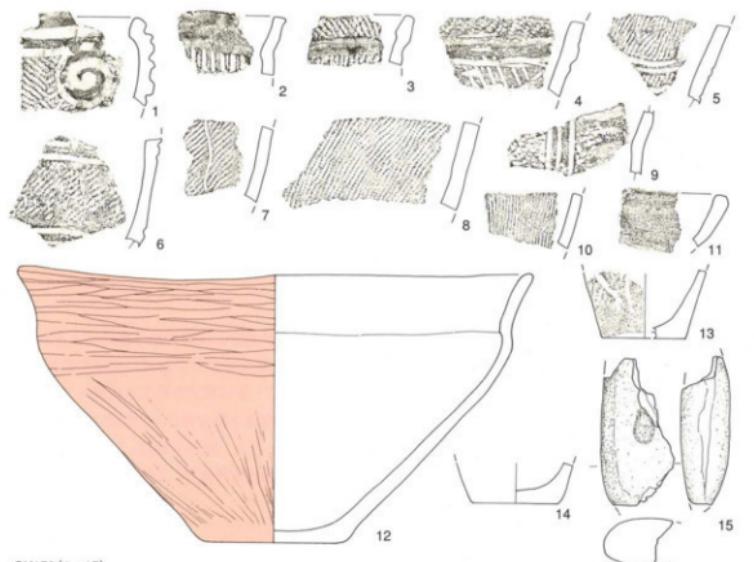
土器片が出土している。1は無文帯の口縁部が短く外反し、体部は内湾気味に立ち上がる。頸部の交互刺突文が区画文となる。3は縄文を地文に磨消懸垂文が垂下する。加曾利E1式。

土坑SK156出土遺物 (Fig.171-1~6)

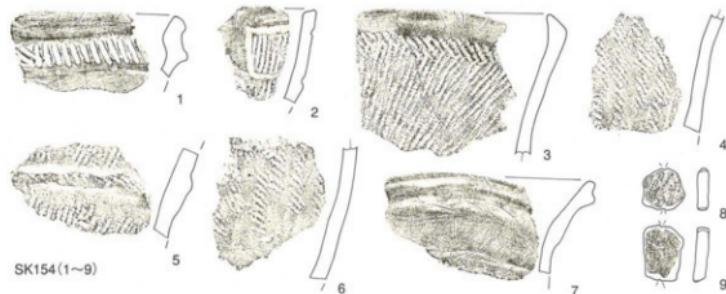
土器片が出土している。1は口唇部に刻目が巡り、外側は無文で、内面に二列の角押文が施文される。2は隆帯に沿って角押文と爪形文が施文される。3は深鉢の頸部付近の破片。縦位の刻目が入る隆帯に、交互刺突文が巡る。4は縄文を地文に2もしくは3本一組の沈線による懸垂文を垂下させる。加曾利E式。

土坑SK157出土遺物 (Fig.172-1~4)

土器片が出土している。1は口縁部が僅かに外反する深鉢。口縁部に縄文帯を巡らし、交互刺突文で区画される。2は縄文を地文に磨消縄文による区画文。3は縄文を地文に平行沈線を垂下させる。4は縄文を地文に太沈線による意匠文。加曾利E1式。



SK153(1~15)



SK154(1~9)

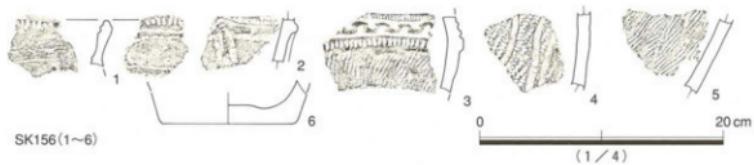
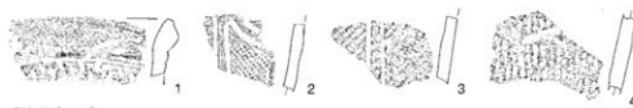


Fig. 171 土坑SK153・154・156出土遺物



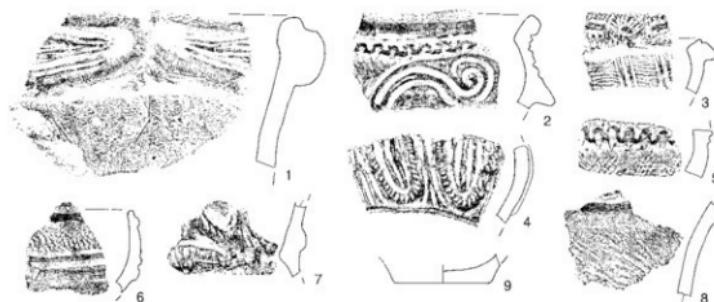
SK157(1~4)



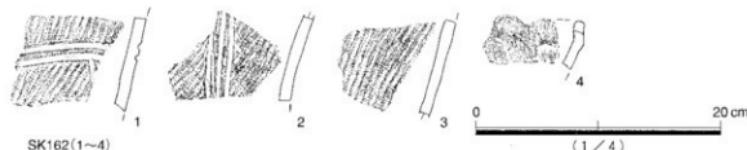
SK158(1~4)



SK159(1~5)



SK160(1~9)



SK162(1~4)

0 20 cm
(1 / 4)

Fig. 172 土坑SK157·158·159·160·162出土遺物

土坑SK158出土遺物 (Fig.172-1~4)

土器片が出土している。1は波状口縁を呈する筒状深鉢で、体部は直線的に外傾して立ち上がる。口縁部には狹小な無文帯を持つ。沈線による渦巻文を波頂部に配す。体部には繩文を施す。2は繩文を地文に2本一組の懸垂文が垂下する。3は深鉢の底部付近の破片。4は深鉢の底部破片。加曾利E1式。

土坑SK159出土遺物 (Fig.172-1~5)

土器片と土器片鍤1点が出土している。1はヒダ状調査痕を持つ深鉢。2は断面三角形の隆帯区画に沿って波状沈線が巡る。3は口唇部が肥厚する深鉢。口唇部に刻日を有する隆帯が巡る。4は口縁部が短く外反する浅鉢。狹小な口縁部は沈線区画される。阿玉台式。

5は土器片鍤。綫長破片の短軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK160出土遺物 (Fig.172-1~9)

1. 器片が出土している。1は深鉢の口縁部破片。X状隆帯を口縁部に施し、区画内は隆帯に沿って沈線を巡らす。胴部は彫齒状工具による条縞を垂下させる。2は口縁部が短く外反し、頸部が鶴状に張り出す。口縁部上端は無文帯となり、交互刺突文により区画され、平行沈線による渦巻文が施文される。3は幅広の口唇部に楕円形文と単沈線が施文され、口縁部は繩文を地文に3本一組の懸垂文が垂下する。4は刻日のある隆帯により綫長楕円形区画文を施し、綫段の沈線を充填させる。5は隆帯区画に交互刺突文が施される。6はキャリバーフォームの深鉢の口縁部破片。沈線の沿う隆帯による区画文を施文する。7は繩文が施文された隆帯区画に綫列沈線を充填する。8は繩文を地文に隆帯区画文。加曾利E1式。

土坑SK161出土遺物 (Fig.173-1~7)

土器片と土器片鍤1点が出土している。1はキャリバーフォームの深鉢の口縁部破片。沈線の沿う隆帯による渦巻文と棒状区画文を施文する。2は交互刺突文を区画文に、3本一組の沈線による意匠文。3は胴部破片。繩文を地文に3本一組の沈線区画。4は3本一組の懸垂文間を磨消した磨消懸垂文を垂下させる。5は繩文を地文に2本一組の沈線による懸垂文を垂下させる。6は口縁部が内溝する浅鉢。加曾利E2式。

7は土器片鍤。綫長破片の短軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK162出土遺物 (Fig.172-1~4)

土器片が出土している。1は繩文を地文に平行沈線による意匠文。2は繩文を地文に3本一組の懸垂文が垂下する。4は二山状の小突起を有する小形の深鉢。加曾利E式。

土坑SK163出土遺物 (Fig.173-1~5)

1. 器片と黒曜石製削片石器1点が出土している。1は狹小な無文帯を持つ口縁部に、指直による刻みが付く隆帯が巡る。2は隆帯に沿って幅広の角押文が施文される。阿玉台式。3は口縁部が外反し、沈線による区画文。口縁部は無文帯となる。4は口唇部が肥厚する浅鉢の口縁部破片。

5は黒曜石製の削片石器。側縁部に調整削離が施されている。

土坑SK164出土遺物 (Fig.173-1~6)

土器片と土器片鍤1点が出土している。1は深鉢の口縁部破片。口縁部上端は無文帯となり、刻日のある意匠文が配される。2は繩文が施文された隆帯による渦巻文。3は口唇部が肥厚し、狹小な無文帯のある深鉢。4は繩文を地文に沈線に沿って稜を有する区画文。

6は土器片鍤。綫長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK165出土遺物 (Fig.173-1・2)

土器片が出土している。1・2は縄文を地文に3本一組の懸垂文間を磨消した磨消懸垂文を垂下せる。加曾利E2式。

土坑SK167出土遺物 (Fig.173-1~5)

土器片が出土している。1はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。沈線の沿う降帯による区画文を施文する。2は縄文が施された幅広の隆帯が施文される。3~5は3本一組の懸垂文間を磨消した磨消縄文による意匠文。加曾利E1式。

土坑SK168出土遺物 (Fig.173-1~10・Fig.174-11~28)

土器片と土器片錐1点が出土している1~3・5はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。沈線が沿う降帯による渦巻文と棒状区画文を施文する。4は連弧文土器の口縁部破片。縄文を地文に3本単位の波状沈線を巡らす。6は深鉢の頸部破片。沈線区画。7は深鉢の口縁部破片。沈線の沿う降帯区画に撚糸Rを地文とする。11は底部を欠損する連弧文土器。胴部に折れを持ち、口縁部が内湾気味に開く。単節RL縄文を地文に口縁部に区画文を引き、主文様は3本一組の連弧文を施文する。胴部は区画文に繋がる方形区画を垂下せる。8~10・12~21・24は縄文を地文に2本一組の沈線による懸垂文を垂下せる。12・13は3本一組の懸垂文間を磨消した磨消懸垂文を垂下せる。22は撚糸Rを地文とする。26は口縁部が短く内湾する浅鉢。赤彩が認められる。27は口縁部が外反し、無文帯となり、交互刺突文が区画文となる。加曾利E2式。

28は土器片錐。綫長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK169出土遺物 (Fig.174-1~3・Fig.175-4~19)

土器と土器片錐5点、石鏃1点が出土している。1は胴部が直線的に立ち上がり、頸部で屈曲して口縁部は開きながら内湾し、口縁端部で短く外反する。口縁端部には狭小な無文帯をなし、交互刺突文が区画文となる。地文は単節RL縄文で、口縁部では横位に頸部から胴部は縦位に施文し羽状効果を表出す。2は胴部が直線的に立ち上がり、頸部で屈曲して、口縁部は内湾気味に開き、口唇部は肥厚する。口縁部は無文帯となり、胴部は単節RL縄文が縦位施文される。3は1単位の山形把手を有する深鉢。胴部は直線的に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。口縁は肥厚し、無文帯となり、胴部は単節LR縄文を施文。4は円孔を有する山形把手の深鉢。波頂部は隆帯区画され、隆帯上に爪形文が一部施文され、内面は円孔の周縁に沿って沈線が巡る。5は口唇部が肥厚し四帯が巡り、口縁端部には指頭圧痕による刻みが施される。6は波状口縁の深鉢。波頂部から指頭圧痕された隆帯が垂下し、口縁部は押し引き文による幾何学文。7は深鉢の口縁部破片。隆帯区画間に縦列の沈線を充填する。8は口唇部が肥厚し、熱糞文が施文される。9は深鉢の頸部破片。隆帯区画文と角押文が施文される。10は縦位の条縞施文の深鉢。11は沈線による格子目文。12・13は浅鉢。12は口唇部が肥厚し、13は内面に稜を有する。赤彩が僅かに残存する。加曾利E1式。

14~18は土器片錐。いずれも縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。19は黒曜石製の石鏃。先端部を欠損する。表面面とも丁寧な開削剥離が施されている。

土坑SK170出土遺物 (Fig.175-1~8)

土器片と土器片錐1点が出土している。1・2はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。1は無文地に貼付隆帯による渦巻文と棒状区画文を施文する。2は刺先渦巻文を施し、頸部は無文帯となる。3は縄文を施文した隆帯区画。4・5は深鉢の頸部付近の破片。4は隆帯区画に懸垂文が垂下する。加曾利E1式。

8は土器片錐。綫長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。

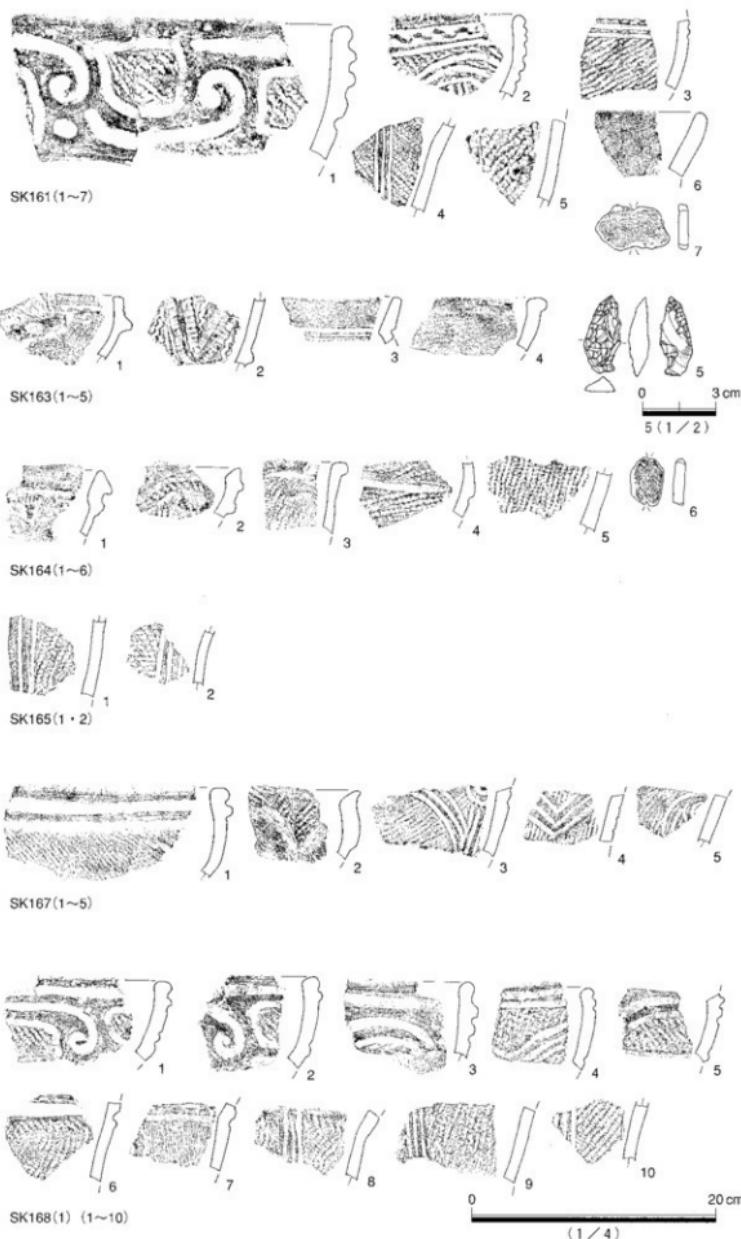
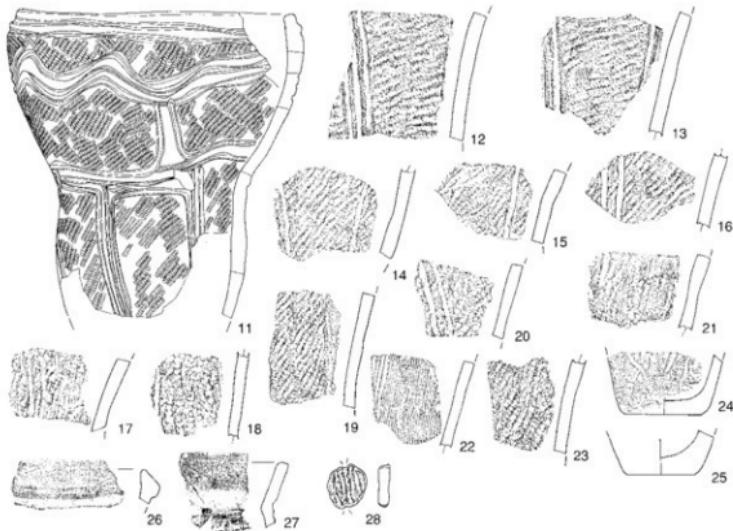


Fig. 173 土坑SK161・163・164・165・167・168(1)出土遺物



SK168(2) (11~28)

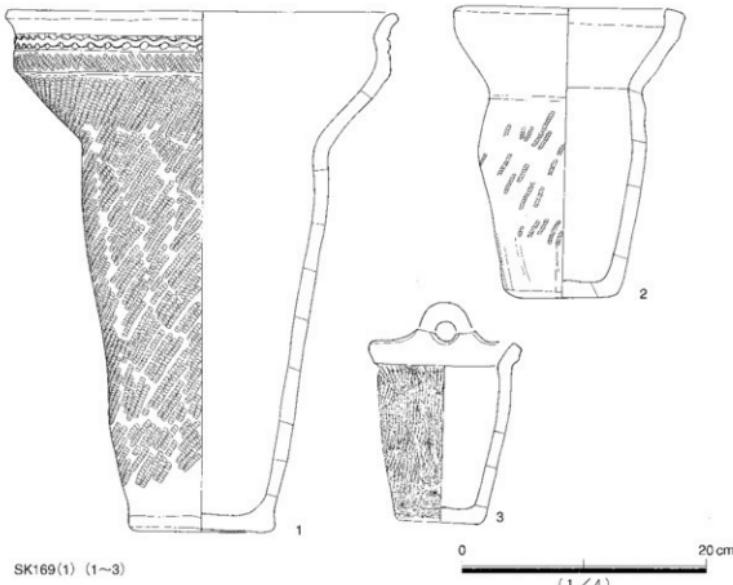


Fig. 174 土坑SK168(2)・169(1)出土遺物

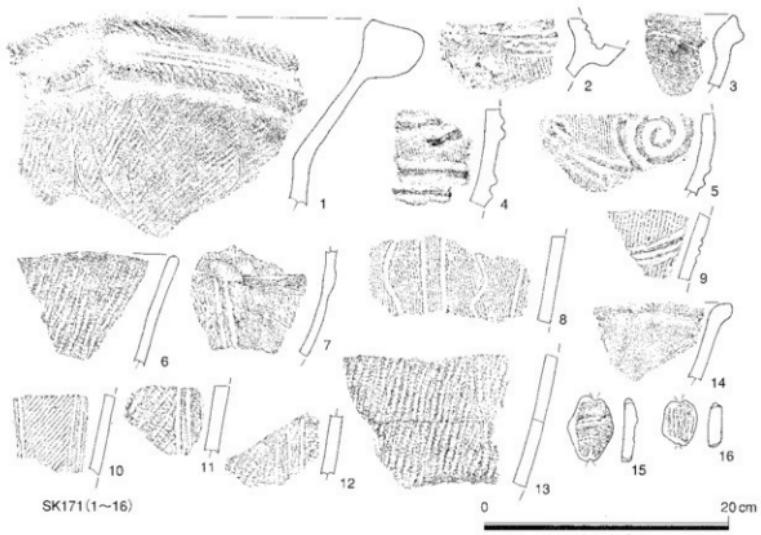
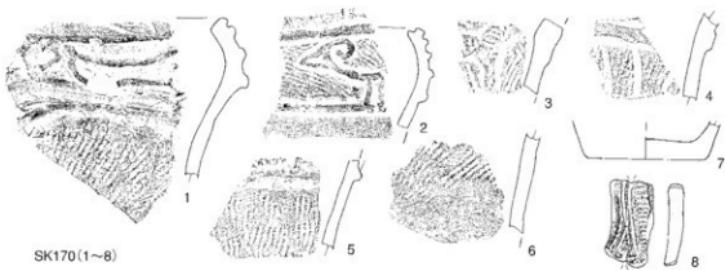
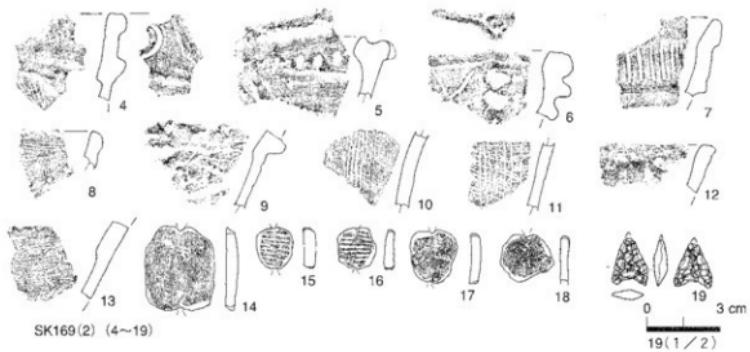


Fig. 175 土坑SK169(2)・170・171出土遺物

土坑SK171出土遺物 (Fig.175-1~16)

土器片と土器片鍤2点が出土している。1は口縁部が肥厚し、縄文が施文されたX字状隆帯を口縁部に配し、区画内に沈線を巡らす。2は深鉢の頸部付近の破片。顎状に突き出した隆帯下部に縦位沈線と交互刺突文を施す。3は口縁部が短く外反し、無文地に隆帯による区画文が施される。4・5・8は同一個体である。キャリバー形の深鉢破片。貼付隆帯による渦巻文と杵状区画文を施文する。地文は撫糸Lである。8は2本一組の直行懸垂文と蛇行懸垂文を垂下させる。6は単口縁の深鉢。7は縄文を地文に2本一組の懸垂文を垂下させる。9は連弧文上器。撫糸Lを地文とする。10~13は3本一組の懸垂文間を磨消した磨消懸垂文を垂下させる。加曾利E1式。

15・16は土器片鍤。縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK172出土遺物 (Fig.176-1~6)

土器片が出土している。1・3は同一個体。1はキャリバー形の深鉢。山形の小突起を有する波状口縁で、沈線による区画された口縁部には横円形棒状文を配し、胴部は磨消懸垂文が垂下する。2・3は平行懸垂文間を磨消した磨消懸垂文を垂下させる。5は波状口縁を呈する浅鉢。内面に棱を有する。内外面に赤彩が残存している。6は深鉢の底部破片。加曾利E2式。

土坑SK173出土遺物 (Fig.176-1・2)

土器片が出土している。1は浅鉢の胴部破片。無文地である。2は深鉢の底部破片。加曾利E式。

土坑SK174出土遺物 (Fig.176-1~18)

土器片と土器片鍤4点が出土している。1・7はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。沈線の沿う隆帯による杵状区画文を施文する。2・3は狹小な口縁部上端が無文帯となり、2本単位の沈線による方形区画文を垂下させる。4は口唇部に狹小な無文帯を持ち、胴部には縄文を施文。5は単口縁の深鉢。口縁直下から縄文が施文される。6はキャリバー形の深鉢の頸部破片。沈線の沿う隆帯による杵状区画文に、磨消懸垂文が垂下する。9・10は連弧文上器。撫糸Lを地文とし、9は逆U字状の懸垂文が垂下する。12は3本一組の懸垂文間を磨消した磨消懸垂文を垂下させる。14は口縁部が外傾する浅鉢。外面に赤彩が認められる。加曾利E2式。

15~18は土器片鍤。縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK175出土遺物 (Fig.176-1~8・Fig.177-9~11)

土器片が出土している。1は口縁部が外反し、無文帯となる。胴部は縄文を地文に沈線による区画文が施され、懸垂文が垂下する。2は口唇部が肥厚し、口唇部に沈線と縦列の単沈線を施す。3は縄文が施文された隆帯が垂下し、縄文を地文に横位の沈線を充填する。4は無文地に櫛齒状T工具による条縞文を施す。6は波状口縁を呈する浅鉢。口縁部がわずかに外反する。7は無文の深鉢の頸部破片。8は深鉢の底部破片。9は底部のみ欠損するキャリバー形の深鉢。口縁部文様帶は、口唇部に凹端が巡り、区画下は背割り隆帯で構成され、区画内に貼付隆帯による7単位の「重クランク文」を施文する。地文には単節RL縄文が縦位施文される。10・11は深鉢の底部破片。10は木葉痕、11は網代痕を残す。加曾利E1式。

土坑SK176出土遺物 (Fig.177-1~10)

土器片が出土している。1・2はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。1は口縁部上端に狹小な無文帯を持ち、背割り隆帯による渦巻文。2は沈線の沿う隆帯による渦巻文と杵状区画文を施文する。3は深鉢の口縁部破片。沈線による杵状区画文と磨消懸垂文を垂下する。4は口縁部上端が狹小な無文帯となり、方形区画文が垂下する。5は口縁部が内湾する深鉢。口縁部上端は無文帯となる。6は深鉢の頸部付近の破片。背割り隆帯による区画文に蛇行懸垂文が垂下する。7・8は縄文を地文に磨消懸垂文が垂下する。10は口縁部が肥厚する浅鉢の破片。波状口縁を呈し、内外面とも赤彩が施されている。加曾利E2式。

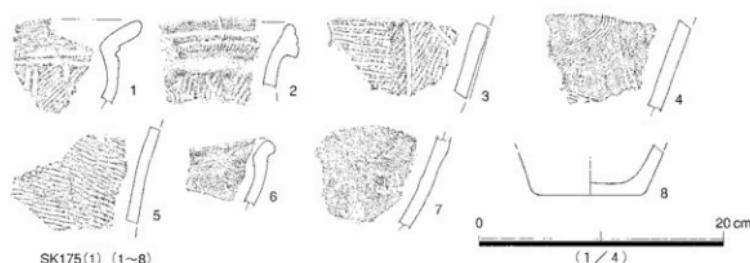
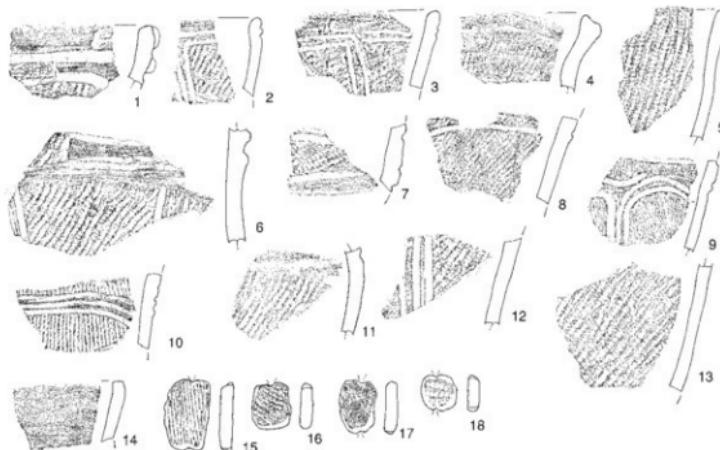
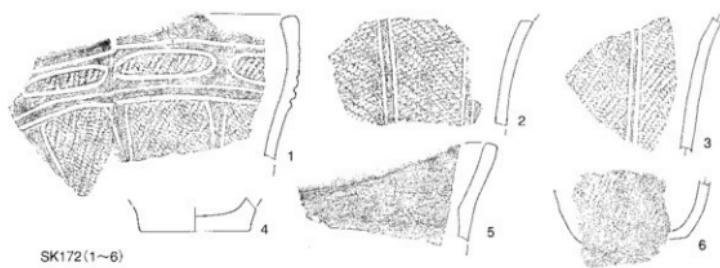


Fig. 176 土坑SK172・173・174・175(1)出土遺物

土坑SK178出土遺物 (Fig.177-1・2)

土器片が出土している。1は隆帯区画を有する。2は口縁部が内湾する。単節RL縄文の継位施文を地文とする。加曾利E1式。

土坑SK179出土遺物 (Fig.177-1・2)

土器片が出土している。1は深鉢の胸部破片。単節RL縄文を地文とする。2は浅鉢の胸部破片。加曾利E式。

土坑SK180出土遺物 (Fig.177-1~6)

土器片が出土している。1は筒状深鉢の胸部破片。隆帯による意匠文に、刺突文が加わる。2は縄文を地文に平行沈線による意匠文。6は台形土器の破片。脚部に貫通孔を有し、台上面が若干窪み凹状を呈する。加曾利E1式。

土坑SK181出土遺物 (Fig.177-1~7)

土器片が出土している。1は単口縁の深鉢。6本単位の術歯状工具による条線を垂下させる。2は口縁部を無文帶とし、交互刺突文を区画文とする。3~5は縄文を地文に2もしくは3本一組の沈線および蛇行沈線による懸垂文を垂下させる。加曾利E2式。

土坑SK182出土遺物 (Fig.178-1~5)

土器片と土器片錐2点が出土している。1~3は深鉢の胸部破片。1は縄文を地文に懸垂文が垂下する。加曾利E式。

4・5は土器片錐。縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。

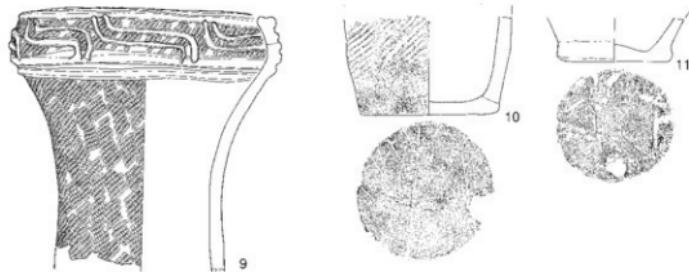
土坑SK183出土遺物 (Fig.178-1~19)

土器片と土器片錐1点、小形磨製石斧1点、石鎚1点が出土している。1は突出する1単位の多角状山形把手を有する深鉢。頸部で折れ、口縁部は外傾して立ち上がる。口唇部には4単位の突出部がみられ、把手は円孔が施され、円孔を巡るように沈線が施文される。さらに把手縁辺に沿って沈線が施されている。口縁部は単節RL縄文を地文に、平行沈線による連弧文が施文され、この連弧文を縦位区画している。胸部は頭部区画文に連携して懸垂文が施され、懸垂文と連携する渦巻文と方形区画文が配される。2は肥厚する口唇部に沈線文と単沈線を施文する。口縁部は無文となる。3は波状口縁の深鉢。波頭部は円形文を配し、ここから沈線による渦巻文が施文される。4・5はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。4は沈線の沿う隆帯による棒状区画文内に波状の降帯を施文する。5は棒状区画内に綴列沈線を充填し、背割り隆帯を垂下もしくは横位に施文する。6は単口縁の深鉢。口縁部は無文帶となる。7は深鉢の頸部付近の破片。隆帯による棒状区画文を施文する。8は背割り隆帯を区画文とし、縄文を地文に2本一組の直行懸垂文と蛇行懸垂文が垂下する。10は単口縁の深鉢。口縁部は折り返し口縁。11・12は深鉢の底部破片。12は然系Rを地文とする。14は口唇部が肥厚し、内面に横をもつ浅鉢。体部はほぼ直線的に外傾して立ち上がる。加曾利E1式。

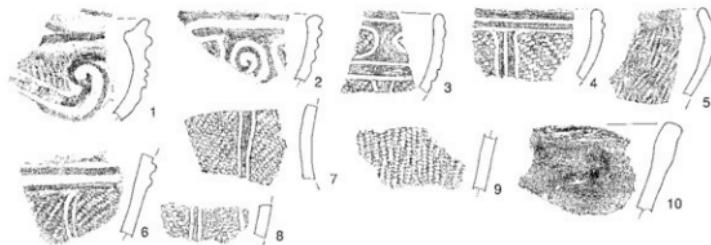
17は土器片錐。縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。18は小形磨製石斧の刃部のみ欠損する欠損品。19は黒墨石製の石鎚。表裏面とも丁寧な調整削離を施す。

土坑SK184出土遺物 (Fig.179-1~7)

土器片が出土している。1は口唇部が肥厚する深鉢。口唇部に凹帯が巡る。2は口縁部が内湾し、口唇部が肥厚する。口縁直下から縄文が施文される。3は口縁部上端が沈線区画によって狭小な無文帶となる。4・6は縄文を地文に2もしくは3本一組の沈線による懸垂文を垂下させる。5は縄文を地文に3本一組の磨消沈線による区画文。加曾利E1式。



SK175(2) (9~11)



SK176(1~10)



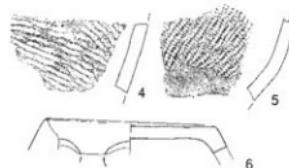
SK178(1・2)



SK179(1・2)



SK180(1~6)



SK181(1~7)

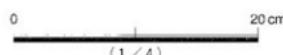
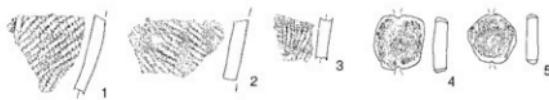


Fig. 177 土坑SK175(2)・176・178・179・180・181出土遺物



SK182(1~5)

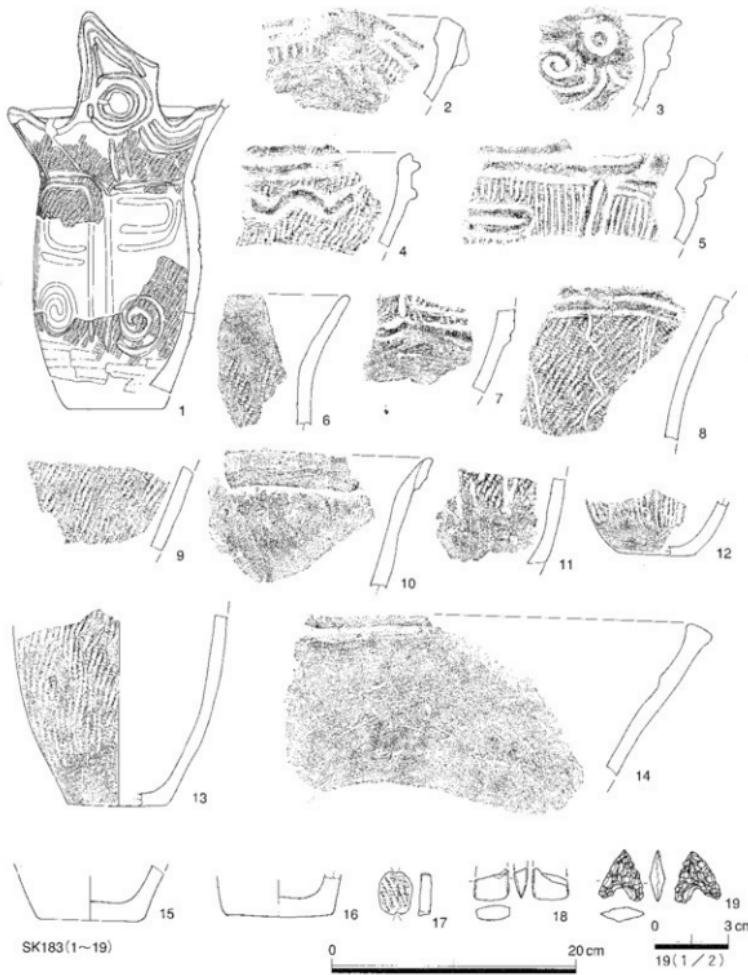


Fig. 178 土坑SK182・183出土遺物

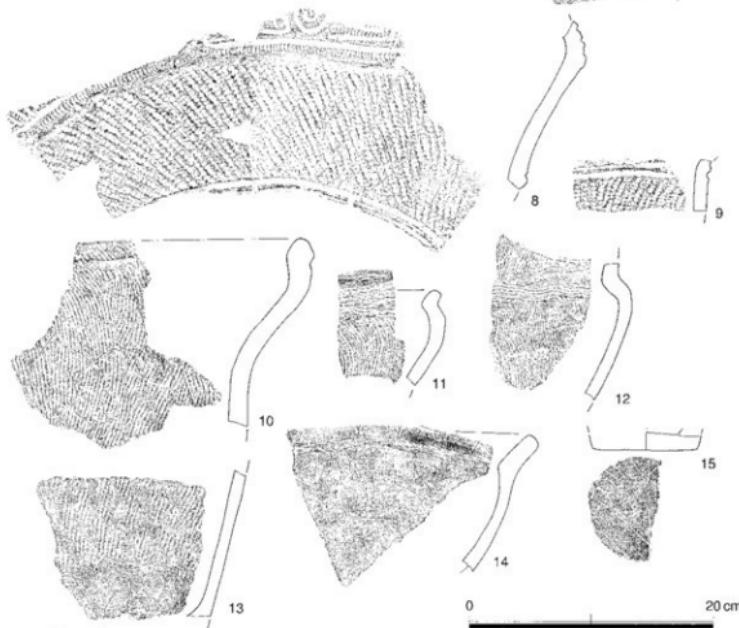
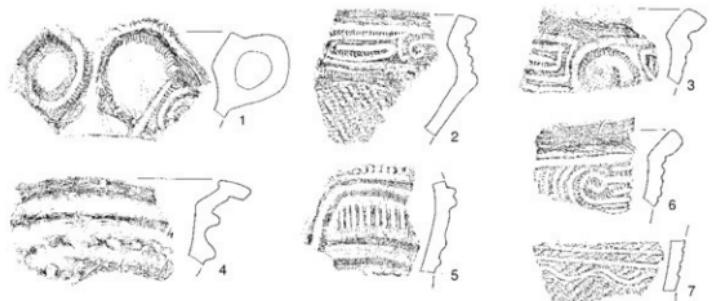
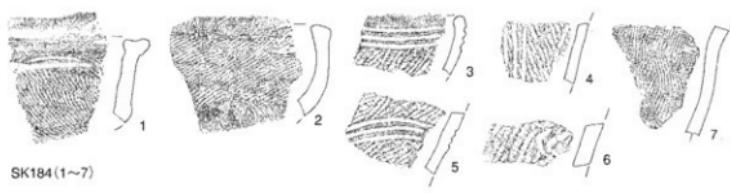


Fig. 179 土坑SK184・185出土遺物

土坑SK185出土遺物 (Fig.179-1~15)

土器片が出土している。1は眼鏡状把手の破片。縁辺に沿って刻目のある隆帯が巡り、隆帯に沿って沈線が施されている。2・3・6・8は同一個体。口縁部上端は僅かに外反して無文帶となり、口縁部は刻目のある隆帯による渦巻文と柵状区画文内に沈線文を充填する。頸部は繩文を地文とし、沈線によって区画される。4は口唇部が肥厚し、口縁部は外反する。指頭圧痕が施された波状隆帯が渦巻状に貼り付く。5は背割り隆帯による柵状区画内に綾列の沈線を充填する。7・9は繩文を地文に沈線による区画文。10は口縁部が内湾気味に立ち上がる。口唇部は肥厚し、内削状となり、口縁直下から繩文が施文される。11・12は同一個体。口縁部は内溝して端部で小さく外反する。口縁直下から口縁部は横位の波状に、脣部は綾位に条線文を施文される。14は口縁部が外反する浅鉢。内面に稜を有する。15は深鉢の底部破片。木葉痕を残している。加曾利E1式。

土坑SK186出土遺物 (Fig.180-1~11)

土器片と土器片錐1点、磨石1点が出土している。1はキャリバー形の深鉢。沈線が沿う隆帯による渦巻文と柵状区画文を施文する。脣部文様帯は懸垂文の間を磨消したもので、直行懸重文と蛇行懸垂文が交互に施文されている。2は單口縁の深鉢。口縁直下は無文帶となり、繩文を地文に平行沈線を垂下させる。3は繩文を地文に沈線による区画文と意匠文。4は沈線が沿う隆帯区画文。5・7は3本一組の懸垂文が垂下する。9は口縁部が外反する浅鉢。加曾利E2式。

10は土器片錐。綫長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。11は安山岩製の磨石。表裏面とも凹孔部を有する。両面とも使用痕は顕著である。

土坑SK187出土遺物 (Fig.180-1・2)

土器片が出土している。1は円孔を伴う山形把手の破片。沈線文を施文する。2は繩文を地文に3本一組の磨消懸垂文を垂下させる。加曾利E2式。

土坑SK188出土遺物 (Fig.180-1~12・Fig.181-13~22)

土器片と土器片錐6点が出土している。1は波状口縁を有する深鉢。口唇部は肥厚し、口縁直下から単節LR繩文を施文する。2はキャリバー形の深鉢胴上半分の破片。頸部で沈線による区画文が巡り。胴部は3本一組の懸垂文間を磨消した磨消懸垂文と蛇行懸垂文を垂下させる。3はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。口縁部上端は狹小な無文帶となり、隆帯による渦巻文と柵状区画文を施文し、区画内には弧状沈線を充填する。4は深鉢の頸部付近の破片。沈線の沿う隆帯が区画文となる。5・6・9は2もしくは3本一組の懸垂文間を磨消した磨消懸垂文を垂下させる。7は繩文を地文に磨消懸垂文を垂下させる。8は繩文を地文に振幅の短い蛇行沈線文と直行懸垂文を垂下させる。12は口縁部が外傾する浅鉢。内外面に赤彩が認められる。13は口唇部が肥厚し、口縁下端が迫り出す浅鉢。口唇部は折り返しとなる。14~16は深鉢の底部破片。加曾利E1式。

17~22は土器片錐。いずれも縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK189出土遺物 (Fig.181-1~22)

土器片が出土している。1・2は深鉢の口縁部破片。口唇部が肥厚し、沈線の沿う隆帯による楕円形区画文を配する。区画内は綾列の沈線を充填させる。3は波状口縁の深鉢。口縁に沿って刻目の施された隆帯と繩文が施文された隆帯が橋状把手となる。4は扇状把手。半内彫り状の連U字状区画内に斜行沈線を充填する。5は口縁部が肥厚し無文帶で、交互刺突文がX向文となる。6は無文地の深鉢で、口唇部からY字状隆帯が垂下する。7は肥厚する狹小な口縁部が無文帶となり、綾位の条線文が施文される。8は口縁部が内湾気味に立ち上がる塊状を呈する鉢。内面に稜を有し、口唇部から口縁内面にかけ粘土紐によるU字状隆帯が貼り付けられる。9は三山の小突起を有する深鉢。口縁部が肥厚する。10は口唇部が肥厚し、縁部に指頭による押圧が加えられ、波状となる。11は口唇部が折り返され肥厚する。無文地の深鉢。12は單口縁の深鉢。口縁直下から羽状

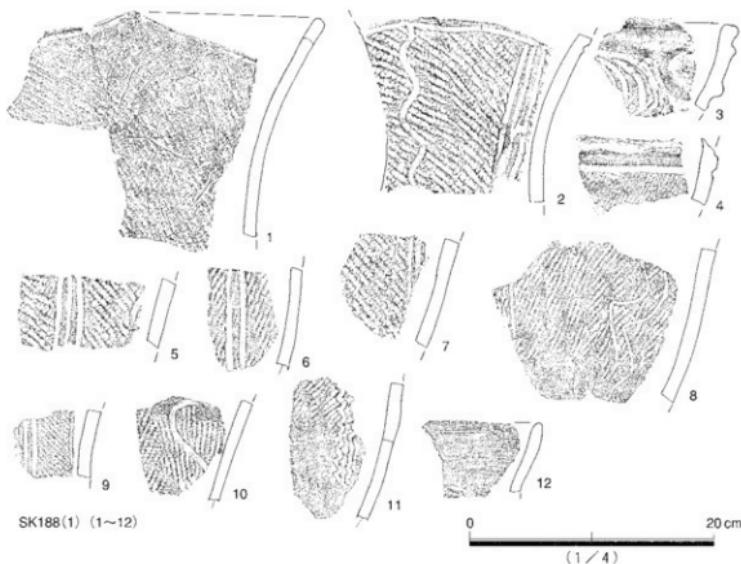
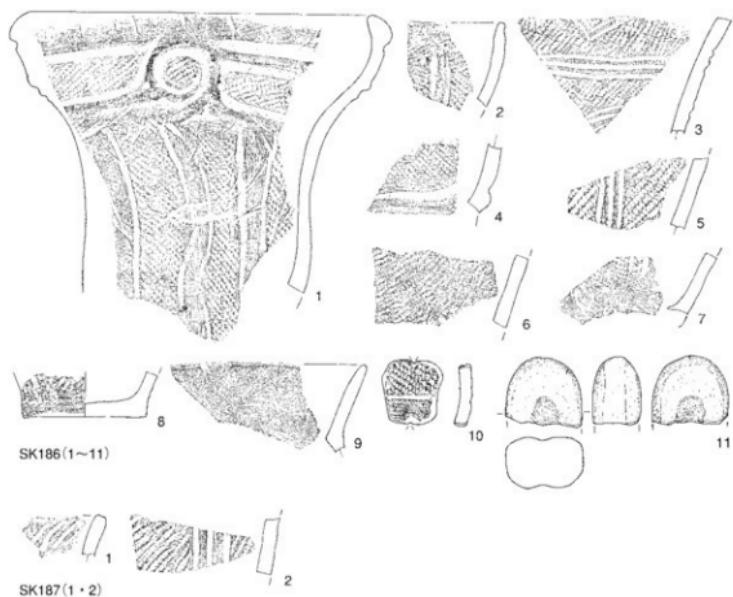


Fig. 180 土坑SK186・187・188(1)出土遺物

縄文が施文される。13は縄文を地文に沈線による渦巻文が施文される筒状の深鉢。16～20は深鉢の底部破片。16は木葉痕を残している。21・22は浅鉢の口縁部破片。21は口唇部が肥厚し、沈線による渦巻文と棹状文。内外面に赤彩が認められる。22は口縁部が大きく外反する。外面に赤彩が認められる。加曾利E1式。

土坑SK190出土遺物 (Fig.182-1～20)

土器片と土製円盤1点、土器片鍤2点、磨石1点、円石1点が出土している。1はX字状を呈する楕円形隆帯区画内に単列の角押文と2条の波状沈線を施文する。2は深鉢の口縁部破片。内面に稜を有する。狭小な口縁部に角押文が区画文となる。3は口縁部端が僅かに外反する筒状深鉢。縄文を地文に3もしくは4本・組の懸垂文が垂下する。5は胴下部の破片。縄文を地文に2条の沈線が沿う降帯を垂下させる。6は降帯区画文を持つ深鉢の胴部破片。7・8は縄文を地文に2もしくは3本・組の沈線及び蛇行沈線による懸垂文を垂下させる。7は大形の深鉢となろう。9は磨消済垂文が垂下する。11は櫛齒状工具による条縫を蛇行垂下させる。

16は土製円盤。17・18は土器片鍤。縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。19は安山岩製の磨石。半分を欠損している。表面及び側面の使用痕は顕著である。また凹孔部が両面中央にある。20は繩文母片岩製の円石の破片。

土坑SK191出土遺物 (Fig.182-1)

土器片が出土している。深鉢の胴部破片。縦位の条縫文を地文とする。加曾利E式。

土坑SK192出土遺物 (Fig.182-1)

土器片が出土している。無文の小破片のみ。浅鉢である。加曾利E式。

土坑SK193出土遺物 (Fig.182-1～6)

土器片が出土している。1は波状口縁の深鉢。波頂部に渦巻文を配し、口縁部には縦列の沈線を充填する。2は口唇部に凹帯が巡り、口縁直下より縄文が施文される。3は単口縁の筒状深鉢。口縁部上端は狭小な無文帯をなす。4は隆帯による渦巻文。5は縄文を地文に2本・組の沈線および蛇行沈線による懸垂文を垂下させる。加曾利E1式。

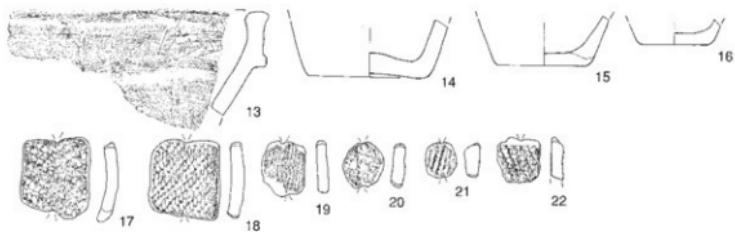
土坑SK194出土遺物 (Fig.183-1～4)

土器片が出土している。1はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。沈線の沿う隆帯による区画文を施文する。2は口縁部が内湾する単口縁の深鉢。3は縄文を地文に2本・組の沈線による懸垂文を垂下させる。加曾利E1式。

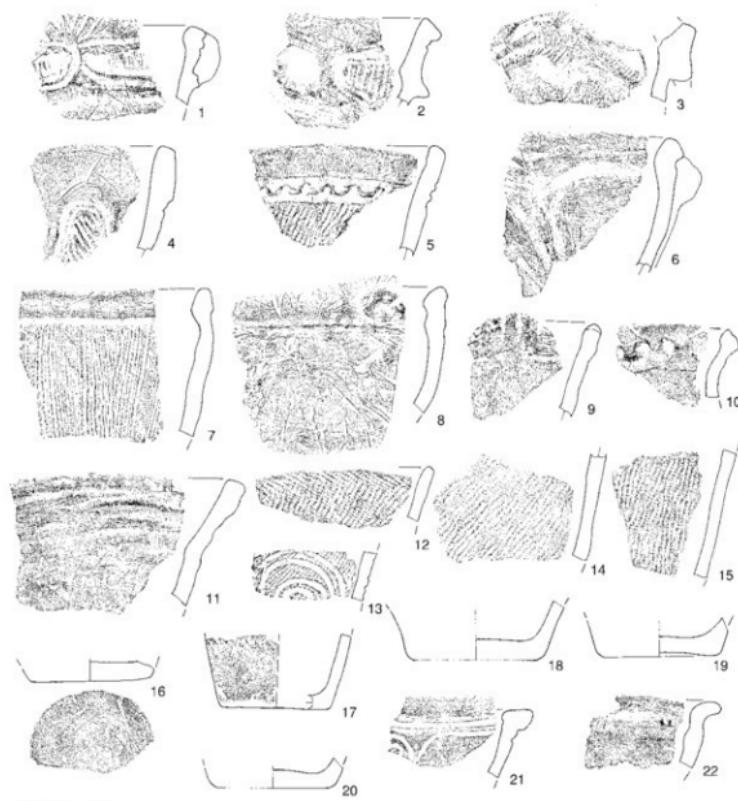
土坑SK195出土遺物 (Fig.183-1～13)

土器片と土器片鍤2点が出土している。1・2・4は口縁部が内湾気味に聞く深鉢。口唇部は肥厚し、沈線区画内に交差刺突文が施文され、刻目の施された隆帯による4単位の渦巻文が突起状に配される。頸部は無文帯をなし、沈線によって区画される。3・5は口縁部が外反し、胴部が内湾する深鉢。口唇部は肥厚し、縦位の刻目が巡り、口縁部は無文帯となる。胴部は沈線区画に、単沈線が充填される意匠文が配される。6は無文地の深鉢。頸部以下の土器。7は羽状縄文が施文された深鉢の胴部破片。8～10は浅鉢。8は口縁内側に稜を持つ。9は口唇部に2条の凹帯が巡る。10は内面に稜を有する。内外面に赤彩が施されている。加曾利E1式。

12・13は土器片鍤。いずれも縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。



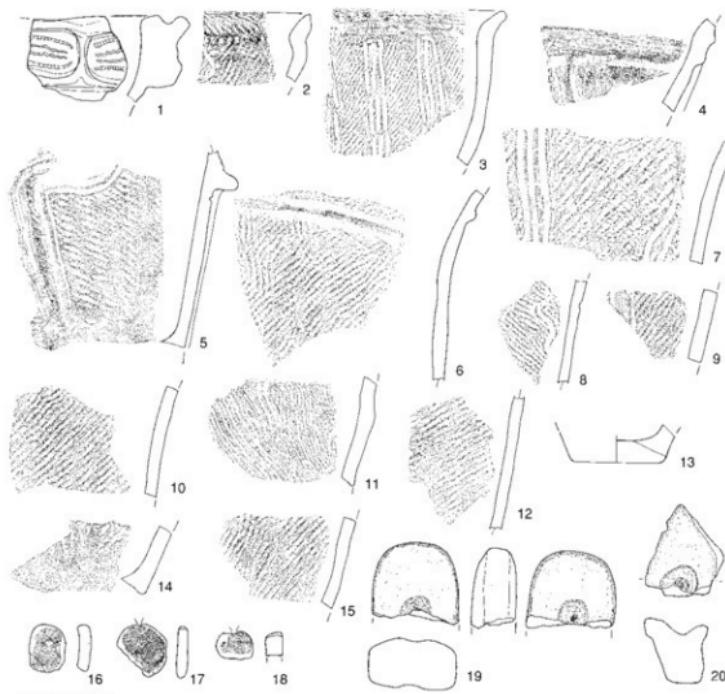
SK188(2) (13~22)



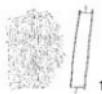
SK189(1~22)

0 20 cm
(1 / 4)

Fig. 181 土坑SK188(2)・189出土遺物



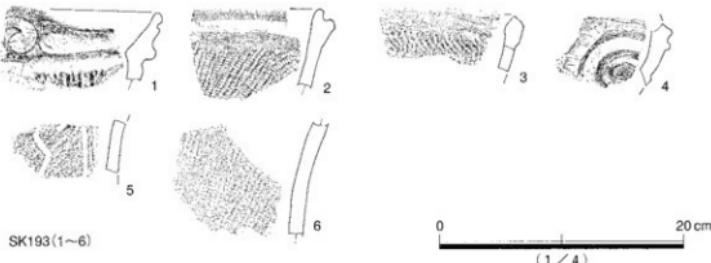
SK190(1~20)



SK191(1)



SK192(1)



SK193(1~6)

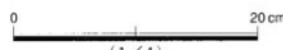


Fig. 182 土坑SK190・191・192・193出土遺物

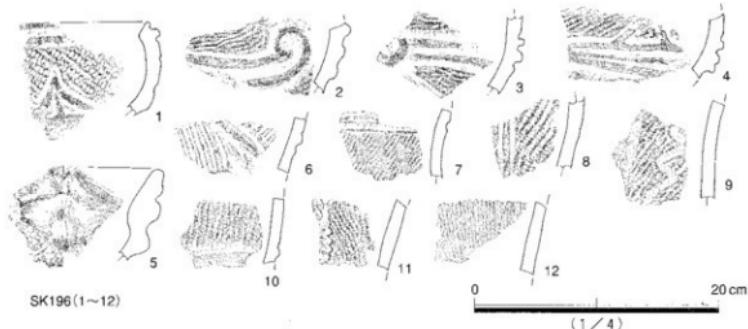
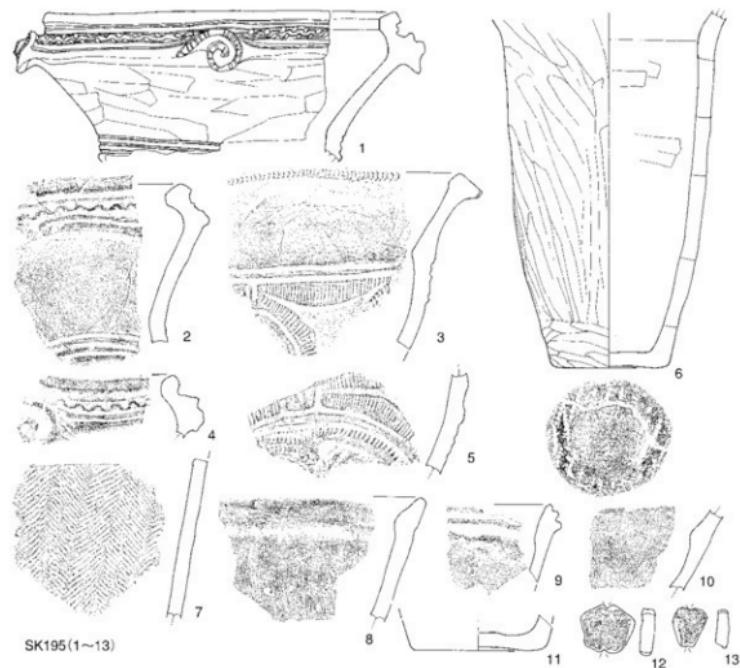
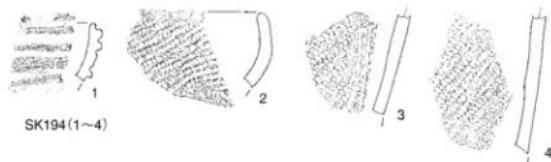


Fig. 183 土坑SK194・195・196出土遺物

土坑SK196出土遺物 (Fig.183-1~12)

土器片が出土している。1~6はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。1は沈線が沿う隆帯による縦位の刻先文を施文する。2~4は背割り隆帯による渦巻文と区画文を施文する。5は波状口縁の深鉢。指頭圧痕の施された隆帯が波頂部から垂下する。6は区画内に縦列沈線を充填する。7は沈線区画文。8・9・11は縦文を地文に2本一組の沈線及び蛇行沈線による懸垂文を垂下させる。12は縦位の条線文を地文とする。加曾利E1式。

土坑SK197出土遺物 (Fig.184-1~13)

土器片と土器片錐2点が出土している。1は山形把手を持つ深鉢で、波頂部に環状把手を有する。口唇部に沿って縄文が施文された隆帯が巡り、波頂部から蛇行隆帯が垂下する。2は円孔を伴い波状口縁の深鉢。波頂部は隆帯による渦巻文が施されている。3はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。沈線が沿う隆帯による渦巻文と棹状区画文を施文する。4・6~8は縦文を地文に2もしくは3本一組の沈線による懸垂文を垂下させる。5は深鉢の胴部破片。刻目のある隆帯区画文内に沈線を充填する。9~11は浅鉢。9・10は内面に稜を有し、口縁部が僅かに外反する。外面に赤彩が残存している。11は体部が内湾気味に立ち上がる。加曾利E1式。

12・13は土器片錐。縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK198出土遺物 (Fig.184-1・2)

土器片が出土している。1は口唇部が肥厚する深鉢。口縁部は狭小な無文帯で、交互刺突文が区画文となる。2は単節RL縄文の横位施文を地文とする深鉢底部付近の土器。加曾利E1式。

土坑SK199出土遺物 (Fig.184-1~7)

土器片が出土している。1は口縁部がわずかに内湾する連弧文土器。撲糸Lを地文に沈線による円形文。3・4は3本一組の懸垂文間を磨消した磨消懸垂文を垂下させる。5は縦文を地文に2もしくは3本一組の沈線による懸垂文を垂下させる。6は条線を地文に貼付による蛇行隆帯を垂下させる。7は口縁部が僅かに内湾する浅鉢。外面に赤彩が残存している。加曾利E2式。

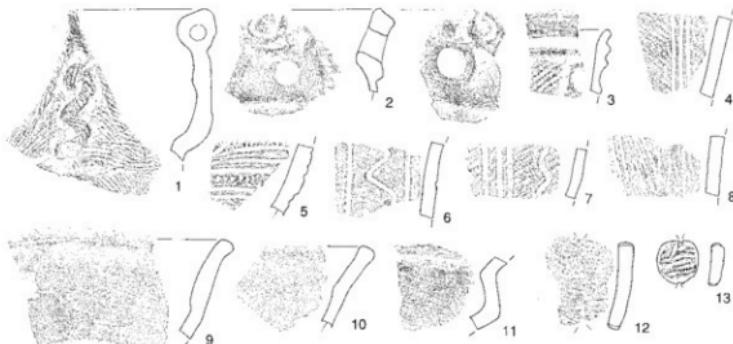
土坑SK200出土遺物 (Fig.184-1~7)

土器片が出土している。1は縦文を地文に、縄文が施文された隆帯区画に沿って角押文が施されている。2・4・5は同一個体である。4は口縁部が無文帯とし、交互刺突文を区画文に、円形隆帯区画に沿って刻目が施され、区画内に単沈線が刻まれた隆帯が配される。3は波状口縁の深鉢。波頂部に円孔を伴い、口唇端部には刻目が施されている。6はキャリバー形の深鉢。沈線が沿う隆帯による渦巻文が施文される。7は深鉢の底部破片。加曾利E1式。

土坑SK201出土遺物 (Fig.185-1~19)

土器片と土器片錐2点が出土している。1は波状口縁を呈し、内面が鈎状に突出している深鉢。口唇部は角押文による渦巻文。口縁部は刻目のある2列の隆帯区画文に、2列の角押文が垂下し、隆帯に沿って施文されている。内面の鈎状部分には沈線意匠。2は狭小な口縁部が外側へ突き出す深鉢。縦文を地文に平行沈線を巡らす。3・4・7はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。3は波状口縁を呈し、波頂部は太沈線による渦巻文で、ここから3本の貼付隆帯を垂下させ、口縁部は背割り隆帯による渦巻文と棹状区画文を施文する。4は波状口縁で渦巻文が波頂部に付く。5は外反する口縁部が無文帯となり、交互刺突文による区画文。6は口縁部が内湾する深鉢。狭小な口縁部は無文帯で、交互刺突文が区画文となる。区画内は縦列沈線が充填される。8は口縁部に幅狭な無文帯を有する。9は口縁部が無文帯で、縦文が施文された低い隆帯による渦巻文。10は隆帯区画。11~14は縦文を地文に2もしくは3本一組の沈線による直行懸垂文と蛇行懸垂文を垂下させる。15は無文地に半截竹管工具による平行沈線を蛇行垂下させる。17は深鉢の底部破片。加曾利E1式。

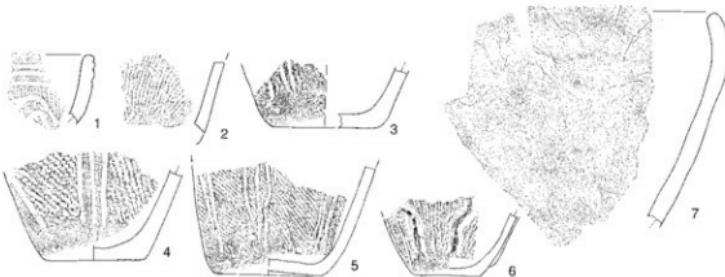
18・19は土器片錐。縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。



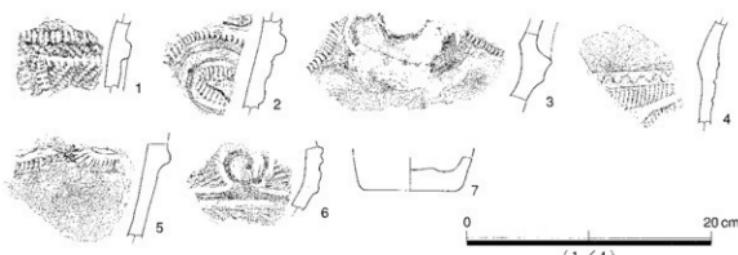
SK197(1~13)



SK198(1・2)



SK199(1~7)



SK200(1~7)

Fig. 184 土坑SK197・198・199・200出土遺物

18・19は土器片鉢。縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK202出土遺物 (Fig.185-1・2)

土器片が出土している。1は縄文が施された深鉢。単節RL縄文。2は無文の深鉢。加曾利E式。

土坑SK203出土遺物 (Fig.185-1~24)

土器片が出士している。1・3・6・7はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。沈線が沿う隆帯による渦巻文と棒状区画文を施す。2は単口縁の深鉢。口縁は貼付隆帯による楕円形文を配し、胴部は縄文を地文。4は口縁部が短く外反し、無文帯となり、隆帯区画内は綴列の沈線を充填する。5は折り返し口縁で、下端部は指頭押圧が施されている。胴部は斜行する条線。8・9は深鉢の頭部破片。沈線が沿う隆帯区画。10は口縁部が無文帯となり、沈線による区画文。11は縄文を地文に平行沈線による意匠文。12~17は縄文を地文に2もしくは3本・組の沈線による懸垂文で、12・13は懸垂文間を磨消した磨消懸垂文を垂下させる。18~20は逆弧文土器。18・20は撲糸L、19は単節RL縄文を地文とする。24は深鉢の底部破片。加曾利E1式。

土坑SK204出土遺物 (Fig.186-1~30・Fig.187-31~60)

土器片と土器片錠7点が出士している。1は底部を欠損する深鉢で、胴部は直線的に外傾して立ち上がり、口縁部は外反して聞く。頭部は背割り隆帯による5単位の突出する渦巻文を施す区画文。口縁部、胴部の地文は単節RL縄文を綴位施す。2は口縁部が鉤状に迫り出す深鉢。口縁部縁辺は刻日のある隆帯区画文で、縄文を地文に沈線による渦巻文と区画文を施す。3は刻日の施された隆帯区画内に沈線を充填する。4は波状口縁の深鉢。狹小な口縁部は単沈線が施され、肥厚する。5・7~11・20・21・24~26・28・31・32キャリバー形の深鉢の口縁部破片。5・7~9は背割り隆帯による渦巻文と棒状区画文を施す。6は口唇部が肥厚する深鉢。口唇部に刻日と交瓦刺突文が施される。10は口唇部が肥厚し、背割り隆帯による棒状区画文の区画下は隆帯区画文。11は隆帯による棒状区画内に綴列の沈線を施す。12は口縁上端が狭小な無文帯となり、下部の背割りとなる隆帯区画内は綴列の沈線を充填する。13は1と同じく頭部区画文が突出する渦巻文を伴う背割り隆帯。14・27は口縁部が狭小な無文帯で肥厚する。口縁直下から綴位の条線を施す。15は口縁部が内済し、上端部でわずかに外反する深鉢。口縁は狭小な無文帯となり、交瓦刺突文が区画文で、区画内は綴列の沈線が施される。16は波状口縁で、波頂部は渦巻文により突出する。口縁部は縄文を地文に背割り隆帯による区画文。17は波状口縁の深鉢。波頂部に縄文を地文の背割り隆帯による渦巻文。18は口唇部が肥厚し、凹筋が巡り、口縁上端は狭小な無文帯で、太沈線によって区画される。19は大形の橋状把手。縁辺は沈線が沿う隆帯区画文に沈線を充填する。20は口唇部に凹帶を巡らし、隆帯区画文。21は波状口縁の深鉢。縄文を地文に隆帯に沿って2条の沈線が施される。22は口縁部が狭小な無文帯となり、肥厚する。胴部は蛇行条線文。23は口縁部が僅かに内済する小形の深鉢。口縁直下から縄文を施す。24は波状口縁の深鉢。背割り隆帯による区画文。25・26は隆帯と背割り隆帯による区画文。28は背割り隆帯による渦巻文と区画文内に綴列の沈線を充填する。29・30は同一個体。筒状深鉢の胴部破片。口縁部は無文帯で、隆帯区画され、縄文を地文に沈線意匠文。31・32・37・40・42は縄文を地文に2もしくは3本・組の懸垂文が垂下する。31・32は頭部に隆帯区画文を持つ。33・34は沈線区画内に綴列の沈線を充填する。37は縄文を地文に2本・組の沈線による懸垂文を垂下させる。35は縄文を施した隆帯区画文。36は隆帯懸垂文で、条線を地文とする。41は蛇行条線を地文とする深鉢。43は深鉢の胴下半部の破片。縄文を地文に平行沈線を区画文とする。49は口縁部が無文帯となるキャリバー形の深鉢。口唇部に凹帶による渦巻文を施す。50~52は浅鉢の口縁部破片。50は口縁部が内済し、内面に棱を有する。外面に赤彩が認められる。51は口縁部が外反して聞く。52は口唇部が肥厚し、外面上に赤彩が施されている。53は隆帯による区画文と意匠文が施された深鉢。加曾利E1式。

54~60は土器片錠。いずれも縦長破片であるが、54~59は長軸方向に、60は短軸方向に1対の切れ目を有する。

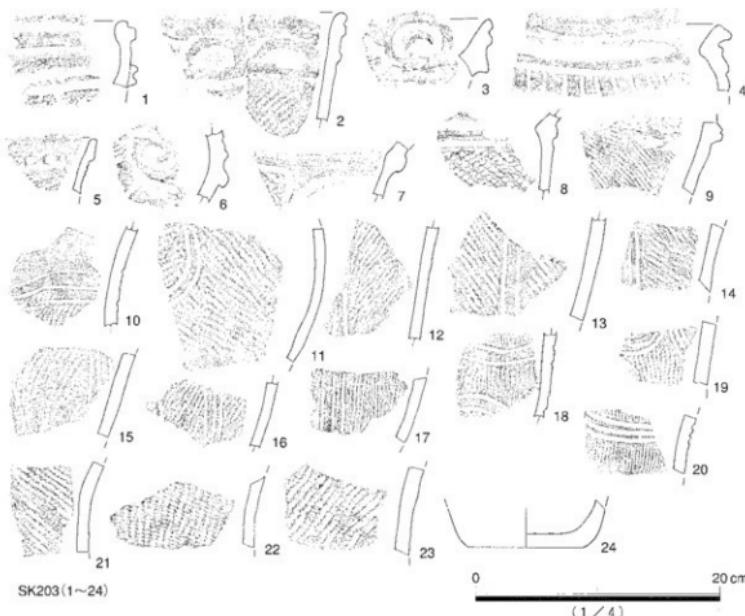
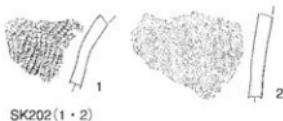
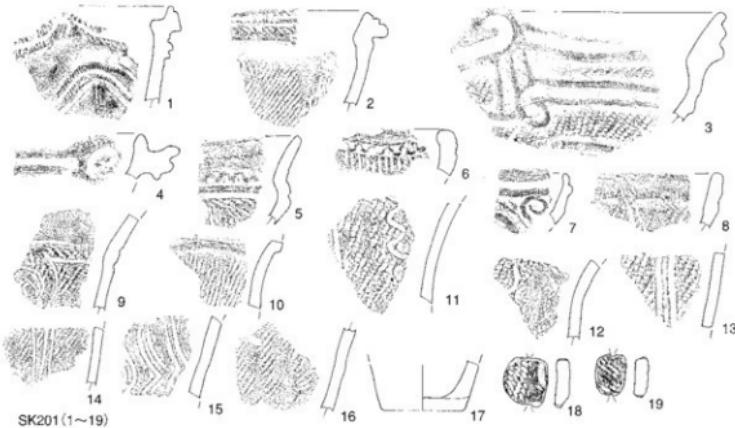


Fig. 185 土坑SK201・202・203出土遺物



SK204(1) (1~30)

(1/4)

Fig. 186 土坑SK204出土遺物(1)

土坑SK205出土遺物 (Fig.187-1~12)

土器片と土器片錐 5 点が出土している。1は口縁部が僅かに外反する深鉢。口縁は狹小な無文帯となり、Y字状隆帯を貼付、6本単位の櫛齒状工具による流水文を描出す。2は口縁部が肥厚し、無文帯となり、角押文による区画文。3は隆帯による楕円形区画文に沿って角押文が施文される。4は扇状把手の破片。隆帯に沿って2列の角押文による区画文を施文する。5は無文地に指頭押圧を加えた隆帯が垂下する。6は繩文を地文に断面三角形隆帯に沿って角押文が施文される。阿玉台II式。

8~12は土器片錐。いずれも縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK206出土遺物 (Fig.188-1~8)

上器片が出土している。1は口唇部が内削状を呈する深鉢。口縁部は刻日のある隆帯の楕円形区画内に交互刺突文を施し、縦列の沈線を充填する。2は口縁部が内湾する深鉢。沈線区画内に縦列の沈線を充填する。頸部は無文帯となる。3は波状口縁の深鉢。波頂部には渦巻文を配し、平行隆帯を垂下させる。4・5は浅鉢の口縁部破片。4は背割り隆帯が突出する渦巻文を施文する。内外面に赤彩が施されている。5も背割り隆帯が施されている。6はキャリバー形の深鉢。波頂部には渦巻文を配し、平行隆帯を垂下させる。7は深鉢の頸部破片。繩文を地文に2本一組の沈線による崩落懸垂文を垂下させる。8は口唇部が肥厚し、凹帯が巡り、口縁部上端に隆帯が施文されている。加曾利E1式。

土坑SK208出土遺物 (Fig.188-1~17)

土器片と土器片錐 2 点が出土している。1は双頭状の把手を有する深鉢。口縁部に沿って隆帯上に單沈線が施文されている。2は單口縁の深鉢。沈線による方形区画文を垂下させる。3~5はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。沈線が沿う隆帯による枠状区画文を施文する。4の区画内は縦列沈線を充填する。7は背割り隆帯による渦巻文。8は繩文を地文に沈線区画文。9は隆帯に沿って沈線が施文されている。10・11・13は懸垂文間を磨消した磨削懸垂文を垂下させる。14は單口縁の深鉢。口縁部は内湾し、羽状繩文を施文する。15は口縁部がくの字状に外反する浅鉢。内外面に赤彩が施されている。加曾利E2式。

16・17は上器片錐。いずれも縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK209出土遺物 (Fig.188-1~7)

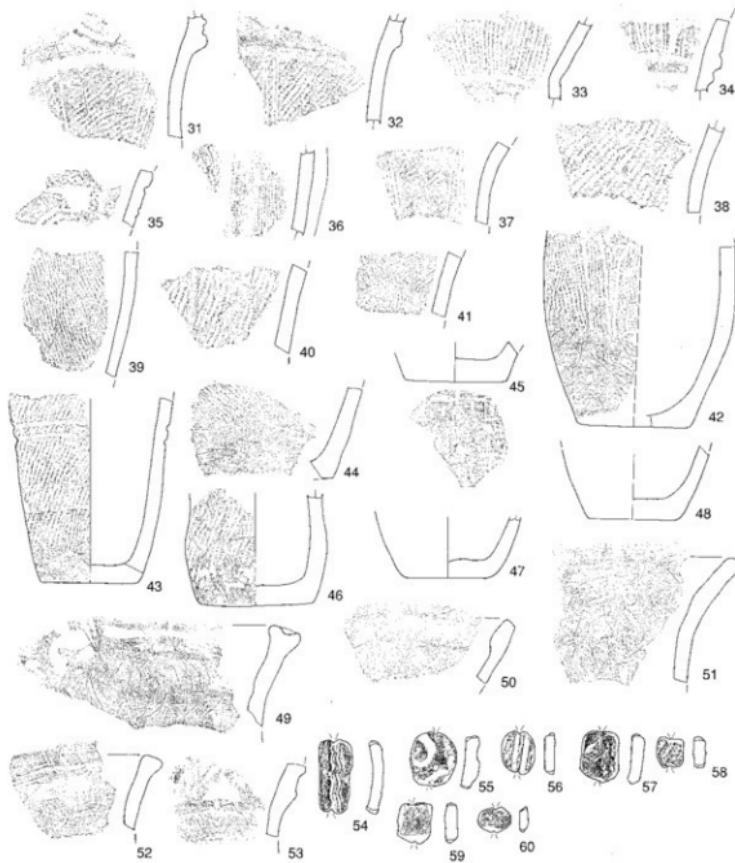
上器片と磨製石斧が出土している。1はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。沈線による渦巻文と枠状区画文を施文する。2は口縁部が肥厚し、狹小な口縁部は無文帯となる。3は横位に刻目が施された平行隆帯が垂下する。隆帯に沿って沈線が施文されている。4は隆帯に沿って沈線が施文されている。5・6は繩文を地文に2本一組の沈線による懸垂文を垂下させる。7は条線を地文とする。加曾利E2式。

刃部が欠損した磨製石斧が出土した (PL35-B、石斧類(1)~6)。

土坑SK210出土遺物 (Fig.188-1~8)

上器片と土器片錐 1 点が出土している。1は口縁部が僅かに外反する。狹小な口縁部は無文帯となり、交互刺突文が区画文となる。2は單口縁の小形深鉢。口縁部は無文帯となる。3はキャリバー形の深鉢。隆帯区画内には刻目の付く隆帯が施文されている。4は隆帯区画に沿って2列の角押文が施文されている。6は繩文を地文とする。隆帯に沿って沈線が施文されている。

8は土器片錐。縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。



SK204(2) (31~60)

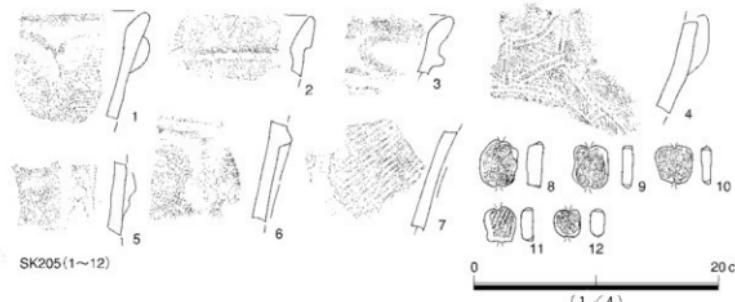
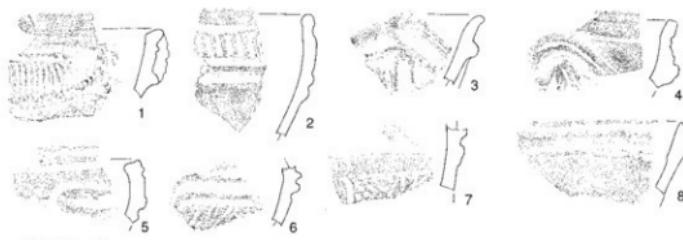


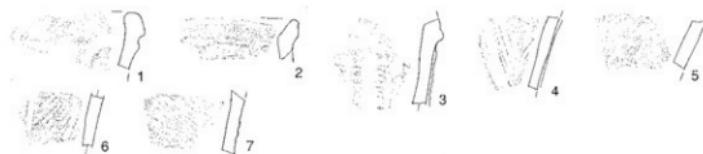
Fig. 187 土坑SK204(2)・205出土遺物



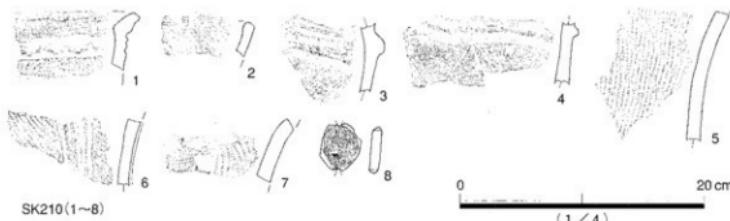
SK206(1~8)



SK208(1~17)



SK209(1~7)



SK210(1~8)

0 20 cm
(1 / 4)

Fig. 188 土坑SK206・208・209・210出土遺物

土坑SK211出土遺物 (Fig.189-1~12)

土器片と石皿1点が出土している。1は大形の山形把手。波頂部から垂下する隆帯上には刻目が施され、隆帯に沿って2列の角押文が施文されている。2は隆帯による枠状区画内に平行沈線が沿うように施文される。3・4は口唇部が肥厚し、平行する隆帯内は角押文が施文され、楕円形区画内は2列の角押文と波状文が施されている。5は弧状隆帯に沿って角押文が施文されている。6は山形把手の深鉢。波頂部から隆帯が垂下する。7は顎状に迫り出した隆帯に沿って、2列の角押文が施文されている。9は山形把手。縁辺の隆帯に沿って角押文が施文されている。10は浅鉢の口縁部破片。口縁は外反する。外面にわずかな赤彩が認められる。11は深鉢の底部破片。阿玉台II式。

12は安山岩製の石皿の欠損品。表面に作業面である凹み部が弓状に作出され、裏面に多量の凹孔部が穿ってある。

土坑SK212出土遺物 (Fig.189-1・2)

土器片が出土している。1は指頭圧痕が施された隆帯が垂下する。2は単節RL縄文が施文されている。

土坑SK213出土遺物 (Fig.189-1~9)

土器片が出土している。1・3はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。1は沈線区画文。3は交互刺突文と背割り隆帯による枠状区画内に綱列沈線を充填する。2は單口縁の深鉢。口縁部は無文帯となる。4は縄文を地文に3本一組の沈線による懸垂文を垂下させる。5は縄文を地文に沈線を懸垂する。8は綱位の条線文。9は浅鉢の体部破片。内面に沈線が巡り、赤彩が施されている。加曾利E式。

土坑SK215出土遺物 (Fig.190-1~5)

土器片が出土している。1はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。沈線の沿う隆帯による枠状区画文を施文する。2は蛇行隆帯を横走させる。3は口縁部を無文帯とし、交互刺突文を区画文とする。4は太沈線を垂下させる。加曾利E1式。

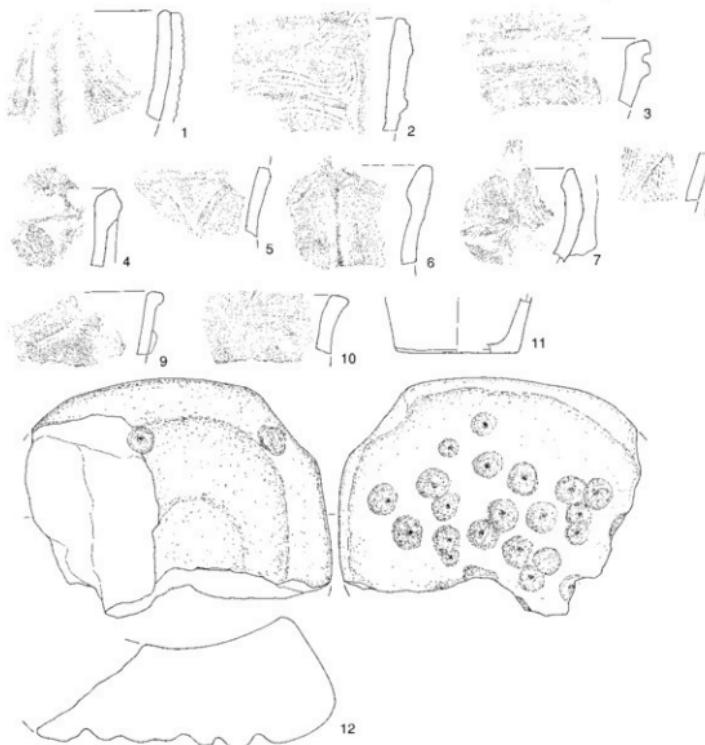
土坑SK216出土遺物 (Fig.190-1~8)

土器片が出土している。1は箱状把手を有する深鉢。縄文を地文に沈線による区画文。2は波状口縁を呈する深鉢。口唇部は肥厚し、隆帯に沿って爪形文が施文される。3も波状口縁の深鉢。口縁部は狹小な縄文帯で交互刺突文によって区画される。4は隆帯区画内に綱列沈線が充填される。5は縄文を地文に蛇行沈線。6は縄文を地文に2もしくは3本一組の沈線による懸垂文を垂下させる。加曾利E1式。

土坑SK217出土遺物 (Fig.190-1~29)

土器片と土器片錠3点が出土している。1は山形把手を有する深鉢。肥厚する口唇部で交互刺突文に連携する沈線が伸び、縁辺部に刻目が施されている。2は口唇部が肥厚し、口縁部は貼付隆帯による波状文。頭部は椭圓状工具による綱位の条線文。3も口唇部は肥厚し、縄文を地文に角押文によって区画される。4は口縁部が僅かに外反し、肥厚する。口縁直下より綱位の条線を施文する。5は口縁部に突出した渦巻文。6は縄文を地文に隆帯区画文。7は顎状に突き出した隆帯区画文。胴部には爪形文が施文される。8は背割り隆帯と交互刺突文による区画文。9は口縁部無文帯が肥厚する。10は縄文を地文に背割り隆帯による渦巻文。11・12は隆帯区画文。13は断面三角形隆帯に沿って沈線が施文される。15~18は縄文を地文に2もしくは3本一組の沈線による懸垂文を垂下させる。19は懸垂文間に磨消済垂文を垂下させる。25は口縁部がくの字状に外反する浅鉢。内外面とも赤彩が認められる。26は口唇部が肥厚する浅鉢。内面に縫を有する。赤彩がわずかに残存している。加曾利E1式。

27~29は土器片錠。綫長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。



SK211(1~12)



SK212(1・2)

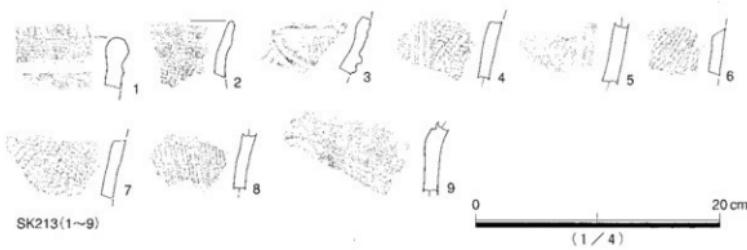


Fig. 189 土坑SK211・212・213出土遺物

土坑SK218出土遺物 (Fig.191-1~10)

土器片が出土している。1は波状口縁の深鉢。波頂部を中心に沈線による意匠文を施文する。2も波状口縁の深鉢で、口縁部は無文帯となり交互刺突文に区画され、さらに背割り隆帯による楕円形区画文が配される。区画内は継位の沈線を充填する。3も波状口縁の深鉢。波頂部は肥厚し、口唇部に凹帯が巡る。4は口唇部が外削状で狹小な無文帯を持つ。内面に稜を有する。5は単口縁の深鉢。口縁直下より繩文が施文される。6は沈線と交互刺突文が施文される。7は沈線による円形文に単沈線が施文される。8は連弧文土器。地文は撫糸Rが施文されている。9・10は深鉢の底部破片。加曾利E1式。

土坑SK219出土遺物 (Fig.191-1~14)

土器片が出土している。1は大形の扇状把手の破片。地文に繩文を有し、把手部の区画文内に横位の単沈線を充填させる。2は平縁の深鉢。口縁部に沿って沈線区画文が施文され、区画内に単沈線を継列に施す。3・4はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。沈線が沿う隆帯による棒状区画文を施文する。5は深鉢の側部破片。結節繩文を継位に施文する。6も深鉢の側部破片。繩文を地文に貼付隆帯を垂下させ、沈線を沿える。7は繩文を地文に3本一組の沈線による懸垂文を垂下させる。9は繩文を地文に2本一組の沈線による磨消懸垂文を垂下させる。11・12は条縞が地文の深鉢。13・14は深鉢の底部破片。加曾利E1式。

土坑SK220出土遺物 (Fig.191-1~15)

土器片が出土している。1は波状口縁を呈する深鉢。波頂部に深い沈線による渦巻文が施文され、内面にも沈線による渦巻文が施されている。2は橈状把手を有する波状口縁の深鉢。繩文を地文に沈線による楕円形区画文と、3本一組の磨消懸垂文が垂下する。3は波状口縁の深鉢。口縁部上端は狹小な無文帯をなし、沈線による方形区画文。4も波状口縁。繩文を地文に軸狭い逆U字状懸垂文を垂下させる。5は口縁部が重直気味に立ち上がる。沈線が沿う低隆帯による楕円形区画内に継位の条縞が充填される。7は隆帯の一部が剥離している。沈線が沿う隆帯による渦巻文と棒状区画文。地文に撫糸Rが施文されている。8は橈状把手の破片。隆帯による渦巻文が施文され、赤彩が認められる。9~11は繩文を地文に2もしくは3本一組の沈線による懸垂文を垂下させる。9・11は3本一組の懸垂文間を磨消した磨消懸垂文を垂下させる。12は櫛齒状工具による蛇行条線文を垂下させる。15は浅鉢の底部付近の破片。外面に赤彩が認められる。加曾利E2式。

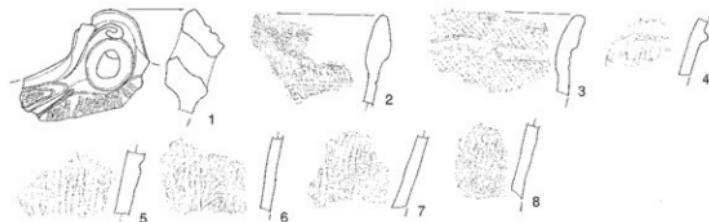
土坑SK221出土遺物 (Fig.192-1~11)

土器片と土器片錐1点が出土している。1は口唇部が肥厚し、凹帯が巡る。口縁は沈線区画。2は口縁部が内湾する深鉢。口縁部には斜行する沈線文。頸部は無文帯となる。3はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。沈線が沿う隆帯による棒状区画文を施文する。4・5は繩文を地文に2本一組の沈線及び蛇行沈線による懸垂文を垂下させる。5は懸垂文間を磨消した磨消懸垂文である。7・8は充鉢の口縁部破片。7は内面に明瞭な稜を有する。8も口縁部は肥厚し、内面に稜をもち、内外面に赤彩が認められる。加曾利E1式。

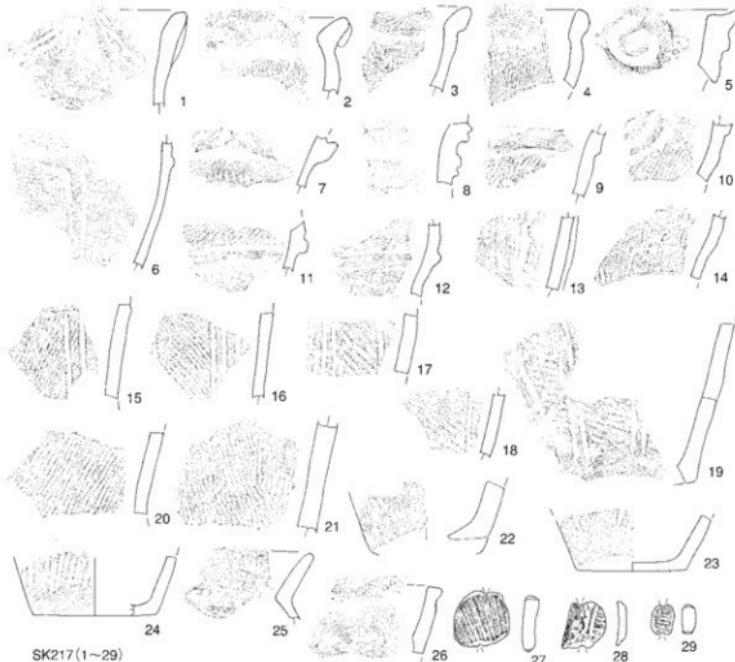
11は土器片錐。縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。



SK215(1~5)



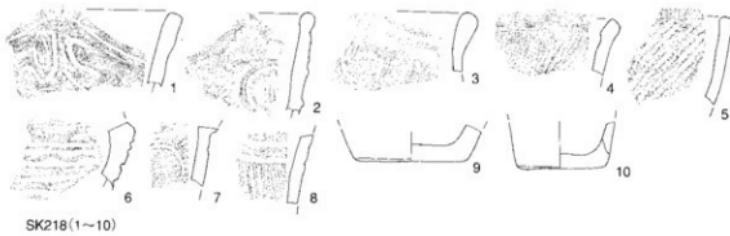
SK216(1~8)



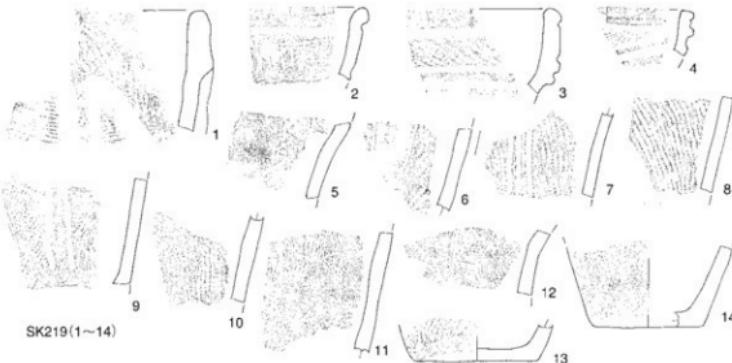
SK217(1~29)

0 20 cm
(1/4)

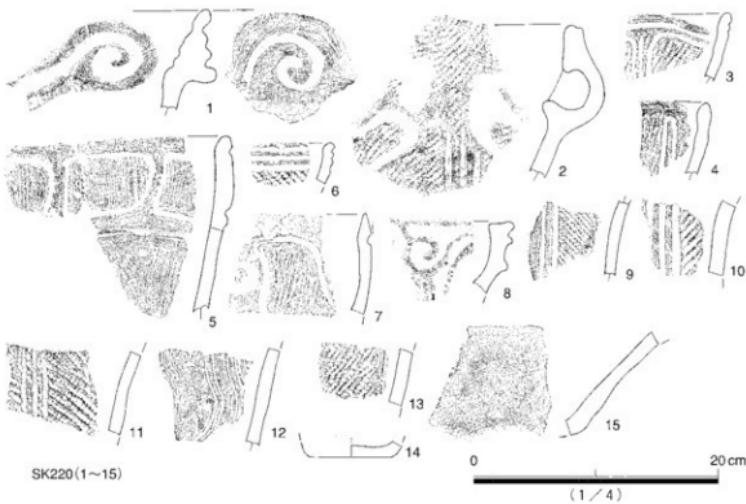
Fig. 190 土坑SK215・216・217出土遺物



SK218(1~10)

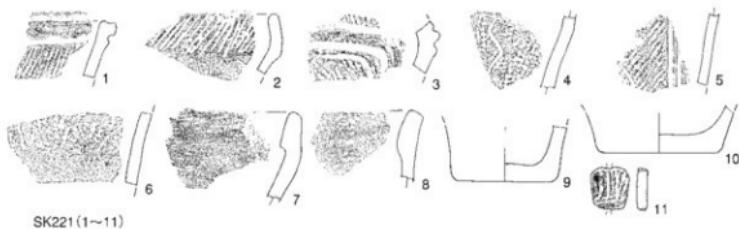


SK219(1~14)

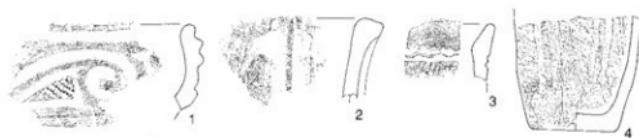


SK220(1~15)

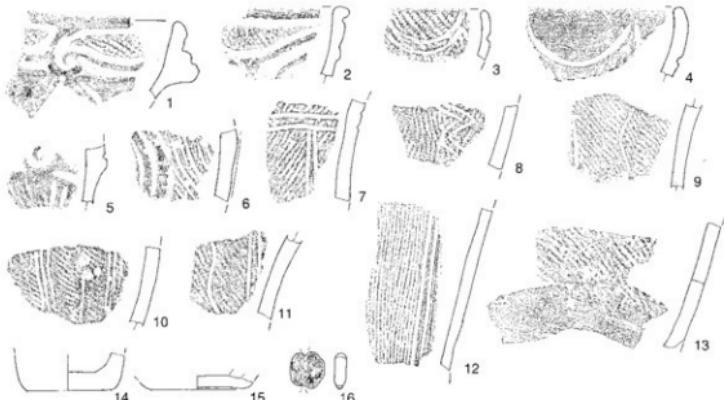
Fig. 191 土坑SK218・219・220出土遺物



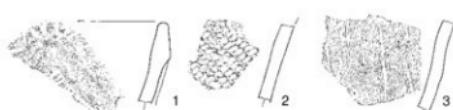
SK221(1~11)



SK223(1~4)



SK226(1~16)



SK227(1~3)

0 20 cm
(1 / 4)

Fig. 192 土坑SK221・223・226・227出土遺物

土坑SK223出土遺物 (Fig.192-1~4)

土器片が出土している。1はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。背割り隆帯による渦巻文と衿状区画文を施文する。2は口唇部が肥厚する波状口縁の深鉢。隆帯区画内に隆帯が垂下する。3は口縁部が無文帶となる深鉢。交瓦刺突文が区画文となる。4は深鉢の胴下半部の破片。縄文を地文に、懸垂文の間を磨消した磨削懸垂文を垂下させる。加曾利E1式。

土坑SK226出土遺物 (Fig.192-1~16)

土器片と土器片錐1点が出土している。1・2はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。沈線が沿う隆帯による渦巻文と衿状区画文を施文する。1は突起上に渦巻文が施文されている。3は口縁部が内湾する深鉢。縄文を地文に2本一組の連弧文。4は口縁部が内湾する深鉢であろう。沈線による連弧文が施文されている。5はキャリバー形の深鉢の頸部破片。沈線が沿う隆帯による渦巻文を施文し、胴部は縄文を地文に磨削懸垂文を垂下させる。6は条線を地文に背割り隆帯による渦巻文。7~11は縄文を地文に2もしくは3本一組の直行沈線と蛇行沈線を懸垂文として垂下させる。12は撫糸地文に2本一組の沈線による懸垂文を垂下させる。14・15は深鉢の底部破片。加曾利E2式。

16は土器片錐。縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK227出土遺物 (Fig.192-1~3)

土器片が出土している。1は波状口縁の深鉢。波頂部に刻目を有し、幅広い隆帯による区画文。2は縄文が地文の胴部破片。3は櫛歯状工具による波状条線文を垂下させる。加曾利E1式。

土坑SK229出土遺物 (Fig.193-1~7)

土器片が出土している。1は口縁部がくの字状に外反し、体部が内湾する深鉢。口縁部は無文帶となり、頸部に沈線が沿う隆帯による渦巻文と楕円形区画文が施文される。2は縄文を地文に貼付隆帯による渦巻文。3は縄文を地文に隆帯区画。6は縦位の条線が地文の深鉢。7は口縁部がくの字状に外反する浅鉢。加曾利E1式。

土坑SK230出土遺物 (Fig.193-1~3)

土器片と土器片錐1点が出土している。1は前期後半・浮島III式の深鉢。波状貝殻文を施文する。2は早期条痕文系土器の深鉢破片。表裏面とも貝殻条痕文を施文する。胎土に多量の繊維を含む。

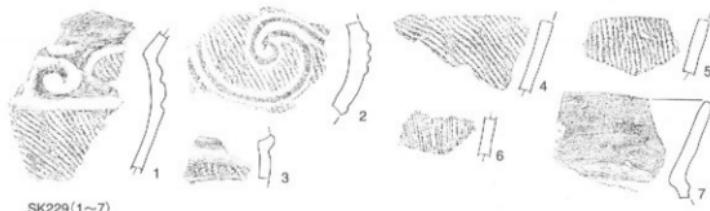
3は中期後半・加曾利E式期の土器片錐。縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK231出土遺物 (Fig.193-1~6)

土器片が出土している。1・2はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。沈線が沿う隆帯による渦巻文と衿状区画文を施文する。3は單口縁の深鉢。口縁直下から縦位の条線を施文する。6は口縁部が内湾する浅鉢。内外面に赤彩が施されている。加曾利E2式。

土坑SK232出土遺物 (Fig.193-1~7)

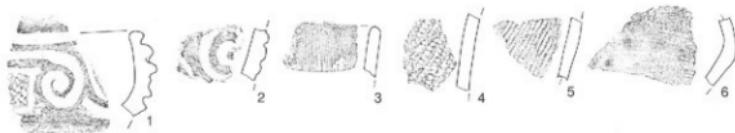
土器片が出土している。1は口唇部が肥厚し、沈線が巡る。狹小な口縁部は無文帶となり、交瓦刺突文により区画される。2も口唇部は肥厚し、狹小な口縁は無文帶となり、爪形文が施文される。3は縄文が施文された隆帯に沿って沈線が施されている。4~6は縄文を地文とする深鉢の胴部破片。7は口縁部がくの字状に外反する浅鉢。内外面に赤彩が施されている。加曾利E1式。



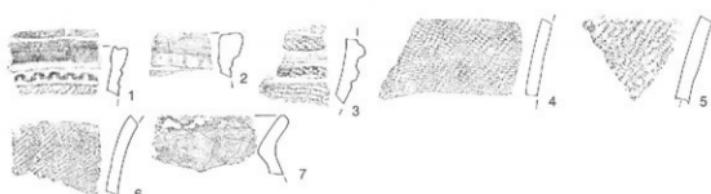
SK229(1~7)



SK230(1~3)



SK231(1~6)



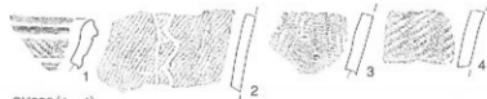
SK232(1~7)



SK233(1~4)



SK235(1)



SK238(1~4)

0
20 cm
(1 / 4)

Fig. 193 土坑SK229・230・231・232・233・235・238出土遺物

土坑SK233出土遺物 (Fig.193-1~4)

土器片と土器片鉢 1点が出土している。1は縄文を地文に2本一組の沈線による懸垂文を垂下させ、懸垂文の間を磨消している。2は深鉢の頸部破片。沈線による区画文で、無文帯を有する。加曾利E2式。

4は土器片鉢。縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK234出土遺物 (Fig.194-1~8)

土器片が出土している。1・2・4・6はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。1は沈線が沿う隆帯による渦巻文と棒状区画文を施文する。2・4も沈線が沿う隆帯による渦巻文と棒状区画文を施文する。6は波状口縁で、波頸部には渦巻文を配し、ここから背割り隆帯が垂下する。隆帯に沿って沈線が施文されている。3は口縁部が内湾する深鉢。口縁部は深い沈線によって作出された複位の隆帯と渦巻文。胴部は縄文が地文となる。5は口縁部が僅かに外反する深鉢。口縁部は無文帯となり、交互刺突文による区画文内が複列の沈線で充填される。7は深鉢の口縁部破片であるが、隆帯が剥離し、文様は不明である。加曾利E1式。

土坑SK235出土遺物 (Fig.193-1)

土器片が出土している。深鉢の胴部破片。浅い条線を複位に施文する。加曾利E式。

土坑SK238出土遺物 (Fig.193-1~4)

土器片が出土している。1はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。沈線が沿う隆帯による棒状区画文を施文する。2は縄文を地文に直行沈線と蛇行沈線による懸垂文を垂下させる。3は深鉢の胴部破片。単筋RL縄文に無節Lを併せ施文する。加曾利E1式。

土坑SK239出土遺物 (Fig.194-1~16)

土器片が出土している。1は口縁部が内湾する深鉢。隆帯上に刻日を施し、深い沈線による渦巻文。2・3・8はキャリバー形の深鉢の頸部破片。背割り隆帯の区画文に3本一組の沈線による懸垂文が垂下する。6は單口縁の深鉢、口縁直下から縄文が施文される。7は縄文を地文に單沈線による蛇行懸垂文を垂下させる。10は縄文を地文に沈線区画文。14は口唇部が肥厚する單口縁の深鉢。無文土器。15・16は浅鉢の口縁部破片。15は口縁部が内湾し、16は山形把手を有する波状口縁。加曾利E1式。

土坑SK240出土遺物 (Fig.194-1~4)

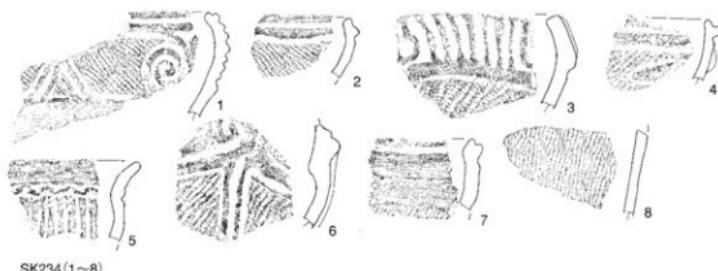
土器片と磨石1点が出土している。1は隆帯に沿って角押文が施文され、瘤状突起が付く。2は断面三角形の隆帯に沿って波状沈線が垂下し、角押文が施文されている。3は輪積痕を明瞭に残す深鉢の胴部破片。4は口縁内面に稜を有する浅鉢。阿玉台式。

磨石の破片 (PL.36-C、磨石類-3) が出土した。

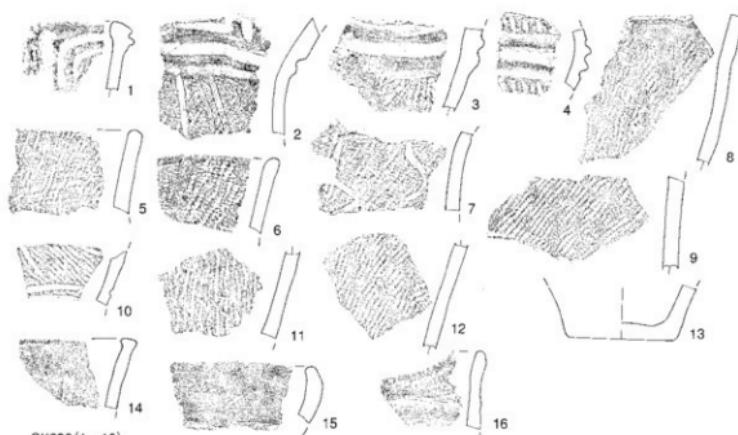
土坑SK241出土遺物 (Fig.194-1~11)

土器片と土器片鉢 1点、磨製石斧 1点、凹石 1点が出土している。1はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。沈線が沿う隆帯による渦巻文を施文する。2は隆帯区画文。3は縄文を地文に蛇行沈線が垂下する。4は縄文を地文に平行沈線が垂下する。5~8は縄文を地文に2もしくは3本一組の沈線による懸垂文を垂下させる。なお5・8は懸垂文の間を磨消している。9は口縁部が僅かに外反する浅鉢。外面に赤彩が認められる。加曾利E2式。

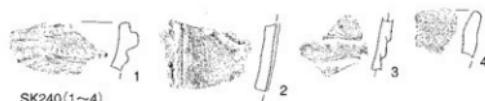
11は土器片鉢。縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。磨製石斧の破片 (PL.35-C、石斧類(2)-2) や凹石の破片 (PL.37-A、凹石類-4) が出土している。



SK234(1~8)



SK239(1~16)



SK240(1~4)



SK241(1~11)

0 1 20 cm
(1 / 4)

Fig. 194 土坑SK234・239・240・241出土遺物

土坑SK242出土遺物 (Fig.195-1~25)

土器片と土器片鍤4点、磨石1点が出土している。1~3はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。1は沈線が沿う隆帯による渦巻文と枠状区画文を施文する。2・3は背割り隆帯による渦巻文と枠状区画文を施文する。4はX字状隆帯が橋状把手となり、口縁部は無文帶で区画内は交互刺突文が施文されている。5は体部が内湾し、口縁部がくの字状に外反する。胴部は沈線が沿う隆帯による円形と枠状区画文を配する。6~8・10は頭部破片。9は背割り隆帯区画内に沈線を充填する。11~13は単口縁の深鉢。口縁直下から繩文を施文する。14~17は側部破片。18は底部破片。いずれも繩文を地文に2もししくは3本一組の沈線による懸垂文を垂下させる。20・21は浅鉢。20は口縁部が内湾気味に立ち上がる。外面に赤彩が残存している。加曾利E1式。

22~25は土器片鍤。縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。磨石(PL-36-C、磨石類-4)が出土した。

土坑SK243出土遺物 (Fig.196-1~13)

土器片と土器片鍤2点が出土している。1~3はキャリバー形の深鉢。1は口縁部が背割り状の隆帯による渦巻文と枠状区画文を施文し、頭部は無文帶を形成。胴部は繩文を地文に3本一組の沈線による区画文に直行懸垂文とそれに繋がる蛇行懸垂文が垂下する。2・3は背割り隆帯によるクランク文、枠状区画文を施文する。6・8・9は繩文を地文に2本一組の直行沈線と蛇行沈線を懸垂文として垂下させる。4は狭小な口縁部が無文帶をなし、僅かに外反し、2段の交互刺突文を区画文に背割り隆帯による渦巻文と、継列沈線を地文とする。5は単口縁の深鉢。6は繩文が施文された縦帶区画に、平行沈線による懸垂文が垂下する。7は胴部が内湾し、口縁部がくの字状に外傾する。口縁部は無文帶となり、沈線が沿う隆帯区画文。10は縦條の条線を地文とする。加曾利E1式。

12・13は土器片鍤。いずれも縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK244出土遺物 (Fig.195-1~13)

土器片と土器片鍤1点、局部磨製石斧1点、石錐1点が出土している。1は口縁部が外反する筒状の深鉢。口縁は無文帶となり、胴部は繩文を施文。2は幅広の無文帶の口縁を持つ筒状深鉢。3~5はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。沈線が沿う隆帯による枠状区画文を施文する。6は繩文を地文に2本一組の直行沈線と蛇行沈線による懸垂文を垂下させる。8~10は深鉢の底部破片。加曾利E1式。

11は土器片鍤。縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。12はホルンフェルス製の局部磨製石斧である。刃部のみ良好に残存している。13は黒曜石製の石錐。凹基無茎錐で、表裏面とも丁寧な削整剥離を施されている。

土坑SK245出土遺物 (Fig.196-1~6)

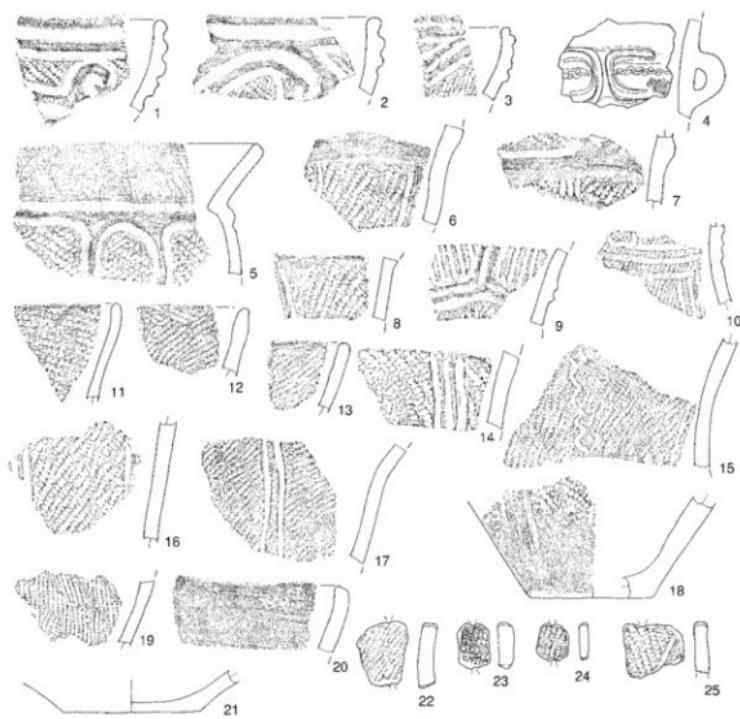
土器片と土器片鍤1点が出土している。1は胴部が内湾し、口縁部が僅かに外反する深鉢。口縁部は無文帶となり、隆帯によって区画される。2は山形把手の破片。円孔を伴う。3は口唇部が肥厚する浅鉢。口唇部に沈線が巡り、内面に稜を有する。外面に赤彩が認められる。5は深鉢の底部破片。加曾利E1式。

6は土器片鍤。縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK246出土遺物 (Fig.196-1~7)

土器片と土器片鍤1点が出土している。1は口縁部が肥厚し、僅かに外反する深鉢。刻日のある隆帯は背割り状を呈している。2は交互刺突文が区画文となる無文帶を持つ深鉢の口縁部。3はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。沈線が沿う隆帯による枠状区画文を施文する。4・5は同一個体。繩文を地文に2本一組の沈線と蛇行沈線を懸垂文として垂下させる。加曾利E1式。

8は土器片鍤。縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。



SK242(1~25)

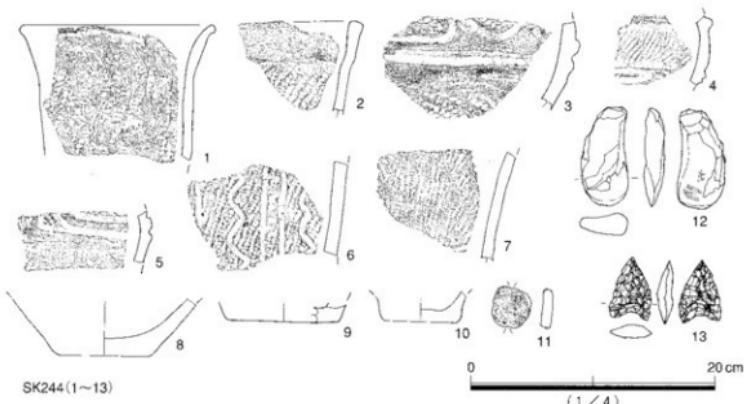


Fig. 195 土坑SK242・244出土遺物

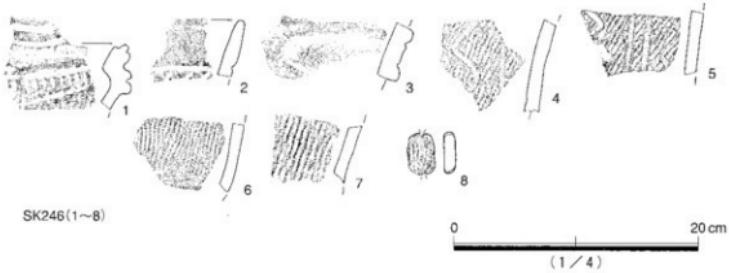
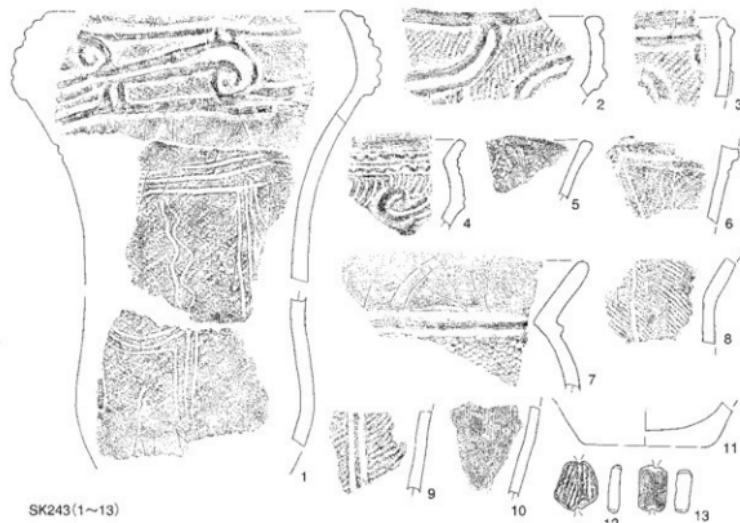


Fig. 196 土坑SK243・245・246出土遺物

土坑SK247出土遺物 (Fig.197-1~10)

土器片と土器片鍤 3点、磨石 1点が出土している。1~3はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。1は沈線が沿う隆帯による渦巻文と棒状区画文を施す。6は口縁部が肥厚する浅鉢。内面に棱を有する。外面と内面口縁部に赤彩が施されている。加曾利E1式。

7~9は土器片鍤。縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。10は安山岩製の磨石の欠損品。表面中央に凹孔部がある。磨面が顕著である。

土坑SK248出土遺物 (Fig.197-1~23)

土器片と土器片鍤 5点、躍石斧 1点が出土している。1・2は口縁部が狹小な無文帶をなし、交互刺突文による区画文。3は深体の胴部破片。角押文の隆帯区画に沿って半截竹管による半肉彫り状の沈線を施し、同じ工具で渦巻文を施す。4は繩文を地文に半截竹管による半肉彫り状沈線を多条する。5は隆帯と刺日の施された隆帯による円形区画文に沈線が充填される。6は多条化した沈線に連結して交互刺突文が施文される。8は断面が三角形の隆帯区画に頭部は無文帶となる。9・10は同一個体。繩文が施文された隆帯区画文。13は横齒状工具による縱位の条線文。14は外傾した狹小な口縁部を有する浅鉢。内外面に赤彩が施されている。15は単口縁の深鉢。無文土器である。16は口縁部が大きく外傾する深鉢。頭部に隆帯区画を持つ。17は深鉢の底部破片。加曾利E1式。

18~22は土器片鍤。いずれも縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。23は貞岩製の小形躍石斧である。自然縫の先端に調整剥離を施し刃部としている。

土坑SK249出土遺物 (Fig.197-1~11・Fig.198-12~31)

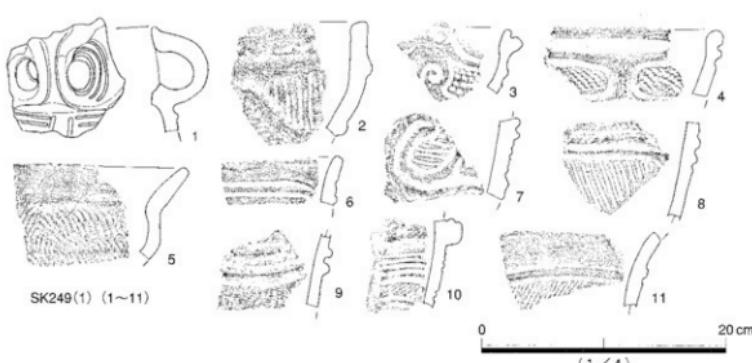
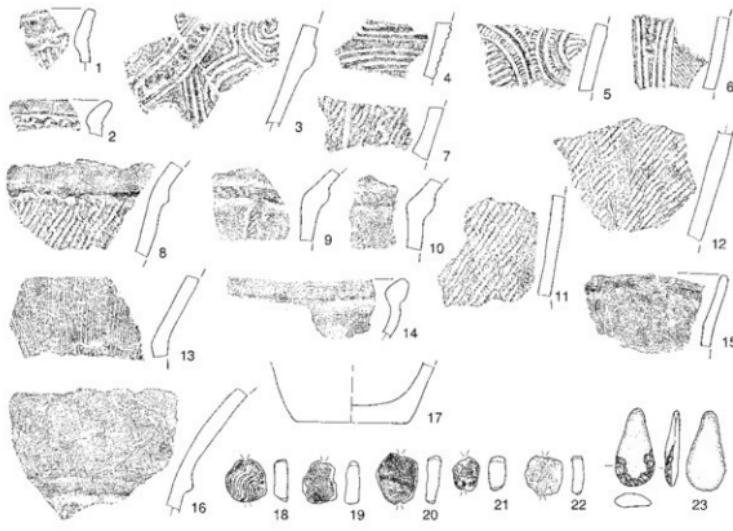
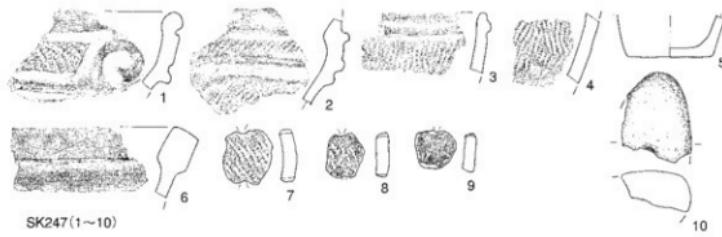
土器片と土器片鍤 6点が出土している。1は腹筋状突起を有する深鉢。縁辺に沿って沈線が巡り、口縁部は沈線による意匠文。2は口縁部上端が狹小な無文帶となり、背割り隆帯による区画文内に縱列沈線を充填する。3・4はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。3は波状口縁で、波頂部に突起状の渦巻文を配する。口縁部は沈線が沿う隆帯による渦巻文と棒状区画文を施す。4は沈線が沿う隆帯による横円形棒状区画文を施す。5は胴部が内済し、口縁部が外反する深鉢。口縁は無文帶となる。6は口縁部が外反する深鉢。沈線区画文。7は背割り隆帯による渦巻区画文で、区画内に沈線を充填する。8は背割り隆帯による区画文に斜行沈線が施文されている。9は繩文を地文に背割り隆帯による区画文。11は深鉢の頭部破片。隆帯区画文に頭部は無文帶となる。12・15~17・20は繩文を地文に2もしくは3本一組の沈線による懸垂文を垂下させる。13・14は繩文を地文に沈線による意匠文。21~25は浅鉢。21は口縁部の一部が欠損するもののほぼ完存する浅鉢。口唇部は肥厚し、体部は内済して口縁部が僅かに外反する。胴部に幅広の隆帯による7単位の半円文を配する。口唇部と外面に赤彩が施されている。22は口縁部が外傾する。23は口唇部が肥厚し、内面に棱を有する。外面に赤彩が認められる。24は口縁部が内済気味に外傾し、口唇部が肥厚する。加曾利E1式。

26~31は土器片鍤。いずれも縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK250出土遺物 (Fig.198-1~4)

土器片と土器片鍤 1点が出土している。1は繩文を地文に、背割り隆帯による区画文が施文される。2は繩文を地文に2もしくは3本一組の沈線による懸垂文を垂下させる。加曾利E1式。

4は土器片鍤。縦長破片の短軸方向に1対の切れ目を有する。



0 20 cm
(1 / 4)

Fig. 197 土坑SK247・248・249(1)出土遺物

土坑SK251出土遺物 (Fig.198-1~3)

土器片が出土している。1は口唇部が大きく迫り出し二重口縁を呈する。口唇部に縄文を施文し、口縁部には縱列の沈線を施す。2は縄文が地文の深鉢。3は狭小な口縁部を持つ破片。沈線による意匠文。赤彩が認められる。加曾利E1式。

土坑SK255出土遺物 (Fig.198-1~8)

土器片が出土している。1は平縁の深鉢。沈線区画文。2は單口縁の深鉢。口縁直下より縄文が施文される。3は撫糸Lを地文に沈線区画文。4~7は縄文を地文に2もしくは3本一組の沈線による懸垂文を垂下させる。加曾利E2式。

土坑SK256出土遺物 (Fig.199-1~5)

土器片が出土している。1は單口縁の深鉢で、縄文が施文される。2は懸垂文の間を磨消したもので、磨消懸垂文を垂下する。3は条線が地文の深鉢。4は撫糸Lを地文とする深鉢。5は深鉢底部破片。加曾利E2式。

土坑SK257出土遺物 (Fig.199-1~5)

土器片が出土している。1はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。沈線が沿う隆帯による棒状区画文を施文する。2・3は懸垂文の間を磨消したもので、磨消懸垂文を垂下する。4は撫糸Lを地文とする。5は深鉢の胴下半部の破片。体部は直線的に外傾して立ち上がる。加曾利E2式。

土坑SK258出土遺物 (Fig.199-1~8)

土器片と磨石1点が出土している。1は波状口縁の連弧文土器。撫糸Lを地文に、口縁上端は交互刺突文が巡り、胴部には横走する平行磨消縦文が区画文となる。2・3・5は懸垂文の間を磨消したもので、磨消懸垂文を垂下する。4は縱位の条線を地文とする深鉢。5~7は深鉢底部破片。加曾利E2式。

8は安山岩製の磨石欠損品。縫部に敲部が認められる。

土坑SK259出土遺物 (Fig.199-1~8)

土器片と土器片鍤2点が出土している。1は單口縁の深鉢。口縁部は無文帶となる。2は刻目の施文された隆帯区画と交互刺突文による区画文。3は縄文を地文に貼付隆帯区画文。4は口縁上端に沈線が巡る。5は縄文が施文された隆帯が区画文となる。加曾利E1式。

7・8は土器片鍤。いずれも縱長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK260出土遺物 (Fig.199-1~3)

土器片が出土している。1は断面三角形の縫帶が施され、波状沈線が巡る。2は隆帯区画内に沈線が充填される。3は縄文が施文された深鉢胴部破片。阿笠台式。

土坑SK261出土遺物 (Fig.200-1~8)

土器片と土器片鍤2点が出土している。1・2はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。沈線が沿う隆帯による棒状区画文を施文する。3は縄文を地文に沈線による意匠文。4は縄文を地文に2本一組の沈線による懸垂文を垂下させる。5は口縁部が内湾気味に立ち上がる無文土器。6は深鉢底部破片。加曾利E1式。

7・8は土器片鍤。縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。

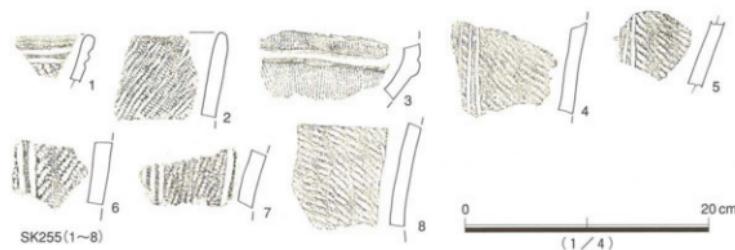
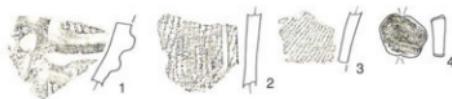
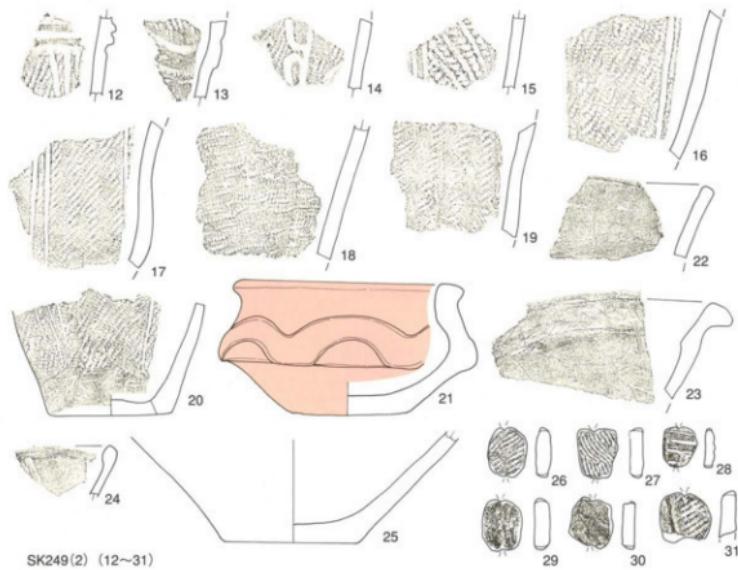
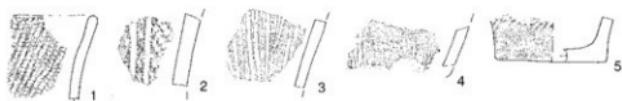


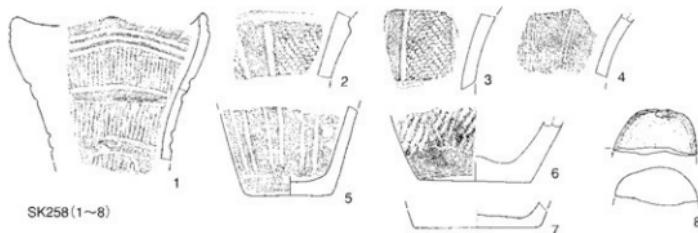
Fig. 198 土坑SK249(2)・250・251・255出土遺物



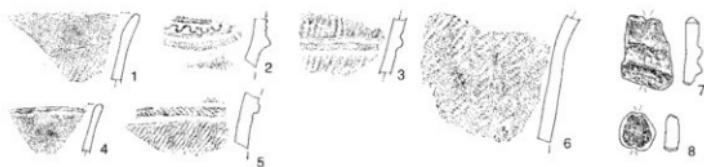
SK256(1~5)



SK257(1~5)



SK258(1~8)



SK259(1~8)



SK260(1~3)

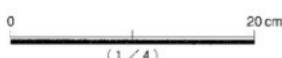


Fig. 199 土坑SK256・257・258・259・260出土遺物

土坑SK262出土遺物 (Fig.200-1~3)

土器片が出土している。1は胴部破片。条線を地文に蛇行隆帯が垂下する。2・3は縄文が地文の深鉢胴部破片。阿正台式。

土坑SK263出土遺物 (Fig.200-1~17)

土器片と土器片錐3点が出上している。1~5・7はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。沈線が沿う隆帯による渦巻文と棹状区画文を施文する。6は単口縁の深鉢。縄文を地文に口縁直下に貼付波状隆帯が巡り、貼付隆帯による蛇行懸垂文と磨消懸垂文が垂下する。7は口唇部が肥厚するキャリバー形深鉢。背割り隆帯が区画内に施文される。8・9は縄文を地文に2もしくは3本一組の沈線による懸垂文を垂下させる。10は縄文を地文に降帯区画文。11~13は懸垂文の間を磨消したので、2もしくは3本一組の磨消懸垂文を垂下する。加曾利E2式。

15~17は土器片錐。縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK264出土遺物 (Fig.201-1~5)

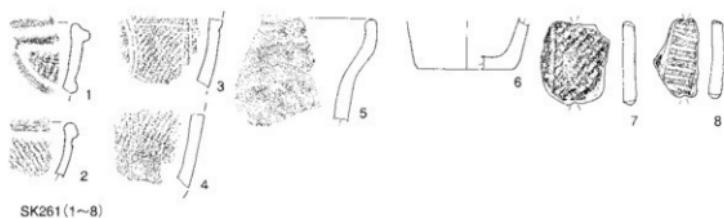
土器片が出土している。1は縦位の隆帯文を施文した口縁部破片。3はキャリバー形深鉢の口縁部破片。隆帯による棹状区画文。5は縄文を地文に2本一組の沈線による懸垂文を垂下させる。加曾利E1式。

土坑SK265出土遺物 (Fig.201-1~8)

土器片が出土している。1は波状口縁の深鉢。波頂部に突出する渦巻文から連繋する背割り隆帯区画文。2は背割り隆帯区画文。頸部は無文帯となる。3は撫糸Lを地文に磨消沈線による意匠文。4~6は縄文を地文に単線もしくは2本一組の沈線による懸垂文を垂下させる。加曾利E1式。

土坑SK266出土遺物 (Fig.201-1~8・Fig.202-9~37・Fig.203-38~51)

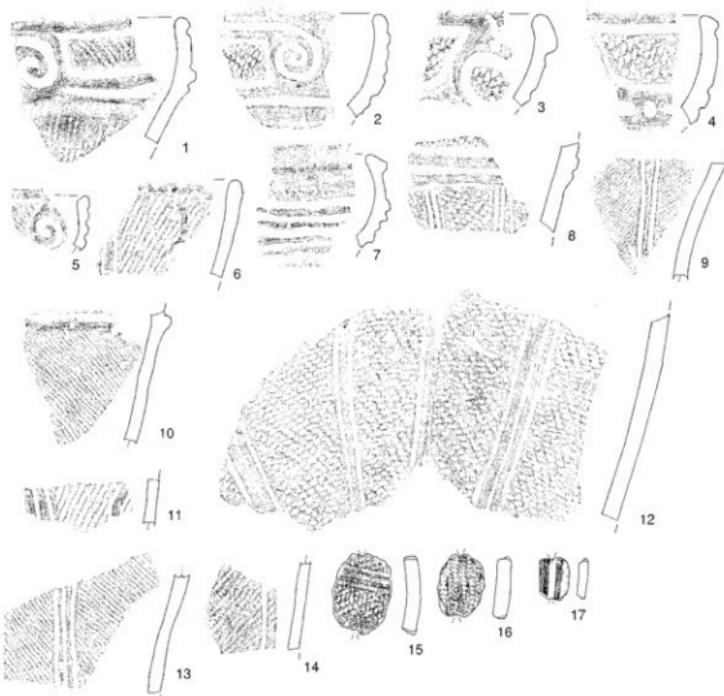
土器片と土器片錐2点が出土している。1は4単位の波状口縁を有する深鉢。胴部は直線的に立ち上がり、頸部で屈曲して口縁部は直立して立ち上がる。口唇部は凹凸が巡り、複合口縁で、狹小な口縁部は縦位の刻目を施し、頸部は無文帯となる。胴部は単節RL縄文を縦位施文する。2は4単位の波状口縁深鉢。口縁部は内湾気味に大きく聞く。口縁上端は狹小な無文帯となり、口縁部は縄文を地文に貼付隆帯による方形区画文に3列の降帯を垂下させ区画する。この区画文に連携して渦巻文を施文する。胴部は単節RL縄文を地文とする。3は全体部が外傾して開く深鉢。3単位の波状口縁を有し、口唇部は肥厚して凹凸が巡る。口縁部は無文帯となり、胴部は単節RL縄文を地文に2列の蛇行する懸垂文。4は口縁部が内湾し、僅かに外傾して開く深鉢。口縁上端は無文帯をなし、口縁部は縦列の沈線を地文に、背割り隆帯によるクランク文を配する。頸部は無文帯である。5は山形把手。中央に円孔を穿ち、縁辺に沿って刻目の施された背割り隆帯が巡り、隆帯間に沈線が施文される。口縁部は縄文を地文とする。6は波状口縁の深鉢。波頂部に背割り隆帯による渦巻文が施文され、口縁部は隆帯による区画文。7は口縁部が無文帯で、交差刺突文に連繋する沈線文が区画文となり、斜行する沈線が充填される。8は波状口縁を呈する深鉢。波頂部に沈線による渦巻文を配し、口縁直下は交差刺突文によって区画され、縄文を地文に沈線による蛇行懸垂文が垂下する。9~11はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。9は口縁直下が交差刺突文により区画され、下部区画は断面三角形の降帯により区画される。区画内は蛇行文が横走する。10は波状口縁で、沈線の沿う隆帯による渦巻文と棹状区画文を施文する。11は口縁上端が狹小な無文帯となり、背割り隆帯によるクランク文と棹状区画文を施文する。12は波状口縁で、狹小な口縁上端は無文帯となり、交差刺突文によって区画される。13は波状口縁で、口縁上端は無文帯となり、波頂部に隆帯による渦巻文が施文される。14は口唇部が肥厚する深鉢。口縁部には狹小な無文帯を有する。16は筒状の深鉢ではほぼ完形品である。胴部は直線的に立ち上がり、口縁部が僅かに外反する。口縁部は複合口縁となり、幅広い無文帯となる。胴部は単節RL縄文を縦位施文する。17も口縁部の一部を欠損するものはほぼ完形品である。単口縁の深鉢で、胴部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁上部で僅かに外傾する。口縁直下から単節RL縄文を縦位施文す



SK261(1~8)



SK262(1~3)



SK263(1~17)

0 20 cm
(1/4)

Fig. 200 土坑SK261・262・263出土遺物

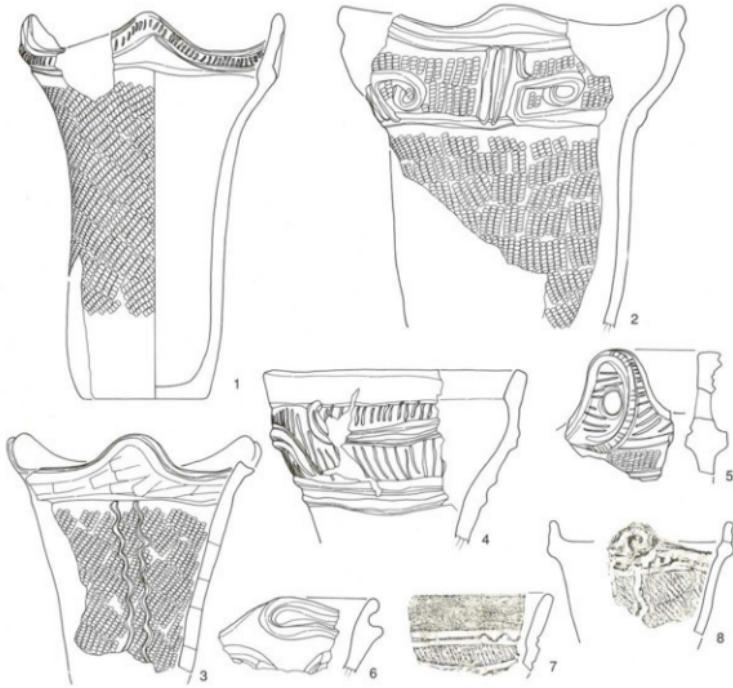
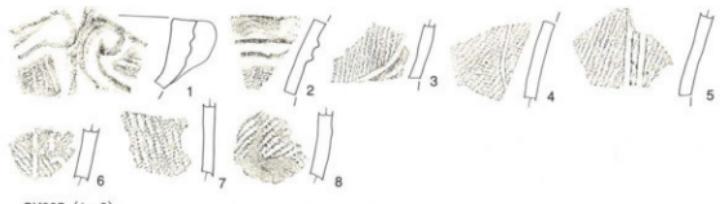
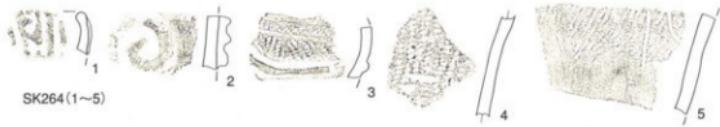


Fig. 201 土坑SK264・265・266(1)出土遺物

る。18は單口縁の深鉢、口縁直下で狹小な縄文帯を有し、羽状縄文となる。19は口縁部が肥厚する筒状深鉢。口縁部には狹小な無文帯を持つ。20は波状口縁の深鉢。口縁に沿う隆帯区画文。21は口縁部が内溝する深鉢。隆帯区画文。22は沈線方形区画内に沈線による渦巻文を配する。23は口縁部が内溝し、幅広い背割り隆帯による区画文。24は縦列の太隆帯施文。25は深鉢の胸部破片。縄文を地文に背割り隆帯による渦巻文。26は縄文を地文に沈線区画文。27~29は縄文を地文に2もしくは3本一組の沈線による懸垂文を垂下させる。30~32~38は縄文を地文とした深鉢胴部破片。32は縄文原体を変えて施文している。31は深鉢の胴下半部の破片。交互刺突文を区画文とし、縄文を地文に沈線による蛇行懸垂文と中間でU字状に連続する直行懸垂文が垂下する。39~42は深鉢の底部破片。39~42は網代痕。44~46~49は浅鉢。44は口縁部が内溝する。口縁直下に凹帯がめぐり、内外面とも赤彩が施されている。46は口縁部が外傾し、内面に棱を有する。外面に赤彩が残存している。47は体部が内溝し、口縁部が僅かに外傾する。口縁部は肥厚し、凹帯によって区画される。内外面に赤彩が施されている。48は口縁部が外反し、内面に棱を有する。内外面に赤彩が施されている。49は胴下半部の破片。外面に赤彩が認められる。45は單口縁の深鉢。口縁部が僅かに外傾し、沈線区画される。加曾利E1式。

50~51は土器片鍤。縱長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK267出土遺物 (Fig.203-1~9)

土器片が出土している。1は口縁部が直立する深鉢。口縁上端には狹小な無文帯をなし、口縁部文様帯は交互刺突文による区画文と単沈線が施文された隆帯による渦巻文と重疊帯によって構成される。2は背割り隆帯による円形区画文に沈線が充填され、交互刺突文と沈線区画内に条線が充填される。3は波状口縁の深鉢。条線が施文された隆帯に沿って交互刺突文が区画され、沈線区画内に縦列の沈線が充填される。4は顎部の突起に連繋する背割り隆帯が区画文となる。5は縄文を地文に沈線による意匠文。7は深鉢の底部破片。8~9は浅鉢の口縁部破片。8は口縁部が肥厚する。9は口縁部が内溝気味に立ち上がる。加曾利E1式。

土坑SK268出土遺物 (Fig.203-1~7)

土器片と土器片鍤1点が出土している。1・2は深鉢の口縁部破片。隆帯による渦巻文と区画文を配し、区画内に斜行する条線を充填させ、胴部も縦位の条線を地文とする。3は沈線が沿う隆帯区画内に斜行沈線を充填させる。4は深鉢の底部破片。縄文を地文に3本一組の沈線による懸垂文を垂下させる。5は口縁部が外反する單口縁の深鉢。口縁内面に凹帯が巡り、外面上は櫛歯状工具による斜行条線を施文する。6は浅鉢底部破片。加曾利E2式。

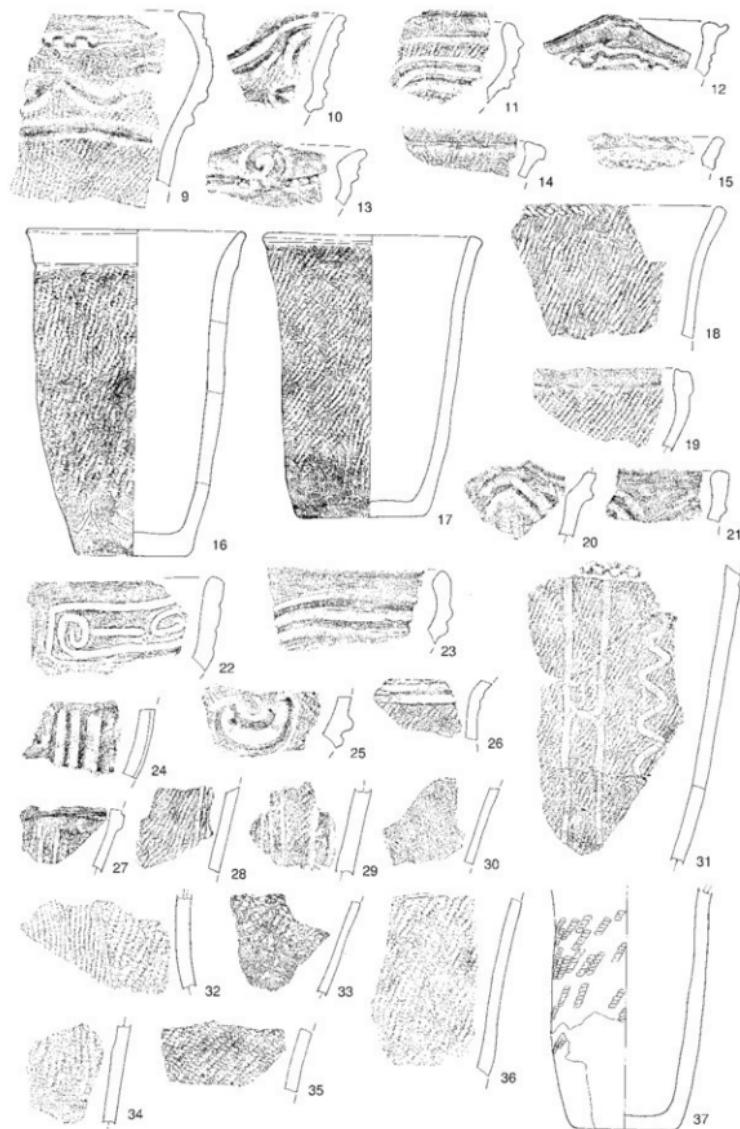
7は土器片鍤。縱長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK269出土遺物 (Fig.204-1~3)

土器片が出土している。1は小形のキャリバー形深鉢。隆帯区画文内に縦列の沈線を充填する。2は深鉢の口縁部破片。格子目状の沈線文を施文する。3は口縁部が内溝する無文土器。内面にスヌ状の炭化物が付着している。加曾利E1式。

土坑SK270出土遺物 (Fig.204-1・2)

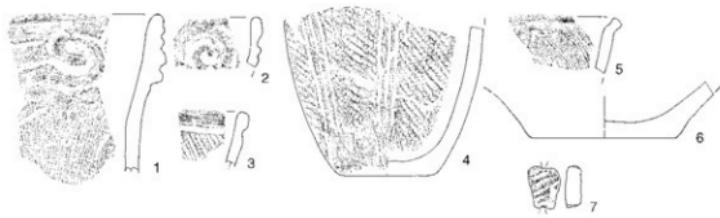
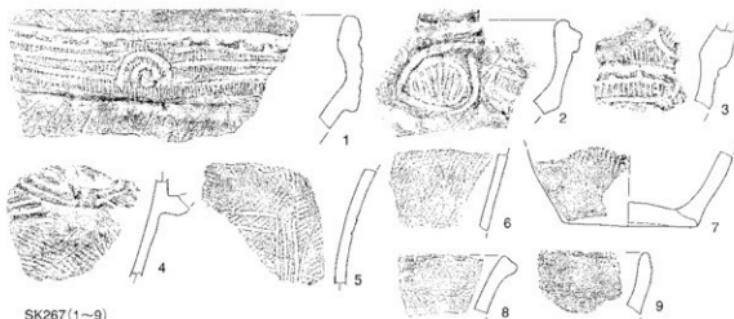
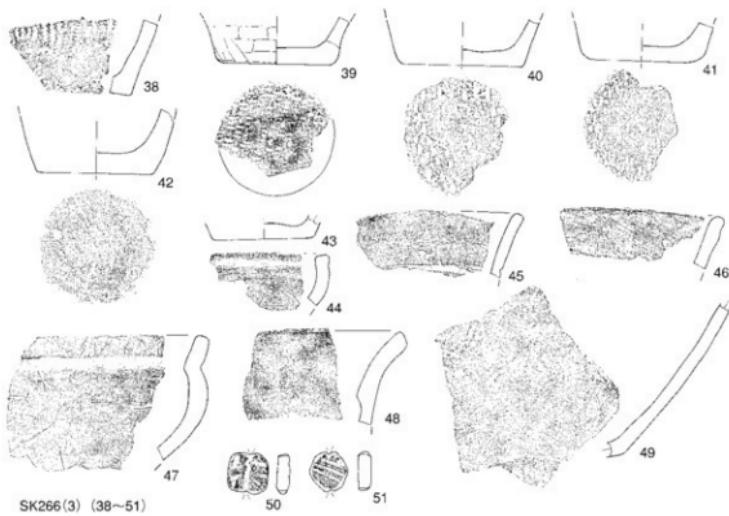
土器片が出土している。1はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。沈線が沿う隆帯による棒状区画文を施文する。2は縄文を地文に2本一組の沈線による懸垂文を垂下させる。加曾利E1式。



SK266(2) (9~37)

0 20 cm
(1 / 4)

Fig. 202 土坑SK266出土遺物(2)



0 20 cm
(1 / 4)

Fig. 203 土坑SK266(3)・267・268出土遺物

土坑SK271出土遺物 (Fig.204-1~6)

土器片と土器片錐2点が出土している。1は深鉢の口縁部破片。内面に突帯が付く。2は指頭圧痕の施された隆帯が垂下する。3・4は繩文を施した脇部破片。加曾利E1式。

5・6は土器片錐。いずれも縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK272出土遺物 (Fig.204-1~7)

土器片が出土している。1は橋状把手を有する深鉢。無文地である。2は波状口縁の深鉢で、狹小な口縁部上端は無文帯となり、背割り隆帯による区画文と渦巻文を配する。3は条線を地文に隆帯区画文に沿って沈線が施文されている。4は条線を地文とし、隆帯区画文内に沈線を重疊させる。5は沈線区画文により無文帯をなす。7は波状口縁で波頂部に渦巻文を施す。加曾利E1式。

土坑SK273出土遺物 (Fig.204-1)

土器片が出土している。1は口縁部がわずかに外反する深鉢。口唇部に角押文が施文される。加曾利E式。

土坑SK274出土遺物 (Fig.204-1)

土器片が出土している。1は口縁部がわずかに外反する浅鉢。加曾利E式。

土坑SK275出土遺物 (Fig.204-1~3)

土器片が出土している。いずれも小破片である。1は縦位の条線を地文に隆帯による懸垂文。2は条線文に沈線区画文が施文される。3は単節LR繩文。加曾利E式。

土坑SK277出土遺物 (Fig.204-1~6)

土器片と土器片錐1点が出土している。1は波状口縁の深鉢。繩文を施した肥厚する口唇部に沿って角押文が施文され、多条沈線が施されている。2は繩文を施した隆帯に沈線が沿う。3は断面三角形隆帯による区画内に沈線による意匠文。4・5は繩文を施した深鉢。加曾利E1式。

6は土器片錐。縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK278出土遺物 (Fig.204-1)

土器片が出土している。1は浅鉢の脇部破片。無文地。加曾利E式。

土坑SK280出土遺物 (Fig.204-1~4)

土器片が出土している。1は繩文を施し、平行沈線による意匠文。2は単節RL繩文を施した深鉢脇部破片。3は縦位の条線。4は口縁部が短く外反する深鉢。加曾利E式。

土坑SK281出土遺物 (Fig.205-1・2)

土器片が出土している。1は繩文を地文に沈線区画文。2は繩文を地文に沈線による蛇行懸垂文を垂下する。加曾利E式。

土坑SK282出土遺物 (Fig.205-1~8)

土器片が出土している。1は波状口縁の深鉢、波頂部は背割り隆帯による渦巻文。2はキャリバー形の深鉢。繩文を地文に隆帯区画文。3は口縁部が外反する深鉢。沈線が沿う隆帯区画文。4は繩文を地文に沈線意匠文。7は口縁部が内湾する浅鉢。内外面に赤彩が施されている。6は深鉢の脇下部の土器。単節RL繩文を地文とする。8は小形の鉢形を呈する手捏土器である。内面の底部付近に赤彩が認められる。加曾利E1式。

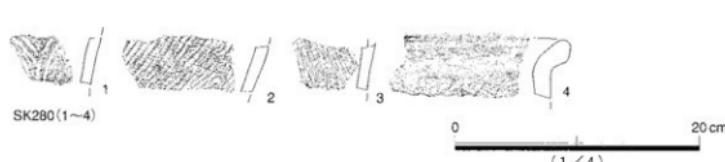
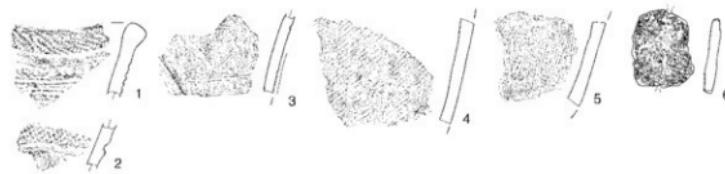
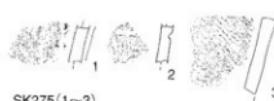
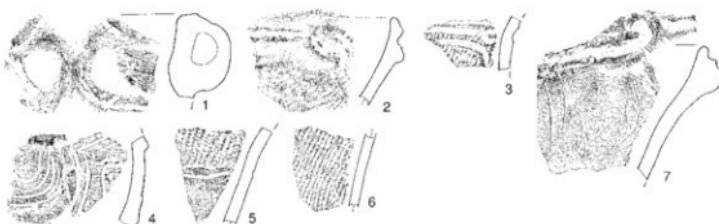
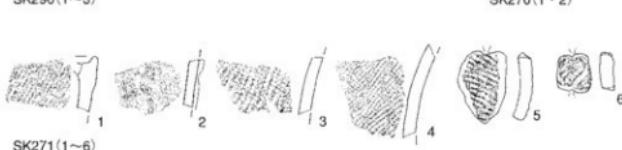


Fig. 204 土坑SK269・270・271・272・273・274・275・277・278・280出土遺物

土坑SK283出土遺物 (Fig.205-1~6)

土器片と土器片鍤 2 点が出土している。1は条線を施した深鉢。2・3は縄文を施した深鉢。4は深鉢の底部破片。加曾利E式。

5・6は土器片鍤。いずれも縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK284出土遺物 (Fig.205-1~7)

土器片と土器片鍤 1 点、磨製石斧 1 点が出土している。1は口縁部上端に角押文が巡り、指頭圧痕が加わる隆帯は波状を呈する。2は背割り隆帯による区画文。波状沈線が巡る。3は単口縁の深鉢。口縁直下から縄文が施文される。5は縄文を地文に3本一組の沈線による懸垂文を垂下させる。加曾利E1式。

6は土器片鍤の欠損品。縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。7は蛇紋岩製の磨製石斧である。基部を欠損しているものの、優品である。

土坑SK285出土遺物 (Fig.206-1~16)

土器片と土器片鍤 1 点、磨製石斧 1 点、石錐 1 点が出土している。1は口縁部が外傾し、上端で矧く外反する深鉢。口縁は縄文帶をなし、頭部は無文帯となる。2はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。沈線が沿う隆帯による棒状区画文を施文する。3は口縁部上端が狭小な縄文帶を持ち、角押文によって区画される。4は口縁部上端の隆帯が剥離している。5は口縁部上端が狭小な無文帯をなす。6は背割り隆帯による渦巻文。7は背割り隆帯区画内に縦列の条線文を充填する。8は沈線が沿う隆帯区画。頭部は無文帯となる。9~11は縄文が地文の深鉢底部破片。12は条線が地文の深鉢破片。13は深鉢底部破片。加曾利E1式。

14は土器片鍤。縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。15は粘板岩製の磨製石斧欠損品。表裏面とも研磨痕が明瞭に残存している。16はメノウ製石錐。表裏面とも丁寧な調整削難が施されている。

土坑SK286出土遺物 (Fig.205-1~3)

土器片が出土している。1は連弧文土器の口縁部破片。口縁部上端に交互刺突文を施し、撫糸Lを地文とする。2は縄文を地文に磨消沈線による懸垂文を垂下させる。3は浅鉢の脇部破片。加曾利E2式。

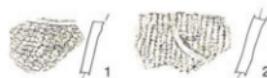
土坑SK287出土遺物 (Fig.206-1~14)

土器片と土器片鍤 2 点、磨石 1 点が出土している。1は波状口縁の深鉢。山形把手の破片で、顎状に迫り出した口縁部は隆帯区画され、区画内には波状沈線を施文する。2は円孔を伴う円形把手を有する。隆帯区画内に2列の角押文が縦位に施文される。3は平縁の深鉢。口縁部は狭小な縄文帶をもつ隆帯区画文。4は隆帯区画文に沈線と波状沈線が沿う。5は隆帯に沿って角押文が施文されている。6~8は縦位の条線を地文とする。9~10は深鉢底部破片。11は口縁部が外反し、内面に稜を有する浅鉢。阿正台IV式。

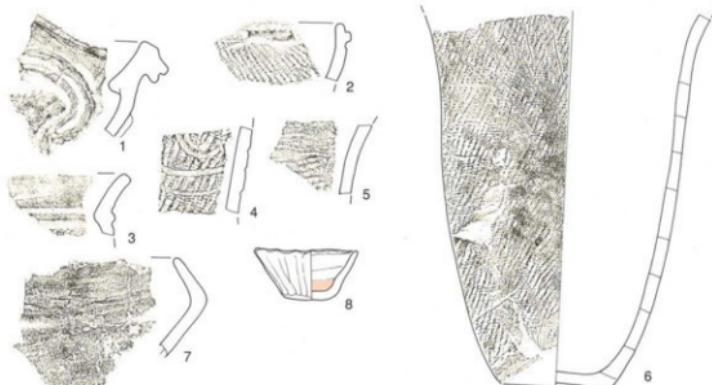
12・13は土器片鍤。12は縦長破片の長軸方向に1対と短軸に1ヶ所の切れ目を有する。13は長軸方向に1対の切れ目を施す。14は安山岩製の磨石。完存品で全面に使用痕がみられ、表裏面の中央付近に2ヶ所ずつと側面に1ヶ所の凹孔部が施されている。

土坑SK288出土遺物 (Fig.206-1~6)

土器片が出土している。1はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。沈線の沿う隆帯による棒状区画文を施文する。2は縦列沈線を地文に刻目を施した隆帯を横位に貼り付ける。4は縄文を地文に沈線による弧線文。6は深鉢の底部破片。加曾利E2式。



SK281(1・2)



SK282(1~8)



SK283(1~6)



SK284(1~7)



SK286(1~3)

0 20 cm
(1/4)

Fig. 205 土坑SK281・282・283・284・286出土遺物

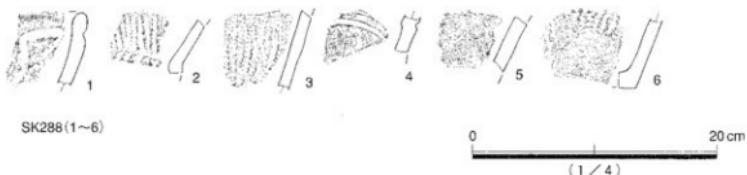
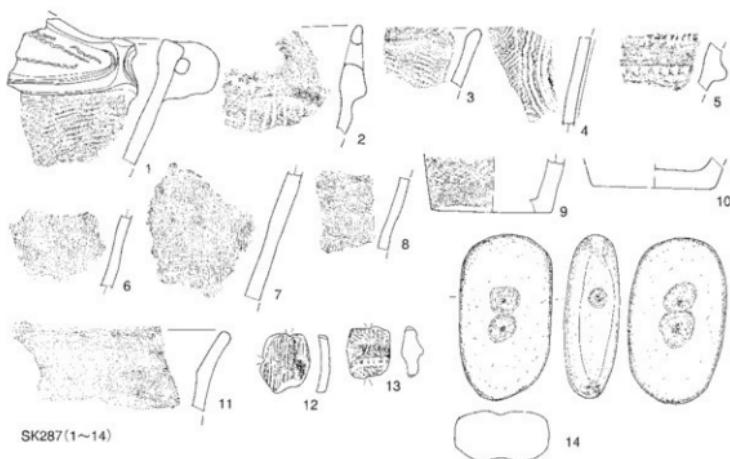
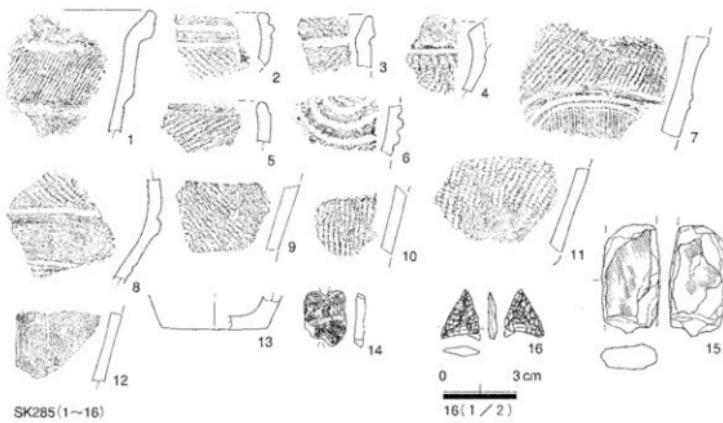


Fig. 206 土坑SK285・287・288出土遺物

土坑SK289出土遺物 (Fig.207-1~12)

土器片が出土している。1は波状口縁となる深鉢。口縁直下から縄文が施されている。2は隆帯区画内に条線を充填する。3は口縁部が無文帯で、刺突文が区画文となり、胴部には縄文を施した深鉢。4は縄文を地文に平行沈線による意匠文。5・6は深鉢の頭部破片。隆帯区画文。7~9・11は縄文を地文に2もしくは3本・組の沈線による懸垂文を垂下させる。加曾利E1式。

土坑SK290出土遺物 (Fig.207-1~14)

土器片と土器片錐2点、磨製石斧1点が出土している。1は小突起を有する筒状の深鉢。体部は内湾し、口縁部は僅かに外傾して立ち上がる。口縁上端は狭小な隆帯による無文帯となり、隆帯による横円形区画内には2列の角押文が沿い、綫位の平行する蛇行沈線を充填する。胴部は綫位の条線。2は胴部が内湾気味に立ち上がり、口縁部も内湾する深鉢。口縁直下に沈線が巡り、隆帯による横円形区画文を配し、区画内は無文地と条線が充填される部分が見られる。頭部も隆帯区画され、条線を地文とする。さらに胴部は蛇行条線文が垂下する。3は山形把手の破片。隆帯に沿って沈線が施される。4は隆帯に沿って2列の角押文が施され、胴部は条線が垂下する。5・6は同一個体。縄文を施した隆帯に角押文が施される。7は波状口縁の深鉢。口唇部は肥厚し、口縁直下から彌齒状工具による蛇行条線を垂下させる。9は体部が内湾気味に立ち上がる浅鉢。口縁部は肥厚し、隆帯による波状文を施す。11は脚付深鉢の底部破片。阿玉台日式。

12・13は土器片錐。いずれも綫長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。14は蛇紋岩製の小形局部磨製石斧。端部のみ研磨を加え刃部としている。

土坑SK291出土遺物 (Fig.207-1~5)

土器片と土器片錐1点が出土している。1は山形把手の波頂部破片。多角状を呈し、口縁部に沿って角押文が施されている。2はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。沈線が沿う隆帯による棒状区画文を施す。3は縄文を地文に単沈線による懸垂文を垂下させる。加曾利E式。

5は土器片錐。綫長破片の短軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK292出土遺物 (Fig.207-1~3)

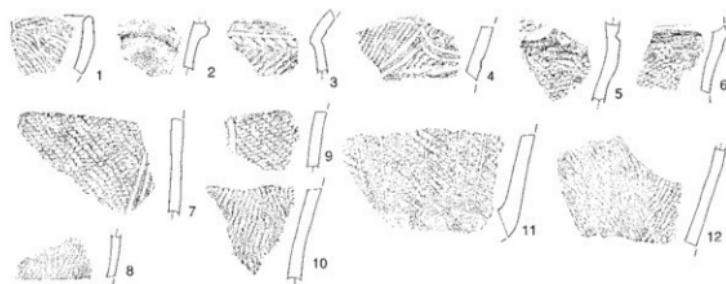
土器片が出土している。1はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。沈線が沿う隆帯による渦巻文を施す。2は単節RL縄文を地文とする深鉢胴部破片。3は無文地の深鉢胴部破片。加曾利E2式。

土坑SK293出土遺物 (Fig.208-1~15)

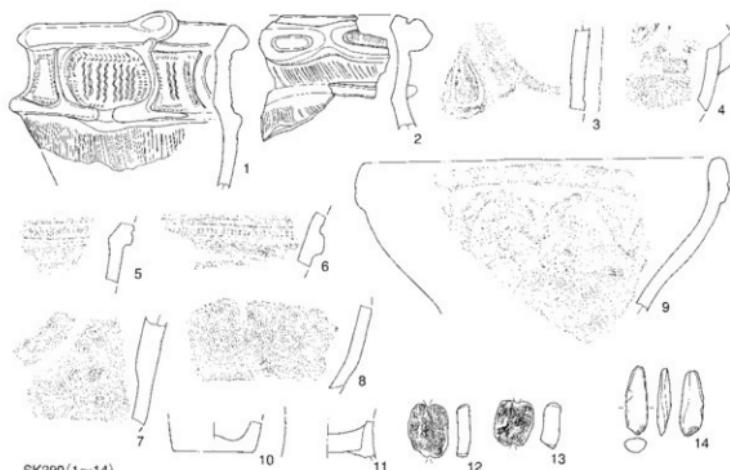
土器片が出土している。1は口縁部が内湾して、僅かに外反する浅鉢。口縁部は狭小な無文帯となり、交互刺突文により区画され半円状の隆帯に沿って沈線が施される。内外面に赤彩が認められる。2は円形把手の破片。ヘラ状工具により縁辺に沿って幅広の沈線が巡る。3は曾利系の深鉢。口縁部の無文地に綫列の貼付隆帯が施される。4は口唇部が肥厚し、縄文が施される。2条沈線による区画文。5・9は同一個体。口縁部が内湾気味に立ち上がり、口縁端部で直立する。口縁部上端は狭小な無文帯で、交互刺突文で区画される。沈線による棒状区画文が施され、下端部で刻目隆帯によって区画される。6はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。口唇部は凹帯が巡り、背割り隆帯による区画文を施す。7は口唇部が内面に迫り出し、凹帯が巡り、口縁部は縄文を地文に沈線による意匠文が施される。8は3条の沈線によって区画される。10~12は縄文を地文に沈線による蛇行懸垂文を垂下させる。13は縄文を地文に2本・組の沈線による懸垂文を垂下させる。14・15は浅鉢の底部破片。加曾利E1式。

土坑SK294出土遺物 (Fig.208-1~4)

土器片が出土している。1はキャリバー形の深鉢、沈線が沿う隆帯による棒状区画文を施す。2・3は深鉢の胴部破片。4は口縁部が肥厚する浅鉢。加曾利E式。



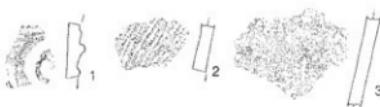
SK289(1~12)



SK290(1~14)



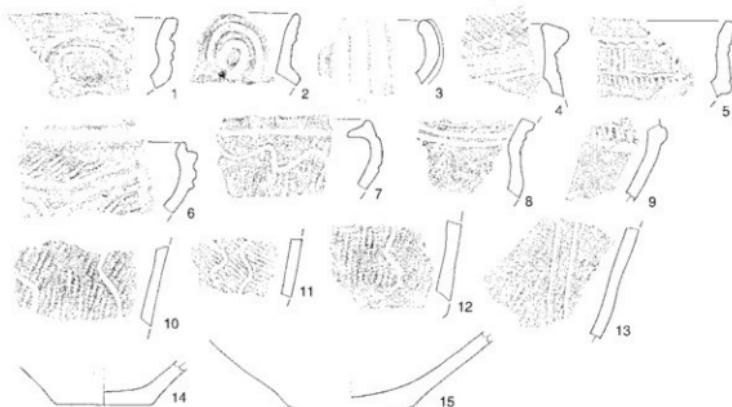
SK291(1~5)



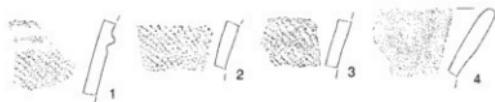
SK292(1~3)

0 20 cm
(1/4)

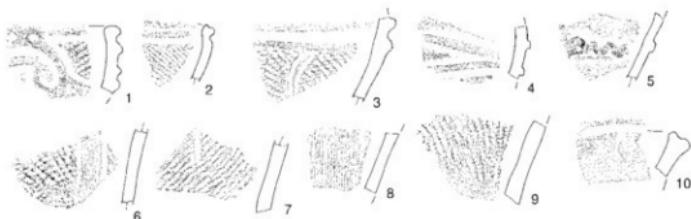
Fig. 207 土坑SK289·290·291·292出土遺物



SK293(1~15)



SK294(1~4)



SK295(1~10)



Fig. 208 土坑SK293·294·295·296出土遺物

土坑SK295出土遺物 (Fig.208-1~10)

土器片が出土している。1~4はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。沈線が沿う隆帯による渦巻文と棹状区画文を施文する。5は貼付隆帯による波状文。6は縄文を地文に2本一組の沈線による磨消懸垂文を垂下させる。8は撫糸Rを地文とする。10は口唇部が肥厚し、凹帯が巡る。加曾利E2式。

土坑SK296出土遺物 (Fig.208-1~6)

上器片と土器片鍤1点が出土している。1は深鉢の口縁部破片。交互刺突文の区画に、背割り隆帯による渦巻文と区向文が施される。2は刻目が施された隆帯による渦巻文。3・4はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。沈線が沿う隆帯による区画文。5は口唇部が肥厚し、交瓦刺突文による区画間は無文帯となる。加曾利E1式。

6は土器片鍤。縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK297出土遺物 (Fig.209-1~12)

土器片と土器片鍤2点が出土している。1は口縁部が内湾する深鉢。縄文を地文に沈線が施文される。2の狹小な口縁部は隆帯によって区画され、条線を地文とする。3は短口縁の深鉢で、狹小な口縁部上端は無文帯となる。4は口唇部が外削状となる深鉢。沈線区画された口縁部は無文帯となる。5は背割り隆帯区画。6は縄文を地文に交瓦刺突文が区画文となり、波状沈線が横走する。7~9は縄文を地文に2もしくは3本一組の沈線による磨消懸垂文を垂下させる。10は口縁部が外傾する浅鉢。外面に赤彩が認められる。加曾利E2式。

11・12は土器片鍤である。いずれも縦長剥片の長軸方向に1対の切れ目を有する。

土坑SK298出土遺物 (Fig.209-1~6)

上器片と土器片鍤1点、磨製石斧1点が出土している。1は無文地に隆帯によるY字状懸垂文が垂下する。2~4は縄文を地文に2もしくは3本一組の沈線による懸垂文を垂下させる。加曾利E1式。

5は土器片鍤。縦長破片の長軸方向に1対の切れ目を有する。6は砂岩製の磨製石斧である。刃部を欠損しているが、定角式の優品である。

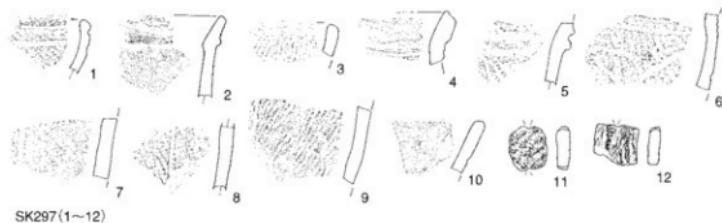
土坑SK299出土遺物 (Fig.209-1~7)

土器片と石皿1点が出土している。1・2はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。沈線が沿う隆帯による渦巻文と棹状区画文を施文する。3は波状口縁の深鉢。口縁部に沿って隆帯が施文される。4は胴部破片。縄文を地文に3本一組の懸垂文が重下し、懸垂文から孤状文が接続している。6は深鉢の胴下半部の破片。内湾気味に立ち上がる。地文は撫糸文。加曾利E1式。

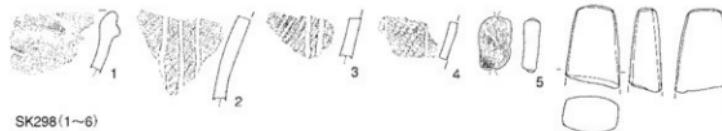
7は安山岩製の石皿の破片。凹み部が残存している。

土坑SK300出土遺物 (Fig.209-1~13・Fig.210-14~17)

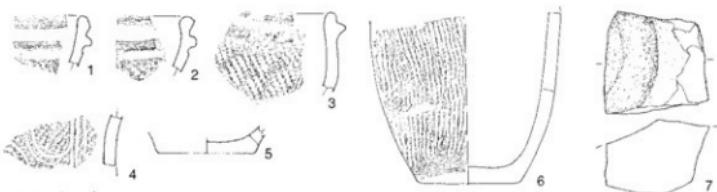
土器片が出土している。1~5・7はキャリバー形の深鉢の口縁部破片。沈線が沿う隆帯による渦巻文と棹状区画文を施文する。1は縄文を地文に3本一組の沈線による懸垂文を垂下させる。6は単口縁の深鉢、口縁直下から撫糸Rを施文する。8は頭部付近の破片。沈線が沿う隆帯区画文。9は口縁に沿って2列の角押文を巡らし、縄文を地文に沈線による磨消渦巻文を施文する。10~12・14は縄文を地文に2もしくは3本一組の沈線による懸垂文を垂下させる。13は連弧文土器の胴部破片。撫糸を地文に平行沈線による弧状文を施文する。14は単節RLを地文に単沈線による蛇行懸垂文と両行懸垂文を垂下させる。16は深鉢底部付近の破片。縄文を地文に平行沈線の懸垂文を垂下させる。17は浅鉢の胴部破片。沈線による弧状文を描出する。赤彩が施されている。加曾利E2式。



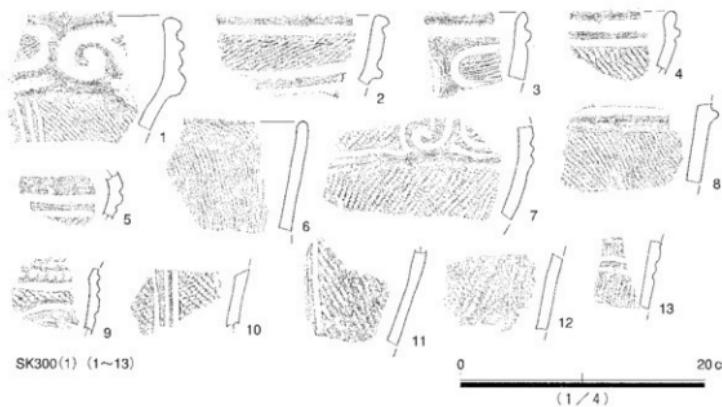
SK297(1~12)



SK298(1~6)



SK299(1~7)



SK300(1) (1~13)

0 20 cm
(1/4)

Fig. 209 土坑SK297・298・299・300(1)出土遺物

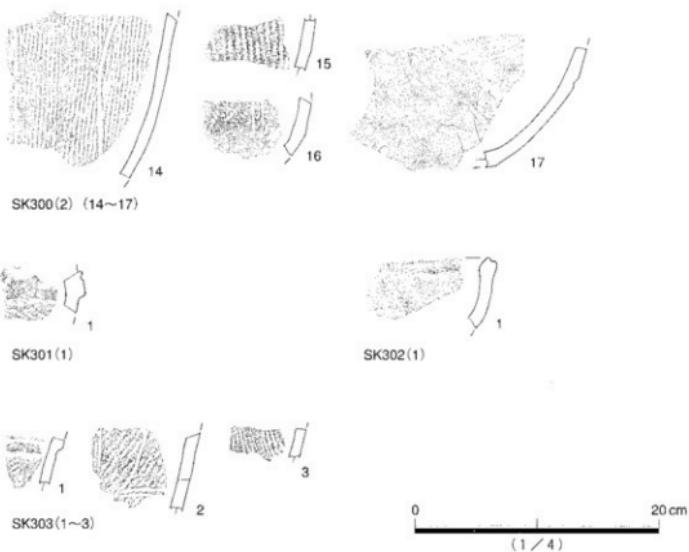


Fig. 210 土坑SK300(2)・301・302・303出土遺物

土坑SK301出土遺物 (Fig.210-1)

土器片が出土している。1は深鉢の頸部付近の破片。貼付隆帯による区画文。加曾利E1式。

土坑SK302出土遺物 (Fig.210-1)

土器片が出土している。1は浅鉢の口縁部破片。口縁部は内湾気味に立ち上がる。口唇部に凹帯が巡る。加曾利E式。

土坑SK303出土遺物 (Fig.210-1~3)

土器片が出土している。1は深鉢の頸部破片。貼付隆帯による|×両文。2は縄文を地文に沈線による意匠文が施文される。加曾利E1式。

(小川和博)

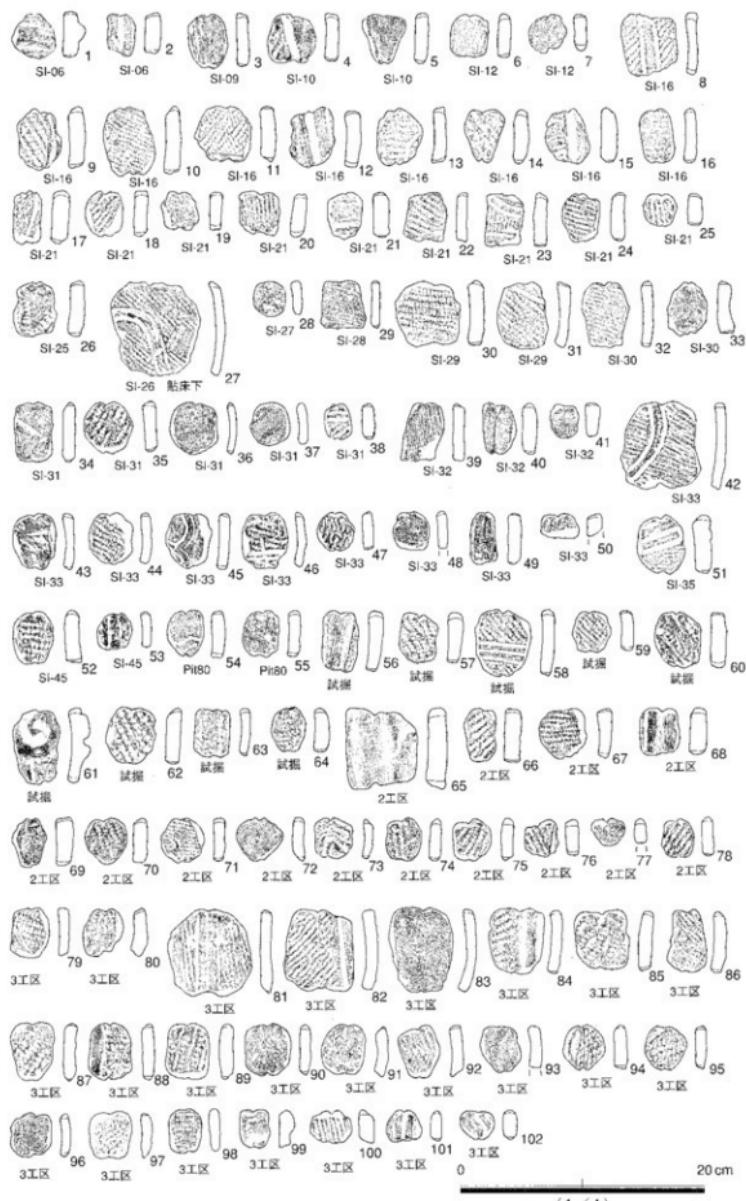


Fig. 211 繩文時代遺構出土土器片錐・土製円盤 (1)

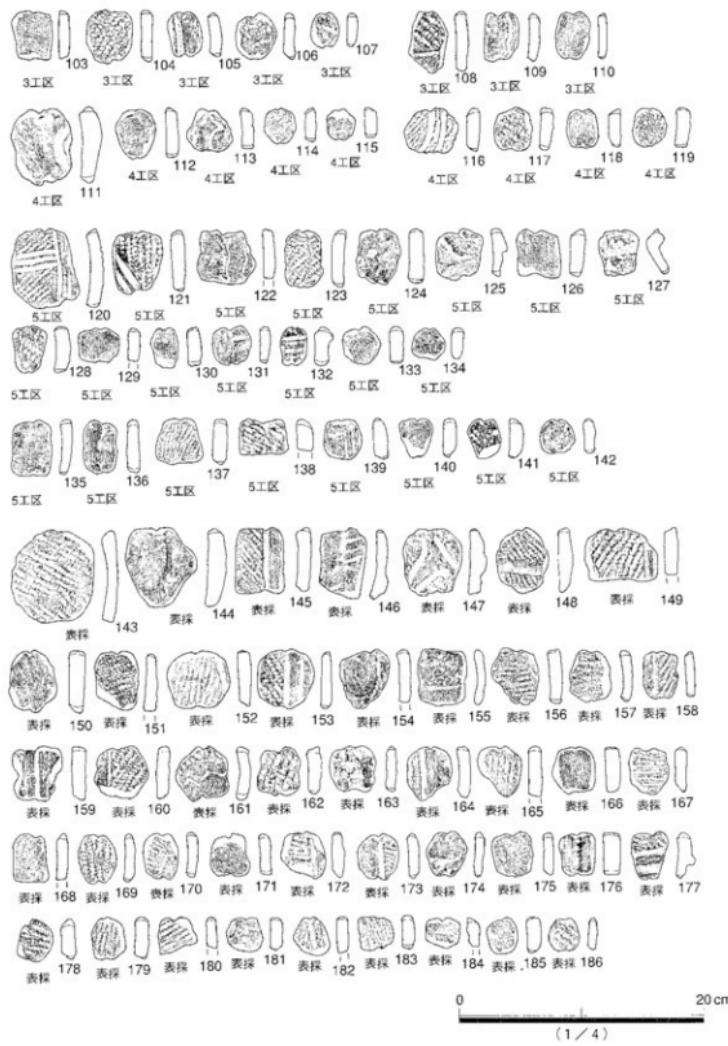


Fig. 212 繪文時代遺構外出土土器片錘・土製円盤 (2)

1. 土器片鉢・土製円盤計測一覧表

番号	遺構 番号	國版番号	計測値(cm)(g)			部位	加工状態	形態	切込等の状態	
			長さ	幅	厚さ					
1	SB07	Fig. 29.8	3.92	3.55	0.74	12.50	側部	一部研磨	楕円形	長輪に一对
2	SB07	Fig. 29.9	4.36	4.27	1.21	21.54	側部	打削調整	四形	内盤
3	SH3	Fig. 30.15	3.49	3.13	1.51	20.58	側部	打削調整	方形	長輪に一对
4	SH3	Fig. 30.16	2.92	2.73	1.10	9.60	側部	打削調整	楕円形	長輪に一对
5	SH3	Fig. 30.17	4.70	4.23	1.05	30.12	側部	打削調整	長方形	長輪に一对
6	SH3	Fig. 30.18	5.33	3.79	1.08	30.76	側部	打削調整	良方形	長輪に一对
7	SH3	Fig. 30.19	(3.26)	4.93	0.99	(20.36)	側部	打削調整	楕円形	長輪に一对・欠損
8	SH15	Fig. 30.10	5.46	3.89	1.23	30.44	口縁部	一部研磨	楕円形	長輪に一对
9	S20	Fig. 30.7	(3.80)	4.45	0.84	(14.56)	側部	打削調整	不整円形	長輪に一对・欠損
10	S22	Fig. 31.23	2.68	2.66	1.06	10.34	側部	打削調整	方形	長輪に一对
11	S22	Fig. 31.24	3.34	2.65	1.25	11.06	口縁部	一部研磨	長方形	長輪に一对
12	S22	Fig. 31.25	(3.16)	3.86	1.10	(14.28)	側部	研磨	楕円形	長輪に一对・欠損
13	S23	Fig. 32.52	3.23	2.76	0.99	9.52	側部	打削調整	楕円形	長輪に一对
14	S23	Fig. 32.53	3.55	3.19	0.75	9.56	側部	打削調整	楕円形	長輪に一对
15	S23	Fig. 32.54	3.25	3.50	1.06	13.44	側部	一部研磨	不整円形	長輪に一对
16	S23	Fig. 32.55	4.40	3.12	1.12	16.78	側部	一部研磨	台形	長輪に一对
17	S23	Fig. 32.56	3.34	2.56	1.27	12.34	側部	研磨	楕円形	長輪に一对
18	S23	Fig. 32.57	3.16	2.79	1.20	12.96	側部	研磨	楕円形	長輪に一对
19	S23	Fig. 32.58	2.76	2.55	1.42	11.31	口縁部	打削調整	方形	長輪に一对
20	S36	Fig. 33.18	3.76	3.25	1.10	17.04	山形底	打削調整	長方形	長輪に一对
21	S36	Fig. 33.19	3.16	3.10	0.94	12.40	側部	打削調整	楕円形	長輪に一对
22	S37	Fig. 33.12	3.19	2.38	0.96	8.96	側部	研磨	楕円形	長輪に一对
23	S38	Fig. 34.8	3.85	2.61	1.11	13.16	側部	打削調整	良方形	長輪に一对
24	S38	Fig. 34.9	2.60	2.01	0.95	6.14	側部	打削調整	長方形	長輪に一对
25	S40	Fig. 34.23	3.25	3.18	1.31	15.10	側部	一部研磨	方形	長輪に一对
26	S40	Fig. 34.24	3.49	4.09	1.26	21.02	側部	一部研磨	長方形	長輪に一对
27	S40	Fig. 34.25	4.13	3.44	1.10	22.22	側部	一部研磨	良方形	長輪に一对
28	S40	Fig. 34.26	2.70	2.28	1.10	8.66	側部	一部研磨	楕円形	長輪に一对
29	S40	Fig. 34.27	3.66	3.53	1.05	14.42	口縁部	打削調整	方形	長輪に一对
30	S40	Fig. 34.28	4.88	5.20	1.08	31.60	側部	打削調整	円形	刀彫
31	S41	Fig. 35.31	5.26	2.08	1.30	26.38	側部	一部研磨	長方形	長輪に一对
32	S41	Fig. 35.32	4.87	4.81	1.83	35.76	底部付近	一部研磨	楕円形	長輪に一对
33	S41	Fig. 35.33	4.14	4.15	1.25	28.07	側部	打削調整	方形	長輪に一对
34	S41	Fig. 35.34	3.41	3.65	1.08	15.50	側部	打削調整	不整円形	長輪に一对
35	S41	Fig. 35.35	3.70	3.54	0.68	14.17	側部	一部研磨	楕円形	長輪に一对
36	S41	Fig. 35.36	3.65	3.20	1.27	17.94	側部	一部研磨	楕円形	長輪に一对
37	S41	Fig. 35.37	3.67	3.33	1.15	15.02	側部	打削調整	楕円形	長輪に一对
38	S41	Fig. 35.38	3.51	3.45	0.89	12.10	側部	打削調整	楕円形	長輪に一对
39	S41	Fig. 35.39	3.53	2.36	0.68	9.99	側部	打削調整	長方形	長輪に一对
40	S41	Fig. 35.40	3.04	2.43	1.07	10.67	側部	打削調整	長方形	長輪に一对
41	S41	Fig. 35.41	2.82	2.70	0.93	7.89	側部	打削調整	楕円形	長輪に一对
42	S41	Fig. 35.42	2.81	3.01	0.73	7.09	側部	打削調整	台形	長輪に一对
43	S41	Fig. 35.43	(2.59)	2.34	0.77	(4.76)	側部	打削調整	台形	長輪に一对・欠損
44	S42	Fig. 36.24	5.48	3.67	0.87	(18.62)	側部	打削調整	長方形	長輪に一对・欠損
45	S42	Fig. 36.25	3.99	2.97	0.92	12.48	側部	打削調整	楕円形	長輪に一对
46	S42	Fig. 36.26	3.77	3.37	0.92	12.29	側部	打削調整	長方形	長輪に一对
47	S43	Fig. 36.11	5.49	3.84	1.26	31.74	口縁部	打削調整	長方形	長輪に一对
48	S43	Fig. 36.12	3.80	3.50	0.85	12.43	側部	打削調整	楕円形	長輪に一对
49	S43	Fig. 36.13	3.88	2.37	1.04	11.95	側部	一部研磨	良方形	長輪に一对
50	S43	Fig. 36.14	3.18	2.45	1.35	10.41	側部	打削調整	長方形	長輪に一对
51	S43	Fig. 36.15	2.90	2.67	0.91	7.44	側部	打削調整	台形	長輪に一对
52	S44	Fig. 37.10	3.22	2.83	1.05	11.48	側部	打削調整	良方形	長輪に一对
53	S46	Fig. 37.5	2.57	2.50	0.83	7.03	側部	打削調整	方形	長輪に一对
54	SK08	Fig. 132.54	4.29	3.84	1.14	21.42	口縁部	打削調整	長方形	長輪に一对
55	SK08	Fig. 132.55	3.89	2.33	1.06	13.20	口縁部	打削調整	長方形	長輪に一对
56	SK08	Fig. 132.56	4.39	4.05	1.08	23.02	側部	打削調整	方形	長輪に一对
57	SK08	Fig. 132.57	4.56	3.92	1.24	29.28	側部	打削調整	長方形	長輪に一对
58	SK08	Fig. 132.58	4.25	2.55	1.23	19.48	側部	一部研磨	長方形	長輪に一对
59	SK08	Fig. 132.59	(5.12)	4.99	1.44	(45.30)	側部	打削調整	楕円形	長輪に一对・欠損
60	SK08	Fig. 132.60	3.40	3.52	1.43	18.92	側部	一部研磨	圓形	長輪に一对
61	SK08	Fig. 132.61	4.11	3.27	1.03	17.70	側部	研磨	楕円形	内盤
62	SK08	Fig. 132.62	2.96	4.73	1.47	23.42	側部	研磨	圓形	内盤
63	SK08	Fig. 132.63	3.90	3.51	1.22	19.40	側部	研磨	圓形	内盤
64	SK09	Fig. 132.8	(3.02)	3.01	1.03	(10.28)	側部	打削調整	台形	長輪に一对・欠損
65	SK23	Fig. 134.9	3.66	3.26	1.12	14.78	側部	打削調整	長方形	長輪に一对
66	SK25	Fig. 134.11	(4.96)	5.21	1.10	(42.86)	側部	打削調整	長方形	長輪に一对・欠損
67	SK25	Fig. 134.12	5.61	2.92	1.30	26.98	側部	打削調整	長方形	長輪に一对
68	SK23	Fig. 134.13	4.27	3.27	1.53	21.20	側部	打削調整	長方形	長輪に一对
69	SK25	Fig. 134.14	4.53	3.44	1.14	23.20	側部	研磨	長方形	長輪に一对

番号	遺構 番号	図版番号	計測値 (cm) (g)				部位	加工状態	形態	切込等の状況
			長さ	幅	厚さ	重量				
76	SK25	Fig. 134-15	4.30	3.60	1.21	22.84	頭部	研磨	楕円形	長軸に一対
71	SK25	Fig. 134-16	3.94	2.80	1.09	15.56	頭部	研磨	楕円形	長軸に一対
72	SK25	Fig. 134-17	3.96	2.99	1.03	15.70	頭部	研磨	長方形	長軸に一対
73	SK25	Fig. 134-18	(2.06)	2.11	0.88	(4.04)	頭部	打削調整	長方形	長軸に一対・欠損
74	SK28	Fig. 135-5	(4.44)	3.16	1.12	(16.30)	頭部	打削調整	長方形	長軸に一対・欠損
75	SK29	Fig. 135-7	4.38	3.39	1.17	22.80	頭部	打削調整	長方形	長軸に一対
76	SK29	Fig. 135-8	4.19	3.79	1.05	21.08	頭部	一部研磨	楕円形	長軸に一対
77	SK29	Fig. 135-9	2.97	2.42	0.93	7.72	頭部	打削調整	楕円形	長軸に一対
78	SK30	Fig. 135-23	5.85	4.36	1.08	35.62	頭部	打削調整	楕円形	長軸に一対
79	SK30	Fig. 135-24	4.80	2.80	1.14	20.72	頭部	一部研磨	楕円形	長軸に一対
80	SK30	Fig. 135-25	2.77	2.76	0.94	9.72	頭部	打削調整	円形	長軸に一対
81	SK30	Fig. 135-26	2.63	2.70	1.82	8.20	頭部	一部研磨	楕円形	初期に一対
82	SK31	Fig. 136-15	4.50	3.94	0.67	14.76	頭部	一部研磨	楕円形	長軸に一対
83	SK31	Fig. 136-16	4.66	3.64	1.30	19.48	頭部	打削調整	長方形	長軸に一対
84	SK31	Fig. 136-17	3.26	3.91	1.02	17.82	頭部	一部研磨	長方形	長軸に一対
85	SK31	Fig. 136-18	3.80	3.29	1.29	16.34	頭部	一部研磨	楕円形	長軸に一対
86	SK31	Fig. 136-19	3.02	2.43	0.87	7.76	頭部	打削調整	長方形	長軸に一対
87	SK31	Fig. 136-20	2.64	3.89	0.96	10.52	頭部	一部研磨	長方形	長軸に一対・欠損
88	SK31	Fig. 136-21	(2.55)	2.66	0.81	(6.58)	頭部	研磨	円形	内側
89	SK32	Fig. 136-24	3.81	3.78	0.98	18.30	頭部	研磨	楕円形	長軸に一対
90	SK32	Fig. 136-25	3.09	2.90	0.76	8.44	頭部	研磨	楕円形	長軸に一対
91	SK32	Fig. 136-26	2.25	2.25	0.86	6.24	頭部	一部研磨	方形	短軸に一対
92	SK32	Fig. 136-27	(3.74)	3.68	1.11	(16.38)	頭部	打削調整	楕円形	長軸に一対・欠損
93	SK33	Fig. 137-17	4.16	3.16	0.92	15.36	頭部	打削調整	長方形	長軸に一対
94	SK33	Fig. 137-18	4.38	3.63	1.01	22.00	頭部	研磨	楕円形	長軸に一対
95	SK33	Fig. 137-19	4.54	3.09	1.51	22.02	頭部	打削調整	長方形	長軸に一対
96	SK33	Fig. 137-20	2.64	3.12	0.99	10.92	頭部	研磨	長方形	短軸に一対
97	SK34	Fig. 137-17	4.38	2.31	1.14	12.98	頭部	打削調整	長方形	長軸に一対
98	SK34	Fig. 137-18	3.94	2.57	1.03	14.18	頭部	打削調整	長方形	長軸に一対
99	SK34	Fig. 137-19	(4.03)	3.43	0.99	(14.00)	頭部	一部研磨	長方形	長軸に一対・欠損
100	SK34	Fig. 137-20	3.88	2.87	1.32	16.84	頭部	一部研磨	長方形	長軸に一対
101	SK34	Fig. 137-21	3.28	3.14	1.10	(11.42)	頭部	一部研磨	長方形	長軸に一対・欠損
102	SK34	Fig. 137-22	(2.95)	0.84	0.75	(6.00)	頭部	一部研磨	楕円形	長軸に一対・欠損
103	SK34	Fig. 137-23	3.51	2.59	1.02	(9.92)	頭部	一部研磨	方形	長軸に一対・欠損
104	SK34	Fig. 137-24	2.96	2.53	1.16	9.08	頭部	打削調整	楕円形	長軸に一対・欠損
105	SK35	Fig. 138-32	3.93	3.52	1.02	16.36	頭部	一部研磨	長方形	長軸に一対
106	SK35	Fig. 138-33	4.00	3.09	1.15	17.20	頭部	打削調整	長方形	長軸に一対
107	SK35	Fig. 138-34	3.53	2.77	1.08	12.70	頭部	一部研磨	長方形	長軸に一対
108	SK35	Fig. 138-35	3.46	3.24	1.32	16.92	頭部	一部研磨	方形	長軸に一対
109	SK35	Fig. 138-36	3.55	3.21	1.45	17.60	頭部	打削調整	楕円形	長軸に一対
110	SK35	Fig. 138-37	3.20	2.86	1.06	10.56	頭部	研磨	長方形	長軸に一対
111	SK35	Fig. 138-38	3.32	2.68	1.09	12.34	頭部	一部研磨	長方形	長軸に一対
112	SK35	Fig. 138-39	3.73	3.58	0.96	15.26	頭部	研磨	円形	長軸に一対
113	SK35	Fig. 138-40	3.66	2.92	0.91	12.66	頭部	一部研磨	方形	短軸に一対
114	SK35	Fig. 138-41	3.69	2.31	0.99	10.62	頭部	研磨	長方形	長軸に一対
115	SK35	Fig. 138-42	3.33	3.39	0.82	11.78	頭部	一部研磨	長方形	長軸に一対
116	SK40	Fig. 139-10	2.68	1.85	0.96	6.14	頭部	一部研磨	長方形	長軸に一対
117	SK41	Fig. 142-20	5.55	4.24	1.69	42.28	頭部	打削調整	長方形	長軸に一対
118	SK41	Fig. 142-21	5.87	4.47	1.39	39.58	頭部	打削調整	楕円形	長軸に一対
119	SK41	Fig. 142-22	5.22	5.29	1.60	45.90	頭部	打削調整	不整方形	短軸に一対
120	SK41	Fig. 142-23	6.22	4.57	1.22	41.92	頭部	打削調整	長方形	長軸に一対
121	SK41	Fig. 142-24	5.49	4.20	1.38	36.34	口縁部	打削調整	長方形	長軸に一対
122	SK41	Fig. 142-25	6.18	4.93	1.65	42.28	頭部	打削調整	楕円形	長軸に一対
123	SK41	Fig. 142-26	4.10	3.65	1.23	19.54	頭部	打削調整	楕円形	長軸に一対
124	SK41	Fig. 142-27	4.09	3.15	1.05	13.64	頭部	打削調整	長方形	長軸に一対
125	SK41	Fig. 142-28	4.11	3.67	1.14	20.28	頭部	一部研磨	方形	長軸に一対
126	SK41	Fig. 142-29	3.49	3.69	1.18	15.20	頭部	一部研磨	不整方形	長軸に一対
127	SK41	Fig. 142-30	4.13	3.97	1.30	24.00	口縁部	打削調整	方形	長軸に一対
128	SK41	Fig. 142-31	4.31	4.09	1.12	26.58	頭部	打削調整	方形	長軸に一対
129	SK41	Fig. 142-32	3.51	2.86	0.85	11.06	頭部	一部研磨	長方形	長軸に一対
130	SK41	Fig. 142-33	3.94	3.94	1.17	16.52	頭部	打削調整	方形	長軸に一対
131	SK41	Fig. 142-34	3.66	3.12	0.87	12.50	頭部	研磨	楕円形	長軸に一対
132	SK41	Fig. 142-35	3.67	3.08	0.94	14.22	頭部	一部研磨	長方形	長軸に一対
133	SK41	Fig. 142-36	4.25	3.08	0.83	13.46	頭部	一部研磨	楕円形	長軸に一対
134	SK41	Fig. 142-37	3.21	3.65	1.41	(13.12)	頭部	一部研磨	楕円形	短軸に一対
135	SK41	Fig. 142-38	4.94	2.82	0.76	12.56	頭部	研磨	楕円形	長軸に一対
136	SK41	Fig. 142-39	4.50	2.34	1.04	13.18	頭部	打削調整	楕円形	長軸に一対
137	SK41	Fig. 142-40	3.95	3.14	1.31	17.16	頭部	打削調整	方形	長軸に一対・欠損
138	SK41	Fig. 142-41	(2.93)	3.59	1.09	(10.44)	頭部	打削調整	方形	長軸に一対・欠損
139	SK41	Fig. 142-42	(3.18)	4.08	0.86	(10.34)	頭部	一部研磨	方形	長軸に一対・欠損
140	SK42	Fig. 139-9	4.60	2.85	1.12	18.36	頭部	打削調整	長方形	長軸に一対

番号	通称 番号	国版番号	計測値 (cm), (g)				部位	加工状態	形態	切込等の状態
			長さ	幅	厚さ	重量				
141	SK43	Fig. 142-17	3.65	3.49	0.95	13.30	胴部	打削調整	方形	長軸に一対
142	SK43	Fig. 142-18	3.50	2.89	1.03	12.54	胴部	一部研磨	楕円形	長軸に一対
143	SK44	Fig. 143-8	4.08	2.53	1.11	14.98	胴部	研磨	長方形	長軸に一対
144	SK44	Fig. 143-9	6.24	4.92	0.93	(31.12)	胴部	打削調整	長方形	長軸に一対・欠損
145	SK47	Fig. 144-22	5.99	3.86	1.08	19.46	胴部	一部研磨	円形	長軸に一対
146	SK47	Fig. 144-23	4.58	4.07	0.82	17.18	胴部	打削調整	楕円形	長軸に一対
147	SK47	Fig. 144-24	3.88	3.39	1.52	19.42	胴部	研磨	楕円形	長軸に一対
148	SK47	Fig. 144-25	3.77	2.88	1.09	15.78	胴部	一部研磨	楕円形	長軸に一対
149	SK47	Fig. 144-26	3.46	3.11	1.02	13.58	胴部	研磨	楕円形	長軸に一対
150	SK47	Fig. 144-27	3.93	2.77	1.37	16.08	胴部	研磨	長方形	長軸に一対
151	SK47	Fig. 144-28	(2.51)	4.02	1.09	(11.98)	胴部	部研磨	方形	長軸に一対・欠損
152	SK48	Fig. 144-10	9.80	4.81	1.14	70.00	口締部	一部研磨	長楕円形	長軸に一対
153	SK48	Fig. 144-11	3.98	2.30	1.09	14.70	胴部	一部研磨	長方形	長軸に一対
154	SK48	Fig. 144-12	4.79	3.61	0.90	21.22	胴部	打削調整	楕円形	長軸に一対
155	SK48	Fig. 144-13	2.85	2.50	0.71	6.12	胴部	打削調整	円形	長軸に一対
156	SK50	Fig. 144-10	3.51	4.04	1.16	29.82	胴部	一部研磨	楕円形	長軸に一対
157	SK51	Fig. 145-13	4.06	3.24	1.26	20.14	胴部	一部研磨	長方形	長軸に一対
158	SK51	Fig. 145-14	3.33	2.89	0.87	9.54	胴部	打削調整	楕円形	長軸に一対
159	SK51	Fig. 145-15	4.07	3.11	1.17	16.60	胴部	打削調整	楕円形	長軸に一対
160	SK51	Fig. 145-16	3.53	3.16	1.08	17.38	胴部	打削調整	楕円形	長軸に一対
161	SK51	Fig. 145-17	2.76	2.89	1.18	10.06	胴部	打削調整	不整円形	長軸に一対
162	SK55	Fig. 145-10	3.39	2.69	1.03	10.68	胴部	打削調整	楕円形	長軸に一対
163	SK56	Fig. 145-10	6.23	4.07	1.17	(37.46)	胴部	打削調整	楕方形	長軸に一対・欠損
164	SK56	Fig. 145-11	4.11	3.35	1.17	20.14	胴部	一部研磨	楕円形	長軸に一対
165	SK56	Fig. 145-12	2.94	2.99	1.14	10.34	口締部	研磨	不整円形	長軸に一対
166	SK62	Fig. 147-10	3.69	3.40	0.88	14.12	胴部	打削調整	方形	長軸に一対
167	SK63	Fig. 147-11	4.36	3.44	0.97	16.64	胴部	打削調整	長方形	長軸に一対
168	SK63	Fig. 147-12	2.62	2.73	1.36	(8.36)	胴部	研磨	不整円形	長軸に一対・欠損
169	SK67	Fig. 148-13	3.89	3.10	0.80	10.12	胴部	一部研磨	椭円形	長軸に一対
170	SK67	Fig. 148-14	2.78	2.73	0.80	10.12	胴部	打削調整	円形	長軸に一対
171	SK67	Fig. 148-15	2.71	2.93	1.04	9.14	胴部	研磨	円形	長軸に一対
172	SK69	Fig. 149-25	3.31	2.95	1.05	11.52	胴部	打削調整	長方形	長軸に一対
173	SK69	Fig. 149-26	3.71	2.26	1.26	13.54	胴部	打削調整	長方形	長軸に一対
174	SK71	Fig. 150-22	4.65	3.38	0.68	14.35	胴部	打削調整	楕円形	長軸に一対
175	SK71	Fig. 150-23	6.07	4.39	1.15	30.14	胴部	部研磨	楕円形	長軸に一対
176	SK71	Fig. 150-24	4.36	3.19	0.78	14.88	胴部	打削調整	楕円形	長軸に一対
177	SK72	Fig. 150-20	3.94	3.80	0.85	17.72	胴部	研磨	楕円形	長軸に一対
178	SK72	Fig. 150-21	4.19	3.57	1.24	16.34	胴部	一部研磨	楕円形	長軸に一対
179	SK72	Fig. 150-22	3.07	2.13	0.98	7.70	胴部	部研磨	長方形	長軸に一対
180	SK74	Fig. 150-10	3.39	3.22	1.08	13.06	胴部	打削調整	不整円形	長軸に一対
181	SK74	Fig. 150-11	2.81	3.31	0.93	11.74	胴部	研磨	楕円形	長軸に一対
182	SK74	Fig. 150-12	3.00	2.81	1.08	10.38	胴部	打削調整	台形	長軸に一対
183	SK75	Fig. 151-22	3.61	3.89	0.92	15.12	胴部	一部研磨	円形	長軸に一対
184	SK75	Fig. 151-23	3.46	3.37	1.38	19.74	胴部	研磨	円形	長軸に一対
185	SK75	Fig. 151-24	4.14	3.78	1.14	17.84	胴部	研磨	円形	内盛
186	SK76	Fig. 151-5	5.70	3.91	0.87	21.84	胴部	打削調整	楕円形	長軸に一対
187	SK76	Fig. 151-6	3.84	3.45	1.13	19.12	胴部	一部研磨	楕円形	長軸に一対
188	SK76	Fig. 151-7	4.13	3.00	0.89	14.22	胴部	一部研磨	長方形	長軸に一対
189	SK76	Fig. 151-8	3.34	2.74	0.94	11.52	胴部	一部研磨	長方形	長軸に一対
190	SK77	Fig. 151-14	3.19	2.69	0.91	10.28	胴部	部研磨	長方形	長軸に一対
191	SK77	Fig. 151-15	(3.85)	3.54	1.12	(14.18)	胴部	一部研磨	長方形	長軸に一対・欠損
192	SK77	Fig. 151-16	6.11	4.83	1.03	45.10	II縁部	打削調整	長方形	長軸に一対
193	SK77	Fig. 152-7	3.71	3.59	1.42	20.88	胴部	打削調整	円形	長軸に一対
194	SK79	Fig. 152-8	4.27	3.42	1.07	18.20	胴部	打削調整	楕円形	長軸に一対
195	SK80	Fig. 152-10	3.66	3.09	1.19	14.98	胴部	一部研磨	長方形	長軸に一対
196	SK81	Fig. 152-10	3.93	2.99	0.99	12.84	胴部	打削調整	長方形	長軸に一対
197	SK82	Fig. 153-4	3.11	2.80	1.01	11.56	胴部	部研磨	楕円形	長軸に一対
198	SK83	Fig. 153-4	4.12	3.62	0.82	15.48	胴部	打削調整	楕円形	長軸に一対
199	SK83	Fig. 153-5	3.57	2.71	0.83	9.66	I縁部	打削調整	長方形	長軸に一対
200	SK88	Fig. 154-5	4.16	2.66	1.12	16.30	胴部	部研磨	長方形	長軸に一対
201	SK92	Fig. 155-8	3.78	3.58	0.83	14.28	胴部	部研磨	楕円形	長軸に一対
202	SK92	Fig. 155-9	3.34	2.70	1.16	11.98	胴部	研磨	楕円形	長軸に一対
203	SK92	Fig. 155-10	3.64	3.35	0.72	11.68	胴部	研磨	楕円形	長軸に一対
204	SK92	Fig. 155-11	3.32	3.45	0.99	12.72	胴部	部研磨	円形	長軸に一対
205	SK94	Fig. 156-18	3.79	2.83	0.86	11.28	胴部	部研磨	楕円形	長軸に一対
206	SK94	Fig. 156-19	3.44	3.13	0.98	15.22	胴部	研磨	方形	長軸に一対
207	SK95	Fig. 156-5	6.71	6.24	1.33	58.40	胴部	一部研磨	楕円形	長軸に一対
208	SK95	Fig. 156-6	7.13	6.05	1.34	77.50	胴部	部研磨	長方形	長軸に一対
209	SK95	Fig. 156-7	6.62	5.89	1.36	63.50	胴部	部研磨	楕円形	長軸に一対
210	SK95	Fig. 156-8	7.92	5.02	1.22	62.50	胴部	一部研磨	楕円形	長軸に一対
211	SK97	Fig. 157-5	3.50	3.15	1.52	17.60	胴部	一部研磨	円形	長軸に一対

番号	選別番号	圓筒番号	計 長さ	幅	厚さ	重さ	部位	加工状態	形態	切込等の状態
212	SK97	Fig. 157-6	3.54	2.67	0.89	10.42	一部研磨	楕円形	長輪に・対	
213	SK99	Fig. 157-11	3.62	3.15	0.97	13.82	側部	一部研磨	長方形	長輪に・対
214	SK99	Fig. 157-12	3.94	2.28	1.14	15.30	側部	一部研磨	長方形	長輪に・対
215	SK99	Fig. 157-13	2.66	1.96	0.98	5.76	側部	一部研磨	楕円形	長輪に・対
216	SK101	Fig. 158-5	4.25	3.36	1.04	17.26	側部	一部研磨	楕円形	長輪に・対
217	SK101	Fig. 158-6	3.13	2.89	1.18	13.00	側部	一部研磨	楕円形	長輪に・対
218	SK102	Fig. 158-13	3.48	4.42	0.99	15.24	側部	打削調整	三角形	短輪に・対・再整形
219	SK102	Fig. 158-14	2.56	2.48	1.09	5.68	側部	一部研磨	楕円形	長輪に・対
220	SK103	Fig. 159-20	4.77	3.83	1.32	33.54	側部	打削調整	長方形	長輪に・対
221	SK103	Fig. 159-21	4.52	3.89	0.95	22.06	側部	打削調整	長方形	長輪に・対
222	SK103	Fig. 159-22	4.80	4.51	1.37	26.10	11縫部	打削調整	楕円形	長輪に・対
223	SK103	Fig. 159-23	4.35	2.07	0.86	10.98	側部	一部研磨	不整円形	長輪に・対
225	SK103	Fig. 159-24	2.94	2.94	1.28	12.74	側部	打削調整	長方形	長輪に・対
225	SK103	Fig. 159-25	2.94	3.37	1.22	14.52	側部	一部研磨	円形	短輪に・対
226	SK103	Fig. 159-26	3.66	3.11	0.97	9.76	側部	打削調整	三角形	長輪に・対
227	SK103	Fig. 159-27	2.58	2.16	1.31	9.22	側部	研削	楕円形	長輪に・対
228	SK105	Fig. 159-8	4.19	3.40	1.05	18.34	側部	打削調整	楕円形	長輪に・対
229	SK105	Fig. 159-9	3.31	2.33	1.13	11.32	側部	一部研磨	長方形	長輪に・対
230	SK107	Fig. 160-14	4.05	4.02	1.01	20.20	側部	一部研磨	円形	長輪に・対
231	SK107	Fig. 160-15	3.90	3.79	0.86	11.80	側部	打削調整	不整円形	長輪に・対
232	SK108	Fig. 160-7	3.07	3.14	1.09	13.78	側部	一部研磨	方形	長輪に・対
233	SK113	Fig. 161-7	3.67	3.34	0.84	(1.24)	側部	一部研磨	楕円形	長輪に・対・欠損
234	SK114	Fig. 162-25	3.32	3.49	1.13	15.78	側部	研削	円形	運転に・対
235	SK114	Fig. 162-26	3.63	2.89	0.93	12.72	側部	一部研磨	長方形	長輪に・対
236	SK114	Fig. 162-27	3.49	2.51	1.31	12.70	側部	研磨	長方形	長輪に・対
237	SK114	Fig. 162-28	(3.68)	3.66	0.78	(14.18)	側部	打削調整	長方形	長輪に・対・欠損
238	SK117	Fig. 162-5	3.93	3.79	1.25	21.26	側部	打削調整	不整円形	長輪に・対
239	SK118	Fig. 163-6	3.96	2.61	1.01	13.50	側部	一部研磨	楕円形	長輪に・対
240	SK118	Fig. 163-7	3.69	2.59	0.97	11.28	側部	一部研磨	長方形	長輪に・対
241	SK118	Fig. 163-8	3.93	3.28	1.09	16.06	側部	打削調整	楕円形	長輪に・対
242	SK122	Fig. 164-11	6.99	4.28	1.70	49.82	側部	打削調整	長方形	長輪に・対
243	SK122	Fig. 164-12	4.63	4.21	1.13	22.30	側部	打削調整	楕円形	長輪に・対
244	SK122	Fig. 164-13	3.96	3.08	0.95	16.52	側部	一部研磨	楕円形	長輪に・対
245	SK124	Fig. 164-6	3.39	(3.08)	1.08	13.84	側部	研磨	長方形	長輪に・対
246	SK126	Fig. 165-3	(2.56)	2.73	1.49	(10.02)	側部	打削調整	円形	長輪に・対・欠損
247	SK127	Fig. 165-5	(3.97)	4.18	1.22	(20.44)	口縫部	研磨	方形	長輪に・対・欠損
248	SK127	Fig. 165-6	2.64	2.88	1.24	10.10	側部	一部研磨	円形	長輪に・対
249	SK136	Fig. 166-22	3.48	2.99	0.90	11.58	側部	一部研磨	方彌形	長輪に・対
250	SK143	Fig. 168-7	5.55	4.09	1.19	28.36	11縫部	打削調整	楕円形	長輪に・対
251	SK143	Fig. 168-8	4.54	4.18	1.16	26.02	側部	打削調整	方彌形	長輪に・対
252	SK143	Fig. 168-9	4.06	3.00	0.76	13.30	側部	一部研磨	長方形	長輪に・対
253	SK143	Fig. 168-10	4.06	4.28	1.27	21.52	11縫部	打削調整	円形	長輪に・対
254	SK146	Fig. 169-13	3.24	2.59	1.25	12.88	側部	研磨	長方形	長輪に・対
255	SK146	Fig. 169-14	2.42	2.69	1.02	8.46	側部	研磨	円形	長輪に・対
256	SK146	Fig. 169-15	3.24	3.11	1.46	16.24	側部	研磨	台形	長輪に・対
257	SK149	Fig. 170-12	3.83	3.44	1.06	17.38	側部	研磨	楕円形	長輪に・対
258	SK149	Fig. 170-13	3.56	3.28	0.89	12.38	側部	研磨	方彌形	長輪に・対
259	SK151	Fig. 170-15	4.06	2.91	0.92	15.14	側部	研磨	圓形	長輪に・対
260	SK151	Fig. 170-16	(3.18)	3.24	0.95	(10.74)	側部	一部研磨	円形	長輪に・対・欠損
261	SK152	Fig. 170-5	(2.73)	2.61	1.03	(8.18)	側部	一部研磨	円形	長輪に・対・欠損
262	SK154	Fig. 171-8	3.33	3.51	0.92	13.36	側部	一部研磨	方形	長輪に・対
263	SK154	Fig. 171-9	4.59	3.38	0.96	18.61	側部	打削調整	長方形	長輪に・対
264	SK159	Fig. 172-5	5.22	6.77	0.72	32.76	側部	打削調整	台形	短輪に・対
265	SK161	Fig. 173-7	3.69	5.90	0.77	19.78	側部	一部研磨	長方形	短輪に・対
266	SK164	Fig. 173-6	3.91	2.63	0.79	10.92	側部	研磨	楕円形	長輪に・対
267	SK168	Fig. 174-28	3.44	3.29	0.87	12.14	側部	一部研磨	不整円形	長輪に・対
268	SK169	Fig. 175-14	6.76	5.59	1.02	46.46	側部	一部研磨	楕円形	長輪に・対
269	SK169	Fig. 175-15	3.22	2.77	1.27	12.96	側部	研磨	楕円形	長輪に・対
270	SK169	Fig. 175-16	3.24	3.12	0.78	9.18	側部	一部研磨	不整円形	長輪に・対
271	SK169	Fig. 175-17	4.20	3.65	0.92	17.36	側部	一部研磨	楕円形	長輪に・対
272	SK169	Fig. 175-18	(3.75)	4.34	0.75	(13.04)	側部	一部研磨	楕円形	長輪に・対・欠損
273	SK170	Fig. 175-8	7.14	3.54	1.90	43.42	口縫部	一部研磨	長方形	長輪に・対
274	SK171	Fig. 175-15	5.15	3.57	1.43	21.68	側部	研磨	楕円形	長輪に・対
275	SK171	Fig. 175-16	3.49	2.61	1.26	12.46	側部	一部研磨	楕円形	長輪に・対
276	SK174	Fig. 176-15	5.61	3.76	1.09	27.24	側部	一部研磨	長方形	長輪に・対
277	SK174	Fig. 176-16	3.65	3.07	1.02	15.12	側部	打削調整	長方形	長輪に・対
278	SK174	Fig. 176-17	4.27	2.95	1.03	14.86	側部	一部研磨	楕円形	長輪に・対
279	SK174	Fig. 176-18	2.86	2.85	0.91	9.08	側部	一部研磨	円形	長輪に・対
280	SK182	Fig. 178-4	4.42	3.82	1.07	22.26	側部	研磨	長方形	長輪に・対
281	SK182	Fig. 178-5	3.85	3.85	0.91	16.60	側部	一部研磨	円形	長輪に・対
282	SK183	Fig. 178-17	3.49	2.55	1.03	10.68	側部	一部研磨	楕円形	長輪に・対

番号	造形 番号	図版番号	計測値 (cm) (g)				部位	加工状態	形状	切込等の状態
			長さ	幅	厚さ	重量				
283	SK186	Fig. 180-10	5.20	4.79	1.11	34.26	側部	研磨	長方形	長軸に一対
284	SK188	Fig. 181-17	6.49	5.65	1.04	53.64	1.翼部	研磨	長方形	長軸に一対
285	SK188	Fig. 181-18	6.18	5.71	1.07	57.52	側部	一部研磨	長方形	長軸に一対
286	SK188	Fig. 181-19	4.44	3.64	1.02	17.92	側部	一部研磨	楕円形	長軸に一対
287	SK188	Fig. 181-20	3.65	3.29	1.15	13.52	側部	一部研磨	楕円形	長軸に一対
288	SK188	Fig. 181-21	2.76	2.49	1.34	8.54	側部	一部研磨	楕円形	長軸に一対
289	SK188	Fig. 181-22	(3.62)	3.51	1.07	(15.82)	側部	一部研磨	長方形	長軸に一対・欠損
290	SK190	Fig. 182-16	3.82	2.75	1.04	14.76	側部	研磨	長方形	長軸に一対
291	SK190	Fig. 182-17	4.19	3.99	0.96	16.92	側部	研磨	円形	長軸に一対
292	SK190	Fig. 182-18	(2.09)	3.06	1.45	(10.80)	側部	研磨	長方形	長軸に一対・欠損
293	SK195	Fig. 183-12	3.79	4.21	1.20	19.72	側部	打削調整	不整円形	長軸に一対
294	SK195	Fig. 183-13	3.11	2.71	1.01	9.36	側部	研磨	三角形	長軸に一対
295	SK197	Fig. 184-12	7.08	5.39	1.44	57.30	側部	打削調整	長方形	長軸に一対
296	SK197	Fig. 184-13	3.57	3.20	1.10	13.96	側部	一部研磨	不整円形	長軸に一対
297	SK201	Fig. 185-18	3.89	3.42	1.18	18.64	側部	研磨	楕円形	長軸に一対
298	SK201	Fig. 185-19	3.23	2.39	1.11	10.64	側部	研磨	楕円形	長軸に一対
299	SK301	Fig. 187-54	5.95	2.59	1.66	25.92	1.翼部	研磨	長方形	長軸に一対
300	SK204	Fig. 187-55	4.23	3.52	1.19	19.12	口縁部	研磨	楕円形	長軸に一対
301	SK204	Fig. 187-56	3.37	2.64	0.89	10.02	側部	研磨	楕円形	長軸に一対
302	SK204	Fig. 187-57	4.10	3.15	1.17	18.68	側部	一部研磨	長方形	長軸に一対
303	SK204	Fig. 187-58	2.43	2.06	1.00	6.36	側部	一部研磨	長方形	長軸に一対
304	SK204	Fig. 187-59	3.16	2.67	1.00	10.18	側部	一部研磨	長方形	長軸に一対
305	SK204	Fig. 187-60	1.93	2.37	0.73	3.92	側部	打削調整	楕円形	翼軸に一対
306	SK205	Fig. 187-8	3.71	2.84	1.29	15.04	側部	打削調整	楕円形	長軸に一対
307	SK205	Fig. 187-9	3.49	2.76	0.77	10.60	側部	研磨	長方形	長軸に一対
308	SK205	Fig. 187-10	2.93	2.91	0.83	8.34	側部	研磨	楕円形	長軸に一対
309	SK205	Fig. 187-11	2.82	2.37	1.09	8.30	側部	一部研磨	長方形	長軸に一対
310	SK205	Fig. 187-12	2.20	2.16	1.15	6.46	側部	研磨	円形	長軸に一対
311	SK208	Fig. 188-16	4.20	4.12	1.27	28.10	側部	打削調整	方形	長軸に一対
312	SK208	Fig. 188-17	4.58	4.01	1.53	22.84	側部	一部研磨	椭円形	長軸に一対
313	SK210	Fig. 188-8	3.83	3.35	0.88	13.08	側部	打削調整	楕円形	長軸に一対
314	SK217	Fig. 190-27	4.70	4.55	1.26	29.22	側部	研磨	楕円形	長軸に一対
315	SK217	Fig. 190-28	3.73	3.73	0.97	12.26	1.翼部	打削調整	長方形	長軸に一対
316	SK217	Fig. 190-29	2.41	1.87	1.12	6.14	側部	一部研磨	楕円形	長軸に一対
317	SK221	Fig. 192-11	3.42	3.03	0.87	12.04	側部	研磨	長方形	長軸に一対
318	SK226	Fig. 192-16	2.89	2.84	1.02	9.34	側部	一部研磨	円形	長軸に一対
319	SK230	Fig. 193-3	3.59	3.49	0.80	11.36	側部	研磨	楕円形	長軸に一対
320	SK233	Fig. 193-4	3.43	3.21	1.17	12.20	側部	打削調整	長方形	長軸に一対
321	SK241	Fig. 194-11	3.75	2.47	1.06	11.56	側部	一部研磨	長方形	長軸に一対
322	SK242	Fig. 195-22	5.29	4.17	1.36	32.80	側部	一部研磨	不整椭円形	翼軸に一対
323	SK242	Fig. 196-23	3.67	2.54	1.19	14.00	側部	打削調整	長方形	長軸に一対
324	SK242	Fig. 195-24	2.99	2.72	0.72	7.44	側部	一部研磨	長方形	長軸に一対
325	SK242	Fig. 195-25	4.44	4.93	1.08	(29.86)	側部	品候鑿	長方形	長軸に一対・欠損
326	SK243	Fig. 196-12	4.01	3.59	0.97	15.96	側部	研磨	不整椭円形	長軸に一対
327	SK243	Fig. 196-13	3.66	2.21	1.22	11.18	1.翼部	研磨	長方形	長軸に一対
328	SK244	Fig. 195-11	3.28	3.12	0.84	10.78	側部	一部研磨	長方形	長軸に一対
329	SK245	Fig. 196-6	3.45	2.96	1.07	12.02	側部	打削調整	楕円形	長軸に一対
330	SK246	Fig. 196-8	3.35	2.23	0.93	9.24	側部	一部研磨	楕円形	長軸に一対
331	SK247	Fig. 197-7	4.38	4.29	1.03	25.76	側部	打削調整	方形	長軸に一対
332	SK247	Fig. 197-8	3.57	2.97	1.04	14.14	側部	打削調整	方形	長軸に一対
333	SK247	Fig. 197-9	3.53	3.28	0.98	14.14	側部	打削調整	楕円形	長軸に一対
334	SK248	Fig. 197-18	3.42	3.24	1.09	13.60	側部	一部研磨	不整円形	翼軸に一対
335	SK248	Fig. 197-19	3.49	2.97	1.02	10.94	側部	打削調整	長方形	翼軸に一対
336	SK248	Fig. 197-20	3.95	3.26	1.11	17.08	口縁部	研磨	楕円形	長軸に一対
337	SK248	Fig. 197-21	2.77	2.26	0.82	8.02	側部	一部研磨	方形	翼軸に一対
338	SK248	Fig. 197-22	3.20	3.09	0.90	10.06	側部	打削調整	方形	長軸に一対
339	SK249	Fig. 198-26	4.09	3.24	1.12	18.16	側部	研磨	楕円形	長軸に一対
340	SK249	Fig. 198-27	4.16	3.30	1.15	18.98	側部	打削調整	長方形	翼軸に一対
341	SK249	Fig. 198-28	3.14	2.78	0.92	10.34	側部	一部研磨	楕円形	翼軸に一対
342	SK249	Fig. 198-29	4.14	3.28	1.33	22.24	側部	研磨	楕円形	長軸に一対
343	SK249	Fig. 198-30	4.21	3.61	1.06	20.18	側部	一部研磨	長方形	長軸に一対
344	SK249	Fig. 198-31	(4.00)	4.23	1.28	(21.54)	側部	研磨	楕円形	翼軸に一対・欠損
345	SK250	Fig. 198-4	3.47	3.74	1.23	15.38	側部	一部研磨	楕円形	翼軸に一対
346	SK259	Fig. 199-7	5.91	4.32	1.48	34.88	側部	打削調整	台形	翼軸に一対
347	SK259	Fig. 199-8	3.12	3.00	1.27	13.12	側部	研磨	楕円形	長軸に一対
348	SK261	Fig. 200-7	6.81	5.68	1.07	51.76	側部	打削調整	長方形	翼軸に一対
349	SK261	Fig. 200-8	6.36	3.48	1.16	25.88	側部	打削調整	長方形	翼軸に一対
350	SK263	Fig. 200-15	6.41	4.90	1.27	49.06	側部	打削調整	楕円形	長軸に一対
351	SK263	Fig. 200-16	4.90	3.77	1.16	30.52	側部	研磨	楕円形	長軸に一対
352	SK263	Fig. 200-17	3.37	2.38	0.80	7.86	口縁部	一部研磨	楕円形	翼軸に一対
353	SK266	Fig. 200-50	3.27	3.23	1.31	15.10	側部	研磨	方形	翼軸に一対

番号	造形番号	回転番号	計測値(cm)	(g)	部位	加工状態	形態	切込等の状態	
			長さ	幅	厚さ	重量			
354	SK266	Fig. 203-51	3.23	3.14	1.10	13.12	側部	研磨	円形 長軸に一対
355	SK268	Fig. 203-7	3.56	2.51	1.27	13.80	側部	打削調整	長方形 長軸に一対
356	SK271	Fig. 204-5	5.82	4.04	1.16	29.56	側部	打削調整	楕円形 長軸に一対
357	SK271	Fig. 204-6	3.21	2.78	1.19	13.22	側部	研磨	方形 長軸に一対
358	SK277	Fig. 204-6	6.19	5.23	0.87	32.04	側部	一部研磨	長方形 長軸に一対
359	SK283	Fig. 205-5	3.91	2.59	0.95	10.54	側部	研磨	楕円形 長軸に一対
360	SK283	Fig. 205-6	2.71	2.51	0.92	7.58	側部	部研磨	楕円形 長軸に一対
361	SK284	Fig. 205-6	(2.14)	2.39	0.96	(6.40)	側部	一部研磨	長方形 長軸に一対・欠損
362	SK285	Fig. 206-14	4.39	3.49	0.82	14.76	側部	一部研磨	長方形 長軸に一対
363	SK287	Fig. 206-12	4.78	4.00	1.27	20.30	側部	一部研磨	長方形 長軸に一対・短軸に 1ヶ所
364	SK287	Fig. 206-13	4.21	3.62	1.76	23.54	側部	打削調整	長方形 長軸に一対
365	SK290	Fig. 207-12	4.39	3.33	0.98	18.81	側部	研磨	楕円形 長軸に一対
366	SK290	Fig. 207-13	3.69	3.18	1.55	20.00	側部	研磨	楕円形 長軸に一対
367	SK291	Fig. 207-5	3.14	4.18	1.28	17.32	側部	打削調整	長方形 短軸に一対
368	SK296	Fig. 208-6	3.14	3.05	1.23	13.20	側部	部研磨	長方形 長軸に一対
369	SK297	Fig. 209-11	3.48	3.12	1.11	14.38	側部	研磨	楕円形 長軸に一対
370	SK297	Fig. 209-12	3.19	3.61	1.26	14.66	側部	打削調整	長方形 長軸に一対
371	SK298	Fig. 209-5	4.34	2.76	1.31	19.08	側部	部研磨	長方形 長軸に一対

土器片鍾・土製円盤計測一覧表（造構外）

番号	造形番号	回転番号	計測値(cm)	(g)	部位	加工状態	形態	切込等の状態	
			長さ	幅	厚さ	重量			
1	SI06	Fig. 211-1	3.64	3.52	1.71	18.68	側部	一部研磨	不整円形 長軸に一対
2	SI06	Fig. 211-2	3.31	2.33	1.17	10.54	側部	一部研磨	長方形 長軸に一対
3	SI09	Fig. 211-3	4.37	3.26	0.92	16.64	側部	研磨	楕円形 長軸に一対
4	SI10	Fig. 211-4	3.94	4.01	1.29	22.70	口縁部	部研磨	長軸に一対
5	SI10	Fig. 211-5	4.08	3.48	1.14	17.08	側部	一部研磨	三角形 長軸に一対
6	SI12	Fig. 211-6	3.44	3.14	1.13	15.36	側部	打削調整	楕円形 短軸に一対
7	SI12	Fig. 211-7	3.12	3.07	1.02	10.80	側部	研磨	長方形 長軸に一対
8	SI16	Fig. 211-8	5.12	4.52	0.86	25.20	側部	一部研磨	長方形 長軸に一対
9	SI16	Fig. 211-9	4.98	3.47	1.25	26.06	側部	打削調整	楕円形 長軸に一対
10	SI16	Fig. 211-10	5.56	4.08	1.33	38.38	側部	打削調整	楕円形 長軸に一対
11	SI16	Fig. 211-11	4.62	4.63	1.09	29.48	側部	打削調整	楕円形 長軸に一対
12	SI16	Fig. 211-12	4.83	3.67	1.19	24.34	口縁部	打削調整	楕円形 長軸に一対
13	SI16	Fig. 211-13	4.57	3.71	0.99	19.42	側部	一部研磨	楕円形 長軸に一対
14	SI16	Fig. 211-14	4.34	3.30	1.26	17.70	側部	一部研磨	三角形 長軸に一対
15	SI16	Fig. 211-15	4.46	3.49	1.34	19.86	口縁部	打削調整	楕円形 長軸に一対
16	SI16	Fig. 211-16	4.36	2.69	0.98	16.30	側部	研磨	楕円形 長軸に一対
17	SI21	Fig. 211-17	4.29	2.30	1.33	17.82	側部	一部研磨	長方形 長軸に一対
18	SI21	Fig. 211-18	3.70	3.04	1.02	13.30	側部	研磨	楕円形 長軸に一対
19	SI21	Fig. 211-19	3.28	2.93	0.97	10.90	側部	打削調整	小整形 瓦軸に一対
20	SI21	Fig. 211-20	3.60	3.31	1.11	16.34	側部	打削調整	長方形 長軸に一対
21	SI21	Fig. 211-21	3.75	2.85	1.25	15.10	側部	一部研磨	楕円形 長軸に一対
22	SI21	Fig. 211-22	3.97	3.63	0.83	15.96	側部	研磨	円形 短軸に一対
23	SI21	Fig. 211-23	4.39	3.04	0.96	18.80	側部	打削調整	長方形 長軸に一対
24	SI21	Fig. 211-24	3.96	3.08	1.12	16.54	側部	打削調整	長方形 長軸に一対
25	SI21	Fig. 211-25	2.71	2.75	1.14	9.62	側部	打削調整	楕円形 長軸に一対
26	SI25	Fig. 211-26	4.57	3.55	1.15	22.76	側部	打削調整	長方形 瓦軸に一対
27	SI26 貼木下	Fig. 211-27	7.69	6.67	1.03	71.00	側部	一部研磨	楕円形 瓦軸に一対
28	SI27	Fig. 211-28	2.88	2.81	0.85	7.02	側部	研磨	円形 瓦軸に一対
29	SI28	Fig. 211-29	3.88	3.57	0.89	15.82	側部	打削調整	長方形 瓦軸に一対
30	SI29	Fig. 211-30	5.23	5.30	1.16	42.16	側部	打削調整	円形 瓦軸に一対
31	SI29	Fig. 211-31	5.41	4.48	1.06	30.94	側部	一部研磨	楕円形 瓦軸に一対
32	SI30	Fig. 211-32	5.36	3.73	0.92	24.60	側部	打削調整	楕円形 瓦軸に一対
33	SI30	Fig. 211-33	4.27	3.24	1.18	17.42	側部	部研磨	楕円形 瓦軸に一対
34	SI31	Fig. 211-34	4.82	3.13	1.03	22.26	側部	一部研磨	長方形 瓦軸に一対
35	SI31	Fig. 211-35	4.11	3.92	1.13	22.60	側部	一部研磨	円形 瓦軸に一対
36	SI31	Fig. 211-36	4.22	3.69	0.62	12.48	側部	研磨	楕円形 瓦軸に一対
37	SI31	Fig. 211-37	3.51	3.18	0.99	11.04	側部	部研磨	円形 瓦軸に一対
38	SI31	Fig. 211-38	2.89	2.21	1.21	9.20	側部	一部研磨	楕円形 瓦軸に一対
39	SI32	Fig. 211-39	4.78	3.54	1.00	20.10	側部	打削調整	長方形 瓦軸に一対
40	SI32	Fig. 211-40	4.15	2.67	1.35	14.74	側部	打削調整	楕円形 瓦軸に一対
41	SI32	Fig. 211-41	2.68	2.32	1.35	8.90	口縁部	研磨	楕円形 瓦軸に一対
42	SI33	Fig. 211-42	7.01	6.46	1.02	55.30	側部	一部研磨	長方形 瓦軸に一対
43	SI33	Fig. 211-43	4.47	3.16	0.90	18.56	側部	一部研磨	楕円形 瓦軸に一対
44	SI33	Fig. 211-44	4.09	3.68	0.98	17.96	側部	一部研磨	楕円形 瓦軸に一対
45	SI33	Fig. 211-45	4.48	3.75	1.03	19.30	側部	一部研磨	楕円形 瓦軸に一対
46	SI33	Fig. 211-46	4.50	3.78	0.93	19.04	側部	打削調整	楕円形 瓦軸に一対
47	SI33	Fig. 211-47	3.07	3.01	0.89	9.86	側部	一部研磨	円形 瓦軸に一対

番号	連番番号	図版番号	計 面 積 (cm) (g)			部位	加工状態	形態	切込等の状態
			長さ	幅	厚さ				
47	S33	Fig. 211-47	3.07	3.01	0.89	9.86 胴部	一部研磨	円形	長袖に一対
48	S33	Fig. 211-48	3.10	2.89	0.91	10.22 胴部	一部研磨	円形	長袖に一対
49	S33	Fig. 211-49	4.13	2.13	1.16	12.86 口縫部	研磨	長方形	長袖に一対
50	S33	Fig. 211-50	(1.89)	3.08	1.21	(6.60) 横筋	一部研磨	楕円形	長袖に一対・欠損
51	S35	Fig. 211-51	4.75	3.84	1.38	30.52 脇筋	研磨	楕円形	長袖に一対
52	S45	Fig. 211-52	4.21	3.24	1.26	20.70 脇部	研磨	楕円形	長袖に一対
53	S45	Fig. 211-53	2.83	2.85	0.71	6.24 脇部	一部研磨	楕円形	長袖に一対
54	P680	Fig. 211-54	3.68	2.98	1.16	14.30 朝部	研磨	楕円形	長袖に一対
55	P680	Fig. 211-55	3.71	2.97	0.91	12.80 脇部	一部研磨	楕円形	長袖に一対
56	試作	Fig. 211-56	4.94	2.95	1.12	18.36 口縫部	一部研磨	長方形	長袖に一対
57	試作	Fig. 211-57	4.12	3.19	1.15	17.22 脇部	一部研磨	長方形	長袖に一対
58	試作	Fig. 211-58	5.40	4.53	1.03	30.74 脇部	一部研磨	楕円形	長袖に一対
59	試作	Fig. 211-59	3.36	3.11	0.97	13.02 脇部	一部研磨	楕円形	長袖に一対
60	試作	Fig. 211-60	4.59	3.76	1.27	28.40 脇部	一部研磨	楕円形	長袖に一対
61	試作	Fig. 211-61	6.08	3.99	1.53	33.60 口縫部	打削調整	長方形	長袖に一対
62	試作	Fig. 211-62	4.68	4.05	1.19	28.16 脇部	一部研磨	長方形	長袖に一対
63	試作	Fig. 211-63	3.93	3.00	0.99	12.82 II腰部	一部研磨	長方形	長袖に一対
64	試作	Fig. 211-64	3.57	2.78	1.21	14.34 脇部	研磨	楕円形	長袖に一対
65	2 T区	Fig. 211-65	6.67	5.78	1.55	58.56 口縫部	一部研磨	長方形	長袖に一対
66	2 T区	Fig. 211-66	4.33	2.67	1.33	18.96 脇部	一部研磨	長方形	長袖に一対
67	2 T区	Fig. 211-67	4.11	3.84	0.93	17.90 横筋	一部研磨	楕円形	長袖に一対
68	2 T区	Fig. 211-68	3.88	3.32	1.36	19.74 脇部	一部研磨	長方形	長袖に一対
69	2 T区	Fig. 211-69	3.82	2.81	1.37	14.14 口縫部	打削調整	楕円形	長袖に一対
70	2 T区	Fig. 211-70	3.69	3.36	1.10	16.30 脇部	一部研磨	楕円形	長袖に一対
71	2 T区	Fig. 211-71	3.54	3.48	0.88	14.72 脇部	打削調整	楕円形	長袖に一対
72	2 T区	Fig. 211-72	3.51	3.76	0.89	12.50 口縫部	一部研磨	不整円形	長袖に一対
73	2 T区	Fig. 211-73	3.20	3.07	0.78	9.38 脇部	打削調整	方型	長袖に一対
74	2 T区	Fig. 211-74	3.39	2.89	0.99	11.30 脇部	一部研磨	楕円形	長袖に一対
75	2 T区	Fig. 211-75	3.34	3.15	0.93	12.24 横筋	打削調整	不整円形	長袖に一対
76	2 T区	Fig. 211-76	2.89	2.78	1.03	9.70 脇部	打削調整	長方形	長袖に一対
77	2 T区	Fig. 211-77	(2.09)	2.71	0.91	(5.72) 腹部	一部研磨	楕円形	長袖に一対・欠損
78	2 T区	Fig. 211-78	3.09	2.69	1.02	10.32 脇部	一部研磨	楕円形	長袖に一対
79	3 T区	Fig. 211-79	3.92	3.18	0.90	15.84 横筋	一部研磨	楕円形	長袖に一対
80	3 T区	Fig. 211-80	3.69	3.26	1.31	11.98 脇部	打削調整	楕円形	長袖に一対
81	3 T区	Fig. 211-81	6.68	6.79	1.03	58.20 脇部	一部研磨	円形	長袖に一対
82	3 T区	Fig. 211-82	6.80	5.71	1.22	58.75 口縫部	打削調整	長方形	長袖に一対
83	3 T区	Fig. 211-83	6.77	5.09	0.98	48.62 脇部	一部研磨	楕円形	長袖に一対
84	3 T区	Fig. 211-84	5.29	4.53	1.33	33.26 口縫部	一部研磨	長方形	長袖に一対
85	3 T区	Fig. 211-85	4.76	4.59	1.11	30.14 脇部	一部研磨	長方形	長袖に一対
86	3 T区	Fig. 211-86	4.96	3.08	1.15	20.76 脇部	打削調整	長方形	長袖に一対
87	3 T区	Fig. 211-87	4.64	3.56	1.16	23.26 脇部	一部研磨	楕円形	長袖に一対
88	3 T区	Fig. 211-88	4.56	3.58	1.24	20.08 口縫部	打削調整	長方形	長袖に一対
89	3 T区	Fig. 211-89	4.41	3.71	1.21	24.36 脇部	研磨	長方形	長袖に一対
90	3 T区	Fig. 211-90	4.12	3.58	0.93	17.06 脇部	研磨	楕円形	長袖に一対
91	3 T区	Fig. 211-91	3.98	3.35	1.02	18.16 脇部	一部研磨	長方形	長袖に一対
92	3 T区	Fig. 211-92	4.45	3.22	1.10	17.40 脇部	一部研磨	長方形	長袖に一対
93	3 T区	Fig. 211-93	(3.36)	3.15	0.99	(13.68) 脇部	研磨	楕円形	長袖に一対・欠損
94	3 T区	Fig. 211-94	3.43	3.49	1.53	15.76 横筋	打削調整	不整円形	長袖に一対
95	3 T区	Fig. 211-95	3.53	3.35	0.93	12.72 脇部	一部研磨	不整円形	長袖に一対
96	3 T区	Fig. 211-96	3.55	3.36	0.82	12.06 脇部	一部研磨	不整円形	長袖に一対
97	3 T区	Fig. 211-97	3.72	3.56	1.13	13.58 脇部	打削調整	長方形	長袖に一対
98	3 T区	Fig. 211-98	3.41	2.75	0.98	12.12 脇部	一部研磨	楕円形	長袖に一対
99	3 T区	Fig. 211-99	2.99	2.49	1.39	11.88 脇部	研磨	長方形	長袖に一対
100	3 T区	Fig. 211-100	2.84	3.36	1.47	14.28 脇部	打削調整	長方形	長袖に一対
101	3 T区	Fig. 211-101	2.46	2.88	1.03	7.86 脇部	一部研磨	楕円形	長袖に一対
102	3 T区	Fig. 211-102	2.40	2.68	1.17	8.26 脇部	一部研磨	不整円形	長袖に一対
103	3 T区	Fig. 212-103	4.05	3.25	0.91	15.06 脇部	打削調整	長方形	長袖に一対
104	3 T区	Fig. 212-104	4.17	3.80	0.98	20.38 脇部	打削調整	長方形	長袖に一対
105	3 T区	Fig. 212-105	3.53	2.77	1.12	13.60 脇部	一部研磨	長方形	長袖に一対
106	3 T区	Fig. 212-106	3.62	3.42	1.19	15.02 脇部	一部研磨	楕円形	長袖に一対
107	3 T区	Fig. 212-107	2.72	2.38	1.09	7.53 脇部	研磨	楕円形	長袖に一対
108	3 T区	Fig. 212-108	4.88	3.27	1.12	20.36 脇部	打削調整	楕円形	長袖に一対
109	3 T区	Fig. 212-109	3.87	2.93	0.84	12.98 脇部	打削調整	長方形	長袖に一対
110	3 T区	Fig. 212-110	3.62	2.80	0.93	10.34 脇部	一部研磨	楕円形	長袖に一対
111	4 T区	Fig. 212-111	6.16	4.94	1.59	49.72 II腰部	打削調整	楕円形	長袖に一対
112	4 T区	Fig. 212-112	3.92	3.21	0.95	15.22 脇部	一部研磨	楕円形	長袖に一対
113	4 T区	Fig. 212-113	3.44	3.60	1.12	13.14 脇部	一部研磨	不整円形	長袖に一対
114	4 T区	Fig. 212-114	2.75	2.46	0.83	6.66 脇部	打削調整	楕円形	長袖に一対
115	4 T区	Fig. 212-115	2.38	2.31	0.93	6.20 脇部	一部研磨	円形	長袖に一対
116	4 T区	Fig. 212-116	3.69	4.33	1.02	18.08 脇部	一部研磨	楕円形	長袖に一対
117	4 T区	Fig. 212-117	3.13	3.11	0.95	11.88 脇部	打削調整	楕円形	長袖に一対

番号	激構番号	図版番号	計測値 (cm) (g)			部位	加工状態	形態	切込等の状態
			長さ	幅	厚さ				
118	4 T区	Fig. 212-118	3.04	2.52	1.06	848	胴部	一部研磨	長方形 長輪に一对
119	4 T区	Fig. 212-119	3.15	2.54	1.11	11.82	胴部	研磨	長輪に一对
120	5 T区	Fig. 212-120	6.47	5.46	0.97	44.42	胴部	打削調整	槽円形 長輪に一对
121	5 T区	Fig. 212-121	5.07	4.09	1.25	31.60	胴部	研磨	長方形 長輪に一对
122	5 T区	Fig. 212-122	(4.38)	4.73	0.92	(22.34)	胴部	打削調整	方形 長輪に一对・欠損
123	5 T区	Fig. 212-123	4.60	3.05	1.01	19.24	胴部	打削調整	長方形 長輪に一对
124	5 T区	Fig. 212-124	4.42	3.74	1.22	25.24	胴部	打削調整	梢円形 長輪に一对
125	5 T区	Fig. 212-125	3.97	3.96	1.13	14.62	胴部	一部研磨	長方形 長輪に一对
126	5 T区	Fig. 212-126	3.99	3.63	1.16	19.68	口縁部	一部研磨	長方形 長輪に一对
127	5 T区	Fig. 212-127	3.63	3.26	1.34	13.56	頭部	部研磨	長方形 長輪に一对
128	5 T区	Fig. 212-128	3.73	2.77	1.06	12.66	胴部	打削調整	長方形 長輪に一对
129	5 T区	Fig. 212-129	(2.71)	3.29	0.91	(10.36)	胴部	打削調整	長方形 長輪に一对・欠損
130	5 T区	Fig. 212-130	3.24	2.22	1.06	9.40	胴部	打削調整	梢円形 長輪に一对
131	5 T区	Fig. 212-131	3.06	3.14	0.78	9.12	胴部	一部研磨	円形 長輪に一对
132	5 T区	Fig. 212-132	3.03	2.16	1.41	9.66	胴部	一部研磨	梢円形 長輪に一对
133	5 T区	Fig. 212-133	2.93	3.06	1.07	11.11	胴部	打削調整	不整円形 長輪に一对
134	5 T区	Fig. 212-134	2.48	2.72	0.95	6.14	胴部	打削調整	不整円形 長輪に一对
135	5 T区	Fig. 212-135	4.48	3.18	0.70	14.78	胴部	打削調整	長方形 長輪に一对
136	5 T区	Fig. 212-136	4.32	2.82	0.98	14.42	胴部	一部研磨	長方形 長輪に一对
137	5 T区	Fig. 212-137	3.68	3.85	1.16	20.18	頭部	部研磨	台形 長輪に一对
138	5 T区	Fig. 212-138	(2.89)	3.99	1.31	(17.00)	胴部	一部研磨	長方形 長輪に一对・欠損
139	5 T区	Fig. 212-139	3.30	3.10	1.16	14.50	胴部	一部研磨	不整円形 長輪に一对
140	5 T区	Fig. 212-140	3.06	2.79	1.03	8.80	部研磨	長方形 長輪に一对	
141	5 T区	Fig. 212-141	3.18	2.68	1.08	9.88	胴部	部研磨	長方形 長輪に一对
142	5 T区	Fig. 212-142	2.78	2.81	0.84	7.56	胴部	打削調整	円形 円板
143	表採	Fig. 212-143	7.41	6.66	1.27	82.00	胴部	打削調整	梢円形 長輪に一对
144	表採	Fig. 212-144	6.62	5.78	1.53	54.32	底部	打削調整	不整形 長輪に一对
145	表採	Fig. 212-145	5.25	4.11	1.13	34.34	胴部	打削調整	長方形 長輪に一对
146	表採	Fig. 212-146	5.75	3.99	1.51	32.60	胴部	打削調整	長方形 長輪に一对
147	表採	Fig. 212-147	5.43	4.78	1.35	39.44	胴部	打削調整	長方形 長輪に一对
148	表採	Fig. 212-148	5.24	4.25	1.37	28.16	胴部	打削調整	梢円形 長輪に一对
149	表採	Fig. 212-149	(4.34)	5.89	1.12	(36.92)	胴部	打削調整	長方形 長輪に一对・欠損
150	表採	Fig. 212-150	4.86	3.95	1.39	30.82	胴部	打削調整	梢円形 長輪に一对
151	表採	Fig. 212-151	(4.67)	3.53	1.03	(20.04)	胴部	打削調整	長方形 長輪に一对・欠損
152	表採	Fig. 212-152	4.48	5.08	1.21	35.24	胴部	一部研磨	梢円形 短輪に一对
153	表採	Fig. 212-153	4.70	4.55	1.05	26.44	胴部	研磨	梢円形 長輪に一对
154	表採	Fig. 212-154	(4.53)	4.06	1.07	(20.22)	口縁部	一部研磨	梢円形 長輪に一对・欠損
155	表採	Fig. 212-155	4.54	3.91	0.83	20.60	胴部	部研磨	長方形 長輪に一对
156	表採	Fig. 212-156	4.68	3.93	1.13	23.18	胴部	打削調整	梢円形 長輪に一对
157	表採	Fig. 212-157	4.13	3.27	0.92	15.96	胴部	打削調整	梢円形 長輪に一对
158	表採	Fig. 212-158	3.77	2.87	0.97	11.92	口縁部	打削調整	長方形 長輪に一对
159	表採	Fig. 212-159	4.43	4.12	1.31	23.56	胴部	一部研磨	長方形 長輪に一对
160	表採	Fig. 212-160	4.20	4.33	1.03	21.42	胴部	一部研磨	方形 長輪に一对
161	表採	Fig. 212-161	4.37	4.20	0.94	19.92	胴部	打削調整	五角形 長輪に一对
162	表採	Fig. 212-162	3.86	3.57	1.23	20.28	胴部	打削調整	長方形 長輪に一对
163	表採	Fig. 212-163	3.61	3.76	0.96	14.62	胴部	打削調整	方形 長輪に一对
164	表採	Fig. 212-164	4.28	3.61	1.29	21.22	胴部	一部研磨	梢円形 長輪に一对
165	表採	Fig. 212-165	4.14	3.43	1.06	15.22	胴部	一部研磨	梢円形 長輪に一对
166	表採	Fig. 212-166	3.62	3.46	1.32	19.28	胴部	研磨	長方形 長輪に一对
167	表採	Fig. 212-167	3.66	3.16	1.11	15.21	胴部	打削調整	梢円形 長輪に一对
168	表採	Fig. 212-168	(3.99)	2.86	1.03	(14.08)	要部	打削調整	長方形 長輪に一对・欠損
169	表採	Fig. 212-169	4.01	3.15	0.88	13.02	胴部	打削調整	梢円形 長輪に一对
170	表採	Fig. 212-170	3.66	2.89	1.01	12.61	胴部	部研磨	梢円形 長輪に一对
171	表採	Fig. 212-171	3.77	3.14	0.98	12.32	胴部	打削調整	梢円形 長輪に一对
172	表採	Fig. 212-172	3.78	3.49	1.07	15.06	胴部	打削調整	梢円形 長輪に一对
173	表採	Fig. 212-173	3.61	3.27	1.18	14.98	胴部	研磨	梢円形 長輪に一对
174	表採	Fig. 212-174	3.61	3.25	0.93	12.14	胴部	打削調整	梢円形 長輪に一对
175	表採	Fig. 212-175	3.56	3.23	0.95	13.60	胴部	一部研磨	長方形 長輪に一对
176	表採	Fig. 212-176	3.33	2.99	1.59	19.54	口縁部	一部研磨	長方形 長輪に一对
177	表採	Fig. 212-177	3.76	3.14	1.41	14.50	口縁部	部研磨	三角形 長輪に一对
178	表採	Fig. 212-178	3.28	2.87	1.24	14.98	胴部	部研磨	梢円形 長輪に一对
179	表採	Fig. 212-179	3.44	2.86	1.22	14.06	胴部	一部研磨	梢円形 長輪に一对
180	表採	Fig. 212-180	(2.89)	3.09	0.97	(9.72)	胴部	打削調整	長方形 長輪に一对・欠損
181	表採	Fig. 212-181	2.75	2.96	1.23	12.10	胴部	打削調整	円形 長輪に一对
182	表採	Fig. 212-182	(3.01)	2.82	0.95	(7.82)	胴部	一部研磨	梢円形 長輪に一对・欠損
183	表採	Fig. 212-183	2.75	3.02	1.03	9.76	胴部	打削調整	方形 長輪に一对
184	表採	Fig. 212-184	(2.51)	2.95	1.07	(7.44)	胴部	一部研磨	長方形 長輪に一对・欠損
185	表採	Fig. 212-185	2.82	2.51	1.21	10.52	胴部	部研磨	長方形 長輪に一对
186	表採	Fig. 212-186	2.57	2.49	0.77	6.10	胴部	打削調整	円形 長輪に一对

2. 石器一覧表

番号	遺構 番号	図版番号	器種	計測値(cm)(g)				石質	備考
				長さ	幅	厚さ	重さ		
1	SE23	Fig. 32-59	打製石斧	(4.63)	5.57	0.97	(42.0)	安山岩	
2	SE23	Fig. 32-60	磨石	9.37	5.95	4.19	29.0	砂岩	
3	SE23	Fig. 32-61	敲石	7.31	4.59	3.07	133.0	安山岩	
4	SK38	Fig. 34-10	石錐	2.65	1.58	0.53	1.7	チャート	
5	SK41	Fig. 35-44	石錐	2.21	1.39	0.40	1.1	石英	
6	SH1	Fig. 35-45	石錐	(1.57)	2.07	0.39	(1.3)	黒曜石	
7	SK9	Fig. 132-9	磨石	(8.10)	(5.03)	(1.48)	(68.0)	砂岩	
8	SK31	Fig. 136-22	石錐	2.46	1.89	0.50	2.0	チャート	
9	SK35	Fig. 138-43	磨石	(12.70)	(9.80)	5.47	(78.0)	安山岩	
10	SK35	Fig. 138-44	敲石	8.57	23.90	2.84	87.0	砂岩	
11	SK44	Fig. 139-11	磨製石斧	(2.92)	3.67	1.70	(23.0)	砂岩	
12	SK44	Fig. 142-43	鍛石斧	7.63	4.06	2.22	86.0	褐色灰岩	
13	SK41	Fig. 142-44	鍛石	9.36	5.80	2.28	162.0	安山岩	
14	SK41	Fig. 142-45	磨石	(7.54)	(5.70)	4.11	(231.0)	安山岩	
15	SK41	Fig. 142-46	石錐	(8.81)	(6.64)	(3.34)	(194.0)	閃緑岩	
16	SK42	Fig. 139-10	石錐	3.96	1.96	0.41	2.4	チャート	
17	SK43	Fig. 142-19	磨石	(9.94)	(5.04)	4.27	(237.0)	安山岩	
18	SK47	Fig. 144-29	磨石	(8.11)	(3.78)	(6.77)	(132.0)	安山岩	
19	SK35	Fig. 146-15	磨製石斧	(7.01)	4.89	2.83	(165.0)	砂岩	
20	SK7	Fig. 150-25	磨石	(4.49)	(7.29)	(6.01)	(172.0)	安山岩	
21	SK75	Fig. 151-25	磨石	5.01	6.03	5.59	181.0	安山岩	
22	SK77	Fig. 151-17	磨石	(8.35)	(8.28)	5.40	(442.0)	石英斑岩	
23	SK77	Fig. 151-18	磨石	(6.04)	(3.45)	2.80	(63.0)	砂岩	
24	SK81	Fig. 152-11	石錐	(8.08)	(9.74)	8.04	(959.0)	網雲母片岩	
25	SK81	Fig. 153-9	磨石	10.19	6.70	3.99	427.0	安山岩	
26	SK87	Fig. 154-11	打製石斧	(5.95)	(6.25)	1.99	(109.0)	種安山岩	
27	SK94	Fig. 156-20	石錐	22.26	18.49	11.09	6,026.0	花崗岩	
28	SK94	Fig. 156-21	円石	8.22	15.41	2.33	342.0	網雲母片岩	
29	SK95	Fig. 156-9	打製石斧	(6.20)	4.37	1.35	(51.0)	純正酸灰岩	
30	SK96	Fig. 157-8	磨製石斧	(8.06)	5.11	3.01	(188.0)	砂岩	
31	SK104	Fig. 159-9	磨製石斧	(4.06)	5.72	3.15	(121.0)	砂岩	
32	SK114	Fig. 162-29	磨石	12.80	6.63	4.03	349.0	安山岩	
33	SK114	Fig. 162-30	円石	7.99	13.90	3.96	624.0	網雲母片岩	
34	SK114	Fig. 162-31	磨石	(5.05)	7.36	4.89	(92.0)	安山岩	
35	SK120	Fig. 163-15	鍛石	8.45	5.72	1.93	71.0	安山岩	
36	SK122	Fig. 164-14	磨製石斧	(4.31)	(3.91)	2.50	(59.0)	安山岩	
37	SK143	Fig. 168-11	石錐	(8.76)	(4.24)	(2.04)	(51.0)	安山岩	
38	SK153	Fig. 171-15	磨石	(12.46)	(6.07)	3.98	(312.0)	安山岩	
39	SK163	Fig. 173-5	剥片石斧	3.21	1.40	0.87	2.88	黒曜石	
40	SK169	Fig. 175-19	石錐	(1.80)	1.51	0.52	(1.06)	黒曜石	
41	SK181	Fig. 178-18	磨製石斧	(2.06)	2.83	1.21	(8.0)	蛇紋岩	
42	SK183	Fig. 178-19	石錐	1.99	1.75	0.50	1.23	黒曜石	
43	SK186	Fig. 180-11	磨石	(5.63)	5.28	4.09	(229.0)	安山岩	
44	SK190	Fig. 182-19	磨石	(5.96)	7.09	3.96	(281.0)	安山岩	
45	SK190	Fig. 182-20	円石	(7.42)	(5.45)	(5.02)	(221.0)	網雲母片岩	
46	SK211	Fig. 189-12	石錐	(24.15)	(18.85)	(19.36)	(4,250.0)	安山岩	
47	SK244	Fig. 195-12	局部磨製石斧	8.18	3.84	1.59	68.0	ホンショウエルス	
48	SK244	Fig. 195-13	石錐	2.47	1.83	0.58	1.90	黒曜石	
49	SK247	Fig. 197-10	磨石	(6.82)	(5.93)	3.79	(180.0)	安山岩	
50	SK248	Fig. 197-23	小形鍛石斧	6.35	3.07	1.16	32.0	質岩	
51	SK258	Fig. 199-8	円石	(4.07)	(6.79)	(2.91)	(101.0)	安山岩	
52	SK284	Fig. 205-7	磨製石斧	(5.07)	4.45	2.18	89.0	純板岩	
53	SK285	Fig. 206-15	磨製石斧	(8.99)	4.82	1.97	(128.0)	純板岩	
54	SK285	Fig. 206-16	石錐	2.05	1.38	0.40	0.68	メノウ	
55	SK287	Fig. 206-14	円石	14.06	7.99	4.31	741.0	安山岩	
56	SK290	Fig. 207-14	小形局部磨製石斧	5.56	1.80	1.01	21.0	純板岩	
57	SK296	Fig. 209-6	磨製石斧	(6.72)	4.41	2.91	(143.0)	砂岩	
58	SK299	Fig. 209-7	石錐	(7.89)	(8.15)	(3.57)	(395.0)	安山岩	

3. 積穴住居跡出土遺物観察表

住居跡SI01出土遺物観察表（単位：cm、g）

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	備考
1	土器部	器	8.00	7.10	10.80	石英・長石・ 黑色粘土質	淡青褐色10YR6/4	良好	外面口縁部ヨコナギ、体部ヘラナギ。内面白絞部ヨコナギ、 体部ヘラナギ。	前南4欠振 外縛部
2	土器部	小形器	7.00	5.90	3.00	石英・長石・ 黑色粘土質	淡青褐色10YR6/1	良好	外面口縁部ヨコナギ、体部ヘラケズリ。内面口縁部ヨコナギ、 体部ヘラナギ。	口縁4欠振
3	土器部	壺	—	(17.70)	3.00	石英・長石・ 黑色粘土質	淡青褐色10YR6/1	良好	外面ハケ目調節の後、ヘラミガキ。内面ヘラナギ。	口縁4欠振 外縛部
4	土器部	壺	20.00	(15.60)	—	石英・長石・ 黑色粘土質	淡青褐色10YR6/2	良好	外面口縁部ヨコナギ、ヘラナギ。体部ハケ目調節。ヘラチサ。	口縁15欠振 内縛部

番号	種別	長さ	高さ	重量	色調	胎土	特徴	備考
5	土管	2.80	2.50	17.28	(4.50) 淡青褐色SYR7/4	青褐色		先端

住居跡SI02出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	備考
1	土器部	小形器	8.80	4.00	4.00	石英・長石・ 黑色粘土質	淡青褐色10YR6/4	良好	外面ハケ目調節。内面ヘラナギ。	口縁16残存 灰縛部
2	土器部	壺	13.60	3.60	—	石英・長石・ 黑色粘土質	淡青褐色10YR7/6	良好	外面口縁部ハラケズリ。体部ヘラミガキ。ヘラナギ。内面口 縁部ハラミガキ。体部ヘラケズリ。	口縁部残存
3	土器部	壺	18.00	(7.50)	—	石英・長石・ 黑色粘土質	淡青褐色10YR6/2	良好	外面口縁部ヨコナギ。体部ハラミガキ。ヘラナギ。内面口縁 部ハラミガキ。	口縫部残存

住居跡SI03出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	備考
1	土器部	高杯	—	(9.00)	—	石英・長石・ 黑色粘土質	淡青褐色10YR6/3	良好	外面ハケ目調節。内面ヘラナギ。	縁部19残存 外縛部
2	土器部	壺	8.00	5.50	3.60	石英・長石・ 黑色粘土質・スコリア	淡青褐色10YR7/6	良好	外面ハラケズリ。内面ヘラナギ。	口縁15残存 灰縛部
3	土器部	壺	12.00	6.30	3.80	石英・長石・ スコリア	淡青褐色10YR6/6	良好	外面ハケ目調節。ヘラケズリ。内面口縁部ハラミガキ。体部 ヘラケ目調節。	12.00欠振 点部
4	土器部	壺	12.40	(5.70)	—	石英・長石・ 黑色粘土質	75YR6/4	良好	外面口縁部ヨコナギ。体部ハラミガキ。ヘラナギ。内面口縁 部ハラミガキ。ヨコナギ。	六郎部残存
5	土器部	壺	12.60	(5.80)	—	石英・長石・ 黑色粘土質	75YR6/4	良好	外面口縁部ヨコナギ。体部ハラケズリ。内面口縁部ヨコナギ。 体部ヘラナギ。	口縫部16西脇
6	土器部	壺	14.00	(3.70)	—	石英・長石	10YR6/4	良好	外面ハケ目調節。内面口縁部ハラミガキ。内面口縁部ヨコナギ。	口縫部残存
7	土器部	壺	—	(3.10)	3.40	石英・長石	淡青褐色10YR6/4	良好	外面ハケ目調節。ヘラケズリ。内面ヘラナギ。	黒縛部有 赤彩
8	土器部	壺	—	(1.80)	3.40	石英・長石	明赤色3YR5/8	良好	外面ヘラケズリ。内面ヘラナギ。	赤縛部有 赤彩
9	土器部	壺	15.00	(3.00)	—	石英・長石	淡青褐色10YR6/3	良好	外面口縁部ヨコナギ。体部ハラミガキ。ヘラナギ。内面口縁 部ヨコナギ。体部ヘラナギ。	口縫部残存
10	土器部	壺	15.00	(2.70)	—	石英・長石	10YR7/4	良好	外面ハケ目調節。ヘラナギ。	口縫部16残存

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	備考
11	透石	17.00	2.50	1.90	61.0g	硅酸岩		

番号	種別	長さ	高さ	重量	色調	胎土	特徴	備考
12	土管	(1.30)	(2.61)	(4.00)	黑褐色SYR7/2			1/4強付

住居跡SI04出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	備考
1	土器部	壺	11.80	(1.90)	—	石英・長石・ スコリア	白色2.5YR6/8	良好	外面口縁部ハラミガキの後、ヘラミガキ。内面ヘラミガキ。	口縫部14残存 赤彩
2	土器部	壺	16.40	(4.50)	—	石英・長石・ 白色粘土質	赤褐色2.5YR6/8	良好	外面口縁部ヨコナギ。体部ヘラケズリ。内面口縁部ヘラナギ。	口縫部16残存 赤彩

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	備考
1	土器部	壺	—	(9.80)	—	石英・長石・ 白色粘土質	褐色2.5YR6/8	良好	外周部ハラナギ。輪郭ヘラナギ。内面研削ヨコナギ。輪郭 ヘラナギ。輪郭有。	1/4強付
2	土器部	壺	—	(4.50)	—	石英・長石・ 白色粘土質	赤褐色2.5YR6/8	良好	外周部ヨコナギ。体部ヘラケズリ。内面口縁部ヘラナギ。	輪郭有
3	土器部	壺	—	(2.60)	—	石英・長石	7.5YR4/3	良好	外周部ヘラナギ。内面研削ヘラナギ。	輪郭有
4	土器部	壺	—	(2.70)	—	石英・長石・ 白色粘土質	明赤色2.5YR6/8	良好	外周部研削ヘラナギ。内面研削ヘラナギ。	不規則残存 赤彩
5	土器部	壺	—	(3.50)	—	石英・長石	褐色2.5YR6/8	良好	外周部ヘラナギ。ヘラケズリ。内面研削ヘラミガキ。	外周部残存 赤彩
6	土器部	壺	—	(2.70)	—	石英・長石・ 白色粘土質	白色SYR6/6	良好	外周部研削ヘラナギ。ハラケ目調節、ヘラケズリ。内面研削ハ ラナギ。シボリ。	研削部残存 赤彩
7	土器部	壺	—	(2.70)	—	石英・長石・ 白色粘土質	白色2.5YR6/6	良好	外周部研削ヘラナギ。内面研削ヘラナギ、シボリ。	研削部 赤彩

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	備考
8	土鍋器	高杯		(4.70)	-	石英・長石	黄褐色5YR6/8	良好	外腹脚部へラテツリ。内腹脚部コナデ。シホリ。	口10cm底存 在部
9	土鍋器	舟	7.60	8.60	3.00	石英・長石	黄褐色10VY9/3	良好	外腹脚部口沿ヨココナデ。ハケモギタ。体部ヘラミガキ。内腹 脚部ヨココナデ。体部ヘラタツリ。	口10cm底存 在部
10	土鍋器	舟	10.60	(4.30)	-	石英・長石	黄褐色10VY6/2	良好	外腹脚部口沿ヨココナデ。ハクア。内腹脚部ヨココナデ。	口10cm底存 在部
11	土鍋器	舟	14.60	5.50	3.60	石英・長石	赤褐色5YR6/8	良好	外腹脚部口沿ヨココナデ。ハクア。内腹脚部ヨココナデ。体部ヘラタツリ。	口12cm底存 在部
12	土鍋器	舟	11.80	5.90	4.00	石英・長石	黄褐色7.5YR7/6	良好	外腹脚部口沿ヨココナデ。体部ヘラタツリ。内腹脚部ヨココナデ。 体部ヘラタツリ。	口12cm底存 在部
13	土鍋器	舟	13.00	(4.30)	-	石英・長石	黄褐色5YR6/8	良好	外腹脚部口沿ヨココナデ。体部ヘラタツリ。内腹脚部ヨココナデ。 体部ヘラタツリ。	口12cm底存 在部
14	土鍋器	舟	23.00	(3.00)	-	石英・長石	黄褐色10VY6/8	良好	外腹脚部ヨココナデ。ハケモギタ。当面に脚部ハクア目溝整。	口25cm底片
15	土鍋器	舟	-	(3.10)	4.60	石英・長石	黄褐色10VY6/8	良好	外腹脚部ヨココナデ。内腹ヘラナア。	底底25cm底存

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	備考
16	瓦孔円板	2.15	(0.28)	0.39	(1.98)	滑石		口1/2底存

住居跡SI10出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	備考
1	土鍋器	高台	6.60	(7.1)	-	石英・長石	黄褐色10VY6/2	良好	外腹脚部ヨココナデ。ハラクシテ。脚部ヘラケズリ。内腹脚部 ヨココナデ。ハラタツリ。孔。	口10cm底存 在部
2	土鍋器	舟	14.00	(6.20)	-	石英・長石	に赤い塊状5YR5/4 黑色5.5YK2/1	良好	外腹脚部口沿ヨココナデ。内腹脚部ヘラケズリ。	体部ヘラタツリ。
3	土鍋器	舟	19.00	(15.30)	-	石英・長石	黄褐色2.5YR8/4	良好	内腹脚部口沿ヨココナデ。体部ハクア目溝整。内腹脚部ヨココナデ。	口12cm底存 在部
4	土鍋器	舟	16.00	(8.70)	-	石英・長石	黄褐色10VY6/5	良好	内腹脚部口沿ヨココナデ。体部ハクア目溝整。内腹脚部ヨココナデ。	口14cm底存 在部
5	土鍋器	舟	-	(2.7)	5.2	石英・長石	黄褐色7.5YK2/8	良好	内腹ヨココナデ。内腹ハケ目溝整。	底底のみ
6	土鍋器	舟	-	(4.30)	6.20	石英・長石	黄褐色5YR6/6	良好	内腹ヨココナデ。内腹ヘラナア。	底底25cm底存

住居跡SI12出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	備考
1	土鍋器	高台	6.60	(7.1)	-	石英・長石	黄褐色10VY6/2	良好	外腹脚部ヨココナデ。ハラクシテ。脚部ヘラケズリ。内腹脚部 ヨココナデ。ハラタツリ。	口10cm底存 在部
2	土鍋器	舟	14.00	(6.20)	-	石英・長石	に赤い塊状5YR5/4 黑色5.5YK2/1	良好	外腹脚部口沿ヨココナデ。内腹脚部ヘラケズリ。	体部ヘラタツリ。
3	土鍋器	舟	19.00	(15.30)	-	石英・長石	黄褐色2.5YR8/4	良好	内腹脚部口沿ヨココナデ。体部ハクア目溝整。内腹脚部ヨココナデ。	口12cm底存 在部
4	土鍋器	舟	16.00	(8.70)	-	石英・長石	黄褐色10VY6/5	良好	内腹脚部口沿ヨココナデ。体部ハクア目溝整。内腹脚部ヨココナデ。	口14cm底存 在部
5	土鍋器	舟	-	(2.7)	5.2	石英・長石	黄褐色7.5YK2/8	良好	内腹ヨココナデ。内腹ハケ目溝整。	底底のみ
6	土鍋器	舟	-	(4.30)	6.20	石英・長石	黄褐色5YR6/6	良好	内腹ヨココナデ。内腹ヘラナア。	底底25cm底存

番号	種別	長さ	高さ	重量	色調	特徴	特徴	備考
5	土平	2.00	1.99	7.02	に赤い塊状7.5YR7/4	無地性		地平
6	土平	(2.90)	2.78	(10.98)	黃褐色7.5YR3/1	足形		10.98cm

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	特徴	備考
7	瓦刀刃板	2.15	2.34	0.25	2.01	滑石			瓦刀
8	瓦刀刃板	1.83	1.99	0.31	1.82	滑石			瓦刀
9	瓦刀刃板	2.38	2.23	0.40	3.02	滑石			瓦刀
10	瓦刀刃板	(2.67)	(2.07)	0.38	(3.78)	滑石			瓦刀
21	瓦刀刃板	(1.89)	(1.51)	(0.21)	(0.80)	滑石			瓦刀
12	瓦刀刃板	(2.24)	(1.15)	(0.30)	(1.01)	滑石			瓦刀
23	瓦製足	4.81	2.11	0.83	11.62	滑石	絆色性あり		瓦刀
14	瓦製足	3.05	1.43	0.86	4.54	滑石	絆色性あり		瓦刀
15	瓦製足	3.10	2.08	0.69	6.49	滑石			瓦刀
16	瓦製足	2.23	1.31	0.88	0.68	滑石			瓦刀

住居跡SI16出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	備考
1	土鍋器	舟	14.00	4.60	4.00	石英・長石	黄褐色10VY11.7/1	良好	外腹脚部ヨココナデ。体部ヘラケズリ。内腹脚部ヨココナデ。	はむき品 底底25cm底存 在部
2	土鍋器	舟	14.00	3.10	4.00	石英・長石	黄褐色5YR6/6	良好	外腹脚部ヨココナデ。体部ヘラケズリ。内腹脚部ヨココナデ。	1/2欠損
3	土鍋器	舟	13.00	5.00	3.50	石英・長石	灰褐色7.5YR4/2	良好	外腹脚部ヨココナデ。体部ヘラケズリ。内腹脚部ヨココナデ。	口12cm底存 在部
4	土鍋器	舟	12.00	4.10	4.00	石英・長石	白灰色5YR7/8	良好	外腹脚部ヨココナデ。体部ヘラケズリ。内腹脚部ヨココナデ。	1/2欠損
5	土鍋器	舟	13.60	(3.00)	-	石英・長石	滑石	良好	外腹脚部ヨココナデ。体部ヘラケズリ。内腹脚部ヨココナデ。	口12cm底存 在部
6	土鍋器	舟	15.00	4.20	6.00	石英・長石	灰褐色10VY8/4	良好	外腹脚部ヨココナデ。体部ヘラケズリ。内腹脚部ヨココナデ。	1/2欠損
7	土鍋器	舟	14.00	4.60	5.00	石英・長石	黄褐色5YR6/8 黄褐色7.5YR11.7/1	良好	外腹脚部ヨココナデ。体部ヘラケズリ。内腹脚部ヨココナデ。	はむき品 底底25cm底存 在部

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	備考
8	土師器	甕	24.00	(11.30)	-	石英・長石	褐色7.5YR8/6	良好	外側黒褐色ヨコナギ。体部ヘナナダ。内面山形縞ヨコナギ。体部ヘナナダ。	口縫12周有
9	土師器	瓶	28.00	29.00	12.00	石英・長石	にぼい褐色 7.5YR7/1	良好	外側灰山形ヨコナギ。体部ヘラケズリ。内面山形縞ヨコナギ。体部ヘナナダ。	口縫12周有
10	土師器	甕	-	(3.00)	9.00	石英・長石	7.5YR8/1	良好	外側ヘナナダ。内面ヘナナダ。	口縫12周有
11	土師器	甕	-	(2.60)	8.00	石英・長石	10YR6/1	良好	外側ヘナナダ。内面ヘナナダ。	底部破片

番号	種別	長さ	高さ	重量	色調	特徴	備考
12	土製瓦	(20.71)	8.45	996.00	褐色7.5YR8/6	手捏ね	屋根瓦
13	土製瓦	2.00	2.50	12.31	西青褐色7.5YR8/3	球形	瓦筋

住居跡S17出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	備考
1	土師器	甕	-	(2.30)	-	石英・長石	褐色7.5YR8/6	良好	外側不規則ヘナナダ。ハラケズリ。内面山形縞ヨコナギ。	外側不規則 内面山形縞
2	土師器	瓶	-	(3.80)	-	石英・長石	球形2.5YR6/6	良好	外側不規則ヘナナダ。ハラケズリ。内面山形縞ヨコナギ。	外側不規則 内面山形縞
3	土師器	小鉢裏	7.60	(3.80)	-	石英・長石・ スカリア	西青褐色10YR8/4	良好	外側山形ヨコナギ。体部ヘナナダ。内面山形縞ヨコナギ。体部ヘナナダ。	西青褐色
4	土師器	小鉢裏	(3.30)	4.00	石英・長石	褐色7.5YR8/6	良好	外側山形ヨコナギ。内面ヘナナダ。	外側山形ヨコナギ	
5	土師器	甕	17.00	(3.90)	-	石英・長石・ チャート	西青褐色10YR8/4	良好	外側山形ヨコナギ。体部ヘナナダ。内面山形縞ハケ目調査。体部ヘナナダ。	外側山形ヨコナギ

住居跡S12出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	備考
1	土師器	甕	19.00	18.00	13.80	石英・長石	褐色7.5YR8/6	良好	外側山形ヨコナギ。体部ヘナナダ。内面山形縞ヨコナギ。	外側山形ヨコナギ 内面山形縞
2	土師器	甕	-	(6.30)	3.20	石英・長石	褐色7.5YR7/6	良好	外側山形ヨコナギ。体部ヘナナダ。内面山形縞ヨコナギ。	外側山形ヨコナギ 内面山形縞
3	土師器	小鉢裏	13.40	(9.40)	-	石英・長石・ チャート	褐色7.5YR8/6	良好	外側山形ヨコナギ。体部ヘナナダ。内面山形縞ヨコナギ。	外側山形ヨコナギ 内面山形縞

番号	種別	長さ	高さ	重量	色調	特徴	備考
4	土糞	2.88	3.10	28.10	明赤褐色7.5YR8/4	球形	瓦筋
5	土糞	3.75	3.00	32.21	にぼい紫色7.5YR7/1	長筒形	瓦筋

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	備考
6	繩引足	4.35	2.10	0.38	4.06	滑石		

住居跡S25出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	備考
1	土師器	甕	12.00	(1.30)	-	石英・長石	褐色7.5YR7/6	良好	外側山形ヨコナギ。体部ヘラケズリ。内面山形縞ヨコナギ。体部ヘナナダ。	外側山形ヨコナギ 内面山形縞
2	土師器	甕	-	(1.80)	6.60	石英・長石	褐色7.5YR8/6	良好	外側ヘナナダ。内面ヘナナダ。	底部破片

番号	種別	長さ	高さ	重量	色調	特徴	備考	
3	土糞	1.79	1.95	6.56	褐色2.5YR8/6	球形		
4	土糞	1.78	2.15	7.50	淡赤褐色7.5YR8/6	球形		
5	土糞	1.71	2.18	7.61	暗赤褐色7.5YR8/2	球形		
6	土糞	1.25	2.00	5.44	にぼい褐色7.5YR5/3	球形		

住居跡S26出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	備考
1	土師器	甕	13.60	3.60	6.00	石英・長石	褐色7.5YR8/6	良好	外側山形ヨコナギ。体部ヘラケズリ。内面山形縞ヨコナギ。体部ヘナナダ。	外側山形ヨコナギ 内面山形縞
2	土師器	甕	16.00	(3.70)	-	石英・長石	褐色7.5YR7/6	良好	外側山形ヨコナギ。体部ヘナナダ。内面山形縞ヨコナギ。体部ヘナナダ。	外側山形ヨコナギ 内面山形縞
3	土師器	甕	12.00	3.20	-	石英・長石・ 白粘土状物質	黒褐色10YR8/1 にぼい褐色	良好	外側山形ヨコナギ。体部ヘナナダ。内面山形縞ヨコナギ。体部ヘナナダ。	外側山形ヨコナギ 内面山形縞
4	土師器	甕	12.00	(2.60)	-	石英・長石・ 白粘土状物質	にぼい褐色	良好	外側山形ヨコナギ。体部ヘラケズリ。内面山形縞ヨコナギ。体部ヘナナダ。	外側山形ヨコナギ 内面山形縞
5	土師器	甕	13.00	(3.60)	-	石英・長石・ 白粘土状物質	明赤褐色7.5YR8/6	良好	外側山形ヨコナギ。体部ヘラケズリ。内面山形縞ヨコナギ。体部ヘナナダ。	外側山形ヨコナギ 内面山形縞
6	土師器	甕	15.00	(3.50)	-	石英・長石・ チャート	にぼい褐色 7.5YR6/3	良好	外側山形ヨコナギ。体部ヘラケズリ。内面山形縞ヨコナギ。体部ヘナナダ。	外側山形ヨコナギ 内面山形縞
7	土師器	甕	14.00	(3.30)	-	石英・長石	淡黄褐色10YR8/4	良好	外側山形ヨコナギ。体部ヘラケズリ。内面山形縞ヨコナギ。体部ヘナナダ。	外側山形ヨコナギ 内面山形縞
8	土師器	甕	12.60	(3.30)	-	石英・長石	褐色7.5YR8/6	良好	外側山形ヨコナギ。体部ヘラケズリ。内面山形縞ヨコナギ。体部ヘナナダ。	外側山形ヨコナギ 内面山形縞
9	土師器	甕	12.60	(2.90)	-	石英・長石	褐色7.5YR7/6	良好	外側山形ヨコナギ。体部ヘラケズリ。内面山形縞ヨコナギ。体部ヘナナダ。	外側山形ヨコナギ 内面山形縞

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	備考
10	土器器	盆	26.00	(8.80)	-	石英、長石、 珪質	青褐色10YR8/3 10YR8/2	良好	外輪山脚ヨコナダ。体部ヘラナダ。内輪山脚ヨコナダ。体 部ヘラナダ。	口周1.5cm存 在色斑
11	土器器	盆	22.40	(12.00)	-	石英、長石、 珪質	青褐色10YR8/3 10YR8/2	良好	外輪山脚ヨコナダ。体部ヘラナダ。内輪山脚ヨコナダ。体 部ヘラナダ。	口周1.5cm存 在色斑
12	土器器	盆	22.20	33.40	9.20	石英、長石、 珪質	青褐色10YR8/3 10YR8/2	良好	外輪山脚ヨコナダ。体部ヘラナダ。内輪山脚ヨコナダ。体 部ヘラナダ。	口周1.5cm存 在色斑

番号	種別	長さ	高さ	重量	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	備考
13	土生	2.30	2.15	16.90	-	浅褐色3YR8/4	褐赤	-	-	口周1.5cm存 在色斑
14	土生	2.21	2.54	15.64	-	浅黄色7.5YR8/3	淡黄	-	-	口周1.5cm存 在色斑
15	土生	1.96	2.28	9.31	-	偏黄色5YR8/8	米白	-	-	口周1.5cm存 在色斑
16	土生	1.77	2.23	7.91	-	浅黄色7.5YR8/8	米白	-	-	口周1.5cm存 在色斑
17	土生	1.42	2.05	6.12	-	浅黄色7.5YR8/2	米白	-	-	口周1.5cm存 在色斑
18	土生	1.27	2.12	(4.30)	-	浅黄色10YR7/4	米白	-	-	口周1.5cm存 在色斑

住居跡SI27出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	備考
1	土器器	杯	13.20	4.60	4.00	石英、長石、 珪質	褐色5YR8/6	良好	外輪山脚ヨコナダ。体部ヘラケズリ。内輪山脚ヨコナダ。口 周ヘラナダ。	口周1.5cm存 在色斑
2	土器器	杯	14.40	3.8	-	石英、長石	灰褐色10YR8/2	良好	外輪山脚ヨコナダ。体部ヘラケズリ。内輪山脚ヨコナダ。口 周ヘラナダ。	口周1.5cm存 在色斑
3	土器器	杯	14.20	(3.20)	-	石英、長石	褐色7.5YR4/3	良好	外輪山脚ヨコナダ。体部ヘラケズリ。内輪山脚ヨコナダ。口 周ヘラナダ。	口周1.5cm存 在色斑
4	土器器	杯	13.00	(2.20)	-	石英、長石	褐色7.5YR8/1	良好	外輪山脚ヨコナダ。体部ヘラケズリ。内輪山脚ヨコナダ。口 周ヘラナダ。	口周1.5cm存 在色斑
5	土器器	杯	13.60	(3.60)	-	石英、長石	浅褐色10YR8/4	良好	外輪山脚ヨコナダ。体部ヘラケズリ。内輪山脚ヨコナダ。口 周ヘラナダ。	口周1.5cm存 在色斑
6	土器器	杯	17.00	(3.80)	-	石英、長石、 珪質	褐色5YR8/3	良好	外輪山脚ヨコナダ。体部ヘラケズリ。内輪山脚ヨコナダ。口 周ヘラナダ。	中段厚壁片 口周色斑
7	土器器	杯	16.80	8.10	8.0	石英、長石、 矽クリア	褐色7.5YR8/4	良好	外輪山脚ヨコナダ。体部ヘラナダ。内輪山脚ヨコナダ。口 周ヘラナダ。	作泥・膨水層
8	土器器	盆	-	(7.20)	5.40	石英、長石、 矽クリア	褐色7.5YR8/6 (内)褐色10YR8/6	良好	外輪山脚ヨコナダ。体部ヘラナダ。	米白1.5cm存 在色斑
9	土器器	盆	-	(2.20)	7.60	石英、長石	褐色10YR8/1 (内)にいき褐色	良好	外輪山脚ヨコナダ。体部ヘラナダ。	灰褐色1.5cm存 在色斑
10	土器器	盆	-	(4.30)	9.00	石英、長石	褐色10YR8/3 褐色10YR8/1	良好	外輪山脚ヨコナダ。内輪ヘラナダ。	米白1.5cm存 在色斑

住居跡SI28出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	備考
1	土器器	杯	11.80	(3.80)	-	石英、長石	浅褐色10YR8/3	良好	外輪山脚ヨコナダ。体部ヘラケズリ。内輪山脚ヨコナダ。口 周ヘラナダ。	口周1.5cm存 在色斑
2	土器器	杯	13.00	(3.10)	-	石英、長石	褐色5YR8/8	良好	外輪山脚ヨコナダ。体部ヘラケズリ。内輪山脚ヨコナダ。口 周ヘラナダ。	口周1.5cm存 在色斑
3	土器器	杯	14.00	16.30	6.00	石英、長石、 矽質	明褐色2.5YR8/6	良好	外輪山脚ヨコナダ。体部ヘラケズリ。内輪山脚ヨコナダ。口 周ヘラナダ。	口周1.5cm存 在色斑
4	土器器	杯	-	(3.20)	8.00	石英、長石	にいき褐色 5YR8/4	良好	外輪山脚ヨコナダ。内輪ヘラナダ。	灰褐色1.5cm存 在色斑
5	土器器	杯	-	1.75	2.06	石英、長石	褐色10YR7/4 褐色10YR8/3	良好	-	米白1.5cm存 在色斑

住居跡SI29出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	備考
1	土器器	杯	22.00	(4.00)	-	石英、長石 10YR8/1	青褐色10YR8/1	良好	外輪山脚ヨコナダ。体部ヘラケズリ。内輪山脚ヨコナダ。口 周ヘラナダ。	口周1.5cm存 在色斑
2	土器器	杯	22.40	(7.20)	-	石英、長石	明褐色10YR8/6	良好	外輪山脚ヨコナダ。体部ヘラナダ。内輪山脚ヨコナダ。口 周ヘラナダ。	口周1.5cm存 在色斑
3	土器器	杯	25.00	(6.10)	-	石英、長石	褐色10YR8/6 9.5/7.5YR8/6	良好	外輪山脚ヨコナダ。体部ヘラナダ。内輪山脚ヨコナダ。口 周ヘラナダ。	口周1.5cm存 在色斑
4	土器器	杯	-	(5.20)	8.00	石英、長石	褐色10YR8/1 (内)青褐色10YR8/2	良好	外輪山脚ヨコナダ。内輪ヘラナダ。	米白1.5cm存 在色斑
5	土器器	杯	-	(18.20)	9.00	石英、長石	褐色10YR8/3 褐色10YR8/1	良好	外輪山脚ヨコナダ。ヘリケズリ。内輪ヘラナダ。	口周1.5cm存 在色斑

住居跡SI31出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	備考
1	土器器	高杯	17.80	14.80	12.00	石英、長石、 黑色粘土	深褐色10YR8/8	良好	外輪山脚ヨコナダ。ヘラケズリ。内輪山脚ヨコナダ。口 周ヘリナダ。	口周1.5cm存 在色斑
2	土器器	高杯	-	(8.80)	-	石英、長石	褐色10YR8/8	良好	外輪山脚ヨコナダ。ヘラケズリ。内輪山脚ヨコナダ。口 周ヘリナダ。	口周1.5cm存 在色斑
3	土器器	高杯	17.00	(3.50)	-	石英、長石	天藍色7.5YR8/2 9.5/7.5YR8/6	良好	外輪山脚ヨコナダ。ヘラケズリ。内輪山脚ヨコナダ。口 周ヘリナダ。	口周1.5cm存 在色斑
4	土器器	高杯	21.80	(21.00)	-	石英、長石、 黑色粘土	褐色10YR8/1 (内)黑色10YR8/2	良好	外輪山脚ヨコナダ。ヘリケズリ。内輪山脚ヨコナダ。口 周ヘリナダ。	口周1.5cm存 在色斑
5	土器器	小形甕	12	13.70	14.9	石英、長石	深褐色10YR8/4	良好	外輪山脚ヨコナダ。ヘリケズリ。内輪ヘラナダ。	口周1.5cm存 在色斑

番号	種別	長さ	高さ	重量	色調	特徴	備考
6	土器	3.59	3.86	60.02	褐色色10YR6/1	想定	発見品
7	土工	2.72	3.14	26.24	浅黄色7.5YR6/6	想定	完形品
8	土器	3.09	2.42	12.88	にせい褐色7.5YR6/4	想定	完形品

住居跡SI32出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	備考
1	土器	壺	26.80	(10.50)	-	粘土・石英・長石	赤色7.5R6/8	良好	口縁部は軽々と削りあわせた複合口縁で、口縁端部カナ。	口縁部1/2強赤系
2	土器	壺	18.00	(4.60)	-	石英・長石	淡褐色5YR6/4	良好	口縁部に二重の口縁の構造を有する。複合口縁はラミガキ。側面に削り落し跡が残る。	口縁部1/4強赤系
3	土器	壺	15.60	12.20	15.80	砂妙	灰褐色7.5YR6/2	良好	山腹部は粘土質を有するあわせた複合口縁で、口縁端部カナ。	山腹部1/2強赤系
4	土器	壺	-	-	-	石英・長石・スコリア	赤色10R4/8	良好	山腹部は粘土質を有するあわせた複合口縁で、口縁端部カナ。	山腹部1/2強赤系

番号	種別	長さ	高さ	重量	色調	特徴	備考
5	土器	3.11	1.65	72.50	にせい褐色7.5YR6/3	人形・球形	史跡品
6	土工	2.91	2.93	25.37	にせい褐色7.5YR6/4	球形	完形品

住居跡SI33出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	備考
1	土器	壺	-	(8.20)	13.60	粘土・長石・虫	赤色10R4/8	良好	外縁削除ヘラナ。内裏削除ヘラナ。	脚部削除 赤系
2	土器	壺	-	(10.70)	-	石英・長石・虫	淡褐色7.5YR6/6	良好	外縁削除ヘラナ。内裏削除ヘラナ。シザリ。	脚部削除 赤系
3	土器	小壺	17.80	(8.70)	-	石英・長石	淡褐色7.5YR6/2	良好	外縁削除ヘラナ。内裏削除ヘラナ。シザリ。体部ハケ付痕跡。ヘラナ。	体部1/8程度 赤系

番号	種別	長さ	高さ	重量	色調	特徴	備考
1	土工	3.85	3.81	56.80	黄褐色7.5YR6/5	地形	完成品
3	土器	2.34	2.99	28.86	灰褐色10YR6/2	細沫状	完成品

住居跡SI45出土遺物観察表

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	色調	焼成	手法の特徴	備考
6	埴狀土器	(2.85)	1.10	1.08	(3.22)	土器	黑色7.5V6/1	良好	外縁口唇部ヨコナ。伝火ハケ目剥き。ヘラナ。内面凹削除ヨコナ。体部ヘラナ。	体部1/2強赤系 底部削除
7	調査	4.22 (1.63)	1.45 (0.43)	0.96 (0.38)	5.06	石英	淡褐色7.5YR6/4	良好	外縁ヘラナ。内面ヘラナ。	底部削除



現地説明会

第三章　まとめ

1. はじめに

龍善寺遺跡は桜ヶ舎に注ぐ桜川の右岸にあたり、東西を支谷に挟まれた南北に伸びる台地上に立地している。遺跡は台地中央から東側および北東側にかけて広がるものと推定されるが、今回の調査範囲は限定されてはいるものの、まさに遺跡の中心にあたったと思われる。本來の遺跡規模は南北200m、東西150m以上に広がり、縄文時代と古墳時代の集落跡としては市内でも有数の大規模遺跡のひとつとなった。しかし、調査自体は広大な遺跡の縁辺部と中央部にトレンチ調査を入れたような段階に過ぎず、調査面積が3,500m²にも満たないため未調査部分に相当数の堅穴住居跡や上坑が存在するものと考えられる。それでも今回検出された遺構は、縄文時代の堅穴住居跡25軒、上坑302基、古墳時代の堅穴住居跡21軒にものぼり、最終的な遺跡全体の遺構総数はばかりしない。少なくとも上坑の総基數は一千単位をはるかに超えることだけは確実である。

しかし、住居跡および上坑の大半は、遺構同士の複雑な切り合いによって保存状態が不良であったり、トレンチ調査のため全掘できない遺構も多数あり、明確な時期や性格が特定できないものも多いこともまた事実である。ここで、縄文時代にしろ古墳時代にしろ現段階では集落全体を把握することは不可能な状況であり、今回の調査で得られた成果のみについてまとめておくことにしたい。

2. 縄文時代

a) 堅穴住居跡と土坑について

縄文時代の遺構の中心となるものは中期の堅穴住居跡と土坑であるが、その他に前期の堅穴住居跡と土坑が確認されている。前期は中葉・黒浜式期の住居跡1軒が検出された。SI05とした住居跡で径3.6mの小形円形である。わずかに黒浜式土器が出土したため、当該期の住居跡と判断した。また前期の土坑として3基（SK04・78・230）を確認している。

次の中期の住居跡と土坑は本遺跡の中心である。確認される時期は阿玉台Ib式期から加曾利E3式期であるが、出土遺物から所属時期決定すると住居跡も土坑も加曾利E1式および2式期に大半が含まれる。しかし、前述したとおり多くの遺構が切り合い関係を第一要因とし、トレンチ調査を第二要因として保存状況あるいは検出状況は不良である。とくに24軒検出された住居跡については完掘したものが皆無であった。半うじて炉跡の痕跡から住居跡として判断したものが多い。まず炉跡を中心に柱穴を検出し、さらに僅かに残る床面から住居跡の範囲を確認するといった状態であり、しかも出土した土器も破片が大半で資料的には恵まれていない。こうした状況は本遺跡だけではなく、中期における大規模遺跡のもつ宿命でもある。市内で調査した中期の大規模遺跡はいずれも同様で、木田牟地区の東台遺跡や御戸遺跡、桜ヶ丘町の六十原遺跡、六十原A遺跡等は有段堅穴住居跡のように深掘された床面以外、切り合ひなしで完全な状態で検出するのは困難である。ここで壁面が残存し、平面プランの判別できる住居跡は僅か3軒のみで、部分検出のSI07・13・41に設定される。その形状は円形、楕円形、隅丸方形と一定していない。また壁面の確認できない住居跡をみても円形もしくは椭円形が通有タイプと判断できよう。また炉跡についてはSI11が炉跡脇に埋葬として深鉢が埋設していた以外はすべて地床炉である。

なお、こうした多くの住居跡は壁面がないため住居範囲が明確ではなく、覆土が薄く、しかも覆土中の遺物が混在し一型式以上のタイムラグが存在していることからその縦横時期を判断するのは困難である。しかし報文中で示したように敢えて床面近くに出土した土器を当該期に所属するものと推定すると24軒の住居跡の時期は下記のとおりとなろう。

阿玉台Ⅲ～Ⅳ式期 SI43

加曾利E1式期 SI07・08・11・41・42・44・46

加曾利E2式期 SI13・14・15・18・20・22・23・35・36・37・38・40

時期不明（加曾利E式期）SI19・24・34・39

こうした化居跡に対して深掘を行う土坑は、規模も小さいこともあり、複雑な切り合いで全掘不可能であっても形態の見極めはそれほど困難を要しないで捉えることができる。そこで土坑の判明している構造の特徴について整理しておきたい。

土坑の構造については、すでに多くの論考がありここで改めて触れる必然性はないが、基本的には平面形態と横断面形の2属性から導かれる諸形態から底面に設置された付帯施設のあり方によって分類する（小川1991）。平面形態が明確に判明できるものは少ないといえ、大半は円形系統を基本とし、角あるいは一辺直線のある方形系統は皆無である。完掘した形態を見る限りではやや不整形にみえるものも、その坑底形はいずれも円形もしくは椭円形である。また横断面形については坂口隆氏による分類が有効であろう。つまりプラスコ状は「頭部が細くくびれ、断面は底径が口径よりもはるかに大きくなるもの」、袋状は「底径が口径をやや上回るもの」、さらに円筒状は「口径と底径がほぼ同じおおきさのもの」（坂口2003）とした。筆者はそこで底径係数（口径÷底径×100）を求め、底径が口径よりも大きくなる係数90以下を「プラスコ状」、係数91～99を「袋状」、100以上を「円筒状」と分類したことがある（小川2005）。しかし、本来の原形態が、天井部や入口部等の崩落あるいは土坑同士の切り合いでによる壁等の崩れ、さらに調査時における掘り過ぎという失態などの原因で原状を保っていることが困難な場合が多いし、すでに縄文時代における構築立地や季節あるいは使用用途の相違においてもその形態の変化は多種多様であることは十分に想定できる。したがってこれらの設定基準についてはまだ検討が必要とされる理由がここにある。なお、図に検出された縄文中期土坑292基の横断面形態の割合については、プラスコ状6基（2%）、袋状101基（35%）、円筒状182基（62%）、不明3基（1%）となる。

また坑底施設についてもバラエティーに富んでおり一様ではない。基本型は坑底中央部に穿たれている「センターピット」、壁間に配される壁柱穴状の「サイドピット」、壁際に位置しいわゆる予ピットあるいは貯藏穴状ピットと称される「サイドポケット」、横中に土器等を埋設する小ピットである「ソケットピット」等がみられ、これら付帯施設が何種類かの組み合わせによって一土坑が成立するが、逆に全く施設を設けないか、あるいは一種類のみの付帯施設を有するものも実に多くを占めている。無施設土坑55基やセンターピットあるいはサイドポケットのみの土坑55基も多数みられるが、2ヶ所以上の付帯施設を具备している土坑も目立つ。とくにサイドピットなど多数の付帯施設を有する土坑が多いことも本遺跡の特徴であろう。

次に土坑内の遺物出土状況について触れておきたい。多くは不完全な検出状態のために土器破片が中心で完形品もしくは接合資料が極端に限定されている。遺物編で図示したように復元実測を含めても遺物数からみれば資料は少ないといえよう。その中にあってFig.213に示した遺物出土状況図は数少ない完形土器が検出された土坑を集めしたものである。かつて土坑内の遺物の出土状況から二態の形態があることを触れたことがある（小川2005）。それは「土器の遺棄行為が行われた土坑（a類）」と「土器の廃棄行為が行われた土坑（b類）」である。この区分は土坑底面近くに埋没した“第一次堆積土”（堆積土）の層中（a類）あるいは層上（b類）で検出された完形遺物の出土状況において分類したものである。とくに自然堆積と推定される第一次堆積土が確実に把握され、人為的にしろ自然堆積にしろ第二次堆積土との相違が明瞭な土坑のみ適用されるものである。これによって今だ十分解明されていない本来の土坑用途、さらには後処理等がこの出土土器の状況によって、少しでも問題解決に近づければと思っている。

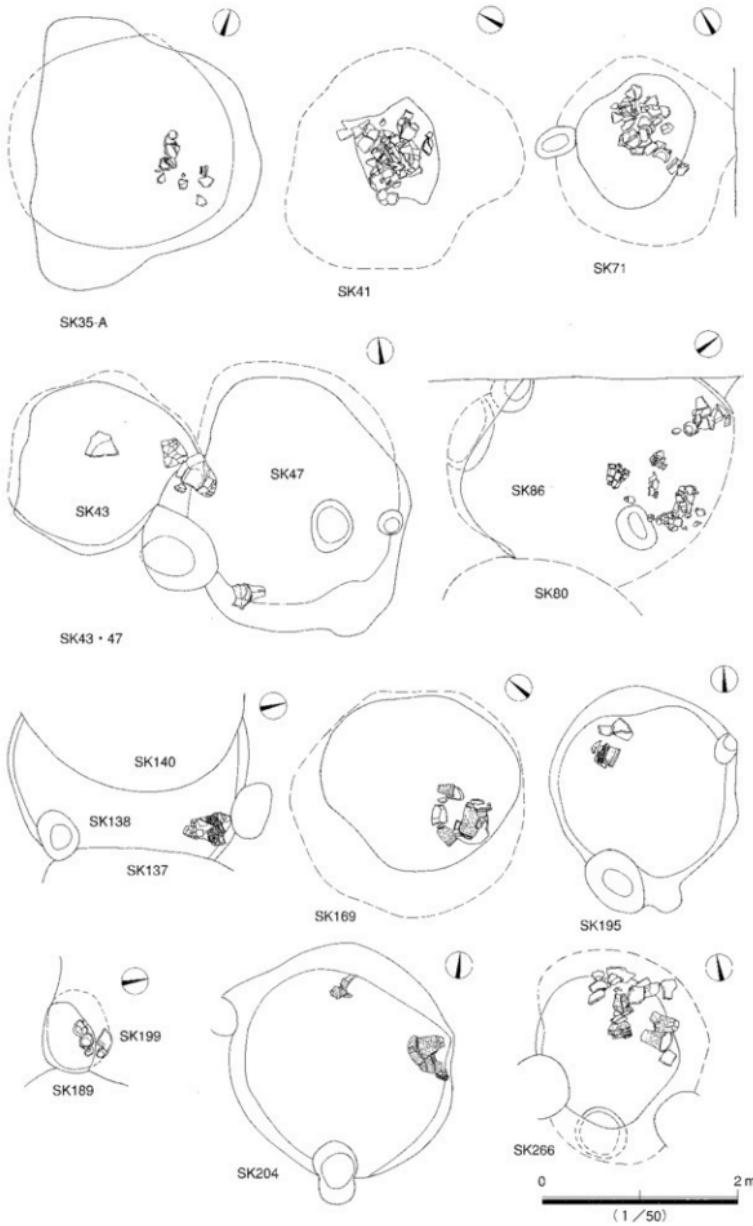


Fig. 213 土坑SK35-A・41・43・47・71・86・138・169・195・199・204・266出土遺物状況図

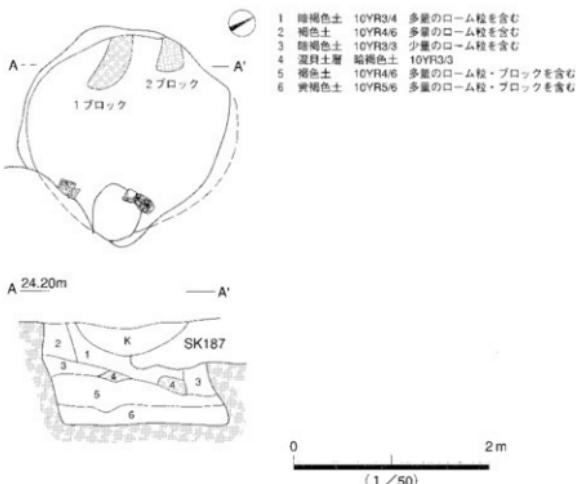


Fig. 214 土坑SK183出土遺物状況図

b) 繩文土器について

今回の調査では、検出された住居跡および上坑から多量の繩文土器が出上している。古くは前期黒浜式や浮島式が僅かであるが確認されているものの、主体となるものは中期中葉・阿玉台式から加曾利E3式期までで、とくに加曾利E1式および加曾利E2式土器については検出された大半の遺構から好資料が提供されている。

ここ設ヶ浦を臨む常磐台南側は、繩文中期の大規模集落が数多く存立することでもよく知られている地域である。報告されている土浦市内においても、木田余地区の東台遺跡、御矢遺跡や桜ヶ丘町六十原遺跡、六十原A遺跡等があり、本遺跡と同様阿玉台式期から加曾利E2式期の集落跡でとくに加曾利E1式期前後に集中しているが、ここでは周辺地域の検討は改めて触れることとし、あくまでも今回検出された調査区内の出土土器群の様相についての素描を試みることにしたい。

1段階 (Fig.215-1~4) 土坑SK41・71出土土器群を表示した。隆帯に沿って二列の角押文を施したもので、隆帯による梢円形区画文を構成し、1のように区画内に波状文を施し、胴部にY字状隆帯を垂下させる。3は胴部に三角形状区画文を配する。4は口縁部直下にV字状文を貼付け、蛇行隆帯を垂下させる。阿玉台II式期に比定される。

2段階 (Fig.215-5~9) 上坑SK47・169・195出土土器を表示した。本遺跡では上坑内に完形土器が纏まとて出土することを特徴とする。5~7は口縁部に交差刺突文を巡らすもので、SK47出土の5および伴出する土器群 (Fig.143-2・5) はいずれも交差刺突文を区画文する。また5の波状口縁でキャリバー形に近い器形を呈するものや6の平縁で口縁部が切く外反する深鉢が当該段階の指標となろう。阿玉台IV式直後、加曾利E1式直前のいわゆる中叶式期に相当する。

3段階 (Fig.215-10~20) 本遺跡で主体を占める土器群である。キャリバー形の深鉢を特徴とするものの、口縁部文様帶において、繩文もしくは撫糸施文を地文とし、「貼付隆帯」による横位連携文を意識した渦巻文系の区画文や単位文を描出する。また隆帯も2条平行する背割り隆帯もしくは断面カマボコ状の單線隆帯の二

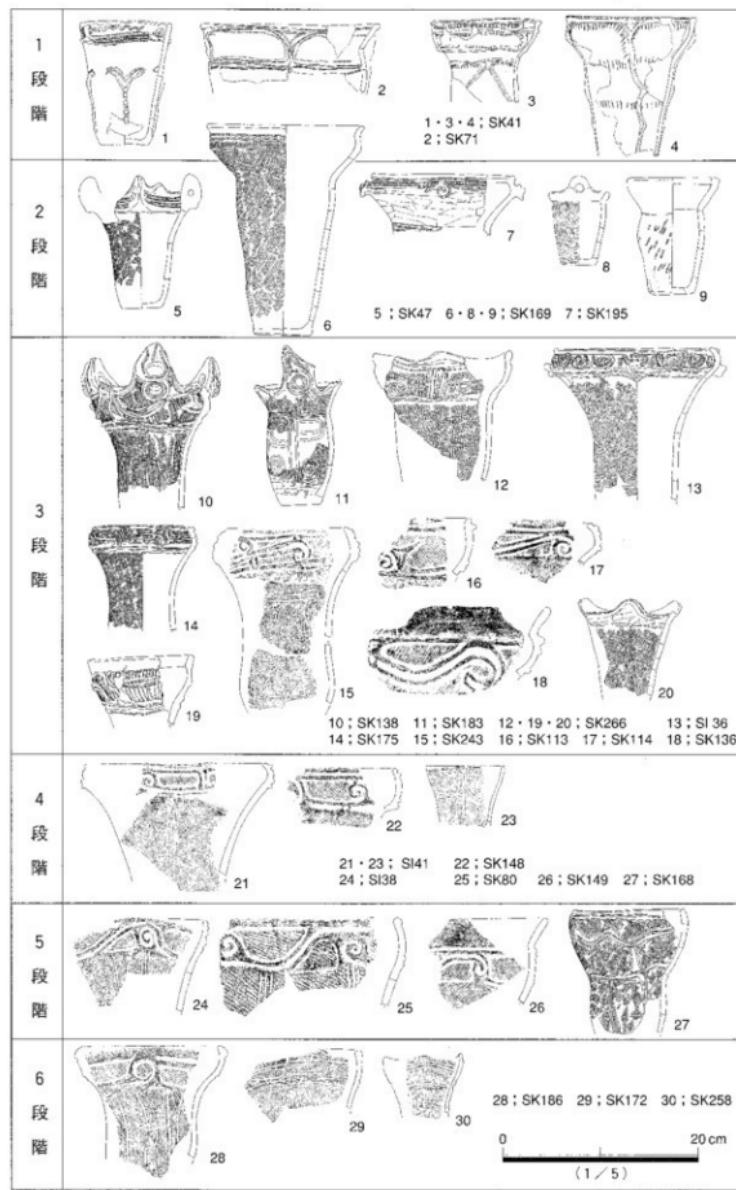


Fig. 215 龍善寺遺跡出土土器の時期区分

者がある。胴部文様帯は単繩文のみのほか、沈線による大木式系溝巻文を基調とする装飾懸垂文を垂下させる(10・15)。加曾利E1式期であるが、ここでは区分していないものの、少なくとも2段階に分離することが可能であろう。

4段階 (Fig.215-21~23) 前段階からスムーズに移行するものの、文様帯の齊一性と単純化傾向に入る段階。キャリバー形の深鉢を基調に、口縁部文様帯は沈線の沿う降帯による区画文および区画文に連携する溝巻文系単位文を配する。胴部文様帯は繩文地文に1本（蛇行懸垂文を主とする）および2・3本一組（直行懸垂文を主とする）の懸垂文を垂下させる。加曾利E1式直後に相当する。

5段階 (Fig.215-24~27) やはり前段階からの変遷は継続的でありながら、文様帯のより齊一性と単純性が強くなる段階。キャリバー形の深鉢を特徴とし、口縁部文様帯において、繩文を地文に横位連携の枠状区画文と溝巻単位文を描出する。また降帯は單陸帯で両脇に沈線を沿わせる。胴部文様帯は繩文地文に沈線による磨消懸垂文を垂下させる。また27の連弧文土器と条線地文の曾利系土器と共に土器組成の一要素として確実に成立する。加曾利E2式前半期に相当する。

6段階 (Fig.215-28~30) 口縁部文様帯はさらに単純化され、さらに胴部文様帯の施文工程に磨消懸垂文がモチーフとなる文様変換が行われる。28はその典型文である。また文様そのものも29でみるように形骸化された枠状区画文が施文される。加曾利E2式後半期に比定される。

以上が本遺跡で検出された十坑を中心に出土した縄文中期中葉から後半にかけての様相を概観した。とくに加曾利E1式期からE2式期にかけて最も充実した土器群を提供しているが、決して十分説明可能な土器組成が説明されていない。今後の課題としたい。

c) 土器片錐

土器片を一定の大きさに打ち欠き、一対の両端部中央に抉状の刻みを施した遺物を土器片錐として分類する。当該跡ではその出土総数は547点である。調査面積から判断すれば、土器片錐の多量保有遺跡と理解して誤りないであろう。本来は石器などと異なり直接生業に拘る道具ではなく、紐類に結縛されて用いる生業用具の一部品であることから、移動が激しく遺跡内の遺留率が低い遺物のひとつと考えられる。したがって製作途中の欠陥品あるいは使用放棄されたものが残存したものであり、その遺存数は限定されたものと推定される。さらに未調査区域が広いことでその保有総数は計り知れないであろう。

さて、上器片錐のすべては、廃棄処分の土器を転用したものである。その素材としては、深鉢が多いが、浅鉢もあり、しかも製作が容易な胴部破片が平倒的に拘らず、肥厚差や屈曲があり、製作に多少の難があるような底部や口縁部も存在することから、素材の選択にその規則性は見当たらない。ただ口縁部位は口唇部に溝を刻むものは極端に少なく、口縁部と平行する軸に刻むのが多いこと、さらに胴部破片の利用においても横長土器片を縱方向に軸を設けるものが大半を占めていることなど、形状においてすべてが同じという共通性はないものの、傾向としての共通属性を窺い知るものは存在する。

ここで法量および重量についてみてみると、法量では基本形状が長方形もしくは楕円形を呈することから明瞭な長軸と短軸の判断を容易にするものが半倒的である。したがって、長軸と短軸の係数を求めることが有効と考えるが、ここでは長軸のみをみてみると、長さが9.8cm大をピークとして3~4cm大に集中し、逆に2cm大小の小形の存在も見逃せない。また重量についてもその用途から「おもり」という機能を鑑みると最も製作段階で重視したはずであるが、かなりのバラつきがあることは周知の事実である。10~20g前後に集中し、70gを最大とすることはFig.216のとおりであるが、俗に大は小を兼ねるという範囲では理解できないほど薄く軽量小形製作の存在意味を再考する必要があろう。とくに上器片錐の用途を考える場合無視できない存在である。

なお、上器片錐として認識できる紐掛け溝の刻み方法にもいくつかのバリエーションがあることはいうまで

もないが、数点であるが、一対にさらに付け加えられているものがある。SK102出土の13 (Fig.158-13) は中心軸に斜めに1ヶ所刻みが施されている。その反対の対の方向をみると欠損品であることが判る。これは製作途中で破損したため、再度打ち欠いて整形し直して再生したものである。また、SK287出土の12 (Fig. 206-12) のように直交する方向に刻みが施されたものである。

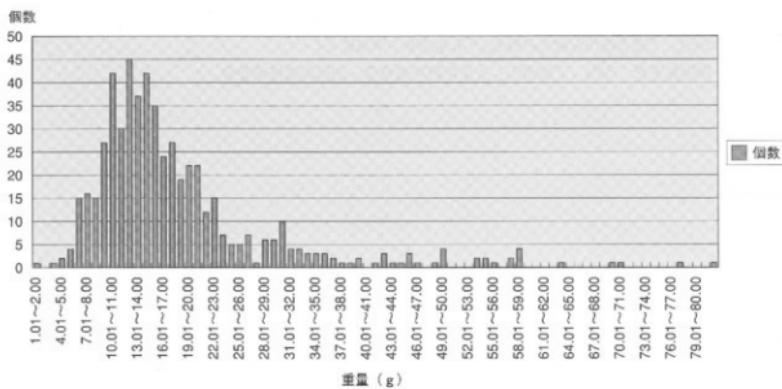


Fig. 216 土器片錐重量分布グラフ

d) 動物遺存体について (Fig.214, PL18・42)

土坑SK183の東壁際の覆土上層から貝ブロックが検出された。大きく二ブロックに分かれていたものの、状況からみてほぼ同時に廃棄されたものと理解している。検出されたすべての貝を採取すべく、サンプルグリットを設けて取り上げたが、第1ブロックは径30×60cm、層厚12cm、第2ブロックは径20×45cm、層厚10cmと両ブロックともに薄層であったため、総サンプル取り上げとなり、整理段階で試験フルイによって水洗分離し、その後に貝種の選別、集計等を行った。まず重量は第1ブロック3,201g、第2ブロック3,313gを測り、総重量6,514gとなった。なお、貝種以外のほかには魚骨、歯骨類はまったく検出できなかった。

出土した貝種のなかで圧倒的に占めたのが、ウミニナである。殻高の平均が30mm前後であり、カウント可能なほぼ完存するウミニナの個体数と重量は第1ブロックで3,660個体、3,185g。第2ブロックでは3,690個体、3,299gとはほぼ同量数を数える。そこはかに両ブロックともに総量25g (0.8%) 前後の少量の貝種が確認されている。いずれもカワニナ・タガイ・マツカサガイ・ヤマトシジミといった淡水産貝類とオキシジミ・イボニシであるが、その個体数は10個体以下である。主体となるウミニナは干潟生物を代表する極めて普通の巻貝である。霞ヶ浦における湾奥干潟の地形環境がそのまま貝種生息地と一致するならば、これがかつて遺跡の立地する台地の眼下の環境を物語っていることとなる。

(小川和博)

参考文献

- 福田建一他 1998 「船塙 I -1997年度船塙遺跡群発掘調査の成果ー」(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社
- 小川和博 1991 「木田余台 I」土浦市教育委員会・土浦市遺跡調査会
- 小川和博 2003 「六十原遺跡」土浦市教育委員会・土浦市遺跡調査会
- 小川和博 2005 「茨城県常陸大宮市高ノ倉遺跡発掘調査報告書」常陸大宮市教育委員会
- 坂口 隆 2003 「縄文時代貯蔵穴の研究」「未完成考古学叢書5」
- 常本 晃・福井礼子他 2004 「稲荷山」大宋町教育委員会・稲荷山遺跡調査会

第IV章 付編

茨城県土浦市龍善寺遺跡における 縄文時代黒耀石遺物の産地推定

明治大学文化財研究施設運営委員 杉原重夫

明治大学文化財研究施設実験助手補 鈴木尚史

中部測地研究所 藤森靖枝

1. はじめに

考古学研究においては、遺物が遺跡へと至るまでの来歴を辿ることによって、個々の時代における人々の行動様式や流通関係に迫ることが可能となる。特に狩獵・採集によって生前を立てていたと考えられている石器時代において、石器に使用する石材の産地分析は、空間的な人の動きに迫るために有効な分析方法である。なかでも、火山の噴出物として生成された黒耀石は、結晶構造をもたず、斑晶の含有量が少ないとから元素組成が安定している。このような黒耀石の岩石学的特質に着目して、今まで様々な理化学的分析方法を用いた産地推定が行われてきた。特に蛍光X線装置を用いた分析は、装置の操作や測定の前処理が容易である点や、特に資料を非破壊で測定できるなど、考古資料を扱うのに適している。また、比較的短い時間で測定できるという点で、分析対象が出土遺物全般におよぶ石器研究においては非常に有効な測定手段といえよう。今回も、蛍光X線装置を用いた産地推定を行った。

2. 測定方法

蛍光X線法を用いて黒耀石の正確な元素分析値を得るには、内部が均質で表面形態が一様な試料を作成し、検量線法などによって定量的に分析を行うのが一般的である。そのためには試料を粉碎してプレスしたブリケットを作成するか、もしくは溶融してガラスピートを作成する必要がある。しかし、遺跡から出土した石器は、通常、非破壊での測定が要求されるため、上記の方法をとるのは困難である。そのため、石器に直接X線を照射する半定量分析が行われている。このような直接照射によって発生する蛍光X線の強度そのものは、試料の状態や装置の経年変化によって変動する可能性が高いが、特定元素の強度同士の比を探った場合はその影響は小さいと考えられている。今回は測定強度比をパラメータとして産地推定をおこなうこととした⁽¹⁾。

3. 試料の前処理

比較用の産地採取原石については必要に応じて新鮮な断面または研磨面を作成し、超音波洗浄器によるクリーニングを行った。遺跡出土石器については、多くの場合新鮮で平滑な剥離面があるため、測定前に超音波洗浄器によるクリーニングのみを行った。表面に風化皮膜が発達し超音波洗浄器で除去できないものに関しては測定対象から除外した。

4. 装置・測定条件

蛍光X線の測定にはエネルギー分散型蛍光X線分析装置JSX-3201（日本電子データム製）を用いた。X線管球はターゲットがRh（ロジウム）のエンドウインドウ型を使用した。管電圧は30KV、電流は抵抗が一定となるよう自動設定とした。X線検出器はSi（ケイ素）／Li（リチウム）半導体検出器を使用した。試料室内の状態は真空雰囲気下とし、X線照射面径は32mmとした。測定時間は、産地採取原石が600sec、遺跡出土試料が300secである。測定元素は、主成分元素はケイ素（Si）、チタン（Ti）、アルミニウム（Al）、鉄（Fe）、マンガン（Mn）、マグネシウム（Mg）、カルシウム（Ca）、ナトリウム（Na）、カリウム（K）の計9元素、微量元素はルビジウム（Rb）、ストロンチウム（Sr）、イットリウム（Y）、ジルコニウム（Zr）の計4元素の合計13元素

とした。

5. 石器の産地推定

黒耀石はケイ酸、アルミニウム等を主成分とするガラス質火山岩であるが、その構成成分は産出地による差異が認められる。とりわけ微量元素のRb、Sr、Y、Zrでは産出地ごとの組成差がより顕著となる（望月ほか、1994）。望月（1997）は、この産地間の組成差から黒耀石の産地推定が可能であると考え、上記の4元素にK、Fe、Mnの3元素を加えた計7元素の強度比を組み合わせることで産地分析を行っている。これら7元素による産地推定の有効性は、ガラスピートを用いた定量分析によっても裏付けられている（鶴野ほか、2004）。ここでも、上記した望月の判別方法に準拠する形をとることとし、産地判定のパラメータにRb分率（Rb強度×100/Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強度）、Sr分率（Sr強度×100/Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr）、Mn強度×100/Fe強度、 $\log(\text{Fe強度}/\text{K強度})$ を用い、判別図の作成、および判別分析を行った。これらの元素比の繰り返し測定（13回）における再現性（1σ）は霧ヶ峰地区早ヶ塔産黒耀石試料（KRG7-27）においてRb分率=4.1、Sr分率=2.9、Mn強度×100/Fe強度=0.25、 $\log(\text{Fe強度}/\text{K強度})$ =0.0053であった。

6. 黒耀石原産地の判別

6-1. 判別図

判別図は、視覚的に分類基準が捉えられる点、および判定基準が分かりやすいというメリットがある。また、測定結果の提示に際し、読者に理解しやすいという点もまた有効であろう。まず、各産地採取試料（基準試料）の測定データを基に、種類の散布図グラフ（Rb分率vsMn×100/FeとSr分率vslog(Fe/K)）を作成し、各産地を同定するための判別域を決定した。次に遺跡出土資料の測定結果を重ね合わせて大まかな判別を行った。個々の遺物の判別に際しては、基準試料の測定値（上記の4パラメータ）と対比することによって産地推定を行った。基準試料の測定強度比の平均値を表3に示す。

6-2. 判別分析

判別図や測定値の比較による産地の推定は、測定者ごとの恣意的な判断を完全に排除することは難しい。そこで、多変量解析の一つである判別分析を行った。判別分析では、判別図作成に用いたパラメータを基にマハラノビス距離を割り出し、各産地に帰属する確率を求めた。距離と確率とは反比例の関係にあり、資料と各産地の重心間の距離が最も短い産地（群）が第一の候補となる。なお、分析用ソフトにはstatistica2000（statatto soft社製）を使用した。また、判別結果の参考資料として、各産地群（重心）間のマハラノビス距離を提示した（表4）。

7. 黒耀石原産地の名称と地理的な位置づけ

今回の黒耀石の原産地推定にあたっては、日本の黒耀石産出地データベース（杉原・小林、2004）を使用し、この中から、既存の文献・資料を参考にして現地調査を行い、石器石材に利用可能と思われる黒耀石の産地を選択した。ただし、ここでは黒耀石の原産地候補を関東・中部地方に限定して考察しており、北海道、東北、北陸、九州地方の各産出地については、検討していない。

黒耀石原産地の判別にあたっては、各産地を火山体、島嶼、河川流域、岩石区等の地形・地質的条件によって枠組みを行い、これを「地区」と名づけ、現在、黒耀石を産出する地点（露頭・散布地など）を「産地」とした。今回の原産地分析に使用した「系」は、「地区」内の「産地」のうち、蛍光X線分析によって判別された地理的に隣接する「産地」群で、岩石化学的原産地を指す。それぞれの「系」内の黒耀石産地については、火道や貫入岩の位置、噴出物の形状や分布状態、黒耀石の岩石学的特徴（含有する斑晶鉱物、球顆の有無、色調、透明度など）についても検討を行い、この原産地設定が火山地質学的に有意義であることを確認している。ただし、同一の「系」内の産地でも、複数の判別域が存在する場合や、異なる「系」どうしで判別が困難な例も存在する。また、黒耀石産出地には、噴出源に近い1次産地のほか、河川や海流によって遠方に運ばれた2次産地があり、ここでの判別域は、必ずしも考古学的原産地（石器時代における採取地）を示すのではないこと

表1 関東・中部地方における黒耀石原産地の区分

地区 (area)	系 (series)	産地 (district)
霧ヶ峰地区	西霧ヶ峰系	星ヶ塔、星ヶ台
	男女倉系	ブドウ沢、牧ヶ沢、高松沢
	和田岬系	小深沢、東餅屋、東俣探査場、丁字御領、土屋沢
	鷹山系	星糞峰、鷹山川河床
北八ヶ岳地区	冷山系	冷山
箱根地区	麦草峠系	麦草峠
	芦之湯系	芦之湯
	畠宿系	畠宿
	鍛冶屋系	鍛冶屋
天城地区	上多賀系	上多賀
	柏峠系	柏峠
高原山地区	高原山系	八方ヶ原 (桜沢)、甘湯沢
神津島地区	恩馳島系	恩馳島 (長浜海岸、沢尻湾)
	砂糠崎系	砂糠崎 (長浜海岸、沢尻湾)

は言うまでもない。

「霧ヶ峰地区」：霧ヶ峰火山からは複数火口からの黒耀石が岩脈、溶岩、火碎流など多様性ある産状を示す。これらの黒耀石は噴出源や噴出年代によって元素組成に地域性が認められる（杉原・小林, 2004）。ここでは西霧ヶ峰系、和田岬系、男女倉系、鷹山系に分類したが、和田岬系と鷹山系は産出地域が離れているにも拘らず、判別図では明瞭な識別が不可能である。ここでは、この2つの原産地を和田岬・鷹山系として一括した扱いをする。

「北八ヶ岳地区」：八ヶ岳火山列では、比較的活動年代が新しい北八ヶ岳において黒耀石が産出する。このうち冷山系と麦草峠系が代表的な原産地であるが、山頂部の双子池や横岳周辺、泡ノ湯川上流などでも黒耀石礫が採取でき、転石として山麓斜面や河床でも散見できる。ただし冷山系と麦草峠系以外の黒耀石は分布が局地的で、石器石材として不向きと考えられることから、ここでは原産地に含めていない。なお、冷山系と麦草峠系の黒耀石は判別図による確実な産地推定が不可能である場合が多いことから、ここでは一括して冷山・麦草峠系として扱った^(注2)。

「箱根地区」：箱根火山では芦之湯、畠宿、鍛冶屋、上多賀で溶岩や火碎流堆積物に由来する原産地が知られている。これらは、判別図によって、それぞれの産地推定が可能である。

「天城地区」：天城火山に近い柏峠から产出する黒耀石である。柏峠では黒耀石が岩脈または転石として認められる。判別図では、他の原産地と明確に識別が可能である。

「高原山地区」：高原山火山では八方ヶ原、甘湯沢に黒耀石の産出地がある。とくに八方ヶ原を形成した溶岩流を刻む桜沢などの各河川沿いには黒耀石の転石が多く認められる。これらは、すべて同じ判別域に入る。このほか南麓斜面の湯沢、枝持沢、七尋沢の河床にも黒耀石の産出が認められているが、石器石材としては不向きであると考えられることから、ここでは八方ヶ原産、甘湯沢産の黒耀石に限り高原山系とする。

「神津島産」：神津島は複数の流紋岩質準成火山から構成されていて、黒耀石の产出が各地で認められる。このうち神津島の沖約6kmにある恩馳島の周囲海底と多幸湾に臨む砂糠崎からは、黒耀石が豊富に产出する。産地判別図では、両産地の黒耀石を区別することが可能であることから、それぞれ恩馳島系と砂糠崎系として扱う。なお、神津島西側岸の長浜海岸や沢尻湾でも黒耀石の海浜疎が多産する。これらは恩馳島や砂糠崎から产出する黒耀石の判別域に入るが、海浜疎のすべてがこれらの产出地からの二次的産地とするには、地理的な位置関係や沿岸流（とくに海浜流）による漂砂の状況からみて無理がある。海底に露出している火碎流や泥流中の黒耀石が海浜に打ち上げられた可能性もあり今後は未知の产出地に関する海底地質の調査も必要になる。

8. 石器の産地推定結果

今回測定を行ったのは、茨城県土浦市龍善寺遺跡出土の黒曜石遺物65点である。うち、58点が判別可能であった。

今回の測定対象である龍善寺遺跡の時期は、ほぼ縄文時代中期、加曾利E1式期に比定できる。判別可能試料の9割以上は恩馳島系（神津島地区）が占め、当該遺跡から距離的に最も近い高原山系の黒曜石はわずか3点のみであった。その他では、和田岬・鷹巣系が1点含まれていた（表2）。

縄文時代中期の黒曜石利用が恩馳島系に偏るという傾向は、隣接地域の下総台地においても確認されている（堀越ほか、2005）。縄文時代中期の遺跡における恩馳島系黒曜石の主体的利用の北限がどこまで広がるのか、今後、より北部地域の遺跡試料を分析することで検討していきたい。

許認

1. 強度には各スペクトルの積分強度を用いた。装置の都合上、Na～Feの9つの主要元素はK α 線の強度比を、Rb～Zrの微量元素はK β 線以下も参照しつつ強度比をもとめた。
2. 定量分析（全岩化分析）では、SiO₂の含有量が冷山系77.31%、麦草崎系69.89%であることから分別が可能である。したがって、冷山系が流紋岩質、麦草崎系がダイサイト質の黒曜石となる。

引用・参考文献

- 嶋野岳人・石原園子・長井雅史・鈴木尚史・杉原重夫（2004）「波長分散型蛍光X線分析装置による日本全国の黒曜石全岩定量分析」『日本文化財科学会第21回大会研究発表要旨集』、140-141。
- 杉原重夫・小林三郎（2001）「考古遺物の自然科学的分析に関する研究—黒曜石産出地データベース」『明治大学人文科学研究所紀要』第55號、1-83。
- 堀越正行・鈴木尚史・杉原重夫（2005）「千葉県市川市出土黒曜石遺物の原産地研究」『駿台史学』第124号、73-99。
- 望月明彦・池谷信之・小林克次・武藤由里（1994）「遺跡内における黒曜石製石器の原産地別分布について—沼津市土手上遺跡BBV層の原産地推定から」『静岡県考古学研究』26、1-24。
- 望月明彦（1997）「蛍光X線分析による中部・関東地方の黒曜石産地の判別」『X線分析の進歩』28、157-168。

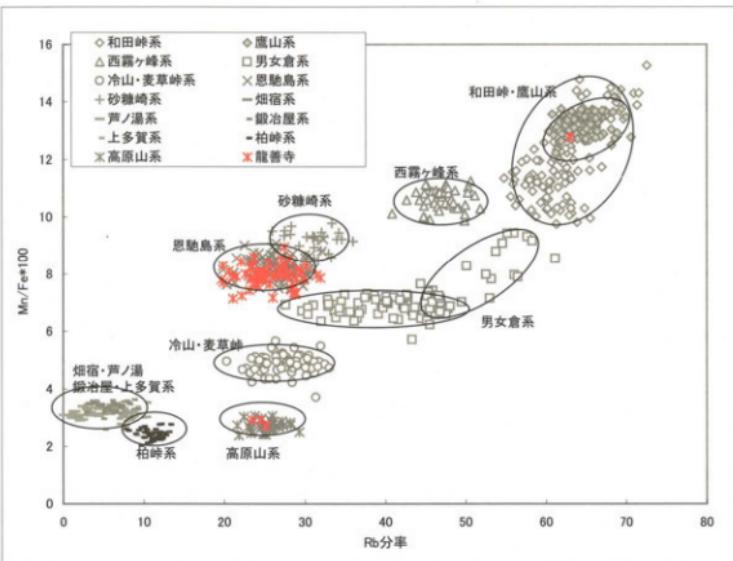


図1 龍善寺遺跡の判別図（RE分率）

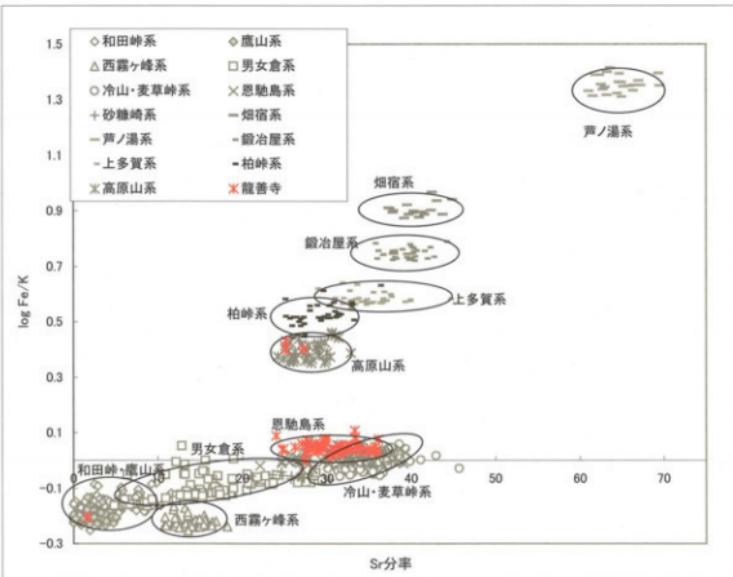


図2 龍善寺遺跡の判別図（Sr分率）

表2 产地推定の集計結果

遺跡名	測定点数	判別点数	恩島系	高原山系	和田井・巖山系
経善寺遺跡	65	58	54	3	1

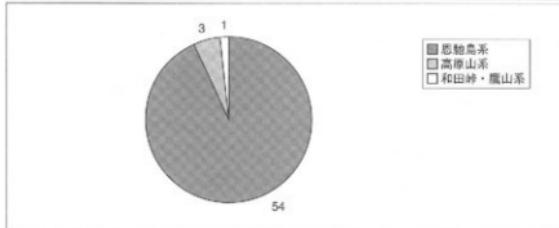


表3 関東・中部地方における黒耀石の推定値（強度比）

	和田井・巖山系	西霧ヶ峰系	男女倉系	冷山・麦草井系	恩島系	砂隕鉱系	畠宿系	芦ノ湯系	上多賀系	鎌治屋系	柏井系	高原山系
Rb分率	平均値	63.440	47.140	42.587	27.613	25.466	31.590	5.316	2.657	7.866	6.417	10.793
	標準偏差	±8.925	±5.464	±16.767	±6.354	±6.220	±5.486	±3.076	±2.687	±3.186	±2.963	±2.783
Sr分率	平均値	3.127	13.879	16.753	35.282	31.872	26.606	40.571	64.657	34.771	39.118	28.811
	標準偏差	±5.782	±3.747	±12.298	±7.796	±8.593	±8.384	±3.757	±4.216	±7.887	±4.226	±5.652
Mn*100 /Fe	平均値	2.322	1.697	5.578	2.737	3.863	2.847	2.133	2.237	2.917	2.021	2.591
	標準偏差	±2.755	±0.685	±1.860	±0.976	±0.863	±0.752	±0.208	±0.248	±0.561	±0.332	±0.371
Log (Fe/K)	平均値	1.172	0.353	0.710	0.307	0.383	0.395	0.098	0.113	0.244	0.157	0.180
	標準偏差	±0.180	±0.222	±0.094	±0.013	±0.017	±0.054	±0.904	±1.356	±0.581	±0.747	±0.523
	±0.085	±0.044	±1.108	±0.058	±0.052	±0.030	±0.046	±0.051	±0.045	±0.033	±0.094	±0.054
	0.033	0.019	0.041	0.028	0.021	0.012	0.023	0.028	0.019	0.018	0.040	0.031

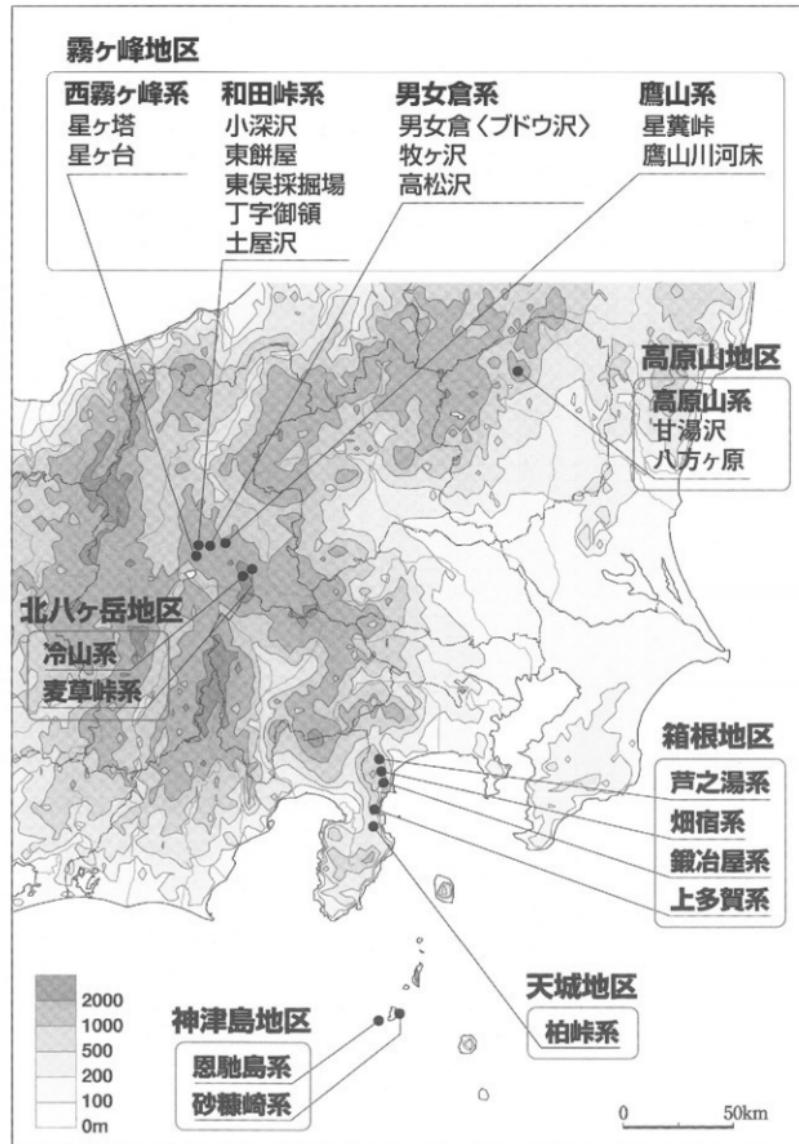
表4 判別分析における群間距離（マハラノビス距離の2乗）

	和田井・巖山系	西霧ヶ峰系	男女倉系	冷山・麦草井系	恩島系	砂隕鉱系	畠宿系	芦ノ湯系	上多賀系	鎌治屋系	柏井系	高原山系
和田井・巖山系	—	36.879	66.220	166.715	125.355	85.987	1388.542	2814.669	715.068	1020.948	632.121	407.915
西霧ヶ峰系	36.879	—	31.735	89.559	79.881	42.496	1521.487	3053.281	759.552	1110.221	667.579	440.898
男女倉系	66.220	31.735	—	35.577	59.292	41.367	1282.795	2737.441	576.245	900.888	482.838	275.841
冷山・麦草井系	166.715	89.559	35.577	—	42.585	47.007	1200.974	2566.198	520.025	827.369	446.318	249.145
恩島系	125.355	79.881	59.292	42.585	—	6.418	992.360	2270.959	401.643	661.419	354.083	213.588
砂隕鉱系	85.987	42.496	41.367	47.007	6.418	—	1124.345	2475.793	487.370	771.668	428.767	268.998
畠宿系	1388.542	1521.487	1282.795	1200.974	992.360	1124.345	—	336.944	157.681	38.371	233.393	407.341
芦ノ湯系	2814.669	3053.281	2737.441	2566.198	2270.959	2475.793	336.944	—	921.568	570.553	1102.698	1370.539
上多賀系	715.068	759.552	576.245	520.025	401.643	487.370	157.681	921.568	—	43.312	10.980	77.178
鎌治屋系	1020.948	1110.221	900.888	827.369	661.419	771.668	36.371	570.553	43.312	—	90.343	209.846
柏井系	632.121	667.579	482.838	446.318	354.083	428.767	233.393	1102.698	10.980	90.343	—	46.477
高原山系	407.915	440.898	275.841	249.145	213.588	268.998	407.341	1370.539	77.178	209.846	46.477	—

表5 龍善寺遺跡の判別結果

測定No.	達記No.	測定値				判別分析						
		Rb分率	Sr分率	Mn*100:Fe	Log(Fe/K)	判別	候補1	確率	直視	候補2	座標	
RZJ1-001	SI-25	可	26.2116	29.6525	7.9483	0.0705	司	恩賜島系	0.9988	5.3627	砂輪崎系	0.0012 17.7972
RZJ1-002	SI-25	可	31.4769	35.5647	7.9565	0.0294	司	恩賜島系	0.9946	9.9861	砂輪崎系	0.0054 19.3506
RZJ1-003	SI-25	可	23.8068	33.9575	7.9561	0.0393	司	恩賜島系	0.9967	0.8419	砂輪崎系	0.0033 11.2361
RZJ1-004	SI-26-①	可	29.2907	33.2079	8.2502	-0.1475	不可	—	—	—	—	—
RZJ1-005	SI-26-②	可	22.0565	31.9026	8.4258	0.0335	司	恩賜島系	0.9998	3.7498	砂輪崎系	0.0062 12.6491
RZJ1-006	SI-27	可	29.0537	29.9105	8.1572	0.0600	司	恩賜島系	0.9974	4.0599	砂輪崎系	0.0026 14.9121
RZJ1-007	SI-29	可	23.1919	28.1710	8.2083	0.0379	司	恩賜島系	0.9874	7.0146	砂輪崎系	0.0126 14.6844
RZJ1-008	SI-31-①	可	27.1924	32.6409	8.0421	0.0548	司	恩賜島系	0.9983	2.1340	砂輪崎系	0.0017 13.8810
RZJ1-009	SI-31-②	可	28.4176	31.7673	7.6692	0.0571	司	恩賜島系	0.9981	3.3333	砂輪崎系	0.0019 14.8424
RZJ1-010	SI-31-③	可	24.7442	30.3785	7.9300	0.0149	司	恩賜島系	0.9650	1.3997	砂輪崎系	0.0350 6.9819
RZJ1-011	SI-32	可	28.2861	27.7804	7.2757	0.0520	司	恩賜島系	0.9928	6.7265	砂輪崎系	0.0072 15.5211
RZJ1-012	SI-33	可	44.6011	17.1619	11.8783	-0.2394	不可	—	—	—	—	—
RZJ1-013	SI-34	可	27.4944	24.0036	7.9771	0.0676	司	恩賜島系	0.9983	19.4156	砂輪崎系	0.0017 31.0802
RZJ1-014	S-36	可	28.6193	29.6474	7.3352	0.0778	司	恩賜島系	0.9992	7.5477	砂輪崎系	0.0008 20.8493
RZJ1-015	S-41	可	28.0271	26.1831	7.9891	0.0486	司	恩賜島系	0.9905	6.6995	砂輪崎系	0.0135 14.4248
RZJ1-016	SK-6	可	23.5756	33.5997	8.2677	0.0454	司	恩賜島系	0.9974	2.0394	砂輪崎系	0.0026 12.9117
RZJ1-017	SK-67	可	24.2809	33.6034	8.0406	0.0562	司	恩賜島系	0.9990	1.9733	砂輪崎系	0.0001 14.7428
RZJ1-018	SK-71	可	27.4342	29.5809	8.9459	0.0422	司	恩賜島系	0.9911	3.9195	砂輪崎系	0.0088 12.2857
RZJ1-019	SK-74	可	62.9426	1.5939	12.7664	-0.2049	可	利田岬・魔山系	1.0000	1.2681	西ヶ崎系	0.0000 32.3285
RZJ1-020	SK-76	可	24.7420	31.4095	8.1192	0.0493	司	恩賜島系	0.9972	1.9823	砂輪崎系	0.0028 12.6667
RZJ1-021	SK-112	可	24.6495	27.5453	8.0515	0.0321	司	恩賜島系	0.9767	5.6355	砂輪崎系	0.0233 12.0527
RZJ1-022	SK-132	可	22.6203	31.3332	7.9948	0.0288	司	恩賜島系	0.9901	2.4897	砂輪崎系	0.0099 10.6620
RZJ1-023	SK-145	可	23.8426	27.4164	8.5834	0.0012	司	恩賜島系	0.8422	7.3604	砂輪崎系	0.1578 9.8586
RZJ1-024	SK-149	可	20.5322	33.1861	8.1691	-0.1075	不可	—	—	—	—	—
RZJ1-025	SK-169	可	24.5262	25.0851	9.2927	0.4303	司	高原山系	1.0000	4.5980	柏野系	0.0000 26.4299
RZJ1-026	SK-175	可	27.8465	27.0626	7.7160	-0.1789	不可	—	—	—	—	—
RZJ1-027	SK-175	可	25.1436	25.0507	2.7238	0.3592	可	高原山系	1.0000	1.4971	柏野系	0.0000 38.1312
RZJ1-028	SK-186	可	27.0741	30.8120	8.5045	0.0291	司	恩賜島系	0.9901	1.1205	砂輪崎系	0.0099 9.2760
RZJ1-029	SK-188	可	29.4812	25.7712	8.0662	0.0349	司	西ヶ崎系	0.9812	2.3480	砂輪崎系	0.0188 9.2009
RZJ1-030	SK-188	可	25.6504	33.3050	7.6269	0.1071	司	恩賜島系	1.0000	9.9757	砂輪崎系	0.0000 25.2680
RZJ1-031	SK-188	可	20.5988	29.2779	8.1001	0.0559	司	恩賜島系	0.9975	10.9534	砂輪崎系	0.0025 21.8959
RZJ1-032	SK-189	可	28.8668	29.0167	7.3397	0.0334	司	恩賜島系	0.9819	4.2115	砂輪崎系	0.0181 11.1444
RZJ1-033	SK-190	可	21.4609	27.6406	7.9085	0.0533	司	恩賜島系	0.9954	12.2794	砂輪崎系	0.0046 21.9675
RZJ1-034	SK-197	可	27.3466	34.7253	7.9380	0.0325	司	恩賜島系	0.9957	2.2060	砂輪崎系	0.0043 12.0524
RZJ1-035	SK-204	可	25.5127	29.8343	8.3801	0.0673	可	恩賜島系	0.9986	5.8594	砂輪崎系	0.0014 16.2060
RZJ1-036	SK-204	可	21.0876	36.0869	7.1362	0.0760	司	恩賜島系	0.9909	4.8301	砂輪崎系	0.0001 22.0083
RZJ1-037	SK-204	可	26.0206	27.0203	7.1716	0.0603	司	恩賜島系	0.9957	9.4472	砂輪崎系	0.0043 19.2928
RZJ1-038	SK-204	可	29.2955	24.8517	7.4469	0.0428	司	恩賜島系	0.9729	10.3375	砂輪崎系	0.0271 16.4469
RZJ1-039	SK-217	可	23.3157	35.7199	7.8591	0.0493	司	恩賜島系	0.9991	2.0413	砂輪崎系	0.0009 15.1131
RZJ1-040	SK-218	可	25.4576	32.2037	8.0148	0.0424	司	恩賜島系	0.9962	0.7818	砂輪崎系	0.0038 10.8619
RZJ1-041	SK-239	可	28.0033	35.5924	8.4958	0.0315	司	恩賜島系	0.9964	4.7849	砂輪崎系	0.0034 14.9988
RZJ1-042	SK-249-①	可	25.0928	30.2552	7.8307	0.0239	司	恩賜島系	0.9796	1.3884	砂輪崎系	0.0204 8.0836
RZJ1-043	SK-249-②	可	29.8215	29.0490	7.7790	0.0501	司	恩賜島系	0.9935	4.1662	砂輪崎系	0.0005 13.1766
RZJ1-044	SK-257	可	24.0095	28.8329	7.6189	0.0519	司	恩賜島系	0.9957	5.6403	砂輪崎系	0.0043 15.4956
RZJ1-045	SK-269	可	19.6753	31.6417	7.8304	0.0223	司	恩賜島系	0.9884	6.5305	砂輪崎系	0.0116 14.3627
RZJ1-046	2工区	可	27.8080	27.6402	8.2935	0.0500	司	恩賜島系	0.9915	4.9037	砂輪崎系	0.0085 13.3721
RZJ1-047	2工区	可	24.2823	28.6420	7.8634	0.0610	司	恩賜島系	0.9975	6.8176	砂輪崎系	0.0025 17.5051
RZJ1-048	2工区	可	23.8865	33.3453	7.6293	0.0832	司	恩賜島系	0.9998	5.0638	砂輪崎系	0.0002 21.3894
RZJ1-049	2工区	可	31.9300	30.8967	7.8550	0.0385	司	恩賜島系	0.9900	5.4337	砂輪崎系	0.0010 13.5788
RZJ1-050	2工区	可	28.8790	31.4777	7.8168	0.0433	司	恩賜島系	0.9948	2.2556	砂輪崎系	0.0052 11.7055
RZJ1-051	2工区	可	30.1185	24.7301	8.2889	0.0381	司	恩賜島系	0.9559	7.7144	砂輪崎系	0.0441 12.8144
RZJ1-052	2工区	可	26.4122	27.6176	7.9666	0.0729	司	恩賜島系	0.9983	8.6255	砂輪崎系	0.0017 20.3146
RZJ1-053	2工区	不可	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
RZJ1-054	3工区①	可	26.3151	26.5927	7.9618	-0.2789	不可	—	—	—	—	—
RZJ1-055	3工区②	可	19.5206	32.7936	7.7036	0.0543	可	恩賜島系	0.9989	5.5680	砂輪崎系	0.0011 18.2246
RZJ1-056	3工区	可	21.0361	33.7836	7.8864	0.0401	可	恩賜島系	0.9977	2.8181	砂輪崎系	0.0023 13.9435
RZJ1-057	3工区	可	23.1450	29.2920	7.4211	0.0595	司	恩賜島系	0.9974	6.4370	砂輪崎系	0.0026 17.2489
RZJ1-058	4工区	可	29.0095	32.3305	7.5480	-0.2847	不可	—	—	—	—	—
RZJ1-059	PIT18	可	24.7341	32.8821	7.7484	0.0362	司	恩賜島系	0.9955	0.6010	砂輪崎系	0.0045 16.3258
RZJ1-060	PIT182	可	19.8756	29.3213	8.2802	0.0459	司	恩賜島系	0.9954	12.0988	砂輪崎系	0.0046 21.8042
RZJ1-061	PIT83	可	23.5810	27.2374	2.9336	0.0402	司	高原山系	1.0000	1.1662	柏野系	0.0000 34.4199
RZJ1-062	青森	可	22.1926	33.4879	7.2391	0.0581	司	恩賜島系	0.9991	2.9921	砂輪崎系	0.0009 16.0280
RZJ1-063	青森	可	26.8180	35.1651	8.1674	0.0417	司	恩賜島系	0.9980	2.5855	砂輪崎系	0.0020 13.9100
RZJ1-064	青森	可	23.3089	30.3825	7.7985	0.0172	司	恩賜島系	0.9725	2.7667	砂輪崎系	0.0275 8.8437
RZJ1-065	青森	可	23.9880	29.8018	7.9696	0.0778	司	恩賜島系	0.9994	7.7488	砂輪崎系	0.0006 21.4890

図3 石器時代における関東・中部地方の黒曜石原産地



写 真 図 版





3工区 全景
(北から)



3工区 全景
(北西から)



3工区 全景
(南から)



3工区 全景
(北東から)



3工区 全景
(北東から)



4工区 全景
(北東から)



4工区 全景
(南から)



5工区 全景
(南東から)



竪穴住居跡SI05

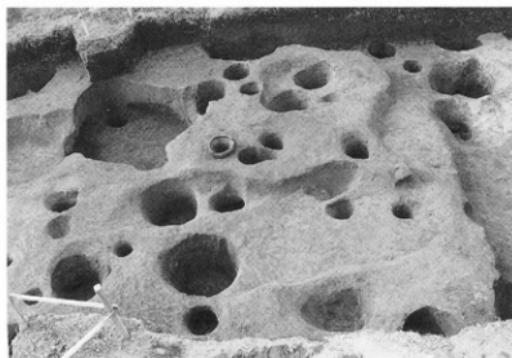
縄文時代



竪穴住居跡SI13



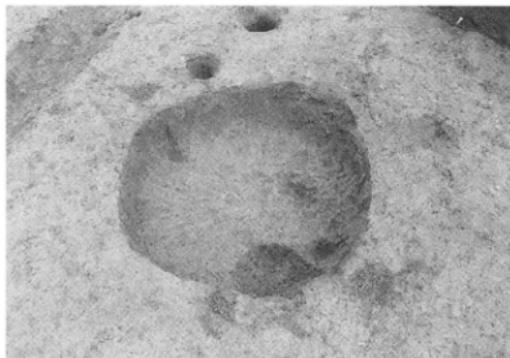
竪穴住居跡SI18・19
土坑SK30・34・39・46・53・126



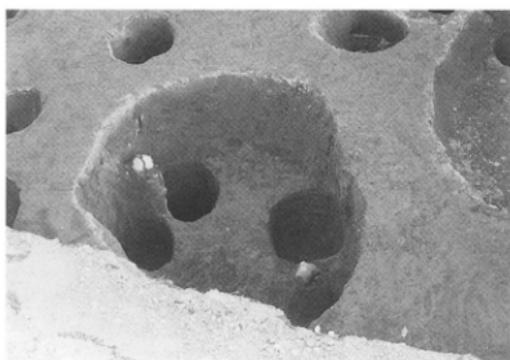
竪穴住居跡SI36
土坑SK209・211・215・217・219・220



竪穴住居跡SI42



土坑SK10



土坑SK31

縄文時代

土坑SK32・33・36・41・42・
44・51・52・54



土坑SK35



土坑SK40・52





土坑SK43・45・47・55・56・64



土坑SK47



土坑SK62・63・75

縄文時代



土坑SK68・69



土坑SK72・74・76・85



土坑SK77



土坑SK80



土坑SK86



土坑SK92・93・96・97・106

縄文時代



土坑SK119



土坑SK124



土坑SK129



土坑SK130



土坑SK131



土坑SK132・133

繩文時代

土坑SK136・137・138・139・140・141
柱穴状遺構pit35



土坑SK136



土坑SK145



土坑SK149

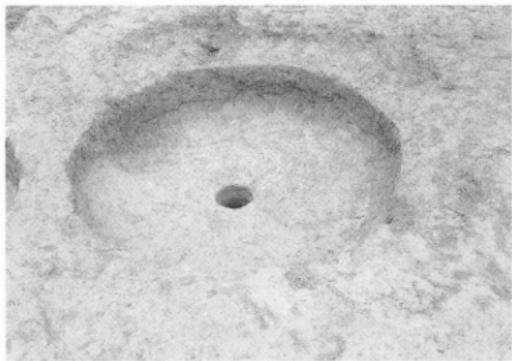


土坑SK151



土坑SK153・158

縄文時代



土坑SK163



土坑SK164



土坑SK165・167



土坑SK167

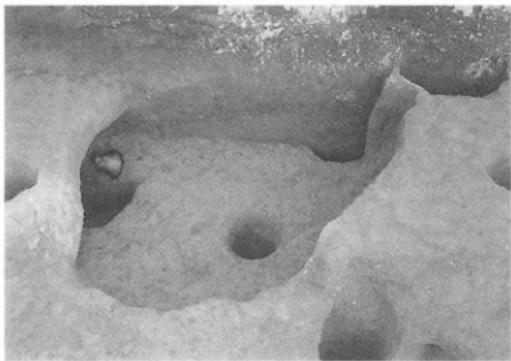


土坑SK168・169



土坑SK171・174・176・177

縄文時代



土坑SK175



土坑SK179



土坑SK180



土坑SK181



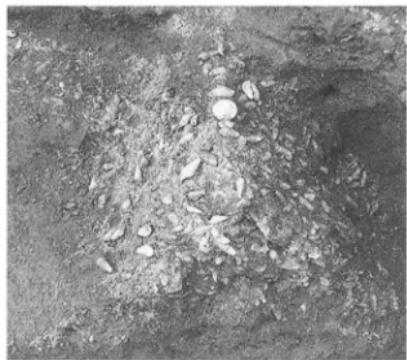
土坑SK183



土坑SK183



土坑SK183



土坑SK183

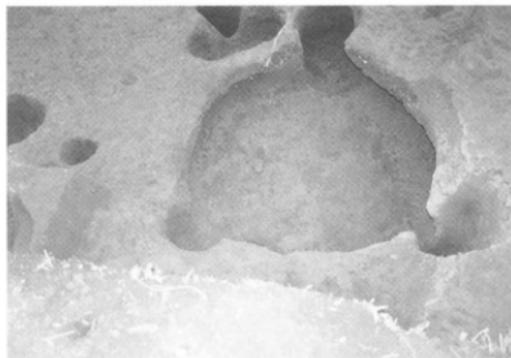
縄文時代



土坑SK185



土坑SK186・190・191・193・235



土坑SK189・198



土坑SK190



土坑SK195・200・201・203・204
205・207・208・212・213



土坑SK195

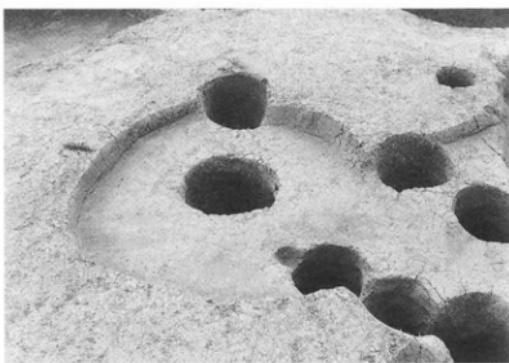
縄文時代



土坑SK204・212・213



土坑SK252・257



土坑SK255



土坑SK259



土坑SK269



土坑SK275・277

縄文時代



土坑SK276
柱穴状遺構Pit66



土坑SK280・285



土坑SK281



土坑SK284



土坑SK288・289



土坑SK290

繩文時代



土坑SK299



土坑SK300



土坑SK301



竪穴住居跡SI01



竪穴住居跡SI04



竪穴住居跡SI06

古墳時代



竪穴住居跡SI10



竪穴住居跡SI16カマド



竪穴住居跡SI25カマド



竪穴住居跡SI26



竪穴住居跡SI26カマド



竪穴住居跡SI27

古墳時代



竪穴住居跡SI27カマド



竪穴住居跡SI28カマド



竪穴住居跡SI28カマド



竪穴住居跡SI29



竪穴住居跡SI31



竪穴住居跡SI33

▼竪穴住居跡SI33貼床除去後銅鏡出土状況





1



2



3



4



5



6



7



8

縄文時代 住居跡・土坑出土土器 (1) 1 : SI36 2 ~ 6 : SK41 7 + 8 : SK86



1



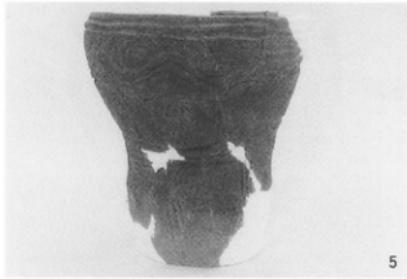
2



3



4



5



6



7



8

縄文時代 土坑出土土器 (2) 1・2 : SK86 3 : SK138 4 : SK153 5 : SK168 6~8 : SK169



1



2



3



4



5



6

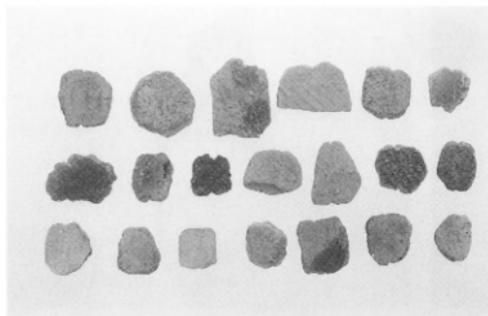


7

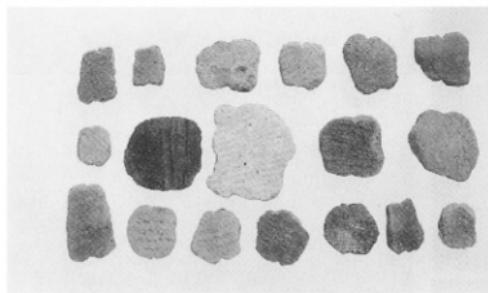


8

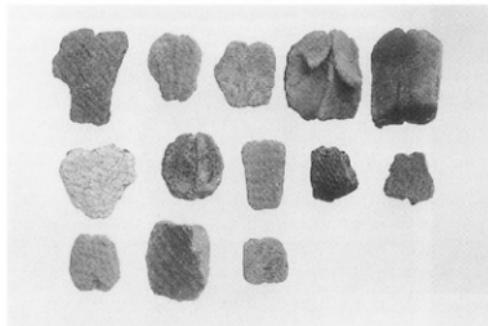
縄文時代 土坑出土土器 (3) 1 : SK175 2 : SK183 3 : SK195 4 : SK204 5 ~ 8 : SK266



住居跡出土



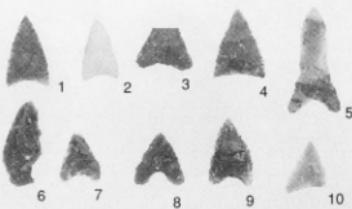
土坑出土（1）



土坑出土（2）

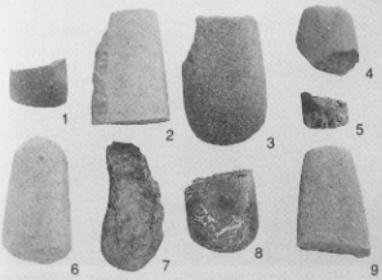
縄文時代 住居跡・土坑出土土器片錘

1. SI38
2. SI41
3. SI41
4. SK31
5. SK42
6. SK163
7. SK169
8. SK183
9. SK244
10. SK285



A. 石鎌類

1. SK40
2. SK58
3. SK98
4. SK122
5. SK183
6. SK209
7. SK244
8. SK284
9. SK298



B. 石斧類 (1)

1. SK104
2. SK241
3. SK41
4. SK41
5. SK87
6. SK95
7. SK120
8. SK248
9. SK285



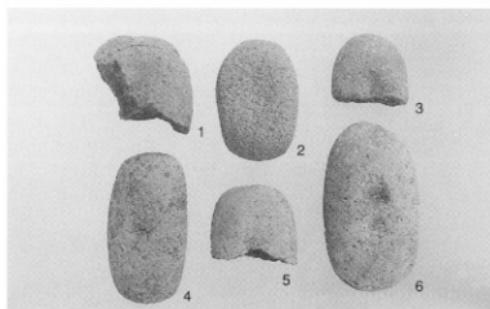
C. 石斧類 (2)

縄文時代 住居跡・土坑出土石器 (1)



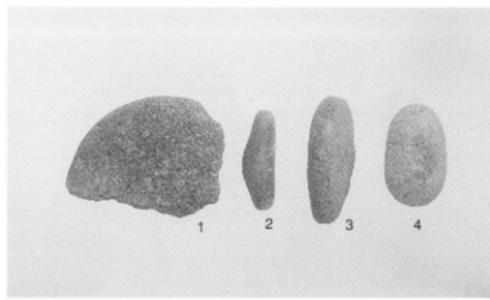
1~3. SI23

A. 住居跡出土 SI23



- 1. SK77
- 2. SK84
- 3. SK186
- 4. SK114
- 5. SK190
- 6. SK287

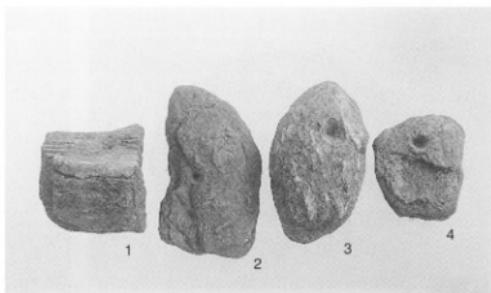
B. 磨石類



- 1. SK35
- 2. SK35
- 3. SK240
- 4. SK242

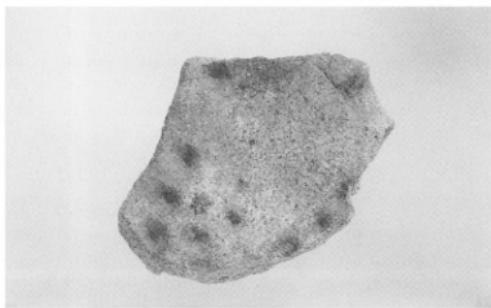
C. 磨石類

縄文時代 住居跡・土坑出土石器 (2)

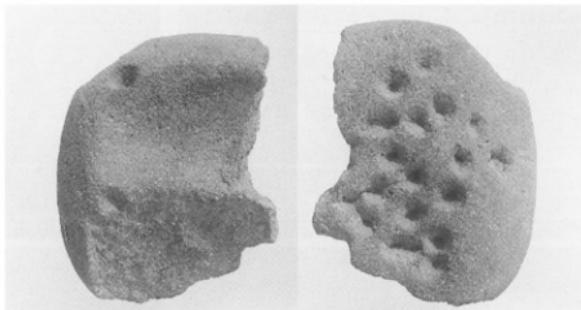


1. SK81
2. SK94
3. SK114
4. SK241

A. 凹石類

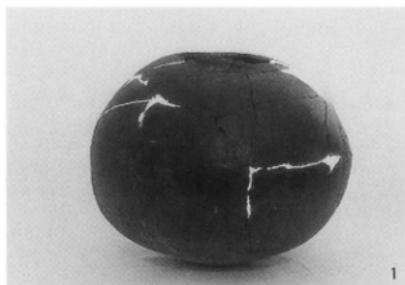


SK94
B. 石皿



SK211
C. 石皿

縄文時代 土坑出土石器 (3)



古墳時代 住居跡出土土器 (1) 1 ; SI01 2 · 3 ; SI02 4 · 5 ; SI03 6 ; SI01 7 · 8 ; SI06



1



2



3



4



5



6



7

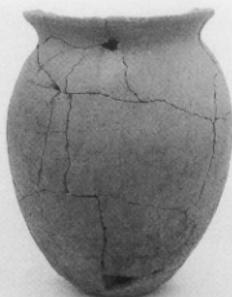


8

古墳時代 住居跡出土土器 (2) 1 ~ 3 ; SI06 4 ~ 8 ; SI16



1



2



3



4



5



6



7



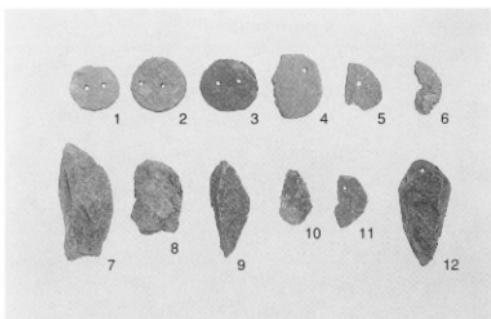
8



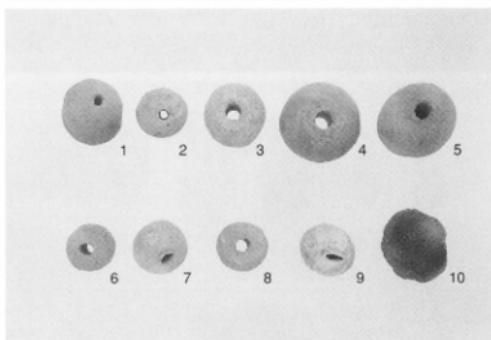
9



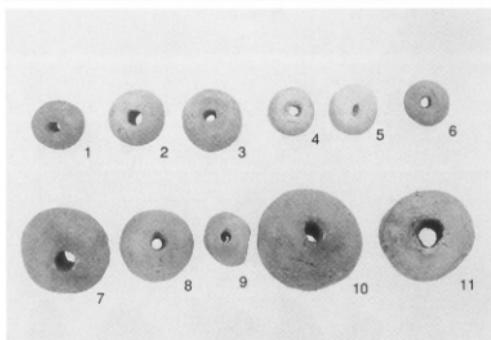
古墳時代 住居跡出土土器(3)・銅鋤 1 ; SI16 2 ; SI26 3 ; SI27 4 ; SI28 5 ~ 7 ; SI32 8 ~ 9 ; SI33



A. 石製模造品



B. 土玉 (1)



C. 土玉 (2)

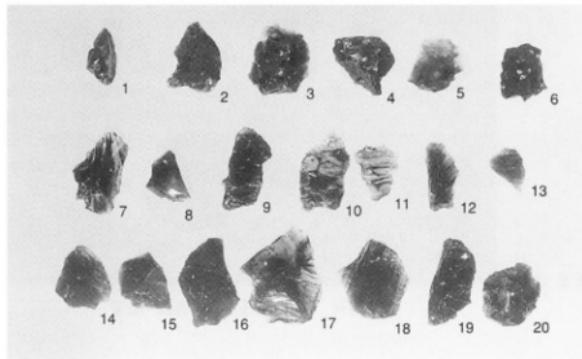
古墳時代 住居跡出土石製模造品・土玉



1. SK183 出土貝類
第1 ブロック



2. SK183 出土貝類



3. 产地分析黒曜石
1~3・5~13・18~20 恩馳島系
15・17 高原山系

縄文時代 土坑出土貝・产地分析黒曜石

報 告 書 抄 錄

ふりがな	りゅうぜんじいせき							
書名	龍善寺遺跡							
副書名	宅地造成分譲事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名								
編著者名	小川 和博・大淵 浩志・窪田 恵一・関口 満							
編集機関	龍善寺遺跡調査会							
所在地	〒300-0811 茨城県土浦市上高津1843 上高津貝塚ふるさと歴史の広場内 029（826）7111							
発行機関	土浦市教育委員会							
所在地	〒300-4115 茨城県土浦市藤沢975番地							
発行年月日	2006年7月29日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
収録遺跡	所在地	市町村	遺跡番号					
龍善寺遺跡	ひちゅうじ なかたかわ 土浦市中高津 二丁目1122-1 他	08-203	401	36度 4分 10秒	140度 11分 5秒	20031021 ～ 20040224	約3,500m ²	宅地造成分譲事業に伴う事前調査
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項	
龍善寺遺跡	集落跡	縄文時代	縄文時代 竪穴住居跡25軒 土坑302基			縄文土器（前期・中期）、 土器片鍤、石器（石鏃・ 磨製石斧・打製石斧・磨 石・石皿） 土師器、石製模造品、銅 鏡、土玉、土製支脚、砥 石	縄文時代中期 を中心とした 集落跡と、古 墳時代前期か ら後期の集落 跡を確認し た。古墳時代 前期の住居跡 から銅鏡が出 土した。	
		古墳時代	古墳時代 竪穴住居跡21軒 土坑1基					

龍善寺遺跡

宅地造成分譲事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行日 2006年7月29日
編集 龍善寺遺跡調査会
発行 土浦市教育委員会
問合せ先 上高津貝塚ふるさと歴史の広場
〒300-0811 茨城県土浦市上高津1843
TEL 029(826)7111
印刷 (株)エリート印刷



龍善寺遺跡遺構全体図